

管理局世界の人々～Force編 おもちゃ箱～

ゴケット

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

数年前にArcadiaで書いていたものです。

幕間の話を書いていきます。各章は別主人公になります。

挿絵は話題のAI出力で作ってみました。おかしなところもありますが、これが限界。勘弁してください。

フェイトの後輩編

1～4、98話

新暦76年2月。執務官補佐試験に出向いたティアナは、フェイトを「先輩」と呼ぶ男と出会う。

ノッポの副長編

5～31、86～97話

機動六課の副長視点で、StrikerSで作者が感じた『交替部隊って何？あれだけ暴走したティアナお咎めなし？』25話「誰か、指揮交替」発言』など、疑問を解決していきます。

おもちゃ箱編

32～80話、99～101話

サウンドステージXの直後、Vividまで半年ほどの新暦78年、なのはの連れてきた男、エイブラハム。彼はちよつと特殊な技能を持っていて…。

とらいあんぐるハート要素（ネタ）有り、微エロネタです。

不思議で不可欠、女子会編

81～85話

f o r c e 終了後、はやてのもとに集まった面々は…。
オリキヤラ紹介を兼ねた、日常回。

目次

フェイトの後輩編

01 フェイト執務官の後輩 起 | 1

02 フェイト執務官の後輩 承 | 7

03 フェイト執務官の後輩 Q | 14

04 フェイト執務官の後輩 A | 19

機動六課 ノツポの副長編

05 出張！ 緊急捜索任務の裏側で | 27

06 たいせつなこと+ | 43

07 無限の欲望を追い！前 | 50

08 無限の欲望を追い！後 | 63

09 公開意見陳述会前夜 | 79

10 その日、機動六課（B面）前編 | 89

11 その日、機動六課（B面）後編 | 103

12 翼、ふたたび（クロノとヴェロツサ） | 119

13 『決戦』へ!! | 126

14 Stars Strike++ | 132

15 ファイナル・リミット++ | 143

16 約束の空へ+（前篇） | 151

17 「副長の休日」I | 158

18 「副長の休日」II | 172

19 「副長の休日」III | 184

20 戦技披露会IN六課I | 191

21 戦技披露会IN六課II | 200

22 戦技披露会IN六課III | 207

	2 3	戦技披露会 I N 六課 IV	213
	2 4	偽りの勲章 I	222
	2 5	偽りの勲章 II	232
	2 6	偽りの勲章 III	240
	2 7	偽りの勲章 IV	252
	2 8	約束の空へ+ (後編)	265
	2 9	From ○○ To △△	278
	3 0	Quite a lot of time passed	292
	3 1	いつかの朝ノツポの副長とマテリアルな娘達	298
		おもちゃ箱編	
	3 2	チーターをなのは達と絡ませてみた 1	311
	3 3	チーターをなのは達と絡ませてみた 2	318
	3 4	チーターをなのは達と絡ませてみた 3	323
	3 5	チーターをなのは達と絡ませてみた 4	331
	3 6	チーターをなのは達と絡ませてみた 5	337
	3 7	チーターをなのは達と絡ませてみた 6	342
	3 8	ナカジマ・ジムより、新暦 80 年 vivid な春 上	349
	3 9	ナカジマ・ジムより、新暦 80 年 vivid な春 下	
356	4 0	遠い昨日、新暦 76 年夏休み前のお話	363
	4 1	ヴィヴィオに、従妹出現!	370
	4 2	翠屋にて…。上	376
	4 3	翠屋にて…。下	384
	4 4	海鳴市の夜 I	389

45	海鳴市の夜Ⅱ	395
46	ボールと、再会と、ネコと…Ⅰ	404
47	ボールと、再会と、ネコと…Ⅱ	410
48	ボールと、再会と、ネコと…Ⅲ	418
49	暗夜の砲撃	425
50	御神の剣士Ⅰ	434
51	海鳴市の夜Ⅲ	442
52	たまには、のんびりお休みⅠ	449
53	たまには、のんびりお休みⅡ	456
54	たまには、のんびりお休みⅢ	462
55	たまには、のんびりお休みⅣ	470
56	たまには、のんびりお休みⅤ	481
57	たまには、のんびりお休みⅥ	490
58	たまには、のんびりお休みⅦ	501
59	海鳴市の夜Ⅳ	508
60	海鳴市の夜Ⅴ	515
61	鴉の夜A	519
62	鴉の夜B	528
63	海鳴市の夜Ⅵ	534
64	海鳴市の夜Ⅶ	541
65	海鳴市の朝、友達と、これからと…	553
66	イデア・グレンヌ	560
67	聖王再臨	570
68	エイブラハム・ハーベイ	582
69	二つの一対Ⅰ	588

70	二つの一対一Ⅱ	600
71	御神の剣士Ⅱ	612
72	十数年前の宿題	620
73	機械の叛乱	629
74	The Art of Intrusion	634
75	機械仕掛けの神は「星光、あれ」と…	642
76	儀礼艦ベルソー	649
77	Don't belong!	661
78	思い出は水晶のなかに…	670
79	戦いの終り	680
80	おもちゃ箱編最終話 ロリポップ	689
不思議で不可欠、女子会編		
81	ガールズ・ナイト・アウト	696
82	ヘン・パーティー(フェイト)	705
83	ユングゲゼレン・アブシード(はやて)	714
84	バチエロレット・パーティー(アリサ&すずか)	723
85	スタゲット(なのは)	733
Force編 特務六課 ノツポの副長		
86	新八神さんの日常風景 上	744
87	公僕の下っ端と副長	750
88	副長とはやて、はやてと依頼	756
89	出撃準備と命令	762
90	凶鳥の影	769
91	エンゲージ、コンタクト	775
92	WIMPs、MM、岩の上のコマ	782

93	サテライト・コリジョン	790
94	T・dlicher Schlag	797
95	醜い脚のハンス	803
96	Duの仲	808
97	新八神さんちの日常風景 下	814
	フェイトの後輩II編	
98	女子会編Cパート(男子○○の日常)	820
	Force編 おもちや箱	
99	フツケバインとの戦闘報告1/2	826
100	フツケバインとの戦闘報告2/2及び添付資料	835
101	(個人情報)私的ジャーナル	843

フェイトの後輩編

01フェイト執務官の後輩 起

「ティアナ、どうだった？緊張しなかった？回答の時間は足りた？」
「ええ、バッチリです！」

新暦76年2月。クラナガン中央裁判所にほど近い、執務官補佐試験会場から出たとたん、斜向かいのカフェテリアから駆け寄ってきた自身の上司、フェイト・T・ハラオウンに対して、ティアナはガッツポーズを返した。

「よかった…」と、安堵の息を漏らしたフェイトは、試験に臨んだティアナよりも疲労しているように見えた。私服姿も相まって妹の試験に付き添いに来た過保護なお姉さんといった体だ。もともと、執務官試験を精神的な不調で、二度も不合格になったことのあるフェイトにとっては当然の心配であった。が…、

（この人が、やり手の執務官と言ったら、何人の人が信じるかしら？）
心配性の上司の愛情に気恥ずかしさを感じた。ティアナが口には出さずに軽口を叩いていると、カフェテラスから声がかかる。

「ティアナさくらん」

ピンク色のパーカーに白のオーバーオールスカート、可愛らしい姿の女の子が手を振っていた。

同じテーブルで、現代ミッドチルダのシャツコーデの少年がテーブルの上の食器を片付け立ち上がる。肩にはくると声を上げる小さなドラゴン。

機動六課の同僚キャロ・ル・ルシエと、エリオ・モンディアルの二人だ。

のちにJS事件と呼ばれる事件の首謀者も逮捕され、機動六課の面々は来年度に向けての準備と、たまっている有給休暇の消費に勤しんでいた。フォワードたちはその休日も、自主トレーニングで教官の指導を受けていた。しかし、本日はスターズ分隊の二人が試験と挨拶回りとなったため、この幼い同僚達も休暇を楽しんでいるようだ。

「あら、あんた達も来てくれたの？」

「はい！」

素直に返事をしたキャラコに対して、エリオは決まりが悪いように苦笑していた。

『エリオ、まさかと思うけど。フェイトさん、ずっとここにいた？』

本日の試験は休憩時間も含めて、8時間はあったがフェイトの性格を考えると、終わるまでずっと待っていた。と、言われても信じてしまふ。

『いえ、さすがにそれは…、試験開始前にティアナさんを送った後、僕たちと街を回る約束をしていたので…』

『あ〜、でも、ずっと上の空だったんでしょ』

『はい、その通りです』

『ごめんね、折角の団欒の時間だったでしょうに』

『いえ、六課の仲間を心配するのは当たり前ですから』

念話を使いティアナとエリオが、本日のフェイトの様子を話し合っていると、また別の所から声が掛った。

「あれ！先輩？どうしてこんなところに？」

「ッ!!」

自信に満ちた低くてもよく通る男の声が聞こえた瞬間、フェイトがビクリと背筋を伸ばした。まるで、服の中に氷でも入れられたかのようだ。さらに顔が青ざめ、動揺した口が無意味にパクパクと動いていた。

「もしかして…、俺に会いに来てくれたのかな？」

フェイトの影になって見えないが、声の主が近づいてきたようだ。

声の主がフェイトの肩にポンと手を置き、フェイトの顔を上から除きこむ。

「ファ、ファン」

「はい、貴女の可愛い後輩、ファン・ユーゼエアです」

「あああ…」

ちらちらとティアナを見ながら逃げ腰になっているフェイトの肩に手を置き、ルーフェン系統の名前を名乗った男は、一言でいえば2

0代ファツションモデルだった。

口角の上がった男の口元には自信の笑みを湛え、切れ長の目がフェイトをからかうように見ている。身なりにも気を使っているらしく、マツシユレイヤーの髪は流行の色に染色され、清潔感のあるスマートカジユアルコーデを嫌味なく着こなしている。

しかし、フェイトの後輩との発言を聞くと、彼もまた執務官であるようだ。

(チャラそうな人…)

人は外見ではわからない。そう分かっても、ティアナが好意的になれない軟派な印象を抱いた。

ティアナの執務官像は、フェイトやその義兄のクロノと言った、真面目で硬派な人間を指した。

また、それを目指す人間もそうあるべきと考え、今日はティアナ自身も髪を下ろしてスーツ姿なのだ。ちよっと、古臭い考えだとわかってはいたが、少なくとも執務官志望だったティアナの兄はそうしていた。

ふと、こちらの疑念の視線に気が付いたのか、ファンがこちらを見た。

「もしかして、君が噂のティアナちゃん？ティアナ・ランスター？」

「…そうです。が、どういった噂ですか」

名前を呼んだとき、僅かな含みを感じたティアナが苛立ちとともに聞き返す。執務官候補のランスターと聞くと、軽い侮蔑を滲ませるものがある。彼女の兄に対する不当な評価故の噂のようなものだが、一度ついたレッテルはなかなか消えてくれない。このファンという男もその手合いだろと考えたティアナの語気が荒くなった。

「もちろんいい噂さ。機動六課地上班を勝利に導いた現場指揮官。あのハラオウン班が引き抜こうとしているストライカー。ミッドチルダの法律畑で、話題にならない方がおかしいと思うけど」

「そうですか…」

素直に信じる気にはなれなかったが、ティアナは苛立ちを引つ込めることにした。エリオ達という子供の前ということもあるが、噂など

これから実績で黙らせていけばいいのだ。

ファンの方も興味をエリオ達に移したようだった。屈んで目線をエリオ達に合わせる。

「君たちは、先輩の被保護者の子かな？ 私はフェイト先輩の後輩ファン・ユーゼエア。君たちの名前は確か…」

「はじめまして、エリオ・モンディアルです」

「キャロ・ル・ルシエです」

「おお、いい挨拶。こっちの小さくて勇ましそうなのは、キャロちゃん
の竜かな？」

「え！」

エリオの肩の小竜を指してのファンの質問に、エリオが小さく驚きの声を上げた。キャロにはエリオの驚きの理由がわからないようで、小さく小首を傾げてからファンの質問に答えた。

「はい、名前はフリードリヒ。フリードって呼んであげてください」

「へえ、かっこいい名前もらっているな。フリード」

「くるるっ！」

「でも…、よくわかりましたね」

褒められたのがわかるようで、上機嫌な声をあげるフリードを横にエリオが口を開いた。

「ん、どういうことだい」

「フリードです。最近、僕の竜だと、勘違いする人が多いので」

（ああ、そういうこと…。）

ティアナにも、先ほどのエリオの驚きの意味が分かった。六課メンバーにとって、フリードがキャロの竜であることなど、当たり前すぎるので疑問にも感じないが、初対面の人が『エリオの肩に乗った竜を、キャロの竜である』と、認識できるはずがない。

「いやいや、大したことはないよ」

言いながら人差し指を回しながらウインクを一つ。ファンの整った容姿も相まって絵になるが、なぜだかティアナの琴線に触れ苛立たせる。

「まず、この子がアルザスの竜であることは間違えようがない」

エリオが黙ってうなずいた。

それほどまでにアルザスの竜は有名だ。S t. ヒルデ魔法学院の初等部の子供でも竜と言えば、アルザスと答えるだろう。

「でも、エリオ君のあいさつの発音はとてもきれいだった。クラナガン訛りというものもあるくらいなのにそれがない。てことは、君は地上ではなく本局で育ったことがわかる。本局の人工的な空間がドラゴンの飼育に適しているとは思えない」

「それだけですか？ 僕が本局で育ってアルザスに渡ったのかもしれないよ。キャロは名前しか言わなかったですし…」

「それには反論ができる。アルザスの竜を使役するのにいったい何年かかる？ 二人の年齢から考えるに、どちらかがアルザスで一緒に育った。と、考えるのが常識的だろう。それと決定的なのは、香りさ」

謎解きの答えに納得しきれなかったエリオが反論すると、ファンが続けた。

フリードに顔を近づけ、匂いを嗅ぐ。

「竜特有の硫黄の香り…、エリオ君からも少し感じるが、四六時中、それこそベットのの中まで一緒にいる人には、香りが染みついてしまうものだろう」

よく観察しているものだ。とティアナも思いキャロに視線を向けた。視線を向けられ話を聞いていたキャロが自分の手を嗅いだ。確かに、僅かにフリードの匂いがする。ちよつとした発見だ。

自分自身がかわいがっている竜を、より身近に感じることができたキャロがうれしそうに笑う。

「んー、キャロちゃんには、見えないおしやれはまだ早いかな」

普通の女の子なら、体から硫黄の匂いがするなどと、言われれば気にするものだろうが、キャロにはその概念はまだないようだ。

ファンが目を細めてエリオの肩に手を置く。

「硫黄の香りで栄える香水の銘柄を教えようか？」

「え、え、どうしてですか!？」

「決まっているじゃないか、そんなもの」

言いながらファンが耳打ちをすると、エリオが顔を赤らめ目を白黒

させている。

その様子を見て、過保護な保護者が飛んできた。フェイトはエリオをファンから引きはがすと言った。

「エリオに悪いこと教えないでください」

「悪いこととは酷いな。女親じや教えられない男にとって必要なことを教えているのさ。な、聞いておいて損はないぞ。エリオ君」

「え、えくと…」

フェイトの腕の中でエリオが曖昧な声を出した。あの耳打ちの後だと、聞いておきたかった。と、エリオは考えてしまう。六課では、女性の同僚が多かったせいか、男同士の会話というものが楽しい。

ファンはそんなエリオの様子を敏感に感じ取り、手招きをしながら続けた。

「ほら、エリオ君だって聞きたがっているじゃないか。過保護は男の成長を妨げるよ」

「でも、でも、…この子にはまだ早いです!!」

フェイトが必死になり、反論を試みているが分が悪そうだ。ティアナはフェイトの援護のつもり、つまりは全くの善意で、話題を変えるために質問を口にした。

「…すいません。ファンさんでしたよね。フェイトさんとはどういった御関係ですか？」

言った瞬間、フェイトが再び竦み上がった。あつという間に涙目になり、うろたえ切った顔でティアナを見た。「なんてことを聞いちゃうの?」という台詞が極太サインペンで顔に書かれている。

「聞かれてしまったては、説明しないわけにはいかないなく、いや、あの時の先輩は可愛かったね」

こう言ったファンの顔を見て、ティアナには一つ分かったことがある。このファンという男は、好きな子に悪戯するタイプで間違いない。

02フェイト執務官の後輩 承

ファンも含めた一行はいつの間にか、クラナガン中心地から離れた新旧の住宅街が隣り合う区域にあるレストランのテラス席に移動していた。あのあと二人が初めて会ったきっかけを話そうとしたファンを、フェイトがどうしてもやめると懇願し、

「よしじゃ、タッ飯で手を打とう。それでティアナちゃんには言わないであげる」

こう答えたファンが連れてきたのが、このお店。「ラーメン」ONE 風堂である。ラーメンと言えばクラナガン市民にとっては、小洒落たレストランでとる夕食の定番になりつつある料理である。

ティアナが「あ、やっぱり、こういう人って、こういうところをチョイスするのよね」と、思ったが、フェイトは「やっぱり、違和感が…」と、一言。理由を聞くと、子供の頃6年間過ごした日本では、ラーメン店の雰囲気は違うものになるらしい。

席についてもフェイトは、ファンの様子を恐る恐るうかがっていた。しかし、ファンが巧みな話術で執務官試験後の研修の思い出や、取り扱った事件中で公になっている珍事件と呼べるもとを、エリオ達に面白おかしく語ったことで、警戒がほぐれたようだ。ラーメン一杯だけでは物足りない大食漢のエリオが、替え玉やサイドメニューを欲した時には、笑顔で「いいよ、どんどん食べて」と答えていたのだが、笑顔だったのはそこまでだった。

よく言えば天真爛漫、悪く言えば天然ボケ気質のキャロが言ってしまった。

「よかった。ファンさんは怖い人なのかと思ってました」

「ん？僕って怖く見える？」

「いえ、その、フェイトさんが、さっきまで怖がっていましたので」

「ああ、それはだね。はじめて受けた執務官試験時に…」

「え、え、待って！」

ガタン！と、急にフェイトが立ち上がったために、椅子が大きな音を立てた。店内の会話が一瞬止まり、客の視線が集まる。顔を赤くし

恐縮したフェイトが、周囲にペコペコと頭を下げると客たちは各々の会話に戻って行った。

顔を赤くしたままのフェイトが、テーブル越しに身を乗り出してファンを責める。むろん小声で、

「話さないって、約束したよね！」

「うん、したね。ティアナちゃんには言わないって…」

ファンがにやりと笑う。言葉が続くとしたら、他の人に話さないとはいっていないのである。

フェイトが殴られたように痙攣し、力を失って着席した。両手で顔を覆ったまま真っ白に燃え尽きている。突いたら灰になって、崩れてなくなってしまうそうである。

（確かに言ってたわ、この人）

ティアナは一瞬、上司を気遣って聞かないという選択肢を選ぶか迷ったが、好奇心の方が勝った。

さすがに声に出して催促するのは、はばかれたので視線で続きを促す。

「ティアナちゃんは聞かないでねー」

ティアナの視線を正確に解釈したファンが、白々しく言うてから続けた。

曰く、

新暦68年、ファンにとって初めての執務官試験日1日目（フェイトにとっては二度目）、会場の張り詰めた雰囲気、さすがに気後れしたファンが不安げに自分が座るべき座席を探していた。

席番号の表示が出ている空間モニターを探し当てたファンが、モニターに近づくと、奇麗な長い金髪をおろし髪にした少女が食い入るように表示を見つめていた。年のころは10代前半、ファンと同年代。いや、成長期を迎えていない自分より、やや高い身長をしているので、少しだけ年上かも知れない。

（お、これは…）

周りにいる受験生の殆どが20代の大人。執務官試験を10代前半で受ける者はかなり稀有なはずだが、着慣れていなそうなスーツ姿で手元の受験票と席番号を熱心に見比べている。その様子は受験生で間違いないだろう。しかも、かなりの美少女。

執務官試験は及第点に達していれば合格者数無制限の免許試験ではなく、事実上事前に決定された合格定員枠を争う競争試験ではあるが、どうせ2〜3回は落ちるのが当たり前前の試験だ。今回は試験とペース配分とknow-howを学べればいい。と、ファンは気楽に考えていた。

(美人の同期候補とお近づきになるに、越したことはないよね)

近づいて取り合えず相手が年上として声を掛ける。

「こんにちは、おねいさんも受験生?」

「ひゃうっ!え、え、あ、はい」

自分に声を掛けてくるものなどいないと思いついていたのか、少女は奇妙な悲鳴をあげた後、ファンの方を向いた。声を掛けたのが同年代のファンであることに安堵したのか、少女のほほが緩んだ。座席表を見ていた時よりも、緊張がほぐれたらしい。

「よかったー、僕以外みんな大人で声を掛けれる人いなくって」

「そうだね。私も1年前そうだった。…あっ!」

少女は言ってしまったから、顔を赤らめた。自分で試験を1度落としました。と、暴露したようなものだ。

ファンは照れた表情もいいね。と、思いながら、数年前マスコミの注目的になっていた天才執務官を引き合いに出した。

「気にすることないんじゃない?ほら、あの闇の書事件を解決した。ハラオウン執務官だったけ?天才って言われているその人だって、一回落としてるって聞いたよ」

「ふっ…、ふふ、そうだね。お兄ちゃんもそうだった」

「え、お兄ちゃん!」

「うん、わたしはフェイト・T・ハラオウン。クロノ・ハラオウン執務官はわたしのお兄ちゃん」

年下の子が何も知らずに、本人の身内の話を出したのが面白かった

のか、茶目つ気のある笑顔でフェイトがいうと、フアンは眉を寄せ困惑の表情を作った。

「はは…、まずいこと言ったかな？」

「ううん、大丈夫」

「そう、よかった。ま、順当にいけば、次はおねいさんが合格する番だね」

「うん、そうなるようにお互い頑張ろう。よかったら、名前を教えてください」
「フアン・ユーゼエア、ちよつと気が早いけど、フェイト先輩って呼ばせてね。おねいさん」

フアンはなるべく彼女の印象に残れるように、ウインクをしながら笑顔で答えた。

「と、いうことが遭ってね。受付とか、合間の休み時間で休憩しやすい場所とかを教えてもらったんで、以降、僕は先輩と呼んで慕っているのさ」

「はあ、そうですか…？」

フアンの話のエリオが首をかしげる。この話を聞いてもフェイトがおびえる理由がわからない。エリオが答えを求めるように、ティアナに視線を投げたが、ティアナも意味不明なので首を振って見せる。するとフアンが続けた。

「いや、問題はこの後でね。先輩とは1年後に試験会場前で再会したのはいいけど、先輩は私服のスーツ、僕は黒い制服を着ていた。…まあ、まだ、研修中だったけど…。言っている意味わかるよね…」

「あー、それは…」

「…気まずいわね」

「…フェイトさん、残念だったんですね」

キャラは純粋にフェイトが不合格になったことを思いやっているようだが、エリオとティアナは違う解釈をした。要するに、『2度目の試験の際、先輩風を吹かせて年下の男の子を案内したら、その男の子に先を越されてしまった』と、いうことだ。これは確かに恥ずかしい。

ティアナ達後輩の前では、話してほしくない話題かもしれない。

ちなみに、フェイトがここまでこの話を身内に聞かせたがらない本当の理由は、この話を聞いて最も大袈裟に反応し、遠慮のかけらもなく大爆笑した、胡散臭いイントネーションを付けた話し方をする子狸と、CVを使いこなしている海鳴市のツンデレがいるためである。が、さすがにティアナにはそこまでのことは、推測できなかつた。

「執務官はテストよりも、なった後の実績だと思うけどね。君も気を付けな、燃え尽き症候群になってしまう人も多いからね。」

ティアナを見ながら呑気な口調でそこまで言つて、ファンはテーブルの下を覗き込んだ。テーブルの下ではフェイトがしゃがみ込み、両手で顔を覆っている。

「ほら、先輩もいつまでも落ち込んでいない。もう、執務官としての実績は先輩の方が多いでしょ。」

ファンの慰めの言葉と、話を聞いた後輩たちのリアクションが控えめであったことに安心したのであろう。フェイトは顔から手を放しのそのそと席に戻つたが、現れた表情は不満げだつた。

「4年でやめちゃったくせに…」

「いや、それはほら…」

滅多に見せることのないフェイトの恨み節に、今度はファンの方が顔を引きつらせる番だつた。

印象的な出会いをし、年も近かつたことからフェイトとファンは互いに、情報交換や捜査協力を行い、新米執務官の悩みを話し合える程度に良好な関係性になっていた。特に新米執務官と管理外世界の女子中学生の二足の草鞋を履いていたフェイトにとっては、本局やミッドチルダ周辺の様子を教えてくれるありがたい情報源だつた。

しかし、フェイトとその親友達が活動拠点をミッドチルダに移したころ、ファンは「執務官をやめて弁護士になる」と、言つて、執務官どころか管理局を退局してしまつた。しかも、理由を尋ねたフェイトに対し、ファンはほとんど説明することはなく、「家庭の事情」の一言ではぐらかし続けた。

その態度がファンを友人と考えていたフェイトの中で小さな棘に

なっていた。

それに、フェイトのなりたかった執務官に、彼女より早くなれる才能を持っているものが、その道を捨ててしまったことが、フェイトの道を否定されたような気分させるのも原因かもしれない。

「家庭の事情ってやつだよ…」

フェイトの小さな葛藤に、ファンも気が付いているようだったが、寂しさ混じりの自責の表情を浮かべ、いつもの答えを口にした。途端にファンの軟派な印象が消えうせ、虚無的な影があるように見える。

ティアナにもその表情はウソには見えず、卑怯な顔だなと思いがながらも話題を変えた。

「いまは何のお仕事をなさっているんですか？」

「ん、弁護士だよ。探偵のまねごとをすることもあるけど…。なにかお困りのことがございましたら、ユーゼエア法律事務所に、お気軽にご相談ください。ってヤツさ」

ティアナの問いに答え終わるまでには、ファンの顔には人好きする笑みが戻っていた。

しかし、それも長くは続かず。ファンの目がスツと細くなったかと思うと、フェイトが執務官の顔になり、揃って近くの路肩に止まった車両を見た。ティアナもそれに習うと車両から、この一帯を担当する陸士部隊の部隊章を付けた局員が2名下りてくる。武装隊の恰好ではないので、警邏任務か捜査任務の一環だろう。

「反対車線」

「うん、多分面通し」

ファンが視線で反対車線を指すと、フェイトが答えた。反対車線には、一般車両に近いタイプの別の官用車が止まっていた。車両には3名の人影、一人は私服の初老の女性。民間人のようだ。

車を降りた局員が Staff only と書かれた扉に向かい、対応した店員と何か話す。

店員が中に戻り代わりに大柄でガッチリとした体格の男が顔だした。男と局員が話していると、数秒後局員が身構えた。実際には大した動きをしていたわけではないのだが、六課で教導のエースに鍛えら

れたテイアナ達には分かった。

大柄な男と局員は、大きな声こそ出してはいないが、言い争いになりつつあるようだ。

「うん、どうやら僕のぐ飯の種が出来たみたいだね」

ファンが自信の笑みを湛えたまま立ち上がった。

03 フェイト執務官の後輩 Q

「やあ、トラブルかい？フリント」

「あ？…なんだ…弁護士先生か」

左右を局員に固められた体格のいい若い男、フリント・ミシガンは、フアンに声を掛けられると不愉快そうに顔を歪め言った。

「俺は何もやってねえんだ。弁護士に用はねえ」

「それなら、なおのこと。困った管理局員つてのもいっぱいいるしね」
フアンとフリントの関係はシンプルだ。

フリントは学生時代悪い付き合いが多く、暴力沙汰や窃盗を繰り返していた。とうとう、少年院に放り込まれそうになったところで、彼の母親がフアンに泣きついた。フアンの尽力のお陰で、フリントは保護観察処分に留まり、以降、フリントの母親ジャクリン・ミシガンは、フアンに何かと相談を持ち込むようになった。母親とフアンの熱心な姿に、フリントは悪い縁をきり、最近ではラーメン屋の下働きをするまでに更正した。

フアンがチラリと局員たちを見る。局員達は露骨に厄介者を見る目でフアンを見ていた。気にせずフアンは続けた。

「今なら無料相談の範疇ですむかもだ。お母さん、今入院中だろ」
「…」

フリントは顔をしかめたが、無言で頷いた。フアンは相談依頼と受け取り、局員達に向き直る。

「では、状況を説明していただけますか？公正さに不安があるのなら、そこに本局執務官殿も居らっしゃるしね」

フアンはエリオとキャロを席に残し、近寄ってきたフェイトとティアナを指して言った。

店の客たちから見えない位置に場所を変え、身分の証明をしたフェイト達が二人の局員に状況を聞く。説明してくれたのは、ネブラスカ・リンカーンと名乗る壮年の男性警邏隊員だ。彼の傍らにいる女性隊員チュマシユ・サウザンドオークスは、ティアナと同じ位の年頃で

新品の制服姿を強張らせ、フロントを警戒している。男の中でもフロントはかなり体格がいいので、気後れすまいと必死のようだ。

事件のあらましは、ここから少し離れた混在住宅地の共同住宅の一室に住居侵入があった。と、いう通報からだ。現場に着いたネブラスカと、チユマシユが室内を搜索した。すでに犯人は立ち去った後だった。が、部屋の中はひどく荒らされていた。

部屋の住民の小柄な初老の女性、エリー・ペンシルベニアに犯行の時間帯を確認したところ、彼女が日課にしている1時間の近くの公園への散歩を行い帰宅後、玄関に入ったところで、すぐに部屋が荒らされていたことに気が付き通報した。とのことだった。

残念ながら、エリーの住む共同住宅には、監視カメラがなく。周辺住民に聞き込みをしても、怪しげな物音を聞いたという証言はなかった。

「最近引越してきたばかりの私の為に、厄介ごとに巻き込まれたくないのさ」

エリーは毒づいた後、自身は公園からの帰り道に大柄の怪しい男を見た。と証言した。その男の特徴がフロントと一致。

また、近くのコンビニエンスストアで、同じ特徴を持つ男性の姿が最近現れるようになった。その男はこのラーメン店で働いている。と、コンビニ店員からの証言も得られたため。

エリーに顔を確認させたところ、「私の見た男で間違いない」とのこと。その後、任意同行を求めている所に、ファンが現れたとのことだった。

「フロント、その辺に行つた覚えはあるかい？」

「ああ、あの公園近くの駐車場に車を置いている。コンビニには仕事前に飯を買いに行くこともある」

「だ、そうですよ。警邏隊員殿？」

ファンが警邏隊員に向き直ると、チユマシユが眉間にしわを寄せながら言った。

「被害者がその男を見た。と、言っているんですよ」

「事件現場のそばにいた。それだけだろ。それに単独面通しはガイド

ラインで禁じられているはずだよね」

ファンは穏やかな声で、チュマシユに応じていたが、チュマシユの眉間にしわが深くなる。彼女の眼にはファンは捜査を邪魔する悪徳弁護士に見えているのだろう。

ファンの方も、チュマシユのことを「哀れな老人の問題を解決してあげようとの善意から、直情径行になった未熟な局員」と、判断した。いくら理路整然と説明しても疑うのを辞めてはくれないだろう。局員たちにフrintの自由を奪う法的根拠がないことだけを指摘する。「と、いうわけで、任意同行を拒否します。定職についている彼は逃亡のおそれがないことも主張しておきますね」

「・・・」

今回の犯罪の嫌疑は住居侵入と器物破損なので、盗品を処分する等の証拠隠滅は出来ない上に、逃亡をする可能性も低いと主張され、チュマシユもそれ以上の追及はできずに黙った。

ファンは依頼人に言った。

「フrint、仕事に戻っていいよ。あとはこつちでやっておくから」「ふん！」

フrintが鼻を鳴らして、店に戻っていく。礼の一言もなかったが、ファンは気にしなかった。理不尽に疑われたりしたら、頭に血が上り粗野な行動もしてしまうだろう。

「さて、依頼人に掛けられた疑いを晴らすために、現場の状況を見せてもらってもいいかな？」

チュマシユは嫌そうな顔をしていたが、ネブラスカは弁護士を敵に回すのはまずいと考えたようで、エリーの部屋を搜索した際の映像を見せた。

映し出された映像が、ドアポストの付いた金属製の扉を潜ると、切り裂かれた絵画が視界に飛び込んできた。絵画はミッドチルダで教育を受けたものなら、名前は思い出せなくとも、一度は見たことのある『緑色のターバンを巻いた少女』。170cm弱の高さにつられたLLサイズの額縁に収まった絵画は鋭い刃物で切り刻まれていた。そのうえ、額縁のかかっていた壁にはカラスプレーで、Fuok

me と、落書きされていた。絵画の下部にもスプレーが掛ってしまっているので、修復は不可能だろう。

他にも、一緒に飾られていたのであろう、額縁が床に転がされている。日焼けしたアクリルフィルムの下で、幼い子供に描かれた女性が画面越しにこちらを見ていた。

映像は進み、ダイニングへ。

こちらでも、組み合せ食器棚に刃物による傷が無数に走り、塩化ビニール化粧加工が剥がれ中の合板が顔を覗かせている。

新暦元年記念の意匠が彫られたウォールナット材のオーバルサロントーブルの上には、水光熱費の領収書、損害保険の契約書、高級家具の鑑定書、引越しの領収書、ハイブランドのショッパ―が投げ出されており、飾られていたであろう写真立てもすべて倒されていた。倒れた真新しい写真立ての中で、ティーンエージャーの娘が高級バックを片手に、気を使った笑顔を浮かべていた。

映像が寝室へ向かっていく。

扉が開けられると無数のフェザーが舞った。鳥の羽の出所は枕だったようだ。マホガニー木目がプリントされた合板のシングルベットのの上に、萎んだ袋上の布切れがあった。切り裂かれているが、もともと枕だったのだろう。ベットと一体になった収納引き出しは開け放たれており、飛び散った羽が中にも入り込み、しまわれていたSサイズの衣服に絡まっている。ベットの隣のマホガニー材のドレッシングテーブルも似たようなありさまで、旧暦300年代の特徴的な取っ手の付いた引き出しは、すべて開けられ中身が散乱していた。

(あ、あの化粧水、私も使っているやつだ)

ファンと一緒に映像を見ていたティアナだったが、見慣れた瓶について意識が引かれた。あの化粧水は陸士386部隊災害担当時から使っているもので、災害現場の強い刺激からお肌を癒してくれる心強い味方だ。何処のコンビニでも手に入る所も素晴らしい。そんなことを考えていると、ファンが「もう、いいや」と、ネブラスカに映像を止めさせた。

「状況は大体掴めた。私の依頼人が犯人ではない確信が得られたよ」
ファンは砂糖と塩を間違えた料理を食べさせられたような顔で、
フェイトを見た。フェイトも悲しみ、切なさ、哀れみを煮詰めたよう
なメランコリックな表情だ。

しかし、局員たちとティアナは、二人の表情の意味が解らず困惑し
ていると、ファンとフェイトが口を開いた。

「ちよつとした、プロファイリングというやつさ」

「ティアナ、被害者学と犯罪学の両面から、部屋を荒らした人間の人物
像を想像してみて」

ファンは被害者と加害者、双方に同情したようだった。フェイトも
加害者を責め立てることができない様で、目を伏せている。

二人が同情的になる相手が犯人の人物像？

ティアナは頭の中で人物像をくみ上げていった。

04フエイト執務官の後輩 A

(まず、どのような人物が被害にあったのだろうか?)
被害者の体型は?

掛けられた額縁や、家具や衣服のサイズでわかるように、ミッドチルダの平均身長からみると、小柄な体系である。

被害者の住んでいたのは?

比較的狭小な住宅が密集し、店舗等が混在する混在住宅地の共同住宅は、常に防災、防犯上の問題を抱えている。そのなかでも、監視カメラのない共同住宅となると、低所得者向けの住宅で、エリーという老人は高収入とはいいいがたい。と、思われる。

被害者の暮らしは?

最近、引越してきたばかりであり、本人の証言にも有ったように、近所に頼りになる友人はいないようだ。

写真立てや玄関の子供の書いた絵がある所を見ると、子供か孫は居るが離れて暮らしているらしい。

当座の金はあるらしく、引越しを期に、値の張るアンティーク家具とハイブランドの商品を何点か購入している。しかし、日用品には金を掛けていない・・・?金を掛けることが出来ないらしく、リーズナブルな価格の化粧品を使っている。

以上から、被害者は高い賃金の定職に付いておらず、支援者がいるわけでもないが、最近、まとまった金が入ってきたことが伺える。

(・・・、次、加害者側でわかることは、何かしら?)
犯人が行った器物破損は?

玄関に飾られていた絵画は当然ながら複製画である。教科書にも載っている絵画の本物が、一般人が所持できるわけがない。その破損。

F u o k m e 落書き、壁紙の張替え料金分の破損になるだろうか?

ダイニングの食器棚。柔らかい合板で作られているために、買い替

えなければいけないかもしれない。

寝室の枕。寝室は派手に散らかって見えしたが、破損させられていたのは枕だけ、枕自体も手ごろな値段のフェザーの枕だ。

犯人の体型は？

玄関の落書きの高さで、おおよその背丈がわかる。大抵の人間は目線の高さで文字を書く、170cmの高さで吊るされた絵画の下部にしか、文字がかかっている所をみると、155cm〜160cm程度の身長のもので書いたことを示している。

刃物でモノをあちこちを切りつけている。が、机やベットをひつくり返すなど、力が必要なことをしていない。このことから、体力のない者の犯行と推測できる。

犯人の知性は？

F u O k m e の落書きは血気盛んな10代から20代の若者をイメージさせる。が、彼らが好んで使う言葉は、F u O k y o u である。

更に、若者が衝動的に行った器物破損事件で狙われるのは、より情緒的なモノを狙う傾向がある。被害者の家の中にあるものでは、子供が描いたであろうと容易に推測できる絵や家族の写真が、真つ先に狙われているはずである。しかし、床に落とされたり、倒されてはいるが、壊されているわけではない。

つまり、犯人は経済的にも精神的にも被害者にとって、替えの利かないものを理解しており、それを傷つけない。体格はかなり小柄な男性、又は女性であり。尚且つ、若者文化に明るくないものが、その真似をした。と、言うことになる。

以上、フェイトやその副官シャリオから、教わったり、資料を読んで勉強した捜査の基礎知識に従ってのティアナの分析である。

あくまで状況証拠ではあるが、ラーメン店の下働きプリントとはかけ離れた人物像である。そして、子の人物像にバッチリ当てはまってしまう人物がいる。

動機も存在している。詳しい内容は確認できないが、損害保険の契約内容によつては、個人単位では結構なお金が動くことになる。

「これって、つまり、・・・。」

ティアナの目がつり上がっていく、ファンとフェイトは同情的のようだが、名誉というものはいちど傷つけられるとなかなか挽回できないものである。

この犯人は赤の他人を逮捕させてしまうことになるとは考えていないのか？あるいは、住居侵入は起訴されても殆ど罰金刑。器物破損も示談してしまえば大した事はないと甘く見ているのかもしれない。

過去の経験が蘇り、ティアナが憤りを感じ体を震わせて考えの続きを口に乘せようとした。

(エリーという女性が、保険金目的の為に打った狂言なのは・・・)

ティアナの様子を見ていたフェイトが遮った。

「落ち着いて、ティアナ。この映像でわかるのは、あくまで状況証拠・・・。」

「その通り、私は犯人の体格を指摘するだけでも、検事に逮捕状を出させないことが出来そうだけど」

ファンの弁護士としての、仕事はこれで終わりのはずだった。が、声を潜めてフェイトに向かって続けた。

「高級家具にハイブランド商品を買った金も、損害保険で得た可能性が高い」

「やっぱり前がある・・・、それとも、最初は本当に偶然？」

「どうだろうね？引越して来たのなら、疑いを躲すためか、本当に損害があったのか・・・、両方あり得る」

エリーがこの地区に転居してくる前に似たような詐欺行為で金を得たのか？それとも、偶然の事故で入ってきた保険金に目がくらみ魔が差したのか？

フェイトには判断が付かなかった。ファンも同意見で、互いに確かめる方法を提案する。

「引越し前の住所がわかれば、事故か事件の記録が残っているかも・・・。」

「保険に入っていたなら、所得控除を調べれば分かるかもだ」

「それもいいね。結果は教えてあげられないけど・・・、ちよつと、問

「合わせてみる」

フェイトが愛機バルディッシュを操作し、クラナガン区役所への資料閲覧を申請し始めると、ティアナが口を開いた。

「あの、お二人とも、どうして、この女性に同情的なんですか？」

ティアナの感覚では、状況証拠だけとはいえ、保険金詐欺を働こうとしていた疑いのある女性に同情的には成れない。

それには陸士部隊の仕事でもある。広域次元犯罪でもないのだから、犯行の分析結果を指摘し、捜査を見直すように伝えれば、本局執務官としての義務は十分果たしている。

詐欺の嫌疑がかかれば、損害保険にも再調査が入るかもしれないが、それは自業自得というものだ。

「んー、動機かな？」

「動機？」

「写真立て、見た」

「私ぐらいの子でしたね？」

「玄関にあった子供の絵の額縁の劣化具合を考えると、子供の頃から可愛がっている孫ってところかな？」

「そういうふうに見えましたね」

「でも年頃になって、どう接していいのかわからないってところじゃないかな？」

「ああ、なるほど、ハイブランドのバックで孫の気を引いたってところですか……」

エリーの部屋の中に、ハイブランドのショッパーだけが遭った意味が分かった。中身は孫に送ったのだろう。

孤独な老人が孫の気を引くための金欲しさに行った犯行と考えた、フェイトとファンは犯人に同情してしまったようだ。

「保険会社相手に詐欺行為となると、実刑は確実。家族との縁も切れちゃうかもしれない」

詐欺の実刑なら数年は懲役刑を受けるだろう。

エリーの子供がどのような人物か分からないが、孫に悪影響があるという、エリーから離れてしまう可能性もありうる。

しかし、ティアナは思う。

「エリーという人物は、今回の件で他人を巻き込んでいるんですよ」
「うん、その点については、許されるものではないだろう。虚偽申告に問われるだろうな」

虚偽申告罪は虚構の犯罪又は災害の事実を局員に申し出た者に適用される罪で、拘留、または、科料が科され、しっかりと前科が付く。今後の保険の審査なども厳しくなるので、今後、詐欺行為をするのは難しくなるだろう。

・・・が、詐欺で逮捕、起訴となると、刑務所に入ること家族を失い、家族を失ったことで寂しさからまた犯罪に手を出してしまう悪循環が生まれる可能性もある。

「孤独な老人の再犯率って、高いんだよね」

「今回は実刑にしない方がいいと?」

「少なくとも、誰も幸せにならないね。」

悪循環が生まれてしまうくらいならば、今のうちにエリーが踏みとどまれるように促すべきだ。ファンがそう思っていることは、ティアナにも理解できた。

(人を憎まずに罪を憎め)

ミッドチルダに伝わることわざだ。そして、このファンという男はそれを実践しようとしているらしい。

ティアナがこの軟派に見える男を再評価していると、フェイトがバルディッシュを操作する手を止めた。表示された空間モニターの情報に目を走らせると、安心したように息をついた。

すかさず、ファンが聞いた。

「どお、不審な点はあった?」

「それは・・・、ファンには、公開できません!!」

さも当然のように聞いてきたファンに一瞬答えそうになってから、ファンが民間人であることを思い出したフェイトが言った。執務官の権限で調べたので、正規の請求や申請がないと公開してはいけない情報もある。

しかし、

「でも、・・・うん」

フェイトは微笑みながら頷いた。

その様子から、懸念していた。エリーがこの地区に転居してくる前に、保険金詐欺を働いた可能性はなかったのだろう。察したファンも頷き返す。

その後の話は比較的簡単に話が進んだ。ネブラスカ、チュマシユの二人の局員に、プロファイリング結果を伝えた。本局執務官のプロファイリング結果は、なかなか説得力を持ったようで、局員たちはエリーを問い詰めた。場合によつては詐欺未遂に当たることを伝えようと、エリーは発言を撤回した。

曰く、保険金詐欺を狙ったものではなく、引越して環境が変わったことでのストレスが原因で部屋の本物を壊した。住居侵入のあった哀れな老人を装えば皆が同情してくれる。と、思ったとのこと。

このエリーの発言に、チュマシユは大変憤慨し、更に問い詰めようとしていたが、それはネブラスカが押しとどめ、フェイト達の予想していたように虚偽申告で連行して行つた。

エリーが連行されていく前、ティアナはエリーに声を掛けた。

「エリーさん、いいですか?」

「なんだい、あんた」

「わたしは機動六課のティアナ・ランスターと申します」

「それで、あんたはわたしの弁護でもしてくれるのかい?」

皮肉たつぷりに言ってきたエリーは、根性曲がりの頑固者といった風体だった。しかし、ティアナは怯まずに続ける。

「いいえ。ですが、聞いてください。お孫さんには、もつと、思い出に残るものを渡してください。ブランド品なんて渡さずに」

「はあ! 今日日の若い者は・・・」

「子供のころ、兄に安物の拳銃のおもちやを買ってもらったことがあります」

「・・・」

「いまでも、大切にしています・・・」

「そうかい・・・、まあ、考えてみるさね」

この会話をしているとき、ティアナの後ろで見守っていたフェイトとファンには、ティアナの顔は見えなかった。しかし、背中越しにもティアナが罪を犯したエリーに真摯に向き合っていることは伝わってきた。

エリーを乗せた地上部隊の官用車が見えなくなつて、ようやくティアナはフェイト達に向き直つた。フェイトが思わず温かい笑みで迎えると、ティアナは顔を赤くしていった。

「すみません、出過ぎた真似をして・・・」

「ううん、いいと思うよ」

「君は執務官志望だったね。公正で思いやりのある判断のできる執務官になれる資質があるね」

フェイトがティアナの行為を肯定し、ファンが何かを思い出すように目を閉じて言った。

一息ついて、ファンは踵を返した。

「それじゃ、先輩。依頼人に報告もあるし、僕はここで」

「うん、・・・それじゃ」

「ティアナちゃんも・・・、スカリエツティの影響で執務官試験は厳正化していく流れになっている。勉強は大変だろうけど、がんばつて」

「ありがとうございます」

第一印象と違いファンの送った応援に、ティアナの口からは素直な謝辞が出てきた。

ふと、フェイトの口から声が漏れた・・・

「厳正化していく・・・か」

ファンの言った通り、スカリエツティが起こしたテロ事件以降、事件捜査や法の執行の権利と高い権限を持つ執務官の能力向上が叫ばれている。執務官試験の見直しが行われるとの噂もある。

しかし、試験の厳正化は執務官への道の門戸を狭めてしまう懸念にもつながる。当然、人手不足を助長させかねないので、引退した執務官への再雇用なども呼びかけられている。

「ファン・・・、」

フェイトはファンに執務官に戻るよう言いかけたが、体のどこかに小さな棘が刺さって言葉を止めた。

棘の痛みが、ファンが再雇用の誘いを断るだろうと、教えてくる。

「どうしたの？先輩」

「うん、・・・なんでもない」

「・・・そう、じゃあ、今度、今日のお礼をさせてもらおうよ」

「うん、待ってる」

ファンが立ち去る後ろ姿に、フェイトが小さく手を振り見送ってから、エリオ達の所に戻ろうとすると、ティアナが目を見開いてフェイトを見ていた。

「ティアナ、どうしたの？驚いたような顔をして？」

「フェイトさん、あの人と・・・。その、えーっと、お付き合いしているんでしょか？」

ティアナが驚いている理由がのみこめなかったフェイトが聞くと、狼狽したティアナが言ってきた。

「え、何言ってるの？ファンは弟みたいな友達で、付き合っているとかじゃないよ？」

小首を傾げるフェイトの様子を見て、ティアナは本気か？と、思ったが、フェイトの作った表情はあまりにキャラの作る無邪気な表情に似ていた。上司の世間知らずっぷりに驚愕しながら、ティアナは絞り出すような声を出した。

「多分ですけど・・・、今のデートの誘いですよ」

「・・・え!!!」

ティアナは、ファンに心の底から同情した。

機動六課 ノツポの副長編

05出張！ 緊急搜索任務の裏側で

「おはようございま〜す」

「おはよう、アルト。夜勤、お疲れ様」

眠たそうな眼を擦りながら、アルトがグリフィスのいる隊長秘書室に入ってきた。昨日の日報を提出に来たらしい。普通の地上部隊ならオペレーターのとツプに提出するだけですが、六課では部隊長が直接指揮を執っているため、毎朝夜勤についていたオペレーターが隊長を訪ねてくる。

「部隊長、今大丈夫そうですか？」

「いや、聖王教会から通信が入っているから今はちよつと。」

「え〜、早く部屋に戻りたいのに〜」

どうやら、昨日の晩は通信スタッフの先輩（本編には出てこなかった人達）が通信訓練を行ったようだ。疲れのせいか言葉づかいが悪くなっている。グリフィスは気に留めなかったが、口うるさい上司に見られたら…

コンコンコンコン

今時珍しい正しい回数ノックの音が響いた。それを聞いたとたん、アルトの背筋がシャキッと伸び、バタバタと服装の乱れをチェックし始めた。

いまだきこんなノックの仕方をするのは一人だけだ。アルトが落ち着くのを待ってから、もういいかいと、グリフィスが微笑みかけると、アルトはコクコクと頷いた。

「はい、どうぞ」

「入るぞ、ロウラン補佐」

返事をする、長身で赤褐色の髪をオールバックにした男らしい顔立ちの人物が入ってきた。六課副部隊長にして後方勤務のドン、3等陸佐 ヴィルヘルム・チェスロック・ケーニツヒだ。アルト達若い隊員にとっては口うるさい上司と恐れられている人物その人である。

「ん、クラエツタ2士か、報告か？」

「は、はい、副長」

「そうか、異常がなくとも報告は重要だ。ヌケがないよう務めろ」

190cmを超える長身の上に、基本的にヴィルヘルムは部下の前では感情をほとんど出さないため、地方公務員的な雰囲気を保っている六課の内でも生真面目な青年将校に見え、親しい人間以外には威圧感をあたえてしまうタイプである。

それほど親しい間柄ではないアルトにとっても変わらないらしく、顔を引きつらせている。と、そこにアルトにとっては救いの女神が現れた。

「グリフィスくん、おるゝ？副長を…て、お」

隊長秘書室奥の扉を開け、機動六課長八神はやてが顔を出した。

「お疲れ様です、課長」

「お疲れ様です、部隊長」

「おはようございます、八神部隊長」

その場にいる皆が敬礼すると、はやてがそう鯨張らなくてもいいと言うと、ヴィルヘルムが規則ですと淡々と答える。

アルトは、はやてに日誌に確認のサインを貰うと逃げ出すように秘書室を後にした。

「副長は、わたしに何の用やろか？」

「はい、こちらを届けに」

「ああ、次元航行艦整備の見積もりな」

ヴィルヘルムも書類を渡すと早々に立ち去ろうとしたが、はやてが呼び止めた。

「たった今騎士カリムから、派遣任務の命令が入ったんや。スターズ、ライトニング両分隊、シャマル、リイン、わたしの主要メンバー全員で出動します。」

「主要メンバー全員で？レリックですか？」

「決まったわけやあらへんけど、ロストロギアがらみや」

「派遣先は？」

「第97管理外世界」

「課長の出身世界？しかし、だいぶ遠くに戦力を送ることになります、管轄外を理由に断つたほうがよろしいでしょう」

「レリックの可能性も捨てきれない」と言うのがお偉方の言い分や、断れそうもありません」

「なるほど、人手不足ですか」

レリックは第一級搜索指定にあたるが、すでに複数発見されているロストログアである。発見されたロストログアがレリックならば、とつくに判別されレリック発見の報が六課にも届いているはずだ。

「レリックの可能性も捨てきれない」というあいまいな情報でレリック専門である六課を動かすということは、カリムの手持ちのどの部隊も動かせない状態と考えるのが普通だ。そして、はやては直接の上司であり六課の後見人でもあるカリムの依頼は断れない。

ヴィルヘルムはため息をついてから、

「しかたありません。ロウラン補佐、交替部隊を召集、待機シフトに移行させろ」

「はい、わかりました」

グリフィスが自分の端末から交替部隊に連絡を回し始めた。

「わたし達は2時間半後に出発。以降の指揮を頼みます」

「了解」

はやての言葉に、ヴィルヘルムは教本に出てきそうな敬礼を返した。

『クラナガン郊外にて立てこもり事件発生。犯人グループは人質を取り、AMFを使用している模様』

その報告を受けてヴィルヘルムがHQ（六課作戦本部）に入るとシャリーリー達オペレータースタッフが落ち好かない様子でコンソールを操作していた。グリフィスでさえ表情が硬くいつもと様子が違う、はやてが指揮を執っているときは交替部隊待機室につめて、HQに顔を出さないヴィルヘルムが入室したことにも気が付かず、時空間通信ではやてと連絡を取っている。

「部隊長、お戻りください」

「ここからだとも最速でも1時間以上はかかってまう」

通信用空間モニターに映るはやてはエプロン姿だった。どうやら夕食の支度をしていたらしい、深刻な表情をしているので何ともアンバランスだ。

「ともかく、一旦ロストログア搜索の任務を中断……」

「課長、フォワードを戻す必要はありません」

「え」

前線メンバーを引き揚げさせようとしたはやてをヴィルヘルムが止めた。

ヴィルヘルムが発言したので、彼に気付いていなかったグリフィスがビクツと驚く。それを眺めながらヴィルヘルムは、この部隊の未熟さに気付く。

（組織のトップにカリスマがあるのも問題があるな。准曹士が幹部に依存しているようでは、部隊の柔軟性も抗堪性もなくなってしまう。今後、前線メンバー不在時の行動マニュアルを作成すべきだろうか……）

十年選手の隊長達はともかく、若い隊員が多く経験豊富な下士官が少ないことにも問題があるのだろう。ヴィルヘルムはそう考えたが今は口に出さず続ける。

「ロウラン補佐、ロングアーチ諸君も落ち着け。課長、本局から出動要請は出ていません。現在のところAMFの反応は確認されていますが、レリツク、ガジェットともに確認されていないのを理由に地上本部が海の介入を拒んでいるようです。彼らにもプライドと力があります、独力で解決できるでしょう」

地上部隊には縄張り意識が強い指揮官がおり、本局どころか同じ地上部隊の支援さえ嫌う者までいる。特に一般的な部隊の常識を無視した戦力を保有している六課は、戦力不足に悩まされている陸上警備部に好印象を持たれているとは言い難い。

「そうやけど、相手がAMF使つとる以上黙つとるわけにはいかへん。クロノ提督と騎士カリムに連絡、なんとかそちらに向かえるよう、命

令を出してもうわ」

「それはお勧めできません、課長」

「なぜや？」

「地上からの正式な要請が出ていない今の状況では、ロストログア捜索を中断すると任務放棄、管理外世界の安全を軽視している。と、騒ぐ輩も出てくるでしょう」

「こんどは本局内の事情だ、六課後見人のクロノとカリム二人とも若くして将軍以上の地位を手に入れた人物だ。二人とも名門の出ということもあるが何よりも、能力的にも人格的にも優れている。だが、それ故に敵も作ってしまう。能力主義といわれる本局もまた人間が運営する組織でしかない。」

「はやては部下の前で不愉快さを顔に出さないようにするのに苦勞した。ヴィルヘルムの言葉が正しいのを認めたからだ。フェイトが指揮する捜査班のおかげで、レリック事件の主犯はジェイル・スカリエツティだということは判明している。しかし、この時期にAMFを使ってくる以上、犯人グループがガジェットと何らかの接点を持っている可能性はゼロではない。しかし、クロノとカリムにリスクを背負わせるほどの情報を彼らが持っているだろうか…」

「課長、私はフォワードを戻す必要はありません。と、申し上げました」

「え」

「はやての葛藤を知ってか知らずか、ヴィルヘルムが口を開いた。」

「許可を頂けるのならば、立てこもり事件は交替部隊のみで対処が可能です」

「ヴィルヘルムは、まるで車の運転ができると言うのと同じぐらい当たり前の口調で断言した。」

「AAAランクの技術が必要なAMFを使っている相手に油断でけん」

「油断などしておりません、AMF濃度、効果範囲から計算して、AMFはガジェットI型換算で数機程度、犯人グループの武装も個人武装の域を出ておりません。この程度の相手にエースなど不要です」

「…いけるんやな?」

「当然です、課長」

「お手前、拝見させてもらうので、副長」

「了解」

はやてから行動の許可を取った、ヴィルヘルムの行動は早かった。上に掛け合って地上部隊から捜査権を委譲させるように訴え。警戒態勢を上げ交替部隊をいつでも出動できるようにする。事件の担当している部隊を調べると、その部隊内のさらに何人かコネのある者と連絡を取り、事件の情報を集め始めた。それを見たロングアーチメンバーは不思議そうな顔をする。

「副長、随分地上部隊にお知り合いが多いのね」

「副長はもともとあちこちの世界の地上部隊を回っていたらしい。母さんの話だと、他の世界やミッドの地上部隊にも相当顔が利くと言っていたよ」

「私語を慎め、フィニーノ一等陸士。ロウラン補佐、士官のお前まで一緒になってどうする」

「あ、はい」

「申し訳ありません」

謝罪したグリフィスにヴィルヘルムは質問をした。

「ロウラン補佐、現場の陣頭指揮を執ったことはあるか」

「いえ、ほとんど後方支援ばかりでした」

「なるほど、では今回は私が指揮を執る」

ヴィルヘルムは戦力を確認した。機動六課は地球の軍隊に置き換えれば陸軍なら中隊、海軍なら駆逐艦を運用する規模、部外委託の部署（アイナなどが所属）を含めると約200名の組織である。その中で戦闘訓練を積んだ魔導師の集団、直接対応小隊はスターズ、ライトニング、交替部隊を含む約25名が所属している。この人数を警戒待機、準待機、休暇などシフトで回している。現在、すぐ使える戦力は空戦魔導師4名、陸戦魔導師4名、騎士4名、4人1組の編成なら3分隊分の戦力になる。空戦分隊をエア、陸戦分隊をグラント、アース

と呼称している。

「グラント、エア両分隊は直ちに車両にて出勤、種別E6。エア分隊はポイントD29、グラント分隊はポイントG5に待機。アース分隊はヘリで待機。ただし、次の命令があるまでエア分隊とグラント分隊は全員私服で行動しろ」

「え、私服で…」

「そうだ、現在はまだ正式な命令が下っていない状態だ。六課の部隊章を付けた管理局員が現場に近づくわけにはいかない」

正式な命令が下りる前に現場に本局の職員が顔を出すと、地上部隊の士官が過剰反応する可能性がある。隊員の配置は速やかに、かつ秘密裏に行うのが望ましい。

そもそも、魔導師が行動する際にはバリアジャケットになる。私服だろうが制服であろうがあまり関係かない。さらに言うなら、そもそも六課ではほかの武装隊のようにバリアジャケットの規格が統一されていない。バリアジャケット自体が私服のようなものだ。

ちなみに「部隊服装容儀規定で定めるべきだ」と、ヴィルヘルムははやてに上申しているのだが、部隊長、武器・デバイス班から、「そのないの、しょーもない」と却下されている。

それから20分余り交替部隊の配置は完了したが、命令がまだ下りてこない。どうやら、現場で指揮を執っている陸上警備隊部隊長が相応ごねているようだ。六課からも直接交渉しようとしても通信に出ようともしない。それでも、ヴィルヘルムもういちど通信士のアルトに連絡を取るように命じた。

「りよ、了解しました」

アルトが自信なさそうに返事をする、ヴィルヘルムは命令を付け足す。

「ただし、部隊長に世話になっている法律相談事務所から、緊急だと言ってやれ」

「法律相談事務所ですか？」

「そうだ」

アルトは半信半疑ながらも、ほかにうまい方法も思いつかなかった

ので言われたまま実行する。するとあっさりと部隊長が通信に出た。プライベート通信に切り替えられ音声のみの空間モニターだったが、先方の部隊長の声は甲高く、しかもかなり謙った話し方をしてきたので、アルトには卑屈に聞こえてあまり好感が持てなかった。

「先生、緊急の用事とはどういったことでしょうか？」

「立てこもり事件の指揮を執っている最中に、弁護士と相談とは随分後ろ暗いことがあるようですね、部隊長殿」

「む、誰だね」

ヴィルヘルムが指揮権の移譲を促すと、部隊長はガジェットやリックが確認されていないこと理由に断った。確かに理屈ではそうだが、六課の表向き管轄はリック事件、ロストログアでも絡んで来なければ管轄違いを主張できる。だが、短時間でも部隊長のことを調べたヴィルヘルムにとっては白々しい屁理屈にしか聞こえない。

「なるほど、市議会選に出るあなたとしては、派手な突入シーンを演出したい、と」

「ツ…、な、何のことだ。無礼なことを言うな！」

「失礼、では、こういうのはいかがでしょう。」

ヴィルヘルムは、事件はあくまで陸上警備隊の突入で解決したとマスコミに発表することを条件に、犯人と証拠品をすべて六課が引き取ること。万が一制圧失敗してもヴィルヘルムの責任にしてもかまわないと提案した。

部隊長はこの提案の「失敗してもヴィルヘルムの責任」というところが特に気に入ったらしい。二つ返事で指揮権を移譲してきた。その態度の変わりようにアルトは顔をしかめる。

「相手の態度でいちいち表情を変えていたらオペレーターとしては二流だぞ、クラエツタ二士」

「す、すみません」

「それにあの手のモノはすぐに痛い目に遭うものだ」
「？」

アルトは首をひねったが、ヴィルヘルムは取り合わず、現場指揮を取るためヘリポートに向かった。

「各分隊フルバック、情報収集はできているな！ロングアーチ、各分隊からの情報を総合分析しろ!!」

滅多に聞けない副長の怒鳴り声に隣で操縦をしていたヴァイスはギョツとした。最新ヘリ、JF704式は従来のヘリに比べてかなりの騒音低減に成功しているが、耳元で叫ばないと、ろくに話もできない旧型ヘリに慣れているヴィルヘルムは通信デバイスにかなりの大声を出している。アルトが通信用の空間モニターの前でビビっているのを想像しヴァイスはニヤニヤしたが、すぐに気持ちを切り替え上官に対する口調で言った。

「副長、具申します」

「なんだ、ヴァイス陸曹」

「この704式は静粛性に優れています。もう少し小声で話しても大丈夫ツス」

「なるほど、注意しよう」

ヴィルヘルムがあっさり受け入れたので、ヴァイスは少し意外に思った。上下関係をうるさく言うだけの上司かと思いきや意外と話せるタイプなのかもしれない。

そうこうしているうちに情報が集まってくる。敵の人数、配置、装備、建物の構造、人質の位置。

立てこもり犯は10階建ての雑居ビルの最上階、とある政治団体の事務室を占拠したようだ。確かに解決できれば、政治家にコネを作ることができる。出世欲の強い人間が張りきるわけだ。

「使っている装備の割に戦術がなっていないな」

「そうなんすか？」

「そうだ、素人だ。暴発する前に制圧する。ヴァイス、陸上警備隊のヘリの音にまぎれてビル直上へ近づけろ。」

ヴァイスが巧みな操縦でビルの間を縫い、死角からヘリを現場直上に近づいていく。

「各分隊長、対応D4。内部の状況はロングアーチの報告のとおりだ。

犯人の数は8名、AMF装置6機だ。人質7名は2グループに分けられ、犯人が2名で見張っている。2グループの間はパーテーションで仕切られている。残り4名はフロアの中央で交渉や休憩を行うために待機中だ。建物の構造と各対象の位置関係を頭に入れておけ。エア分隊フロントアタッカー、ガードウイングは窓から、グラウンド分隊は非常階段扉から、アース分隊は屋上に降下後突入せよ。」

「こちらエア1、センターガードとフルバックはどうします」

「お前達は伏兵だ、狙撃ポイントを確保した後、情報収集を続けろ」

ビル直上でJF704式がホバリングする。すぐさまカーゴベイハッチが開き、アース分隊はフォアストロープを使い降下。フルバックがカード状の簡易デバイスを屋上に設置する。一方、10階非常階段扉前に配置したグラウンド分隊は、使い捨てデバイスのバッテリーングラムにカートリッジを込める。エア分隊が死角から窓に近づく。

「グラウンド1、準備OK」

「アース1、同じく」

「エア2、突入準備完了」

「よし、行け！」

合図と同時にアース分隊が設置した簡易デバイスに封じ込まれていた炎熱系の術式が発動し天井に大穴をあける。真下にあったAMF装置が巻き込まれた。

新しくできた入口からアース分隊のセンターガードが強烈な閃光弾を放り込む、魔力結合無効にするAMF内といえども魔法で発生した物理現象までは止められない。強烈な光が犯人たちの目を焼いた。

バッテリーングラムでドアを破ったグラウンド分隊は、1名がデバイスだけを室内に突き出す。すると犯人が眩暈を起こし始めた。デバイスの先から放たれたのは超低周波、浴びると眩暈、吐き気を引き起こし、運が悪いと失神してしまう強力な出力だ。犯人の近くに座らされていた人質たちもなんだか苦しそうだ。

フロアの中央に居た犯人たちは二か所からの轟音に驚いた。ある

者は受話器を持ったまま硬直し、またある者はコンビ二弁当やミネラルウォーターのボトルを取り落としそうになった。一瞬後、窓から飛び込んできた圧縮空気弾と実体弾にAMF装置が吹き飛ばされ、それに巻き込まれ1名が気を失った。

閃光弾が消えた途端、フロントアタッカーは穴から飛び下り犯人に接敵すると、切り詰めた杖を相手に押し付ける。雷鳴のような轟音と共に散弾が発射され、犯人の意識と体を吹き飛ばす。いくらAMF内といえどもここまで接近してしまえば、魔力の結合が解除される暇などない。フロントアタッカーがもう一人の犯人に振り返ると、相棒のガードウイングが槍の石突きで相手を気絶させたところだった。

(なんだ、この吐き気は！)

ドアが破られると同時に襲いかかってきた、眩暈と吐き気を堪えながらなんとか周りを見渡す。目に入ったのはリーダーが持つて来た『切札』だった。薬のカプセルのようなボディに動力を強引に取り付けているため、不格好な長靴のような形をしていて、その中心に矢が突き刺さっている。

(え、矢だって！)

もちろん、そんな矢が部品のはずがない。一緒に組んでいた仲間に声をかける。

「オイ、切札が…」

反応がない。

「オイって」

振り向くと倒れた仲間と斧槍をもった管理局員。

「あ」

慌てて手に持った猟銃を向けようとして、横合いから飛んできた魔法弾にこめかみを抉られ意識を失った。

窓ガラスがまき散らされ、弁当やペットボトルがひっくり返る。人質のいないフロア中央は射線にさえ気を使えばいいだけだ、遠慮ない

攻撃ができる。最初の初撃でAMF装置を破壊され、比較的疲労が少ない通常非殺傷弾を窓の外から連射され、犯人の1人が数発モロに食らって倒れ伏す。それを見た1人が怯え頭を抱えて震えだす。最後の一人はもう少し根性があったようだ、床を這って人質のもとへ向かおうとしているが：

パーテーションの陰から短い杖や槍、斧槍や弓を持った管理局員が現れると観念したようだ。持っていた大型ナイフを放り出し両手を上げた。

部下達からの制圧の知らせを受けると、念のため犯人達の武器の封印処置とバインドでの拘束を命じ。グラウンド分隊に人質たちをあらかじめ呼んでおいた救急車両へ誘導するように指示を出した。全く出番のなかったエア分隊の二人からの不満の声も上がったが、ヴェルヘルムは無視し、そのまま待機させた。

「念のため眠り姫にも用心しろ。ロングアーチ、こちらバックヤード0、犯人達の無力化に成功、人質達の誘導を開始する」

制圧完了の知らせを聞いてロングアーチの面々が色めき立った。現場経験の浅いアルトやルキノにしてみれば、高ランク魔導師がいな交替部隊だけではもつと苦戦するものだと思ひ込んでいたらしい。人口が一千万人を超えるミットなど大都市では日常的に犯罪が発生する。そういった事件を解決しているのは彼らのような普通の魔導師部隊で、彼らの支えがあるからこそエースが活躍できる、ということをいまひとつ理解できていない。

（エースを支えるのではなく、頼っているようではこの部隊もまだまだか。）

武装隊では古参の下士官が若い士官やエースを捕まえて『俺達がいけないと何もできないお調子者』と言ってのける者も結構多い。そして、兵士や下士官がそのくらいの気概と自信を持っていなければ、部隊の錬度は低いと言わざるを得ない。

（陸戦Dランク、事務方の私が教育を行っても効果を薄いだらうな。

今度、課長又は高町3尉に直接教育を実施してもらおうべきか)

ヴィルヘルムが今後の部隊運営に頭を悩ませていると、状況に変化が起こった。人質の一人が隠し持っていた折り畳みナイフを取り出し、一番近くにいたほかの人質突き付ける。

「どうします…」

遙か眼下で何かを大声で主張している新しい犯人を見ている上司に、ヴァイスは緊張した面持ちで聞いてきた。ヘリの操縦桿を握る右手の人差し指が無意識に動く。

「どうする必要もない。グランド分隊ほかの人質の動きにも警戒しながら、犯人に圧力をかけろ」

分隊にデバイスを向けられた犯人は怯え、威嚇のため分隊員に向かってナイフを振る仕草をする。そこに…

エア1の放ったスタンバレットは正確に犯人を射抜いた。

「副長はこうなることを予想していたんスカ」

「いや、私は予言者ではないからな。9割がたエア1の配置は無駄に終わると考えていた」

「なら、どうして伏兵を…」

崩れ落ちる犯人を見ながらヴァイスが尋ねると、ヴィルヘルムはすぐに答えず別のことを聞き返した。

「ヴァイス陸曹、精強な部隊。あるいは強力な組織には何が必要だ？」

「最新鋭のヘリッスね、こいつがなけりや始まらないッス」

ヴァイスは突然聞かれて、慌てたがなんとか言葉をひねり出した。少々、趣味に走った答えだったので上司が怒るのではないかと心配したが、上司は小さく笑っただけだった。

「ヘリパイロットらしい考えだな、悪くない。准曹士としては…」

「士官としては、違うと？」

「そうだ、私の答えは『備え』だ。不測の事態にも対処できる準備こそが部隊には必要だ」

ヴィルヘルムは断言すると、新しい犯人の拘束と撤収の指揮を取り始めた。

翌日、機動六課部隊長室にはヴィルヘルムの姿があった。

「まずは、わたしが不在中の部隊指揮、お疲れ様やったなく」

「見事な指揮だったと聞いてますう〜」

手のひらサイズの妖精の姿をしたリインフォースが惜しみのない賞賛を送った。はやての補佐でもある人格型ユニゾンデバイスの彼女は、職場では「ちっちゃい上司」として親しまれており、褒められた部下たちは照れ笑いを返すのだが、ヴィルヘルムは表情一つ変えることなく…

「いえ、私の仕事をしたまでです」

と、返しただけですぐに立てこもり事件の報告に入った。おおよそ推測していた通り、犯人グループはジェイル・スカリエツティとは何の関係もないようだ。

分かっていたこととはいえ、はやては思わずため息をついてしまった。スカリエツティはロストログリア関連以外にも数多くの事件で広域指名手配されている次元犯罪者で、本局執務官であるフェイトは何年前前から彼を捜査対象にしているにも関わらず、尻尾を掴ませない極めて厄介な相手だ。本局査察部や教会騎士団の捜査協力もあるが、はやてとしてはそれに頼らず自分達でも手掛かりを掴みたいと思っている。しかし、部下に苦勞をかけた上に全く成果なしとなると自分が情けなく思えてくる。

「ごめん、無駄骨を折らせてしもた」

「いえ、私としては成果が全くなかったとは言えません」

「と、いうと…」

はやては興味を引かれ、説明を促した。ヴィルヘルムは携帯端末を操作し、写真を空間モニターに映し出した。

「これは！」

「犯人グループの使っていたAMF装置です」

映っているのは昨日使われたAMF装置だが、本体のカプセル状部分は、ひび割れや凹みはあるものの間違えなくガジェットドローンI型だった。

「これって、ガジェットじゃないですか！スカリエツティと関係なく

「ないですよ〜」

「ライン、落ち着きい。副長、続けて」

「ラインフォース曹長の言うとおり、この装置は動力装置を抜かれたガジェットI型に市販の動力装置を取りつけ作動させていたものです」

「問題はその出所やろ」

「はい、これらは六課発足前、ヴィータ3尉達が破壊したものを研究用として地上施設に保管していたものようです」

「…横流し」

「はい」

「最低ですよ」

ラインフォースが軽蔑した表情をして言うのも無理はない。組織が巨大になれば当然人の目が届かない所は増えてくる。特に地上は本局に比べて予算が少ない、予算の差は待遇の差。それでもミットチルダの治安が保たれているのは、市民の信頼を得ようと日々働いている陸士隊員の努力の賜物だろう。小遣い稼ぎと称したこの手の横領は、彼らの努力を一瞬で無駄にしかねない。

「ほな、ヴェロツサに連絡して…」

「いえ、それはいけません」

「どうしてですかあ？」

はやてを止めるヴィルヘルムの意図が分からず、ラインフォースが声を上げる。

するとヴィルヘルムはこともなげに言った。

「施設管理の責任は地上本部にあります。このスキャンダルを利用しない手はありません」

ヴィルヘルムに言わせると今はまだこのことを手の中に握っておけば、地上本部や本局地上部門が何らかの政治的圧力をかけてきたときの一手に使えるという。

公開意見陳述会前に「アインヘリアルなんてものに予算を使うよりも、部下の管理に予算を使ったらどうだ」とは、騒がれたくないはずであり、地上本部が適当な人間を処分してもみ消すにしても多少の時

間を稼げると、ヴィルヘルムは締めくくった。

「……」

リインフォースは横領の話聞いたときと同じ表情をヴィルヘルムに向けたが、相手が上官ということもあつて何も言わなかった。

しかし、この部隊でヴィルヘルムの唯一の上司は遠慮しない。

「いけず、腹黒、鬼、悪魔」

「せめて政治的と言っていたら良かった」

「横領犯をそのままにして置く気はないんやな」

「当然です、より相手の嫌がるタイミングで捕まえてやる、と言っているのです」

「やっぱり、いけずやん」

「各隊員が必死の思いで勝ち取った信頼をドブに捨てようとした者です。報いを受けて当然です」

反論するヴィルヘルムにはやてが問いかけると、彼女の部下は強い口調で答える。

はやてにはヴィルヘルムの瞳がキラリツと光ったような気がした。政治的云々はともかく横領犯には本当に怒っているのかもしれない。

「わかったわ、この事件の指揮を取ったのは副長やし、この件はお任せします」

「了解」

はやてに敬礼するとヴィルヘルムは部隊長室を後にした。

06たいせつなこと十

2on1の模擬戦が始まり、バリアジャケットを着たスバルとティアナが、なのはに向かつて果敢に攻めていく。スバルの移動魔法ウイングロードが展開され、戦闘エリア内に足場と死角を作る。その間をピンクとオレンジ色の魔法弾が乱れ飛ぶ。

スバルが急加速しほとんど一直線になのはに迫る。なのははそれをシールドで受け流し、無謀な攻撃を叱る。

「こら、スバル。だめだよ、そんな危ない機動」
「すみません。でも、ちゃんと防ぎますから！」

生徒たちに何か考えがあるように思えたなのはは、ティアナの姿が見えないことにも気付く。ティアナがビルの屋上に現れ砲撃の構えを見せる。どうやら、砲撃のチャージの間スバルが派手に攻めて時間を稼ぐ作戦、…ではなく、ティアナがウイングロードを駆け上がり、短い魔力剣を掲げ直上から飛び下りてくる。屋上にいたのはティアナが作り出した幻影だ。

スバルの拳とティアナの魔力剣がなのはのフィールドに接触、魔力どうしが反応しあつて煙幕のような爆発をおこした。

煙が晴れるとそこには二人の攻撃を素手で受け止めたなのはの姿。なのはは自身の教えを無視し、危険な行為をした二人にショックを受けているようだ。魔力剣を受けた右手から出血していることにも気付かないまま、空ろな声で自分の訓練はそんなに間違っているのかと問う。

問われた生徒達は教官の初めて見せる姿に動揺したようだ。特になのはに怪我を負わせてしまったティアナの動揺はひどく、ほとんど錯乱状態で間合いをあける。

「強くなりたいです!!」

こう叫びながら砲撃魔法を展開するティアナに、なのはが訓練用魔法弾を浴びせ…

「もう、結構だ」

「はい」

ヴィルヘルムの指示を受けて、グリフィスが端末を操作すると、空間モニター映し出されていた映像が止まった。

機動六課部隊長室に、スターズ分隊が呼び出されていた。理由は先日、ティアナがヤンチャしてしまったことが、『口うるさい副長』の耳に入ってしまったのが原因だ。

海上に現れたガジェットⅡ型対処の報告を受けたヴィルヘルムは、その際ティアナが出動待機に入っていなかったことに気が付き問いただした。その際、訓練中の撃墜騒ぎが若干誇張されて報告されてしまったらしい。

これは、はやてやなのは達のミスでもある。なのはやフェイトはケガ人が出たわけでもなく、海上への出撃の後すぐにティアナと和解してきたこともあり、はやての負担を減らそうと正式には報告しなかったし。はやてはなのはと同じく教官であるヴィータから詳しい事情を（家族の会話として）聞いていたので、なのはを信頼し特になにも言わなかった。

10年来の友情がなせる暗黙の連携だが、よそから見ると一歩間違えると危険な事故が起こりかけたのになにも対処していない隊長陣ということになる。四角四面の人間が黙っているはずがない。

「では、諸君。この騒ぎを説明してもらおうか」

「こ、これは作戦で…」

「バカ、あんたは黙っていないさい…」

「…」

「…わ、わたしが説明します」

ヴィルヘルムの要求にスターズの隊員が苦い顔をした。叱られた小学生がなんとか言い訳を考えているような顔のスバル、開き直って言い訳をするつもりがなさそうなティアナ、明らかに反感を抱きつつも怒りを押し殺しているヴィータ、そして、0点の答案用紙を教師に突き返された学生のように落ち込んでいるのは。

ミット人の平均身長より小さな体をさらに小さくしている姿はともエース・オブ・エースには見えなかったが、愛らしくもあつたの

で、はやては密かに「副長、グツジョブ」と場違いなことを考えていた。すると不意にヴィータと目が合う。

(このうるせえのなんとかして)

ヴィータの視線がそう訴えてくるが、今回ののはやての立場は撃墜騒ぎの経緯を聞くために4人を呼び出した上司であるため、「もう、ええよ」の一言で返すわけにはいかない。部下を平等に扱えない者が座るのは、部隊長席ではなくリビングのソファだ。ヴィルヘルムの死角でこっそりと手を合わせると、ヴィータも察してくれたらしくヴィルヘルムを睨みつけるのに専念し始めた。

「…ということです。今回の件は教導の意味を伝えきれていなかったわたしが主な原因です」

「訓練の主眼の徹底は訓練士官の基本だ、なぜ怠った」

「すみません、不十分でした」

ヴィルヘルムは他にも安全規則違反や、意思疎通の不備を指摘していく。それはけして大きな声ではなかったが、その分鋭く、有無言わせぬ口調でありヴィルヘルムの怒りがひしひしと伝わってきた。なのは背に鉄の支柱を入れたような直立不動の姿勢で、ヴィルヘルムの非難を受け止めた。ヴィルヘルムをまっすぐ見つめ、言い訳ひとつすることなく謝罪する姿はさすがに元気がない。

その姿を見て、スバルとティアナの顔がみるみる蒼白になっていく。なのはへの指摘に胸を締め付けられ、非難に心臓を刺されるような気分を味わっているのだろう。この間スバル達はなのはに助け船を出そうとしていたが、ヴィルヘルムが「高町教導官、君の分隊では上官が話をしているときに、割り込んでくる愚か者がいるのか?」と、スバル達を一瞥もせず言ったため押し黙った。

詰問と答弁が数分間続いたあと、ヴィルヘルムははやてにこの件をどう処理するのか尋ねてきた。

「確かに今回は危うくケガ人が出るところやった。しかし、そうならなかった。わたしはこの幸運を、学ぶチャンスを与えられたものと考えます。本人たちも反省しとるようやし、今回は書面に残るような処分はなしの『口頭注意』とします。ただ、スターズ分隊には罰として

環境整備の手伝い、立ち入り禁止地区の清掃を命じます。」

「甘いですね、ランスターに限って言えば2度目の危険行為です」

「んん？なんのことやろな〜」

ヴィルヘルムはホテル・アグスタにおけるミスショットを持ち出したが、はやてはとぼけた。はやても、もちろんティアナが撃った魔法弾が狙いを外し、スバルに直撃しそうになったのをヴィータが助けたと言う報告を受けている。

(まあ、フレンドリーファイアで裁判、ティアナの身分剥奪でな、最悪の結果を想像して身震いをしたのも確かやったけどな…)

チームを必要以上に危険にさらす行為はそれだけで十分クビの理由になる。はやてが心のなかで続けていると、はやての寛大な処置にまで否定的な意見を言ったヴィルヘルムの態度が許せなかったのだろう、ヴィータが文句を言った。

「副長さんよ。あんた部隊長のやることにまで、ケチをつけるってのか」

「それが私の仕事だ、ヴィータ3尉。管理局からはそう依頼されている。それを実行する権限と共にな」

「なんだとー」

ヴィータが眼の色を変えてヴィルヘルムを睨みつける。身長差があるのでほとんど天井を見上げるような恰好になったヴィータを、表情一つ変えることなく見下ろすヴィルヘルム。それが気に入らなかつたヴィータはどうとう殺気を放ち始めた。それを見て、はやてはあわてて仲裁する。

「はいはい、そこまで。ともかく、この件はこれで終いや。ええな、副長」

「…命令ですか」

「うん」

「命令とは発令者が責任を負うべきものです。それをお忘れなく」

暗に何かあっても責任はすべてはやてに押し付けるぞ。と、言っている副長を見てヴィータがまた爆発しそうになっているが、何とかこらえてくれたらしい。解散を命じるとおとなしく隊長室を出ていく、

ドアが閉まる際に思い切りヴィルヘルムを睨みつけていくことは忘れなかったが：

呼び出されていたなのは達を心配したライトニング分隊が迎えに来ていたようだ。扉を挟んで向こうの気配が伝わってくる。合流した2チームが十分離れていったのを確認してから、はやては口を開いた。

「見事な悪役っぷりやなー、ヴィータなんて本気で怒っていたで」

「士官の階級章を付けている以上、彼女も政治を覚えるべきですね。前線で鉄槌を振りまわすだけが部下を守る行為ではありません」

「んくそうやな。でも、なのはちゃんも本気でへこんでたからなあ」
はやてが責めるような顔を見ると、ヴィルヘルムは数秒黙考しグリフィスに「どう見えた？」と尋ねた。グリフィスが正直に「父親に怒鳴られた時のようだった」と答えると一度咳払いをしてから

「では、課長。高町教導官には謝罪を、今回はダシにしてしまったと」

「自分で言ったら、ええやん」

「駄目です」

どうやらこの年上の部下は、自分を嫌われ者のフォローまでしてまわる理解ある部隊長に仕立て上げたいらしい。そこまでして貰わなくとも、自分はそれなりに部下達の支持を得ているつもりだったのだが、ヴィルヘルムからはそう見えていなかったのだろうか？はやてが疑問を口にする、副長はこう答えた。

「課長の支持率を心配する必要はありません。この呼び出しを提案したのはわたしです。非難を被るのも私であるべきです」

「ま、そういうことにしとこか。」

ヴィルヘルムが今回この呼び出しを提案してきた理由は、今回の件で地上本部等から干渉を受けないように、すでに一定の処分と対策を終えているとポーズをとる必要があるというものだった。醜聞は何処からか漏れるものだ、用心するに越したことはない。

「しかし、スバルとティアナをいじめ過ぎとちやうん、真っ青になっていたで」

「そうでしょうね、これで自分達の失策がチームに泥を塗るというこ

とを学んでくれるなら、今後前線に出た時、血気にはやることなく
なるでしょう…」

ヴィルヘルムは若い部下達が学んでくれるなら、多少の悪評など安
いものだと締めくくった。が、言葉の外にこれでも学ばなかった場
合、処分を辞さないと言張しているのだ。部隊運営には必要な処置だ
が気分がいい仕事というわけでもない、嫌われ役を買って出ようとす
るヴィルヘルムを氣遣って、はやてはなるべく明るい声を出して言っ
た。

「大丈夫やって、ティアナは自分が思っているより才能も、思いやりも
ある子や。グリフィスくんもそう思うやろ」

「はい、もちろんです」

「…そうですか。では、新人たちを失わないように少し骨を折るとし
ましょう」

「な、何をする気や…」

この間の立てこもり事件の報告を受けた時と同じ、いけずな顔をし
たヴィルヘルムを見て、若干引きながらはやては聞いた。ヴィルヘル
ムは不愉快な話ですがと、前置きしてから言ってきた。

「昨日、地上本部の知人から、本部長が視察の準備をしているとの、噂
を聞きました」

「視察？いつか来ると思ってたけど、随分早いなあ」

「ええ、査察ではなく視察です。地上本部長独自の行動のようです。
本部長は我々に対する直接的な権限を持ってはいませんが、我々に
対する圧力のつもりか、あるいはレジアス中将への機嫌取りのつもり
でしょう」

六課はガジェットを仮想敵（AMF対応策等）としてかなり多くの
予算を確保している。対してレジアス中将はAMF対応予算を2年
前より却下し続けている。本部長から見ると六課は、政治的に対立し
ている組織が地上に居座っていることになる。嫌がらせのひとつも
したくなってきたのだろう。

「そこでイロイロ手を回して遅らせることにします。いつまでもとい
うわけにはいきませんが、暫くの間は先送りにできるでしょう」

「その間に出勤の1つもあれば、ティアナ達に実績を持たせることができる。きょう以降の実績があれば、視察の際にミスショットやヤンチャのことがばれても、早々突っ込まれない。そういうことやな？」
「そういうことです」

「そういうことなら、わたしもナカジマ3佐に何か事件があったら、うちの子たちを使ってあげてくださいと頼んどくわ」

「いい考えです。それともう一つ」

「なんや？」

「私が動いている最中、『彼女』の世話をロウラン補佐に頼みたいのですが、よろしいでしょうか」

「グリフィスくんには？」

佐官が揃ってグリフィスを見ると本人はいきなりの話で驚いたようだが、やりますと威勢のいい返事をしてきた。

うん、男の子はこうでなくちゃあかん。と、はやては次元航行艦整備指揮官補佐に、グリフィスを任命した。

「ええよ。副長、グリフィスくんを頼みます」

「では、早速動くことします。ロウラン補佐、先に行つて車を温めておいてくれ。私はいくつか書類を取つてから向かう」

そう言つてマイカーのキーを渡すと、グリフィスに続いて隊長室を出ていくヴィルヘルム。去り際にはやてに敬礼すると

「先程はお気遣いありがとうございます」

と、言つて行くのも忘れない。はやては、

(そういうのは、黙つて受け取つておくもんや)

とだけ、心の中で返した。

07 無限の欲望を追い！前

ヴィルヘルムは高町親子を探して、機動六課の図書室にやってきた。いや、この言い方は正確ではない。なのはとヴィヴィオの法律上の関係は保護責任者と被保護者にすぎない。だが、二人の様子はまさに母親と娘だった。今も、ヴィヴィオは児童書のコーナーでなのはの膝の上で絵本を読んでもらっている。本の読み手はスターズの新人二人だ。

児童書の多さにヴィルヘルムは六課が海の所属であることを認識する。普通、地上の部隊では児童書を扱ったりはしていない。

しかし、一度船に乗ると数カ月の間、家に帰ることもできなくなることも多い次元航行部隊などでは、艦内の図書室などで絵本を読みそれをビデオレターとして家族あてに送る局員も多い。六課でのこの絵本の充実はその名残だろう。

ヴィルヘルムがそんなことを考えながらスターズの面々に近づくと、彼に気がついた新人二人が慌てた様子で気を付けの姿勢で敬礼をしてきた。なのはもヴィヴィオを膝からおろすと敬礼をする。膝からおろされたヴィヴィオは少し不満そうだ。ヴィルヘルムは敬礼を返すと用件を切り出した。

「ヴィヴィオの身分証ができた。受け取ってくれ」

「あ、ありがとうございます。でも、呼び出していただければ、取りに伺いましたのに」

「君達はオフシフトだ。緊急時でもない限り、そんな無粋なまねはない」

ヴィルヘルムは身分証の内容（保護責任者や後見人）の確認をする。と屈みこみ、ヴィヴィオに身分証を渡した。身分証は首から下げられるように、ケースに入れられている。

「ヴィヴィオ、この身分証はとても大切なものだ。なくさないようにな」

「あ、ケース付きよかったね、ヴィヴィオ」

「ホントに、大切なものなんだから、大事にしなきゃダメよ」

ヴィルヘルムに続いてスバルとティアナが言ったが、ヴィヴィオは身分証の意味がわからなかったようだ、不思議そうにケース入りのカードを見つめている。その様子を察したなのはが部隊の家族になった証しだと説明すると、喜び札を言ってきた。

「ありがとう、ノッポのオジサン」

ヴィヴィオの一言に、星達は氷結呪文をかけられたように凍りついた。

「すすす、すみません副長。ヴィヴィオ、『お兄さん』ね」

「ヴィ、ヴィヴィオ、そんな失礼なこと言っちゃダメ」

「ななな、なんてことを」

慌てふためくなのは、スバル、ティアナだったが、ヴィルヘルムは気にするなといい。「私は子供にオジサンと言われて目くじらを立てるほど年を取っていない」と主張した。それを聞いてスターズが口元を引きつらせていると、「取っていない、そうだな」今度はかなり強く言った。あわてて首を縦に振るスターズ。その様子を疑問に思ったヴィヴィオが口を開く。

「おじ……、副長さんはママ達よりも強いのか？」

「ん、偉くはあるが、強くはないな」

「強くないのに、偉いの？」

「ああ、偉い人というのは弱くても勝つ方法を知っているものだ。それに私ならそもそも戦わなくても勝てる」

「??？」

ヴィヴィオは理解できなかつたようで、首をひねっている。ついでにスバルまで首をひねっている。ヴィルヘルムは「理由はよく考えるように」と言い残して図書室を後にした。

「お疲れさんや、ノッポのオジサン」

その日の午後、部隊長室を訪ねたヴィルヘルムに開口一番にはやてが言ってきた。隣にいるフェイトが袖を引っ張っているところを見ると、はやての軽口を止めようとして失敗したというのが見て取れる。しかし、ヴィルヘルムは表情ひとつ変えず……

「あのくらいの子供にはそう見えるでしょう。私もあのくらいの頃には27歳はそう見えませんでした。まあ、子供の言うことです」

「ほほう、認めるん」

「ええ、実際この年になってみると20歳だったころは、ホントに子供だったと思うようになりましたが……」

「そ、そうなん……」

はやては本局や地上部隊のほかの幹部から言われていることを部下に言われると思っていなかったのだろう、ヴィルヘルムの方も本日2度目で虫の居所が悪かったのかもしれない。はやては笑顔のまま（ほほを引きつらせて）、ヴィルヘルムは無表情のまま（眉がピクピク動いている）見つめあう……。

「……そうだ！ お茶にしよう！ うん！」

2人が怖くなったフェイトは強引に話を変えた。

ソファアに座り、フェイトの入れたお茶を啜ると怒りの衝動はとどまらず引っこんでくれた。心のメモ帳には副長の暴言をしつかりと書き留めておくのも忘れなかったが。

「そういえば副長」

「はい、課長」

「ヴィヴィオになのはちゃんに勝てるゆうたらしいやん。副長も六課最強決定戦に参戦する気なん」

六課最強決定戦とは、最近、曹士の間ではやっている話題の1つだ。きつかけは些細なことだったようだが、話がどんどん膨らみ六課で最強は誰か？ という話題に発展していったようだ。はやて自身もティアナに何度か聞かれたことがある。

「ええ、少なくとも勝つ見込みはあります」

「へえ、どんな手を使うん」

話をふったのははやてだが、フェイトもこの手の話には興味があるらしい。若干、体が前のめりになる。ヴィルヘルムは仮に試合をするならと前置きしてから……

「彼女の負傷経験を利用し、後遺症の検査という名目で入院させ、不戦

勝を狙います」

実戦だったら同ランクの魔導師を2人雇って二人同時にぶつけますと、ヴィルヘルムは続けたが誰も聞いていなかった。フェイトはガクツと頭を下げ、はやてはあきれた顔をした。

「権謀術数そつちの話？」

「戦わずに敵を制する、戦略の基本です」

「金持ち喧嘩せず、ホントのことやったんやね」

「ほう、何処の世界の言葉ですか？」

はやてが第97管理外世界の言葉だと投げやりに答えながら、ヴィルヘルムが20歳で入局するまで、友人と会社経営をしていたという変わった経歴の持ち主だったことを思い出した。ガチンコ勝負にはあまり重きを置いていないようだ。

（そうやな、民間経営者から見たら予言やスカリエッティはどう映るんやろ？ 公開意見陳述会も近いことやし、話を聞いてみよ）

騎士カリム、クロノ提督、そして、はやてはスカリエッティは公開意見陳述会を襲撃すると予測し動いている。そのため、警備は地上の部隊だけで行うと主張している地上本部の意見を押しつけ六課のフロントを警備にねじ込み。なのは、フェイトの両隊長をはやての付添名目で参加者リストに潜り込ませているが、未然に防ぐことができるなら、それが一番いい。正直、行き詰りつつある捜査に新しい視点が欲しかったところだ。ヴィルヘルムの用件がすんだら聞いて見るのもいいかもしれない。

「そいや、副長の用件は？」

「ちよつとした報告です、次元航行艦整備のマニュアル化が終了しました。今後は、業務幹部かロウラン補佐の指揮で十分お役にたてる状態を維持できます」

「そうなん、もうちよつと先になると思ってたけど」

「頼りになるようになってきたのは、フロント陣だけではないということですよ」

数日前、フロント陣はナカジマ3佐の部隊に随分と褒められていたそうだが、事務方の方も頑張ってくれている。地味で目立たない仕事

ではあるが、この間の地上部隊の査察を乗り越えることができたのは、六課の事務方が不備やミスをしなかつたおかげであることは間違いない。六課最強決定戦などという話題で盛り上げられるのは、仕事に余裕が生まれてきた証拠でもある。はやては部下達に感謝しながら、ヴィルヘルムに質問をした。

「副長、その戦略家としての意見を聞きたいんやけど」

「と言いますと」

「騎士カリムの予言のことや」

「……そのことですか。正直いいんですが、いまだに半信半疑です」

ヴィルヘルムは珍しく表情を崩し、乗り気ではなさそうな顔をした。彼は地上出身の士官局員がそうであるようにレアスキルをあまり重要視していない。六課への配属に同意したのも、AMF対策に対して予算すら組まない地上本部よりまし程度の考えからだ。

ヴィルヘルムはエースやレアスキルを優秀なモノは優秀と認める柔軟性も持っていたが、それら希少で換えのきかない特定の才能に頼るのは嫌っていた。人間に絶対はない。エースやレアスキル保有者が病気や事故、プライベートの事情などで突然活躍できなくなることは往々にしてありうるからだ。換えの利かない才能に頼った組織は脆弱であるこれが彼の持論だ。もともと、はやてはだからこそ六課にはこの男が必要だと考えているのだが……

「理由を聞かせてもらってええ？」

「他の方々とそう違った意見もっているわけではありません。確かにスカリエツティの戦闘機人は強力です。ガジエツトと連携させ組織的に運用できるなら、地上本部に大打撃を与えることも可能でしょう」

はやてとフェイトは頷いた、AMFに不慣れた地上部隊では組織的な抵抗すらできない部隊もあるかもしれない。ヴィータが教官として出張するのは、AMFに対応できる部隊を増やす意味合いもある。「しかし、あくまで個人の戦闘能力を超えません。次元空間に浮かぶ本局を落とせるとは思いません」

「でも、乗っ取ることはできるかもしれませんよ。あちらにも召喚士

「がいますし」

フェイトは可能性の1つをあげてみたがあまり本気で言ったわけではなかった。本局にはテロに備えて転移を妨害する対策が取られているので、転移を使えるのは限られた場所でしかない。転移してきただころをエース級数名と武装隊で包囲してしまえば、戦闘機人と言えひとたまりもないだろう。次元航行船を乗っ取り突入してくる可能性もあるが、テロリストに乗っ取られた船というのは、あまり大きな声で言えることではないが、撃ち落としても罪には問われない。

ヴィルヘルムもフェイトが本気ではないことに気が付いていたので、「その可能性は低い」としか答えなかった。

はやては質問の仕方を変えてみることにした。

「副長がスカリエツテイの立場だったとしたら何を『備える』?」

「それは奴の目的によります。テスタロッサ執務官?」

「はい」

「君が一番奴について詳しいな、奴の目的はなんだと考えている?」

「あの男はドクターの通り名のとおり、生命操作とか生体改造に関して異常な情熱を持っています。命をもてあそぶ生体兵器の開発と運用自体が目的になっています」

フェイトが答えながら美しい顔をゆがめる。彼女にとってスカリエツテイの行為や技術はもつとも嫌悪すべき犯罪なのだろう。

フェイトの話聞いてヴィルヘルムは会社を経営していた時のことを思い出す。奴は技術者。技術開発部のスタッフや自分で発明したものを持ちこんできた発明家たちと同じ、自分の技術力を追求することにしか興味がない。

ならば、奴の欲しがるものも彼らと同じものだろう、すなわち研究資金と研究できる環境だ。しかし、スカリエツテイはすでにこの二つを確保しているように思える。

では、次に欲しがるものは、彼らは何を欲しがった? そうだ、公の評価だ。発明家は自分の発明を認めさせるため、あらゆる方法でデモンストレーションを行って見せる。高い評価を与えざるを得ない方法が効果的だ。騎士カリムやハラオウン提督は万全の警備が敷か

れている公開意見陳述会を襲撃すると予想している。確かにいいデモンストレーションになるだろう、だがそのあとはどうなる？ 課長はスカリエツティとレジアス中將は通じていると、ほぼ確信しているようだが、陳述会を襲撃しようものなら間違いなくその繋がりはなくなる。中將は研究所を抑えにかかり、今まで使用していた研究環境も使用できなくなるに違いない。そうなった時の用意、今、スカリエツティが準備しているであろうものそれは……

「研究所……」

「研究所？ 今更そんなん欲しがるやろか？」

思わず口から洩れた言葉に、はやてが反応する。ヴィルヘルムは自分の考えを2人に説明すると、『スカリエツティは現在研究所を移し替えている最中』と推論を告げた。

「それも地上部隊に手出しされないほど秘密裏の場所か、あるいは次元航行可能な庭園クラスのもんです」

「……時の庭園」

フェイトが思わず口にする、ヴィルヘルムは何の事かと思ったが、すぐに彼女の経歴を思い出す。

「ああ、すまなかった。配慮に欠けた」

「いえ、捜査とは別ですから」

謝罪され、フェイトはかえって慌ててしまった。ワタワタと手を振りながら気にしないで下さいと言いながら考える。確かにこれまでの調査は、ガジェットや戦闘機人の方に目が行き過ぎていて、生体部品や電子パーツの流れを洗っていた。副長の読みが正しいならクラナガン周辺で、庭園や次元航行艦の部品や材料の流通を調べなおす必要があるだろう。しかし……

「フェイト執務官、どうやら調べられそうか？」

「ちよつと人手が足りないかな、ガジェットや生体パーツ周りだけでもかなりの数のダミー会社を経由していることがあるから、その確認作業だけでも時間が掛っているんだ。庭園関係までとなると捜査指揮を執れる人がいないと……」

「それならちよつどいいのが居るやん」

はやてはヴィルヘルムを指さす、

「私ですか？ 私は捜査に関しては門外漢です」

「現場捜査に関してはやる、お金や物資の流れ、書類に不審な点がないかを調べることについては専門家のはずや」

「……」

その通りだったがヴィルヘルムのそれだけが彼の仕事ではない。

そのことを指摘したが、はやては怯まなかった。

「さつき、手のかかる『彼女』の世話は他の業務幹部でもできるようにしたゆうたやん」

「ええ」

「なら、副長の才能がぬけても大丈夫なはずやろ」

「了解」

持論を盾にされヴィルヘルムは観念し、すぐに始めますと席を立った。

ヴィルヘルムの調べた時空航行船資材や研究器材の購入者リストを見て、はやてがまずしたことはため息を付きそうになるのを堪えることだった。目の前にぎっしりと名前の書かれた空間モニターが並びヴィルヘルムの顔が見えない。

捜査班の首脳陣は会議室に集まっていた。執務官服のフェイトは深刻そうな顔をしている。地上部隊服のシャリオ、ギンガは苦笑い。本局所属を示す青い制服の上から白衣を羽織っているマリエル技官は開いたメモ帳を片手にどうすべきか思索している。

「立派な名簿やね、ミッドチルダ会社凶鑑ができそうや」

「この中から管理局と多少なりとも繋がりがあり、地理的な問題を考慮しますと3分の2になります」

「ん〜」

「次元航行船や庭園に搭載可能な器材ということを考慮しますと、もっと絞れますよ」

マリーが技術屋の視点から幾つか条件を絞り込むと、幾つかの空間モニターが電子音と共に消えていき、ようやくヴィルヘルムの顔が

見え始めたが副長はいつもの無表情だった。「少しぐらい困ったような顔をしたらどうや」と、理不尽なことを思いながら捜査方法を考えた。新しい情報が入ったのはいいが状況はあまり変わっていない、この量だとともに調べていたら六課が解散するまで調べていても終わりそうにない。騎士カリムやクロノ提督に調査依頼をしても、彼女達の動かせる部隊にも限度があるので、数カ月はかかってしまいそうだ。

「ナカジマ陸曹」

「はい、ヴィルヘルム3佐。ギンガで結構です」

「では、ギンガ陸曹。キミの持ってきた生体部品を扱っている業者のリストと、テスタロッサ執務官のリストをクロス検索しろ」

「はい」

出向してきたばかりのギンガが若干緊張した面持ち（妹のスバルから副長は怖いと聞かされていた）で、データを整理すると数十件が該当。公開意見陳述会まで間に合うかどうか微妙な数だ、もう少し絞り込める要素が欲しい。

「課長、少々時間を頂いて宜しいでしょうか？」

「ん？」

「実は人と会う約束をしています」

「女のひと？」

「こんな時にだれと会うのかと、はやてが茶化すと「御冗談を」と返してから。

「以前、ある地上部隊の捜査班長に貸しを作っていたので、取り立てに行ってきます」

「いけずせいへん」

「私は対等な交渉だと考えています」

「わかった、こっちは通信ログを使って絞り込んでみる。もしかしたら、何かしらの情報が残ってるかもしれないへん」

「分かりました」

「さ、みんな、可能性の高い順に片っ端や」

「了解」

クラナガンの中心部から少し離れた住宅地の公園に背の高いビジネスマンがやってきた。下げている鞆のほかには、脇に挟んだスポーツ新聞と缶コーヒー、どうやら休憩を取りに来たようだ。ビジネスマンは公園の端に背もたれのないベンチを見つけると、ネクタイを緩めながら近づいていく。ベンチには先客がいた。通信端末で競馬でもしているらしくビジネスマンには見向きもしない。ビジネスマンは先客との間に缶コーヒーを置いてパーソナルスペースを主張し、新聞を読み始めた。

「陸上警備隊部隊長、贈賄容疑で逮捕か。逮捕者が1名だけってことは、早々に周りから捨てられたなこの部隊長」

「無能なくせにゴマスリで出世したようなやつだからな、自分を優秀と勘違いして現場に口を出してくる類のバカだった。アンタから話を貰った時は思わず笑っちゃったよ」

「そうか、だが無料ではないぞ」

「わかっているさ、三佐殿。借りは返したからな」

「ああ、これで私達は赤の他人ということになる」

「顔も名前も知らないが、連絡方法だけは知っている間柄だ」

先客が立ち去るとしばらく時間がたってから、ビジネスマンは缶コーヒーを持ち立ち去った。

『バックヤード0からグラウンド1、グラウンド3へ、状況終了。車で落ち合おう』

『了解』

ビジネスマンが立ち去った数分後、公園の出入口近くの芝生で昼寝をしていた若者と、別のベンチで休憩をしていた作業員風の男が公園を出て行った。

ビジネススーツから制服に着替えたヴィルヘルムが自分の私有車に戻ると部下達はすでに戻ってきていた。

「お疲れ様です、副長」

「うつつす！」

「ああ、監視任務、御苦労」

運転席に座り礼儀正しく挨拶してきた男は、見るからに逞しく歴戦の兵士のように見えた。見た目道理の古兵で魔力はさほど高くはないが短い詠唱で魔力を高周波等様々な物理エネルギーに変換することを得意としており、新兵からの信頼も厚い男だ。対して、助手席に座っている若い男はあまり品のいい風貌ではない、さすがにヴィルヘルムの前では身なりを正してはいたが、服務規則違反もなんのその普段は制服を着崩し自称俺流を語っている。中距離からの機動射撃を得意とするガードウイングで、先程からハンドルを握りたくてウズウズしているらしい。

「おやつさん、運転、疲れてませんか？」

「走り屋に変わるほど疲れていないさ」

ヴィルヘルムは車に乗り込みながら、缶コーヒーを取りだすと、貼り付けられていた記録媒体を剥がす。懐から出した懐中時計型のデバイスに読み込ませるとあるリストが表示された。

「ほお、面白い。フロイライン、リストを六課に」

懐中時計型のデバイスが女性型の無機質な合成音で返事をする。

「車を出してくれ」

「行先はどちらで？」

「次元世界で最も働き者の公務員に会いに行く」

「は？」

「国税局だ」

ヴィルヘルムから六課に送られてきたリストは、地上本部が使っているタレこみ屋（情報提供者又は仲介人）のリストだった。罪を犯した者の中には、管理局活動への参加や情報提供者になることで、刑の軽減などの司法取引をする者がいる、そういった者のリスト。はやても数人の名前は知っていたし、ロストログア密売の情報を受けたこともある。

早速、今まで絞り込んでいた企業と通信を取った記録がないか、検索を支持する。その結果を待ちながら想像する。

もし、10年前、わたしと家族達が深くかかわった闇の書事件。解決に導いたのがアースラチームではなかったら？ わたしと家族達は未だにこの類のリストに載っていまより危うい立場で働いている……。もしそうなら、わたしは今と同じ気持ちで管理局を見ることができたのだろうか？ ぼんやりとも想像できないのはわたしが周りの人に恵まれているからなのだろうか？

「はやて?」

「へ、な、なんや、フエイトちゃん」

自分の友人の声で、想像迷路から抜け出す。フエイトは怪訝な顔をしていたが、捜査方針でも考えていたのだろうと考えたらしい。すぐに報告に入った。

「検索結果がでたよ。それと副長から通信」

「うん、繋いで」

空間モニターに映ったヴィルヘルムはすぐに口を開きかけたが、はやての顔を見ると思うところがあつたのか黙った。はやてはなるべく明るい声を出すように努めた。

「んん、どうしたん。わたしの顔に見とれてたん?」

「あなたが黙っているのなら、それも悪くはありません」

「ほほう」

皮肉が返ってきたので、怒った顔することができた。副長は口が過ぎたと謝罪してから、国税庁の協力を取りつけたことを報告してきた。はやてが企業とのつながりの確認を取れた名前を伝えると、税金の支払記録から怪しい収入がないかなどを調べ始める。

(やつぱり、わたしは恵まれているんやな……)

お金に関する作業はヴィルヘルムにとって得意分野のようだ、幾つかの名前が浮かんでくる。

「あれ?」

「どうしたの、シャーリー」

「この所得税の入金記録ですけど、この人とこの人アクセスしている端末が同じなんです」

「ホントだ、会社も住所も違うのに」

通信ログを洗っていたシャーリーとフェイトが声を上げた。はやては端末の情報をヴィルヘルムに送ると同じ端末から支払われた税金がないか調べさせた。

「この端末の持ち主は随分羽振りがいいようです。名義は変わっていますが1年間に豪邸にマンション、高級車、大型クルーザー、宝石の購入の際、資産税を随分払っています。タレこみ屋の収入では無理な額です」

「シャーリー、一番新しい端末の使用記録を探して」

「もう、やっていきます……、ありました！ 昨日その豪邸から！」

フェイトが豪邸の持ち主の名前で前科者リストを調べると、密売の容疑で逮捕歴が出てきた。これで参考人として身柄の確保ができる。

「この男の身柄を確保、自宅、クルーザー内はもちろん、勤め先のロッカーまですべて家宅搜索する。フェイト執務官は令状を！」

「わかった」

「副長、捜査班から一人回します。合流したのち勤め先に向かってや」「了解」

08 無限の欲望を追い！後

「副長、マリエル技官、到着まであと3分です」

「ああ」

「了解です」

ヴィルヘルム達は、捜査令状をもったマリーと合流すると、タレこみ屋の勤め先に向かった。住所によるとタレこみ屋の勤め先は住宅地の民家だった。現職業は家庭用デバイスのサポート係となっている。

「地域密着のサポート態勢ですな。デバイスの操作が分からなくなったら、すぐに駆けつけてくれるとは…」

「駆けつける？何言ってるんスか、おやつさん」

「む？容疑者はそういう仕事をしているのだろう」

「はく、おやつさん、家庭のことは全部奥さんに押し付けてるっしょ」
「??？」

今日日の中年世代のグランド1には、何を言っているのか分からない様子だった。助手席のグランド3に大げさな身振りで、「ダメダメっすね」と言われているグランド1。見かねたマリーが「家庭用デバイスの操作方法が分からなくなった時、遠隔操作で手助けしてくれるサービスのことです」と、説明してあげると驚いたような顔をしてから、「こんど家庭用デバイスが動かなくなったら、カミさんに自慢しよう」と、嬉しそうな顔をする。マリーは「奥さんは知ってるんじゃないかな」と、思っていたが、嬉しそうな顔をしているグランド1に指摘する気にはなれず、愛想笑いを浮かべて誤魔化した。グランド3を見ると彼も肩をすくめている。仕事前のリラックスした雰囲気が出る、そこに野暮なアラームが鳴る。

『こちらロングアーチ0、バックヤード0聞こえてる?』

「こちらバックヤード0、どうしました」

『そっちの目的地にガジェットの反応が出た!』

「グランド1!!」

「了解!」

グラント1が手元のスイッチを押すとオプションで装備されている警告灯が現れ、サイレンが叫び声をあげる。前方の車両が道を譲ってくれるのを確認すると、グラント1はアクセルを踏み込む。

『住民の避難は地上警備部にやってもらおう、副長たちはガジェット排除を！』

「了解！現在現場に急行中。1分以内にたどり着きます」

車が急ブレーキで道路にタイヤ痕を残しながら止まる。荒事に慣れていないマリーが悲鳴を上げたが、気を使う様子もなく武装局員の二人が飛び出して行った。ヴィルヘルムは車のオートバリアを起動させると、マリーに外に出ないように命令した後、車を降りた。

グラント1は建物の状況を確認して少しだけ安堵した。どうやら、ガジェットは無差別に暴れ回っているわけではないらしい、タレこみ屋の勤め先の建物内にいることはデバイスのセンサーでとらえていたが、外に出てくるう心配がない。建物自体は何の変哲もない民家に見えた。二階建てで地下駐車場、少々広めの庭……。羨ましい。退職金を貰ったら、こんな家を建ててみたいとグラント1は思った。

玄関の手に魔導師が揃い、グラント3が前、グラント1が後ろに立つ。ヴィルヘルムは援護と結界を張るため敷地の入り口に残った。

ヴィルヘルムが結界を張ると同時に、グラント3が叫んだ。

「管理局機動6課だ！今すぐここを開ける！」

反応はない。戦闘機人の動力炉反応その他もなし。建物内部にはガジェットだけと判断し、グラント3はドアを破った。玄関に入っただけで居間になっていた。そこにI型が2機。

グラント3は移動魔法で、そこが地面であるかのように壁を走り、I型の注意を引き付ける。案の定、I型は派手な動きを見せたグラント3を目標に定めたようだ。狙いを定めようとグラント3に向きを変えようとして、そのままバチバチと火花を散らす。ガジェットは装甲内部で小さな爆発を起こし、そのまま機能を停止する。

グラント3が壁に垂直に立ったままグラント1を見ると、グラント1は黙って親指を立ててきた。グラント3が陽動、そのすきにグラント

ド1が指向性の電磁波でガジェットのエレクトロニクス部品を焼き切る。グラウンド分隊の対ガジェット戦術の一つだった。

二人がそのまま1階のクリアリングをしようとした途端、ガラスが砕けるような音が2階から聞こえた。駆け上がると、3機のI型が2階ベランダから外に飛び出そうとしているところだった。咄嗟に魔力弾を連射したが位置が悪く、I型のAMFが重なり合うような位置取りになってしまった。一番近くの1機は破壊できたが、他の2機には多少のダメージを与えただけで逃げられてしまう。

ベランダに駆け寄ると、何処にいたのか男が一人I型に追われて、ヴィルヘルムに助けを求めているところだった。

ヴィルヘルムは走り寄ってくる男に対し、腰を落とすと男の顎を掴み上げるように左手を突き出す。男は気持のいいぐらい見事にひっくり返った。荒っぽいのがこれは武装隊でもよく訓練される一手だった。人質救出作戦などでは、パニックを起こした人質が隊員に抱きついて、隊員ごと危険にさらされることがある。

男をひっくり返したヴィルヘルムは懐中時計型のデバイスをI型に向ける。

「ガンド・ランツァ」

無機質な女性の声が復唱し、ヴィルヘルム周囲に赤褐色の光球が4つ発生する。

「ファイエルツ！」

手にしたデバイスを振りおろすと同時に射撃魔法が発動し、呪いの槍が唸り声をあげながら目標に向かって疾走する。AMFは槍を多少減衰させたようだったが、ダメージを負った本体を守るほど強くもなかった。I型は今度こそ破壊され崩れ落ちた。

I型の動力反応が消えたことを確認したヴィルヘルムは懐中時計を倒れたままの男に向けた。

「さて、お前は誰だ。ここの持ち主ではないはずだ。なぜ、センサーに反応しなかった？」

「あ、ああ、あ」

怯えた男はあわあわと降参のポーズを取った。

マンションに向かったギンガは不機嫌だった。いきなり隊長戦をやることになり驚きはしたが、六課の訓練で疲れているわけでもない。捜査活動に参加していることに不満があるわけでもない。むしろ、六課の取り扱っている事件は自分の家族にかかわる事件なので捜査協力は望むところだった。問題はさつきから自分を含めた目につく女性全てを口説こうとしている同僚だった。

肩まで伸ばした長髪、整った顔立ちをしていたので第一印象はそう悪いものではなかったのだが、今となつてはそう思ってしまった自分自身が腹立たしい。

同僚はマンションの受付嬢に美麗参句を投げかけ、上手いことデートとタレ込み屋の部屋の鍵を貸してもらえよう約束を取りつける。受付嬢がカギを取りに行っている間、同僚、アース3はこちらの視線に気がついたのか、会心の表情で手を振ってきた。ギンガはムツとして睨んでみたが効果はない。

普段なら口説いてくる男性局員（部隊長の父を恐れな度胸がある者もいる）を適当に話を合わせてあしらう方法ぐらい心得ていたが、これまで、捜査現場に向かう時に口説いてきた分別のない者は流石にいなかった。しかも、こちらのマンションにもガジェットが出現する可能性は少なくない。それなのにこの軽さ。ギンガにはどうにも不真面目に見えてしまい。同時に、父や母が人生と命を賭けてきた仕事をバカにされたように気がしてならなかった。

何を思ったのか、アース3が相棒のアース2を受付に残しこちらに歩いてくる。シャーリーがこちらに気を使って、アース3との間に入るように声を掛けてくれた。

「どうしたんですか？」

「ああ、シャーリーちゃん。大したことじゃないよ」

受付嬢の代わりに鍵を持って現れたのは管理人のお爺さんだった。「年上の相手はあいつに譲ってやることにしているんだ」

タレこみ屋の部屋がある階に向かうためエレベータに乗り込んだ

後も、アース3は相変わらずだったがシャーリーがギンガとアース3の間に入った。シャーリーはこの男の軽い所は気にならないらしく、居酒屋で酔っぱらいを相手にしている看板娘のようにアース3をあしらっている。

アース2は「先程、アレが何か言っていたようだが相手にしないでくれ。アレは年上には怒られたことしかないのさ」と、皮肉を言うてからは真剣な顔をしたまま黙った。想定される事態を真剣に考えているようだ。

なんとも対照的な姿に本当にこの二人は相棒同士なのだろうか？と、疑問に思ったが、エレベーターが目的の階につくとそんな考えも吹き飛ぶ。

チーンと伝統的な電子音をたててエレベーターが扉を開くと、二人は一瞬でバリアジャケットを装着し、音もなく目的の部屋まで移動する。アース2は室内で振り回すのが不利になる槍型デバイスを短い手槍に変化させ扉の右側に、いつの間にか、おしゃべりをやめ真剣な表情をしたアース3は左側に張り付いた。手には愛用の柄を切り詰めた杖が握られている。

不覚にもギンガは二人から一拍送られて突入の準備を整えた。アース2は手信号で命令を伝えてくる。内容はアース2が右回り、ギンガとアース3が左回りでクリアリングをしていくという指示だ。不真面目なアース3と組まされたことには不満だったがギンガは領いて承諾した。

キツチン、バスルールと順にクリアリングしていき、次は寝室だった。アース2の様子を見るとこの寝室が最後になりそうだ。ギンガがドアノブに手を置くと、アース3がギンガの肩に手を置く…
パンツ

アース3が肩を叩くと同時に、ギンガはドアを素早く開け室内の右側に向かって構えた。アース3が左側を固める。

見えたのは何の変哲もないクローゼットとベッド。異常なし。

「ク…」

異常なしの報告をしようとした瞬間、左側から影が飛び出す。影は

クローゼットの扉を乱暴に開けると中に杖を向ける。…クローゼットの中は空だったが、ガジェットや人間が隠れるには十分な大きさがあった。

「あ」

ギンガは自分の失敗を認めた。クリアリングを行った後に、思わぬところに隠れていた犯罪者やトラップが、武器を持たない捜査班や鑑識班を傷つけることがあると、何度も聞いたことを今更になって思い出した。事件現場に出るのもこれが初めてというわけではなかったのに…。

コツンツ と、衝撃を受けて振り向くと、逆さまに槍を持ったアース2がいた。どうやら全部見ていたようだ。

「我々は、出入り口を警戒する」

それだけ言うと、シャーリーを呼び家宅搜索を依頼し、ベランダに向かう。それを追うようにアース3はすれ違いざま「シャーリーちゃんの手伝いよろしくね」と、言葉とウイंकを投げて出入口に向かった。失敗は働きで返せということらしい。

小さな可能性にも油断せず、後輩のミスも念頭に置いて行動する。魔法の腕が自分より劣っていても、魔力量が少なくとも彼らはプロだった。…自分はどうかだろうか？

ギンガは恥ずかしくなり、両手で顔を叩く。

（気合と考えを入れなきなきや…、彼の評価から…）

「どお、ギンガちゃん。惚れなおした？」

少なくとも、仕事上の評価は。と、ギンガは思った。

タレこみ屋が購入した豪邸は、クラナガン東部にあった。首都で働く人々のベットタウンよりさらに郊外、立地条件はミッドの富裕層ならば簡単に手が届きそうな地区だった。が、完璧な区画整理がされ、一戸建ての建物がほとんどないクラナガン中央区の人や、日本を基準にすると十分に豪邸と呼べるサイズの家が建っていた。大きな庭にプール付き、14LDKの邸宅、普通の家族構成なら掃除するのも大変そうな家だったのだが…

(この程度の家だけなら、タレこみ屋の収入でもおかしくはないか…) 家族の大半が管理局の高官、ミツドの富裕層フェイトはそう思ったが、口には出さなかった。あまり自覚はしていなかったが、自分はあまり普通の金銭感覚をしていないと、以前はやてに注意されたことがあったからだ。

「うわ、でっかい家。どんな悪事を働いたらこんな家を建てられるんだ?」

一緒に連れてきた捜査班の新人の少年が口にしたのを聞いて、フェイトはヒヤリとした。口に出していたら白い目で見られていたかもしれない。それが顔に出で、交替部隊の二人が怪訝な顔をする。

「どうしました?」

「あ、えっと、あんまり玄関前で話すと犯人に聞かれるんじゃないかなって…」

「はあ…」

苦しい言い訳だったが、幸いにもそれ以上追及されなかった。建物にエリアサーチをかけたから、交替部隊の二人にクリアリングを頼む。待つこと数分、二人はフェイト達を招き入れると、出入り口を封鎖するために玄関に残った。

まずは、タレこみ屋が昨日使っていた端末の中身を調べる。通信記録や、アクセスしていたホームページ、買い物記録…。しかし、タレこみ屋の通信記録がほとんど残っていない。新人が残念そうな顔で口を開く。

「この端末は買い物専用に使っていたみたいですね」

「うん。でも、過去にアクセスした事のあるサイトにコミュニケーション系のサイトがある」

「ええ、それが?」

首をひねる新人をしり目にフェイトははやてに連絡を入れると、そのコミュニケーション系のサイトから、タレこみ屋のログを検索してもらった。すると、オリヴィエ02というハンドルネームの人物と盛んにチャットを行っていたようだ。

「はやて、交信内容をこっちにも回してくれる?」

「ええよ、何か思いついた?」

「うん」

転送されてきた内容を見て、新人が口笛を吹く。

「随分、積極的な聖王（オリヴィエ）さまだな」

「バチがあたるよ、そんなこと言うよ」

「オレ、聖王教徒じゃないんですよ」

そんな会話をしながら、チャットのログを確かめる。この二人が最初の接触を持ったのは1年ほど前、新人の言う通りオリヴィエ02からタレこみ屋に接触してきたようだ。会話の言い回しや内容から判断すると、オリヴィエ02は女性で20歳前後、かなりの教養を身に付けているようだ。そして、数ヶ月前にオリヴィエ02からの連絡は止まっている。

「ふられたのか?こいつ」

「違うんじゃないかな、その前に連絡方法を変えるって書いてある」

「そうですね、男の方はそのあとも暫くチャットで連絡を取ろうとしていたようですけど…、内容が…、なんつうか…、デートの約束と感想っぽいし…」

多感な年ごろの新人は気まづくなってきたのか、話し方がだんだんたどたどしくなってきた。エリオもこうなるのかな?と、新人の反応にフェイトが微笑むと、新人はどう受け取ったのか、顔を真っ赤にして話を変えてきた。

「こ、これからどうします。違う連絡方法なんて分かりませんよ!」

「うん、でも案外古典的な方法かもしれない」

フェイトが新人を連れて玄関に戻ると、交替部隊の二人が弓と斧槍を片手に立っていた。斧槍を持った頬骨の高い女性、グランド2が声をかけてきた。

「どうしたんです?」

「ちよっと探し物」

フェイトは手袋をはめると、屈んで観音開き式の扉と床との間の隙間を調べる。屈んだだけではよく見えなかったので、フェイトは膝をつき、床すれすれに顔を近づける。するとちよっどボリユームも形も

申し分ない尻がつき上げられる体勢になった。

捜査班の新人は真つ赤になって目をそらした。が、弓を手にしたグラント4は無言のまま左目に向けた単眼鏡（こちらもデバイス）に手をそえる。単眼鏡が反応し倍率が上がっていく途中、グラント2が見ているのに気が付き、咳払いをして視線をそらした。

グラント2はニヤリと意地悪く笑ってから、フェイトに尋ねた。「なにか見つかりそう?」

周りの様子に気が付いていないフェイトは、ピンセットで何かをつまみだしている最中で、そのまま答えた。

「うん、あった」

フェイトが扉の隙間からつまみ出したのは、紙きれだった。グラント2から見ると紙屑にしか見えなかったのだが、フェイトは慎重に証拠用のビニール袋に入れる。

「なにそれ」

「便箋の切れ端だよ。きつとタレこみ屋は手紙でやりとりしていたんだ」

「手紙ね…。学生時代、授業中にチャットのし過ぎで、教師にデバイスを取り上げられた時以外、書いたことないわ、でも…」

「でも?」

「手紙なんて証拠になるようなもの残しているとは思えません。先生、どうしたらいいでしょうか?」

不良学生時代を思い出したグラント2がユーモアたっぷりに聞くと、フェイトは一瞬キョトンとした。が、クスリと笑い、教師口調で答えた。

「いい質問だね。考えてごらん。手紙を隙間から入れるには、送り主は直接ここに来る必要があるのだよ」

「具体的には?」

「聞き込みをしよう。ここは人口密度が低い地区だからよそ者が来れば、目立つはず」

早速、はやてに報告して、聞き込みを開始しようとする、はやてから追加情報がもたらされた。

『黄色いアリアンロッド Type—33に乗った女性を探してほしいんや』

「アリアンロッド Type—33? たしか、今女性に人気のある車だよな」

自分でも車を運転し、また車種にも詳しいフェイトはどんな車だったかすぐに思い出した。クラシックなデザインが人気のスポーツカーで、ミッドでもそれなりに出回っている車だ。

『その黄色いアリアンの女性が、オリヴィエ02ある可能性が高いちゅうわけや。』

「情報のもとは?」

『副長の捕まえた、自称タレこみ屋のお友達からや』

「お友達?」

はやての話によると、ヴィルヘルム達はタレこみ屋の勤め先で、住居不法侵入の男を1人捕まえた。

この男はある本局局員の親戚で、タレこみ屋を何人かの本局局員に友人として紹介した事があつたそう。そして、最近急に羽振りのよくなったタレこみ屋に嫉妬した彼は、紹介料を勝手に頂こうとして忍び込んだらしい。

金目のものがないか二階のコンピュータ室に入り込んだところで、突然現れたガジェットに襲われたため、親戚の所から勝手に持ち出していた高性能デバイスで小規模結界を張り隠れていたそう。

ヴィルヘルムがデバイスの不正所持等で脅すと、タレこみ屋のことをあることないことベラベラと話し始め、そのなかにType—33に乗ったタレこみ屋の彼女の話が出てきた。さすがに登録ナンバーまでは覚えていないそうだが、タレこみ屋とType—33の女性、二人同時に見かけたときは大抵女の車で移動していたとコソ泥は証言したそう。

「分かったよ、はやて。その線で聞き込みを試みる」

フェイト達は手分けをして周囲の聞き込みを開始した。1軒目の家はハズレ、2軒目の家は留守中、そして3件目の邸宅には、見栄え

を整えただけであまり手が入ってなさそうな庭が門から玄関まで続いていた。ここの住民は園芸にはあまり興味がないようだ。

フェイトが監視用のカメラと通話用のマイクとスピーカーが一緒になった呼び鈴を押したとき、聞こえたのは電子呼び鈴の音ではなく大きなエンジン音だった。エンジンは数秒間だけ続くと止まった。変な呼び鈴。と、フェイトは思ったが、住民の反応はない。

もう一度、今度は2回呼び鈴のボタンを押す。こんどは甲高い電子音が2回なった。先程は住人が車かバイクのエンジンをかけた瞬間に呼び鈴を押してしまったらしい、随分いいタイミングだ。

十数秒後、呼び鈴に取りつけられたスピーカーから、ハスキーな女性の声で返事が返ってきた。

「はい、どなた？」

「こんにちは、管理局 機動六課 フェイト・T・ハラOWN執務官です」

「しつむかん？えくと、刑事さんみたいな役職だっけ？」

「間違いではありません」

「身分証を見せてもらえらる」

フェイトがカメラに向かって身分証を出すと重い金属音と共に門が開いていく。

「どうぞ、お入りなさい。お互い顔を見て話をしましょう」

フェイトが玄関に向かう途中、地下ガレージのシャッターが開き女性が手招きをしてきた。年のころは40前後だろうか？

女性は油の付いた軍手ははずすと、着ていたつなぎの作業服の上半身を脱ぐと袖を腰でまいた。作業服の下は下着姿だったが、女性は気に入った素振りも見せずに名乗った。

大胆な格好だったが、同じ女性同士、相手も気にしていないようだった。フェイトは気にしないことにした。

「それで、どんな御用？あたしのバイクコレクションを見に来てくれたわけではなさそうだけど？」

女性の言う通りガレージには数台の大型バイクが並んでいた。性格といい、趣味といいカツコウのいい人だなと思いつつ、フェイトは

用件を話した。

「乗っている人間は覚えていないけど車の方は覚えているわ。最近若い娘に人気のあるやつでしょ」

「はい、ナンバーは覚えていますか？」

「ええ、クラナガンの…、ちよつと曖昧だわ」

「そうですか」

女性の答えにフェイトが落胆すると、女性が言ってきた。

「私は覚えてないけど、うちの監視カメラには映っているかも」

ロングアーチはフェイトから監視カメラの映像が届くと早速映像の分析を始める。するとすぐにフェイトが女性の家を訪ねる1時間前、銀の車輪のエンブレムを付けた車が門の前を通ったのが確認された。アリアンロッド Type-33 運転手の顔は確認できなかったが、助手席に座るタレこみ屋の姿は確認できた。この車で間違いのない。ナンバーは映りが悪かったが画像解析ソフトにかけると読み取ることができた。

はやては車の持ち主を調べると同時に、陸士108部隊に協力を要請。車両認識システムを使いType-33を追ってもらう。

返事は車の持ち主が判明するところに来た。陸士108部隊捜査主任のラット・カルタスが、Type-33が郊外のリゾートホテルの駐車場に駐車しているこの車を発見した。と、報告してきた。

はやては直ちに命令を下す。

「エア2、エア3。二人が一番近い今すぐ向かって。グリフィス君」

「はい、市街地個人飛行承認」

『エア2、了解』

『エア3、了解』

二人は担当していた物件の捜査を残った隊員に任せ飛び立つ。機動六課HQのメインスクリーンに映し出されたシンボルマークが移動し、どんどんホテルに近づいていく。

「ライトニング3、ライトニング4は、二人のバックアップを！」

『はい』

『わかりました』

エリオとキャロのシンボルマークは少し離れたところにあっただが、エア2、エア3の反対方向からホテルへ向かっていく。これで二つのコンビで挟みこむ形になる。

ホテルに先にたどり着いたのはエア2、エア3のコンビだった。ホテルの駐車場でType-33を確認すると、ホテル側の了承を得てタレこみ屋がいると思しき部屋に向かう。

扉の左右に張り付いた二人はアイコンタクトで役割を確認しあう。

エア2が扉を開けると同時にエア3が室内にデバイスを構えた。人の気配なし、いや、ベツトルームから微かに風の流れるを感じる。圧縮気弾など気体操作を得意とするエア3には確かに感じ取れた。手信号で合図をすると相棒が背中を固めてくれた。

エア3がベツトルームに飛び込みリクライニングシートに座る男にデバイスを突き付ける。

活劇はなかった：

遅れてきたエリオとキャロは飛竜でホテルの上空を旋回しながら、先に到着しているエア分隊の二人に呼びかけた。

『こちらライトニング3です。現在、ホテル上空に到着。これよりそちらの援護に：』

『来るな!!』

念話でも相手の雰囲気や口調は伝わってくる。エア3の反論を許さない雰囲気には押されライトニングの二人は驚いた。

遅れてきたことを怒られたのかとも思ったが、念話から怒りは感じられない。

『エア2からライトニング3』

『はい、こちらライトニング3』

『いいかい、坊や達はそのまま車を監視。誰も近づけさせな』

『はい』

『お嬢ちゃんもいいね』

『はい、わかりました』

エア2が念話で指示を送ってきたが、状況が掴めないエリオは疑問を口にする。

『あの…、そちらは…』

『ああ、こっちは任せろ。子供がこんなモノ見ちゃいけない』

エア2は室内を見回すと、窓が開いていることに気がついた。窓枠には靴痕。サイズから推測しておそらく女がつけたものだろう。このホテルの高さなら低ランクの陸戦魔導師でも飛び下りるかは可能。しかも、ここは監視カメラの死角になっている。どちらに逃げたかさえ特定は難しいだろう。

エア3はタレこみ屋の死体を観察した。詳しい検死はシヤマル先生に任せるとしても報告のため状況を知る必要がある。エア3は状況を一つ一つ口にしながら確認していく。

「胸部に刺し傷が3つ、これ以外に目立った外傷はないため、この傷が直接の死因とみて間違いないだろう」

タレこみ屋の衣服は乱れていないし、腕などにも傷はなかった。それに表情、タレこみ屋は苦しんで死んだようには見えない。おそらく、気がついた時には死んでいただろう。

「正面からの傷があるのに、防御創がないことから顔見知りの犯行と思われる」

エア3の言葉を聞いたエア2が反論した。

「待てよ、殺すだけだったら自宅でやっちゃえばよかったんだ。こんなところに連れてくる理由があんのかよ」

「オレが知るかよ。とにかく、部隊長に報告だ」

「タレこみ屋が殺された!?!」

エア2から報告を受けたはやては、部下の前であることを忘れ、大声を出した。

「やられた、捜査班とシヤマルをそちらに向かせる。それまでエア2と3は現場をできるだけ保存してや。」

『了解』

現場の詳しい状況を調べるために、シヤマル達に指示を出している

と、ウイルスヘルムから連絡が入った。

『課長、マリエル技官が仕事場で使用されていたデバイスを調べました。一部外部から情報が消されている痕跡がありますが、可能な限り顧客情報等をサルベージしてデータを送ります』

「分かった。他のリストと突き合わせてみる」

そう言ったものの、はやてはタレこみ屋が殺されてしまった以上、そのデータはほとんど役に立たないだろうと考えていた。Type—33 運転手は相当諜報活動に長けているようだ。足のつくような情報は残してはいないだろう。

「副長、タレこみ屋が殺されてしもた」

『ええ、聞いていました。申し訳ありません、私の捜査でスカリエツティ側にこちらの動きが気取られてしまったのかもしれませんが』
「いや、そうとは限らへん。副長の動きを察知していたなら、タレこみ屋はもっと早くに殺されていたはずや。時間をかけてまでホテルへは移動せえへん、用が済んだから機密保持のために殺した。そんなところやろう」

『つまり研究所の移動はすんでしまったということですね。この件でスカリエツティ一味がこれ以上アクションを起こすことはないでしょう』
そこまで話してウイルスヘルムはType—33 運転手の行動に疑問を感じたようだ。

『しかし、そうなるとなぜホテルを殺害現場に選んだのでしょうか』

「私的な理由かもしれへん」

『私的な理由ですか？』

「案外、二人の思い出の場所やったのかもな…」

『御冗談を』

はやては当てずっぽうで言ったつもりはなかったが、ウイルスヘルムは本気にはしなかったようだ。今後の捜査方針を聞いてきた。

『これからどうします。Type—33の女はスカリエツティ一味とみて間違いなさそうですが、タレこみ屋が消された以上、探し出すのは難しいと思われれます』

「時間がかかるやろな。仕方あらへん。この件は教会と査察部に任せ
て、六課はスカリエッツィの研究探索からは一旦手を引く」

『宜しいのですか?』

「副長かて分かっているやろ、数の少ない六課じゃ一から調べ直すに
は時間がなさすぎる。」

『確かにスカリエッツィが意見陳述会で事を起こすのならば、未然に
防ぐのは難しいでしょう。ならば…』

「せや、事前に防ぐのが無理なら、迎え撃つだけや!」

以下はJS事件解決後、スカリエッツィのアジトに残されていた通
信ログの一部である。

「ねーさま、お疲れ様です〜」

「ええ、あなたもね。データの処分、御苦労さま」

「いいえ、あんなシステムとういうことありませんわ。それより
ねーさま、どうしてあの男をホテルまで連れて行ったんです。消すな
ら自宅でもかまわなかったでしょうに」

「ああ、たいした事じゃないわ、あの男と初めて会ったのがあのホテル
だったのよ。別れの場所としても相応しいでしょ」

「まあ、ねーさま。それではまるであのつまらない男を愛していたと
でもっ…」

「ええ、愛していたわよ。それが仕事ですもの。その人間にお役目が
あるなら、私は人間を本気で愛することができるわ」

「まあ、でも、お役目がすすんでしまった人間はどうするですかあ」

「殺すわ、それが私のお役目ですもの、当然でしょう」

09 公開意見陳述会前夜

新暦75年9月11日 19時30分過ぎ 公開意見陳述警備のため中央管理局 地上本部に向かうのは達を送り出したあと、シグナムは交替部隊待機室に向かった。用事はもちろん明日に向けての指示を出すためだったが、シグナムの出すべき指示というのは夜勤者を残し、明日の公開意見陳述会終了まで待機状態に入るように命じる程度で、特に有事の際の作戦云々を伝える必要はなかった。主力不在時の行動マニュアルは、部隊長のはやて、訓練幹部のなのは、そして、運用統制班からはヴェイルヘルムが参加し、すでに作り上げていた。その訓練の方も月数回程度行っており何度か修正も加えられている。

ちなみに、このマニュアルを作り終えたとき、はやては悔しそうな顔をしていた。シグナムが自分の主にそのわけを聞くと「全く出番がなかった」と、答えた。どうも、はやてには僅かに個々の能力を過大評価してしまう悪癖があり。低ランク魔導師の抱える弱さ（委縮、臆病等）に対して配慮が足りていないことが多く、なのはとヴェイルヘルムに散々指摘を受けたそうだ。

考えてみれば持っている固有戦力はほとんど全員がエース級のヴォルケンリッター、脇を固めているのがオーバーSランクのなのはとフェイト、直接の上司のクロノやカリムも高ランク魔導師や騎士である。そのうえ自身もSSランクとなれば、普通の魔導師や騎士の感覚には疎くなってしまうのだろう。

「本格的に管理局で働き始めたんは、中学を卒業してから4年と数カ月。陸士108部隊に研修に出掛けたこともあったけども、まだまだ経験不足やった」と、はやては語っていた。対してヴェイルヘルムは高ランク魔導師の数も予算も少ない地上部隊を回り、悪戦してきた経験を持っている。普通の魔導師部隊の指揮なら『まだ』副長に一役の長があるらしい。

シグナムは笑った、温厚に見えてはやてもなかなか負けず嫌いだ。このままではいけないだろう。自分の主のこれからの成長が楽しみだった。

同じころ副長室でグリフィスは、ヴィルヘルムから数枚の書類を受け取っていた。ほとんどが手紙の類で、一枚が命令書だった。

「その手紙の類は、『彼女』の最終調整を頼むためのものだ」

「アースラのですね？」

「そうだ、まあ、使わずに済めばそれに越したことはないが……」

？ 級艦のアースラはすでに廃船が決まっている旧型船であるが、ヴィルヘルムの働きで運用可能な状態を維持している。理由はもちろん大規模なテロや混乱が合った場合、移動できる本部が合ったほうが有機的に部隊を指揮できるとの考えからだ。そのために、同じく破棄が決まっている同型の船から使える部品を、整備訓練の名目で人を集めるなど、かなりの手間と時間を使っていた。

もちろん、ヴィルヘルムは神でもなければ、予言者でもない一佐官でしかなかった。この後の地上本部の壊滅やアインヘリアルが全て破壊されることは知る由もなかったが、万が一騎士カリムの予言が的中した場合に備える慎重さあるいは臆病さを持っていた。

「あらゆる事態に『備える』ですね」

「無駄なことだと思うか？」

「無駄？ 次元航行部隊での整備訓練は不可欠でしょう？」

ヴィルヘルムが事務方への要望事項としている言葉を言ってきたグリフィスに問いかけると、グリフィスはそう答えた。

実のところアースラ整備にかかる予算と人員の大半を出しているのは、六課の後見人に当たるクロノ提督の部隊だった。あくまで地上部隊の六課では時空航行船の予算など下りないし、時空航行船整備員もない。ヴィルヘルムはクロノ提督に具申し、人員の異動や部品の輸送などの手続きや指揮などの処理をしていたにすぎない。

しかし、当然「こんな老朽艦など必要ない」と、嫌味を言ってくる者も出てくる。その時はグリフィスが言ったようにとぼけると言うわけだ。

後輩の成長にヴィルヘルムは頬が緩みそうになったが、慌ててそれを堪えた。部下を褒める役目ははやて、自分は部下を叱りつけるのが

役目だ。ヴィルヘルムは無難に「悪くない答えだ」と、言う命令書を確認するように促した。

グリフィスは書類を脇に挟むと、命令書を確認する。

命令者：3等陸佐　ヴィルヘルム・チエスロック・ケーニツヒ

被命令者：准陸尉　グリフィス・ロウラン

本文：准陸尉　グリフィス・ロウランは、9月12日1300から9月13日0900までの間態勢が第1級警戒態勢に変わり、時空管理局本部　古代遺物管理部　機動六課の部隊長又は副部隊長との通信が困難な場合において、これに対処するため認められるときは、3等陸佐　ヴィルヘルム・チエスロック・ケーニツヒの権限と責任において、同部隊の全部又は一部に対しての指揮監督を実施せよ。

要約すると、「公開意見陳述会開催中にヴィルヘルムが出動した場合、佐官の権限を使って隊を指揮しろ」という内容だった。

「僕がですか!」

「そうだ、不服か?」

「しかし、副長はHQで指揮をするのでは?同じ場所にいるのですから、連絡が出来なくなるとは思えません?」

グリフィスの疑問はもつともだ。六課ではなのはやフェイトのような先陣向きの士官が多いので、軽視されがちだが本来指揮官というのは、HQなど全体を見渡せる場所で行うのが普通だ。

「私も普通の事件ならば、そうするつもりだ」

「普通ではない事件が起こると?」

ヴィルヘルムは腹案を何処まで話すべきか迷ったが、予言関係を伏せてあくまで個人的な意見の1つとして話すならば問題ないと判断した。

「有識者からの予測情報は知っているな?」

「はい、地上本部に向けて大規模なテロが行われるという情報ですね」「そうだ、そのテロが起こると仮定して、犯人は初手から地上本部を攻撃すると思うか?」

「…陽動がある?」

ヴィルヘルムはうなずいた。結果的にこの予想はハズレていたが、

管理局士官としてはまったく妥当なものだった。

本命を攻撃する前に、陽動として他の場所を攻撃し、その対処のため戦力が分散したところで本命を攻撃する。単純だが有効な方法だ。防御側は陽動と分かっているにもかかわらず以上、無視する訳にもいかない。そうなった時、六課主力を動かさずに対処するため、ヴィルヘルムは自ら現場で指揮をとるつもりでいた。六課を離れることとなる間、留守を任せる者が必要となる。

そう伝えるとグリフィス神妙な顔で「分かりました、拝命します」と、言つて敬礼をした。

副長室を出たグリフィスは歩きながら、もう一度命令書を見た。間違ひなく自分に出された命令が書かれている。

グリフィスは唾を飲みこんだ。命令の内容に少し気後れして、喉が渇いているからだ。

今までも部隊長が不在の時に出勤がかかったことがあったが、いつでも通信で部隊長達の指示を仰げた。しかし、今回の命令は全て自身で判断しなければならぬ。しかも佐官の権限で……

佐官になって部隊を指揮する。一度はやってみたいと思つていたが、こんなに早くチャンスを与えられるとは思つていなかった。喜びよりも不安が強くなつていく。

「グリフィスさん？」

「!!」

名前を呼ばれ驚いて立ち止まると、目の前に帰り仕度をしたルキノがいた。

声をかけられるまで、まったく気がつかなかったところを見ると、自分は相当参っているらしい。

(命令を受けただけで、これだ。副長の言うような事態になったら、どうなってしまうんだ)

ルキノと挨拶をしながら、そんなことを考えていると、ルキノがこちらを見つめていた。

「な、なんだい？」

グリフィスは「真面目でカワイイな」と、思っている女の子に内心の不安を見せまいとしたが、唇が言うことを聞いてくれなかった。うわずった声がでる。

「グリフィスさん、この後お暇ですよね。少しお付き合ってください」

ルキノは声のことなど気にせず言ってきたが、カツコ悪いところ見られたと思ったグリフィスは仕事を理由に逃げ出そうとしたが、腕を掴まれてしまった。

「ル、ルキノ」

「お仕事でも休憩は必要ですよ」

「そうかもしれないけど・・・」

グリフィスの遠慮がちな抵抗などものともせず、ルキノは給湯室まで引つ張って行くと、少し強引に座らせると、お湯を沸かし始めた。

「コーヒーと紅茶どっちがいいですか？」

「ええと、じゃあ、紅茶で」

グリフィスは、普段のルキノが見せない強引さにすっかり気圧されてしまっていた。ルキノは相棒のアルトと比べると、内気な性格をしていると思ひ込んでいただけに驚きも一入だ。

(こう言うのも、女は強いつて言うのかな?)

間の抜けた事を考えていると、紅茶をいれたルキノが正面に座った。先程、悩んでいた理由を聞かれるのかと、グリフィスは身構えたがルキノは触れてはこなかった。

「突然すみません。今日は寮に帰っても、すぐに寝つけなさそうだったので」

「話し相手が欲しかったってことかい？」

「すみません・・・」

「かまわないよ、僕にもそんな日があるから」

ルキノがこちらを気遣って気分転換をさせようとしていることは、グリフィスにも分かっていたので、「少し情けないな」と思いつつ厚意に甘えることにした。

「といっても、何の話をしようか？(明日は早いから、できれば艦船話以外で)」

「そうですね…、じゃあ、グリフィスさんの事を」

「僕のこと？」

「はい、知りたいです」

紅茶の甘い匂いを嗅ぎながら話をしていくうちに、グリフィスは先程感じていた不安が消えていくのを感じていた。

グリフィスが退室した副長室では、ヴィルヘルムは海上保安部隊の2佐と通信を行っていた。内容は明日の公開意見陳述会にも関連したことではあったのだが、各種調整は事前に終えてしまっていたので、個人的な挨拶の体裁が強い。

「では、明日はお願いします」

「ああ、お前の頼みだから演習海域をそっちの近くにしたが、本当に大規模騒乱なんて起こるのか？」

「本局のお偉方はそう考えているようです」

「そう言うお前は、信じているのか？例の占い」

「信じてもいいのではないかと思うようになりました」

ヴィルヘルムはいつも以上に言葉に気を使っていた。それもそのはず実はこの定年間際の2佐はヴィルヘルムが新米准尉だったころの上司で、民間と公務員の違いに慣れていなかったヴィルヘルム准尉に管理局の作法をみっちり叩き込んだ恩人でもあった。

当時、この2佐は他の管理世界での陸上警備隊であったが、定年を間近に控えて故郷のミッドチルダ海上保安部隊の巡洋艦艦長（次元航行船にあらず）として転属してきていた。

「てつきりお前はレアスキルが嫌いだと思っていたんだがな」

「嫌いなわけではありません。個人の能力を当てにした組織運用は危険だと考えているのです」

七年前のことを思い出しながら笑う上司に、ヴィルヘルムは反論した。

「ま、そうだな。百発百中って訳でもないようだしな」

「レアスキルは事件を調べるキツカケになっても…」

『万人を納得させる理由にも、証拠にもならない』お前の言葉だな」

「あいかわらずですね」

ヴィルヘルムが見せた僅かな対抗意識は、鼻で笑われてしまった。

「お前は部下を虐める役らしいではないか。たまには虐められる」

「私を虐めるなら、私の部下には優しくしてもらいますよ」

「へえ、言うようになったじゃないか、小僧」

「いい加減、小僧はやめてください」

「じゃ、若造」

「若造ですか…。ま、甘んじて受け取っておきましょう」

「なんだ、受け取るのか。つまらん」

本音を言えば「オジサンと呼ばれるよりましか」という気分だったが、それがばれるとかわかれるのが目に見えているので、どう誤魔化したものかと考えていると、ノックが聞こえてきた。それを理由に通信の終わりを告げると、「まあ、今日のところはこの辺にしておいてやるか」と言いながら元上官は通信を切った。

「こんばんは〜」

妙なアクセントをつけた挨拶をしながら入ってきたのは、現在の上司の八神はやてだった。

明日までに片付なければならぬ仕事を終え、寮に帰る前に寄ったようだ。

「お疲れ様です、課長」

「はい、お疲れさん。副長は残業?」

「たった今それも終わったところです。通信によるチョットした調整です」

「そういつて、実は女の人へのラブコールやったりして」

ヘラヘラ笑いながら、はやては冗談を言ってきた。ヴィルヘルムは「私が公私混同をしないとご存じでしょう」と、言おうとしたが、はやての様子がおかしいことに気がついて辞めた。

はやては進んで話したいことがあるが、内緒にしなければならぬことがある。あるいは、面白いうわさ話を聞いてもらいたがっている女学生の様な表情をしていた。

(ようするに、こちらから何があったのか聞けということか…)

一瞬、「部下対する態度ではありませんと忠告すべきか？」とも考えたが、ついさつき仕事は終わらせたと言言したばかりだったので、格好がつく程度に友人として対応することにした。

「なにか面白いことでも？」

「せや、でも、んんん、どうしようかな」

聞きながら椅子をすすめるヴィルヘルムに、はやては勿体つけた。ヴィルヘルムは過去の経験上、女性相手にここで「じゃあ、話さなくていい」なんて言おうものなら、不幸が降りかかってくることを知っていたので、「聞かせてください」と、促した。

「そこまで、聞かれちゃしょうかない。さつき給湯室でな…」

はやてによれば、給湯室でグリフィスとルキノが仲睦まじく話しをしていたらしい。前々から、噂に上っていたようだが、なるほど。どうやらグリフィスの成長は仕事上だけには留まらなかったようだ。

「しかし…、覗きとはいい趣味とは言えませんね。ユニコーンに蹴飛ばされますよ」

「ふ、違うで、副長。陰ながら見守っていただけや」

はやては身長割には大きめの胸を張って堂々と答えた。

ヴィルヘルムが流石にあきれて苦笑いをする、滅多に見られないその表情が面白かったのか、はやてはケラケラ笑い始めた。

「部下のプライベートの心配はいいですが、貴方ご自身はどうなのですか？」

無限書庫の司書長と噂がある（本人達は否定）なのははともかく、はやてやフェイトにまつたく男つ気がないのは六課七不思議だ。と、噂している部下達がするのは事実である。

笑われたヴィルヘルムが腹いせに、ややぞんざいな口調で言い返すと…

「…いい、いいんや。私は仕事と共に生きるんや」

はやてはかなり凹みながら答えた。彼氏いない歴20年、それなりに気にはしていたらしい。

「では、仲人は任せてください。立派な拳式をして差し上げます」

「いらんわ、アホ」

はやての罵倒を受けとめながら、ヴィルヘルムは居住まいを正す。

「失礼しました、課長」

「かまへんよ、副長」

ヴィルヘルムが真剣な話をしたがっているのを察して、はやても背筋を伸ばした。

「明日、巡洋艦が湾岸地区の沖合で演習を行います」

「そういう名目で、警備活動をするつもりやな」

「そうです、正確な演習海域はここです」

デバイス进行操作すると空間ウインドウが表示され海図が現れる。はやては通常の演習海域から大分離れてしまっている事に気がついたようだ。訓練海域の変更の理由を聞いてきたので、艦長と調整して六課の近くに変更してもらったと正直に答えた。

「この船の艦長と知り合いなん？」

「ええ、新米士官時代世話になりました」

「この海域から六課までなら、全力で一時間弱やな」

「それにはトラブルが全くない事が前提になります」

はやても分かっていると知りつつ、ヴィルヘルムは副長という立場上常識的な捕捉を入れた。巡洋艦といえども一般の船も往来している湾岸区で最大戦速の機動など出来るわけがないし、よそからも援護を求められたら無視するわけにもいかないだろう。

「それでも、有事の際は真っ先に助けに来てくれると考えていいんやな」

「ええ、それは間違いないでしょう」

「ん、ありがとうな」

「…いえ、仕事をしたままです」

笑顔で礼を言われ迂闊にも照れてしまった。その様子をはやてに茶化されてしまう。

「副長もカワイイところあるんやな」

「ほっといってください。」

負け惜しみを言うヴィルヘルムを見て、はやては大笑いした。

結局、二人は雑談を交えつつも、ヘリの帰投や携帯結界システムの

配置など、明日の予定を日付が変わるまで確認しあった。

時空管理局 公開意見陳述会まで あと12時間

10その日、機動六課（B面）前編

機動六課食堂に添えつけられたTVに移るアナウンサーの狼狽した様子が、現地の混乱した状況を伝えていた。

公開意見陳述会開始から4時間、18時を少し回ったことで、TV画面にノイズが入り始めた。数秒後には鈍い爆発音が響き映像が大きく揺れる。TVカメラマンが爆音と振動に驚いて転んだようだ。

なんとか立ち上がったカメラマンが地上本部ビル全体を映すと、強烈なエネルギーの柱が叩きつけられ爆煙が上がるところだった。ビルから細かい破片が地上の警備部隊に降り注ぎ事態を混乱させる。

さらに無数の四角い魔法陣が地面に浮かびあがり、ガジェットI型、II型が出現し始めた。ガジェット達の発生させたAMFの影響か、あるいは他の電子装備でもあるのか、カメラからの映像はそこで止まった。

ヴィルヘルムと一緒に食事をしていた事務方の幹部は動揺しているようだ。

「副長！」

「あわてるな、幹部が動揺すると部下に伝染する」

言いながらも懐から懐中時計型のデバイスを取りだしHQと連絡をとる。

HQに詰めていたグリフィスから聞く限り状況は良くない。

攻撃開始と同時に地上本部内との途絶、防御障壁の主動力を破壊され防衛出力が低下、そのうえ指揮管制システムを情報的にも物理的にも完全に抑えられてしまっている。予備のサーチャーすら上がっていない。

（鉄壁を誇る魔法防衛をこうも容易く。この手際の良さ……、地上本部の情報が漏れていたとしか思えん）

ヴィルヘルムは地上本部の責任者であるレジアス中將を、思いつきで罵ってやりたい気分になっていたが、部下の前で上官批判をするわけにはいかない。不平不満を愚痴の保管庫にまとめて放り込み、確認と指示を出していく。

「このサーチャーシステムに異常はあるか？」

「ありません、すでに全機立ち上げ情報収集を開始。本部警備部隊に情報を送信しています。ただ……」

「どうした？」

はきはきと答えていたグリフィスの言葉が急に止まった。なにか言いにくいことがあるようだ。

「他の地上部隊からのサーチャー情報が回ってきません……」

「こんな時に！」

このような非常時にすら縄張り意識を持ち出してくるものがいたようだ。ヴィルヘルムはグリフィスに「こちらで対処する」と短く答えると、昨夜話していた巡洋艦の艦長に通信を繋ぐ。

「よう、悪いことだけあたるな、占いつてのは！」

「同感ですが、いまは対処を」

「すまんがこつちも混乱している、民間船の統制すら取れとらん」

艦長は遠回しの表現をしたが、その場をすぐには動けないということだ。だが、ヴィルヘルムも手ぶらで通信を切るわけにはいかない。

「では、せめて情報と上空警戒を」

「上空警戒はいいが、どっかのバカが情報を海の連中にわたすなど触れ回っているようだ」

どうやら、直前になって「テロが起こっても地上本部だけで対処せよ」との命令が下っているようだ。正しいかどうかは別にして命令ならば従わなければならないのが、公務員の辛い所だが……。

「そうですか、では通信の混線には気をつけてください」

「そうだな、特にH○○H○○チャンネルには気をつけるとしよう」

ヴィルヘルムもこの艦長も命令の隙間を縫うのに長けていた。

H○○H○○チャンネルとは日本で言うところの映画専用チャンネルのことで、クラナガン周辺では衛星第3放送とも言われている。ようするに非常回線の3番を使って情報を交換しようという暗号だ。

「ロウラン補佐、非常回線の3番を開け」

ヴィルヘルムは艦長の意図を正確に読み取って指示を出す。途端、地上本部周囲の状況が送られてきたが依然として地上本部内部の様

子が分からない。とりあえず外からの攻撃はひとまず止まっていることが確認できた。しかし……

(すでに攻撃の必要がなくなったと考えるべきだろう。いくら隊長陣といえども高濃度のAMF内では、デバイスなしでの戦闘は難しい。現在、地上本部が無力化された)

警備情報が漏れていたとしても、陽動や戦力分散などの搦め手もなしに力技で地上本部を制圧してくるなど誰も予想していなかった。

会場内へのデバイスの持ち込み禁止など、現場での警備態勢も裏目裏目に出ている。

現場の意見も間こうと通信を繋ぐとちようどスバル達が突入の意思を固めたところだった。

「副隊長、私達が中に入ります！　なのはさん達を助けに行かないと！」

拳を握り言うスバルを見返すヴィータ。

ヴィータは部下達を信じることにしたようだ。続くオーバーSラックの航空戦力の接近にも動揺せず地上を部下達に任せ自らは航空戦力の迎撃に向かう。

ヴィルヘルムも妥当な判断と考え、その作戦を補強するには何ができるか考える。

(高町1尉とハラOWN執務官との合流ポイントが分かっているなら、彼女達が脱出してくるのに呼応して敵の包囲に穴をあけ、地上部隊にその穴を拡大させるのが理想か……)

地上部隊が六課を援護してくれるとは限らないが、手柄の一人占めをさせるまいとして各部隊はこぞって戦力を送ってくるだろう。来ないようなら煽ってやればいい。

どれほど六課が活躍しようが地上本部は「地上警備部隊の必死の反撃によりテロリストを撃退した」と報道されるに決まっているが、六課の部隊長陣のなかでそんな事を気にする人はいまい。

ヴィルヘルムはへりに交替部隊のグラウンド分隊を集め、出動の準備を始めるが……

「高エネルギー反応2体、高速で飛来、こっちに向かってます」

どうやらこちらの思い道理にはいかせてはもらえないようだ。航空戦力が接近しているとみると、ヘリでフラフラと出て行つては狙い撃ちにされてしまう。

HQで指揮を執っていたグリフィスも正確に状況を呼んでいるよ
うで、通信を送ってきた。

「副長、出動は取り辞めてください」

「ああ、分かっている。迎撃に集中しろ」

「はい」

ヴィルヘルムが答えると、グリフィスはすぐさまオペレーター達に
指示を出した。

「待機部隊迎撃用意、近隣部隊に応援要請」

「はい」

「総員最大警戒態勢」

どうやらグリフィスはこの状況でも気圧されてはいないようだ。
昨夜のことは聞かなかつたが、ルキノとの会話が彼自身の士気を高め
ているようだ。

だが他の部隊員はそうはいかない、事務方の陸士や空士のなかには
デバイスや武器を使った実射訓練を行うのは年に一度程度という者
も少なくない、誰かがハツパをかける必要がある。

「ロウラン補佐、お前が全体の指揮を取れ、私は前線に出る」

「副長自らですか!」

「ああ、初陣のものも多いからな、士気を高めてやる必要がある」

六課に残っている中で最高位のものが前線に立つのだから、他のも
のは後方に下がるわけにもいかなくなる。軍隊や警察機構の指揮官
の基本、率先垂範というやつだ。

「武器・デバイス班は各装備の配分開始!」

「部隊残留局員はB装備で各ポストに集合せよ!」

「委託民間人の方は誘導に従って退避してください!」

「設備班、警備班は迎撃及び防御システムの立ち上げを急げ!」

シャーリー達の声が放送装置から響き、六課の施設内を局員たちが
駆け回る。まごつく陸士を下士官たちが怒鳴りつける。戦えない者

たちも窓の前や使わない出入り口の前に椅子や机を積み上げ簡単なバリケードを作り始めた。

ヴィルヘルムも最初に敵と接触すると予測されるポストに向かっている、背後から声をかけられた。

「副長さんー」

「こら、まちなさい。君」

見るとデバイスを持った隊員と、管理局では採用されていない作業服を着た女がやってきた。六課のサーチャーを開発した会社の社員だろう、作業服の胸には三つのひし形が並んだワンポイントがある。

大規模なサーチャーは大量生産されないこともあり、それだけで日本円にして何十億という金が動く。当然管理局としても性能の保障や不具合等が起こった時のサポートなど、条件が良くないと契約を結ばない。逆に会社の方は必要以上に乱暴な使用方法で壊れた部品まで補償させられてはたまらないと、定期メンテナンスを名目にチェックを入れに来る。彼女もその一人の筈だったが直に会うのは初めてだ。

彼女はヴィルヘルムの前に来るなり、とんでもないことを言った。

「スリーダイヤ電機のノラ・ドウです。私にもお手伝いさせてください」

「申し出には感謝しますが、危険ですので局員に従って退避してください」

ヴィルヘルムは失礼のないように、しかし、あっさり断ったが、このノラという女性は食い下がった。

「六課のサーチャーシステムは我が社が開発したものです。私ならば戦っている間、どんな事態があってもお役にたてるはずですよ」

「戦闘中の対処は局員が行います。そして、民間人の保護は局の義務。お気持ちだけ受け取っておきます」

「しかし……」

あまり時間がない、ヴィルヘルムは尚も食い下がる彼女を連れていくように隊員に命令した。

先程から手に持ったデバイスが小さな音を立てていた。

デバイスの持ち主の少年は自分の手を見ないように気をつけながら周りを見渡した。最初に見えたのは機銃を構えた警備班の隊員だった。機銃と言っても当然質量兵器ではなく、小型魔力炉とカートリッジと封入されている魔力を使ってシュートバレットをばら撒くデバイスだ。目を閉じて詳細を思い出ししてみる。

(全長は1.1m、本体のみの重量でも5.82kg、給弾方法はベルトリンク方式、発射速度分間1000発)

スラスラと出てきた。当然だ、何しろ少年が整備しているデバイスだ。

しかし、少年は気を紛らわすことはできなかつたようだ。少年は入局テストの時、言わなかつた本音を叫んで逃げ出したい気持ちを必死になって抑えていた。

(僕はデバイスマイスターになるための勉強をするために管理局に入ったんだ。管理局の都合なんて知った事じゃないよ)

なんてことを！ と、思う人もいるかもしれないが実は少年のような考えを持っている局員は少なくない。特に管理局世界で経済的に貧しい世界や、発言力に低い世界では積極的に管理局への入局を進めている。多くの人材を管理局に派遣することで失業者率を下げたり、先進世界の技術を取り入れる。あるいは管理局世界での孤立を防ぐなどと言った政治的意図がある。

少年の出身世界もそういった世界の1つだ。局をやめれば勉強どころか路頭に迷う。内戦が続いている世界ではなく、犯罪があつても比較的治安のいいミッドチルダに配属された時は、少年はこれで戦わずに勉強ができると喜んでいた。

(まさか、先進世界でこんなテロが起こるなんて)

少年は目を開けない。震えている手を見てしまえば、いや、自分が怯えていることを自覚してしまったら、もう何も考えられない。

少年はこのように追い詰められた状態だったので、誰かが震える手を握ってきたときは悲鳴をあげそうなほど驚いた。

「顔色が悪いわ。大丈夫？」

手を握っていたのは、シヤマルだった。普段の白衣姿ではなく緑色の騎士甲冑姿で、少年の手を包むように握っている。驚きのあまり少年が口をパクパクさせていると、シヤマルは優しく頬笑み言葉をかけた。

「君は、好きな人はいる?」

「へっ?」

少年にはあまりに場違いな発言に聞こえた。震えていたことも忘れて間抜けな声を出す。

「こんなときに正義とか平和のためとか、考えてはダメよ」

「はあ……」

「それより、家族のこと、君に笑ってくれるあの子のことを考えて」

手を握り頬笑みながら言うてくるものだから、少年は思わず考えってしまった。

(好きな人というわけではないが、憧れている人ならいる。3歳しか違わないのにすでにデバイスマイスターの資格を持っている先輩で、人見知りしない性格の……)

そこまで考え閉まった後にシヤマルの頬笑みが変わっていることがついた。先程の聖母のような頬笑みから、うわさ好きの女子が他人の恋話に花を咲かせているような笑みに変わっている。

「思い当たる人がいるのね?! 誰、誰?」

「え、あ、あの」

少年が答えに困っているとシヤマルを呼ぶ声が聞こえた。いつの間にか現れたヴィルヘルムが呼んでいる。シヤマルは「ここを切り抜けたら話を聞かせてね」と、言葉を残してヴィルヘルムのもとに向かった。

少年はキツネにつままれたような顔をしていたが、震えは止まっていた。

2体の戦闘機人が六課に到着するまであと3分を切ったところで、ヴィルヘルムのもとにグリフィスからの連絡が入った。

戦闘機人二体の反応が空中で停止したそうだ。かわりに何処から

ともなく現れたガジェットがこちらに向かってきているという。

「自分たちでは手を出さず。まずはこちらの戦力を推し量るつもりか」

「そうみたいです、二体とも射程外のぎりぎりのところで停止しています」

「戦闘機人は新型か？」

「はい、シャマル先生の捉えた反応は六課のデータと一致しません」

クラールヴィントのセンサーが捉えた情報ならば、まず幻術の類で攪乱されたものではないだろう。

敵の戦闘機人が新型ということはどんな能力を持っているか分からない。こちらの切り札になるシャマルとザフィーラは温存しておくべきだろう。

「シャマル医官、ザフィーラ、お前達はまだ手を出すな」

「え、でも……」

心配するシャマルだったが、ザフィーラは少し意見が違うようだ。一度だけヴィルヘルムを見ると、シャマルを止める。

「シャマル、ここは副長に預けよう」

「ザフィーラまで」

「お前達には戦闘機人の対処に当たってもらおう、雑魚相手に消耗するな」

ガジェットI型とIII型の混成部隊が六課の敷地内に侵入してきた。ガジェット達は特に陣刑を取ることなくまっすぐ先進し、基地警護用のオートスフィアや携帯結界システムを盾とした局員で築かれた防衛ラインに近づいた。そこから100m離れた所には外側から見えづらい位置に杭が打たれている。陸士が有効射程の基準にするために打たれたものだ。

「打ち方、初め」

ヴィルヘルムは50mまでガジェットを引き付けてから、念話で命じた。

魔力弾が連続で放たれ轟音を立てる。交替部隊や警備分隊以外の局員たちの魔法弾はIII型にはほとんど効果がなかったが、I型にはダ

メージを与えることが出来た。半数が削り取られ、残り半数はオートスフィアや携帯結界システムの防御魔法に接触し足を止めた瞬間。

「おおおおお」

「うわああああ」

雄叫びをあげて、槍を突き出すベルカ組の攻撃によって撃破された。残りのⅢ型も警備分隊の機銃の集中正射とアース分隊との連携で破壊された。

初めて現れた時にはライトニングFの二人を追い詰めたⅢ型だが、いまでは性能が判明しや対処法が考えられている。経験豊富な交替部隊なら十分手を出来る。

しかし、敵第一陣を撃退した問題が起きた。戦闘で興奮した局員が分隊長の制止の声を聞かずに、破壊されたガジエットの残骸に向かって攻撃を続けている。ある者は射撃を続け、ある者は槍を残骸相手に振っている。こうなっては迂闊に近づくとその者が怪我、あるいは致命傷を負ってしまう。

これを収めるにはヴィルヘルムやザファイラなどの経験の豊富な者が対処しなければならなかった。彼らは錯乱した隊員の死角から忍び寄ると素早くデバイスを取り上げる。それでもまだ正気に戻らない者には、容赦なく鉄拳をあげせ正気に戻した。「打ち方やめ」と、叫びながら二度繰り返し返すとようやく収まった。

「ロウラン准尉！ 状況を！」

ヴィルヘルム自身の気がつかないうちに声が大きくなっていた。射撃音による音と破壊されるガジエットの爆発音によって耳がおかしくなっているのもあるし、ヴィルヘルム自身も興奮しているのもある。

「ガジエット第一陣撃破、こちらの損耗は軽微です」

「シャマル医官、敵の様子は」

「Ⅱ型数個編隊が海上から接近中、交戦圏内まで……ああ！」

敵の様子を伝えようとしていた、シャマルが驚きの声を上げた。

「どうした？」

「Ⅱ型が打ち落とされていきます」

海の方向を見ると、日が落ち暗くなった水平線の彼方に、一筋の光が駆け上がっていくのが見えた。

一瞬の閃光と数秒遅れの爆発音。

洋上数十kmにいる巡洋艦が多術式魔力砲でⅡ型を迎撃してくれているようだ。多術式砲は地球で言うところのペイトリオットミサイルの様な地对空迎撃装備だ。流石に地上兵力の相手はしてくれないが、少なくとも手の届かない高高度から一方的に打たれる心配はなくなった。

「約束は守ってくれるようだな。また、頭が上がりなくなる」

あの艦長なら一時間も頑張れば応援に駆けつけてくれるだろう。こちらはそれまで相手の攻撃に合わせて、何とか持ちこたえればいい。

ヴィルヘルムは警備分隊長に念話で聞いたでした。

「分隊長、どのくらい耐えられる」

「ガジェット相手なら、弾が持つ限りは……。補給班次第ですな……。あいつじやな」

「なら問題ないな」

「え、そうですか？」

警備分隊長は補給分隊長を信頼できないようである。不安が念話越しに伝わってきたが、ヴィルヘルムは心配していなかった。

ヴィルヘルム達が戦闘を行っているころ、当の補給分隊長は武器庫の中で予備デバイスの数を数えていた。

とはいえすでに各隊員に配分を終えてしまっているのです、予備の数も20機あるわけではない。すぐに数え終わったが、彼はもう一度最初から数えなおす。他にやることがないからだ。

先程までは、警備分隊の使うカートリッジの用意を手伝っていたが、ガジェットが破壊されたときに起こった爆発音に驚いて、カートリッジの詰まった箱を床にぶちまけてしまい、部下達に思いつきり嫌な顔をされた。以来、邪魔にならないようにデバイスの数を何度も数え直している。

「よし、準備完了」

彼の部下達がカートリッジの準備が完了した。機銃型のデバイスは専用のリングで1つ1つのカートリッジを繋いでやらないと使用できない。流石に戦っている最中にそんなことは出来ないのだから、ここで行っていったのだ。

「よ、よし、と、届けに行こう」

「はあ？ なに言っているんですか、まだ戦闘中なんですよ！」

「分かっている、でも、機銃のカートリッジ、は、すぐなくなってしまうものなんだ」

普段、部下達に意見されるとなにも言えなくなってしまう分隊長だったが、突っかかりながらも反論した。

部下達は意外なモノを見るようにこちらを見ている。彼らにとってはこの補給分隊長など、馬鹿にする対象でしかなかった。

あまり背が高くなく、生白い肌、フレームの太い眼鏡、要するに彼はガリ勉タイプの容姿をしていた。そのうえ、話し方が訥弁で本人もそのことを気にしているのか、実に自信無さげにオドオドと話をする。テストの成績だけで管理局員になったと言われても仕方のない容貌の持ち主だった。

部下に馬鹿にされている。補給班長はそのこと良く知っていたが、仕方ないことだとも思っていた。今も部下はあきれたような態度を隠そうともしていない。

「本気ですか」

「と、とりあえず、1、分隊分だけ、でも、持って行くよ。よ、用意を、続けて」

そう言うのと全部で30kgはあるカートリッジの束を背負いタイプのコンテナにもたもたと積み込むと、杖型デバイスを支えにして何とか立ち上がり、ふらふらと走り始めた。

部下達は茫然していたが、彼の悲鳴が遠くで聞こえた時には、「そのうち怖気づいて戻ってくるだろう」と、思いついて作業を再開したが、数分が経過しても戻ってこない。

「なあ、探しに行った方がいいんじゃないか？」

「ああ、そうだな」

流星に死なれては目覚めが悪い。と、心配する者が出始めたころ彼らの頼り無い分隊長が転がり込んできた。

持っているデバイスは故障してしまっているし、制服はボロボロ、涙と鼻水で顔はグチャグチャとさらに見栄えのしない様子になっていたが、コンテナの中は空だった。

彼はガジェットの攻撃の中を駆け回り、カートリッジを配って回ったのだ。杖はガジェットの攻撃でデバイスを壊してしまった隊員と交換したものだった。

「もう、は、半分近く、カートリッジを使ってしまっ、ている。急いで配ら、ないと」

「あ、お、俺も行きます」

「俺も」

相変わらずの話かたで、モタモタとカートリッジを積み込む彼を部下達が手伝い始めた。

馬鹿にしていた相手が危険を顧みず任務を達成して見せたのだ。ここで何もしなければ彼らとしても面子が立たなくなる。と、いう意識もあつたのかもしれないが、彼らは分隊長を適確にサポートし始めた。

ある者は壊れたデバイスを修理させるために武器・デバイス班のものとへ向かい。破壊されたバリケードを直すための資材を運ぶ者もいた。

補給分隊長は、何故部下達が突然態度を変えたのかわからなかったが、先頭にたつて前線を走り続けた。

「敵、第2陣、撃破」

「戦闘機人はまだ動かないのか?」

「はい、依然として動きを見せません」

「よし、お前達2人は引き続き、戦闘機人の監視を!」

戦闘機人2機の動きには積極性が見られない。このままガジェットで押し切るつもりか、シャマル達を六課から引き離し分断を狙って

いるのか。

いずれにしても好都合だ。このまま時間が過ぎていくなら応援が到着する。そうなたらこちらの勝ちだ。

後は防御を彼らに任せて、A Aランクの術者が無傷のまま戦闘機人2体を撃破できる。

「副長、ガジェット達が集結、錐行陣形を取りつつあります」

ロングアーチから送られてきた情報に目を通す、確かに錐行陣形（三角形の陣形）を取りつつある、先頭はⅢ型だ。防御の厚いⅢ型を盾に突進し、こちらの防御を強引に突き破るつもりだろう。

一般隊員達の攻撃ではⅢ型には、ほとんど効果がないのでこのままでは突き崩されてしまう。

「アース1、アース4、防衛ライン後方で迎撃準備！」

「ああ、なるほど」

「了解！」

交替部隊の二人が後方に下がる。他の局員達には突撃に合わせて、防衛ラインの中央から観音開きの扉が押し広げられるように、後退していくよう命じた。（一の字の防衛ラインを11のように縦2本の線に変化させるような動き）

ガジェットが突進してくる。局員たちはなんとか指示通りに動いてくれている。が、流石にマタドールが闘牛をかわすようにとはいかないらしく、攻撃をかわしているのだから、ただ逃げているか側から見ていると区別がつかないありさまだった。

それでも大きな怪我人を出さずにガジェットの突進をかわし切った。

「よし、アース1、アース4」

「起動」

アース4の送った小さな信号を受けて、カード型の簡略デバイスにこめられた術式が目を覚ます。

局員たちの防御ラインを突破し、六課施設になだれ込もうとしていたガジェットの群はアース4の作った即席地雷原に飛び込む形になった。先頭のⅢ型が炎熱魔法で吹き飛ばされる。爆発に巻き込ま

れなかったⅢ型は、アース1が地面を槍状に変化させ串刺しにしていった。二人はこのために退いていたのである。

後に続いていたⅠ型は爆煙の中に飛び込むのを危険と判断して停止したところを、局員達に狙い撃ちにされていった。ちようど地雷と局員でコの字型に半包围した形だ。三十秒もかからずにⅠ型も全て破壊された。

「ヤッター!」

「俺達でもやれるぞ!」

「よっしゃー」

局員たちが歓声を上げる、3回の攻撃を撃退できたことで局員たちにも自信がついたようだ。勢いづいて目がランランとしている。

その中でヴィルヘルムにシヤマルから念話が届いた。

「副長、戦闘機人が動き始めました」

1-1 その日、機動六課（B面） 後編

「敵、第三波、撃破！」

通信担当のアルトの声が弾んだ。ヴィルヘルムの指揮を見るのは2回目だったが、正直、彼が事務系の幹部なのが信じられないほど見事な戦術だった。

ヴォルケンリッターの二人に至ってはまだ一発も魔法を放つておらず、余力を残している。

（このまま、勝ってしまうんじゃないかと、甘い考えまで浮かんできたところを、グリフィスの声が邪魔をした。

「状況確認！」

現在の六課の戦力は小隊3つと分隊1つ一個中隊弱だ。

小隊は交替部隊1分隊、警備分隊（機銃手隊）1分隊、ミッド式一般隊員数分隊、ベルカ式一般隊員数分隊で構成されている。（以下3小隊をエア小隊、グランド小隊、アース小隊と仮名）

残りの分隊はヴィルヘルム、シャマル、ザフィーラの戦闘機人対応分隊だ。たった三人で分隊とは大げさかもしれないが、しっかりとした目的を持った集団なので分隊と呼称するべきだろう。

この三つの小隊をどの方向からガジェットが来ても六課隊舎を守れるように配置していた。

副長達は戦闘機人に最も近い小隊で指揮を取っていた。もちろんその間にも他の小隊と、ガジェットとの小競り合いが起こっていたが、被害はほとんど出ていない。アルトから見るとまだまだ余力があるように思える。

だが、戦闘はめまぐるしく状況が変わっていくもの。

「副長、戦闘機人が動き始めました」

シャマルの念話を捉えてサーチャーを確認する。

確かにこちらの迎撃エリアの外で停止していた戦闘機人がガジェットを引きつれ接近してきている。

「映像を回して」

オペレーター主任であるシャーリーが指示を出し、拡大された映

像が空間モニターに映し込まれた。

シャーリーは映像を睨みつけるように観察し始めた。デバイスマイスターでもある彼女なら相手の武装やガジェットの形状からでもある程度能力を割り出すことができる。

結果、戦闘機人の一名は接近戦タイプ、一名はステルス性の高い装備をしていることから、中距離から長距離での戦闘、もしくは支援をするタイプとあたりを付ける。ガジェットのほうは簡単だ、I型の重装タイプこれで間違いない。

ガジェットは当初、デバイスマスター達から余剰スペースが多すぎると考えられていた。要するに中身がスカスカだったわけだが、今ではその理由も簡単に説明できる。機能の増設用のスペース確保のためだ。

現に初めて管理局世界にガジェットが現れた時と比べると、かなり性能が上がっている。だが、どうやらそれも打ち止めのようなのだ。機体の外部に追加の武装が見えている。

シャーリーはその情報をまとめてヴィルヘルムに送った。

「副長、武装を追加したガジェットは攻撃力を増加していますが、防衛は従来型と大差ありません」

「わかった」

シャーリーからの情報を聞いてヴィルヘルムはすぐに部下達に指示を出した。ミッド組とベルカ組を組にしてベルカ式を防御に専念させ、ミッド式の射撃で仕留めていくことにする。攻撃力の高い相手に迂闊に近づくのは危険との判断からだ。

エア小隊もヴィルヘルムの指示にならない攻撃を開始した。しかし、「なにー！」

「かわしたー！」

エア小隊が相手をしていたガジェット達の動きが急に良くなり攻撃をかわし始めた。無人操作から有人の遠隔操作に切り替わったようだ。

ホテル・アグスタで召喚士が使ってきた魔法だ。

「召喚が来るぞ！」

「副長に報告！」

地面に四角形の魔法陣が浮かび上がり、巨大な甲虫型の召喚虫『地雷王』が現れ始めた。

報告を聞いてヴィルヘルムが怒鳴った。

「シヤマル、ロングアーチ、広域サーチ急げ！」

「は、はい」

ヴィルヘルムの声には焦りの色がある。これはただ事ではないと、シヤマルは急いで探査魔法用意しようとしたが、途中で防御魔法に切り替える。

「IS発動、レイストーム」

少年型？（シヤマルにはそう見えた）の戦闘機人の足元に魔法陣状のテンプレートが出現し、手のひらには緑色のエネルギーが集中していく。

「クラールヴィント、防いで！」

光が弾け、放たれた拡散砲をシヤマルの防御呪文がしっかりと受け止める。双剣の女性型戦闘機人がシヤマルの邪魔をしようとしたが、これはザフィーラが間に入って阻止した。

二人の連携は見事だったが、今のヴィルヘルムにはそれを褒めるような精神的余裕はなかった。

（本部を攻撃していた召喚士が、合流してきた！味方の来援を待つつもりが、相手に同じ手を打たれてしまった！なら敵の戦力は最大で！）

ヴィルヘルムの恐れはすぐに現実のものになった。市街地に推定Sランク相当のエネルギー反応が現れた。とたんロングアーチが騒ぎ出す。

「砲撃のチャージ確認」

「どうして今まで、気がつかなかったんだ」

「こちらのサーチャーの死角にいたようです」

本来なら地上部隊からの情報連結で死角をカバーできたはずだっ

たが、ハッキングと混乱の影響でカバーしきれないエリアが出来ている。情報戦を得意とする戦闘機人も来ている証拠だ。

遙か彼方、ここからだと言山のようにしか見えないビル群の1つがキラリと光ったように見えた。

ヴィルヘルムに出来たことは叫ぶことだけだった。「伏せろ！」と叫んだ声も超アウトレンジからの砲撃が起す爆音にかき消された。凶悪なまでのエネルギーが、グラント小隊が守っていた防衛ラインに突き刺さり、ガジェットごと局員を薙ぎ払った。

「そんな…」

どんなに強力な治療魔法を使っても、死者を蘇らせることはできない。

シャマルが思わず茫然とすると、ヴィルヘルムが射撃魔法を発動させた。

「ガンド・ランツァ」

四つのランサーはシャマルをかすめ、立ち尽くしていたシャマルを狙っていた戦闘機人に迫るが、双剣の戦闘機人は空中に逃れた。

「ドレーウング」

ヴィルヘルムの呪文で、かわされたランサーがその場でクルツと向きを変え再度戦闘機人に襲いかかり、戦闘機人の張ったバリアーに接触して爆発した。

「シャマルー」

もう一人の戦闘機人と対峙していたザフィーラが叫び、シャマルはようやく正気を取り戻した。

これでこの戦闘機人は抑える事が出来る。とにかく状況を確認するのが先決だ。ヴィルヘルムがロングアーチに確認させると、ルキノとアルトが震えながらも被害状況を調べ、次の瞬間には大声を出した。

「生きてますー！みなさんー！」

「グラント小隊は壊滅状態ですが、人的被害は重軽症者だけです！」

砲撃は非殺傷設定だったようだ。負傷者の大半は吹き飛ばされた

衝撃や、飛んできた瓦礫や破片怪我を追ったものが大半だった。

二人の戦闘機人と対峙しながらヴィルヘルムも安堵したが、彼らが依然として命の危険に晒されていることには変わりはない。

非殺傷設定といえども砲撃が2発、3発と続けばどうなるか分かったものではないし、負傷者のなかには手当をしなければ危険な者もいるだろう。

「ロングアーチ、フロントメンバーとの連絡は！」

「とぎれたままです！」

「とにかく、周囲のスキヤンだ！地下を探るのも忘れるな！」

状況から判断すると確認されている戦闘機人の中の砲撃型、情報戦型が増援にきているようだ、あるいは高速機動型、物質潜行型の戦闘機人が増援に現れる可能性もある。

これ以上、不意打ちを受けたらもうどうすることもできない。

(今の配置じゃ、対応できない。しかし…)

思考する間にも状況が悪化していく、防衛ラインの外側に小型の召喚魔法陣が現れガジェットが現れ始める。グランド小隊を失ったこともあり、これで戦力差は2倍以上なってしまった。

(くそ！2倍も戦力差があつては戦術の入り込む余地はない。こんなことなら危険を冒してもシャマル達を先行させるべきだった。それにしても地上の連中、混乱しているのはわかるが、もう少し根性を見せられないのか！いや、今はとにかくグランド分隊を救出することを考えろ)

ヴィルヘルムは地上部隊に対する愚痴に成りかけた思考を抑え、対策を考える。

救出作業を行っている数分間の間は、ザファイラの広域防御に頼るしかないさそうだ。強力な防御魔法でガジェット達を寄せ付けず、その間に救出作業を行う。

しかし、敵には攻城攻撃と言うべき大型召喚虫(地雷王)、拡散砲(レイストーム)、長距離砲(ヘヴィバレル)この三つはいくらザファイラといえども同時に防ぎきるのは難しい。これらに対抗する措置が必要だ。

地雷王は長距離攻撃が出来るタイプではないので、エア1、エア4が狙撃で足止め。ガリユーと呼ばれている召喚虫が出てきた場合はエア2、エア3の二人で抑えることが出来るだろう。拡散砲はシヤマル。長距離砲はヴィルヘルム自身とアース1、アース4で対応する。グラウンド小隊の救出が完了次第、ザファイラは広域防御を解除そのままシヤマルの援護。

戦い慣れていない一般隊員達が六課の外で戦っているのは、相手が展開する十分な空間的な余裕があるので一気に押し潰されてしまう。となると警備分隊の指揮で、防御システムを利用して六課隊舎内に引き込み戦力を分断、各個撃破を狙うのが最もまともな戦法だろう。

アース2、アース3は高速機動型、物質潜行型の戦闘機人が現れた際の予備兵力として、隊舎内に残ってもらう。現れなかった際はそのまま一般隊員の支援に回る。

攻城攻撃対応のため外に残る隊員達は、ほぼ孤立してしまう状態になるが、何とか時間を稼いでもらうしかない。

(結局個人技に頼ることになるとは！なにが『備え』だ！情けない！) ヴィルヘルムは自分自身を殴り飛ばしてやりたい。と、いう顔をしながらかんたで指示を出す。

指示を聞いたザファイラは、
「ヴィルヘルム、10分持たせる」

それだけ言うと雄叫びをあげ、広域防御を展開した。

ヴィルヘルムは配置を変えるため部隊を引かせながら、各分隊長に念話を送った。

「各分隊長、何分かかる」

「3分で配置変更可能」

「2分でやれ！」

そして、自身のデバイスの待機モードを解除する。

「目覚めよ、ドルンレースヒエン」

うめき声や泣き声しか聞こえなかったのに、励ます声が聞こえてくる。

グランド3が目を開けると、ぼやけた視界の中に救出に来たアース小队と補給班達が倒れたグランド小队を助け起こしている姿が見えてきた。

指揮を取っているのは、大槍を持ちプレートメイル型の騎士甲冑に身を包んだ背の高い近代ベルカの騎士、ヴィルヘルムだ。

「何やってやがる…副長、こいつは『友釣り』だ」

『友釣り』とは、まず、狙撃や爆弾などで敵の誰かに怪我を負わせ動けなくする。傷ついた仲間を助けに来た救出者を致命的な一撃で攻撃する。と、いう非情な戦術の1つだ。

こうしている間にも、こちらを砲撃してきた戦闘機人は砲撃をチャージしているに違いない。

グランド3はヴィルヘルムに警告するため大声を出そうとしたが、脇腹に激痛が走り虫の鳴くような声しか出ない。肋骨の何本かは確実に折れている。

「砲撃チャージを感知」

アース1がサーチ系の魔法を使い戦闘機人の様子を探り報告している。

グランド3にはアース1の女性らしい高い声が死刑宣告に聞こえた。

自分のいた小队を吹き飛ばした砲撃はSランク、隊長や副隊長クラスの魔力がなければ防御するのは不可能だ。副長が魔法の腕前を隠しているのは気がついていたが、流石にそこまでの魔力を保有しているなら騒ぎになっっているはずだ。

「アース4、威力強化」

「了解！」

アース4の強化魔法の補助を受けると同時に、敵の砲撃が放たれる。ヴィルヘルムが砲撃魔法で対抗するがやはり威力が違いすぎる。

グランド3の視線の先で砲撃同士がぶつかり…、合わなかった。

ヴィルヘルムの砲撃は遥か上空に外れ、戦闘機人の砲撃は六課の敷地に面した海面に落ちて巨大な水柱を立てた。

戦闘機人の攻撃はSランクの砲撃とはいえ、数キロ先からの攻撃に

は精密な計算が必要だ。様々な現象のチョットした変化で狙いが大きく逸れることがある。ヴィルヘルムはそれを利用し、互いの砲撃を干渉し合わせることで狙いを外させたのである。たとえるなら剣術の受け流しだ。

「アースー、敵の次弾は幻術とのコンビネーションだ」

「わかっています。すでにロングアーチから幻術パターンのデータを受け取っています」

「よし。救出部隊、砲撃を恐れるな！あと数名だ、助け残しを出すなよ！」

グラント小隊を救出に来たアース小隊は、ヴィルヘルムに叱咤激励されながら負傷者を搬送している。グラント3も涙と鼻水で顔をぐちやぐちやにした補給班の士官に、助け起こされながら呟いた。

「ち、副長め。いい腕しているじゃねーか」

六課隊舎内がにわか騒がしくなってきた。

武装隊の最新輸送ヘリ、JF704式のハンガーに続く隔壁を全て閉鎖したヴァイス陸曹は、他の隔壁閉じるため走りながらそう感じた。

どうやら、副長は施設の無事を諦めて人の被害を減らす戦い方をするつもりようだ。いつもは施設やデバイスを手荒に扱うと「官品愛護の精神はどうした！」と怒り出す裏方らしからぬ大盤振る舞いだ。

最後の隔壁を降ろし終えると、三つのひし形のワンポイントが入った作業服の女性とすれ違った。数秒もたたないうちに女性の向かった先から、次々とケガ人が運ばれてくる。

そのなかの一人は年長の交替部隊隊員グラント1だった。彼は他の局員に肩を貸してもらいながら歩いていたが、限界が来たらしいガクツと膝が折れる。

「あぶねえー」

ヴァイスが咄嗟に肩を貸している隊員の反対側から支え、そのまま比較的になんと考えられている区画へと連れていく。

そこではすでにバックヤードスタッフが避難しており、衛生員

(シヤマルの部下)と負傷者の手当てをしていた。人手が足りないの
であろう、シャーリーやアルトも駆けつけている。

グランドーを寝かせると一緒に彼を運んできた局員は「あと、お願
いします」と言い残すと衛生員に彼の容体を伝えに行った。

ヴァイスも元武装隊、応急手当ての心得ぐらいある。ここで負傷者
の手当てをしていた方が部隊のためになるだろう。と、考えグランド
ーの傷の具合を確認しようとする。と強く腕を掴まれた。

「若いのに、こんなところで衛生員のまねごとか？」

グランドーがヴァイスの腕を掴み、荒い呼吸をしながら問いかけて
いた。

経験豊かな目がヴァイスを見ている。

「いや俺は……」

なぜか、「そうです」とか「それが最善です」と言えず、何を言いた
いのかも言葉にならず、名前の付けられない思いだけが空回りする。

ヴァイスの様子を見て、グランドーは笑った。彼とってはヴァイス
の思いなど一目瞭然なのだろう。

「俺はお前が初等科の鞆を背負っているときから管理局で飯を食って
きた。おかげでいろんな魔導師を見てきた。辞めていく奴、同じこと
を繰り返す奴、強運が続く奴、そして……」

長く話して疲れたのか、グランドーは大きく深呼吸をした。

「そして、立ち直る奴」

「俺も……」

「立ち直れると？」とは、続けられなかった。グランドーは気にせ
ず、

「俺の知っている限りでは、立ち直ったのはそう願っている者の中か
らしか出てこなかったがね」

衛生員が来て、グランドーの手当てを始めた。グランドーは持って
いた汎用型デバイスを置く。と目を閉じて身を任せている。

「こいつを見てやってくれ！」

ヴァイス達のいる区画にエア小隊の負傷者が運ばれてきた。グラ
ンド小隊の救出が終了しガジェットとの戦闘が再開し始めたようだ。

隊舎内からも小規模の爆発音が聞こえ始めた。

「誰でもいい！魔導師ランク保持者はいないか！」

負傷者を連れてきた局員が大声で叫ぶ。ここで戦況を伝えても戦闘能力のない局員が不安がるだけだ。ヴァイスは局員の腕を掴んで区画から離れると戦況を聞いた。

聞く限りだとエア小隊は押されつつある。召喚士のガジェットが強化されているうえに、戦闘経験の浅い一般隊員だけでは連携も取りにくいようだ。

「クソッ！」

気が付くとヴァイスは区画内に戻り、グラウンド1が使っていた汎用型デバイスを掴んでいた。

妹の巻き込まれた事件が頭を掠める。あの時の緊張、呼吸の乱れ、魔法弾を放った感触…。

「借りていきますー！」

ヴァイスはエア小隊の守っている区画へ走りだした。

「ビビってる、場合じゃねえよな」

槍に貫かれてガジェットⅢ型が機能を停止し地面に転がった。

「5、4、3、2、1、今」

「ヴァナル・ガンド」

マルチタスクを最大に活用し、砲撃用の魔力のチャージとガジェットとの戦闘を同時に行っていたヴァイルヘルムが砲撃を放つ。何度目かの砲撃は再び海上へ落ちた。

ヴァイルヘルムの砲撃は出力射程において敵に劣っていたが、その分チャージ速度において勝っていた。もし敵が距離を詰め受け流しが出来ない距離に移動したとしても、早さに勝るこちらの砲撃で先に攻撃することが出来る。

また、敵は幻術を駆使し砲撃の個所を欺瞞していたが、六課のオペレーターが制作した幻術の解析は完璧に機能し、アース1が砲撃場所の特定するのを助けていった。

六課は何とか拮抗状態を保っていた。

(拮抗しているがそれだけだ。もうすぐ支えきれなくなってしまおう。私もとうとう地金が出てきたか)

苦々しく追い詰められていることを認める。すでに自分自身という最後のカードをきってしまった。これ以上戦力投入をされたらもうどうしようもない。何とかこの場を切り抜けてシヤマル達と合流、敵を各個撃破出来る方法はないか考える。

その間にも戦闘は続く、密集隊形でガジェットを倒しながら、アース1に聞く。

「敵の砲撃が来るまで、あと何秒だ!」

「現在、チャージは止まっています」

「見失ったのか!」

いま、敵が攻撃の手を休める理由はない。ウイルスヘルムはアース1が敵を見失ったと考えたが、アース1はキツパリ「観察眼には自信がある」と否定し、アース4に軽口をたたく。

「ガジェットだけなら軽いわね。休憩よ、休憩。ねえ、コーヒー入れてくれない」

「豆が切れている。缶コーヒーで我慢しな」

この軽口で勝機が見えた。いそいでデバイスに計算をさせる。

「フロイライン、戦闘機人の反応から計算しろ、敵はあと何発打てる」
こちらが疲労しているように戦闘機人のエネルギーも無限ではない。特に砲撃型は大出力砲撃を地上本部制圧のために何発も放っている。その分力尽きるのも早い筈。

案の定、愛機はあと数発で力尽きるとの計算結果をはじきだした。ならば、相手を休ませてやる必要はない。

「フィン・シユラーク」

数本のランサーが1つにまとまり、長距離用のランサーになり、シヤマル達の相手をしていた戦闘機人に放たれた。遠隔操作可能なランサーを避ける為、戦闘機人の機が一瞬逸れる。その一瞬を見逃すヴォルケンリッターではなかった。

シヤマルのバインドが拡散砲型を捉え、フォローに入った接近戦型をザフィーラが体当たりして弾き飛ばした。2機は空中で衝突して

そのまま地面に墜落。ザファイラは『鋼のくびき』を横なぎに放ち止めを刺そうとしたが、戦闘機人はこれを大量のガジェットを盾にすることによって防いだ。

一時的にはあるがシヤマル達の周囲のガジェットが数を減らす。

「砲撃チャージ反応！」

(よし、乗ってきた)

手持ちの弾数が少なくなった敵は長距離砲撃があることをチラつかせ、こちらの合流を防ぐつもりだったようだが、ランサーの固め打ち『フィン・シユラーク』を使えばここからでもシヤマル達の援護は可能だ。それを知った敵はヴィルヘルムに援護させないために、絶えず砲撃を打って援護を阻止してくるしかない。そして、弾数ならこちらの方が上だ。

敵の砲撃が来る。こちらにも撃ち返し互いの砲撃がねじ曲がる。砲撃を放つ隙はアース1、アース4が絶妙なフォローを入れてくれる。再び、砲撃のチャージ。あと、せいぜい2、3発繰り返せばこちらの勝ちだ。

「きや~~~~」

悲鳴がヴィルヘルムの計算を狂わせた。

六課隊舎の中から作業服を着た女性が飛び出してきた。その後ろにはガジェット数機。

「副長！」

「かまわん、行け！」

アース1が女性を助けるために走りだす。アース1からすでに敵のデータを受け取っていたヴィルヘルムも応じた。

アース4がこれ以上ガジェットを近づけさせないために防御陣を張る。陣の中にはヴィルヘルム、アース1、アース4、女性と数機のガジェットだけだ。

砲撃が水面に落ちる音とガジェット破壊が重なり一瞬耳が聞こえなくなる。

左の腿、脇腹、肩が熱い！

「…ッ」

「副長！」

アース4もこちらの異変に気付き声をあげた。そして、ヴィルヘルムに近づこうとして魔力反応のない衝撃波に弾き飛ばされた。

ヴィルヘルムが肩を見ると鋭い刃が後ろから肩を貫いている。刃は筋肉が締まる前に引き抜かれ、傷口からは血が流れ出す。

ヴィルヘルムは刃が抜かれたことでようやく振り向く事が出来た。

振り向いた先には、右手の親指・人差し指・中指に鋭い金属の爪を付けた作業服の女性がいた。少し離れた場所には背中に傷を負い倒れたアース1。

作業服の女性、ノラ・ドウは爪に付いた血をひと舐めすると、こちらを流し眼で見る。

「なかなかの丈夫な甲冑ですね。急所から逸れましたわ」

ヴィルヘルムは答えずデバイスを右腕だけで構えた。この女がいる限り敵は砲撃を撃ってこれられないはずだ。殺さず捉える事が出来れば、こちらが有利になる。

(アース1も私の傷も手当が出来れば十分助かる傷だ。手当てができれば…)

「その傷で、まだ、戦うおつもりですか？」

ノラは哀れなモノを見る目でこちらを見ながら爪を構えた。

「お辛いでしょくに、わたくしが…楽にして差し上げます！」

ノラが猫のように飛び出してくるのに合わせて、一足飛びで突進しながら槍を突き出す。

体重と魔力が乗った一撃は、ノラの爪の一本を折ったがこちらも攻撃の軌道が逸れ槍先はノラの体を掠めるに留まった。それでもこちらの反撃はノラの予想を超えたいらしい。大きく間合いを外した。

長期戦になればこちらに勝ち目はない。この機を逃さず攻撃に出ようとして、慌てて踏みとどまる。ノラが飛び退いた先にはアース1が倒れており、彼を人質に取られてしまったからだ。

急制動に傷ついた体が悲鳴をあげる。痛みは堪えたが大きな隙が出来てしまった。ノラが放った環状バインドがヴィルヘルムを拘束する。

「その傷でその動き…、ただ魔法の出来る文官というわけではないですよですね」

ヴィルヘルムが身動きを取れずにいることを確認したノラは、アース1の首筋に突き付けていた爪を短く戻した。

「そう言う、貴様は何者だ。まさか、ノラと言うのが本名ではないだろう」

ノラはクスツと笑うと答えた。

「オリヴィエ02と言えば分かるかしら」

言い終えるとノラはパツと駆け出し、一番近い海の中へと飛び込んだ。手負いとはいええこちらに近づくのは危険と判断したらしい。

魔力を高めバインドを引きちぎる。

「グリフィス！砲撃チャージは!?!」

「あと30秒です！逃げてください！」

グリフィスはほとんど悲鳴に近い声で答えた。周囲を見渡す、アース4は頭を振りながら立ち上がったところだった。アース1は倒れたままだ。受け流しはできそうにない。

小型ガジェットが近寄ってくる。

「アース4、アース1を担いで隊舎へ走れ！」

ランサーをガジェットに放ちながら大声で怒鳴る。怒鳴り声で意識がはっきりしたアース4が消防夫搬送法でアース1を担ぎながら聞き返してくる。

「副長は！」

「かまわん！行け！」

砲撃の直撃を許せば、アース1、アース4も六課隊舎もただでは済まない。

デバイスのカードリッジを3発使用し手持ちの魔法の中で最大の防御魔法を、起動パスワードの直接入力で展開しながら、念話でグリフィスに連絡を付ける。

「神の子よ！魔術詩人の言葉に従い、第1の槍を捨てよ！」

（グリフィス！指揮を引き継げ！）

敵の砲撃が放たれた。数キロ先から放たれたエネルギーの奔流が

防御魔法にひびを入れる。

アース4はまだ隊舎にたどり着いていない。

エネルギー波の勢いは止まらない。

「狂戦士よ！預言詩人の予言に従い、第2の槍を捨てよ！」

（やばくなったら下水道でも何でも使つて！逃げ出せ！）

ほとんど不可能と知りつつ、指示を送る。

防御呪文を強化、補強するが、焼け石に水だ。

「英雄よ！吟遊詩人の諷刺に従い、第3の槍を捨てよ！」

（六課隊舎など単なるハードだ！放棄してかまわん！）

アース4が六課隊舎内に飛び込み、防御システムが出入り口を閉鎖、シールドを張る。

再度の強化と補強、あと数秒しか耐えられない。

（お前達が残れば、六課の再建などいくらでも…）

砲撃の出力が上がった。戦闘機人が残りのエネルギー全てを使った一撃は防御を容易く破り、ヴィルヘルムを飲み込んだ。

「艦長！見てください！巨大な魔人が！」

「いや、あれはアルザスの真竜だ！」

戦闘開始から一時間強、六課近海に近づいた巡洋艦の艦橋から見える六課隊舎はひどい有様だった。ボロボロになっているうえにあちこちで火災が発生している。それに海岸付近には巨大に真竜が見える。この竜が敵なら、今すぐこの場から離れなければこの艦自体が危ない。

「オイ、反撃の準備をしつつ六課に呼びかけろ！あの真竜は味方か？」

通信が何とか繋がり、グリフィスと名乗る准尉が出た。救援に来たことを伝えると、一瞬声を詰まらせた。艦長には彼が何を言いたかったのかよくわかった。「遅すぎる」と、言いたかったのだろう。

それでもグリフィスなる若い准尉は礼をいうと、消火と負傷者の救助を要請し、真竜が味方であることを伝えてきた。艦長はそれに応じ、手持ちの魔導師隊を全て派遣した。

ガジェットIIには多術式魔力砲の死角を突かれ六課への低空侵入

を許し、増援に來ても時すでに遅い。ウイルスヘルムとの約束を果たせなかつたと感じていた艦長は、出し惜しみする気はなかつた。しかし、地上本部は混乱中、六課は破壊されてしまった。

「最悪の状況だな。次の手は『備え』であるのか？若造」

12翼、ふたたび（クロノとヴェロツサ）

ジェイル・スカリエツティの地上本部襲撃から明けて、新暦75年9月13日本局標準時AM0900。

時空の狭間に建設されている時空管理局本局、中央庁舎の中にある次元航行部隊大会議室にクロノはいた。

その大会議室では、通称「海」の主だった幹部を集めて緊急対策会議が開かれていた。

ドーナツツのような円卓に時空航行部隊総司令官を筆頭として、各方面隊を預かる方面隊司令官や遺失物管理部長クラスの面々が顔を並べている。

なかには混乱のおかげで会議に間に合わず、通信用の空間モニターを席に浮かべているものもいたが、時空管理局の2大実力組織のひとつ海の頭脳達が集結した会議は、最初から座礁しつつあった。

「そもそも、一個人になぜこれだけの兵力を有していたのだ、捜査部は何もつかんでいなかったのか?！」

「確かにミッド地上において、密輸が増えてきているといった報告は受けてはいた。だが、こういった事態と結びつけるのは不可能だった」

「それは些か認識不足していたようですね。我が出入国管理部では、ミッド密入する偽装船を数隻拿捕している。その中にはあの魔道兵器の材料もあると報告していたはずだ」

「数隻?あの数のガジェットを作るのに数隻で足りるはずがない。君たちの網はずいぶん穴だらけだな」

「それは非政府組織に不必要に特権をばら撒いている教会に言ってくれ。そのために査察部だろう」

「すべての非政府活動を調査するなど不可能だ。我々にはほかにも対処しなければならぬところがあるのでね」

「地上部隊か、ならなのおこと査察部は何をしていたのかと聞きたい。地上部隊上層部とジェイル・スカリエツティと繋がりがあつただろうことは明白だったはずだ」

「そういった動きを調査するには根拠になる証拠が必要だった。そういった情報を探し出すのは捜査部の仕事だろう」

「こちらも人手不足でね、スカリエツティのような広域次元犯罪者を取り締まるには、各方面隊の協力が必要だったのだが協力的ではなくてね」

「なんだと！」

「捜査権がないだの何だのと、何の情報提供も受けずになにを協力しろと言うのだ！」

「だいたい、なぜ我が艦隊を出撃させない。」

ジェイル・スカリエツティ一味に対する対策を話し合うはずの会議は、今回のこの騒ぎの責任の所在を明確にするとの名目で、責任の押し付け合いの場になってしまった。

「陸」でレジアス中將への査問が始まっているのなら、まだ中將を悪者にすることで意思の統一を図ることも可能なのだが、相手が地上の守護者いうこともあり「海」や「陸」の上部組織、安全保障理事会も査問の実行をためらっているようだ。

（唯一、積極的に事態の收拾に乗り出そうとしているのは、第9艦隊か……。思惑が透けて見えるな）

第9艦隊はその名のとおり第9管理世界方面を守護する艦隊である。この第9世界は先進管理世界ではあるが、政治体制やイデオロギーの違いからミッドチルダとはとにかく仲が悪い。

地球でたとえるならば同じ国連でもアメリカとソ連の仲が悪かったようなものである。この期に乗じて手持ちの艦隊をミッドチルダ方面に駐留させ、軍事的優位を確保することが目的かもしれない。

（とはいえ、今うかつに発言すると六課壊滅の責任と地上の混乱の責任を混同して攻撃されかねないし……。これはヴェロツサにアース使用の許可を任せて正解だったな。）

クロノがこの場にはいない友人のことを思っていると、会議室内の言い合いや話し声が、波が引くように小さくなっていく。皆、出入口付近を見ている。

「そういった論争は、よそでやったらどうかね？」

会議室に入ってくるなり発した、ラルゴ・キール榮譽元帥の一言で幹部たちは冷静さを取り戻したようだ。まだ、少々ざわついていた室内が静まり返る。

「クロノ・ハラオウン提督」

「はい、元帥」

ラルゴ元帥が名指しで指名して来たので、ある種のイヤな予感を感じながら、クロノは返事をした。

「今回のこの状況に対するプランを持っているかね？」

「はい、いくつかは」

「発表したまえ」

クロノは六課や騎士カリム達の調査内容を踏まえ、スカリエツティに対する六課主体の対応策を提示した。

その間、鋭い視線や悪意を感じてはいたが、ラルゴ元帥は二度頷き肯定した。

「うむ、では実行に移りなさい。君には1個分艦隊をつける、旗艦はクラウディア。今すぐ、準備にかかりなさい。私も細部を詰めた後に増援に向かわせてもらう」

「はい」

クロノは退出しながら思った。

(これで初動の対処は僕ができるな、六課にとっても悪くはない話だ。だが、それでも事態の收拾がつかなかった場合、僕たちの責任になる)ラルゴ元帥ほどの実力者ならクロノのプランと同じかそれ以上のものを腹案として持っていたはずだ。

だが、あえてクロノに提示させたということは、失敗した場合は初動対処のミスという名目でこちらを切るつもりだろう。

なにしろプランの立案者はクロノ自身なのだから・・・

いまごろ、会議室の中ではそのときのため根回しが行われていると邪推しても、被害妄想ということはあるまい。

(さらにスカリエツティとレジアス中將との繋がり証明されない場合は、この混乱の責任も六課に押し付けて来るかもしれないな)

食えない人だ。と、思いながらも六課が負けるところなど想像もしていない自分があることに気がつき、自分自身に呆れる。「いつの間にか、僕もあの三人に影響されていたんだな」

アースラの使用許可を取り付けた後はやてを待つ間、ヴェロツサは当のアースラが停泊している整備ドックに立ち寄った。

ドック内では整備員たちが、手際よく作業を進めている姿が見える。各班ごとの指揮を執っているのはずいぶんと年配の整備員だ。

（おかしいな？アースラは訓練名目で整備していたはずだから、新人整備員が多いはずなのに）

ヴェロツサが疑問を感じていると、全体の整備指揮を取っている制御室からの放送が聞こえてきた。

「よし、各種配線系のチェックは終了だ。外装に取り掛かれぐずぐずしている奴は、一緒に溶接しちまうぞ」

荒々しい声が放送で流れ若い整備員を急ぎ立てている。ヴェロツサには聞き覚えがあった。

（この声の主は去年定年退職をしたはずの整備監督の声だ）

クロノがアースラの艦長だったところ、任務を終えて帰ってくるアースラを出迎えてくれたのが、彼と彼の指揮する整備チームだったこともあり、ヴェロツサとも顔見知りだった。

「監督」

「ん、ロツサキッドか、久しぶりだな」

「ええ、退官パーティー以来ですね」

ヴェロツサが制御室を訪ねると、監督が向かい入れてくれた。無愛想な態度だが職人気質の彼はこれでも歓迎してくれている。どうやらアースラの整備指揮を執っているのは彼のようだ。

通常、アースラのような艦艇が建造されると、莫大な予算がかかるということもあり最低でも30年以上使われる。

彼はL級艦船の開発計画の時点から関わってきた整備員で、彼にとってはL級艦船は整備員としての人生そのものだ。

彼の指揮ならば安心して任せられることができる。

「あなたが整備をしてくれたとなると、はやて達も喜ぶでしょう。」

「ああ、あの訓練室をよくぶっ壊してくれた、小さい譲ちゃん達か？」

新品同然に整備したはずの艦を送り出すたびに壊された記憶が蘇り監督は顔をしかめた。

ヴェロツサが慌ててフォローをする。

「彼女たちはもう隊長ですよ。そんなに無茶はしません」

「あの嬢ちゃん達がね。どうりで俺もこいつ（L級）もロールになるわけだ」

「またまた、予備役とはいえあなたも彼女（アースラ）も現役じゃないですか」

「いや、おれは予備役じゃねえ」

「え、どういうことですか？」

予備役などの管理局員としての資格がなければ、場合によってはアルカンシエルを搭載するような艦艇の整備する許可など下りるはずがない。

ヴェロツサが聞いただと、現在の彼の立場は非常勤の嘱託教官だった。2年間の契約で整備員を教育する教官として招かれているそうだ。

ほかにもすでに管理局を離れて独立した整備員たちが仮契約で駆けつけているらしい。おかげで後数時間で出港準備が整う見込みらしい。

「この短時間で？」

「どうぜんだろ、みんなこの艦とは長え付き合いだ」

「ええ、この混乱のなか皆さんよく集まってくれました」

「ん、あらかじめ決まっていたことだろ？聞いてねえのか？」

「え？」

まったくはじめて聞くことに友人や姉が自分に話していない計画でも在ったのかと疑っていると、監督が続ける。

「六課の副隊長と聞いたか、あの背高ノツポ」

「ゲーニツヒ3佐」

「ああ、そんな名だったかな？俺もほかの連中もあの若いのに誘われた口でね。召集の連絡はロウランとかいう代理人がやったらしいが・・・」

「なるほど」

ヴェロツサの知らないところで六課の文官たちが動き回っていたらしい。

ヴィルヘルムは現在病院の集中治療室で手術中なので、連絡をしたのはグリフィスのようだが事前に根回しをしていたのだろう。

待ち合わせの時間になり、監督に挨拶を済ませるとヴェロツサは制御室を後にした。

（はやては部下に恵まれているな。あとははやてのやる気しだいか・・・）

落ち込んでいるようだったら少し元気付けてあげようと思いつながら、アースラを眺めていると背後から誰かが駆け寄ってくる足音が聞こえた。

振り向くとはやてがいた。

「はやて」

「ヴェロツサ、ごめんな。おまたせや」

一日中動き回っていたのだろう少し疲れが見える。

「さすがのはやても、ちよつと元気がないかい？」

「ん？、まあ、そやね」

はやては少し自嘲じみた口調で口を開いた。

「ギンガやヴィヴィオをさらわれたんは大失態や。部隊員たちにも怪我させてもうたしな」

はやては責任感の強い子だ。思いつめすぎてはいないだろうか？ヴェロツサは心配したが杞憂にすぎなかった。

「そやけど、持っていかれたもんは取り戻すし、今度は絶対ちゃんと守る」

強い言葉だ。そしてその意思も感じる。これがはやてだ。ヴェ

ロツサはうれしくなつてはやての頭を撫でた。

13 『決戦』へ!!

「……………」

暗くて何も無い場所にヴィルヘルムはいた。

いや、いたというのは正確ではない、何しろ自分の存在すら認識していなかった。

ただ、後になってもグリフィスが話しかけてきたのは、覚えていた。

「副長、聞こえていますか？グリフィスです。申し訳ありません。副長が奮戦してくださったにもかかわらず、六課を守りきれませんでした」

ここでグリフィスは言葉を詰まらせた。言葉にしたことで、こみ上げてきたものがあるのだろう。

「被害を報告します」

被害はひどいものだった。六課庁舎の防御システムはその機能を失い、管制機能もほとんど破壊されてしまった。基地というハードウェアとして何の価値も無い状態だった。

次に基地としてのソフトウェア、人の被害。こちらは比較的马シと言える。死亡者は0、重傷者の数も数名程度ですんだ。庁舎が攻撃された際、火災も発生したことも考えると、ハッキリ言つて奇跡の類だ。通常、単なる火災でも死者が出てもおかしくはないが、結果的に遊兵になつてしまったアース2、アース3の両名が負傷した隊員たちにシールドを張つて回っていたらしい。

だが、ギンガ、ヴィヴィオの二名が拉致されてしまった。スカリエツテイのことだ、すぐに殺されることはなくても、何かの実験の被験者にされてしまう可能性がある。一刻も早く救出に向かいたいところだが、スカリエツテイのアジトははまだ判明せず、地上本部も沈黙したままだ。

ここまで説明をしていたグリフィスに何か連絡が入ったらしい。

「次は吉報を持ってきます」

と言い残し病室を出て行った。

それから数日たったころには、ヴィルヘルムは意識が戻らないまでも、夢という形で状況を把握できるまで回復してきた。どういうわけだが、グリフィスを筆頭に見舞いに顔を出すものたちが全員、状況を報告して行くために鮮明な夢を見ていた。

今日も病室ということもあり遠慮がちなノツクの音とともに、はやてがやってきた。

はやては、先に見舞いに来ていたシャマルに声をかけた。

「シャマル、動き回って大丈夫なんか？」

「はやてちゃん、ええ、大丈夫よ。明日にはヴィータちゃんの体も見せてあげたいですし……」

シャマルは彼女自身怪我人であったが比較的軽症であり、医者としての使命感もあつたのでほかの負傷者の様子を見て回っていた。

「無理だけは、せんといてや」

「へっちららよ、このくらい。それに私はアースラには乗らないし……」
「だからこそや、シャマルには怪我をした。みんなのお守りをしてもらわなあかんからな」

はやてはそこでニヤツと意地悪そうに笑うと、ヴィルヘルムのベッドに近づくと顔をつつく。

「ほら、ここにもでつかくて手のかかるのがおる。普段、訳知り顔で、課長のデスクワークは効率的ではありません」なんて、いやみつたらしく私の仕事を取っていく癖に、今は私に仕事残してお昼寝中や」

「……………」

ヴィルヘルムが反論できないことをいいことに言いたい放題。シャマルが何も言わないのは、病院内で大笑いをするわけにはいかなないと笑いをこらえているからである。

はやては少しの間、悪口を並べた後、この数日間自分たちが本局から引つ張ってきた戦果を、中でも本局所属のミッド地上航空魔導師隊の一個大隊指揮を執ることを自慢げに語った。

管理世界において大隊というのは常設の部隊規模ではない。有事の際、戦闘部隊のとして編成される部隊単位だ。では、大隊というの

がどのくらいの規模の部隊になるかという点、まず一個分隊が約4〜10人、それが3〜4個分隊集まり小隊となり、小隊が3〜4個小隊集まり中隊、大隊となっていく。万年人手不足の管理局なので、平均して300人程度の魔導士集団が大隊と呼ばれる。

しかも本局所属の航空魔導士は地上に比べて比較的高ランク魔導士が多い。15〜16がAAAランク級の魔導士ということだ。その中に高度な対AMF戦をできるものが何人いるかわからないが、かなり心強い戦力となる。

「借り物の部隊やけど陣形や何やらは、副長との机上演習の作戦を使うから問題ない」

はやては交代部隊をアースラに乗せる気はなかった。交代部隊には重症のものもいるし、半数は地上部隊出身者、もしかすると本局所属の航空魔導士との相性が悪いかもしれない。

はじめて指揮を執る部隊で戦うことになるが、はやても伊達に大隊指揮の資格を持っているわけではない、戦闘指揮能力は十分高い。それに彼らもプロだ事前に陣形のプランを渡しておけば混乱することなく従ってくれるだろう。

「だから副長、心配あらへん。交代部隊とゆっくり休み」

はやてはそう言うのとベッドから離れた。グリフィスが復帰してはいたが、ヴィルヘルムをはじめとした文官たちにも怪我人が出てしまったため、はやてのこなさなければならぬ仕事は山積みだった。病院に顔を出せたのも、本局行きの転送装置が順番待ちになってしまったからだ。事件の混乱はこんなところにも出てきている。

（疲れている。なんて言ったらへん。まだ、やらなあかんことがある）

はやては六課襲撃の可能性を見逃していた自分を恥じていた。予言を覆そうとするあまり、ヴィヴィオの重要性を見逃していたのだ。もっと警戒していたらもう少し打つ手があったはずだ。事実、はやて、なのは、シグナムはほとんど遊兵となり戦闘機人や騎士達と接敵すらしていない。

（それにしても、ヴィヴィオをさらったんはなぜや。聖王家の血筋で

戦闘機人を作るにしても、遺伝子データさえあれば、別に今さらう必要はないはずや)

スカリエッツィの意図が分からず思わず顔に出してしまったらしい。シヤマルが心配そうに声をかけてきた。

「はやてちゃん、大丈夫？無理してない？」

「うん、心配あらへん」

あわてて取り繕いながらもはやてははつきり言った。

「事件が起こったなら真直ぐそこに向かっていくこと、エースとストライカーをそこに向かわせてあげること。それだけはどんな邪魔が入ってもやり遂げる。絶対に！」

「.....」

シヤマルはそれ以上何も言わなかった。自分の主は優しいが一度こうといったことについてはなにを言っても止めてくれない。こうなったらもう信じるしかない。

「ちゃんと休憩だけはとってね」

「うん、アースラに戻ったら少し休憩できるはずや」

シヤマルの助言にそう答えながらはやては病室を出た。

さらに数日、半覚醒状態のヴィルヘルムは長距離念話使おうとしていたがうまく回線が開かない。

(フロイライン、どうした。フロイライン ドルンレースヒエン。念話を増幅しろ)

デバイスに呼びかけても返事がない。破壊されてしまったのかとヴィルヘルムが本気で心配し始めたころ病室の外での騒ぎが聞こえてきた。

「困ります、避難をしてください」

「大丈夫さ、すぐ終わる」

ノックもなしにドアが開いて、騒ぎの張本人が入ってくる。無精ひげに眼鏡、スーツの上に白衣を着た科学オタクぽい容貌の男だ。

「あ、確か副長の・・・」

「やあ、・・・シヤマルさんだっただけ？」

空間モニターでニュースを見ていたシヤマルが対応をしようとする、かろうじて記憶のすみに名前があったといった感じで男は答えた。人の名前を覚えるくらいなら円周率を覚えたほうがいいと思っ
ていそうな態度だ。

あんまりな態度にシヤマルが呆気にとられていると、ヴィルヘルムに近づくと頬をひっぱたく。

「起きろ、『監査役』。よくも私の娘を傷物にしてくれたな」

「黙れ『ハカセ』、人のデバイスを勝手に持ち出すな。おかげで念話が
使えなかった」

目を覚ましたヴィルヘルムが答えると、ハカセは待機モードの懐中
時計の姿になったドルンレースヒエンを手渡した。

このハカセと呼ばれた人物はヴィルヘルムが民間時代、会社の立ち
上げに参加した一人で、技術部門だったこともあり、ヴィルヘルムの
デバイスを作ったマイスターでもあった。

六課襲撃を聞きつけて自分の作品ドルンレースヒエンの様子が気
になり、病院で無断で回収、修理を行った。彼の頭の中の心配の度合
いはヴィルヘルムが3割、ドルンレースヒエンが7割だった。

「副長、まだ起きちゃ」

「いや問題ない。それに課長たちも難儀しているようだ」

シヤマルが起き上がろうとするヴィルヘルムに近づくと、彼はそう
答えた。

消されずに宙に浮いたままの空間モニターからは突如として浮上
した巨大船のニュースが流されている。

シヤマルも本音を言えば今すぐに駆けつけたかったが、それははや
てに止められていた。それに医師として、重症をおっていたヴィルヘ
ルムを戦いに行かせる訳にはいかない。

規則にうるさいヴィルヘルムなら、交代部隊ともに待機命令が出て
いるといえれば止まるはずだと思ひ伝えたが・・・

「幹部とは命令違反をするときに、その判断をできるものがある階級
のことだ。ただ命令に従っているのでは曹士と変わらん」

と、あっさり命令を無視した。すると、

「お、副長、分かっていらっしやる」

「話せるわね」

「そうでなくては」

いつのまにか来ていた交代部隊の分隊長達がヴィルヘルムの意見に賛同した。

「シヤマル、まだ不満があるのならお前だけ置いていってもかまわんぞ」

「うっ・・・、ちゃんと命令をいただけます？」

「当然だ、いまならボーナスの勤評も期待していい」

「行きます！」

シヤマルはこの誘惑に負けた。欲しかった新作バックがある。

「ハカセ、お前何できた？」

「へりだ。管理局設計の民間用」

「貸せ、お前はほかの患者と一緒に避難しろ」

「ちゃんと返せよ、お前がいなくなってから『言い出しっぺ(社長)』がうるさくなりやがった」

「整備して返す」

ヴィルヘルムは振り返り、各分隊長に命令を出した。

「動けるものを集めろ、交代部隊、出動！」

14 Stars Strike +

「ガジェット混成編隊、こちらへの突入進路に入ってきます」

「12時方向からCW順に識別」

「敵最大射程まで10キロ」

「対空戦闘！火器管制室、艦橋指示の目標、攻撃開始！」

「航跡番号Ga-201とGa-206、主砲、攻撃開始！」

エースとストライカー達が各所で決戦を行っている時、六課新本部『アースラ』も激し迎撃戦を行っていた。主砲の反動がわずかに艦を揺らすとほぼ同時にコンソールに表示されたガジェットの編隊が消滅していく。

「Ga-201とGa-206、撃墜」

「ガジェット群G5、2時方向、距離30」

「右舷、多目的魔力誘導弾で対応、発射！」

主砲の死角、別の角度から接近してくる編隊に対して、グリフィスはすぐさま中距離誘導弾で対応したが、ガジェットの数が多すぎた。さらに別の角度からの編隊にさらに接近を許してしまう。

「ガジェット群G6、3時方向、ピッチ80度、直上、来ます！」

「多目的魔力誘導弾、続けて打て！」

「Ga-217、218、219さらに接近、フィールドに接触」

「防御フィールド、AMFで分解されていきます」

「敵弾発射！」

「近接防御火器、独自の判断で攻撃！」

ミサイルが至近距離で爆発。ミサイルの破片と防御火器によって破壊されたガジェットの残骸が、アースラに降り注ぎ小さな傷を作った。最も上の階層にいたならば雨音の様な音が聞こえただろう。

防御フィールドと各所に設置された機銃で、ガジェット達の攻撃を凌いだグリフィスはすぐさまアースラの各部署をチェックする。

「損傷軽微。各部署、問題ありません」

異常なしの報告を聞いてグリフィスは胸をなでおろした。が、想定していたよりも激しい攻撃がアースラ搭乗員の精神を削っていた。それに、ゆりかごを止める為に空戦戦力がすべて出払ってしまったのが痛い。今やアースラはスカリエツティに対する反攻作戦の旗艦と
言うべき存在だ、絶対に落されるわけにはいかない。

「陸士108部隊に連絡」

どこからか空戦戦力を回してもらえないか。と、苦心したグリフィスは部隊長のはやと繋がりのある陸士108部隊に地上の様子を訪ねた。

通信が繋がりに白髪で巖のような顔立ちの初老の男がモニターに映る。ゲンヤ・ナカジマ三等陸佐。陸士108部隊の部隊長にして、ギンガとスバルの父である彼は地上側の指揮官ながら、『海』や『陸』といった枠組みにとられない柔軟な思考をもった得難い指揮官だ。

『海』の見習い指揮官であるグリフィスが情報を求めても拒むことなく地上の様子を教えてくれた。

「ああ、市街地戦の防衛ラインは何か持ちこたえている。ガジェットどもが相手なら、なんとかならあ」

「はい」

「そつちの赤毛が鍛えてくれたうちの連中と航空隊の高町嬢ちゃんの教え子たちが最前線を張っている。だが現状でギリギリだ。ほかに回せる余裕はねえし。戦闘機人や召喚士に出てこられたら一気に崩されるかも知れねえ。」

「戦闘機人5機と召喚士一味は六課前線メンバーと交戦中です。」

「そうかい……」

洗脳されたギンガがスカリエツティの戦闘機人として戦いに参加していることはゲンヤも知っているはずだ。シャーリーが彼に告げた報告はギンガとスバル、姉妹同士の激突を示していたが、彼はそれ以上言葉を口にするとはなかった。

「どこもギリギリか……」

通信を切ったグリフィスは思わず毒づいた。陸士108部隊にはとてもこちらに回してもらえない戦力など残ってはいない。

(それでも副長なら、どこからか戦力をひねり出してきそうだ)

「新たな目標が3個編隊に散開しつつ接近、G7、G8、G9と識別
「迎撃用意」

グリフィスの思案は新たなガジエツトの出現に邪魔をされた。すぐに各部署に迎撃準備を取らせようとしたところで突然艦が揺れた。爆発だ、それもかなり大きい……

「主砲ビーム砲1番2番が沈黙!」

「通信妨害対抗装置に異常:いえ、破損、攻撃されています!」

オペレーター達は信じられないといった様子で状況を報告する。それもそのはず艦外の様子を確かめる為のカメラを使ってもエネルギーケーブルやアンテナを切断された通信妨害対抗装置以外何も映らない。

今、またアンテナの1つがひとりでに倒れていく。

「さらに敵機20、30まだ増えます!」

アースラの謎の状況などお構いなしにこちらに向かつてくるガジェットは増え続ける、不可視の攻撃による被害も。このままではA MFの影響ですぐに通信も使えなくなってしまう。

とにかく艦にとりついた何か。おそらくガジェットの残骸とともに、アースらに降り立ったのであろう目に見えない敵をどうにかしなければならぬ。グリフィスは意を決し指示を出した。

「総員隊ショック態勢、機関最大！ロール角、+360」

「ロール角、+360!!」

操舵を担当しているルキノが驚きの声をあげた。

ロール角+360ということは艦を360°横転させろということだ。グリフィスは艦を回転させて見えない敵を振り落とす気であるらしい。次元空間ならまだしも、惑星の重力圏内でそんなことを行えば艦内はメチャクチャになってしまう。

シャーリーもグリフィスの常識外れの指示に驚き彼の顔を見た。そこにはいつもの穏やかな表情はなく「負けてたまるか！」という強い意志を感じる。付き合いの長いシャーリーも見たことがない表情なので一瞬ドキリとしてしまったが、なんとなく理由も察しがついた。六課が襲撃された時のことを思い出しているのだ。

グリフィスは六課襲撃の際、同じII種キャリアの副長が前線に立ち、戦っているのをモニター越しに見ていることしかできなかった。もちろん、指揮所要員として恥ずかしくない働きをしていたし、魔導師でも騎士でもない彼が戦闘に参加できるわけではなかったが、結果的に六課を救えなかった悔しさが彼の心に滞留していた。それが普段は常識的、規範的な指示を出す彼に大胆で攻撃的な指示を出させている理由だろう。

しかし、アースラは老朽艦、重力圏内での無茶な操艦に耐えられるだろうか？

再び爆発、幾つかの機銃が破壊された。

迷っている時間はない。すでに通信回線にはノイズが入り、通信妨害対抗装置のアンテナが減っている影響が出てきている。ぐずぐずしているとは通信手段を失い、アースラだけでなくはやて達も孤立させてしまうことになる。

シャーリーは艦内にアラームを鳴り響かせ、警告のための放送を流す。

「こちらブリッジ、これより当艦は360。横転を実施します。各員は作業をいったん中止。退避ブロックに移動し・・・」

シャーリーのアナウンスの途中で再び爆発。

今度は何処がやられたのか。と、コンソールをチェックしたが新しい損害はなかった。かわりにカメラに見たこともないガジェットの残骸が映る。鋭利なカメラが付いた虫のようなデザインの機体が小爆発を起こして煙を出している。その機体のすぐそばで同型機体が現れる、その機体もまた体を震わせると小さな爆発を起こし動かなくなる。十秒もたたないうちに同じ現象が数度起きアースラの被害拡大が止まった。

シャーリーがカメラの映像を良く見ると、新型ガジェットは機体の真ん中を撃ち抜かれ装甲内部を焼き切られている。

援護？でもいったい誰が？

その疑問に答えるように通信が入った。

「よう、海のひよっこ諸君。こちらの声が聞こえているかな？こちらは地上第3情報収集隊、情報戦機ファルケ・アウゲン、君達の手伝いをさせてもらうよ」

声の主、ファルケ・アウゲンは強力な対通信妨害波を発生させ、通信回線を開き情報連結をしてくる。どうやら彼らは情報戦能力を最大に生かし味方をステルス飛行で連れて来てくれたらしい。

アースラのコンソールに、ファルケ・アウゲンと数機の味方が表示

される。その機体達からファルケ・アウゲンを中継して通信が入る。

「アルトセイム航空団第503隊だ。君たちにつく」

「湾岸警備第203パトロール中隊だ。貴君を援護する」

「こちら地上空挺旅団第二中隊だ。ごねた部隊長は拳で説得してきた。俺たちにも手伝わせてくれ！」

地上部隊の援護にブリッジ内が驚きに包まれる。特に地上空挺団が援護に駆けつけてくれるとは思っていなかった。彼らは地上本部長の直属部隊、海にとつての政敵と言っているいいレジアス中將の手足の部隊だ。

ざわめくブリッジを沈めたのはいつもの声だった。

「グリフィス！残りの兵装で右2時方向、中距離の編隊に攻撃を集中しろ！長、短距離は無視してかまわん！」

「了解！多目的魔力誘導弾、攻撃開始」

ヘリの起こす騒音に負けないヴィルヘルムの大声に、グリフィスが即座に反応し攻撃を指示する。

ヴィルヘルムが乗る巡洋艦搭載型のヘリがアースラの艦橋近くに接近すると、エア分隊が空中に飛び出し、グランド、アース分隊がアースラに飛び下りた。

「陸戦魔導師部隊はアースラに降下、対空防御！空戦魔導師は接近してくる編隊を削り取れ！」

あとに続く機体に乗った魔導師達もヴィルヘルムの指示で戦場に飛び出していく。

ほぼ同時に離れた所にいた敵編隊に光が飛び込み数機まとめて吹き飛ばされた。巡洋艦の多術式魔力砲の光だ。巡洋艦から通信が入り艦長の声が響く。

「今度は遅刻せずに済んだようだな」

アースラのセンサーでも巡洋艦の姿を捕らえる。もしアースラの降下ハッチからのぞき込めば、遙か下方に巡航艦が米粒サイズで見ることが出来ただろう。

生き残りは空戦魔導士が仕留めていく。しかし、対ガジェット戦に不慣れな地上の隊員達には窮地に立たされる者もいる。

「くそ、背後に付かれた！振りきれない！」

Ⅱ型に追われ逃げる空戦魔導士の姿を捉えたエア4は即座に相棒のエア1のデバイスに情報を送る。

「OK、任せな」

スコープと握把、そして、CVK792—Cカートリッジシステムを追加した狙撃仕様汎用デバイスを担いだエア1は短く答えると狙撃態勢に入る。スコープを覗きこむとデバイスは視界の中にエア4の探查魔法の情報をもとに、肉眼では姿を確認できない敵の姿も疑似的に表示してくれた。Ⅱ型は昆虫の様な機種を背負って飛んでいる。エア1はニヤリと、頬を緩ませる。

「ワン・ショット、ツー・ダウンだ！」

発射された魔力徹甲弾はⅡ型と昆虫型をまとめて射抜いた。

撃ち落としても、撃ち落としても、ガジェットは大量に現れてくる。幾つかの機銃が破壊されてしまったアースラの防御では空中で撃ち落とし切れず、1編隊に数機は取り付いてくる。が、ガジェット達の

幸運もそこまでだった。接近したガジェット達は、ヘリからアースラの艦上に降下し待ち構えていたグランド、アースの両分隊と地上空挺団の陸戦魔導師達に片づけられていく。

最も前に立ってガジェットを薙ぎ払っていくのは、グランド2、グランド4のコンビだ。地上空挺団の援護を受けながら、グランド2は支給品の槍型デバイスを改造したハルベルトでガジェットを両断する。

「直上より7機接近！」

地上空挺団のフルバックの声に反応して見上げると大型のⅢ型を先頭に数機が固まって突っ込んでくる。六課襲撃の際にも使われていた錐行陣形の応用だ。

それを見たグランド2は鼻で笑った。

「進歩の無い連中ね。グランド4、やれるわね！」

「ああ」

グランド4が弓を構えると魔力によって矢が精製される。鏃は四つに割れた変わった形をしている。

「おうー！」

気合とともに矢が放たれると矢は四方に飛び散り、投ガジェットを捕らえる投網状の結界に変化、ガジェット達を捕らえる。

そこにグランド2が追撃を掛ける。ハルベルトを構えるとその刃が振動し始めた。

「レゾナント・シユラーク」

振動をおびた斬撃が飛ばされ結界にぶつかり消滅する。不発…。

ではない、斬撃に乗せられていた振動が結界に共鳴、結界内で反射されながら増幅していく。内部のガジェットは最初何の変化も見せなかったが、増幅されていく振動に耐えきれなくなり最ももろい部分から順にひびが入っていき、最後は動力炉さえ耐えきれなくなり爆発した。

「すごい・・・」

縄張り意識が強いはずの地上部隊がその垣根を取り払い、見事に連携している。しかも、『海』所属の六課の援護をしてきている。

地上本部からの視察など、事あるごとに地上からの圧力を感じていたグリフィスは感動しながらも、ヴィルヘルムの手腕に驚いた。自然と疑問が口に乗る。

「副長、一体どうやって、これだけの戦力を集めたのですか？」

「集めてなどいない、私のしたことは現状をクラナガン外の部隊に流してやっただけだ」

ヴルヘルムによると、地上本部襲撃で出来た穴を埋めるためクラナガン近隣の部隊は、支援を目的として準備をしていたが、レジアス中将も本部に引き籠ってしまっていたため命令もなく、ゆりかご浮上の混乱で情報も届かず、動くに動けないでいた。そこに、ヴィルヘルムからの情報提供があり、よろこんで協力を申し出てきたというわけだ。

もともと本来ならば彼らの指揮権はヴィルヘルムにはないので、彼らはあくまで自主的に行動を起こし、たまたま作戦エリアが重なったという形を取っていた。

「それにしても地上空挺団まで、駆けつけてくれるとは思いませんでした」

ヴルヘルムはグリフィスのちよつとした偏見に苦笑いをした。

「勘違いしていないかグリフィス、地上部隊の全てがレジアス中將の強引なやり方に賛同しているわけではない。それに現場の局員たちの大半はこの世界を守りたくて管理局に入った者たちだ。陸だろうと海だろうとこの世界の為に戦っているものを助けるのは当たり前だ。違うか？」

「…いえ、違います！」

グリフィスは知らぬ間に偏見を持っていた自分に恥じ言った様子だったが、それを振りはらうように返事をした。

（とはいえ、現場の意見とその上司の意見が違うのは往々にしてありえることだ。地上本部からの命令がない以上、事後承諾してもらわないとシビリアンコントロールを犯したと言われかねない）

ヴイルヘルムはマルチタスクの1つを使い魔導士隊の指揮を取りながら思案する。

（そうなったとき六課が扇動したと追及をかわすには、レティ提督あたりの名前で次元航行隊法80条『緊急時における地上部隊の統制』を適応してもらうのが無難か？だが、それだと発令時刻以降の混乱の責任も彼女がかぶることになるな…、そのリスクを回避するにはレジアス中將を悪者にして責任を押し付けるのが一番だな。上手くいけばレジアス中將とその腰巾着どもを分裂させてやる事が出来る。レジアス中將のスカリエツティとの繋がりや犯罪性を証明することが鍵になるな…）

そこまで考えてヴイルヘルムはまだ戦っている最中だと言うのに、もう戦いの後の事後処理を考えていることに気が付く。

六課の隊長陣の中でそんなことを考えている者はいないだろう、彼女達は純粹にスカリエツティの犯罪を止めようとしているだけだ。それに比べて自分はどうか？六課の為と言いながら自分の保身を図ろうとしているだけではないか？そう考えずにはいられなかった。

（純粹でいられる年ではなくなったということか……。オジサン扱いされるわけだ）

ヴェルヘルムははやて達の純粹さを羨ましく思うと、やれやれと首を振って雑念を払い、戦闘指揮に意識を集中し始めた。

15ファイナル・リミット十

「スターズ4、N09逮捕、残り戦闘機人N04、一機！」

その知らせを聞いてから約50分戦闘指揮を執りながら、ヴィルヘルムは部隊を有機的なローテーションを組めるよう再編成した。今では六課以外の武装隊員達もガジェットのアタックに慣れ始めたようだ。常にチームで死角を補い、早々不覚を取らなくなっているため、1個小隊が予備兵力として待機している。

（我々が戦闘に参加してから約1時間、スカリエッティを逮捕したはいいが、攻略目標のゆりかごはまだ止まらずか…）

戦闘機人をいくら倒そうがスカリエッティを逮捕しようが、ゆりかごを止めることが出来なければ六課の勝利とはいえない。

ゆりかごは軌道上に到達してしまえば管理局の主力艦隊と正面決戦が出来るという。そうなってしまえばどちらが勝とうが甚大な被害が確実に出る。そうさせない為に発足したのが機動六課。

（今まさに六課の存在意義が問われているわけか…、あるいは課長は自身の存在意義を問うているかもしれないな）

ヴィルヘルムから見てもはやこの事件捜査に対する痛々しいまでの献身は危うく見える。

（自身が高ランク魔導師だと、課長の性格からいってそろそろ突入したがっているところだな…、悪癖が出てなければいいが…）

ヴィルヘルムが心配していると、はやてからの通信が入る。はやてはアースラの状態と残りタイムリミットを確認すると、

「防衛ライン現状維持。誰か指揮交替！今から私も突入する！」

案の定、突入を決意したようだ。しかし、指揮を交替する相手も定めていかなかったようだ。流石にこれはまずいとヴィルヘルムが通信に割り込もうとすると、先にアルトの通信が割り込んできた。

「八神部隊長、あともうちょっとだけ待ってください！」

本来彼女はオペレーターの筈だが、ヘリパイロットのヴァイス陸曹が六課襲撃の際に負傷してしまったため、臨時にヘリパイロットを務めている。

「大事なお届けモノを、今そちらに」

アルトははやての意見に全面的に賛成のようだ。はやての副官にしてユニゾンデバイスでもあるリインをヘリに乗せ、ゆりかごに急行している。

（指揮の引き継ぎもそこそこにエースが全て現場を離れると、普通の隊員は不安になるだろうに…）

六課のフロント陣はストライカーと呼んで差し支えないほどの成長を見せているが、いくら本局の武装隊員とはいえ、そういった魔導士の数は多くない。その上、ランクの高いエース級魔導士はすべて突入隊として、ゆりかご内部に突入している。各員の負担はいつも以上に大きき筈だ。ヴィルヘルムから見ると六課の隊長陣はそのあたりの感覚が希薄に思える。

（そのあたりのフォローをするのが私の仕事か…）

ヴィルヘルムはグリフィスに自分もゆりかごに向かうことを告げると、先任に当たる第203パトロール中隊の1尉を呼び出すと指揮を引き継ぐ。

「グリフィス、部隊間の連携だけは忘れるな！」

「はい」

「1尉、ロウラン補佐をフォローしてやってくれ」

「了解、まかせてください」

「予備兵力は、ヘリに搭乗。私に付き合え！」

ヘリをゆりかごに向かわせ、ヴィルヘルムはヴァイスに連絡を入れた。

「ヴァイス、そちらはどうだ！」

「問題なしッス。ギンガは無事保護。召喚士、こちらの戦闘機人は全員逮捕。こちらの人員も軽傷程度で問題ありません」

「機材の方は、借り物のヘリを壊してはいないだろうな」

「俺は六課のヘリパイロットですぜ」

まだまだ、アルトになんか負けないと、ヴァイスは笑った。

「よし、スターズ、ライトニング、両フロントをシヤマルと合流させ可能な限り回復させろ。各隊長の支援に向かわせる。特にスバルは最

優先だ！」

ゆりかご内は高濃度のAMFが張られている、導士や騎士では対応できない可能性がある。ヴァイスもヴィルヘルムの意図が分かったのだろう。先任下士官として補足を入れてきた。

「なら、ティアナにも足を持たせた方がいいツスね」

「用意できるか？」

「任せてくださいー！」

「手段は任せる」

これで方が一、はやて達がゆりかご内に取り残された時の備えは整った。改めて、彼我の配置を確認する。こちらのヘリがゆりかごに到着するのは、アルトから少し遅れて到着することになりそうだ。はやてが突入した後となると、後任と連携を取れるかどうかかわからない。

（到着早々、戦闘になる可能性も考慮すると。今のうちにいくつか陣形を伝達しておくか）

アルトとの通信のあとから数分、はやてはこちらに向かってくるJF704式を視界にとらえた。が、ガジェットの指揮を執っている指揮官もそのことに気が付いたようだ。ガジェット達の一部が縦陣（空戦では柱の様な陣形）を組み、こちらの包囲を破り合流を防ごうとしてくる。

対してはやてはこちらも部隊の一部に横陣（空戦では面の様な陣形）を組ませる。射撃が中心の現代の空戦において、この陣形なら正面に対して間合いを保ったまま火力を集中できる。その間にラインと合流、広域魔法でガジェットを薙ぎ払う事が出来る筈だった…。

「…えっ」

隊員たちの反応が鈍い。何とか陣形を整えたものの、隊員同士での相互支援が上手く出来ずにいるようだ。魔法弾の威力も少し落ちている。

（予想より早く局員たちが疲労してきてる。展開面積が広過ぎた！あかん、混戦に持ち込まれる！）

敵味方入り乱れての混戦状態になってしまうと、当然はやての広域魔法など使えない。しかも、局員が疲労してきているとなると今の陣形ではこちらが不利だ。ガジェット達の縦陣は左右の連携を気にすることなく、後方から次々と新手を繰り出してくることが出来たので、横陣形を崩されかねない。

(いま、ガジェットにへりが襲われたらしまいや)

遮蔽物が多い地表近くならばともかく、空中戦ではへりはガジェットII型のいいカモにしかならない。

(私の大魔力任せに防御を展開、ガジェットを食い止める)

ラインのサポートなしでそんなことをしたら、ゆりかご内への突入が出来なくなってしまうそうだが仕方がない。はやてが意を決しガジェット戦列に飛び込もうとした瞬間。

「弾丸陣型、各員、我に続け！」

無数のランサーがガジェットの頭上に降り注いだ。それを合図に矢印の陣形(空戦では円錐の様な陣形)をした部隊がガジェット編隊に突撃していく。先頭はプレートメールに身を包んだ現代ベルカの騎士。

「副長！」

はやてが驚いたのは一瞬のこと、すぐにヴィルヘルムの狙いに気が付き。部隊に3正射だけさせ後退させる。

その間に直上からの逆落として加速したヴィルヘルムの小隊は機動戦闘力Ⅱ量×速度の2乗の法則に従いガジェット編隊の中央まで突進、そこから左側面に突破してガジェット達を混乱させた。まるで騎士が敵を両断するように…、いや、ガジェットに槍を突き立て、返り血のごとくオイルを浴びながらも先頭を突き進むヴィルヘルムの姿は、そんな華麗な姿をしていない。どちらかと言えば、猛り狂った狂戦士が敵に槍を突き立てただけでは飽き足らず、力任せにその胴体を引き千切る姿のようだった。

ヴィルヘルムはガジェットの編隊の内部から側面に飛び出すと、ガジェット達が反応できずにいる間に陣形を組み直した。そのまま、愚

直に前進を続けるガジェットの先頭部隊に並走攻撃を仕掛けた。それが、後退、密集したはやての横陣の連携となりガジェット先頭部隊は瞬く間に消滅した。

先頭部隊を失ったガジェット編隊は穂先を失った槍のように、貫通力を失って動きを止める。ヴィルヘルムの小隊はそのまま、はやての横陣の脇を通り後ろに下がる。

（遮蔽物の無い空間、長い彼我の距離、合流と詠唱の為の時間。これだけそろえば…）

横陣とすれ違った時、はやてはこちらの意図を正確に察し、ラインとユニゾンをはたし詠唱を完成させている。ヴィルヘルムは知らぬうちに思考を言葉に出していた。

「八神はやてに敵はない！蹴散らせ、はやて！」

「まかせときい！」

ワルキューレのごとくシュベルククロイツを掲げたはやての魔力が膨れ上がり、砲撃魔法が展開される。

「響け終焉の笛！ラグナロク！」

轟音

それが収まった時、ガジェットは欠片一つ残さず消滅していた。

うおおおおおおおおおおお！

そのあまりの威力が、疲れていたはずの隊員達に興奮を与え、歓声や勝鬨が生まれた。

（戦いの流れを変える英雄の一撃だな。これで彼らは疲労を忘れ、勢いを取り戻す。このカリスマ、私にはない力だ）

はやてを賞賛しながらも、羨望が胸を焦がす。ヴィルヘルムはそんな自分をバカバカしく思いながらも、感情が胸を焼く感覚を数秒の間楽しんだ。

はやてが自身の状態を確認すると、ラインのサポートのおかげでブレイカー級の砲撃を放つてもまだまだ余裕があることが分かった。

（よし、突入するだけの余力は十分ある。指揮を交替したら突入するで、ライン！）

(ハイですう！)

自分の状態を確かめ指揮を任せようとすると、その相手がちょうど近づいてきたところだった。相手、ヴィルヘルムははやての飛行魔法スレイプニルを原型にした、現代ベルカ式の飛行魔法グルファクシの翼をはばたかせ、はやての前で止まると兜のバイザーを上げ敬礼して見せた。

ヴィルヘルムの顔を見たはやての形のいい眉が一度だけピクリと動く。

「課長、誠に勝手ながら、3等陸佐ヴィルヘルム・チェスロック・ケーンニツヒ以下交替部隊は、現時刻を持って指揮下に復帰させていただきます」

「うん、許可する」

散々暴れておいて何を、と、内心笑いながらもはやてはヴィルヘルムに合わせて敬礼を返しながら承認する。融合しているリインはその様子をくすくす笑っている。

「早速やけど、働いてもらうで！わたしは今からゆりかごに突入する、指揮の交替を！」

「了解しました。援護します！」

ヴィルヘルムは指揮交替のむねを全隊員に伝達すると早速陣形を整え命ずる。

「各員！斉射三発！目標突入孔、撃て！」

援護を受け突入しながらはやてはヴィルヘルムの指揮に舌を巻く。受け取ったばかりにもかかわらず、ヴィルヘルムは見事に指揮を執っている。

普通ならこうはいかない。命令の言葉や言い方によっては、部下達との意思疎通に齟齬が生まれてしまうことがあるからだ。ヴィルヘルムはそれを理解し、時にはスラングに近い言葉まで使って指揮を執る。例えば部下達にどう伝わるか、きちっと把握しているからだ。

(皆がついてこられるよう言葉一つ一つにまで配慮と計算がある。突

撃からすぐに並行追撃に移れたのは予め作戦を伝達して準備しottaからや)

ヴイルヘルムの指揮には独創性はなくとも、完璧に近い計算と準備が支える堅実さがある。はやてはヴイルヘルムと自分はタイプの違う指揮官だと理解しながらも、大きく溝を開けられたような焦慮に駆られる。

(はやてちゃん、ドライバーフィールドの出力が強すぎますよお！そんなんじやすぐに疲れちゃいますう！)

ラインの声にハツとして、ゆりかご内部のガジェット達を薙ぎ払う攻性フィールドを調整する。何時の間にか力を入れ過ぎていたらしい。

(アカン、アカン、反省は後や。今はヴィータとなのはちゃんとはよう合流せな)

はやてが突入後15分が経過、その間にゆりかごの動力炉がヴィータによって破壊され、戦闘機人の最後の一人NO.4クアットロも倒された。地上ではガジェット達が機能を停止し事態は終息に向かうかに見られたが、ゆりかごを守るガジェット達は別系統の命令で動いているらしい、周辺に片っ端から攻撃をし始めた。

(近寄る者はすべて敵、そう言っているようだ)

ヴイルヘルムはゆりかごが最終的な防御機能を作動させたと判断したが、その影響で最深部に突入したはやて達と全く連絡が取れない。最深部ははやて達の実力者でも無力化されるほどの高いAMFに閉ざされてしまったようだ。

現段階でもゆりかごは船速を鈍らせ本局の艦隊は十分に間に合うのだが、そのことが返ってはやて達を窮地に立たせていることに、ヴイルヘルムは焦れる。

(ミッド地上に住む数億の人間とゆりかごに突入した30人に満たない人の命。上層部は天秤にすらかけないだろう…)

「数億の人間の命の為に30弱の人間ごとゆりかごを沈める」それが不特定多数の人間が納得する常識だろう。しかし、ヴイルヘルムは

不特定多数ではなく当事者であり、少数より多数を守る理屈を理解はしても、納得するほど酷薄でもなかった。が、打つ手がない。

オーバースランクの魔導騎士が無力化されている以上、魔導士や騎士が何人いようとも対応できない。

(急いでくれーヴァイス)

ヴァルヘルムはエースにもストライカーにもなれない自分に腹を立てた。

16 約束の空へ十（前篇）

アースラからの情報が本局艦隊の到着を伝えてきた。艦隊は攻撃の布陣を整え攻撃の合図を今か今かと待ち構えている。

「美人とのデートじゃあるまいし、こちらが遅れてほしいと思ってる時に限って時間より早くきやがって！」

地上出身のヴィルヘルムに言わせれば本局の艦隊など遅刻してやってきては、地上の手柄をかすめ取っていくウスノロといった印象があつたが、艦隊を指揮している司令官は優秀な人物らしい。到着予定時刻より数分早く展開を完了させてしまったようだ。

（課長と友人でもある、クロノ提督ならば攻撃はギリギリまで引き延ばしてくれるだろうが、油断は出来んな。）

「突入部隊！状況知らせ！」

ヴィルヘルムが内部に突入した局員に状況を報告させると、途切れ途切れの通信で報告が返ってきた。

「ゆり…ごは休眠モードに…つたようです。」

「AMF濃…上昇！最…では恐らく完全…魔力結合が出来ません」

「破った突…孔が応急修理されていき…す！」

「八神2…との通信途…」

「各ブ…ツクの隔壁閉鎖！現…ではとても破…ません！」

どうやら、はやて達は完全な孤立状態のまま最深部に取り残されてしまったようだ。それを聞き2名の魔導士に護衛され、ゆりかごの外へと向かつていたヴィータが最深部へと引き返してしまった。と、護衛していた魔導士が報告してきた。ヴィータが完全な状態でも、最深部に入ってしまうえば二次遭難になるのが関の山だろう。ヴィルヘルムは突入部隊に互いの通信を中継させ合いヴィータと通信を繋いだ。

「なにをしている。ヴィータ3尉。脱出しろ」

「はやてを助けに行くんだ！邪魔すんな！」

「不可能だ。最深部では完全に魔力結合が出来ない。魔導士や騎士では救出支援は無理だ。命令だ、引き返せ」

「うるせえ！てめえが指図すんじゃないやねえ！」

ヴィータは完全に頭に血が上っているようだ。これではらちが明かないと判断したヴィルヘルムは、一旦ヴィータを無視する形で命令を出した。

「突入部隊へ、現在、AMF内でも活動可能な魔導士がこちらに急行している。彼女達の突入ルート及び、通信ラインの確保が君達の最優先事項だ」

ヴィルヘルムは再びヴィータと回線を繋ぐ。

「ヴィータ3尉、聞いての通りだ。ナカジマ2士とランスター2士がそちらに向かう。現在いるエリア内で突入ルートを確保してやれ」

戦闘機人たるスバルならば高濃度AMF内でも隔壁を破るだけの威力を十分出せるはずだ。具体的な作戦を聞いたことでヴィータは少し冷静になった。素直にとはいかないが了承した。

「…わかった」

「結構、それ以上の行動は許さん。二人は引き続きヴィータ3尉の護衛を。これ以上無理だと判断したら彼女を連れて引き返せ」

「了解」

ヴィータは自分のはやてを助けに行けないことが不満のようだ。本音を言うならヴィルヘルムも今すぐ飛び出していききたい気分だったが、今の状況では能力的にも立場的にもそれは出来ない。

彼は騎士道物語に出てくるような英雄ではなかったし、たとえ英雄と呼ばれるような者にも出来ないことはある。だからこそ、チームや組織というものに意味がある。組織の中で役割を決め、それを確実にこなす。一見してつまらなく無意味に見える役割を積み重ねることで、手の届かないモノに手を伸ばす、それがチームや組織の存在意義だとヴィルヘルムは考えていた。英雄と呼ばれる者は最後の一番目立つ役割をこなしているだけにすぎないとも…。

「あ、あれは…」

通信にアルトの声が聞こえてきた。ゆりかご右翼後方までへりを下げていたアルトはゆりかごに高速で接近してくる青いへりを発見していた。

「ヴァイス陸曹！」

「やつと来たか」

ヴイルヘルムは自身を守らせていた数名をへりの護衛に回すと、ゆりかごを包囲している他の隊員に命じる。

「デイガンマ分隊、救助チームの道を開く、動け…」

「待ってください。副長！」

スバル達の道を開こうとしたヴイルヘルムを止めたのはヴァイスの声だった。ヴァイスは迷いのない強い声で続ける。

「オレが内部への突入ルートを作ります」

「…」

ヴイルヘルムは任せることを一瞬ためらう。人事記録でのヴァイスの経歴、身内の巻き込まれた事故のミスショットのことを知っているからだ。通常、この手のトラウマは早々解決できるものではない。(確実性なら、他のものに任せるのが無難だが…)

「副長、やれます」

結局、ヴイルヘルムはヴァイスに任せた。全く根拠がないにも関わらず、ヴァイスの声にはこいつになら任せられると確信させるものがあった。

「わかった、任せる」

「了解」

ヴァイスのへりはゆりかご底部後方に近づくとハッチを開いた。スバルの移動魔法ウイングロードの届く距離までへりで接近して突入させるつもりらしい。

「行くぜ、ストームレイダー」

ライフル型のデバイスを構えたヴァイスが航空型ガジェットを次々と打ち落としていく。

「前に言ったなあ…オレはエースでも達人でもねえ。身内が巻き込まれた事件にびびって取り返しのつかねえミスショットもした。死にたくらい情けねえ思いもした…」

空になった弾倉を外し、新しい弾倉を填めるとストームレイダーがカートリッジを3発ロード。本来それほど高くないヴァイスの瞬間魔力最大値を跳ね上げる。

「それでもよー！」

ストームレイダーがヴァリアブルバレットを生成する間、ヴァイスの意識と照準が鋭く尖っていく。

「無鉄砲で馬鹿つたれな、後輩の道を、作ってやるぐらいのこたあできらあな！」

ヴァイスの撃った弾丸は迷うことなく、真っ直ぐに目標を撃ち抜いた。

「よし、行けー！」

赤いバイクに乗ったスバルとティアナがウインググロードを駆け上がっていくのを見ながら、ヴァイスは満足そうに笑った。

間もなく

「スカリエツティ本拠地、振動停止。突入隊及びライトニング1、ライトニング3脱出確認！」

艦隊オペレーターの声がルキノの通信に続く。

「最深部の機動六課メンバー…、全員脱出確認！」

先発の艦隊司令クロノがブリッチで安堵のため息をついているころ、同じようにはやて達がへりに收容されるのを確認したヴィルヘルムはため息をついた。が、すぐに命令を出す。ゆりかごはほぼ無力化できたが、まだガジェット達の残存兵力が残っている。油断は出来ない。

「各員陣形を崩さずに徐々に後退しろ！各回転翼は負傷者の收容！他の者は輸送機が来るまでへりの護衛だ！」

ヴィルヘルムの指揮のもと武装隊員が残敵を掃討しながら後退していく。次々撃破され数を減らしていくガジェット達…。

輸送機が到着し、ガジェットの掃討を終えた隊員達が輸送機に乗り込み始めたころ、空に変化が起こった。赤紫色のもう1つの太陽が現れ、数秒後遙か遠い爆音があたりに響く。シャリーリーの喜びの歓声がゆりかごの撃墜を知らせてくれた。

その後、ヴィルヘルムは借りていた小隊を解散し、アルトの操る7

04式でアースラに戻ると、騎士甲冑を解除する間もなく、はやてから休息を言い渡された。アースラにはヴィルヘルムや交替部隊の部屋も用意しており、ヴィルヘルムはあてがわれた個室に直接向かった。

巨大なアースラといえど戦艦の個室だ、そんなに大層なモノではない。六畳ほどの空間にベッドと小さなデスクがある程度だ。それでもヴィルヘルムはこの一人になれる手狭な空間に感謝し、その場に崩れ落ちた。

「…ッ！」

倒れたまま制服のボタンを外すと白いシャツに赤いしみが広がっているのが見える。

「傷口が開いたか…、やはり突撃の先頭は無理があつたか…」

視界が暗くなり、今にも気を失いそうだったが、床を這って個室に取り付けられた魔力プラグにデバイスを繋ぐ。

「フロイライン回復を頼む」

薄れかける意識で、待機状態のドルンレースヒエンが魔力プラグから魔力を吸い上げ回復魔法を起動するのを確認する。これでとりあえず死ぬことはないだろうと思った瞬間、ヴィルヘルムの意識は落ちていた。

部屋の中、微かな甘い香りに目を覚ます。

「ん、起きたん？」

小柄な女性がベッドの横に椅子を置き腰掛けていた。ここ一年ですっかり聞きなれてしまった声で意識がはつきりしていく。

いつの間にかベッドに寝ている。先程までの死にかけた状態で、ベッドに潜り込んだとは思えないので彼女が魔法で運んでくれたのだろう。

「副長、一つ言わせてもらってええか？」

「なんです」

はやての問いかけにヴィルヘルムが応じると、はやては意地悪そうに笑って言った。

「副長、意外とアホやろ」

怪我を押し出動。常識的に考えれば確かに自殺行為だ。しかし、怪我人に随分ないようだ。

だが、ヴィルヘルムもこの程度のことですら参ってしまうような神経をしてはいない。わざと驚いたような表情をして、教師が出来の悪い生徒に言うように言い返した。

「そんなことも知らなかったのですか？」

「前から知つとるわ！」

この言葉を聞いたはやては「(◇▽◇)ノな顔をして手の甲で叩いて来た。それがうっかり傷口に当たる。

「…ッ！」

「あ、ごめん」

顔をしかめたヴィルヘルムを見て、はやては慌てて謝った。残念ながら手荒な舌戦はまだ控えたほうがよさそうだ。

「それにしてもいつ気がつきました？」

「ん？そんな顔を見れば、一発や」

はやてはヴィルヘルムが無理をしていたことなどすぐに気がついてきたようだ。どうやらこちらの意地と面目を立ててくれたようだ。

「男の立て方を知っていますね」

「男のこき使う方法もしつとるよ。たとえばどつかのノツポは、この恩に報いる為、粉骨碎身の覚悟で働きます。とか、言ってくれるはずや！」

「…」

ヴィルヘルムが黙っていると、はやては手を取り繰り返した。

「言ってくれるはずや！」

「…」

「言ってくれるはずや！」

「…粉骨碎身、…頑張らせていただきます」

根負けしたヴィルヘルムが棒読みで答えると、はやてはドヤ顔でニタリと笑う。

「流石は副長、頼りになるわあ」

「それは、どうも」

言い負かされたヴィルヘルムが肩をすくめると、はやてはこちらと自分のおでこに手を当てる。

はやての小さな手が冷たく感じる。自覚していなかったが少し熱があるようだ。

「でも、頑張ってもらうのは、ちよう休んでからやね」

はやてが返事を待たずになにかを呟くと、ヴィルヘルムに睡魔が襲ってきた。

睡眠の魔法を掛けられたらしい。抵抗力が弱まっているためアツと言う間に瞼が重くなっていく。

「今はおやすみ、副長。頼…」

はやての言葉を聞き終える前に、ヴィルヘルムの意識は深い眠りに落ちて行った。

17 「副長の休日」 I

「みんなのいけず。覚えときい…」

ゆりかごとの戦闘から、2週間弱。はやては大量の書類仕事を終え、フラフラになりながら六課隊員寮に帰ってきた。提出期限がまだ先の書類も幾つかあり、本来ならこんなフラフラになるまで根を詰める必要はなかったのだが、はやては意地になって仕事に取り組んでいた。理由は、

「みんな揃って、なにが『部隊長がいなくても支援攻撃がなくなるだけだが、副長がいなくなれば飯も食えなくなる』や。『副長が平日1日休めば、六課は黄金週間になる』？ふん、見てみい、今日1日で書類仕事はおわらせたつたでえ！」

ヴェルヘルムの休日中、文官タイプの部下にからかわれたのが原因だった。

はやても一端の部隊長。別に事務処理能力が劣っているわけではないのだが、JS事件の陣頭指揮を取らなければならなかった為に、補給などの所謂裏方の仕事をヴェルヘルムに任せていた。

当然、はやてよりもヴェルヘルムの方が、その手の仕事の処理速度が速くなっていく。そのことを揶揄した愛情のあるからかいの言葉だったが、悔しいものは悔しい。

「副長が休んだせいや！責任取らせたる！」

病み上がりで疲れを見せたヴェルヘルムに強引に休暇を取らせたのは、はやて自身だったがその辺の事情は器用に忘れたらしい。

本来だったらこのまま寮に帰って守護騎士達に甘えるところだが、「シグナム達も悪い！揃いも揃って今日は帰れへんで、どういうことやねん！」

寮に帰っても家族が誰もいないのも怒りの原因らしい。シグナムは当直、ヴェータ、ザフィーラは検査入院中、リインは調整、シヤマもその付添で本局泊まりと誰もいない。要するに、さみしいのを怒りで誤魔化している。

(アカン、皆が家族になる前は結構平気やったんけどな…)

ため息をついて寮の玄関に近づくと、突然扉が開いて飛び出してきた人物達に押し倒される。

「ぶっ……！」

「ええっ！」

「きやつ」

ここは幹部寮なので幹部の誰かには違いないが、下敷きにされてしまったはやてには顔が見えない。

「だ、誰や?」

「んっ……」

「……ッあ」

相手を押しつけようとしたはやての手に柔らかいものがあたる。

(この左手の手からはみ出るこの感触、一方、右手は手の中に収まるコンパクトサイズ)

よく揉んで感触を確認してから、言葉にする。

「フェイトちゃんに、なのはちゃん?」

「はやてちゃん、大丈夫?」

「ごめん、はやて」

正面衝突の相手はフェイトとなのはだった。

その場にしゃがんだ姿勢になった二人に、起こしてもらいながらもはやては尋ねた。

「二人ともどうしたん?そんなに慌てて?」

「フェイトちゃんのなのはと所に一緒にいる行つたと筈だった思ってたヴィヴィオがヴィヴィオがいけないの見当たらないんだよ。」

フェイトとなのはは2人仲良く同時に答えてきた。常人だったらさっぱり意味が分からなかっただろうところだが……。

付き合いの長さなのか、それとも鍛えられたマルチタスクの賜物か、はやてはしっかりと二人の言葉を聞きわけた。

「うん、二人ともヴィヴィオが互いの所に行つてたと思ひ込んでいたけど、帰ってきてみると相手の所にも部屋にもいなくてビックリしたんやな」

「うん」

季節は秋、稼業時間を過ぎたこの時間はもう暗くなっている。子供が独り歩きしていい時間ではない。

「そら、心配やな。ヴィヴィオは何も言っただんか？」

「お昼と一緒にご飯を食べた時は、午後からビデオデータを返しに行くって言っただから。資料室でお仕事してた、フェイトちゃんの所にいたとばかり…」

「私は15時ぐらいに念話で、寮で動物さんのビデオを見ているって、ヴィヴィオに聞いたんだ」

現在18時を回ったところだ。六課の敷地の出入りは警備班の人たちがチェックしているとはいえ、No2の潜入を許してしまったこともある。慎重になる必要があるかもしれない。もう少し、手掛かりが欲しい。

「ほかに何か気がついたことあらへん？何でもいいんやけど」

「あ、そう言えば…、ビデオデータは普通のお店で売ってないものだった。学生の研究室？の製作で書いてあったかな？」

おろおろして何も思い浮かばないフェイトに対して、こういうときのなのは芯がしっかりしている。細部を思い出そうと目を閉じている。

「ちなみに、なんちゆうタイトルのビデオデータだったん」

「えくと、確か…、『ゴットリーブと愉快的仲間達』」

「…ゴットリーブ？それって確か…」

「何かわかったの!？」

「う、うん、ヴィヴィオが今どこにいるのか分かった気がする…」

「ど、何処!」

「迎えに行こう、もう暗いからヴィヴィオ1人じゃ危ないよ」

「ちよお、待つて。確認するから」

はやてが念話をとばすと相手のかわりに、冷静な女性秘書をイメージさせるようなデバイスの声が返ってきた。確認するとヴィヴィオはデバイスの持ち主の部屋にいたことが分かった。デバイスは部屋の主が動けそうもないので、迎えに来てほしいと要望してきた。はやては了解すると念話を切った。

「二人とも、見つかったよ。迎えにいこか」

「…はやてちゃん?」

「ここなの?」

「せや」

はやてが二人を連れてきたのは六課幹部寮の最上階。フェイトとなのはの部屋から見ると斜め上の部屋、八神家から見るとお隣の入室である。郵便ポストには現代ベルカ文字でケーニツヒと書かれている。要するに…

「副長の部屋?」

「そうや」

「副長がその…、動物のビデオデータを?」

フェイトが言い辛そうに言うのも無理はない。正直、激しく似合っていない。

そんなフェイトの様子を笑いながら、はやてはインターフォンを押す。対応に出たのはヴィルヘルムのデバイス『ドルンレースヒエン』だった。

「フロイライン、開けてもらってええか?」

はやてが聞くと、返事とともに鍵が開く音がした。

整理された靴箱にセンスのいい小さめの絵画を掛けられた玄関の照明が自動で点いた。そして、照明に照らされてキラリと光る懐中時計が落ちている。…て、あれ。

「フロイライン、なにしとん」

はやてが聞くとドルンレースヒエンは「17時を回ったのでヴィイオ嬢を送って差し上げるように進言したところ、うるさいとマスターに投げ飛ばされた」と答えた。デバイスの声は感情であまり変化しないが、何となく拗ねているように聞こえるのは気のせいではないだろう。

待機モードのドルンレースヒエンをつまみ上げ、開きっぱなしの内扉の先を見る。

扉の先にはリビングになっていて。テーブルの上に立体映像投影

機と幾つかの記録チップが出しっぱなしになっている。テーブルの前の大きめのソファアームではヴィルヘルムが寝息を立てていた。

「しゃあないマスターに使われとるね。ドルンレースヒエン」

デバイスは沈黙を守ったが、なのはとフェイトは違った。なのはは目がおかしくなったのかと疑い目を擦り、フェイトは目をしばたかせながらヴィルヘルムとドルンレースヒエンの間で視線を行き来させている。魔導士の相棒たるデバイスを寝ぼけて、放り投げる魔導士が何処にいると言うのだろう。

信じられないモノを見たという顔をして動けずにいるのは達を置いて、はやてはさつきとリビングに上がり込むと、ヴィルヘルムが腹にかけていたジャケットをひっぺがしながら起こした。

「ベルッ！起きいーベル！ベルッ！」

はやてに耳元で騒がれたヴィルヘルムは顔をしかめると目を覚ます。目の前にははやての顔があるのを確認したヴィルヘルムは、しかめっ面を隠そうともせず口を開いた。

「その野暮つたいミッド発音の愛称はやめろと言っているだろ……。：というより、なんでここにははやてが？」

「暗くなってもヴィヴィオが帰ってこうへんて、なのはちゃん達が騒いでいてな。ドルンレースヒエンに聞いたら。ここにおるって」

そこまで聞いてヴィルヘルムの頭脳がようやく通常回転し始めた。あつ、と目を開くと辺りを見回しデバイスがないことに気がついたようだ。その様子を見たはやてがニヤニヤと笑いながらドルンレースヒエンを渡す。もちろん、渡すときに

「寝ぼけてデバイスを投げ飛ばす騎士なんて聞いたことあらへん」

と、からかうのも忘れない。対してヴィルヘルムは、

「…俺の本職は商人で文官だからいいんだよ。…だいたい、17時に起こせと言ったのに起こさなかったデバイスに対する罰だ、罰」

と、言い訳していたが自分のデバイスに「起こしたのにも関わらず貴方が起きなかっただけです。この扱いは不当です。待遇の改善と謝罪を請求します。この要求がかなえられない場合、こちらにはストライキする用意があります」と、至極まっとうな反論、と言うか妙に

人間くさい要求を突き付けられ閉口した。

はやてはやり取りを聞いて爆笑し、なのはとフェイトは初めてみるヴィルヘルムの姿に完全に呆気に取られている。

「まあ、ストライキの話は二人でやってもらうとして…。ヴィヴィオは？」

「ああ、あの小さい怪獣なら寝室だ。映像データを見ているうちにコトンと寝てしまつてね。まだ、私のベットを占拠しているはずだ」

「だって、なのはちゃん」

「へ、ええっ！」

茫然としていたなのはは突然声をかけられて大声を出してしまつた。その声に反応するように寝室の扉が開いた。

「副長さん、なのはママの声がする」

目を擦りながら出てきたのはヴィヴィオ。急に賑やかになつたりビングの様子に気がついて起きたのだろう。ヴィヴィオはなのは達を見止めると、パタパタと駆け寄りなのはに抱きついた。

「ママ」

「ヴィヴィオ…」

ヴィヴィオの顔を見て安心したなのはは深く息を吐いた。気丈に振舞っていたが不安で仕方がなかつたのだ。

その様子を見てヴィルヘルムは謝罪した。

「すまなかつたな、高町嬢。17時前には帰すつもりだったんだが…、思った以上に疲れがたまつていたらしい」

「あ、いえ、こちらこそヴィヴィオの相手をして貰つて…」

二人の会話を聞きながらはやてはフェイトに耳打ちをした。

「疲れが取れないのは、きつとお歳やからや」

「…は、はやて…」

耳打ちをした割にははやての声は大きくヴィルヘルムがこちらをジロリと睨む。

目があつてしまったフェイトは慌てて首を左右に振つて無実を訴えたが、はやてはそっぽを向いて目を合わせようとしない。必然的にフェイト一人だけだけヴィルヘルムと視線を合わせることになり、

フェイトは逃げ遅れ一匹だけ熊の前に置き去りにされたうさぎのよ
うな心境になってますます首を振った。

フェイトの哀れな姿に同情したヴィルヘルムははやてを叱った。

「はやて、あまりハラオウン嬢をからかうな」

「ぶ、ぶはは、やくフェイトちゃんはかわええからついつい。フェイト
ちゃん、安心しいビルは無実の罪で怒ったりせえへんから」

「え？」

フェイトはようやく、はやてがヴィルヘルムが部下から怖がられて
いることを利用して、からかってきたことに気がついた。

「ひどいよ、はやて」

「ごめん、ごめん」

3人の会話には加わらず、にやははと苦笑いをしていたなのは袖
をヴィヴィオが引つ張った。なのはが顔を向けると。

「ママ、お腹すいた」

「あ、そうだね。あ、でもどうしよう…、ご飯の用意まだしてないし」
フェイトに責められ平謝りをしていたはやてがこれを聞き付け、逃
げ出すちようどいい口実だと話に乗っかる。

「そんなら、ここで私が作るか？ビル、晩御飯の食材ぐらいあるやろ
？」

「それはあるが…って、私の城で何するつもりだ」

キッチンに向かおうとする、はやてをヴィルヘルムが止めた。

「そりや、料理にきまつとるやん。まさかかわいい女の子の手料理を
断るつもりなん」

「生憎、器量と料理の腕前が比例するとは限らないのでね」

「わたしの腕前を知らんのやな」

「話には聞いているが、情報の出所がヴィータ嬢ではな」

ひいき目が入り過ぎていて当てにならないと笑うヴィルヘルム。

はやては一度口を尖らせると、不敵に笑った。

「それは挑戦と受け取った！絶対にへこましたる」

こう宣言するとははやては腕まくりをしながら、キッチンにズンズン
と進む。

その背中を見ながらヴィルヘルムはボソリと呟く。

「うまい料理を食べてへこむ奴はいないだろ」

「…はは」

「…にやはは」

ばつちり聞こえたなのはとフェイトは曖昧に笑いながら、はやての様子に何となく違和感を覚える。ヴィルヘルムも気が付いたらしい。

「彼女、妙に強引すぎやしないか？」

なのはとフェイトの二人は頷いた。はやては普段から多少強引なところもあつたが、他人の家でそんな真似をするような子ではなかった筈だ。

「あ、そうか。あれじゃないかな？」

最初に気が付いたのはフェイトだった。

「今日確か、シグナム達が皆帰ってきてないんだよ」

「じゃあ、はやてちゃん今日は1人？」

「え、それじゃ。八神部隊長かわいそうだよ」

ヴィヴィオもはやてに同情的だ。

（女性の方が家族と言うコミュニティを大切にするものなのかもしれないな）

ヴィルヘルムがそんなことを考えていると、キッチンからはやての声が聞こえてきた。

「ビル、お鍋は何処や？」

「戸棚の一番上だ」

「届かへん！取ってや！」

知ったことかと無視しようかとヴィルヘルムは一瞬思ったが、はやての次の一言で慌てふためく。

「お、いい白ワイン発見！ファナウンテラスの新暦63年もの」

「ちよつと待て！なにを使うつもりだ。それは取っておきななだ！」

ヴィルヘルムはキッチンに急いだ。

「は、い、みんなお待たせ」

左手に大皿に盛られたカルボナーラ、右手にワインとオレンジジュースの瓶を持ったはやてがリビングに戻る。ヴィルヘルムもそのあとに続く。

結局、新暦63年ものは死守したものの、ブドウの当たり年の一本を料理に使われてしまった挙句、そのまま料理を手伝わされることになってしまった。ヴィルヘルムの手にはルツコラサラダの大皿と人数分の食器を乗せた盆を持っている。

「楽しみにしていた一本が…」

「いや、久しぶりにいい素材で料理が出来てん」

ヴィルヘルムが口にしていても、はやては得意そうにするだけだ。

「この子狸め、尻尾はどうやって隠している」

「イヤン、H。そんなに見たいん」

はやては怪しげにお尻を振りながら、無念そうにしているヴィルヘルムをからかっている。

そんな二人を見ていて気が気ではないのがなのはとフェイトの二人だ。何しろ今までプライベートの接点がなかったためヴィルヘルムの印象と言ったら、堅物で誰かを叱っているイメージが強い。今日のようにはやてと掛け合いしている姿など想像もしていなかったのだ、同じ顔をした別人だと言われても素直に信じてしまいそうだった。

ヴィルヘルムは二人の表情を見ると少し呆れたようにため息をついた。

「いい加減、その初めて見る珍獣の生態を見たような顔を辞めてくれないか？」

「え、あ、いや」

「にや、にやはは」

はやてはなのは達の正面に座り。ヴィルヘルムも少しためらいがちカーペットに並んで座り、テーブルに料理と食器を並べ始めた。ヴィルヘルムにとって床に直に座るといふ習慣はクラナガンに来るまでなかったもので、どうも落ち着かない。

その表情を自分たちへの不満と勘違いしたなのはが何か話題はないかと考えをめぐらし、目の前にある料理の話題を振ってきた。フェ

イトもそれに続く。

「そういえば、副長はお料理をなさるんですね」

「うん、うちの義兄さんなんて、家のことは何もしてくれなくて」

休日に妻のエイミィにしかられているクロノ（義兄さん）の姿を思い出し、フェイトは思わず頬を緩めた。

「自活せよ。が、うちの家訓でね。まあ、弟は女に作らせることの方が上手いようだが…」

後半、あまり宜しくないような発言が聞こえたような気がしたが、フェイトは話を続ける。

「あ、副長には弟さんがいらっしやるんですか？」

「ああ、ヴィヴィオ、ちよつとそれを再生してくれないか」

「はい、副長さん」

ヴィヴィオが立体映像投影機を操作すると、「ゴットリーブと愉快な仲間達」と、いうタイトルコールの後、中等科ぐらいの少年が司会の海洋生物をテーマにした自主製作番組が流れ始めた。

「こいつは弟が友人と作ったのもでね。その司会者が弟だ」

「えっ！…っ」

「うわー、似てなあ！」

なのはとフェイトの二人はかろうじて言葉を飲み込んだが、はやては全く遠慮しなかった。ヴィルヘルムもそう言った反応に慣れていく。それはそうだろう映像の中の少年は小柄で甘い女性的な容姿をしているのに対して、ヴィルヘルムは背が高くいかにも男らしい容姿をしている。

「腹違いだからな、弟は親父の後妻の子供だ」

複雑な家庭環境のようだ、なのは達が聞かないように話を換えようとしたが、ヴィヴィオにはそんな大人達の会話についてこられなかったようだ。首を捻りながら聞いてくる。

「なのはママー、ごさいって、なくに」

なのははどう説明しようかと迷い、代わりにフェイトが少しお茶を濁して説明することにした。

「ようするに副長さんもヴィヴィオと同じで、ママが二人いるってこ

と」

「へえー、お揃いだね、副長さん」

「そうだな」

ヴィルヘルムは笑って答えると、ヴィヴィオのグラスにジュースを注ぐ。

「あ、私がやります」

「気にするな。客人に対する家主の勤めだ」

慌てるなのはヴィルヘルムは答えると、今度はなのはとフェイトのグラスにワインを注いだ。まだ、19歳のなのははギョツとしてヴィルヘルムを見た。法律家であるフェイトの前で20歳未満の自分にお酒を勧めるとはなんと大胆なんだろう。と、思ったのだがその反応を見たフェイトの反応は、なのはの予想していたモノとは違った。

「あ、なのは、お酒を飲むのは初めてだった？」

「いや、そうじゃなくて、私の誕生日まだ先だよ」

「ん、それはミッドの社会法ではだよ。本局の内の法では19歳以上の飲酒は認められているんだよ」

「…でも？」

「ここ、六課があるのはミッドだよ。と、首を捻るなのはにはやてが説明する。

「六課は本局所属やろ、せやからミッドの中にあっても六課敷地内は本局の社会法を適用するんや」

地球で例えるなら、日本内にあるアメリカ軍基地の様なものだ。管理局に加盟するのが遅かった世界では、風俗や慣習のさでガラリと法律が変わってしまうこともある。とはいえ、ミッドは管理局発祥の地、ほとんど差はないので意識しなくても生活していけるのが普通だ。

「そうなんだ…」

問題がないと分かれば、なのはの好奇心が顔を出した。父と母、そして、義理の姉（月村忍）は実においしそうにこの未知の飲み物を飲んでいる。興味がないわけではない。

「じゃ、じゃあ、少しだけ」

好奇心には勝てず飲むことにすると、はやてが「初体験やな！」と
はやし立て、自分の分も貰おうとグラスを持った。ヴィルヘルムはす
ぐさまビンを持ちかえ、はやてのグラスにジュースを注いだ。

「……」

はやて（現在20歳）は注がれたジュースをニコニコ笑いながら一
気飲みをすると、ヴィルヘルムの置いたワインのビンに手を伸ばす。
はやてがビンを掴もうとした瞬間、ヴィルヘルムの大きな手がビンを
素早く掴み、はやての手から遠ざける。

「……」

沈黙。気まずさになのはとフェイトの目が泳ぎ始めたが、ヴィヴィ
オは大人達がなぜ突然黙ったのかわからない様子で母達の顔を見比
べている。

はやては笑みを消さぬままさらに手を伸ばしたが、ヴィルヘルムは
はやてからさらにビンを遠ざけた。

はやては今度は止まらずにビンを追ったが、バランスを崩して胡坐
をかいたヴィルヘルムの足の上に倒れ込む結果になった。

「……」

数秒間、ヴィルヘルムの膝の上でうつぶせになっていたはやてだっ
たが、いきなり仰向けになりヴィルヘルムに向かって怒鳴った。

「なにすんねん！」

「やかましい！君とロウラン夫人だけには、だれが飲ませるか！」

ロウラン夫人とは、はやての副官をつとめるグリフィスの母レ
テイ・ロウラン提督のことだ。優秀な文官として知られている一方、
仲間内では酒癖の悪さが有名になっている。

レテイの名前が出たことで、なのは達もだいたい事情が分かって
しまった。とんでもない厄介事を押し付けられた人達の共感に似た
感情を共有する。

「は、はは」

「…ひどい？」

「女性を酒に誘って後悔をしたのは、俺の人生では2人だけだ」

「……」

ヴィルヘルム、なのは、フェイトが痛みを堪えるように沈黙している間に起き上がり、まんまとワインを奪ったはやては上機嫌で自分のグラスに酒を注いでいる。はやてにスリの才能があるというより、ヴィルヘルムが諦めたようだ。しかし、一言は忘れない。

「飲み過ぎるなよ。介抱なんてしないからな」

「大丈夫やて」

「これほど誠意の感じられない言葉はないな」

ふと視線に気が付いて、ヴィルヘルムがはやてから目を離すとなのはとフェイトがこちらを見ている。

「どうした？」

「いえ、二人が六課でお話をしている時とは随分……」

「うん、その、雰囲気……」

六課でのはやてとヴィルヘルムは寛容な上官と苦言を呈する部下の関係を崩さない。少なくともなのはとフェイトは二人が愛称やファーストネームで呼び合っていることは見たことがない。

「そらまあ、プライベートを出さへんようにしよか。て、決めておいたんや。六課は若い組織になるから、長と次席との関係はカツチコチやないと引きしめ切らんしな」

「もつとも、ロウラン夫人、いや、レティ提督とリンディ提督のなかでは、そうなることを期待して私に声を掛けたのだろう」

「それってあの時？」

「ああ」

はやととヴィルヘルムを少しなつかしそうな顔をする。一方、なのは達はあの時と言われても何のことだかわからない。子供特有の素直さでヴィヴィオがはやてに聞いた。

「はやて部隊長、あの時って、どの時ですか？」

「ん？私がビルと初めておた時の話や」

ヴィヴィオの目がキラキラ輝き、話をねだってくる。二人のママも興味がありそうな顔をしている。

はやてが話してもいいものか？と、ヴィルヘルムの方を振り返る

と、彼は肩を竦めたただけだった。レリック事件の主犯も逮捕できた事だし、部隊の錬度も上がっている。「ご自由に」と、いうことだろう。はやては何となくマジシャンが種明かしをする気分を味わいながら口を開く。

「せやな、私がビルとあつたんは、ちょうど2年前になるかな…」

18 「副長の休日」Ⅱ

「あ、いたいた。ビル君、久しぶり」

初めて見たのは後ろ姿だった。2m近い長身の男がレテイの声に振り返り、レテイの姿を確認すると敬礼し、諦めの混ざった顔で口を開いた。

「お久しぶりです、提督。しかし、その呼び名は止めてください」

「いいじゃない、親しみを込めた愛称なんだから」

答礼しながらも全く聞き入れる様子の無いレテイに対して、ビルと呼ばれた大男は苦笑いをした。

「貴方が親愛を強調しながら近付いてきたときは気を付けろ。と、ご主人に忠告されているのですが？」

「あいつめ…」

カワイイ悪戯を弟にされた姉のような、忌々しくも愛おしそうな表情をしてからレテイは続けた。

「まあ、ともかく話を聞いてちょうだい」

「ナインと言ったら？」

男の拒否ともとれる言葉にもレテイは笑って返した。

「あら、恩人の私に対してそんなことを言うほど、あなたは礼儀知らずではないでしょう」

「なるほど、確かにそんな風に躰けられた覚えはありませんね」

男は苦笑交じりに返してから、ボソリと「女の出世は早いな」と、一言。はやてが後から聞いた話だと、彼が恩人としているのはレテイの夫のことであって、レテイ自身に借りを作った覚えはないそうだ。

「亭主のモノは妻のモノ」ビバ、鬼嫁イズム。

「それでご用件は？」

「まずは、この子にあなたを紹介するわね」

レテイに促されて、はやてが男の前に立つと、男は先に敬礼をしてきた。レテイと話をしながらもこちらの階級章を確認していたのだろう。規則通りなら普通階級が低いものから敬礼をする。この時、はやては3等陸佐相当の特別捜査官の階級章を付けており、男は1等陸

尉の階級を付けていた。

「はやてさん、こちら第162観測指定世界 中央管理集団 運用統制中隊、ヴィルヘルム・チェスロック・ケーニツヒ1等陸尉よ」

男の目の前に立って見るとやはり男の立派な体格が目立つ。運用統制中隊ということは、基本的に後方勤務の文官の筈だが、見た目は真っ先に戦いに飛び出す前線指揮官と紹介された方が納得できそう
だ。

「ビル君、こちら特別捜査官、八神はやて2等陸佐、所属は本局 古代遺物管理部 機動六課準備室」

「八神2佐のご活躍は聞き及んでおります。お目に掛けて光栄です」

一方、ヴィルヘルムと呼ばれた男はこちらの顔と名前を知っていたようだ。慇懃に挨拶をしてきた。はやても営業用の笑顔で当たり障りのない挨拶を返す。

「ビル君、今日の用事は終わっているわね。時間はどのくらいある?」
「用事の方ではあまりいい返事は貰えませんでしたので、帰りの次元船までの時間を持て余してしまいました」

「今日もAMF対策の論文を持ち込んだのね」

「流石に耳が早い。ええ、地上では主流の考えではありませんので、本局に…。と、思ったのですが、本局でもレジアス中将の方針にNOと言える人は少ないようです…」

ヴィルヘルムは口をへの字に曲げ不満そうに鼻を鳴らす。

レテイにも経験がある。地上の英雄と称され、最高評議委員会の覚えもいいレジアス中将の影響力は強く、出世願望の強い人間など意見の対立を避ける傾向がある。

レテイは少し試すように聞いた。

「それで、続けるの?」

「当然です。しかし、ベルカの哲学者は人の意見を変えるには真理を見せつける必要はない。と、言っています。外堀から埋めていこうかと」

それを聞いたとたんレテイは上機嫌になり、バーゲンで気に入った商品を確保するようにヴィルヘルムの腕を掴んだ。

「いい考えだわ。その話も含めて私の執務室でお話ししましょう」

レティ提督の執務室はいたって普通の執務室だ。鹿威しもなければ、かえって落ち着かなくなるような畳と茶道セットもない。日本人が社長室と言われたら思い浮かべるような、書類の詰まった本棚とデスク、客人用のソファとテーブルがあり、女性の部屋らしく写真立てや花で飾られている。

紅茶を運んできた秘書が退出した後、レティが切りだした。

「で、聞いてもらいたい話はね。新暦75年度に設立する部隊への勧誘なんだけど」

「その前に、その計画を聞いた後でも私に断る権利は残されていますか?」

ヴィルヘルムがレティの言葉を止めた。

計画をわざと話して協力せざる得ない状態にする。あり得る話だ。「もちろんあるわ。部隊、機動六課は正規の手続きを踏んで設立される部隊よ」

「なるほど、分かりました。しかし、その部隊の目的と私に求められている役割が分からない以上即答は出来かねます」

「相変わらず慎重ね。はやてさん説明を」
「はっ」

はやては空間モニターを幾つか表示させ、機動六課の構想を説明しながらヴィルヘルムを観察した。レティ提督から事前に渡された資料を思い出し品定めをする。

資料によると彼は、1等陸尉 ヴィルヘルム・チェスロック・ケーンニツヒ 現在26歳、出身はミッドチルダ北部ベルカ自治領に程近いフィオナ地方出身、8歳の時馬上試合(トーナメント)に参加するため魔導士ランク陸戦Dを取得、以降更新はしていてもランクアップ試験等は受けていない。

14歳で経済学の学士号を取得、在学中から友人とベンチャー企業を立ち上げるが、20歳の時に会社から離れ一般キャリアとして入

局。

その後、各部隊を転々として内勤を中心に様々な任務に従事している。

（レテイ提督の推薦やからおおて見ることにしたけど……。管理局を数年勤めてから民間に移るって話ならよく聞くけど、その逆つてのはあまり聞かへんな。個人的な理由やろか？能力的には、一般キャリアで准尉から、6年で1等陸尉になるには全で一選抜で選ばれているはずや、上司への立ち回りも含めて能力が低いことはないな。魔導士ランクの更新を行わない所を見ると、純粹に指揮官や文官として振舞うのが好みのようや。顔見知りの誘いでも、迂闊に即答しない慎重派ってところやな）

第一印象をそう評価しつつ部隊の説明をしていく。

設立理由をレリックの対策と、独立性の高い少数精鋭の部隊創立を主眼とした実験であること。部隊の規模、運用期間、現在内定している主要メンバー、後見人、ミゼット達伝説の三提督も非公式ながら機動六課への協力を申し出ている等々。

しかし、六課設立の本当の目的が、騎士カリムの予知能力プロフェーティン・シユリフテンの結果「いずれ起こりうるであろう陸士部隊の全滅と管理局システムの崩壊」を阻止することは意図的に伝えないことしておく。

（普通の人間は自分の生活基盤が崩壊すると言われても信じない。信じてもそれに耐えられるとも限らない。特に地上にはカリムの能力に懐疑的な人も多い。それに……）

信じずに無視するだけならまだしも、悪い知らせを持って来た人間を諸悪の根源のように攻撃してしまう人というのは意外と多い。ヴィルヘルムが避けられない困難に向き合った時、目を反らしてしまいうタイプか、あえて目を向けて乗り越えようとするタイプか分からない以上こちらも慎重になるべきだ。

とはいえ、レテイが推薦するほどの人物だ。文官としては申し分ない能力を持っているのだろう。唾付けずに帰すのは惜しい。

（少し彼自身の利益になることを強調して、餌を撒いておこか）

レテイの話だと彼は第162観測指定世界の中央に勤めており、配属早々新暦71年に発生したレリック事件に複数機現れたガジェツトドローンのAMF発生機能に興味を持っている。以降、その脅威性と対策の為の論文を幾つか時空管理局地上本部に提出しているが、レジアス中將の防衛構想とは反するためこの論文はあまり評価されていないらしい。

(あの論文はよう出来てた。実績のある人のようやから、評価されんことには不満もあるやろ。その辺のプライドを突いて見るのもいいかもしれへん)

論文の内容を思い出しながらはやては思案する。彼が論文で主張しているのは一般的な魔導士でもAMFに対抗する為のデバイス、あるいは代替エネルギーの開発。それに先行して開発までの間、AMFに対抗する部隊の設立が柱になっていた。

(つまり、AMF対抗部隊は彼のプランの第一段階であり、六課構想の趣旨と一致する)

はやてはヴィルヘルムの論文の内容を把握していると伝える。ついで、地上部隊は論文や防衛構想の内容ではなく、作者の階級と権威よって評価していると非難した。そのあと、六課ならばAMFに対応した隊員の育成や、論文の内容を裏付けるAMF戦のデータには事欠かないと伝えると、一度言葉を切る。

「もちろん、データは論文に使ってもろて一向に構いまへん」

言い終えたはやては改めてヴィルヘルムの様子を観察する。体を若干前のめりにし、聞いていたヴィルヘルムは一度領いた。

「非常に興味深い話です。しかし、六課構想には全くリスクを負わずに利益を得るものがあります」

「三提督のことやろか？」

「そうです、彼らだけはリスクと利益の比率が合いません」

分かっていたことなので、はやてはヴィルヘルムの言葉を肯定して領いた。

三提督はあくまで非公式の協力だ。公式の後見人のクロノやレテイ達は六課が不利な立場に立たされた時、後見人として責任を負う

ことになる。が、三提督はあくまで非公式。六課が成功した暁には協力に対する成果を主張することが出来るし、失敗したときには、はやてに責任を押し付けてシラを切ることが出来る。最もリスクを負い危険な立場にあるのは実行部隊の長であるはやてだ。確かに割に合っていない。

ヴイルヘルムの言っていることは尤もだ。しかし、「やけどアンタ『嵐が去るのを待つて船を出す者は儲けることは出来ない』とも、言うやろ」

『嵐が去るのを待つて船を出す者は、儲けることは出来ない』リスクを恐れずに挑戦した者だけが成功を収めるというミッド近辺に住む商人達の金言だ。相手との距離を縮めたいときは、相手の文化のジョークや格言を利用する。ナカジマ3佐から教わった交渉テクニクの一つだった。

ヴイルヘルムははやての対応を気に入ったらしい。クククツと笑い、「なるほど、歴代の闇の書の主は何の努力も無しに突然得た力を自分の器量と勘違いし、ヴォルケンリッターなる傀儡人形を暴走させたと聞いていましたが、どうやら今の主は人形の使いどころをわきまえているようですね。」

いきなり急所を突き刺してきた。ヴイルヘルムは何も読み取ることもできない無表情で畳み掛ける。

「確かにミッド地上本部は悪い意味で権威主義です。ですが、相手の欠点を指摘できるからと言って、指摘した者の意見が正しいとは限らない。六課構想の過剰な戦力、たった一年という運用期間の短さを見るに、この部隊には他に明確な目的があつて設立される部隊に思えません。本来の目的を知らせず人を使おうとする人間を、私は誠意がある士官とは認めない」

家族であり宝物のヴォルケンリッターを人形扱いされて思わず頭に血が上る。マルチタスクの1つが戦闘演算を行い、目の前の男を八つ裂きにする道筋を弾きだす。が、はやてはそれを欠片も顔に出さずに頭を下げた。

「確かにそうやね…。機密事項とはいえ、六課設立の目的をお話しし

なかつたことは謝罪します」

頭を下げ顔が相手の視線から外れた途端、表情が歪むのを自覚する。今すぐ飛びかかってあのすまし顔にブレイカーを叩きこんでやりたい。あるいは階級はこちらが上なので「無礼だ」と一言言つてしまえば済むことかもしれないが、この程度の非難で階級を盾にしているようでは、指揮官として失格だ。守護騎士達と共に罪を被り償つていくことなどできない。

しかし

「自分と闇の書の罪、否定はしません。せやけど…」

家族の名誉だけは守りたかつた。怒りを御し心を落ち着かせる。顔を上げると相手は無表情を保つたまま静かにこちらを見ていた。

「二つだけ、うちの子たちは傀儡人形やない。そこんとこだけは訂正してもらいます」

何とか声を荒げずに済んだ。交渉の場で相手に自分の心理を読まれるような行為は禁物。こちらの弱みをわざわざ暴露しているようなものだ。

まっすぐにヴィルヘルムを見返すと、彼はあっさり謝罪してきた。

「なるほど…、貴方は誇り高い人間のような。非礼をお詫びします八神3佐。私には貴方と貴方の騎士達に500シリング払う用意があります」

シリングは古代ベルカの貨幣。古代ベルカでは貴族又は騎士は人から侮辱を被った場合、500シリング、そうでない者は300シリングの補償を受ける権利があったと言うから、彼はわたしの態度からシグナム達を騎士と認める気になったようだ。

上官の度量は部下の叱り方で決まる。もしかしたら、わざと無礼な態度を取つて試したのかもしれない。

機密事項にあたる闇の書事件の顛末を知る耳を持ち、上官にカマを掛ける度胸。なかなか、油断ならない人物のようだ。が、流石に一言言つてやりたくなり、非難する意味も込めて口を開く。

「いけずな人やな」

「政治的な処置と思つてください。」

ヴィルヘルムは降参の意思表示だろう、肩をすくめて見せた。

それを見てそれまで若手将校達の様子を見守っていたレティが、笑いながら会話に加わる。

「自己紹介は終わったわね？では、ビル君。改めて六課構想の目的を説明するわ」

レティはカリム・グラシアの希少技能「プロフェーティン・シユリフテン」による預言も含めた六課の目的を説明すること促してきた。それに従い、ヴィルヘルムに説明をしたが彼は懐疑的な反応を示すだけだった。

「申し訳ありませんが、私はそう言った個人の才能には頼りたくありません。その予言が解釈によって左右されるような不安定なものならなおさらです。無条件でヤーとは言えませぬね」

「ええ、だからビル君。君に六課に参加してほしいのよ。ビル君ははやてさんとはまた違った角度からモノを見ることができるわ」

「なるほど、私に煩うるさ型をやれということですね」

一理ある考え方だ。円錐は正面から見れば三角形だが、真上から見下ろすと円の形をしている。事件も同じ複数からの視点を持つことで初めてその全容が掴めることがある。民間経験のある彼は、なのはちゃん達にはない視点を持っているかもしれない。

とはいえ、慎重派の人間はすぐには結論を出すことない。必ず裏を取ろうとする。

案の定、ヴィルヘルムは懐から懐中時計を出すと、帰りの定期船の時間だと言って返事を保留した。レティも彼の行動を理解していたらしく引き止めなかった。

「お返事は一週間以内にちょうだい」

「ええ、それまでには必ず。八神3佐、今日は話が出来てよかった」

「せやな、機会がおおたら、またな」

その日の晩、ミッドチルダ標準時の日付が変わるころ、ヴィルヘルムのもとに通信が入った。通信が来るであろうことを予想していたヴィルヘルムはすぐに回線を開いた。

「こんばんわ、ビル君。それとも、そちらはお昼だったかしら？」
「ちょうど、昼食を取り終えたところです」

こちらの昼休みを狙って連絡を掛けてきただろうに、そんな挨拶をしてきたレティに、ヴィルヘルムは食後のコーヒーが入ったマグカップを掲げて見せた。

原隊に戻った後、六課構想の裏を取ったヴィルヘルムはレティ達の言葉にウソがないこと、レティ達はやてが背負った闇の書事件の失点を取り戻させる狙いがあることを掴んでいた。

「で、あなたはどう思ったの？はやてさんのこと」

「どうもなにも、少々自分にリスクを架し過ぎているように感じますが、それ以外は文句など付けることなどできませんよ。指揮官としての経験が不足しているという点も、時間と周囲が許せば解決してくれる問題です。その間見守る為に後見人におなりになられたのでしょうか？」

ヴィルヘルムの答えはレティを喜ばせるものだったらしく、空間モニターの先でレティは機嫌よく笑っている。

「ええ、彼女はいい子だから。で、あなたは加わらなくていいの？」

「私が？」冗談でしょう。」

レティの誘いに、ヴィルヘルムは苦笑した。確かに既にエースと呼ばれ、能力も人格も申し分ない彼女の下で働くのも悪くはないだろう。しかし、英雄の隣にいる自分を思い浮かべるにはヴィルヘルムは自分を知り過ぎている。

「私は人より少しだけ良くできる程度の才覚しかありませんよ。彼女達のように常識を飛び越えて何処までも高く飛んでいくことは出来ません。私に加わったのではエースの足を引っ張るのが関の山でしょう」

「残念ながら」と、続くところだったが、ヴィルヘルムの向こう気が言葉を切らせた。自分の才能の限界を認められない自分を見られるのが恥ずかしくなり、ヴィルヘルムはコーヒーを飲み干す動作で顔を隠した。

「そうかしら、あなたも立派に常識からはみ出ているわ」

「そうだとしてもせいぜい一步です。片足を常識の中から引き抜くことなどできません」

「ええ、まあ、そうでしょうね」

あつさり認めるレティに、またヴィルヘルムの向こう気が疼く。それに気が付かないのかレティは続けた。

「だからこそあなたに六課に入ってほしいのよ。常識から一步しか出ることしかできないということは、言い方を変えればその境界線に立ち常識の内外、その両方を同時に見ることが出来ると言うことよ。それははやてさんと一緒に飛んでいる人たちには出来ないこと」

「要するに私に彼女達が暴走しないように、お目付け役をさせるつもりですか？」

「それに近いわね」

レティは顎に手を当ていい喻がないか考える仕草をしてから答えた。

「そうね、あなたには灯台になってほしいのよ。エース達が高く飛びすぎて迷子にならないようにね」

「灯台ですか…」

「そう、灯台よ。ねえ、あなたははやてさん達は何処までも高く飛ぶことが出来ると言ったでしょ。私もね、リンディやクライドを見ていて思ったことがあるのよ。この人たちならって。私の届かないような高いところまで、てね…」

言葉を切り俯くレティの表情が示している感情に名前を付けることが、ヴィルヘルムには出来なかった。羨望、嫉妬、憧憬、後悔、自嘲、悔恨、懺悔どれも違うように思える。

「でも、クライドが亡くなってから思ったのよ。誰にも届かないような高さまで飛ぶことは、空という奈落の底に落ちていくことなのじゃないか？とね。もし、誰かがクライドに自分の現在位置をハッキリ教えることが出来ていたのなら…そう思うのよ。それに…」

目を伏せていたレティが顔を上げた時には妖しいモノが表情に浮かんでいた。

「聞きわけのいいふりをしているけど、あなたはエース達に負けたく

ないって思っているでしょう。」

「…ッ」

ヴィルヘルムは本音を率直に言い当てられて言葉に詰まってしまった。気が付かれていないと思って油断していたが、人事部提督の肩書は伊達ではなかった。ヴィルヘルムなどカワイイ坊や扱いだ。もう、どう誤魔化したところでレティの言葉を肯定することにしかない。

ヴィルヘルムが閉口していると、レティはしつとりとした笑みを浮かべた。

「あなたは常識から一步しか出ることが出来ないと言ったけど、あなたのいう常識のラインはあなたの思っている所より高い位置にあるわ。あなたはもつと成長できるのよ」

「随分と持ち上げますね」

「あら、私ははやてさん達だけじゃなく、あなたも評価しているつもりよ」

立场上、時空管理局のほぼ全ての動きを把握している人事の提督に煽てられ、ヴィルヘルムは久しぶりに自分の可能性に挑戦してみたくなる。

「分かりました、六課へのお誘いお受けしましょう」

「本当、よかったわ」

「ただし、条件があります」

ヴィルヘルムは自分を六課の次席指揮官（副長）にすること、自身が指名する幹部を最低2名以上六課に配属させること条件とした。

通常、次席指揮官が部隊長の権限を取り上げる為には他の幹部2名の同意を必要とする。つまり、何時でもはやての権限を取り上げる権限を条件に出したわけだ。

しかし、レティはヴィルヘルムの出した条件にかえって上機嫌になった。

「そう、その慎重さがほしいのよ。」

「お目付け役なんて嫌われ役、それぐらいの権限がないとドスが利かないでしょう」

「ええ、いいわよ。それにあなたが指名する人なら優秀な人の筈だから、人選の手間が少し減るわ」

二つ返事で了承するレティに、ヴィルヘルムの悪戯心が刺激された。

「宜しいのですか？私が六課を乗っ取ってしまったかもしれませんよ」

「大丈夫よ、あなたはこの権限を使ったりしないわ」

「どうしてそう思うのです」

「あなたがそう思っているからよ。その権限を使わなければならないような人の下では、働こうとも思わないはずよ、あなたは」

それから一週間後、ヴィルヘルムの六課への異動が内定した。

19 「副長の休日」Ⅲ

「と、言うことがあってな」

「そんな話聞いてへんで〜」

「そうだろうな、初めて話す。今思えば、こうして楽しげに酒も飲む仲間でもなかったからな。たがいにあまり信用していなかった」

言った後、ヴィルヘルムはしみじみと言うとはやてが反論した。

「あく、私は信頼してたで。私まで心の狭い人みたいに言わんといで。」

「嘘付け。露骨な妨害を受けて作業が遅れた時にも、相談一つしなかった」

「そ、そうやったけ?」

「ああ、赤点を隠そうとしている学生の様な顔をしていた」

ヴィルヘルムはクククと思いだし笑いし、はやても当時の自分の滑稽な姿を想像して笑った。二人とも最初から仲が良かったわけではなく、六課立ち上げの苦楽を共にしながら今の関係を作っていたらしい。なのはとフェイトは自分達の知らない親友の一面を見た気がして嬉しくなり話を催促した。ヴィルヘルムははやてを一瞥すると応じた。

「新米隊長八神はやての珍道中か? いいだろう」

「ちよお、なに言うつもりや、こらオジサン!」

話題ははやてとヴィルヘルムが顔合わせをした話から、六課立ち上げの際の苦労話や、本局の将校クラブでからまれ、大暴れをした話、ヴィルヘルムとザフィーラが男だけで酒を飲みたに繰り出した話が語られ、なのは達からは地球に住んでいた時の話など想い出話が次々飛び出し、食事をしながら酒を飲むこと数時間。

テーブルには栓の開いた酒瓶が並び、すっかり時計の針も酔いも回ったようだ。はやての呂律がだいぶ怪しくなっている。

「そろそろお開きにした方がよさそうだな」

「にやはははは」

「っぷ、わたしはまだまだいけるで…」

酔っぱらいの酔っていないほど当てにならないモノはない。

「にやはははは」

「え、よ、酔ってませんよ〜」

そう、ちょうど今のフェイトのように…。

フェイトは頬が上気し赤くなり、潤んだ瞳が締まらないアンニュイな様相を放っている。そのうえ、熱くなった体温を覚ます為だろう、胸元は大きく開かれ深い溪谷が見事な絶景となっている。

なかなか目が離せない。

「○○、△△△△、□□」

「にやはははは」

脇腹に鈍痛。はやてが肘鉄を入れながら何か言ってきたが、ヴィルヘルムの知らない言語だった。

「なんて言ったんだ？ 97管理外世界の言葉か？」

はやてに視線を戻すと、こちらもかなり弛緩したトロンとした表情で腕にしがみついて来た。酔いが回って真っ直ぐ座っていられないのだろう。鈍った頭でヴィルヘルムの言葉を咀嚼すると、普段通り妙なイントネーションを付けたミッドチルダ語で言い直した。

「にやはははは」

「何処、見てんねん、スケベ」

何を言っても恰好が付かないだろうなと判断したヴィルヘルムは視線を反らし、酒瓶の中身を確認するふりをして聞こえないふりをした。

それはそうと、ふむ、はやては背丈の割にはある方だな。

「…ところで、ビル」

「ッ、なんだ」

腕に当たる感触に気を取られていたヴィルヘルムが動揺を抑えながら返事をする、はやては小首を傾げながら尋ねてきた。

「ビルって、日本語喋れへんの」

「ああ、行ったこともないからな。デバイスに97世界言語の翻訳魔法も入れてない」

「にやはははは」

先進管理局世界では大抵公用語で、ミッド語が現代ベルカ語の二つの言語どちらかが使われている。この二つのバイリンガルなら生活に不自由がないが、後進世界や管理外世界では1つの世界に100を超える言語が存在していることが当たり前だ。

ミッドチルダをほとんど出たことのないテイアナが、日本でなに不自由なく会話が出来たのもこの翻訳魔法技術の発展のおかげである。(ただし、文字の翻訳をするには処理に時間がかかり、この魔法を頼りにテストを受けたりすると残念な結果になる)

ヴィルヘルムが答えると、はやてはニタリと笑い。

「○○△、□△□△○、△○○」

「だ、ダメだよ、はやて」

はやての発言にフェイトが更に赤くなって止める。周囲を見回しヴィヴィオが何時も間にか飲んでた酒のせいで再び夢の中にいること確認すると安堵していた。ちなみに、なのはが会話に入ってたのは、彼女がひたすらにやはは、にやははと笑っては、時折グラスに口をつけるという動作を繰り返しているからである。

「フロイライン、ネットに接続、翻訳魔法をダウンロードしろ。言語名、第97管理外世界「地球」極東地区日本」

「にやはははは」

『有料ですがよろしいですか?』

「かまわん」

ヴィルヘルムがデバイスに命じると、はやてはヴィルヘルムの腕を離し逃げ出そうとしたが首根っこを掴まれ動きを止める。

ドルンレースヒエンが先程のはやての発言を翻訳した次の瞬間には、はやては頭を抱えることになった。

「いったく、なにすんねん。乙女の頭にチョップ入れるか、ふつう」

「乙女がしているいい発言じゃないだろ、今のは。ヴィヴィオが意味を聞いてきたらどうするつもりだ」

「へへへ、必死に説明しようとして、アタフタするなのはちゃん達のカワイイ姿が拝めるやん」

「にやははははは」

「子供を使つてセクハラするな」

ダメだ。全力でセクハラモードになっている。

ヴィルヘルムはごねるはやてを押し退け、いよいよ收拾がつかなくなる前に解散させることにしたが、なのは既にフェイトの支えなしでは立ち上がれなくなつてしまつている。仕方なくヴィルヘルムが眠つているヴィヴィオを抱きかかえて3人の部屋まで連れ帰ることにした。

「送り狼…」

「瘤つき相手になるか」

「にやはははは」

はやての発言を途中で遮り、ヴィルヘルムははやてに向き直る。

「ほら、はやて、君も帰るんだ」

「いやや、このグラスを空けるまで帰られへん」

「分かつた、分かつた、ならそれを飲んだら帰つてくれ」

「む、3人は送るつもりのかせに、私は無し？」

「君の部屋は隣じゃないか…」

絡み酒になつてきたはやての様子に流石にうんざりした声でヴィルヘルムが答えると、はやては口を尖らせ拗ねて見せた。

大げさな態度だったのでヴィルヘルムの酔つた頭でも本気ではないことが分かつたし、そんな態度の理由も食事前のヴィヴィオ達の会話で察しが付いた。誰もいない部屋に帰りたくないのだろう。

しょうがない部隊長だと思いつつも若い娘に頼られていると思えば悪い気はしない。酒も助力し、少しぐらいのわがままには付き合つてもいい気になる。

「もう少し付き合つてやるから、3人を送つてくる時間ぐらい待つていろ」

「ん〜」

ドルンレースヒエンをポケットの中にねじ込みながら声をかけると、子供の様な気の無い返事が返ってきたので言つてやる。

「戻つてくるまで腹を出したまま床で寝たりするんじゃないぞ」

「…」

はやては視線だけこちらに投げてひらひら手を振った。

さて、ヴィルヘルムがなのは達を送りに行ってしまうと、人の視線がなくなり途端に眠くなってきた。誰かに見られているというのは適度の緊張感を生むものらしい。

「むう…」

頬をひっぱり眠気を負いやろうとするが一向に効果がない。かといって、このまま寝てしまうと確実にヴィルヘルムはいつも以上に子供扱いしてくるに違いない。流石にそれは避けたい。考えを巡らそうとして、はやての思考が千鳥足で走り誤った方角に突き進む。

「ようは、ちゃんと寝ればいいんや」

3人を送り届けたヴィルヘルムが部屋に戻ってくると、リビングには空いたグラスを残しはやての姿が見えない。

(考え直して、帰ったか)

言った時には気が付かなかったが、真夜中に女を自室に連れ込んで2人きり、確かにまずい。どうやら自身も相当酒が回っているようだと考え直すと、ヴィルヘルムは少し残念に思いながらとりあえず食器を流しに放り込み、リビングの照明を消した。ドルンレースヒエンで明日の予定を確認すると寝室に向かう。

寝室に入るとカーテンの隙間から月明かりが射し込みボンヤリと寝室を照らしていた。ここは自分の部屋だ。何が何処にあるかぐらいは把握している。これなら明りを付ける必要もないだろうと、ベッド隣の机にドルンレースヒエンを置き、端に置かれたアンティークの置時計で時刻を確認する。いい加減寝ないと明日に響く。着替えるもの億劫になり、そのままベッドに潜り込む。

「ほら、もっとそっちに寄ってくれ」

先客に文句を言っ、柔らかく甘い匂いのする体を押し退けながらシーツの中に潜り込む、そこでようやく違和感に気が付く。

(ん、先客?)

脳が状況を理解する前に本能が事態を把握したようだ。心臓の鼓動が奇妙なリズムを取り始めた。恐る恐る隣を見るとはやてがいた。

「ッー」

どうにか悲鳴はあげなかったが、ベッドから転がり落ち背中を机にしたたか打ちつける。その衝撃で置時計がこぼれてヴィルヘルムの頭に直撃した。自分のあまりの醜態にヴィルヘルムは項垂れた。

(俺はコメディアンか…)

とりあえず置時計元に戻して目をつぶる。十秒ほど数えると目が慣れ始め、部屋の中がはつきり見え始めた。よく見れば、床にははやての脱ぎ捨てた衣服が散乱していた。

(酔っぱらって脱ぎだすとは、とんだ酒乱だ)

まだ酒が残っているというのに頭痛がしてきた。が、寢室を散らかした犯人はベッドの上で気持ちよさそうに寢息を立てていた。ヴィルヘルムが転げ落ちた時に掛け布団が一緒に落ち、はやての姿が月明かりにさらされている。

「んう…」

掛け布団がなくなり寒さを感じたのだろう、うめき声をあげて寝がえりを打つ姿はしどけない。制服のシャツを羽織ってはいたが寝乱れており、シャツより白い肌と下…

(見るな、俺)

はやてをあまり見ないようにながら、ヴィルヘルムは掛け布団を掛ける。が、うっかりはやての甘い匂いを吸いこんでしまい、マルチタスクの幾つかが暴走し始めた。理性的な思考がギャラルホルンを吹きならし迎撃の構えを見せてはいるが、どうも劣勢のようだ。

(落ちつけ俺、相手は20になったばかりの小娘じゃないか。あと、なにを書いているんだ作者)

なかなか、抑えられない鼓動を持って余していると、はやてが呟いた。

「リインフォース…」

はやては副官のリインフォースIIを呼ぶ時は、公式の場でもない限りリインと呼ぶ。呼ばれたのは闇の書事件で失われたもう一人のリ

インフォオースの事だろうか、10年たつ今でもはやては彼女の事を…。

「リインフォオース、いい揉みごたえや。ん、止めてください？ふ、これだけは止めれへん」

「…」

続く言葉を聞いて一瞬で鼓動が正常に戻った。頭を抱えて寝室に入った後の事をなかつたことにすると決めた。

（全て、酒のせいだ。一部、記憶がなくなっても不思議じゃない。ああ、仕方ないことなんだ！）

ヴィルヘルムは六課の副長室で寝ることにした。クローゼットの
中から制服を取りだし、ドルンレースヒエンを手取る。

（子守に酔っぱらいの相手か…、今日は厄日だな）

寝室のドアノブを掴むと、名前を呼ばれた。

「びくろく」

振り向くと気分よさそうに寝ているはやての姿がある。どんな夢
を見ているのか分からないが寝言のようだ。

「…のアホく」

「…」

ヴィルヘルムはため息をつきながら寝室を出た。

「ホント、厄日だ」

20 戦技披露会 I N 六課 I

J S 事件終結からそろそろ3カ月がたち、機動六課のオフィスの修理などの後処理がひと段落してきたある日。

ヴィルヘルムは普段ならほとんど立ち入らない場所にいた。着ている物は訓練服装 I 型。厚手で膝が補強され二重になっているズボンにブーツ、これに T シャツなら II 型、ズボンと同じ素材の上着なら I 型となる。

「何故、私が訓練スペースに…」

機動六課自慢の訓練スペース、陸戦用空間シミュレーターを見渡してみると。ヴィルヘルムは巨大な石墨の上に立っており、石墨に並行するように堀まで設置されている。古代ベルカ時代、二人の王が一騎打ちをしたと言われている決闘の舞台、グリョートナガルダルを再現し組み上げられているのだろう。

構築プログラムを組むにはそれなりの苦労があったようだ。訓練スペースを一望できる制御スペースにいるシャリオたちメカニックデザイナーチームは満足げに笑っている。

「アイツらめ、最新設備で遊んでいるな」

なのは完全監修のもと教導隊で開発されたこの最新空間シミュレーターは、まる一日起動していると、新米陸士の初任給など簡単になくなってしまふほどの費用が掛かっているのだが、本当に分かっているのだろうか？ いや、そんなことよりも…

「シグナムく、そんなスカし野郎、ぶっ飛ばしちまえ！」

「3人とも頑張るですく」

「怪我に気を付けてくださ〜い」

「・・・」

そもそも、何故ヴォルケンリッターを筆頭として見物人が大量にいるこの状況で、シグナムのユニゾンデバイス能力試験に付き合うはめになっているのだろうか。

本日、ヴィルヘルムが六課に出勤したと思ったら、いきなり命令を渡され訓練スペースに直行させられた。命令に書かれていた能力試

験の目的は、「模擬戦によりJS事件で保護されたユニゾンデバイス、アギトの能力と融合時のシグナムの能力上昇率を計測する」となっていた。が、鼻息荒く怨毒の混ざった笑みを浮かべるシグナムの様子を見ていると、戦うこと自体が目的のように見える。

「行くぞ、アギト」

「お、おう、まかせとけ！マスター！」

アギトは初めて会った時とは違い、粘着性の闘気を放っているシグナムに若干引いているようだが、そんなことより相性の良いマスターと組めることが嬉しいらしい。元気よく返事をしている。二人が相手だと気を抜くと怪我では済まないかもしれない。

（しかし、何故対戦相手が私になっっているんだ？）

通常、こう言った場合は教育職の局員が行うことになっている。だが、その筆頭というべきなのは、制御スペースに設置された解説員と書かれた札の席にフェイトやはやと共に座っている。実況席にはアルトとスバルが座りプロレスの実況アナウンサーのように叫んでいる。何処から見ても能力試験を口実にしたショーの類だ。

（まるで戦技披露会だな）

戦技披露会とは、本局武装隊の腕利きが戦闘技術を模擬戦闘という形で披露するイベントで、まさにそのような状況だった。

ヴィルヘルムはノリノリで実況に答えているのはとフェイトを無視し、苦笑いを浮かべているはやてに対して念話を飛ばした。

『はやて、どういうことだ？説明してくれ』

『え〜つとやな。ほら前にビルの部屋でお酒飲んだ日があったやろ』

「ん、ううん、ん？」

カーテンの隙間から差し込む日差しの眩しさに、はやては目を覚ます。そこは自分の部屋ではなかった。辺りを見回すと机の上に置かれているアンティーク時計の短針が午前7時を指している。六課の通常日勤は8時から17時、交替時の申し送りを考えれば7時半には出勤していなければいけないので、仕事のある日であったならまずい

時間帯だ。

(どっ)や、(っ)?)

考えようとする、全身のたるさが全て放り投げて寝てしまえと誘ってくるが、危ういとこで踏みとどまる。鈍痛がする頭で状況を確認する。

(今日は、オフシフトやからいいとして。昨日、何をしとったっけ?)
昨日、仕事を片付けたあとヴィルヘルムの部屋で酒宴なったところまでは覚えている。そのあとの記憶が曖昧で思い出せない。

(なんやっただけ? ビルに寝ろみたいなこといわれて、寝とつたら誰かがベッドの中に入って…)

そこまで思い出して、ようやくここがヴィルヘルムの寝室だと言うことに気が付く。

(ビ、ビルのベッドの中で寝ていて、人が入ってきた…? それってつまり…)

羞恥で体温が上がり、汗が噴き出し始める。慌てて自分の姿を見下ろすと着衣や髪は乱れほとんど半裸で、着ているものと言ったら制服のシャツを危うくひっかけている程度だった。

「ッ」

声にならない悲鳴を上げてシーツを頭からかぶると、その中で自分の体を確かめる。

(え、なに、全く覚えてへんけど、もしかして、そういうことした!?)

落ちて二の腕まで下がっていた上の肩ひもを戻し、食い込んでいた下を元に戻す、全開になっていたシャツの前を閉じる。体のアチコチを触ってチェックする。

(と、とりあえず、大丈夫…やんな)

経験がないので確信が持てなかったがそう結論をだす。思いつきり安堵のため息を吐いたら、今度は急に腹が立ってきた。ガードを下げている時に手を出されないというのも、なんとなく女のプライドに触る。

(いや、ビルは甲斐性ないんや。草食系め)

怒ると行動が大胆になる。あの根性無しもないようだし、散らか

してから帰ってやれ。と、いう気になったはやては早速実行に移した。シャワーを浴び寝汗と眠気、二日酔いのたるさを洗い流し、冷蔵庫の中身を物色、簡単な朝食を作る。この間約1時間。作ったばかりの朝食を咀嚼しながら考える。

(朝帰りなんてシグナムあたりに知れたら一大事やけど、ギリ大丈夫やろ)

シグナムの行動パターンは規則正しく、当直勤務後に寮へ戻ってくるのは8時半と決まっている。あと30分ほど猶予がある。

(昨日の食器も流しに出しっぱなしやったな。洗つといてやろか)

腹が膨れて冷静になってきた。はやては少し反省し、食事を済ませた後、洗いモノを15分で片付けて部屋に戻った。

八神家の部屋は日本と同じスタイルの内装に変えてある。玄関で靴を脱いで靴箱に放り込む。

(さすがに昨日は飲み過ぎやったなく、気いつけよう)

と、反省しながらリビングのドアを開けると、制服姿のシグナムが仁王立ちをしていた。

「シ、シグナム今日は随分とまた早いな」

「もう、9時です。おかしくはないでしょう」

言われてリビングの掛け時計(ミッド製)を見ると確かに時計は午前9時を回っている。最近のミッド製の時計はほとんど電波時計になっていたので、今は間違いなく午前9時なのだろう。

(と、いうことはビルのあのアンティーク時計の時間がずれてたんや。

あのオンボロ時計め！)

心の中で愚痴は思いついたが、言い訳をする羽目になるとは思っていなかったため、咄嗟に言葉が思いつかず沈黙してしまう。シグナムの鋭い視線に見つめられ、はやては金魚のようにパクパクと口を動かすこと数秒。いつその事、回れ右して部屋から逃げだしてしまいたくなったところに、シグナムがゆっくりと口を開いた。

「…主はやて」

「は、はいー」

シグナムの声は別に大きくも、低くなっている訳でもなかったが、

はやては思わず不動の姿勢（気を付け）になる。そんなはやてに何の反応も見せずシグナムは変わらないトーンで話を続ける。

「…部屋にいらっしやらないので心配しました。今までどちらに？」
「え、ええと、フェ、フェイトちゃん達の部屋や！ほら、昨日、誰もいなかったから…」

まさか、男の部屋に朝までいましたとは言えないはやての口からはそんな言葉が付いて出た。言ってしまった後に、二人に口裏を合わせてもらえば問題ないことを思い付くが…、

「…嘘です」

シグナムは間髪いれずに否定した。声のトーンは変わらないが、かえってそれが怖い。はやては声が震えないように注意しながら続けた。

「嘘ちやうで！昨日、フェイトちゃん達と一緒に…」

「先程、寮の前でテストロッサに会いました。高町が二日酔いになったので薬を買いに行くところだったそうです。…昨夜は【副長】の部屋で食事を取られたそうですね」

「…（口が軽すぎるで、フェイトちゃん!）」

フェイトにしてみれば、仲の良いシグナムに世間話をした程度で全く罪はないのだがタイミングが悪すぎた。シグナムには、はやてにやましいことがあつて嘘を吐かれたように聞こえただろう。

背中に嫌な汗をかき何とか弁解の方法がないか頭を巡らせるが、いい答えが見つかる前にシグナムが怒りを押し殺すように低い声を出した。

「主はやて、話があります」

『ということがあつたんよ』

『ああ、そうかい』

はやてが時刻を勘違いしたアンティーク時計が狂ったのは、ヴィルヘルムが落したためであり。それがなければ万事うまくいっていたわけだが、それは言わずにヴィルヘルムは続けた。

『完全に誤解されているじゃないか。念のために言っておくが、全部

君のせいだぞ』

『ヒドイ！味方してくれへんの?!あの日はあんなに紳士的やったのに！』

『何かあったみたいに言うな！シヤマルが盗聴しているのを君も気が付いているだろう』

『あ、やっぱりそう思ん?』

根拠はなかったがヴィルヘルムはほとんどそう確信してシヤマルを睨んだが、目があったシヤマルがとった反応は、眼を離さずに小首を傾げただけだった。一見するとシヤマルは無実のように見えるが、通常、人は他の人から目を合わせられると嫌がり視線を反らすのが普通だ。

しかし、嘘に自信のある人間（女性に多い）は自分の付いた嘘の効果を確かめる為に相手から視線をそらさない場合が多い。シヤマルの場合、何も知らないフリに自信があるのだろう。

『全く、古代ベルカの騎士つてのは、こんな技術の無駄使いをする連中だったのか』

『あははは、ええんやないの、こんなカワイイ悪戯やん』

『笑いごとか！まあ、いい。それよりも誤解は解いてあるのか?』

『一応納得してくれてん』

『なら、なぜ、俺が公の私闘に付き合わなければならぬ』

『ん、あの時、シグナムがな「主の話はわかりました。しかし、主の記憶が定かではないじよう、剣を持って審議を確かめさせていただきます!」と言って聞かないんや。その時は六課内での私闘禁止!言うて抑えたんやけど、何時の間にもやら訓練計画が上がってきててな』

『うっかり承認してしまったと...』

『書類の確認はきちっと行ってください、課長...。それにしても決闘裁判かよ...』

決闘は神聖なものであり天は正しい方に加護を与える。という宗教色の考えや言い伝えが古代ベルカにはあり、実際に採用されていた

裁判方法ではあるのだが、当然迷信以外の何ものでもない。

シグナムもそんなことは知っている。ようするに、「たいせつな主に夜遊びを教えた男に鉄槌を！」といったところだろう。

『ぬかったな。俺が資材調達で六課を出ていた時にこの準備を進めていたな。シヤマルの入れ知恵か?』

『ごめん、そうみたい』

はやても一旦は説得に成功したと思って油断していたようだ。一か月以上の期間を置き相手の油断を誘い、戦わざるを得ない状態に持ち込む。見事な戦略だ。一本取られたと言っているみたいだろう。

『あ、ザファイラは酔い潰れたことを知っているみたいやけど無関係や、ヴィータとリインは知らないみたいやし』

無関係の家族にヴィルヘルムの怒りが向くを避けようとはやてが言ってきたが、当のヴィルヘルムは特に怒ってはいなかった。

古代と現代式の違いはあれどヴィルヘルムも騎士の端くれ、シグナムとは一度槍を交えてみたいと思っていた。それに、ゆりかご戦では指揮官と言う立場があつた為、戦闘機人に対する復讐戦の機会をすべて部下達に譲ってしまったので、怪我が完治したらひと暴れして、憂さ晴らしをしたいと密かに考えていたのだ。

しかし、それも子供っぽい考えだ。という思いがあつたので表に出せずにいた所にこの話だ。今なら、巻き込まれて仕方がなく付き合つた。と、言い訳もできる。

ヴィルヘルムは鷹揚に承諾してもみせた。

『仕方がない。データ取りは確かに必要だ。付きつてやるか』

『面目ない。こんど埋め合わせするから』

『了解。しかし、ヴォルケンリッターも過保護だな。20になったらばかりの子供相手に俺が何かするわけないだろ』

『ふくん』

最後に余計なことを言ったヴィルヘルムに不機嫌そうな声で短く答えると、はやては一方的に念話を切る。椅子を蹴りながら立ち上がった彼女は、手でメガホンを作るとあらん限りの声で叫んだ。

「いてこませ〜!!シグナム!もう一回病院送りにしたつても可〜

!!

見物人達ははやての突然の声援(?)に驚いたようだ。ヴィータもはやての心情を理解してはいなかったのだが、とにかくはやてが殺る気の応援を始めたことを喜んだ。

その様子を見ていたシグナムは不敵に笑うと、ヴィルヘルムに話しかけた。

「敵が多いですね、副長」

「そうかな、課長も敵が多い方だ」

「そうかもしれませんが、我々がいます!」

ヴィルヘルムの答えにシグナムは断言したが、ヴィルヘルムは不敵に笑い返した。

「何時も味方と言うわけではないだろ」

「そんなことはありません」

「どうかな」

ヴィルヘルムは答えると同時に映像つきの念話を繋ぎ空間モニターを開いた。モニターに映っているのはヘリパイロットのヴァイスだ。モニターに映る姿を見るとヘリ整備班達と、ヘリハンガーに訓練スペースの様子を巨大な空間モニターに映し見学をしていたようだ。

ヴァイスは突然繋がれた念話に驚いた様子だったが、ヴィルヘルムはかまわず話しかけた。

「ヴァイス、私の勝ちに30口だ。賭けておけ」

「おお、副長、勝負に出ますね!」

思わず答えてしまったから、ヴァイスは口を押さえたが遅かった。シグナムの柳眉が吊り上がる。ヴァイスは先日もフォワードとなのはとの模擬戦闘を出汗に賭けをしてシグナムに叱られたばかりだ。

「ヴァイス、貴様!」

「ゲツ」

「そう怒るな、シグナム。単なるレクリエーションだ」

怒号を上げたシグナムを止めたのは意外にもヴィルヘルムだったが、シグナムは収まらない。

「副長、あなたもです！局員の規範である幹部がそんなことでどうするのですか！」

「はて、おかしいな…」

怒りの矛先を向けられてもヴィルヘルムは慌てず、ワザとらしい動作で顎に手をあて答えた。

「確か課長は前回の模擬戦で大儲けした筈じゃなかったかな？グリ・トリアノンの新作バックが買えると喜んでいた筈だったけど…」

このやり取りを見て一番慌てたのがはやてだった。

訓練スペースにいる二人の様子は大型空間モニターに映され集まった見物人が見ている。大半の局員たちは部長もなかなかやるものだと言っていたが、真面目なフェイトや賭けの対象にされたフォワード達からは冷めた視線を向けられた。

ヴィルヘルムがボソリと呟く。

「ほら見ろ、そうでもないだろ」

旗色が悪くなったのはやては誤魔化すように、試合開始を宣言した。

2-1 戦技披露会 I N 六課 II

はやての試合開始の指示で、ヴィルヘルムは待機状態のドルンレーズヒエンに命じて騎士甲冑を身に纏う。それに合わせてシグナムも甲冑を装備し、アギトとユニゾンする。

ユニゾンしたことで甲冑にもアギトの魔力が混ざり変化する。青紫基調の色合いの服と金色の籠手、背中に二対の炎の羽、それが今のシグナムの姿だ。騎士というより剣を持った炎の精霊と言った出で立ちのシグナムに対して、ヴィルヘルムの姿はまさに騎士と呼ぶに相応しいプレートメイル姿で、顔を覆うバイザーが嘴のように尖ったアーメット型の兜を被っている。

(長身の槍使いか…)

ヴィルヘルムに前マスター、ゼストを重ねてしまいそうになりアギトは慌ててその考えを振りはらった。

(何、考えてるんだ！あたしは。向こうは旦那と違って人格式アームドデバイスに頼ってるようなやつじゃないか。石突きのカートリッジシステムだって回転式だ)

そうやって自分を落ち着かせていると、アギトの様子に気が付いたシグナムが念話で語りかけてきた。

『どうした？アギト』

『なんでもねえよ、マスター。それより作戦はあるのか？』

新しいマスターを心配させないようにアギトは話を逸らしたが、作戦を聞きなかったのも事実だ。互いの得物は剣と槍。単純に戦うのであれば間合いの広い槍の方が有利だ。

『ない』

『はっ。』

『作戦はない』

聞き違いかとアギトは聞き返したが、シグナムはハッキリと言いつ返した。

『正確には立てようがないと言った方がいい。元々、副長は一般幹部だからな。戦闘データがほとんどない。ガジェットと戦闘機人との

戦闘では射撃をメインにしていたが、対人戦闘でどんな術式を使うのかは不明だ』

シグナムもヴォルケンリッターの将といわれるだけあって、事前に相手の情報を得ることの重要性を理解していたが、副長の戦闘記録は閲覧できないようになっていた。戦力過剰の六課に文官として紛れ込む処置の一環だろう。

『ええ、じゃあ、どうするんだよ！』

『当然、正攻法で押し切る。お前のマスターが、槍ごときに遅れを取る騎士ではないことを見せてやろう』

慌てるアギトに答え、己の炎の魔剣を片手中段に構える。50m先で対峙しているヴィルヘルムも槍を構える。それを見た実況の二人が叫んだ。

「お二人の準備も完了しました。」

「時間無制限、一本勝負！」

「レディ・ゴー」

開始と同時にシグナムは一息に間合いを詰め、小手試しと言わんばかりに切りかかる。ヴィルヘルムは動かさず迎え撃つ姿勢を見せた。

疾走するシグナムは剣の間合いまであと一歩というところで、槍のスコールの出迎えに会って足を止めた。

(なかなか速い)

剣と鞘で受け、捌きながら心の中で感想を漏らした。ヴィルヘルムの槍は言わばバルカン砲だ。シグナムがJS事件の際に対峙したゼストの様な一撃必殺の重さはないが、何より引きが速く攻撃間の隙が少ない攻撃でこちらを寄せ付けない。並みの剣士ならば剣の間合いに入るまでに、三発は槍撃をもらうことになる。

『マスター、相手の攻撃は軽い。シールドを張って突っ込んじゃまー！』
『それもいいが、もうすぐで目が慣れる』

攻防が10合を数えた時点で、シグナムはもうヴィルヘルムの槍の速さに慣れつつあった。そこで高出力のシールドに力を割き、攻撃の威力を落とすより、鞘のみで捌き重い一撃を叩き込むという選択をした。

アギトも見ると、丈夫そうな甲冑を着ている相手には、その方が有効だと判断し賛成した。

『よし、いくぞ』

『おうよ』

今まで攻撃を防ぐことに余裕があることを欠片も見せていなかったシグナムは、ヴィルヘルムにとって一番虚をつくタイミングで鞘のみでの防御を開始、一撃目を捌きながら飛び込む。

二撃目を受けると同時にカートリッジを単発ロード、剣が火炎に包まれる。ヴィルヘルムもシグナムに合わせてカートリッジを使ったが、条件が同じなら槍と鞘の相対速度が変わらない。

三撃目に合わせて鞘を操る。槍は鞘に弾かれ懐に入ったシグナムの一撃が難なくヴィルヘルムを直撃する…、筈だった。

「ッ」

シグナムが理性ではなく本能で防御フィールドを強化した瞬間だった。ヴィルヘルムの槍の速度が跳ね上がり、鞘でのガードを置き去りにしてシグナムに襲いかかる。それでもシグナムは迷わず愛剣を振り抜いた。

ゴウツ！

互いの攻撃が互いの防御に、ぶち当たり衝撃と熱をまき散らす。シグナムは剣撃と飛び込んだ勢いを殺さず、体を入れ替えように間合いを離す。

『アギトー！』

『こんのー！』

長い槍から逃れる為にアギトが火炎弾を放つが、瞬時に現れたランサーによって迎撃された。予めデバイスに自動で迎撃するようにセットしていたとしか思えない発射速度だった。

再び、対峙する両者。

ヴィルヘルムの肩装甲はザックリと切り裂かれていたが、シグナムにも肩と脇腹に非殺傷設定でのダメージ痕が残っていた。

(やられたな…)

シグナムの左肩、脇腹に魔法陣が浮かび上がり魔力が強制的に排出

される。術式を解析したアギトが驚きの声を上げる。

『こ、これって、黄檜の呪い!』

『いや、あの古代ベルカの二槍使いの魔法なら血が噴き出しているはずだ。古代ベルカ式の魔法を再現したプログラムだろう』

アギトと会話をしながら魔力出力を落とすと、強制放出されている魔力の量も少なくなる。どうやら、掛けられた者の出力の何%かを放出させてしまう呪いのようだ。常時魔力を高めるのではなく、素早く出力調整をしてやればある程度の魔力放出を抑えてやる事が出来る。

『二つ受けたうち、フィールド強化の間に合った脇腹の放出量は少ない。与えたダメージの量に魔力放出が比例している。バリアガードでしっかり受けることができれば、呪いを受けることはなさそうだ』
『ちくしよー、ちくしよー、マスターの一撃もバリアで軽減されるし、魔力の並行運用がメチャクチャうめえ』

『その通りだな。一撃の重さはこちらの方が上のようなだが、総合的な処理能力はあちらの方が上のようなのだ』

『ご、互角、両者互角です!』

「副長、強い!」

アルトが叫び、スバルが感嘆の声を上げた。特にスバルはヴィルヘルムが戦っている姿を見たことがほとんどなかったので、相当驚いている。

アルトは興奮気味で解説席に話を振った。

「解説のお三人は副長の戦いっぷりをどう見ますか!？」

「副長が使った魔法は、強制転送で使うコアを捕まえる技術と正統派魔女が使うエンチャントカースの理論を応用した魔法だね。正しいプログラムの理解と練習が出来ればA+ランク位で器用な人なら出来るかも」

「仕掛けるタイミングも上手い。シグナムが防御から攻撃に移る隙を狙ってる。そうになると、最初の連続突きはワザと単調な攻撃にして、大きな攻撃を誘ったんだ」

「シグナムに呪いをかけても魔力の総量が圧倒的に違いすぎる。副長は何か持久戦に持ち込みたいはずや、対してシグナムは短期決戦にしたいはず。その辺の攻防に注目やね」

興奮気味の実況席に比べて解析席の三人は冷静だった。三人とも現役の空戦魔導士らしくすでに自分ならどう対処すべきかと考えているのだろう。顔が戦っている時と同じ表情になっている。

今度はヴィルヘルムから動いた。一気に間合いを詰めシグナムに猛烈な連撃を浴びせてくる。今度は巧みに緩急を付けこちらのタイミングをズラしている。

『わわ、なんだよ、アイツ！持久戦に持ち込むんじゃないのかよ！』

『いや、正しい行動だ。まだこちらの魔力は十分にある。中距離からの火龍一閃を使わせたくないのだろう』

アギトとの融合したシグナムには火龍一閃という中距離範囲攻撃魔法を持っている。ヴィルヘルムがあくくまで待ちの姿勢を見せるなら、槍の間合いの外から薙ぎ払ってしまえばいい。

(白兵によって活路を開く！副長もなかなか騎士だ！)

高速の撃ち合いが数合、ヴィルヘルムが仕掛けてきた。今まで突き一辺倒だった攻撃に払いを混ぜ、シグナムの太刀筋を鈍らせるとカートリツジを2発ロード。

『デカイのが来る！』

『シールドで弾くぞー！』

重い一撃を逸らされたものは必ず大きな隙を見せる。いくらヴィルヘルムの甲冑やシールドが丈夫であろうと、氣勢が乗れば叩き切る自信がシグナムにはあった。

《ジャマーフィールド、感知》

『え』

『なにー！』

レヴァンティンの発した警告は間に合わず、出現したシールドは容易に穿たれた。

(AMFを纏った多層フィールドの槍！)

ヴィルヘルムの放った槍は1層目に高濃度AMF、2層目に呪術付与の多層フィールドをまとわりつかせた槍。ミッド式射撃魔法ヴァリアブルシュートの現代ベルカ式版といえる代物だった。

破魔の槍の穂先は真つ直ぐ心臓に迫る！

ガツギヤギヤギヤ！

穂先と胸の間に滑り込ませた左腕の籠手が耳障りな音を立てて挟まれていく。槍の力は止まらない左腕ごと心臓を突き刺すほどの力がこめられている。シグナムは剣の腹で槍の柄を叩き、同時に体を捻る。槍はどうか心臓直撃コースをそれ、脇の下に外れた。

ヴィルヘルムの攻撃は止まらない。槍を捕まえる前に槍は引き戻され、突きの構えを見せる。

(今度はこちらの番だ！)

突きだされた槍を鞘で受け、突き刺ささせる。槍が引き戻される瞬間に手を離せば、鞘の串刺しが出来きあがる。

レヴァンティンの鞘は騎士甲冑と同じくシグナムの魔力で編まれた物質で出来ている。騎士甲冑と同じ仕掛けをすることも可能だ。

(くっ！)

ダウン！

シグナムの精神波に反応して防御機構リアクターパージが反応。鞘が爆発する。リアクターパージは化学兵器でいうところの爆発反応装甲だ。使い方を誤ると周囲に立っている味方に被害が出るほどの衝撃力がある。

今回、シグナムはあえて被害が出やすいように衝撃を設定していた。

爆発に煽られヴィルヘルムの体が僅かに傾く。

「シッ！」

ヴィルヘルムの態勢が僅かに崩れた所に、間髪いれずに蹴りを入れさらに態勢を崩させる。シグナムは蹴りの反作用を利用して後方に跳び、距離を取った。

カートリッジを2発ロード。シユランゲフォームとなったレヴァ

ンテインが、火炎で出来た蛇のようにしなる。

『剣閃烈火！』

「火龍一閃！」

アギトの炎熱加速とシグナム・レヴァンテインの炎熱変換により、煉獄の炎と化した斬撃がヴィルヘルムを襲う。ヴィルヘルムは不自然な姿勢のまま、無理やり砲撃魔法を放とうとしているが、通常の砲撃魔法程度ではこの魔法は止められない。

『へ、その程度で止められるかよ！』

『体勢が悪い、回避も不能』

烈火がヴィルヘルムを襲う！

2.2 戦技披露会 I N 六課 III

眼前に迫る業火。少なすぎる対処時間。それでもヴィルヘルムは最も効果的に魔力を使った。

「ヴァナルガンド」

チャージしていた砲撃魔法を至近で炸裂させる。同時に、飛行魔法グルファクシと対炎バリアを発動。背中に現れた翼で爆風を受けとめ、自分自身を上空に吹き飛ばす。

爆風で加速力を得たヴィルヘルムは、防ぎきれなかった火炎に甲冑をなめられながらも最小のダメージで火竜一閃の効果域から脱出した。

『直撃は避けられたか』

『だけど、ダメージはでけえ』

アギトの言葉通りヴィルヘルムのダメージは大きいらしく、騎士甲冑にはところどころヒビが入り、高熱に晒された部分は赤く燃えている。熱を散らす為、騎士甲冑の安全機構が作動し装甲が弾けるように消滅した。

「へへ、勝負あつたなこりゃ」

口の片端を上げ皮肉げな笑みを浮かべているつもりのヴィータにシャマルが頷いた。ヴィータの表情はシャマルから見ると、子供が悪戯を成功させたときの笑みにしか見えなかったが、状況分析は正しい。

シグナムとアギト、炎熱コンビの総魔力数は、ヴィルヘルムの約3倍はあった。そして、現魔力は炎熱コンビが50%以上魔力を残しているのに対して、ヴィルヘルムが10%前後と力の差は歴然としている。

いや、自分の能力が相手に知られていないことを上手く利用したとはいえ、平均より上程度の魔力で炎熱コンビの魔力をここまで削ぎ落した、ヴィルヘルムが善戦したと言えるだろう。

だが、それもここまで。炎熱コンビが火竜一閃を放つときに大量の

魔力を強制放出させられたと言っても、ヴィルヘルムもまたその一撃から逃れる為に、ほとんどの魔力を使い果たしてしまっている。

「シグナムが隙を与えず、押しつぶしたのなら、そうなるな」

「副長の魔法は高レベルですけど、必殺技にはならない感じですねえ」
ザフィーラとリインも同じ考えようだ。

ヴィルヘルムの魔法は呪術付与、多層フィールド、AMFと上級者向けのスキル。また、現代ベルカ式にしては珍しい飛行魔法や射撃など、多岐にわたり高レベルであるが随一と呼べるものがない。シールド強度ならスバルに劣り、ティアナほどの命中精度は無く、スピードはエリオに敵わず、補助魔法の能力上昇率はキャロの方が上だ。相性にもよるが、実戦ならば、たった一つ武器となる攻撃を持っている者が勝つ。現に六課では新人達への教導は基礎作りと得意技の強化をメインに行っている。

しかし、ヴィルヘルムにはそれが無い。ヴィルヘルムの残りの魔力ではシグナム倒しきれない。と、というのがヴォルケンリッターの一致した考えだ。

ヴィータが笑う。

「へへ、文官らしく理屈だけの頭でっかちで、どれも半端なんだよ」

前線に立つ魔導士には後方勤務者を卑下する傾向があるが、ヴィータの場合はヴィルヘルムに対する個人的な反発で言っているようだ。

構えを解いたヴィルヘルムが静かに着地した。ほとんど魔力が残っていない為か、鎧を再構成せずにインナー姿のまま。無防備すぎる姿にシグナムがかえって躊躇していると、ヴィルヘルムが念話で話しかけてきた。

『やはり、地金の差が出るな。どう工夫した所で力負けしてしまう』
『降参でもするつもりですか？』

まだ魔力が残っているうちにギブアップとは、ベルカの騎士として恥ずべき態度だ。本当に今降参するつもりなら、この男がはやての下で働いていることが我慢できない。

しかし、ヴィルヘルムはシグナムの反応を楽しむように言った。

『いや、今からお前にバインドをかけてやろうと思っただけだ』

そう言うのとヴィルヘルムは息を吸い込み、大声で言った。

「シグナム、次の一撃は私の最大威力の魔法を使う。受けて立つ自信がなければ発動前に潰すがいい」

ヴィルヘルムの声はシミュレーターのマイクが拾い上げ、観客たちの耳にも届いた。ヴィルヘルムは続ける。

「いや、そうした方が賢明だ。これは慈悲による警告だ。私の魔法が完成する前に潰せ！いいいな！」

堂々とした声がハツタリでないことを告げていたが、シグナムのプライドを大いに刺激した。つまり、ヴィルヘルムは魔法によるバインドではなく精神的な束縛を掛けたわけだ。シグナムはすぐに鞆を再構成、中段に構えを取る。

応じるつもりらしいと悟ったアギトは流石に忠告した。

『マ、マスター、まずいって。普通に戦えば勝てるんだから、わざわざ挑発に乗ってチャンスをやる必要ないって』

『確かに見えすいた挑発だが…、ここはあえて乗ろう』

『なんで』

『知りたいからだ…』

『はあ？』

『なに、単に私のわがままだ。少し付き合ってくれ』

釈然としない気持ちでいるアギトのため、シグナムは少し搦め手を使うことにした。

『こう言えば納得してくれるか？アギト、この私達が打ち負けると思っているのか？』

『いや、ねえよ。そんなこと、あるわけがねえ！』

『いい返事だ！』

槍を担ぎ返事を待っているヴィルヘルムに、シグナムは答えた。

「いいでしょう。その挑戦、受けて立ちます」

「そうか、では覚悟しろ。そのまえに…」

ヴィルヘルムが手を払うと、シグナムにかけられていた呪いが解けた。

「どういうことですか？」

「もう必要ないからな…」

ヴィルヘルムは息をすべて吐き出し、周囲の空間全ての空気を吸い込むイメージをしながら息を吸い込む。すると、シグナムの体から強制的に排出され周囲の空間に漂っていた魔力が集束、ヴィルヘルムに吸収されていく。

『マスターの魔力を…』

『喰っているな』

吸収された魔力はヴィルヘルムの姿を変貌させていく筋肉が膨れ上がり、皮膚は焼けた鉄のように赤くなっていく、髪は逆立ちその眼からは理性の色が失われていく。

変化は彼のデバイス、ドルンレースヒエンにもあらわれ、穂先の形状が茨の蔓のように変化する。蔓が伸び、絡み合い新たな姿を構成。茨で出来た巨大なネジあるいはドリルを思わせる巨大なランスへと変わり、騎士甲冑もそれに合わせて熊の毛皮で出来た鎧に再構成された。

オーバードライブモード《ベルセルク》魔力集束技術を利用、魔力を集め吸収することで他者と自分の魔力の再利用する身体強化と自己ブースト。理性を吹き飛ばし、脳のほぼすべての容量を魔力制御に使用することで、短時間ながらも本来の制御不可能なレベルの魔力運用を可能とする禁じ手である。

「オオオオオオオオツッ!!」

シグナムから強制放出させた魔力を喰らい尽くし、異形の狂戦士へと変身したヴィルヘルムは飢えた獣のような咆哮をあげた。得物を見る熊のような視線をシグナムに向けると一瞬で接近。ランスを振り下ろす。

ゴッ!

しっかりと受け止めたシグナムだったが、衝撃の余波だけで意識が薄れそうになるほど強烈な一撃だった。気を抜くと防御ごと叩き潰されてしまいそうになる。魔力を限界まで高め拮抗すると、攻撃のときと変わらぬ素早さで狂戦士は距離を取った。

(本能的にこちらを強敵と判断したか)

理性がなくなっているにもかかわらず、判断がやけに合理的だ。普段のヴィルヘルムは文官として振舞うのを好んでいるようだが、もしかするとこの姿こそ本性なのかもしれない。

ヴィルヘルムが逆手に構えた槍に魔力を注ぎこんでいく。間合いは射撃戦の距離、投擲するつもりだ。

対して、シグナムも最大の攻撃で迎え撃つ。鞘と剣を連結、レヴァンティンが弓の形へと姿を変える。ボーゲンフォルム、いまだアギトとの連携を試していない遠距離戦闘形態である。

観戦しているほとんどの人間が息を呑み、エース達も静かに状況を見守る。

二人はほぼ同時に魔法陣を展開。魔力が渦巻く。バインドも呪術付与も無しの純粋な力と力のぶつけ合い。

ヴィルヘルムの構える槍はシグナムの魔力を喰らい成長した呪いの槍。

シグナムの番える矢はアギトに増幅されたシュツルムファルケンの強化版。いまだ名もない無名の矢。

代表的なりカーブボウの構えで矢を引き絞るシグナムに対して、ヴィルヘルムの投擲方法は奇妙だった。槍を目の前に放り投げると石突きを思い切り蹴り飛ばす。衝撃でカートリッジの残弾が全て解放、槍が爆発的な加速をする。

「翔けよ、隼！」

シグナムが放った矢は炎を纏ったまま音速の壁を越えて飛翔。槍と正面から激突。

ゴッ!

炎と衝撃がまき散らされた。その中心で茨の穂先は砕かれ、矢は折れた。

しかし、双方の攻撃はこれでは止まらなかった。弾き飛ばされた茨の棘が向きを変え鏃となってシグナムに殺到し、炎は矢を失って尚ヴィルヘルムに襲いかかった。

ズドドドド!

ゴガンツ！

「両者、直撃ー！」

双方とも大型魔法を放った直後で避けようがなかった。鍬の猛火と烈火の鍬が炸裂し、濃密な魔力の霧と爆煙が二人の姿を完全に消してしまう。

衝撃と爆風で逆巻く堀から人影が1人、崩れた石塁をよじ登る。ヴィルヘルムだ。

再構成した毛皮の鎧も消滅し、訓練服装もボロボロで疲労しているがひどい怪我はないようだ。

ヴィルヘルムは二、三度地面を強く踏み足場を確認してから、煙を吸い込まないようにゆっくりと深呼吸をした。

(オーバードライブは、威力がでかいが心身が摩耗するな)

自己ブーストの代償としてひどい虚脱感が襲ってくるが何とか踏み留まる。残りの魔力はせいぜい通常攻撃一回分程度しか残っていないが、それを拳にこめ構える。

(シグナムの事だ、あの程度では倒れない。なら、こちらを捕捉しだに向かってくるはずだ)

間合いを離して衝撃波を打たれたらそれまでだが、シグナムは正面から切りかかってくる。と、確信していた。

目を凝らし意識を集中していると正面の煙が風とは関係なく動く。

(…今…)

23 戦技披露会 I N 六課 IV

突きだした拳はシグナムの鼻先で止まり。シグナムの刃はヴィルヘルムの首もとで止まっていた。

そのままピタリと動きを止め、睨みあっていると、次第に煙が晴れていく。

「あ、お二人の姿が見えました」

「おお、互いに寸止めで攻撃を止めています！ということは!?!」

スバルとアルトが片手同士を組み、余った腕を広げるポーズを取ってから宣言した。

「この勝負、引き分け〜!」

「なに〜」

「ふん」

「やるねえ、副長」

「あつちやく、番狂わせ」

「おお」

「誰か引き分けに賭けていた奴いたか?」

観客が上げたざわめきを聞きながらヴィルヘルムが拳を下ろすと、シグナムも伸ばし切っていないかった腕をさらに曲げ、剣を引いた。

(彼女の腕前なら腕を伸ばし切り、こちらより先に王手をかけることが出来た筈だ。加減されたと思うと腹立たしいが…。他の隊員達の前だ、華を持たせてもらったと思うことにしよう)

改めてシグナムの姿を確認すると、アギトとのユニゾンは解除されていたが、ほぼ無傷の騎士甲冑は通常のモノに変わっていた。が、アギトの姿が見えない。

「君の新しい相棒はどうした?」

「ご心配なく、ここです」

言いながらシグナムが胸元を緩めると、豊かな胸の谷間からアギトがフラフラと這い出てきた。疲労しきって目を回している、意識も怪しいようだ。

「大丈夫か、アギト!」

「な、なんてことねえ…よ」

精いっぱい強がりと言うアギトにシグナムが微笑みかけた。ヴィルヘルムは念の為にシャマルを呼び出し検査の用意をさせると、念話でシグナムに話しかけた。

『で、この騒ぎの目的は？まさか、本当に大事にしている主に夜遊びを教えた男に仕置きをする。とは、言わないだろうか』

『少しはそれもありますが、…気が付かれましたか』

シャマルや空間シミュレーターのチェックに来たメカニックチームとやり取りをしながら、二人の念話は続く。

『お前は実直な騎士だ。上辺をつくろうとも、剣に出る』

『それならば、もうお分かりでしょう』

『それでも言葉にしなければならぬことはある。文官の全てが騎士というわけではないぞ』

シャマルにアギトを預け、話をしているシグナムに変化は見えなかったが、念話にはため息のような波動が伝わってきた。観念したらしい。

『闇の書』の戒めから開放されてから約10年。罪を償い主の夢をかなえる為、戦ってきたつもりでした』

『事実そうだろう。このまま、無事に六課の運用期間を終えたなら、課長は昇進する。今回の手柄で人事もかなり融通がきくはずだ。部隊を持ちたいという夢は叶うだろう』

『ええ、我々は戦場では主を守り、道を切り開く剣となる事が出来ません。それに主には共に歩んでくれる友もいる。しかし、あなたに会うまで後ろから飛んでくる矢を防ぐ者はいなかった』

シグナムの念話に自嘲じみた波動が混じった。

戦いの場において最強クラスのシグナムだが、部隊運営というのは戦いだけでは成り立たない。どうしても前戦メンバーの華々しい活躍に目が行きがちだが、機動六課の仕事は設立、運営、襲撃で破壊された施設等の復旧など、戦い以外の仕事の方が遥かに多い。

また、どんな組織の中にもいるものだが、出世する一番の方法は同僚の足を引っ張ることだと考える輩が出てくる。管理局もご多分に

漏れず、そういった輩がはやてや六課の妨害しようとしてくる。その類の相手は脛に傷があるヴォルケンリッターでは難しい、どうしてもヴィルヘルムに頼らなければならぬ。

シャマルは医官として、ヴィータは訓練幹部として事件捜査や運営の面で、はやてを手助けすることもできるが、純粋な武人であるシグナムは多岐に渡りはやてを補佐することが出来、設立準備から六課に深くかかわっているヴィルヘルムを意識せずには居られなかった。そして、はやてにとつて、ヴィルヘルムが無防備な姿を晒せる相手と知り、どんな人物かより知りたくなつた。

シグナムがそれをシャマルに話したところ、シャマルは今回のこの模擬戦闘を思い付いた。自称、古い騎士のシグナムが自分の思いを伝え、相手の事を知るには剣を交えるのが一番いい。そう考えたようだ。

『恥ずかしながら、私はあなたが羨ましい。ヴィータのあなたに対する反発も似た思いがあるからでしょう…』

シグナムの説明を黙って聞いていたヴィルヘルムだったが、話を聞き終えると先程のシグナムのように自嘲した。

『例えナマクラであっても、他人が持つっていると銘剣に見えることもある。私には武人としての道を究めること出来るお前が羨ましくてたまらないがね』

『ベルカの騎士が互いにならないものねだりですか…。笑えませぬね』

そう言いつつも念話から感じられる波動は爽快なモノに変わっている。誰かに聞いてもらうことでスッキリしたのだろう。

『今度、お前も酒に付き合え、ベルカ自治領産のいいワインを出す店がある』

『よろこんで、可能ならばシャマルを同伴させてもかまいませんか』

『いいだろう、その程度では私の財布は揺るがん』

『え、本当ですか！』

突如としてアギトを介抱していたはずのシャマルが会話に入ってきた。やはりというか、なんとというか盗聴（立ち聞き）していたらしい。

『やはり聞いていたか』

『シャマル、悪癖だぞ。いい加減、直せ』

『その前にペナルティが必要だな』

『そうですね』

『え、ちよつとま…』

シャマルの返事を待たずにシグナムは、はやてに通信用空間モニターを開く。

「主はやて、後始末はシャマルがすべて取り仕切るそうです」

「良い案だ。課長、私は賛成です」

「え、ええ、そんな〜」

シャマルに後始末を押し付け2人は笑った。念話の内容を知らない他の隊員は奇妙なモノを見るように二人の騎士を見ていたが、2人は互いの戦闘と智謀を称え暫く笑いあっていた。

模擬戦闘から3日後、模擬戦闘で得られたアギトの能力データや、今後のアギトの運用方法などをまとめた資料を作成したシグナムは六課部隊長室を訪れた。この資料ははやてを通して上層部に送られ、司法取引の際の刑の軽減、シグナム（正確にははやて）がアギトを引き取る際の根拠として使われることになる。

「シグナム、お疲れさんや」

「お疲れ様ですう」

シグナムを迎え入れた、はやてはリインと共に紅茶を飲んでいた。仕事の合間の休憩中のような。誘われるままにテーブルに着く。

「シグナムの用件はなんや？」

「先日の模擬戦闘の資料をまとめました。後ほど、確認をお願いします」

「ん、ええよ」

データを受け取るはやてを見て、リインはかねてからの疑問を思い出した。

「副長はどうしてあんなに強いんでしょう？」

リインの知る限りヴィルヘルムは士官学校を出たわけでもなければ

ば、高ランク魔導士がなる上級キャリアでもない一般キャリアだ。もちろん、一般キャリアも入局時には戦闘指揮訓練や通常の武器訓練などを行うが、武装隊員と戦える腕前を持つている者はほとんどいない。そう考えるとヴィルヘルムの戦闘能力は高すぎる。

「んん、まあ、そうやね。新米武装隊員じゃ、副長には敵わへんやろな」「ですよ。副長は何処であんな戦闘技術を学んだのでしょうか」

「私も興味がありますね。管理局のデータベースでは、副長のデータは個人情報として扱われているので、直接の上司しか閲覧できないようになっていきます」

二人からの催促を受けてはやてはしばし考える。流石に関係者以外閲覧禁止になっているデータを見せるわけにはいかないが、一般公開されているデータを見せることなら問題ないだろう。

「二人ともトーナメントって知つとる」

はやてが空間モニターを開き、ネットに接続しながら聞く。

リインは首を捻ったが、シグナムは頷いて答えた。

「ベルカ時代からある、馬上格闘競技の事ですね。最も、ベルカ時代と現代ではルールがだいぶ違いますが」

遠い記憶を思い出すような顔をして語るシグナム。もしかしたら、遙か昔に参加した事があるのかもしれない。

「うん、そうや、競技人口はストライクアーツと比べるとずっと少ないけどな…、お、あつた」

はやてが開いて見せた空間モニターには動画共有サイトが映しだされていた。流れているのは10年以上前の映像で、どこかの大型競技場で行われたトーナメント競技会のようだ。ヴィルヘルムのようなプレートメイルタイプの騎士甲冑を着た騎士達が馬を駆り、実戦さながらの一騎打ちを行っている。馬も唯の馬ではないようでリincarコアを持つ魔馬のようだ、乗り手と馬の魔力が混ざりあい共に闘う姿は正に人馬一体と言える。

リインが映像を見ていると見覚えのある鎧を着た騎士が、黄金色の鬘を持つ軍馬に乗って現れた。アーメット型の兜を被った騎士は、素早い槍捌きで着実にポイントを重ね第1ターン（ラウンド）を先取し

た。騎士は自陣に戻るとバイザーを上げる。バイザーの下から現れたのは、まだ幼さが顔に残る十代のヴィルヘルム。

「副長が、若いですう!」

「それ、副長かて、いきなりオジサンだったわけないやろ。副長は子供のころからこの競技に出てな。結構な腕前だったらしいんよ」

「この映像はジヨスト(一騎打ち)のようですが、トウルネイ(団体戦)には参加を?」

「はて、どうやったかな?」

シグナムはこの手の競技に興味があるらしく熱心に聞いたが、はやてはあまりルールに詳しくないようで首を捻った。シグナムは残念に思いながら質問を変えた。

「副長は入局してからも競技を?」

「試合に出ることは少なくなっただけみたいやけど、腕を鈍らせるようなことはしなかったようや」

トーナメント競技の参加資格には、魔導師ランクD以上を取得していることとあるが、魔導師ランクによつて階級分けがある訳でもないので、ヴィルヘルムは魔法の腕前が上がっても、ランクアップテストを受けなかったそうだ。

また、入局後も実戦でも指揮がメインである自分自身のランクの為に、保有できる戦力を減らすのも問題があると考えていた為、魔導師ランクはDに留まっていた。

「あ、そうそう、ベルセルクはトーナメントで強敵にぶつかった時の為に、開発した魔法らしいで」

「なるほど、競技用の魔法というなら合点がいきます。長すぎるチャージ時間もターン間に行うことが出来る」

何でもできるが決め技のない器用貧乏タイプのヴィルヘルムは自身の性質を嫌い、限界を突破することのできるベルセルクを組み上げ、基本的にドルン・ボーとドルン・ジャルグで戦い、倒し切れない相手にはベルセルクで止めを刺す。と、いうのを必勝パターンにしていたようだ。

「副長のベルセルクが凄いとすると、正面から打倒したシグナムは

もつと凄いです」

「いや、なに、アギトが優秀だったおかげだ」

「ラインの率直な賞賛を受けて、はにかんだシグナムは謙遜して言ったが、ラインはむうくと不満そうな声を上げた。同じ融合騎どうし、相手が優れていると言われると思うところがあるのだろう。不味いことを言ったと思ったシグナムは少し話題を変えた。

「模擬戦闘は3対2だったとも言えるからな。勝てて当然だ」

「どういうことですか？」

「ラインが話に乗ってきたので、シグナムはホツとしながら続けた。「こちらは私、レヴァンティン、アギトの3人。対して副長は、副長自身とドルンレースヒエンの2人だった。それに投擲によるダメージをもらった際、アギトは力尽きている。スバル達は引き分けと言っていたが、あのとすすでに模擬戦の意義は失われていた。そういう見方をするならば副長の勝ちとも言える」

シグナムが最後の一撃を加減したのは、そういった意味合いからだ。

しかし、この場にヴィルヘルムがいたならば、その結論には反対しただろう。はやてにはヴィルヘルムがなんと言うか予想が付いた。

彼ならあの模擬戦闘で常に戦闘の選択権を持っていたのはシグナムだった。と、反論するに違いない。ヴィルヘルムが模擬戦でベルセルクを使えたのは、シグナムが彼の挑発に付き合ったからであって、普通に戦っていたのならば、切札を使う間もなく敗退していたはずだ。

ドンツ、ドンツ

つつい、休憩が長くなってしまっていたはやて達の会話が、荒いノックに止められた。

一体誰だろう？ はやてが返事をする、相手は意外にもグリフィスだった。

部隊長室に入ってきたグリフィスは息も荒くいつもと様子が違う。

「どないしたん？ そんなにあわてて？」

「部隊長はご存知でしたか？」

「なにを？」

グリフィスは聞き返す、はやての様子を見てため息をついた。そして、はやてを憐れむような目で見た後、空間モニターを開き、ある書類を見せた。

「ん？請求書。下記の通り、ご請求申し上げます。ああ、副長のデバイスのやな」

ヴィルヘルムのデバイス、ドルンレースヒェンは新人達デバイスのように管理局製ではないし、なのはのレイジングハートのように管理局が整備を請け負う契約を交している訳でもない。完全に副長の私物である。

この場合、破損した際の修理費はヴィルヘルム自身が払うことになるのが普通だが、前回の模擬戦は公の命令で行われた為、メンテナンス費用を必要経費として六課が持つことになっていた。

グリフィスが見せたのは、その整備にかかった請求書だった。

「これがどないしたん？書式も間違ってるんで」

「請求額をよく見てください…」

「ん…、ゼロがちゅう・ちゅう・たこ・かい…、…ちよお、待ちイ、桁が1個多いやん!!」

改めてよく見たはやてが悲鳴に近い声を上げる。請求額は新人達のデバイスを7〜8回調整した時の費用よりも高い。内訳も通常のインテリジェントデバイス4機分の高速演算処理装置を使った並列演算回路や大容量魔力コンデンサなど、高級部品整備の項目が並んでいる。

「フロイラインって、こんなフルチューニングされてたんかい！そら、魔力の並行運用も簡単やろ！」

はやての叫びでシグナムの疑問が一つ解けた。道理で紫電一閃や火竜一閃の一撃から逃れられたわけだ。

シグナムが1人納得していると、はやてが脂汗をかき始めた。

「アカン、アカン、アカン！一回の模擬戦闘にこんなに予算使ったら、リンディ提督に怒られる…」

JS事件を解決した功績で、六課の復旧工事は優先されて行われた

こともあり、結構出費が増えている。本局で予算確保のため、ゆりかご戦より激しい戦いを行っているリンデイが知ったら怒りだすのではないだろうか。

「あの、そのことですが…」

「なんか、ええ、案があるんか!」

グリフィスの言葉に縋りつくはやてだったが、縋りついたのは死神の大鎌だった。

「いえ、先程、リンデイ提督から連絡がありました。模擬戦闘の必要経費について話があるから、今日中に連絡がほしい。」と

「あ・あ・あ」

青くなり、頭を抱えるはやては、逃げる事が出来ないのならせめてダメージを分散させようと助けを探す。

「シグナムくッ」

「分かっています」

こう情けない声をあげられたら威厳も何もあつたものではない。が、見捨てるのは哀れすぎる。シグナムは一緒に弁明する役を買って出た。

続けてはやてはヴィルヘルムとシャマルを呼び出そうとしたが、二人とも出掛けているとグリフィスが答えた。

「へ、何処いったん」

「副長は負傷の後遺症の検査で病院に、シャマル先生はその付添です。今朝、突然予定の変更が入りました…」

それを聞いたはやては叫んだ。

「逃げた!逃げたな!あの策士共!」

24 偽りの勲章I

その事件は、本局査察部から機動六課に対する協力要請から始まった。内容はJS事件の際にゼストから回収されたデータの中に記録されていた銀行口座から、金を下ろしたものがいるので逮捕してほしいとの要請だった。

銀行口座の主は、スカリエツティの研究資材や取引禁止物品を輸送していた罪が疑われていたが、口座が偽名だったために居場所を特定できずにいた。が、ゆりかご事件から数ヶ月たったことで油断したらしい。クラナガンで口座を使用している姿を防犯カメラが撮影。犯人の特定に至った。

機動六課部隊長八神はやてはすぐに、フェイト・T・ハラオウンに対処を命じた。

フェイトはすぐさまシグナムと共に交代部隊アース分隊を出動させると、クラナガン郊外のとある一軒家を包囲。アース1、アース4が正面を固め、アース2、アース3が裏にまわる。フェイト、シグナムは上空に待機し、指揮を執る。

『オールアース、配置完了』

『突入』

アース4がドアを蹴り破り、あらかじめサーチしておいた反応に向かって突き進む。

目標はアース1、アース4の姿を認めると、すぐさま裏口へと逃げ出した。荒々しく扉を開け裏通りへと出た犯人だったが、途端にアース2、アース3に挟み込まれた。

アース3が空に向かって得意の散弾を発砲！

「はい、そこまで〜！おとなしく捕まっちゃいな」

アース3が警告したが犯人は往生際が悪く、威嚇をしなかったアース2に向かってきた。

アース2は無言のまま、自分の槍型デバイスの石突を犯人に向け構えるとそのまま突いた。すると石突だけが犯人の足元に現れる。犯人は突然足元に出現した石突に足を引っ掛けると、ものの見事に転倒

し頭を強打、そのまま気絶してしまった。

犯人の様子を確かめるためにアース3近づき、感想を漏らす。

「あーあー、痛ぞ。黙って俺にやられていれば、無傷ですんだのに」
「俺は攻撃をしていない。相手が勝手に転んだだけだ」

アース2がやったのは転送魔法の応用で、デバイスを部分的に転送させることが出来た。シャマルが得意としている旅の鏡の同系の魔法だ。

アース2は長距離からの攻撃を得意としているベルカの騎士で、相棒のアース3は散弾魔法弾のパンチ力で接近戦を好む、一風変わったコンビだった。

『全ユニットへ、目標を確保』

『はい、ご苦労さまです。このまま、犯人を本局へ護送します』

「それは、1週間ぐらい前の話でしたね…、覚えています。ちょうどテスタロツサ執務官が血まみれになったハラオウン提督を引きずっていた翌日でしたね。それがどうかしましたか？」

機動六課部隊長室で、ヴィルヘルムははやてに聞いた。部隊長室にいるのは、はやて、ヴィルヘルム、フェイトとその副官のシャリー、そして、なぜだかティアナがいた。

ヴィルヘルムに意地悪な言い方をされたフェイトは萎縮して体を小さくしていたが、はやてはいつもの訛りのあるミッド語で答えた。
「覚えてるんなら話が早い。そんな時の容疑者が無罪を主張しててな。その容疑者についての追跡調査依頼がきたんよ」

「また、人手不足ですか…」

六課はどちらかという捜査活動よりも、警備や戦闘を得意としている部隊だ。もちろん、初動捜査や捜査活動を行いもするが、捜査員はフェイトやシャリーののように複数の役職を掛け持ちしているものも多く、規模は陸士108部隊や騎士カリムの部隊とは比べ物にならない。裁判に必要な証拠や証言を集めるならそちらの部隊のほうが効率的なはずだ。

「それもあるけど、今回はティアナに経験を積ませたいというのもある」

「なるほど…」

進路がらみのアレコレらしい、ヴィルヘルムも春に向けて、文官や整備員達の推薦状などの作業に追われている。はやては春から執務間補佐官を目指すティアナのための舞台を用意したようだ。

「で、私が呼ばれたのは、その調査がらみですか？」

「うん、説明は…、ティアナ、お願いな」

「は、はい」

ティアナが若干緊張した面持ちで返事をした。ティアナにとっては、ヴィルヘルムは苦手な上司といった意識が抜けきらないようだ。それでもティアナは一度深く呼吸をすると緊張を押しつけ説明を始めた。

「一週間前、密輸の疑いで逮捕されたカブ・アービュータス、46歳は犯行を自供。起訴される予定でした」

「…問題はないように感じるが？」

自供したのならば、むしろ裁判もスムーズそうに思える。

「はい、しかし、アービュータスに弁護士がついてから、一転、無罪を主張しています」

「供述を撤回したのか？」

ミッドの法律では一度署名した供述はそうそう覆るものではない。撤回したところで、まだまだ検察のほうが有利なはずだが…。

「いいえ、アービュータスが無罪の根拠としているのはPTSDです」「なるほど…」

心的外傷後ストレス障害（PTSD）は、心に加えられた衝撃的なストレスが元で、さまざまな障害を起こす疾患のことである。だが自称PTSD患者の中には、なぜか、罪を犯し、管理局に逮捕された後で、自身の疾患の自覚症状がでる者がいる。一部の容疑者側弁護士達は、このPTSDの診断書を必殺技か何かのように持つてくることもある。

「だが、最近は精神疾患だからといって、無罪にするのは難しいのでは

ないか？陪審員も容疑者がJS事件に関与していたとなれば、それほど同情的にはならないだろう」

「はい、ですが…」

言いよどんだティアナにかわり、フェイトが引き継ぐ。

「時期が悪いんです。JS事件の恐怖は、まだ、みんなの記憶に新しいですから、そういった場合、社会が一体化して被害者達には同情的になります」

「このカブという男は、加害者側だろ？」

「ええ、カブ・アービュータスの主張を説明します」

フェイトによれば、カブ・アービュータスの主張はこうだ。自分は中央世界条約機構の平和維持隊で勤務していた経験がある。

平和維持隊とは「次元世界、又は世界間の安全を維持する」ため、管理局が比較的小規模な舞台を現地に派遣して行う活動のことである。しかし、紛争当事世界の同意を必要とせずに派遣をする例も多く、先進世界の武力干渉という意見もあり、賛否が分かれることの多い組織だ。

その部隊生活中、自分は数々の勲章をもらっている。

平和維持活動には何度も参加し、任期を勤め上げている。その最後に参加したオルセアの内戦地帯では、凶悪な反政府軍につかまり数ヶ月間の捕虜生活を強いられた。このいつ殺されるかもしれない捕虜生活の数ヶ月間と、戦場での経験によってPTSDを発症した。

密輸に関与したのは帰国し隊を退役した後、今から5年前で、最高評議会を名乗る男が接触して来たのが始まりで、自分に接触してきた男は、密輸に協力しないと平和維持活動時代の功績をすべて奪い、退職金も出さないと脅してきた。PTSDだった自分はストレスによる判断力を失っており、功績と生活基盤を奪われる恐怖から、罪を犯してしまった。

「なるほど、自身もまた最高評議会の犠牲者だと主張しているわけだ。で、法律の専門家としての君の意見はどうなんだ？」

「判事や陪審員が信じれば無罪判決もありえます」

「そうなってしまうと、ほかの小悪党どもも似たような主張をしてく

るのは目に見えているな。お偉いさんが手を抜きたくない理由は、そのへんか」

はやて、フェイトが頷き肯定する。六課まで使って調査をする理由がよくわかった。密輸にかかわった小悪党どもを逃がしたくない本局上層部は、容疑者が平和維持活動でいったい何を経験したのか、実際のところを突き止めてほしいようだ。コレはちよつと一筋縄では行かない仕事のようだ。平和維持隊は海（次元航行部隊）や陸（地上部隊）とはまた違った組織であるし、精神医学の専門用語も飛び出してくるだろう。捜査経験の少ないヴィルヘルムには荷が重いように感じる。

それを伝えるとはやては心配無用と伝えた。

「下調べはすでにフェイト執務官達が行っているんよ」

フェイトが頷き、シャーリーが取り寄せた資料を開いて見せた。

その中の資料には数十をこえる勲章や表彰を受けた記録が残っている。その勲章の中には戦闘中に負傷したからといっても、やすやすとは貰えない勲章も含まれている。それだけの活躍をした男となると、戦場でのストレスが原因でPTSDを発症することもありうるだろう。

「ほう、すごいな。輝かしい功績とっていいのでは？」

ヴィルヘルムが思わず感嘆の声を上げた。それに対してシャーリーとフェイトが懐疑的な意見を述べる。

「はい、コレだけ見るとすごい経歴の持ち主に見えるのですけど……」

「ですが、この容疑者が行っていたのが密輸の、さらに末端の仕事だったことが判明したんです」

「ん？」

フェイト達の話の聞いて、ヴィルヘルムにも疑問が浮かび上がってきた。

誰でもできるような末端の仕事なら、そこら辺のゴロツキでも雇えばいい。わざわざ、脅しをかけてこのミスターヒーローを使う必要はない。最高評議会がこの男に課していた仕事と、彼の軍歴の間には落差がありすぎる。

「たしかに疑問が残るな」

「と、いうわけで追加調査を行うことになったんやけど、平和維持隊の記録はそのミツシヨンによって、さまざまな世界のあちこちに散在していて、土地勘のない人には調査しにくいねん」

ヴイルヘルムにもだんだん呼ばれた理由がわかってきた。

「副長にやってもらいたいののは、第58管理世界サベージの案内と地上部隊との調整なんよ」

「第58管理世界サベージ・・・、その地上部隊に私も一年ほどいたことがあります。なるほど、了解しました」

ヴイルヘルムが承諾すると、フェイトとシャーリーが立ち上がりながら言った。

「そして容疑者の故郷でもあります。容疑者と平和維持隊と同僚だったものから証言も取れるはずです」

「裁判まであまり日にちありませんし、すぐに動きましよう。」

ティアナも後に続こうと立ち上がると、ヴイルヘルムが3人に視線を投げているの事に気が付く。ヴイルヘルムの視線の先はスカートの裾。思わず裾を押さえて、声を上げる。

「な、なんですかー」

まさか、この堅物副長がセクハラ！いや、でも、隊長達を部屋に連れ込んでたつて、噂も。

ティアナの様子を見たはやても、ヴイルヘルムの様子に気がついて、いたずらっぽく笑う。

「副長、ティアナの絶対領域にドツキドキ」

ヴイルヘルムははやてをジロリと一睨みすると、口を開いた。

「三人とも、2型（ミニスカート）はやめて、1型（ロングスカート）か3型（ズボン）に着替えてこい。向こうは冬だ」

「はい、わかっています。ご心配なく」

「はーい、コートも用意しておきます」

フェイトとシャーリーは知っていたようだ。副長の視線の意味もすぐに気がつき、勘違いすることがなかった。

一人だけあたふたしてしまったティアナは恥ずかしくなり、うつむ

きながら退出しようとする、ヴィルヘルムが声をかけてきた。

「三人とも先に行つてくれ、少しやる事ができた」

言うが早い、ヴィルヘルムは三人を追いたて部隊長室の扉に鍵をかけた。

扉越しに短い悲鳴と、その後続く怒鳴り声が聞こえてくる。

「ツいったく、何すんねん！このセクハラのつぽ」

「黙れ！セクハラちび！」

結構な剣幕での応酬が聞こえてきたが、フェイトはさっさと行つてしまう。ティアナをあわてて引き止めた。

「ちよ、待つてください、フェイトさん！止めなくていいんですか！」

「大丈夫じゃないかな？あの二人、仲いいんだよ」

「そ、そうですか？」

ティアナの印象だと、ヴィルヘルムははやてに対して一般論や常識を持ち出しては反論しているイメージが強いので仲が悪く見えていた。が、フェイトはまったく心配していない様子でシャーリーに声をかけた。

「ほら、シャーリー。盗み聞きしていないで行くよ」

戸口にへばり付き聞き耳を立てていたシャーリーはペロツと舌を出しながら、ドアから離れた。

サベージへの定期次元船はティアナが思っていたほど込み合っていないなかった。フェイトに理由を聞いてみるとサベージは首都の機能を分散させており、一つの都市に人口が集中しないよう都市計画が進められたため、人の出入りもほかの世界の首都と比べると少ないらしい。その分次元船の席にも余裕があり、通路を挟んで3脚つつ並んでいる席の一行に女性三人が、通路を挟んだ1席にヴィルヘルムが座っている。

「第58管理世界サベージの首都レベルはクラナガンからの定期次元船で約4時間、時差―2時間、亜寒帯の気候は冬季なると雪こそ少ないものの、訪れるものを拒むかのように厳しい」

「あ、やっぱり観光したい？ティアナ」

ミッドチルダ出入国管理部が発行している観光案内を、次元航行船の座席に添えつけられた端末で、睨つけるように見ていたティアナにシャーリーが話しかけてきた。

「えっと、ちがいます…」

ティアナはバツが悪そうに言い返した。確かに言われてみると、周りにそう見られてもおかしくないことをやっている。

「じゃあ、予習かな？」

今度はフェイトがこちらの顔を覗き込みながら言ってくる。

やり手の執務官の洞察力は伊達ではないわね。とティアナは思った。

「ええ、まあ。その私はずいぶん無知だなんて。それに副長に対する説明でも言葉に詰まってしまいました」

憧れの執務官の仕事の手伝いができると思ったせいか、あるいはヴィルヘルムの無表情のせいか、緊張のし過ぎで実力が発揮できなかったことで、ティアナの気分は憂鬱だった。

「それなら宗教も調べたほうがいいよ。たとえば、これから行くサベージは聖王信仰だけど、特に5代目聖王を信仰している。5代目聖王はどんな業績を残した人でしょう？」

「えっと、あれですよ。動物愛護を訴えたっていう」

「うん、正解。サベージではいまだにその習慣が残っていて、動物愛護に関する法律も多いし、四足の動物は殆ど食べない」

「な、なるほど」

フェイトは100%親切心で教えてくれたと分かっているのだが、そのことを知らなかったという事実がティアナをさらに憂鬱にさせた。

執務官なることは夢でもあるし、今回の仕事はありがたいとも思っているのだが、自分に執務官になる才能があるのだろうかという不安がないわけではない。ちょうど六課に入らないか？と、はやてに誘われたときのよう不安と期待が入り混じっている。

(コレは少し重症かな)

ティアナの顔が沈んでいるのを見たシャーリーは、何か気分を明る

くする話はないかと、記憶を探る。

あつた、とっておきのが…

「そんな顔しないで、ティアナ。ブリーフィングのことなら気にしないで、今回はたまたま緊張しちやっただから仕方ないよ」

「うん、みんな最初はうまく…いかないんだよ…」

フェイトも加わりティアナを慰めようとしたが、途中で自身が執務官試験に2回失敗したことを思い出して声が尻すぼみになっていく。

そんなフェイトをわき目に、シャーリーはとっておきの話を始めた。

「そうそう、緊張といえば。フェイトさんなんて、私が執務官補佐の考査試験を受けに行くときに…」

シャーリーの言葉に自分で地雷を踏んで俯いていたフェイトがハッと顔を上げて止めに入る。

「シャ、シャーリー、その話はダメ、やめて、お願い。今度、翠屋のケーキ、買ってあげるから！」

(ああしている、姿のほう彼女達は年相応なのかもしれない…)

キヤイ、キヤイと騒ぐ連れの3人を見て、ヴィルヘルムは女学生の引率をしている教師になった気分になり、いつだったかナカジマ3佐に聞いた話を思い出した。

「俺のご先祖様の国じやな「女」って文字があつてな。そいつを三つ合わせて「姦しい」って文字になる」

ナカジマ3佐の言っていたことは正しかったな。と、先輩仕官の偉大さを噛み締めるが、そろそろ、周囲の席からの視線が痛くなってきた。シャーリーはともかく、フェイトとティアナは戦闘訓練の賜物で心肺が確りとして声が大きい。

大きめの咳払いをして3人の注意を引くと、3人とも周りの様子に気がついたようで居住まいを正した。

「ところであらかじめ向こうの関係各所に連絡を入れておきたいのだが、回る順番は決まっているか？」

「あ、はい」

ウイルスヘルムに尋ねられたフェイトは制服のポケットから、デバイスを取り出し、回る場所のリストの表示操作を行う。搭乗手続きの際デバイスロックを掛けられたバルディッシュは普段よりゆつくりと反応し主人の命令に答えた。

「なるほど、連絡して資料を用意させておこう」

「あ、じゃあ私も…」

フェイトが手伝いを申し出てきたが、ウイルスヘルムは断った。捜査の中心となるのはフェイトだ、こんなことに煩わせるわけには行かない。

「今回向こうで指揮を執るのは君だ。今のうちに英気を養っておけ」

「それがなんとも落ち着かないというか…」

手を合わせ膝の上でモジモジを動かすフェイトに、一つアドバイスを送ってやる。

「なに、簡単なことだ。ようは課長の真似をしたらいい」

聞いたフェイトは一度キョトンとしてから、こみ上げてきたようにクスリと笑う。酒を飲んだ休日のことでも思い出したのだろう、いたずらを思いついた少女のような顔を見ると、

「ビル、言うこと聞かなあかんで〜」

と、言つてウインクをしてきた。予想を超える返しをもらいウイルスヘルムは驚いた。

「…ッ！…その調子で頼む」

苦笑し降参のポーズを取ってから、通信端末のあるブース（船内は念話禁止）に向かった。

フェイト達に背を向けると、女達のクスクスという笑い声と話し声が追いかけてきた。話の内容は多分休日那时的話だ、チラチラと視線も感じる。いったいどこまで話を膨らませているのかと思うと頭痛がしてきた。

「…席に戻りたくないな」

やはり、ナカジマ3佐の言っていたことは正しかった。

25 偽りの勲章Ⅱ

現地時間で11時を回ったところサベージに到着したフェイト達は、昼食を取ってから行動に移った。次元船で一緒に運んできたフェイトの車で、まずは平和維持隊の入除隊窓口のある広報連絡本部に向かう。カーナビは現地の規格が古すぎて使えず、地図とヴィルヘルムの案内だけが頼りだった。

首都レブルの町並みはひとたび次元港から離れると、開発の手が入っていない区画が多く目に付いた。クラナガン郊外にある廃棄都市区画のようにも見えるが、路上に出されたゴミ袋や換気扇から漏れ出す湯気が、この町がまだ使われていることを教えている。

町の様子にすっかり気を取られたティアナがキョロキョロと視線を動かす。

「なぜだろう？ 大都会（クラナガン）育ちのティアナがおのぼりさんに見えるね」

「えっ！ あー…いえ、すみません」

シャーリーにからかわれ、羞恥で真っ赤になるティアナをルームミラーで見っていたヴィルヘルムは、ティアナの隣に座るシャーリーに質問をした。

「執務官補佐、この世界をどう見る？」

「典型的な後進世界という印象ですね。新しく見える建物でも20年ぐらい昔の建築様式を使っています。治安用のサーチャーも旧式のものですね」

ヴィルヘルムは同じ質問を、ハンドルを握るフェイトにもする。

「執務官は？」

「この時間になっても、道路のゴミが回収されていないってことは、公共サービスが悪いのかもしれませんが。こういう世界は大抵治安が悪いです」

ヴィルヘルムは二人の答えに満足そうに頷いた。

ティアナも感心してしまふ。始めてきた世界であつても見るべきところを見ると、その世界の様子というのが判るものらしい。せつか

くの機会だ。今のうちにいろいろ聞いておくのがいいかもしれない。「あの、少し質問させてもらっていいですか？」

ティアナは広報連絡本部に着くまでの間、フェイトたちを質問攻めにしてすごした。

広報連絡本部に着くと資料管理を行っている女性局員が迎えてくれた。女性局員ベンリイは余暇40代半ばでふくよかな体型をしており、美人と言う訳ではなかったが豊富な人生経験に裏打ちされた自信が顔に表れていた。

「はじめまして。連絡を入れた、機動六課のヴィルヘルムです」

「ベンリイ・ホワイトよ。はじめまして」

そう挨拶をするとベンリイはヴィルヘルムに軽く抱きつくくと、左右の頬を触れさせてから離れた。

「…ッ」

ティアナはギョツとしたが、ヴィルヘルムは平然としている。こういう挨拶のようだ。話には聞いたことはあったが、実際見るのは始めてで驚いてしまった。

ヴィルヘルムはベンリイにフェイト達を紹介し、ティアナも身を硬くしつつ、サベージ式の挨拶をする。

挨拶が終わると資料室に案内された。資料室の作業スペースの机の上には、すでに適切なファイルがピックアップされ、並べられていた。

「ごめんなさいね。都会からきた人は驚くでしょうけど、ここの資料ってデータ化が遅れているのよ。資料と言ってもいまだに紙のファイルなのよ」

「いえ、ファイルを用意してもらっただけでも十分ありがたいです」
すまなさそうな口調のベンリイにシャーリーが笑いかけた。少し前の無限書庫のように大量の書籍を詰め込んだだけの場所や、そもそも保存すべきデータが残っていない場合の多い地方世界で、資料検索をしたこともあるフェイト達から見れば、ここは上等の部類だ。

シャーリーは用意されている資料をざっと確かめると言った。

「うん、コレなら思っていたよりも早く片付きそう」

聞いてフェイトが指示を出す。

「じゃあ、シャーリーはここをお願い。ティアナはシャーリーを手伝ってあげて」

「はい」

「はい！」

ベンリイと共に資料を調べ始めた2人にこの場を任せ、フェイトとヴィルヘルムは次の目的地に向かった。

管理世界戦闘中行方不明者・捕虜家族連絡会と書かれた看板が架かっていたのは、民間の真新しいビルで、入り口を入ると必ず目に入るところに、このビルの出資者の胸像が設置されていた。このビルは違う先進世界の資産家が金を出し建てられたようだ。

自己顕示欲と成金趣味でできた胸像を見たヴィルヘルムは職員に聞こえないように鼻で笑い。フェイトも冷たい一瞥を胸像にくれてから顔を背けた。見る気も失せたらしい。

二人の対応に出てきたのはズーク・アイビーグレイと名乗る15歳ぐらいのちよつと眠そうな顔立ちをした少年で、彼は挨拶（フェイトとは長めに）を済ませると、データベースに繋がる端末がある資料室に案内した。

端末を操作したズークはカブ・アービュータスが主張している捕虜収容生活の記録がないことを教えてくれた。

それを聞きフェイトはすぐにシャーリー達に連絡を取った。空間モニターが開きシャーリーの姿が映る。

「シャーリー、カブの経歴はわかった？」

『はい、彼の隊員履歴簿を見る限り、確かに勤めていた年数は長いですが、何度か入除隊を繰り返していますね』

そういった局員の狙いは簡単だ。退職時の特別支給金が目当てだったのだろう、何度か支給金を受け取った記録と、再入隊をした記録も残っているそうだ。

「捕虜になった記録はどう？念のため全ての入隊期間中で調べてほし

いんだけど…」

『大丈夫、調べてあります。ですが、容疑者が捕虜になったという記録はありませんね』

つまり、カブの主張には嘘があるということだ。仮に彼が本当に捕虜になっていたとしても、平和維持隊もそのことに気がつかず、連絡会への連絡もなしに、自力で逃げ出したことになる。

ヴェルヘルムは念のためズークに質問してみた。

「君、捕虜になった人たちの中で、何の支援もなしに自力で逃げ出した人はいるかね？」

「そんな人いたなら、とつくに表彰されているつすよ。まあ、捕虜になった人たちの中には酒が入ると、大脱出を企てたって言う人もいるらしいつすけど」

「ズークは捕虜になった人達とは、顔見知りなの？」

「俺、いや、私というのがというより祖父が捕虜になったことがありまして、その親睦会みたいなのに着いていったことがあるんです。同じ収容所に入れられていた人たちは何年に一度か、そういった会を開いているみたいですよ」

肩をすくめて笑いながら言うズークに、今度はフェイトが質問した。どうやらこの少年はフェイトが好みのタイプらしい。ヴェルヘルムと話をしているときよりも、言葉使いが丁寧になり、重たげなまぶたを精一杯開いて、機嫌がよさそうだ。

フェイトはズークの話を聞くと、近くにカブの主張する期間捕虜になった人がいないか尋ねた。書類だけではなく、捕虜だった人にカブが捕虜になったことがあるのか直接会って尋ねる気だろう。

フェイトに頼まれたズークは嬉しそうに端末を操作し、何名かのリストを出した。そのうちのいくつかはヴェルヘルムも近くに行ったことのある住所だった。

「いくつかは案内できるな。行くか？」

「はい、もちろんです」

フェイトは返事をする、ズークから証拠になるデータを受け取ると礼を言う。

「ありがとう、ズーク」

「いえいえ、何か私が力になれることがありましたら、こちらに連絡をください」

しまりのない顔になったズークは連絡先を書いた名刺をフェイトだけに渡した。

フェイトから捕虜達の証言を取りに行くと、連絡を受けたシャーリーは空間モニターを消し、自分の作業に戻った。今度は本人がもらったという勲章について調べていく。先ほど調べた、隊員履歴簿には確かにいくつかの勲章をうけた記述があった。しかし、シャーリーは制服や階級章などの支給品授受簿を調べてみたが、授け側のサインに不備があることに気がついた。

これはベンリイに言つて、平和維持隊本隊表彰部に保管されている記録を確認する必要があると感じたシャーリーは、ベンリイを呼んだ。

「ベンリイさんちよつといいですか?」

「はい、どうしたの? シャリオさん」

「いくつか問い合わせてもらいたいことができました。お願いできますか?」

シャーリーはベンリイに事情を話し、データを送ってもらうように依頼する。

「わかったわ、でもここの施設は古いから少し時間が掛かっちゃうかも…。ほかに問い合わせたいものはある?」

シャーリーは今のところ思い当たらなかったもので、先ほどから平和維持隊の勲章に関する規則集を読み漁っていたティアナに声をかけた。

「どう、ティアナ追加してほしい資料はある?」

「そうですね。では、この勲章とこの勲章の受章者リストをお願いします。きますか?」

ティアナは規則集の勲章の写真一覧を開き、2つの勲章を指差して言ってきた。シャーリーも規則集を覗き込んだがティアナが指差し

た1つはカブの履歴には乗っていないものだった。

「ん、ティアナ、この勲章の受章者リストっているの？」

今回の件に関係ないことでベンリーの手間を増やすのは忍びなく思ったシャーリーが指摘したが、ティアナは自身ありげに頷いた。

規則集の一文を見せながらティアナは説明する。

「はい、この勲章は容疑者の履歴に乗っている勲章をもらうと、必ずもらえる勲章なんです。それもこの勲章には特別な番号が付いているもので、どの勲章が誰に贈られたものか確実にわかるようになってるみたいです」

「必ず2つセットでもらうはずの勲章を、1つしかもらっていないわけね。確かにおかしいかも」

「はい、名簿を比べてみる必要があると思います」

「そうね」

ティアナの意見にシャーリーも同意し、ベンリーに資料を取り寄せってもらうように依頼すると、メガネのブリッジを押し上げながら言った。

「それと、容疑者どんな仕事をしていたのか、どんな仕事をする資格があったのか調べ直す必要がでてきたわねえ」

「じゃ、私はどこの訓練校の何の訓練をしていたか調べます」

「じゃあ、私は容疑者がどの部門で働いていたか調べますわね」

二人が調べなおすと、彼は最後に務めた任期で人事・会計書類を扱う職種の訓練を受けた後、平和維持活動に参加していたが、任務を終えてサベージの小さな通信部隊に配属された時期、どの部門に配属されていたかを示す記録がなくなっていたことに気がつく。

さらに、ベンリーが持ってきた資料を検討した二人はある意見で一致した。

フェイト達が話を聞きに行った、3人目の元捕虜の証言は管理局にとって有利になる証言だった。

フェイト達にとって運のいいことに、男に容疑者カブ・アービュータスの写真を見せると、後方基地で会ったことがあると答えた。その

男は平和維持活動に参加している間は、後方の補給基地から前線物資を運ぶ輸送部隊に所属しており、彼の話だとカブは後方基地の備蓄管理員として勤務しており、戦闘らしい戦闘には遭遇していないはずだと証言した。

有益な証言を取ることができた2人が意気揚々と車に戻ると、ティアナ達からの通信が入った。車の中で空間モニターを開き報告を聞く。

ティアナは容疑者が授章した勲章の中には、不備と不自然な点が多いものがあること、容疑者の兵科に関する重要な書類のいくつかが欠けていたことを伝える。シャーリーはそれにベンリイが新たに用意した資料でわかったことを報告した。

「やはり平和維持隊本隊表彰部の受章者リストには、カブ・アービュータスの名前はありませんでした。それと、コレはティアナが発見したことです。容疑者が受賞したことになっている勲章の中には、他の隊員が受章すべき勲章があったんです」

ティアナが受章者リストを比べてみると、2つセットでもらうはずの勲章の片方は作戦中に命を落とした隊員の名前が、もう片方にはカブ・アービュータスの名前があった。これは明らかにおかしい。

報告を聞いたフェイトが調査用に使っていた写真を睨みつけ、ヴィルヘルムも不愉快そうに眉を吊り上げた。

つまり、この容疑者は最後の除隊直前で、自分の記録に接する機会があった可能性が高く、それをいいことに自分の記録を改ざん、書類上とはいえ実際にはもらっていない勲章を授章したことにしたらしいこと。その勲章の中には他人の功績を掠め取った可能性が高い。

「この男、許さない！」

「事実だとしたら、その意見には同意するが書類が抜かれている以上、あくまで仮説でしかない。こちらには証言も証拠もないからな」

「証言を取る！カブが補給所に配属されたころ、文章係だったという証言を取れば、十分状況証拠になる！」

怒りのせいかフェイトはヴィルヘルムに対する言葉使いが変わってしまっている。普段は優しく笑っていることの多いに美人が怒る

と、ギャップのせいで迫力が増す。

やはり、美人は怒らせるものではないなと思いつながら、ヴィルヘルムは提案した。

「では、この通信基地に連絡して、当時容疑者と同じ隊で働いていた者のリストを貰おう。まだ、管理局で働いているものがあるなら、各部隊で調書を取り送ってもらおうよう手配しよう」

興奮していたフェイトだったが、ヴィルヘルムの忠告を聞ける程度には冷静だったようだ。一度、深く深呼吸して気持ちを落ち着かせる。

「そうですね。お願いします」

ヴィルヘルムは頷き、早速取り掛かった。通信基地からリストを受け取り、いくつかの部隊に依頼すると、フェイトに顔を向けた。リストを空間モニターに開き、ある名前を指差しながら言った。

「見てみる、この男。既に除隊しているようだが…」

「ディオ・パステル…、このサベージ系の名前ですね。出身地はダックス。レブルから車で7時間位ですか？」

「この町は鉾山で栄えた町だが、30年以上前に鉾山が閉山してから、治安がかなり悪くなっている。どうする？行ってみるか？」

「調書は管理局内だけでなく、現在、民間になった方からの調書があった方が陪審員も信頼するはず。2人と合流して向かいましょう」
「わかった。先方に連絡を入れておく」

フェイトが車を走らせ広報連絡本部に向かう間に、ヴィルヘルムがディオ・パステルの自宅に連絡を入れると通信に出たのは初老の女だった。女、パステル夫人はヴィルヘルムの服装、つまり局員の制服を見ると興奮した様子で言ってきた。

「息子が見つかったのかい?!」

わけがわからずヴィルヘルムとフェイトは顔を見合わせた。

26 偽りの勲章Ⅲ

こちらの用件を話し、事情を尋ねるとパステル婦人は「息子は管理局に無実の罪で逮捕されそうになったとき、行方不明になっちゃったよ」と答え、「息子を見つけるまで連絡するんじゃないよ！この税金泥棒！」と、罵声を浴びせ通信を切ってしまった。

罵声を浴びせられたヴィルヘルムだったが、この程度でまいるほど神経は細くなかった、ケロリとした表情で、驚き眼をパチクリさせているフェイトに尋ねる。

「どうする？テストタロット執務官、とても友好的には見えなかったが？」

「あ…、一応状況確認だけでもしておきたいです。それに無実の罪とこのも気になります」

「わかった。知り合いの地上部隊の捜査官に調べてもらおう」

地上部隊からの連絡が来たのは、フェイト達がシャーリー達と合流したところだった。夜も更け黒ずみ掛けた蛍光灯が頼りなく照らす、広報連絡本部資料室の作業スペースの机の上に通信用の空間モニターが開かれる。

連絡をしてきたのはダックスにある0076部隊の捜査官で、ヴィルヘルムの知人の後輩に当たる若い捜査官だった。若いといってもフェイトより年上で20代後半ぐらいの年齢で、まあ、平均的な地上部隊の曹士といった印象だ。

「はじめまして、ケーニツヒ3佐。自分はゼファー・オリーブ陸曹であります」

「協力ありがとう、オリーブ陸曹。話しは聞いているか？」

「はい、先輩から」

「では、願います」

ゼファーによると、1年前、デイオが除隊後に、働いていた薬品工場が麻薬精製に手を貸した疑いがあり、本局の捜査官が大挙として押し寄せてきた。このときの本局捜査官の一人は横暴で態度の悪い捜査官だったようで、ろくに下調べをしないうちに、デイオも精製に関

わっていたのではないかと疑ったらしい。身の危険を感じたディオは姿を消し、行方不明になった。そのあと、ディオと麻薬精製との因果関係がないことが証明されたが、彼は行方不明のままらしい。

「連中、本命の工場長を捕まえたと思ったら。申し送りもろくにしないで帰っていきましたよ」

うんざりした表情でゼファーは「いい迷惑です」と続けた。

こういった小さな摩擦の積み重なりが、今の管理局での海と陸の溝に繋がっていったとヴィルヘルムは思っているが、彼の力ではどうにもならないこともある。が、そうは思わなかったものもいる。ティアナがゼファーに聞いた。

「パステル婦人は、搜索願を出していないんですか？」

「ディオが姿をくramsさせた翌日に、出しているようですが…。当時でも、25歳の成人男性でしたからね…」

つまり搜索はしていないということだ。成人男性が自分の意志で行ったのだから、地上部隊も本腰は入れていないだろう。

ゼファーがお茶を濁すと、ティアナの言葉にトゲが生えた。

「搜索願が出ているのに、なぜ、搜索はしていないんですか?!」

幼いころ、好きだった兄がいなくなった時に、兄の名誉を傷つける扱いを受けたせいとか、ティアナはこの手の話には敏感だ。間違ったことは正さなきゃ!という思いと勝気な性格が相俟って、言葉を抑えることが出来なかったようだ。

「まさか、本局が関わっているとは思いませんでしたので。申し訳ありません！」

言葉のトゲで刺されたゼファーは明らかにムツとしたようだ。一番階級が上のヴィルヘルムに謝罪したが、言葉の外で「もともと、あなた達（本局）の責任だろう!」と言っているようだった。

「いや、重要人物というわけではないんだが、とある事件で彼の調書が必要だったんだ。当たってしまったってすまない、陸曹」

尚も言いつのろうとするティアナが発言する前に、ヴィルヘルムは割り込んだ。視線でティアナを押しとどめながら、頭を下げる。

「それに、ディオ・パステルの行方不明の件は、こちら（本局）のミス

です。同じ本局捜査担当として、恥じ入るばかりです」

フェイトもそれに習った。

階級が上の二人が自ら頭を下げたことで、ティアナもゼファーも頭に上った血が下がったようだ。互いに礼儀に反したと謝罪した。

「テスタロッサ執務官、どうする？ 調書は他の所からも送られてくる。正直に言ってディオの調書それほど重要ではない」

「いえ、探します。裁判までは、まだ2、3日あります」

フェイトが返事をする、ティアナは嬉しそうな表情をした。

ヴィルヘルムもフェイトの意図が裁判の為というより、パステル夫人のもとに息子を返そうとしていることは分かっていたが、何も言わなかった。

「ゼファー陸曹、ディオの足取りはどこまでわかっていますか？」

「資料だと、給料日前でほとんど金を持っていなかったそうです」

お金のない人間が行き着く先は決まっている。ヴィルヘルムが意見を言った。

「なら、近くの貧民街だろう」

「ああ、それならここです」

ゼファーの端末から地図データが送信され、新たな空間モニターが開く。メインストリートから離れた寂れた町の地図が表示された。売春婦やドラッグの売人が街角に立ち、壊れた街灯が並ぶそんな町だ。範囲も広く、こういうった町だと警邏隊員ですら、どこに誰が住んでいるか把握できていない場合が多い。ティアナが率直な意見を言った。

「この範囲を2、3日ではちよつと無理があるのでは？」

「監視システムは…」

シャーリーが聞くとゼファーは首を振った。後進世界の寂れた都市には、そんな高価なものはない。

「こういう時は、営業妨害をしてやればいいのさ」

「まあ、それが一番有効ですね」

ヴィルヘルムの言葉の意味がわかったのは、画面の向こうのゼファーだけだった。だが、フェイトはこの世界の捜査官が賛成したの

なら、その方法がいいだろうと判断し、ヴィルヘルムに方法を任せることにした。

「明日の朝、民航機でそちらに向かう。デイト写真、長期監視用の車、ホットラインを用意できるか？」

「ええ、その程度でしたら」

「頼んだ」

通信を終えるとヴィルヘルムは連れに宣言した。

「本日の作業はここまでだ。ホテルに行つて一休みするでしょう。明日は長いぞ」

翌日、ダックスへ向かった一行は0076部隊を尋ね、車を受け取った。

ティアナが車に添えつけられている小型電子レンジや、トランクにおさまっていた折りたたみイスを眺め、首をひねりながら聞いてきた。

「副長、それで営業妨害ってどんな方法なんでしょうか？」

「大して難しい方法じゃない。売人や夜の女の多い場所で、買いに来るやつに制服を見せびらかしてやるだけだ」

「売人を捕まえるのではなくて？」

「いや。私達が行うのは制服を見せびらかせるだけだ。それを行うことによつて、どんなことが起こると思う？」

「え、売人が一時的に他の通りに移っていく…ですか？」

そして、制服を着たものがいなくなつたら、舞い戻ってくる。ティアナには意味がある行動には思えなかった。

「不正解だ。彼らは移動などできない」

「えっ！」

当たり前前の答えを言つたつもりだったのに否定され、さらにわけがわからなくなり、軽く混乱するティアナを見てシャーリーが手助けをする。

「あのね、ティアナ。ドラッグを売ってる人達は、細かく縄張りが決まっているの。この人はこの通りの2ブロックとか、この人はあつち

の通りの3ブロックとか、コレを守らないとひどい喧嘩になってしまうの」

「控えめな表現だな。縄張りを侵すと殺人事件に発展することも多い。だが、局員に手を出せば、それこそ局員が大量に集まってきて、それこそ商売にならない。歯向かいたくても、この売人連中には管理局と事を構えるほどの力はない。なら、売人達はどう考える？」

ここまでくると、ティアナもひらめいた。とつとといなくなつて欲しい局員を追つ払うには、局員が来た理由になつた奴を突き出せばいい。

「町の住人に密告させるってことですか？」

「そういうことだ」

「それなら、ホットラインには一人残っていたほうがいいですね」

3人とやり取りを聞いていた、フェイトが提案し、渉外担当のシャーリーに0076部隊に残ってもらい、捜査官としての動きを期待しているティアナを同行させることにした。

残つたシャーリーに売人が一番密集している通りを聞き出してもらつているうちに、フェイトたちは長期戦に備えて、テイクアウトできる食事を買うに行くことになつた。

一行がメイストリートに通りがかった時、ヴィルヘルムは裏路地の様子を確認すると、小腹がすいたといつて車を止めさせた。車が止まつたのは、この町にしては掃除が行き届いている大きな目の通りで、路上には屋台が数件並んでいた。

「通過儀礼をしてやろう」

「…副長はどなたに？」

ヴィルヘルムの言葉に、フェイトがあまり気乗りしないような顔をした。

「この地上部隊に配置されて間もない時だ。その時も捜査の手伝いに借り出された。地上の准尉や3尉なんてモノは、3士よりこき使われるからな」

「そうだったんですか…」

「そつちは？」

「執務官の研修期間に先輩に…、社会見学だ。と言われて…」
「なるほど、どこでもあるのだな」

フェイト達は車を降り、ティアナを屋台に誘った。

先程から意味深な会話をする上司に一抹の不安を覚えたが、ヴィルヘルムに「この名物を食わせてやる。付き合え」と、言われてしまえば断るのも悪い。車を下り誘われるまま屋台の1つに向かう。

誘われた屋台でヴィルヘルムが買ったのは使い捨ての容器に入ったスープで、ほぐした魚と野菜をトマトと香辛料で煮込んだもののようにうだ。ミッドではあまり嗅いだことのない独特の香りがする。

容器を渡したヴィルヘルムは「食べてみる」と言っ、こちらを見ている。フェイトもだ。

しかし、ティアナはフェイトの表情が気になった。フェイトの表情は子供のころ兄に意地悪をされた自分を「しようがないお兄ちゃんね」と、言って慰めてくれた母の顔に近い。

このスープに何かあるのかしら？…とても辛いとか？

「どうした？・ランスター2士」

「い、いえ、何でもありません！」

仕方がないわね！えい、…ままよ！

プラスチックのスプーンでパクリと一口…

「あ、おいしい！」

「それは、よかった」

スープの味はトマトの酸味と魚や野菜から出た甘みが絶妙だった。思わず素直な感想を漏らしてしまう。

これはおいしい…疑っ損した。

「その料理、気を付けないと魚の代わりに、便所紙を使って水増ししている場合があるからな」

「…ブツ！…ゲホッ、ゲホツ！」

ヴィルヘルムの言葉を聞いたとたん、ティアナは大きく咳き込んだ。

疑うべきだった…もう、飲み込んだじゃった！

大きくせき込むティアナの背中をフェイトがあわててさする。

「ティアナ、ティアナ！落ち着いて。ここのは大丈夫だから！」

咳き込んだときに飛びっ散り、顔についたスープをフェイトがハンカチで拭いてくれたが、ティアナは恨みがましい視線を向けた。

あんな意味深な会話をしていたところを見ると、フェイトも知っていたはずだ。知っていて何も言わなかったのだから、フェイトも同罪ではないか。

ティアナの視線を受けて罪悪感を刺激されたフェイトが、泣きそうな顔になりながら説明した。

「あのね、これはミッドや他の先進世界から出たことのない隊員に、必ずやる通過儀礼のようなものなんだ」

「…通過儀礼、ですか」

抑えているつもりだったが不機嫌そうな声がでた。フェイトはますます慌て、継るような視線でヴィルヘルムを見た。犯罪者の罵声には毅然としているフェイトだが、身内に恨まれるのは苦手らしい。普段の冷静さが、微塵もない。

しょうがなくヴィルヘルムが説明する。

「まず、君の食べたスープは、水増しなんてしていない。保障しよう」
そう言われてもティアナは気味悪そうにスープを見ている。さらにヴィルヘルムは説明を続ける。

「裏路地を見てみる。人が使っている程度には汚れているが、それなりに掃除がされているだろう？」

「は、はい…」

ティアナが裏路地を覗き込みながら頷く。が、それが何を意味するのかわからないようだ。

「こういう場所は、公共サービスが行き届いている場所だ。そういう場所では先ほど言ったような水増しは行われない」

「公共で働いている人たちの出入りが多いわけだからね。すぐに営業停止になってしまうんだ」

あ、なるほど、二人の意図していたことがわかった。

「つまり、公共サービスが食事の安全の基準になると？」

「絶対ではないけど。ある程度の基準になるってこと。行ったことの

ない世界とかで役に立つんだ」

納得はした。でも、もう少しイイ伝え方があるのではないかと、思ってしまう。それが顔に出る。

「そんな顔をするな。経験に勝る知識なしと言うだろ。それに私が同じことを言われたときには、実際に紙を食わせられたんだぞ」

ヴィルヘルムが渋面を作ったのを見て、ティアナは驚いた。

この副長でも、こんな顔をするのか、と。

路上駐車しかけた車が、ティアナ達の服装、管理局の紋章が入ったコートを見るなり、慌てたように速度を上げて離れていった。

コレで何台目だろう？

ティアナは10台を超えたあたりで数えるのを止めていた。空を見上げるとドンヨリとした曇り空。冬の弱々しい太陽が真南を少し過ぎたあたりに見える。

「まったたく、まだ、お昼ですよ……！」

言ったティアナのいるのは、ダックスで最も治安の悪い貧民街だ、路上にはごみが落ちているし、建物の壁やら塀には落書きがされている。通りに出ている人々は不健康そうな顔をした売人や、冬だということに露出度の高い服に派手な化粧の女達で、迷惑そうにこちらを見ている。

ティアナには、薬に手を出す者の考えが分からなかったし、夜の女達と呼ばれる商売があるということは知っていたが、それが明るいうちから行われているのが信じられなかった。

何考えているんだろう、男って。と、顔に書いてある。

「ろくに仕事がなくて暇をもてあましているんだろう。経済的に貧しい国ではよくある光景だ」

車から出した折りたたみのいすに座り、道路に出ていた廃材を一斗缶で燃やし暖をとっているヴィルヘルムが答えた。イスが体格に合わないのか、先ほどから居心地悪そうに体を揺すっている。

同じく折りたたみイスに座るフェイトは何も言わなかったが、愉快的な顔などしていない。

「まあ、女、子供が来る場所ではないな…」

言ったヴィルヘルムとフェイトが立ち上がった。彼らの視線の先、ティアナの背後から街角に立っていた女が歩いてくる。女からの安い香水の臭いに顔をしかめながら、ティアナも椅子から立ち上がり、ヴィルヘルム達から少し離れてデバイスのみを起動する。コレで万が一のことがあっても援護できる。

歩いてきた女はティアナを見て舌打ちをすると、ヴィルヘルムに食って掛かった。

「ポリが何のようだい!!おかげでこっちは商売上がったりじゃないか!!」

女に詰め寄られても、ヴィルヘルムは平然としたまま、質問をぶつけた。

「ディオ・パステルって男を捜している。君は知らないか？」

「ここで本名を名乗るバカなんて、いるわけないだろ！」

「この人です。心当たりありませんか？」

答える女にフェイトが懐から写真を取り出し女に見せた。女は写真を除きこむと、鼻を鳴らしながら言った。

「はっ、デイルじゃないか。こんな小物捜してどうするんだい！」

「ちよつと事情があつてね。居場所を教えてくれないか？」

「…」

女は迷ったようだったが、他の街角に立つ女達や子悪党達が見ているのに気がついて、視線をそらしながらいった。

「町の人間は売れない」

「そうか、では、残念だがここに居座り続けるしかないな」

「ちっ、くたばりな！」

女は吐き捨てて去っていった。

女がこちらから離れると、女に胡散臭い格好をした男が近づき、一言、二言話すとすぐに裏路地のほうに消えて行った。女のほうはこちらを一睨みすると携帯通信端末をいじくっている。

フェイトが呟く。

「これで管理局がディオを捜しているという噂が、元締めの手にも入

るといいんですが…」

「大丈夫だろう。こういう場所での噂話は、君の戦闘機動より早いからな。暗くなるころには、向こうからメッセンジャーが来るだろう」
「やっとなり返しですね」

ティアナは自身を抱くと、ブルツと身震いをした。

冬の太陽は足が速い。17時ともなるとあたりは真っ暗になった。かろうじて壊れていない街灯が頼りなく道を照らしている。女達や売人達は本日の商売を諦めたのか、姿を消し周りには人っ子ひとりいない。

日が落ちて急激に下がった気温に耐え切れず、ティアナは対寒フィールドを張り、車の電子レンジで例のスープを温めた。ひどい目にあつた曰くつきの代物だが、この際贅沢は言ってられない。

ヴィルヘルムとフェイトもコーヒーや紅茶を温めて啜っている。

フェイトはサベージの状況が気になるようだ。ヴィルヘルムに赴任してきたときの状況を、熱心に聴いている。

「私が赴任した時は首都の次元港が改装中だな。その時の物資の調達を取り仕切るのに私が呼ばれた。だが、ここ数年のサベージでは働かない大人が多くてな」

「働かない大人ですか？」

「ああ、このサベージは数十年前までは鉱山で栄えていた世界だが、その鉱山は他の世界の資本で発展したものだ。ところが、その当時のサベージ政府は鉱山がもたらす利益は自分たちの実力で得たものだ勘違いした」

鉱山で働いていたのは他の世界の者だったが、何もしなくても鉱山の権利で大量の金が入ってきたサベージ政府はその金をばら撒き市民の人気を得ていた。だが、鉱山が掘りつくされると、他世界の企業はとっとと撤退。残ったのは鉱山マネーに甘え切った大人達。

「まあ、大人達については自業自得だが、子供たちがそれに付き合われるのを見るのは気分が良くないからな。転任する前に、上層部やNGOに幾つか公共事業や学校を建設するように企画して働きかけた。

その幾つかは、成果が出始めているらしい。…倍率は高いらしいけどな」

管理局の幹部と言え、出来ることは限られている。

「ま、何人かの子供は救えただろう。と、思っておくべきだろうな」

「…私には、少し難しいです。みんな助けたいですから…」

「みんな、か。…まあ、それも間違いではないが…」

各世界には、各世界の悩みや問題があるらしい。

ティアナは2人の話を聞きながら、サベージでの出来事を振り返った。初めは執務官の捜査に参加できることがうれしくて仕方なかったが、今は捜査活動よりも、ミッドとは違う世界の情勢や異文化に触れられたことの方が大事に思えてきた。

もしかして、八神部隊長もそれを狙ってたのかしら…？

上司がタヌキと言われる理由が何となくわかった気になっていると、フェイトのデバイス、バルディツシュの警告を発した。

《左方向300ヤード、一般市民が近づいてきます》

三人は会話をピタリと止め。暗い路地に目を凝らすと、3ブロック先の街灯の下に小さな人影が見えた。人影は小走りに近い早歩きでこちらに真っ直ぐ近づいてくる。

「子供…」

フェイトの呟きがティアナの耳に届く。そう、人影は子供だ。ヴィオ位の子供がこちらに歩いてくる。恐らくこの辺の夜の女の子供だろう。

「メッセンジャーだな。テストロッサ執務官。君が話してくれ、私が話しかけるより子供が安心する」

「はい」

「念の為、言っておくが金は渡すなよ。私達の目の届かない所に行った途端、殴られて奪われるのが落ちだ」

「…はい」

メッセンジャーボーイは、歩み寄ったフェイトの前に立つとニコリともせずに言った。

「ねーちゃん達、人を探してるんだって？」

「うん、この人。ディオ・パステルという名前なんだけど。知ってるかな？」

フェイトが写真を見せながら言うと、少年は覗きこんでいった。

「オレはしらねえけど、知ってそうな奴なら知ってるぜ。聞いたら教えてやる」

「うん、ありがとう。ここに連絡して…」

「ああ、いいぜ」

フェイトが名刺にホットラインの番号を書いて渡した。受け取った少年の小さな手にはペンダコが出来ていた。

立ち去る少年の背中が見えなくなるまで見守っていたフェイトが呟く。

「あの子、勉強を頑張っているみたいです…」

「そうか…、教育を受けることが出来ているなら。この町から出ることも、もう少しいい生活をすることも出来るだろう」

「そう、だといいいんですけど…」

フェイトがティアア達の前に戻ってくると、彼女は鼻をクスクスンさせていた。

泣いているのだろうか？

ティアアナが不安になり見上げると、それに気が付いたフェイトは左右の二の腕を擦りながら誤魔化すように笑った。

「えへへ、ちよつと寒くて…。恥ずかしいよね…」

「いえ…」

全く信じられなかったが、ティアアナはそれ以上追及しなかった。ヴィルヘルムもそのことは触れずに言った。

「日付が変わる前には連絡が入るはずだ。密輸事件なんて手早く解決しよう…。不正な商売を潰すことは、経済を豊かにすることにつながるはずだ」

27 偽りの勲章Ⅳ

その日の深夜、ホットラインに「ディオ・パステルがある廃屋に住み着いている」との情報が入った。

早速、情報にあつた住所に向かったフェイト達は数ブロック離れた路地に車を止めた。フェイトがサーチャーで廃屋をスキャンすると複数の熱源を感知した。

「複数だ。1人で暮らしている訳じゃないさそう…。ディオがまだ、管理局が自分の事を無実の罪で捕まえに来たと勘違いしていると、私達の姿を見た途端、また逃げ出しかねませんね」

「最悪なのは、自暴自棄になって暴れられることだな。だが、逃走も反撃の意思を持たないほど圧力を掛けるには、このメンツでは迫力不足だな」

フェイトがスキャン結果を伝えると、ヴィルヘルムが意見を言った。

正しい意見であることはフェイトも分かった。オーバーSランク魔導士といっても、まだ娘と言つていいような外見のフェイトでは、相手を油断させることは出来ても威圧することは難しい。ヴィルヘルムの長身ならば十分迫力はあるが、たった一人だと相手は逃げることを考えるだろう。「問答無用でバインドしてしまえ」と言う者もいるかもしれないが、ディオは元々無実の人間だ。そんな手荒なまねはしたくない。

2人がいい知恵はないものかと考えていると、ティアナが提案してきた。

「それでしたら、私に考えがあります」

まだ太陽が上がる前、人間の生体リズムがまだ活動し始めない時間帯、ディオが住み着いている廃屋に一台の官用車が止まった。車からは1組の男女が下りてきた。1人は執務官の制服に身を包んだ金髪の女。男の方は背の高い赤毛で、管理局の制服を着ていたが立派な体格のため一般の人間には武装局員にしか見えなかった。

二人は玄関に近づくと、男の方が乱暴にドアを叩き、怒鳴った。「管理局だ！ディオ・パステル！ディオ・パステル！居るのは分かっている。出て来い！」

廃屋の二階で眠っていたディオは、その声を聞くとボロボロの毛布を蹴飛ばし跳び起きた。窓に打ち付けられたベニヤ板の隙間から外を覗くと、体格のいい男がドカドカと入ってくる場所だった。

治安維持隊で基本的な訓練をしたことはあるとはいえ、自分は後方勤務が主な仕事。だが、押し入ってきた男は明らかに戦闘職の男だろう。自分が勝てるわけがない。

そう判断したディオは、予め用意していた布切れを繋ぎ合わせただけのロープを建物の裏手に投げ、ほとんど落ちるように降りた。

2 m程の高さがあるブロック塀をよじ登り、裏通りに飛び下りる。

「いつてえ…」

着地に失敗して尻もちをついたが、気にはいられない。まだ、周りは暗い、入り組んだ裏通りならまだ逃げられるはずだ。が、周りが急に明るくなった。夜明けかと驚いて東の空を見るが東の空は暗いままだ。光源をたどり真上を見上げると小さな照明弾が浮かんでいた。

「ディオ・パステルさんですね？」

声を聞いて振り向くと、16〜17歳ぐらいでオレンジ色の髪を二つに結った娘が立っていた。しっかりとした歩調で近付き4〜5 m先で止まる。

「あたしは本局古代遺物管理部機動六課所属ティアナ・ランスターです。治安維持隊時代のことです、3質問があります。」

よし、相手は娘が一人だ。何とか逃げる事が出来るだろう。と、考えた瞬間、照明弾の光力が上がる。照明弾に照らされた光景を見た瞬間、ディオは逃げる気力を失った。

「う…、あ」

いつの間にか裏通りは、嘴のように尖った兜を被った騎士達に封鎖されていた。騎士達は音もなく二列の互い違いに並び、通路を完全に封鎖していた。蟻一匹、通さないとはこのことだろう。人間など通り

抜けることなど絶対に出来ない。

氣力を失い、力の抜けた足が体重を支えきれなくなり、その場に座り込むとツインテールの少女は満足げに頬笑みながら言った。

「ご同行願えますか？」

陸士0076部隊で借りた取調室で供述録取書を書いているデイトと、それに付き添っているフェイトとシャーリーを大きなマジックミラー越しに眺めながら、ヴィルヘルムはティアナに言った。

「幻術を上手く使ったな。…見事だ」

「…あ、ありがとうございます」

珍しいヴィルヘルムの賛辞にティアナは躊躇いながら礼を言った。デイトを包囲していた騎士達はティアナがヴィルヘルムの姿を模して作った幻術だった。言わばペテンにかけて相手を諦めさせたわけだが、デイトを車に乗せ調書を書くことに合意させた後、ティアナが幻術を解除するとデイトは「詐欺だ!」としつこく繰り返した。うんざりしたティアナは今こうしてマジックミラーの裏で取り調べ室を眺めている。

デイトが調書を書き終わり。フェイトがそれに法的な問題がないか確かめると頷く。

「はい、OKです。デイト、協力に感謝します」

「これは約束の推薦状です」

「へへ、悪いね」

デイトはシャーリーから手紙を受け取る。手紙の内容は公共事業の作業員としてデイトを推薦する手紙だった。

当初、デイトは一年前の恨みと引っかけられた怒りから、「オレの無実が証明されたのなら、協力してやる義理はない!」供述録取書を書くことを拒んでいたのだが、仕事を紹介することを条件に出すと喜んで引き受けた。1年前の麻薬騒動でデイトの勤めていた薬品工場は既に潰れてしまっている。デイトは現在無職。不景気のサベージでは、就職先を探すのも困難なので願ってもない事のようにだった。

ティアナは「何時の間にか?そんなものを」と思っただけだが、ホッ

トラインに情報が来るまでの間に、フェイトに頼まれたヴィルヘルムが調整し用意していたらしい。抜け目のない人達だ…。

「でも、これって取引ですよね…」

「潔癖だな。それにこれは誠意ある取引だ。正直、彼が調書を書かなくてもこちらは大きく困らない上に、サベージの現状を考えるなら破格の報酬と言っているくらいだ。あの推薦状は、本局、いや、少なくとも六課は誠実で約束を守るという意思表示でもあるのさ」

「どちらにせよ、含む所があるんですね」

「残念ながら、指揮官というものは奇麗事だけではやっていけないのさ。まあ、テストタロツサ執務官は甘いからな。協力しなくても推薦状を渡すつもりだったようだ」

「…」

ヴィルヘルムはティアナからの粘っこい視線を感じながら、意識を取調室に戻した。

デイオは手紙の内容が間違いなく推薦状であることを確認すると、ニカツと笑いフェイトとシャーリーにサベージ式の挨拶で礼を言った。

「ありがとよ。ねえちゃん達、これでママのスープを飲める！」

デイオに解放されたフェイトが名刺を取り出して言った。

「他に何か思い出したことがあったら。ここに連絡をください」

デイオは力強く抱きしめられて目を白黒させているシャーリーを離すと、今思いだしたと言った装いで言ってきた。

「そうそう、ねえちゃん。今思いだしたんだが、俺とカブの野郎が通信部隊で書類をいじっていた頃の小隊長は、新人が来るとな、真っ先に人事記録のコピーを取っていたぜ」

「コピー？ 人事記録の複製は禁じられているはず…」

「部外に持ち出したならな。保管庫の金庫の中にしまつて置くなら問題ねえ。当時の小隊長はアナクロナ人でデータだけのバックアップは信用出来ねえつてよ。」

通信部隊に配属された当初の人事記録のコピーが残っているなら、カブが勲章を受けていない証拠になるだろう。管理局のコピー用紙

には肉眼では見えないが紙の製造年月日が分かるように仕掛けが施されている。それとカブが通信部隊に配属されたところに、使用されたコピー用紙と一致するなら信用性の高い証拠となるだろう。

「ソレ、今でも残っていますか？」

「まあ、残ってるんじゃないかな。当時の小隊長が個人的に行っていたことだが、金庫の奥にしまってたからな」

「ツ……。ありがとうございます！助かります！」

「……いや、いいってことよ」

フェイトに素直な礼を言われて、ディオははにかんだ。

フェイトは早速通信部隊の現小隊長に連絡を入れると、金庫の奥からディオの話した書類が発見された。フェイト達は感謝の意を込めディオをパステル夫人の待つ自宅に送った後、その日の内に六課に引き返した。

「以上が、カブ・アービュータスの身辺調査の成果になります」

機動六課部隊長室。ディオ・パステルの供述調書を手に入れたフェイト達は、ゼファーとの申し送りを済ませた後、クラナガンに戻り、事の次第をはやてに報告した。

出発前のブリーフィングで、ヴィルヘルムへの言葉に詰まってしまったティアナは、リベンジとばかりに張りきり、はやてへの報告は自分が行うと名乗りを上げた。フェイト達も反対せず、こうして報告を行っていた。

「なかなか、活躍したみたいやんな。ティアナ」

「いえ、あたしの方こそいい経験をさせてもらいました。ありがとうございます、八神部隊長」

「ん、そう言われたら指揮官冥利に尽きるちゅうもんや。フェイト分隊長はどう思う？」

「……え？あ、うん、機転も利くし、即戦力になってくれたよ……」

フェイトははやての問いかけに、反応が遅れている。集中できていないようで、表情も暗い。シャーリー達も先程から気にしているようで、フェイトをチラチラと見ている。

だいたいの調査内容は分かった。後は報告書としてまとめなければいい話。はやてはヴィルヘルムを残して解散を命じた。

フェイト達が出ていっても、はやては数秒間何も言わずにヴィルヘルムを観察した。ヴィルヘルムはいつにもまして無表情で、部下達の前でむせる冷徹無比を装っていたが、はやての目はごまかせなかった。

今のヴィルヘルムの表情は部下を叱った後に、言葉の意味が正しく伝わったか？必要以上に厳しくしてしまったのではないだろうか？と、悩んでいる時の表情だ。ちょうど、ティアナが暴走した時に、スターズの面々を呼び出したときの表情と同じだ。内心の悩みや動揺を隠そうとして無表情を保っているのだ。が、毎日顔を突き合わせているはやてにはかえって不自然に見え、悩んでいるのがまる分かりだったりする。

「…ビル、フェイトちゃんになんかゆうたやろ？」

「…ん、まあな…、進路のことです。少し強くないすぎたかもしれない」

聞くと、学校で叱られた理由を両親の前で説明する子供のよう
にヴィルヘルムは口を開いた。どうも、こういうことになった途端、男は頼りなくなる。

「ふうん、いってみたい、フォロー出来るなら、フォローしとくから」

はやては「しようがない人やな」と思いながら促した。

問題は帰りの次元船内で、フェイトとヴィルヘルムがティアナ達と離れて座ることになったのがきつかけだった。

ヴィルヘルムは隣に座るフェイトは暗い表情が気になり、理由を聞いてみた。

「どうした？テスタロッサ執務官。何か気になることでもあるのか？」

「え…？あ、何でもありません」

「その表情で何でもないので、暗い気分の時はどんな顔をするつもりだ？」

「…そう、ですね…」

ハツキリしない態度。本来想定していなかったテイオ・パステルの保護をした為、思わぬ証拠も押さえることが出来た。今回の調査任務は大成功と言える。

部下達がいる手前表情には出さないようにしていたが、ヴィルヘルムは意気揚々と引き上げるつもりでいたのだが、隣で陰気な顔をされては気になって仕方がない。

「何が不満だ？任務は成功。パステル夫人の元に息子は帰った。大成功ではないか？」

「ええ、任務の成功は嬉しかったのですけど、あの子はこれから大丈夫でしょうか…」

「ああ、なるほど…」

合点がいった。ダックスのメツセンジャーボーイの事が気になっているようだ。フェイトはもともと優しい性格の上に、子供には過保護な所がある。

「ダックスでもいったが、大丈夫だ。サベージは後進国だが教育には力を入れている。成績が平均点以上なら大学まではタダでいける」

「そ、そうなんですか？景気が悪い時はそういうお金は削減されそうですけど」

「いや、社会機構は景気の悪い時こそ、子供の養育費に投資するのが鉄則だ。ある経済学者の見解では、子供は掛った教育費の三倍社会に貢献すると言われている。いい学校を出ていい仕事に付けば、しっかりと多くの税金を納めてくれるからな。教育に金が掛かったとしても、長期的にみれば社会にとってもプラスだ」

ヴィルヘルムにとって経済学は得意分野だ。つついっい饒舌になる。「対して、教育に力を抜き子供達がまともな職に付かなかった場合は、失業手当、生活保護など、かえって金がかかる。その割合は数字で言う…」

フェイトがいやしめるような眼になっているのに、ようやくと気が付いた。振っていた論説を止めて、フェイトの言葉を待つ。フェイトは何やら気に入らない様子である、表情を変えないまま。

「それだけ聞いていると、教育が凄く営利主義に聞こえます」

「政治的な判断と言ってもらいたいな。それに公立学校は公費での運営だぞ。情けは人のためならず。めぐりめぐって公の利益にならないければ、承認など下りない。」

「そうなのかもしれないませんが…、あの子はあまり良くない環境にいましたし…」

「…だから、学業という形でチャンスを与えられているだろう。もう、我々があの子にしてやれることなどない」

「…でも、やっぱり、少しでも関わりを持ってしまった以上、気になります」

フェイトはまだ納得できないでいるようだ。過去の経験がそうさせるのか、それとも生まれつきの性格なのか、関わりを持った子供に対しては持てる愛情を全て注がないと気が済まないのだろうか。

だが、ヴェルヘルムに1つの懸念が生まれた。

フェイトが、優しいのも身近な人間に愛情を持つのは、個人的には長所だと思うし、評価もしている。だが、公人、あるいは指揮官として、フェイトを見た場合、少し意見が違ってくる。

優しさは、それが長所とされる場所と時間にあつてのみ、評価される精神特性だ。指揮官という立場は部下に恨まれようが、民間人に薄情だと誹られ用が、冷徹にならなければならぬ。

我ながら陳腐な考えだとは思いますが、使い古されている表現というのは、それだけ正鵠を射ているのだろう。

(いい機会だ。少し話してみるか)

来季からフェイトは佐官相当の権限を持ち始める。彼女の進路によつては彼女の優しさは長所として評価出来ない。

考え込んでいるフェイトに対して、ヴェルヘルムは質問をした。みた。

「テストタロツサ執務官、君は来季から次元航行部隊に戻るのだったな？」

「え？は、はい。そうですが…」

突然進路の事を聞かれて、訳が分からなかったのだろうフェイトは

戸惑いながら返事をした。

「そのあとの展望はあるのか？それともこのまま単独で仕事をしていくのか？」

「ええっと、そうですね。最終的には兄のように次元航行船の艦長を目指したいと考えています」

「やはり、そうか…」

義兄、クロノの事を尊敬しているのだろう、フェイトは嬉しそうな照れ笑いをしながら言った。

ヴィルヘルムにも、フェイトがクロノを尊敬しているのは分かったし、次元航行船の艦長を目指すのも自然の流れのように思えた。だが、その進路だとフェイトの優しすぎる性格は短所と評価しなくてはならない。

ヴィルヘルムはため息を吐いてから言った。

「正直、その進路は君には薦めたくないな…」

「え、どうしてですか…。確かに私はクロノに比べて、経験も能力も無いと思いますが…」

「能力の問題じゃない。むしろ君の能力は平均的な次元航行船の艦長よりも優れている。断言してもいい」

「では、なぜ…」

夢を否定されフェイトはショックを受けたようだ。声が震えている。

「決まっているだろう。性格だ。いや、覚悟と言ってもいいかもな」

「責任に身を置く覚悟なら、有ります」

「ふむ。では、聞こう。君が艦長になり、次元間航行中に動力部で火災が発生。艦がコントロール不能になり、虚数空間に引き込まれそうになった。君はその強力な魔力を使い、艦を支えたが、それに掛かりきりになり手が離せない。だが、火の勢いは止まらない。誰かが動力部に入り火災を止めなければ、艦は爆散するだろう。しかし、入ったものは確実に命を落とす」

「なッ…！」

ヴィルヘルムが提示したあまりに絶望的な状況に、フェイトが絶句

する。ヴィルヘルムは止めを刺すように続けた。

「火災を止めることの出来そうな魔導士は2人だけ、1人はエリオ・モンディアル。もう一人はキャロル・ルシエ。火が消火不能になるまで、あと30秒。さあ、艦長。どちらかを選べ」

「なんですかそれは…」

フェイトが青い顔をして聞き返してきたが、そのころにはヴィルヘルムはフェイトの顔を見てはいなかった。取り出した、懐中時計型デバイス秒針を見つめ。フェイトの方に振り返りもしないで、ボソリと言う。

「10秒たったぞ」

秒針は着実に進む。ヴィルヘルムの耳にフェイトの喘ぐ息づかいが聞こえてきた。

「20秒…」

答えることが出来ずにいるフェイトを無視する形で、残り10秒を黙って測った。が、フェイトは答えることはなかった。

「30秒たった。君の艦は爆散。乗組員は全員死亡だ。テストロッサ執務官、何故、どちらか選ばなかったんだ？」

ヴィルヘルムがフェイトに振り返り聞くと、彼女は血の気の失せた顔で、首を左右に振りながら答えた。

「こんなの…答えなんて…」

「そうだ、ない。だが、艦長という立場は残酷な決断を迫る。君にはその立場は辛いだろう、それよりも何か特定の案件を専門に扱う少数チームを作ってみたらどうだ？それなら、君の魔法の腕前だけで十分に守ることが出来る。参考になるような人物を何人か知っている。紹介もできるぞ」

「…」

フェイトは答えることが出来ないようだ。

突然すぎたかもしれないとも思ったが、他に話す機会もなかったのだから仕方がなかった。

今のままのフェイトが艦長の船には、ヴィルヘルムは乗りたくない。死ぬ必要がないときに、死んでしまう可能性があると思えば、不信を抱い

てしまうだろうし、その時はきつとフェイトのことを許せないだろう。

「まだ、機動六課準備室だったころ、八神課長にも私は同じ質問をしたことがある。…彼女は答えたぞ」

「えー」

「誰をとほ言わないがね。彼女は答えた後、稼業時間が終わるまで何事もなかったかのように勤務した」

はやてが答えたときはヴィルヘルムも驚いた。当時ははやてのことを計りかねていたこともあり、初対面の印象とは違って夜天の騎士達の関係も、主とその騎士の関係を出ていないのかとも思った。

「だが、稼業時間が終わった途端、私に殴りかかってき来て、こう言った。「さっきのはヒドイ」だそう。その後、泣きながら怒ってきてね。宥めるのが大変だった」

彼女にとって騎士達は家族同然の存在だ。誰かを切り捨てるなど考えるのも辛かったはずだ。それでもはやては決断した。そして、ヴィルヘルムが部下である内は、毅然とした態度をとって見せた。内心は泣き出したかったにもかかわらず…

「いい女だと思ったよ。少なくとも指揮官として担ぐのには申し分ない」

ヴィルヘルムは、あの時に本当の意味で部下になったと思っていた。はやてのためならいくらでも汚れ役を買って出るし、たとえ、彼女のミスで死んだとしても後悔をしない自信がある。そうだったことも含めてフェイトには、艦長という立場は荷が重いように思える。「まあ、結局は君の意思次第だ。さっきの話は進路の1つとして、興味があったらいつでも言ってくれ」

フェイトはうなだれて答えなかったが、いろいろ考えているようだった。

「それはひどいな、自分…」

話を聞き終えると、はやては額に手をあて、やれやれとため息を吐いた。言われたヴィルヘルムは不満そうに顔をしかめ弁明をした。

「今、話しておかなければならないと思ったんだ。それに、間違ったことを言った覚えもないぞ」

少しは味方してくれてもいいではないか。そう思っただけで言い返す。

「ちやう、ちやう。その話は私がフェイトちゃんと話そうとしていたことやねん！人の出番とらんというや！」

はやては自分の意図をうまく受け取ってくれない、ヴィルヘルムに不満を持ち、すねたように口を尖らせた。

はやてもフェイトと話し合うつもりでいたらしい。ヴィルヘルムに先を越されて親友を取られた気分になっているのかもしれない。

「ああ、そういうことか。ま、今回もフォロー役に回ってくれ、その方が効率的だ」

「むう、しゃあない。次からは先に言っておいてや。フォローといったって難しいんやで」

そう言うとはやては、今からフェイトと話し合ってくる。と、席を立つ。ヴィルヘルムはそんなはやての様子を見て引き留めた。

「待て、はやて。その手は何だ！」

「ん、フォローにスキンシップは必要やろ」

はやては手をワキワキと握り開きして、締まりのない表情をしている。まるで権力を盾にセクハラをしている中年オヤジのような様子だ。

おそらく、部下に厳しいことを言って暗くなったヴィルヘルムの気分を軽くしようと、ワザとやっているのだろう…。と、思いたい。

「はやて、気遣いは、ありがたいが…もう少しマシな方法なかったのか？」

「へ？なんのことや？私は口実作ってセクハラを楽しもうとしているだけやけど？」

ヴィルヘルムの手刀が唸った。

「いったく、毎度、毎度、なにすんねん！」

「どうやら、話し合うべきは君の方だったようだな…。薪を背負うか、泥船に乗るか好きな方を選べ」

「カチカチ山！そんなん、どこで覚えたねん」

「ヴィヴィオからだ。で、どっちにするんだ？」

にじり寄ってくるヴィルヘルムの目が据わっているのに気がついた。はやては少しあわてた調子で言った。

「あ、ちよう、ビル！目がマジすぎる！助けて、聖王様！あなたの子羊が、命のピンチ！」

「誰が子羊（ラム）だ…。どちらかという君は人を狂わせるラム（酒）だろう」

「あ、うまい。座布団一枚」

ケラケラと笑い出したはやてに毒気を抜かれ、肩をすくめて降参する。

「ん、なんや、もういいかい」

「ああ、もう、十分酔わせてもらっているよ」

28 約束の空へ十（後編）

新暦0076年4月28日 機動六課隊舎

「長いようで、短かった、一年間。本日をもって機動六課は任務を終えて解散となります。みんなと一緒に働けて、戦えて、心強くうれしかったです。次の部隊でも、みんなどうか元気に頑張ってください。」

拍手、拍手、拍手、はやてが部隊員に送ったシンプルな挨拶に、万雷の拍手が送られ機動六課の幕は閉じた。

部隊員達のある者は元の原隊へと復帰し、ある者は自身の夢を追い上級部隊へと駆け上がっていくものもいる。しかし、JS事件が与えたのは功績と栄光だけではない。戦いがあった以上、必ず傷つくものが出てくる。

「続けて、ゼルビス・ホンダ准陸尉の見送りの隊形に移れ」

グリフィスは解散式の予定に従い、今季を持って退官する、ゼルビス・ホンダ、交替部隊でのコールサインでは、グランド1を見送る隊形を六課全員に取らせた。隊舎ホールに間を開け二列に並んだ部隊員の先端にはやてとヴィルヘルムが立ち、そこから数歩離れた間にグランド1、ゼルビスが立った。

ヴィルヘルムは暗記しておいたゼルビスの経歴を、全隊員に聞こえるように大声で並べる。言い終えると、はやてがゼルビスに記念品を贈呈した。

「ホンダ准尉。お疲れ様でした」

「ええ、八神2佐。欲を言えばもう少しグランド1と言われていたかったです…」

「…」

ゼルビスが思わず漏らした一言に、はやては沈黙で返した。

ゼルビスはまだ定年前だ。しかし、六課襲撃の際に受けた傷が元で魔力値が大きく減ってしまっていた。年齢も40代と若くない。ゼルビスの本人の希望は報酬のいい武装隊員として留まる事を希望していたが、はやては武装隊員としての任務には耐えきれないだろうと判断を下した。

それをゼルビスに伝えたのもはやてだ。おそらく、部隊長になって一番隊長が変わってほしいと思つた瞬間だろう。部隊長室に戻つてきたはやては暫く口を開かなかつたが、部隊長としての仕事は無事やり遂げた。

「冗談です。忘れてください」

「きつい冗談やな…」

ゼルビスの言葉にはやては弱々しく笑つて言い返した。ゼルビスはヴィルヘルムに振り返り握手を求めた。

「副長、再就職の世話ありがとうございます」

「いや、退官隊員の再就職援助は私の任務だ。気にするな」

管理局には退官隊員に対しての就職援護制度というものがある。管理局が退職隊員に対する無料職業紹介を、職業安定機関や企業等と密接な連携をとりながら行っている。そのなかでゼルビスには、経験を生かし警備会社の教官として、働かないかという誘いがあつた。武装隊から転属になり報酬が減るのならば、いつそ危険を伴う管理局を早期退職することを妻に勧められ、ゼルビスは管理局を去ることになつた。

とはいえ、彼は20年以上管理局の武装隊員として勤めてきた。武装隊から外された時には気落ちもしただろうし、武装隊には愛着もあつたはずだ、ヴィルヘルムは彼の正式な退官式と退官パーティーは原隊で執り行うよう手配していた。

「いろいろ、ありがとうございます！」

「おやっさん、お疲れでした！」

「お疲れ様です、准尉」

隊員達が左右に分かれて立つことで出来た花道を通り、ゼルビスは出口に向かう。隊員達は思い思いに声をかけたり、敬礼をしてゼルビスを見送つた。

ゼルビスが隊舎を出て、隊員が解散していくとはやてはポツリと呟いた。

「あつさりしたもんやな…」

「そんなものだ。それに俺なら、後を引きずるような別れはしたくな

い」

「そうやな」

ヴェルヘルムが友人相手の口調で返すと、はやては頷いた。そして、気の抜けたような顔をする。

「それに、ゼルビスさんも2次会には参加やからな」

隊舎を出て行ったはずのゼルビスが、ひよいっと戻ってきて部隊員と笑いあっている。出て行ったのは儀式の形式でしかなく、ゼルビスを含め大半の者は2次会に参加し明日の移動となっている。

「内情を知ってしまうと格好がつかないのは確かだが、形式美というものもあるさ。」

そう言うヴェルヘルムも皮肉交じり苦笑をした。そうすると今度のははやてが悪戯っぽい笑みを浮かべて言った。

「それも確かにいい別れ方かもしれないけど、思いつきり派手な別れ方ってのも、ええと思わへん?」

「分かっている…。既に調整は完了、シミュレーターは何時でも使用可能だ」

この後、お別れ2次会が企画されていたが、その前にスターズとライトニングはなののはたつての願いで、最後の模擬戦を行うことになっていった。企画書を受け取り各方面に調整を行ったのはヴェルヘルムだ。

「おお、流石はビル。仕事が早くて助かるわあ。けど、最後の最後やからな…。なのはちゃん達張り切り過ぎて、壊してしまうかもしれないで」

はやては途中から憂鬱そうに言ってきた。六課の施設が壊れたなら、はやてはもちろん大目玉を食らうし、調整を行ったヴェルヘルムにもそのしわ寄せが降りかかることになる。が…

「一向に構わないな。つい今しがた六課は解散した。あのシミュレーターは既に教導隊の施設だ…」

「ほほう、と、言うことは」

「高額な施設を壊した。と、上に嫌味を言われるのは、高町嬢だけだ」
「ビル、なかなか、やるやないか」

「君ほどではないさ」

クククツと2人そろって暗い笑いを浮かべていると、模擬戦に参加するフェイトが声をかけてきた。二人の表情に驚いたのか少し腰が引けている。

「ね、ねえ、はやて、どうしたの？そんな顔をして？」

「ん、何でもあらへんよ。ちよつと、ビルと景気のええ話をしていただ
けや」

「そ、そう？はやてもこの後、訓練場に集合だよね？」

「うん、せや。じゃあ、ビル、またあとで」

フェイトははやてを迎えに来たようだ。ヴィルヘルムもそろそろ、2次会場の様子を見に行かなければならない。

「ああ、二次会場で」

ヴィルヘルムははやてに返事をする、フェイトに向かって忠告をしておく。

「では、ほどほどにな」

「は、はい？」

フェイトは納得していない顔で返事をした。

まさかと思うが、聞いていないのか？そう思い問いたただそうとしたが、グリフィスに呼ばれた。

「副長、二次会用の飲み物が届いたそうです」

「ああ、分かった。すぐ行く」

まあ、いいか。どうせ訓練場に行ったら分かることだ。

その後、訓練場から響く爆音や炸裂音をBGMにヴィルヘルムは室内運動場での2次会の準備を進めた。そして、模擬戦で疲れ果てた前戦メンバーが合流して、2次会が始まった。

乾杯の音頭を取ることになったヴィルヘルムが壇上に上がると、部隊員は緊張したようだった。説教でも聞かされると思ったのだろう。だが、こういった場で指揮官が目を光らせている、部下達は楽しめない。

「では、簡単に。みんなお疲れ様でした。今日は無礼講だ！乾杯！」

予想外の簡単すぎる挨拶に、隊員達が呆気に取られている間に、ヴィルヘルムは手にしたジョッキ（大）に注がれた生ビールを一気に飲み干す。その数秒間に隊員達は我に返り始め、ジョッキを空にしたヴィルヘルムの次の言葉で、手にしたグラスを突き上げ歓声を上げた。

「どうした！酒が足りていないぞ！樽ごと持ってこい！」

普段、堅物と思われていたヴィルヘルムの羽目を外した発言で、隊員達の緊張も解れたようだった。歌を歌い出す者、ひたすら旺盛な食欲を満たそうとするもの、飲み比べをし始めるもの、酒の勢いに任せて女性隊員を口説こうとするもの銘々に楽しみ始めた。

ヴィルヘルムはある程度部下達に付き合い、隙を見てその輪の中から離れた。部下達の中には酔い潰れてしまうものも出てくるだろう。いくら無礼講と言っても誰かは介抱出来る状態にしなければならぬ。

涼むふりをしながら外に出る。春の夜風に体をなでられながら窓越しに部下達を観察する。子供達はアイナが面倒を見ているようだ。ヴィヴィオやキャロ達が楽しげに話しているのが見える。なのは達やヴォルケンリッターの女性陣を、度胸のある男達が口説こうとしているようだが、今のところ全員が玉砕に終わっているようだ。露骨に相手を睨みつけて追い払う者もいれば、右に左に受け流してしまう者もいる。中でも一番男の心に深刻なダメージを与えているのは、口説かれていることに気が付いていない魔女だろう。

あ、また一人肩を落として離れていく。こんなところで、撃墜数増やさなくてもいいだろうに。

他にも何を血迷ったのか、ヴィータを口説こうとして、文字通り鉄槌を喰らっている者までいる。

なにを考えているのだか…

「唯一の成功例は、あそこだけだな」

ヴィルヘルムはが違う一面に目を向けると、グリフィスとルキノが仲良く話している姿…を、意味深な笑みを浮かべてカメラに収めようとしているシャーリーの姿。

シャリオ、いいのか？それで：

「変わった楽しみ方してるんやな、ビル」

グラスを片手に部隊員の姿を眺めていたヴィルヘルムに、ここ2年で慣れ親しんだ声が話しかけてきた。

「…ッ、はやてか…」

はやての姿を見て、ヴィルヘルムは少し言葉に詰まってしまった。少し酒の入っているはやてはほんのりと頬を染め、潤んだ瞳で艶然と微笑んでいる。いつかのように飲みすぎなければ、はやてはヴィルヘルムから見ても非常に色っぽい酔い方をする。

はやては何を思ったのか腕を絡めてきた。

男よけのつもりだろう。

「何か言いたいことでもあるのか？」

「もちろん」

はやての目がスツと細くなる。まるで肉食目イヌ科の動物が狩りをするときのようだ。

「とうとう、最後の最後でも理由を説明しいへんかったな。ヴィルヘルム・チェスロック・ケーニツヒ 1等陸尉」

はやてはヴィルヘルムが明日から呼ばれる階級で呼んだ。

ヴィルヘルムは来季、つまり、明日に降格が決まっている。理由は六課襲撃の際、機動六課隊舎を壊滅させたこととなっている。

ヴィルヘルムは間を取るためにグラスの酒（ラム）を一口飲んだ。

「降格の理由は六課後見人の御三方から書類で届いているはずだろう」

「もちろん、見たに決まっているやろ。ついでに言うなら直談判もしたでー！」

はやてはカリム達に壊滅の責任は少なからず自分にあると言って、自分の昇格を断る代わりにヴィルヘルムの降格を取り消すように訴えた。結果は三人とも、六課襲撃の際ははやては不在だったと言って、取り合ってはくれなかった。

しかし、普通こういった場合、部隊長が不在だろうがなんだろうが責任を追及されるのが当たり前のはずだが、はやてにはJS事件を解

決した功績を讃える声が掛けられている。信賞必罰としては不自然だ。

はやてはヴィルヘルムに一切の責任を押し付けたように感じて少しも嬉しくないし、きつとヴィルヘルムが何かしら手を回したのだろうと考えていた。

「ビル、前にいうたやろ。人の出番とらんというて」

「まるで俺が君の功績を取ったような言い方だな…」

「成功の功績も、失敗の責任も、両方私のモノや。黙って持っていくのはゆるさへん！」

そんな盗人や。と、語気を荒くする。はやてからヴィルヘルムは距離を取ろうとしたが、腕を組まれているのでそれも出来ない。

なるほど、この為だったか…

「まあ、聞け。別に俺から君に責任を被せるなど上申したわけじゃない」

「じゃあ、どういうことや？」

「そうだな。はやて、君はJS事件での勝利者は一体誰だと思ってる？」

「そうやな、ラルゴ元帥やろな…」

はやては少し考えてから答えた。JS事件以降、全ての管理局システムのトップだった最高評議会の3人が死亡し、ラルゴ元帥の発言力はますます上がっている。しかもゆりかご戦で主力艦隊を指揮したと言う功績もある。元帥以上のポストとなると最高評議会しかない。最高評議会に代わる、管理局のトップが作られるとしたら大本命だろう。

「では、敗者は？」

「最高評議会と六課や…」

はやては即答し、自嘲気味に笑った。JS事件を解決に導いたとはやし立てられている六課だが、はやてはそれほど自分を評価していない。元々機動六課はカリムの「プロフェーティン・シユリフテン」による詩文に予言された、『いずれ起こりうるであろう陸士部隊の全滅と管理局システムの崩壊』を防ぐために設立されたものだ。しかし、

J S事件の結果はどうだろう？ 地上本部は崩壊し、最高評議会をトップとした管理局システムは、改革と言う名で大きく姿を変えていくことになるだろう。これは預言の通りになった。と言えるのではないか？ はやてはそう考えているようだ。

「ま、そういうことだ。現在、管理局は、最高評議会の後釜に座ろうとする野心家たちが鎬を削り合っている状態で、混乱している。しかし、その混乱を表に出さない為には……」

「大衆を欺くための広告塔が必要。J S事件を解決に導いた『奇跡の部隊』、ゆりかご戦の『エース』達なんてのは、かつこうのプロパガンダやろな」

絡められた腕に力がこもるのが伝わってくる。悔しいのだろう。彼女は結局、自分の責任を全うできる立場ですらなかったのだ。

「その通り。だが、内向きには六課隊舎壊滅の責任を取らせないわけにはいかない。しかし、折角掲げた看板に泥を塗るわけにもいれない。そこで俺に白羽の矢が立ったというわけだ」

「そやかて、ビルはあの状況で最善の選択をただけやん」

はやては納得がいかないらしい。少々、気負い過ぎているような気もするが、はやての魅力とも取れるだろう。

ま、こういう女だから助けてやろうと、人が集まるのだろう。

「そう、気を病むな。はやて」

「そやかて……」

「なに、俺は1年後、ほとぼりが冷めたころ1階級特進が決まっている。給与号俸だけなら、君より基本給は上がるくらいだ」

「それ、言わなかつたらメツチャ格好良かったで！」

あつけらかんと言うヴィルヘルムに、半眼になって思わず突っ込みを入れる、はやて。組んでいた腕を放り投げるように離れ、ビシッと指を突き付けてきた。

「結局、ビルの政治手腕が唸つとるやないか！」

「は、は、は、生憎私は潔い英雄になんてものになる気はないのでね。いけずな手管を思い付くのさ」

確かにヴィルヘルムは六課後見人達に一時的な身代わりを頼まれ

てはいたが、しっかりと自分自身の身分の保障も取り付けていた。この強かさがなければ商売人や指揮官なんてモノは務まらない。

「しかも勤め先は、決済監査部門だ。最高評議会はなくなったが、最高評議会が残した秘密資金やロストログア、物資輸送のルート等、その全てが解明されてはいない。その解明の一部門に参加することになるだろう。ふふふ、楽しくなりそうだ」

ゆりかご戦の際、ゼストからもたらされたデータはJS事件解決のため大いに役に立ってくれたが、ゼストは武人。資金繰り、物資の輸送ルート、協力者の有無、そう言った裏方に関わっていた者たちの全ては把握できていなかった。後進国など、国ごと買えるだけの額の金の動きが不明のままだ。

「国家予算クラスの金の動きに関われる、商人としては最高の栄誉だな」

ヴィルヘルムが得意げに笑うと、はやては羨ましそうに見つめた。(ビルは進む道をハッキリと持っている。ビルに比べて自分はどうやる。部隊長としての失態に力不足を痛感したものの、部隊指揮の夢は捨てられへん。ナカジマ3佐に相談を持ちかけてようやくフリーの捜査官に戻ることを決めるのが精いっぱいや)

はやては弱音を口にするつもりはないようだが、この年上の部下には六課での指揮や今度の進路をどう思われていたのか不安だったようだ。気にする様子で疑問を口にしてきた。

「ビル、私はどんな指揮官やった？」

「未熟の一言じゃないか？」

バツサリ言っていると、はやてはガツクリと項垂れる。

「やっぱそう思うか。具体的には？」

「そうだな……」

ヴィルヘルムは遠慮せずになんか言わせてもらおうことにした。スターズ、ライトニングの編成から、補給・輸送ラインの不備、政治的交渉、プライベートに至るまで、こき下ろした。はやては黙って聞いていたが、途中から頭を垂れ震えだしたが、ヴィルヘルムは一向に気にせず、最後に余計なひと言まで付けくわえた。

「ああ、あと欲を言えばもう少し胸が大きい方が見栄えがするんじゃないか。ただでさえ、君達の人種は子供っぽく見えるのだから」

辛抱たまらなくなつたはやては、勢いよく顔を上げると怒声を上げながら、鋭いパンチを繰り出してきた。頭を垂れ震えていたのは、泣いていたわけじゃない。怒りを堪えていたのだ。

「ええ加減にしいー」

パンチを水月に貰つたヴィルヘルムの体がくの字に曲がる。

「ぐふう…、いいパンチだ。後方攻性支援にしておくのなんて、もつたいない」

「やかましいー！黙って聞いてれば、あることないこと！普通、女がへこんでいるんやから、甘い言葉を掛けて慰める所やろー！」

くわつと怒り心頭の様子で言ってくる。気にしていた様子など吹き飛び、活力が漲っている。ヴィルヘルムはみぞうちを撫でながら言い返した。

「嘘付け、慰めてほしかったのか？」

「…ちやう」

はやては口を尖らせそつぽを向いた。ヴィルヘルムには、はやてが最後の最後にあんなことを言ってきたのかおおよそ察しが付いていた。

「だろいな。おおかた叱ってほしいのに、よつてたかつて慰めてくれる人ばかりで調子が取れなくなっていたのだろう」

「ははは…」

はやては苦笑いして見せた。ヴィルヘルムの言葉通り、はやては慰めてほしかったわけではない。

六課の後見人やロッサ達は、はやてがこれからはJS事件での失態を取り返していかなければならないと言うと、優しく慰めてくれた。しかし、自分自身が納得いつていないときに、優しい言葉はなかなかうまく受け取れないものだ。ありがたいことだと頭は理解していても、その優しさが煩わしく感じてしまうことがある。そういう時は、かえって厳しい叱咤の方が心に活力を与えてくれる。

「まったく、甘い言葉には飽きた。とは、贅沢な奴だ」

「甘いモノばかりは、体と心に毒や。時にはピリリと辛口意見も欲しくなる」

「俺は香辛料か」

「もちろんや、甘い言葉なんて、ビルの口から出せへんやろ？」

挑発的な含み笑いをするはやてに、ヴィルヘルムは率直な意見を言ってみる。

「ひどいな。俺は君の事をいい上司だったと思っているのに」
「へ」

突然のヴィルヘルムの賛辞にははやては戸惑ったようだった。普段はやてを諫めるのを仕事とし、プライベートでは軽口を叩きあう相手の褒めの言葉を、素直に受け取っていいのか測りかねているようだ。(まるで好物を前にした野生のタヌキだな)

頭のいいタヌキは好物の周りに罠があるのではないかと、警戒しながら恐る恐る近寄り疑わしげな顔で質問をする。

「そう思うん？」

「ああ、思うね。信じろよ」

「そ、ちなみにどのへんがいいと思ってるん」

「…」

上手い言葉が見当たらず沈黙すると、はやては一気に不機嫌になり、眉を吊り上げてこちらの襟首を掴んできた。もつとも身長差のせいで見たから見ていると、はやてがこちらにぶら下がっているように見えただろう。

「近寄ってきて、突き離すとはなかなか心得てるやんか(怒)」

「落ち付け、話を聞け…」

「む、まあ、いいやろ。聞いたる」

はやては手を離すと、手を腰に当て、慥然としてヴィルヘルムを睨んだ。

「君にとつての理想の上司は、どんな人物の事だ？」

「んん、そうやな。冷静沈着で、判断力があって、魔法の腕前もあって、部下に平等に接することが出来て、企画・調整・統制が完璧で…」

「言ってみて分かっていると思うが、そんな全知全能の人間、神話にだっ

て出てこないからな」

半ばあきれながら指摘すると、はやては拗ねたように反論する。

「ええやないか、理想なんやから」

「君はそれになりたいのか？」

「ま、目標つちゆうことで」

「それは神になるってことだな。難しいと思うぞ」

「まあ、この1年で思い知ったわ」

苦笑しながら頬をかくはやてに言ってやる。

「それにそんな奴だったら、俺の助けなど必要ないだろう。1人で何とかしてくれ。と、言いたくなるしな。俺にとつての理想の上司はね。また、この人と仕事がしたい。そう思わせてくれる人の事だ。給料や待遇なんて低くてかまわない、その上司の能力や采配が完璧でなくても、この人を助けてやろう。俺はそう思える人の下で働きたいね。少なくとも今日までの上司はその条件を満たしていると思うぞ」

「…明日から、違う部署の配属のくせに」

「その理想の上司が部隊をやりたくないと言っているらしくてね」

はやては明日からはフリーの捜査官に戻ることが決定している。恐らく地上を中心に密輸物・違法魔導師関連の捜査指揮を担当することになる。あと数年間は小規模指揮や立ち上げ協力で、部隊指揮の勉強し直すつもりだろう。彼女が自分の部隊を持つのは数年先の話になる。

「…へえ、そら、残念やったな」

「まったくだ。なんてわがままな上司だ」

「ははは」

はやては明後日の方向を向いてこちらの視線から逃れると、白々しく言った。

「2年、2年ぐらいしたらその上官も、また部隊を持ちたいと考えるはずや。そしたらまた、補給や管理関係をまた押し付けられるんやないか?」

「それは忙しくなりそうだな。彼女の階級に相応しいポストとなると、どこかの1部門を預かるはずだ。それまでに私も一仕事終える必

要があるな」

「うん、明日から頑張らんと」

「となると今日は最後の晩餐だな。今日は指揮官であることを忘れて、楽しむことにしよう」

「そうやな、さ、飲み直すで〜」

二人は連れ立って戻ると、日付が変わるまで2次会を楽しんだ。

翌日、はやてが目を覚ますと目の前でラインが寝息を立てていた。ゆつくりと身を起こすと二日酔いの鈍い頭痛が襲ってきた。時計を見ると既に8時を過ぎてている。自分の移動予定は午後からだからいいとして、ヴィルヘルムの移動は早朝の筈だったから完全に見送りに行きそこなったことになる。

「ありや、まずい」

待機モードのデバイスからメールを出す。

「見送りに行けなくてゴメン。二日酔いになってへんか？つと、こんなもんでええやろ」

ヴィルヘルムは移動中の筈だ、すぐに返事が返ってくるとは限らない。返事を待つ間にシャワーを浴びる。返事は髪を乾かしている間に来た。

「…はやてちゃん。メールが届いてますう」

メールの着信音で起こされたラインがシュベルトクロイツを持ってふらふらと飛んできた。ラインははやてにデバイスを渡すとそのまま膝の上で寝てしまった。ラインも昨日ははしゃいでいたので疲れているのだろう。

メールの内容は、文字だけの簡素な文体で、「どんなに頭を抱えることになっても、また手を出したくなるのがラム（酒）の魔力だ」と書かれていた。

返事を見たはやては小さく笑うと力瘤を作って気合をいれた。

「2年か…、よしや！今日もいってみよか！」

29 From ○○ To △△

From シャマル To すずかちゃん
すずかちゃん、すずかちゃん、シャマルよ？

ニユース、ニユース☆

はやてちゃんが、いつもより長く鏡の前に立っていたから、
これは!!と思つて、リンちゃんと後を追つてみたら…。

ウフフ…。○(^ | ^)○ 細部は後で報告するわね！

「折角の休日に緊急で呼び出しと言われて来てみれば、買い物に付き合えだつて？…どういうことだ？」

仕立てのいいスーツにネクタイなしのカジュアル・シックな出で立ちの背の高い男——ヴィルヘルムが目の前の小柄な女性に言った。いつもはしっかりと固められている髪も下ろし、楽しげに女性の発言を待っている姿は、公務員というよりベンチャー企業の社長と言われた方が納得できる。

「ん、副長が、また、私の部下になってから1年以上たつからなくちようこここで非常呼集に掛る時間でも測つてやるかなと思つてな」
カラカラと笑う小柄な女性は少し癖のあるミッド語で答えた。ちなみに女性——はやてはパンツスタイルでタンクトップにカーディガンを身に付ける、『大人カワイイ』ファッションをしている。正直に言えば管理局の制服などよりよほど似合っているというのが、ヴィルヘルムの感想だった。

「そうか、では、今日は赤点を付けておいてくれ」
「ん、合格点ほしくないんか？」

休日に予定のないことを確かめ、白々しく場所と時間を指定して置くことは一般的に待ち合わせという、決して非常呼集訓練とは言わない。しかも、ヴィルヘルムは元商人。相手の時間を無駄にさせないことは身に付いている、時間に遅れたりはしていない。

そのうえで、こう言った。

「ああ、赤点なら補習と追試が受けられるだろう？」

「うわ、こわ。来て早々、もう、次の事考えてるで、この人」

《ねえ、リインちゃん。どんな話をしているのか聞こえる?》

《んん、ちよつと、遠すぎますねえ》

数メートル先の看板の陰に隠れている年のころなら6〜7歳くらいの銀髪の少女の姿をしたリインフォースIIを見守りながらシヤマルは念話を飛ばした。リインフォースIIは普通の女の子サイズで行動しおり、見失うことはまずあり得なかった…。と、いうより、シヤマルとリインフォースIIは黒スーツにサングラスという、コメディ映画のスパイがしていそうな、いかにもというスタイルをしている為、目立って仕方がない。先程から通り過ぎる人たちが奇異の目を向けていつているのだが、本人達はターゲットの観察に夢中になっているので気が付いていないようだ…。

《シヤマル、ターゲットが動き出しました!》

《了解よ、リインちゃん。今日は確か、デバイスの使う素材を探しに行くって言ってたわ》

《今私達を作っているアインハルトのデバイスですね。ユニットベース用の記録結晶と…、アギトも外装を作るのにかわった素材が欲しいって言っていました》

シヤマルは「なるほど、そういう口実なんだ」と一人納得した。

From はやて To アギト

はやてや!

アギトに頼まれつつあった、外装用の布。ほら、念話素子と魔力伸縮する素材☆

なんとか都合つけられそうや! d (> | <) Good!!

なんでも、ビルの知り合いに、その素材を使うファッションデザイナーが居るんやと!

それにしてもビルのヤツ、アギトが描いた外装のデッサンを見た途端、

σ (?、? ||) {猫?}

てな、顔してたで〜(笑)

「ふくん、ノーヴェがストラトス家の娘の先生になるとはね」

「あれ？ビル、アインハルトと知り合いやったんか？」

「いいや、ストラトス主催のパーティーに何度か出席した事があるだけだ。なんだかんだいって、ベルカ王族の正当血統は名士が多いからな」

ここ最近の高町家やナカジマ家の様子を、はやてから聞いたヴィルヘルム第一声がそれだった。

2人はオリジナルブランドを販売している小さなショッピン内を物色しながら、休日の午後を楽しんでいた。アギトに頼まれたという布は発注し終わっていたが、そのままショッピングを楽しむことにしたようだ。

「ふむ、で、ビルはアインハルトのこと、どう思う？古代ベルカ絡みとなると、どうも他人って気がしなくてな」

「ま、君ならそう思うかもしれないがな」

はやてが魔法文明と出会ったのは、古代ベルカ時代の遺産がキツカケである。今でもはやての体に解けた遺産から漏れだす記録を夢に見ることもあり、アインハルトに対して同情的にも協力的にもなるようだ。

ヴィルヘルムもそれは別にかまわないと思っている。

「そういう言い方をするってことは、ビルは違う意見なんやな」

「ああ、正直、連続傷害事件の『霸王』が中等科の生徒と聞いた時は、出来の悪い週刊誌が書いたネタだと思ったがね」

幸い被害届が出ていなかった為、夜露死苦な若者達の噂の1つとして一時流れた程度で済んだようだ。

「こんな感じ？『中等科霸王様ご乱心！ゲームの影響か！』とか？」

「ああ、まさにな。クラスに一人はいなかったか？人の気を引こうと、何かのマネをして失敗するヤツ」

「あゝ、いたいた、でも、それはいわんといてあげて、あの位の年頃は、いろいろ繊細なんやから」

「第二次性徴期特有の、自分は周りとは違う人間なんだ。ていう、間拔けな優越感のたぐいか…。イングヴァルトの記憶が本物だとして、多少の奇行は許してやるべきか？それとも人生の先達として説教の一つもくれてやるべきか？」

はやてにも、ヴィルヘルムの言いたいことが分かった。

「いくら鮮明な記憶であっても、それはあくまで他人の記憶でしかない。まあ、そうなんやけどな…。思春期のお悩みって事や」

「下手に口出すのは逆効果。か、そうかもしれないな」

「ちよお道筋を教えてあげるだけで十分やと思う」

話しながらはやては近くに展示してあった真っ赤な中折れ帽をかぶって見せた。飾りとして付いているフラワーモチーフが気に入ったらしい。

「どう？」

「うーん、今日の服とは色が合わないな」

「そう思うやろ？」

言いながら、はやての放出した精神波に反応して、帽子の色が変わる。変化後の色はすっかり服の色にあっている。

「へえ、似合っているじゃないか」

「そう言ってくれると思っとった」

機嫌がよさそうに、腕をからめてくるはやての目が「買ってくれるやろ」と言っている。

「こいつめ」

送信失敗

From リイン To シヤマル

シヤマル、どこですか〜！（「〇〇」）「オオーイ！」

はやてちゃん達、いつちやいますよ〜☆

念話にも出てくれないし、このメールを見たらすぐ返事をください

）

ピンポンパンポ〜ン、と、いう例の音楽と共にはやて達のいる

シヨツピングモールに館内放送が入った。

『港湾地区からおこしのリインフォースちゃんのお連れ様、リインフォースちゃんがお待ちです。中央サービスセンターまでお越しください』

放送を聞いて2人は顔を見合わせると、視線で発言を数秒譲り合
い、結局、はやてが口を開いた。

「リイン、シャマルと一緒に来てたはずやなかったっけ？」

「間違いなくその筈だ」

二人とも何事もなく振舞っていたが、シャマル達が覗いていたことなど百も承知だったようだ。まあ、あれだけ派手な格好をしているシャマル達に、気が付かないことの方がおかしいのかもしれない…。

「どうする？」

「そうやな、迷子センターにしよつ引かれるくらいやから、なんかあつたのかもしらへんし…。一応、行ってみるか」

「では、ピーピング・リインを迎えに行くとするか」

2人がサービスセンターに付くと、それを見たリインフォースⅡが外していたサングラスをかけ直し、座っていたパイプ椅子に隠れようと無駄な努力をし始めた。それを見た中年女性の係員は迷子になった子供が両親に叱られると思つて、そんなことをしていると解釈したようだ。微笑ましいものを見るような顔をしている。

「リイン、大丈夫やったか？」

「リ、リインとは、誰の事でしよう」

「じゃあ、君は何という名前なんだ」

「えっ、えと、ええつと…」

咄嗟にいい名前が思い付かずリインフォースⅡは観念した。ガクツと項垂れる。

「それはそうと、君の連れはどうした？」

「シャマルは、お手洗いに行っている間に、お二人が店を出てしまったので…。追っかけている間、念話に出てくれなくなっちゃって」

「ああ、そら、新しいトイレなんかは外側からの一般用の念話や、内側

からでも映像用の念話なんかは、結界でカットされてるからや…」

探査系魔法を利用した軽犯罪用防犯対策結界（覗き防止）の為にはぐれてしまったようだ。管理局の機密を扱う部屋などでは、昔から使われているシステムだが、最近、管理局が特許を手放し、民間用にも出回り始めている。出始めたばかりの防犯システムなので、知らなくてもおかしくはないのだが…。

「だからと言って、迷子センターに駆け込むのはどうかと思うぞ？」
「違うんです！念話とかいろいろ試していたら、係の人に強引に連れてこられたんです！迷子になってなんかいませんん！」

ヴェルヘルムがチラリと係の中年女性をみると、女性はこちらを値踏みするような視線を投げながら、「最近の親は…」と呟いている。根も葉もないうわさ話をしながら、出しゃばつてきそうなタイプだ。リインフォースⅡが押し負けるわけだ。

それをすべて分かったうえで、はやてはリインフォースⅡに抱き付いた。

「うんうん、そうやね〜。ちょう、不安で寂しくなっちゃただけやもんねえ。よう、泣かなかった。いいこ、いいこ」

「ちよつと、はやてちゃん。なんだか、全然、嬉しくありません！」

100%からかいの態度で、頭を撫で回すはやてから、リインフォースⅡが逃れようとしたところに、メールが届いた。

小さめの空間モニターを開いて、メールの内容を確認しようとするリインフォースⅡの後ろから、はやてがメールの内容を覗きこむ。

「あ、見ないでください。はやてちゃん」

ヴェルヘルムも「ダメだろ」と、思ったが面倒なので黙っていることにした。

「あ〜、シャマルは…。ほつといていいみたいやな…」

「いいのか？」

「うん、シャマルは、シャマルで楽しんでるようや」

「そうか？」

捕虜になってしまったようね。リインちゃん！

でも、諦めないで。d (@ ^ ▽ ^) / ファイトツ♪

冷静に状況を判断すれば、必ず活路はあるはずよ☆

「リイン。こつちの記録結晶はどうや？」

「うーん、補助・制御型とは、相性が悪そうですね」

3人になった一行は、デバイスの記録結晶を探すため、貴金属店にやってきました。

記録結晶はデバイス専門店の方が安く販売しているのだが、真正古代ベルカ式と相性のいい結晶となると、今や骨董品か観賞用としての意味合いが強くなっている。相性のいいものを探すのならこう言った貴金属店の方が見つかりやすかったりする。

こういったこともあり、真正古代ベルカ式のデバイスは、完全にワゴンオフ以外に作りようがないのだ。

「部隊運営者として見ると参考にならないんだがな」

ヴィルヘルムが口を挟むと、はやてが反論した。

「アインハルトは競技者向きやからな。自分のスタイルに合わせてデバイスを調整せんとな」

「なるほど、それで外装が猫型なのも、その一環だと？」

「もちろん、折角、一から作るんやから、気に入ってもらえるように、アインハルトが好きそうな形にせんとなく」

2人が話になりかけた所で、リインフォースIIが小さく歓声を上げた。ちようどいい記憶結晶が見つかったらしい。

店員を呼び、はやてとヴィルヘルムの二人がかりで値段交渉。店員が「もう勘弁してください」という顔を始めた所で購入した。

「ふ、二人ともすごいですう…」

「こういうときは、妥協したら負けだ」

「値札に書いてある金額で買っているようじゃ、買い物上手とは言えへんで」

若干引いているリインフォースIIに2人は勝ちほこった。満足げに会話を続ける。

「これではユニットベースと外装を組むだけや」

「きつと喜ばれるぞ。友人のハーリング(球技)選手にボール型外装を…」

そこまで言つて、ヴィルヘルムは言葉を止めた。民間時代に呼んでいた新聞のコラムで、妻が夫にしてほしくない話しベスト3、3位ハーリングの話、2位 会社の話、1位 会社でしたハーリングの話、という記事が載っていたのを思い出し、女性相手にハーリングの話題は相応しくないと思ったからだ。

「え、ホンマ？ハーリング選手つて、何処のチームの人？」

しかし、そこは陸のエース八神はやて。普通の反応などしなかった。が、ヴィルヘルムは疑つてかかった。

「別に無理に合わせなくていいぞ」

「あ、疑う気なん？見るだけやけど、こう見えてハーリングファンなんやでー！」

「じゃ、現在のイーストリーグの首位を言ってみろ」

「イエローソックス、2位のシユペルリングとは2・5ゲーム差。ちなみにイーストリーグのMVP候補は同チームのデインキー・ランドローバー選手が最右翼」

「なに?!」

どうせすぐにボロが出るだろうと、ウエストリーグに比べると人気のないイーストリーグからの出題してみたが、はやての即答にヴィルヘルムは驚いた。

驚愕の表情を見せるヴィルヘルムをはやてが挑発する。

「んん、どうしたんや？質問はそれでしまいか？」

「いや、まて、それ以上言うな。そこに並んでいる結婚指輪を押しつけたくなる」

「えええー！」

ヴィルヘルムの返しに大声を出したのはリインフォースIIである。

「そんなこと言っちゃっていいんですか？」

「当たり前だ。家に帰った時にハーリングの話題を振る事が出来ることは、真正古代ベルカオーバースよりも遥かに価値がある」

力説するヴィルヘルム。実は結構ディープなファンだったりするのだが、興味のない人に深い話を振っても理解されるどころか、ドン引きされることをよく理解している為、仕事場ではハーリングの話は控えていたりする。

そんなヴィルヘルムに止めとばかりに、はやてが口を開く。

「ウエストリーグは、今年こそマコンティアズ（虎）が優勝やな！」

自信満々のはやての言葉を聞いたとたん、ヴィルヘルムがピタリと動きを止めた。そして、あり得ない声を聞いたかのような顔をした後、

「おかしなこと言うなあ、はやては。フォモール（巨人）の2連覇は確定しているじゃないか」

はやてとヴィルヘルムはにこやかに笑っている…。まるで、仇敵に会ったかのように…。

2人の素晴らしい笑顔を見て、リインフォースは今すぐ逃げ出したかと思っていたが、今この二人を止められるのは自分だけ…。と、悲壮な覚悟をきめて二人の間に割って入る。

「ダメですよお、こんなところでケンカなんてえ」

すると、意外にも2人はあっさり引いた。

「あ、ひどいなあ、リイン。子供じゃあるまいし、喧嘩なんかせえへんよ」

「チームの優劣を決めるのに、暴力を使うようなフリーガンと一緒にされては困る」

「…そうですかあ…」

少し拍子抜けしたような気がしたが、リインが安堵のため息を漏らしたのも束の間…

「そうや、こういうときの決戦の場はスポーツバーと決まっとる」

「心得ているじゃないか。御誂え向きに今日のゲームは直接対決。試合開始は16時だ」

「ええやろ。覚悟しい、ビル」

「それは、こちらのセリフだ」

「じ、じゃあ、わたしはこの辺で…」

「いこか（いくぞ）、リイン（リインフォース）」

熱狂的なファンに挟まれ危険を感じたリインフォースⅡは逃げ出そうとしたがあえなく捕まり、そのまま引きずられるようにスポーツバーへ向かった。

未送信

From はやて TO ヴィータ

ひどい！あんまりや！

。。。。（*／□／*），。。。。

ビルの奴に：ひどいことされた！

嫌がる私に無理や

「何を送信しようとしている」

ペンツ！

スポーツバーから出てメールを打つていると言葉と共に軽い衝撃。見上げると実に機嫌のよさそうなヴィルヘルムが、昼間に買った中折れ帽を持って店から出てきたところだった。リインフォースⅡを引き連れ、今のはやてとは正反対の実に満足げな顔をしている。

その顔が何となく憎らしくなり、とりあえず、メールを覗かれたことに対しての不満をぶつける。

「馬鹿！エッチ！女のメールを覗くなんて最低や！」

「覗いたわけじゃないさ。何となく察しがついたただけだ」

被っていたキャップを投げつけると、ヴィルヘルムは空いている手で受け止め、そのまま被って見せた。スーツ姿には似合わないキャップには、フォモールのロゴが書かれていた。

ヴィルヘルムは持っていた中折れ帽をはやてに渡し、

「フォモールのユニフォームもなかなか似合うじゃないか。いつそ鞆替えしないか？」

と意地の悪い発言をした。

「うぐぐぐ、誰や！負けたチームは勝ったチームのユニフォームを着て、相手チームの応援歌を熱唱せなあかん、なんて、罰ゲームを考え

「たんは!!」

「君だ。君!」

「ううう、5イニングのあの1点がなければ勝てたのに…」

「はやてちゃん、往生際が悪いですう」

「まったくだ。スポーツマンシップは何処へいった」

「どうやら、はやての応援しているマコンティエズは惜敗してしまつたようだ。おかげで試合前に自ら決めた罰ゲーム——相手チームのユニフォームを着て応援歌の熱唱をする羽目になった。まあ、自業自得ではあるのだけでも…。」

「くっ…いまに見とけ、マコンティエズはここからなんや!」

捨て台詞を吐いていると、リインフォースⅡが不平を鳴らした。

「それはそうとお腹すきませんか?」

食事は過ぎていくし、リインフォースⅡもスポーツバーの雰囲気になてられて、大声を出して試合の応援をしていた為、バーで口にしたものと言えば、酒のつまみ程度だった。騒いでカロリー消費したこともあり、かなりお腹が減っている。

「そうだな、では、その辺の屋台で食事にするか」

「ちよう、ちよう、こういうときは洒落たレストランに連れてくもんやろ」

ヴィルヘルムの提案にはやてが不満を漏らす。

「あんな所の食事は娯楽としての食事だろ。腹を満たしたいときに行く所じゃない」

「そら、そうかもしれへんけど」

「分かった、分かった。次の機会に…な。」

「…ん」

「あ、なんだか含みのある会話…」

「二気のせいや(だ)」

意味深な発言にリインフォースⅡが、ツツコミをいれると二人は即座に否定し、話題を変える。

「折角やから、シャマルも呼ぼか」

「そうだな、バーで男に酒を奢ってもらっていたのは見たのだが…」

From シヤマル To ザフィーラ

あ、ザフィーラ？

どうとう、私まで捕まっちゃった。(#・o・) / < / ———)

／ キャー

しようがないので、みんなで食事をしてから帰ります(泣)

ちよつと、遅くなってしまっけど、

心配しないでね！ / (* ^ ▽ ^ *) /

あ、そうそう、はやてちゃん達のデートの様子は、後で教えてあげるから☆☆☆☆

「ふふ、フフフ」

「例のごとく飲み過ぎだ。はやて」

屋台通りからの帰り道。屋台で飲み過ぎたはやてをおぶり、ヴィルヘルムはタクシー乗り場に向かっていた。

シヤマルも少し飲み過ぎているようだが、リインフォースIIに手を引かれながらメールを打っている。

鼻歌交じりで随分ご機嫌な様子の後ろ姿を、ヴィルヘルムが眺めていると、はやてに眉毛を抓まれた。

「どうしたんだ？」

何の意味があるか分からなかったので聞くと、はやてが身を乗り出し、こちらの顔を覗き込んだ。

「いつでも化かせるように、眉の数え直しや」

「いいのか、俺のばかり数えていて」

はやては眉を抓むのを止め、首にしっかりとしがみついて来た。

「しゃあないやん。誰かさんがシツポ掴んで、放してくれへんから、他の人を数えに行けへんのや」

「…そうかい」

それだけ言うと2人はしばらく黙っていた。街の喧騒とネオンの中をシヤマル達の後を追って歩く。

ふと、はやてが小さな声で囁いた。

「あかん…。気持ち悪い、もう、吐く…」

「うわ、待てー！くそー！いろいろ台無しだなー！この残念タヌキ！」

From はやて To ヴィルヘルム

あ、ビル、ゴメン！（。一人ー。）

ちよお、遅れそうや！

ホンマ堪忍な！ちよつとだけ待ってて！

「主はやて、お出かけですか？」

2週間後の休日、バタバタと玄関に向かうはやてを見かけたシグナムは率直に聞いた。

「うん、今日は遅くなるから、ご飯は用意しなくてええって、アギトに言っというて」

「わかりました。お相手は副長ですか？」

普通の女性と変わらず、はやても出掛けるまでに時間が掛る。が、休日に2時間以上時間を掛けてはやてが遭う相手は、ヴィルヘルムぐらしいかシグナムは知らなかった。

そして、シグナムはヴィルヘルムのことを、機動六課の時と変わらず副長と呼ぶ。シグナムとしては現在の上司というわけではないのだが…。

「しゃ、しゃあないやん！ビルのヤツ、この間一張羅を私がダメにしたの根に持っててん。新しいの選ぶの手伝えって、言うんやから！」

「そうですか、それでは、いってらっしやいませ」

「うん、いってきまゝす」

はやては元気よく返事をする、飛び出して言った。

From ヴィータ To シグナム

おい、シグナム！

はやてがヴィルヘルムと出掛けたって本当か!?

なんで、止めなかったんだよ!!

30 Quite a lot of time passed since Force

新暦82年、第97管理外世界の西暦で言うなら2021年になり、数カ月たったところ。エクリプスウイルス騒動も沈静化し、管理局特務六課も解散。高町なのはと、八神ヴィータも本局武装隊航空戦技教導隊5番隊に戻り、次世代の翼を守り育てる仕事に戻っていた。

そんなある日、

「ちよう、何人かで集まって飲まへん」

子供の頃からの幼馴染にして、管理局特務六課では上司だった八神はやてから、会食の誘いがあった。二人の教導官が予定を確認すると、ヴィータは直帰する予定の日であり、娘の居る高町なのはも、娘が習っている格闘技仲間と泊まり込みの合宿を行うとのことで、参加に意欲的であった。

そしてその当日、はやての予約をいれた外観はちよつとお洒落なレストラン風、中は現代日本の居酒屋という、成人した日本人なら違和感を覚えそうな店に二人が出向くと、十数名規模の人数が入ることが出来そうな椅子席に個室に二人は案内された。中に入るとすでに殆どの参加者がそろっていた。

「あ、なのは、ヴィータ」

執務官を務め、なのはとは同居しているフェイト・T・ハラオウンが声を掛けた。空いていた彼女の隣になのはとヴィータが着く。空いているのは後2席、フェイトの隣中央左の席に腰を下したなのはから見て、中央の長机を挟んで対面左端から、シグナム、アギト（子供サイズ）、リイン（子供サイズ）、空席、ヴィルヘルム、ゲンヤ、ザフィーラ（人間形態）、手前側左から、空席、ヴィータ、なのは、フェイト、クロノ、ヴェロツサという席順だった。皆、はやてに縁があるものが集められている。

「なんだ、はやてのヤツ。言い出した者が遅刻か？」

クロノがワイングラスを傾けながら言った。はやてが指定した時

間まであと5分ほどあるが、0次会と称して男衆はすでにグラスを傾けていた。宴会に用意されていたオードブルに手をつけ、並んでいるお酒の瓶のコルクも2本抜けている。普段それぞれのお目付け役（娘や妻、シスター）の目がないので、羽目が外れているのだ。クロノに關していえば、隣の義妹（フェイト）があきれた目で見ているので、きつと後で妻に怒られることになるだろう。

「ヴィルヘルム君は、何か聞いていないのかい？」

ヴェロツサが、はやての下で副司令官の立場にいるヴィルヘルムに尋ねた。

「シヤマル医官と合流してから、こちらに來ると、それ以外は…」

ヴィルヘルムが仕事用の顔でヴェロツサに答えた。

家族とはいえ、勤務明けにわざわざ医者であるシヤマルと合流することに、引つ掛かりを覚えた陸士108部隊長ゲンヤ・ナカジマが口を開いた。

「なんだあ、あのチビ、何処か悪いのか？」

そもそも、自分の副官でありユニゾンデバイスでもあるリインフォースを置いて、行動することも気になる。八神家にとつて末っ子組でもある彼女に聞かせたくないことでもあるのだろうか？

「いえ、定期健診のようなものです…」

答えたのは守護獣ザフィーラだ。店に入るため人間形態でいるのはいいとして、本当に珍しいことに酒を飲み、少々多弁になっている。

四つ葉のクローバーよりもなかなか見かけない光景に、なのははフェイトに念話で話しかけた。

『どうしたの？ザフィーラ？すこし、浮かれてる？』

『そうなんだよ、ほんの少しなんだけど。副長も少し硬いし』

『そうだよね』

なのはとフェイトの二人には、公私両面で感情を表に出すタイプではないザフィーラが、なぜが地に足が付かない様に見えた。一方、副長の方は公式の席では、鉄面皮で通しているがこういったプライベートの席では、洒落の聞いた会話を好んでいた。特にはやてとの言葉の応酬は、それを聞く友人たちを楽しませているのだが、今日は仕事用

の仮面を外さずにいるのが気になった。

『アコース査察官がいるからかな?』

『ヴェロツサ?』

査察官職にあるヴェロツサは、確かに管理局の部隊の行動や管理状況を評価、指導する立場にある。普通ならおべっかの一つも使いそうではある。

『でも、副長、肩書に物怖じするような人じゃないよね?』

『そうなんだよねえ? どうしたんだろ?』

なのは他の参加者の様子を見たが、他の男性陣は普段と変わらない様子で、ヴィルヘルムとの交流が最も多いゲンヤのみが、時折ヴィルヘルムの様子を盗み見ている。ゲンヤも違和感を覚えているようだ。ヴォルケンリッターの女性陣もいつもの様子に見えたが、周囲をうかがっている二人に気が付いたシグナムがチラリと視線を投げた。二人が会話でヴィルヘルム達の様子の訳を知っているかと尋ねると、『聞いていない。…が、すぐに分かるだろう。黙っている…』

と、いつもよりややつつけんどんな答えが帰ってきた。シグナムもなぜか緊張しているようである。戦闘前の緊張ではなく、例えるなら親戚の子供がピアノの発表会に出場するときの保護者の緊張。娘がストライクアーツの試合に参加するとき、フエイトが似たような表情になるので、なのはには分かった。そんなことをなのはが考えていると…。

「いや、ごめん、ごめん、遅れてしもたわ」

「ごめんなさい、皆さん」

参加者の最後の二人がやってきた。はやてが空席の内のヴィルヘルムの隣につき、シャマルも残りの空席に座ると、0次会に不参加だった者たちもグラスに飲み物を注ぎ始めた。

「そう言えば、はやて、姉さんが今日は来れなくてゴメンってさ」

「ああ、カリムにも声を掛けたんやけどなく、忙しいならしやあないわ」

「そう言えば、今日はどういった名目の会食なんだ」

「ああ、それなあ、この後発表や」

グラスに酒を注ぎなおしたヴェロツサが義姉の不参加を詫び、クロノが聞いた。はやてがはぐらかしながら、自分のグラスを持ったので、自分とフェイトのグラスに酒を注ぎ終えたのはが、注ごうとすると断られた。

「あ、なのはちゃん、それはええわあ。リイン、もらってええか？」

「あ、はい」

はやてはリインフォースの持つデキャンタから、オレンジジュースを注いで貰っている。

はやては二十歳を超えてからこういつた席では、お酒を飲むようになった。そのことを知っていたなのはが聞いた。

「はやてちゃん、明日のお仕事は朝早いのか？」

「いゝやゝ？久しぶりのお休みやゝ」

「え、じゃあ、お酒じゃなくていいの」

「ああ、そういう事か…」

はやてはいったん言葉を切った後、自分の腹部をなでながら言った。

「お酒は、お腹の子つちに悪いから、最近は飲んでないんや」

はやてが発言した瞬間、皆の会話が止まった。数名の者を除き皆、遠慮がちにはやての腹部を一度見てから、視線が彷徨させたが、時間の差はあれど、最終的にヴィルヘルムにたどり着いた。

誰も口に乗せなかったが、まあ、そういうことなのだろう。

「い、い、いつの間にゆ…」

顔を真っ青にし、体を震わせたヴィータが、定まらない人差し指をはやてとヴィルヘルムの方に向け、回らぬ口を何とか開いた。漫符の表現をするなら、大量の縦線がヴィータの顔に書かれていそうな表情だった。

二人は付き合っていないと言い張っていたヴィータは、「いつの間にそういう関係に？」と、いう意図で言った。しかし、シヤマルは少しヴィータの意図とは、違った答えを言った。

「今、二カ月よお。しかも、多胎児」

「ビル、何人いるか知りたい？」

はやては意地悪そうな満面の笑みで、ヴィルヘルムを見上げる。

当のヴィルヘルムは、はやてをまつすぐ見返し、眉をあげる。気心知れた人間とプレイング・カードでも、楽しんでいるときに、相手の手札に感心し、「そう来たか」とでも、言いたげな顔だ。

「確かに予想外だ。が、今は他に聞きたいことがある」

ヴィルヘルムははやての左手を取ると、手のひらに収まる程度の小さな箱を、腰ポケットから取り出し握らせた。はやての手の中で、ターコイズブルーの箱がパカッと開かれる。

「結婚してくれないか？」

箱にはシンプルなデザインではあるが、見る目があるものなら唸りそうなソリティアタイプの婚約指輪が収まっていた。

はやては視線を指輪とヴィルヘルムの顔の間で、3度ほど行き来させした後、口を開いた。

「あ、あれ？おかしいなあ？最終インニング、3点リードで、最高のクローザーを登板したつもりやったんやけど…」

言いながらはやての声が徐々に震えだした。

「そのクローザーより、まず私を信頼してほしいものだな」

「しとる、しとるよ。でも、この子たち達に闇の書の影響があるかも知れへんし…、いきなり、3人やっだし、受け入れてもらえるか不安になつて…」

はやての瞳からぼろぼろと大粒の涙が零れ、吃逆で体が震える。

「ああ、3人なのか…、それは、少し工夫がいるな。だが、大した問題じゃない」

ヴィルヘルムがはやての肩を抱くと、はやてはヴィルヘルムの胸に額を押し付けた。しかし、ヴィルヘルムは少し眉を寄せた。

「それより、問題なのは君がまだ返事を返してくれないことだ。黙っていられると、なかなか不安なんだ」

「…ふっ、ふふふ、お互い様ちゆうことやね」

ヴィルヘルムに肩を抱かれたまま、顔をあげたはやての顔は涙が止まっていなかったが、とても美しい笑顔だった。

「はい、もちろん、結婚しよか」

言ってから、はやてはもう一度体をヴィルヘルムに預けた。婚約指輪の箱もしっかりと両手で包み、絶対に返さないという意味が見える。

途端、周りを囲っていた者達が、色めき立つ、

「お、おめでとう、はやて」

「はやてちゃん、よかったね」

歓声を上げる同級生。

「…フー、見事です、副長」

「収まるところに、収まったな」

「あ、シャルルだけじゃなく、二人とも気が付いていたのかよ！」

「はやてちゃんの、子供」

「あたしが、末っ子じゃなくなる日が来た！」

「さあ、これから忙しくなりそうね」

各々の思いを抱く、守護騎士たち、

「エイミイと、レテイ提督と、グレアム提督…」

「まいったなあ、順序が違うってシャツハが怒りそうなんだけど」

「娘どもに、今話をせがまれそうだな…」

近親者にどう伝えようと、考え込む友人たち。

その日は、日付が変わるまで、声が小さくなることはなかった…

31 いつかの朝／＼ノツポの副長とマテリアルな娘達

そんな夢を見たような気がする。

突然、瞼の裏まで貫く光に、顔中にしわが寄る。カーテンを開け放ったであろう相手に、口には出さずに文句を言っていると、

「さあ、いつまで寝ているのだ、我が宰相よ」

声とともに揺り動かされ、目を開けると薄いグレーブラウンの髪をショートにし、バツテン型の髪飾りをつけた女の子が覗き込んでいた。つり目気味の青い瞳が不満げにこちらを見ている。

ヴィルヘルムが体を起こしながら、今日の為に昨日仕事を頑張ったせいだと言いついてみる。が、この自称王様は許してはくれなかった。お手伝い仕様時のアップポニーを揺らしながら、エプロン姿でドンと胸を張る。

「今日を無為に過ごしては、昨日の努力が無意味になってしまうであろう。それより、朝食を用意してきてやったぞ、喰らうがよい！」

ベツト脇のサイドテーブルを見れば、トースト、コーヒー、目玉焼きが盆の上で湯気を立てていた。目玉焼きは奇麗に焼けている。2日前までは黄身を潰さずに卵が割れず、悔しがっていたのだが、今日は成功したようだ。と、言うより、これを見せたくて、ヴィルヘルムを起こしたのだろう。

そのことを理解したうえで、やや大きさにヴィルヘルムが朝食を褒めると、王様は満足したようだ。

「うむ、では、早々に身支度を済ませるのだ。大鴉は動けぬゆえ、我はホームパーティーの指揮を執らねばならん。」

「その大鴉というのを辞めなさいと、いつも言っているだろ」

「なにをいうか、これでも小鴉と呼ばずにいておいているのだ…」

「俺に言われているうちに辞めるか、ママに怒られてから辞めるか、どちらかを選べ」

「な、ちよう待ちい、おかんに言いつけるなんて卑怯やろ！」

ヴィルヘルムが早々に切り札を切ると、普段の王様口調から、精神的な余裕がないときに出る母親と同じ妙なイントネーションの付いた口調になった。

「ダメだ。今日はお客さんも来る。さっきのは聞かなかったことにしてやるから。鴉は禁止だ」

「むう、分かった。今日はどうぬの具申を受け入れようではないか」

母親の耳には入らないと知って、王様の口調が元に戻った。しかも、『今日は』と強調しているので、明日も似たような会話を繰り返すことになる、ヴィルヘルムは確信していた。

しかし、それは後日の楽しみ。と、いうことにした。

「よろしい、では、ママの手伝いを頼んだぞ」

「うむ、だが、宰相も早く来るのだぞ」

「分かったよ、つむじ。なるべく、早く行く」

「うむ」

ヴィルヘルムが名付けた名前を呼び、同意すると、つむじは鷹揚に頷いた。

つむじが寢室を出て、一階に下っていく足音を遠くに聞きながら、ヴィルヘルムはトーストに嚙り付いた。せつかく娘が用意してくれ

た朝食なのだから、ゆつくりと味わいたかったが、余りだらしない姿を見せると、子供の教育に悪いと妻の機嫌が悪くなるかもしれない。

着替えを済ませて洗面所に向かう。女手の多い我が家の洗面所は、かなり大きな作りになっていたが、使っているものは居ないらしい。3人位は同時に使えるガラスミラーの前で、サークルスツール達が暇そうに並んでいる。

ヴィルヘルムが洗面台の端に追いやられた髭剃りに手を伸ばすと、洗面所の奥、脱衣場へ続くスライドドアが勢いよく開けられ、目隠しに掛けられた暖簾を跳ね上げ、ブラウンの頭が飛び出してきた。青い瞳がヴィルヘルムを捉えると、ヴィルヘルムの影に隠れる。

「マレーネ、そんな恰好で出てくるな」

マレーネと呼ばれた女の子は何も着ておらず、バスタオルを体に巻いてはいたが、今にもずり落ちそうだ。普段なら毛先が元氣よく外に跳ねているボブカットも、シャンプーの泡が付いたまましおれている。

せめて、タオルだけでも直してやろう。と、屈みこむと背後の脱衣場から、バタバタと気配を感じた。

「お待ちください、マレーネ」

「シグナム、その格好で出てきたら、娘のお世話係を解任するからな」
「ふ、副長！」

ヴィルヘルムが振り返らず言うと、スライドドアが半分ほど閉められる音が鳴った。ドアに身を隠しつつ、シグナムが言った。

「お見苦しい所を…、しかし、マレーネが、突然、飛び出してしま…」
「分かっている。マレーネ、何があつたんだ？説明してみなさい」

「…痛い…」

「痛い？何が痛かつたんだ？」

「シグナム…」

ヴィルヘルムの片眉が上がった。若干責めるようなトーンが声に乗る。

「聞こえていたか？頭を洗う時の力が強いそうだ」

「申し訳ありません。来客があると聞いて、粧し込もうと…、力が入り過ぎました」

シグナム自身は服装や装飾にはこだわりのないタイプだったが、お気に入りの娘にお洒落をさせるのは、また別の話らしい。

「マレーネ、おまえもそういう時は、ちゃんと相手に言いなさい」

「…」

この2番目の娘は、名付け親のシグナムが良く面倒を見ている。そのシグナムに影響を受けているのか、他の娘達と違って表情の変化があまりないうえに、かなり無口だった。

今も返事を声に出さず、黙つたままうなずく。ヴィルヘルムは親心を出して言った。

「返事は、はい」

「はい…」

取り合えず素直に返事をしたので、わかってくれたのだろう。と、思うことにして、娘をシグナムに送り出す。

マレーネがスライドドアの隙間から、スルリと脱衣場に消えてい

く。

「優しくして」

「…ッ！わかりました」

娘たちを構いたがる割には、甘えられると照れるシグナムの気配を聴きながら、ヴィルヘルムは髭剃りを手に取った。

「待ちやがれ、ゾイ」

「やっだよー、それにボクの話は、レヴィって呼んでって言っているだろ」

ヴィータの怒鳴り声と、元気のいい女の子の声と、バタバタと走り回る足音がリビングダイニングから聞こえてきた。最近、耳馴染みになった音だ。

「ああ、今日は何の追いかけてっかな」

諦めの声を出しながらリビングに向かうと、案の定、ヴィータと、青い髪をツインテールに結った少女がダイビングテーブルを挟んで対峙していた。ゾイと呼ばれた少女は真っ白な肌に赤い瞳のアルビノ体質で、髪が青く見えるのは、体を守るために紫外線を弾くフィルターを常に張っているため、弾かれた紫外線が偏光されて青く見えているからだ。アルビノ体質は体が弱いなどと迷信が囁かれることがあるが、少女は元気がワイドパンツとTシャツを着ているように見えた。食欲も旺盛、手にしたマフィンが、この追いかけてこの原因のようだ。

「つまみ食いはダメだって言っただろ」

「えー、だって、これ僕に分だよ」

ヴィータのお叱りに、言い訳をしながらゾイが唇に付いたクリームをペロリと舐めた。時計回りに近づこうとするヴィータに合わせて、ゆっくりと動いている。

ヴィルヘルムは、ゾイが背を向けるタイミングで近づき抱き上げる。

「そう言っつて、みなが食べ始めたらまだ食べたいとゴネただろ」

「うわ、父さん」

「また、ヴィータに叱られたのか、ゾイ」

「ゾイじゃなくて、レヴィって呼んでよ」

「ダメだ。リーヴァイは男の子の名前だろ」

ヴィータとの追いかけて同じく、この会話もいつものことだ。3姉妹は物心ついた時から、呼ばれたい名前を持つていた。特にこの三女はそれを強く主張しているが、レヴィ(levi)をベルカ読みするとリーヴァイ。巨人殺しの英雄として、男の子に人気の名前になるため、ヴィルヘルムは冗談でも呼ばなかった。

「よし、よくやった!」

ヴィータが目吊り上げて近づいてくると、ゾイはヴィータ、ヴィルヘルム、手の中のマフィンを見比べ、大きな口を開けてマフィンを放り込んだ。頬袋に種を満載したリスのような顔で咀嚼し始めたゾイに、ヴィルヘルムは裁定を下した。

「お行儀が悪いぞ、ゾイ。禁固刑だ。15分この椅子から降りるな」

「うー、うぐんっぐうぐんぐんぐ! (意識:えー、その動けないの嫌い

！」

ダイニングテーブルの一席にゾイを座らせながら、ヴィルヘルムが言った。

ジツとしているのが苦手なゾイが、不満げな声を上げる。が、ヴィルヘルムは受付なかった。さらに余罪の追及をする。

「口にもものを入れての、お話禁止。5分追加！」

「うー」

「ヴィータ、見張っておいて…」

言いかけてヴィルヘルムは、言葉を切った。左右を見回して、目的の人物を見つける。

「ザフィーラ、二人を見張っておいてくれ」

ゾイとヴィータの追いかけてここを無言で見守っていたオオカミに、ヴィルヘルムが声を掛けた。ザフィーラの位置取りは、2人が万が一にもケガをしそうならば、すかさず保護魔法を使える位置取りで、慣れている感が出ている。

「ゾイが椅子から降りたり、ヴィータがゾイを逃がしたりしたら、二人ともママ手製のおやつは抜きにする」

「えー」

「ちよつと待て何でだよー！」

ヴィータが、納得いかないと声をあげたが、ヴィルヘルムにもそれ相応の理由があった。

「黙れ、この前、見張りを依頼したら、10分も早く切り上げ、あまつさえ、自分のおやつを与えたのだろ。そういう事をするから、三人とも

付け上がっているのだ」

「いや、えつと…」

ヴィータは3人の娘に溺愛気味で、どうにも教導隊の教え子達のように、然るべきときに叱れない所がある。本人も自覚しているらしいが、叱ったときに娘たちの見せるしよぼくれた表情を見ると、振り上げた拳から力が抜けてしまうらしい。

そのため、3番目の娘でヴィータ自身が名付け親になったゾイを叱りつけても、いまいち本気だと言うことが伝わらず、追いかけてこの合図と思われている節がある。

「では、ザファイラ、頼んだぞ」

ヴィルヘルムの言葉に、蒼き狼は無言で頷いた。

ヴィータ達をザファイラに任せて、ヴィルヘルムが庭に出るとシヤマルが鼻歌まじりに、オードブルの大皿を並べていた。昨日のうちに仕込みを済ませていたものだが、色彩よく並べられた料理からは、いまだにかぐわしい匂いが香って来そうだ。

隣のテーブルでは、リインフォースIIとアギトがデザート皿の乱れを直していた。

「ゾイの仕業か、15分では足りなかったか？」

リインフォースIIとアギトに謝辞を言った後、こつそりとシヤマルが味付けした料理はどれか？と尋ねた後、妻のもとに向かった。

「やつと来たなあ、この寝坊助」

「ああ、すまない、ここ最近改めて、君の偉大さを思い知らされているところだ」

「むふふう、そうやろ、そうやろ、5年前もそうやったやろ」

言いながら、テーブルガーランドの花の角度をちよちよいと直す。今の妻には力仕事も冷えもアルコールも厳禁だ。しかし、何もしないのも落ち着かないものらしく、自分でもできる小さな仕事を見つけては手を出している。

「五年前か…、そういえば、今日その頃の夢を見たな…」

「ん？結婚式の時？」

「いや、その前だ。君が鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしていた時だ」

「ああ、そら、しょうがないやろ。まさか、まさか、居酒屋でプロポーズされるとは思わへんかった」

妻が不満そうに睨め上げてくる。どうにも、女子的にあこがれたシチュエーションがいくつか有ったらしい。

「それは君にも非があるな。それまで2回ほど仄めかしていたが、まだ、待ってくれ。まだ、待ってくれ。と、逃げ回っていたタヌキがいてな」

「う、それは…、そうやけど…、それは後で、シヤマルに知れて、ものごとつつう怒られたんや」

「正直、あの時、断られていたら、すっぱり諦めてやろうと思っていたからな」

「あぶな、3回プロポーズを断ったら、今度は自分から相手を探すことになる言うんは、ホンマやったんやな」

妻が冷や汗をかき、うろたえている姿に、プロポーズを逃げ回られた溜飲が下った。

「そういや、あんどきも今回も、ビルはすぐ気づきおったな」

「ああ、理由を言っただけじゃなかったか？」

「うん、ほら、みんな揃って、てんてこ舞いやったやろ」

「確かに、シュトルム・ウント・ドラングとは、この5年のことだ」

妻はこの5年を思い出したのか、目を瞑ってクククツと笑った後、片目を開けて答えを促して来た。片手でなでる腹部は、またぐつと大きくなっている。

「さすがに妻の様子が、おかしいくらいは気が付くさ」

「ほう」

「飲まない、よく食べる、私に対する八つ当たりが増える」

「あれ、そうやったっけ？ビル、なんも言わへんかったやろ」

「私以外に八つ当たりするようなら、叱っていた」

そこまで言っただけで、ヴィルヘルムはここ数カ月の間、妻が頑なに答えない質問を再度聞いてみた。

「君こそどつちなのか、いい加減教えてくれないか？」

ヴィルヘルムはまだ4人目の性別を知らなかった。7カ月は過ぎているので、エコー検査等で妻は知っているはずだが、ニヤニヤ笑って答えない。

ヴィルヘルムとしては、どちらでも構わないのだが、できれば、できればいいので、男の子も欲しいなど思っている。

「んん、どうしょーかなー」

やはりというか、なんというか、ヴィルヘルムに腕を絡めて来て、そのまま、ニヤニヤと笑って答えない。

すると、

「あ、やっと来たか、我が宰相よ。さあ、動けぬ者二人はおいて、我を手伝うがよい」

つむじが手にしたテーブルガーランドの小皿を手近なテーブルに置くと、プンプンと怒りながら近づいてきた。今日のテーブルガーランドはつむじの手によるものようだ。

つむじが妻とは反対側の手を取りグイグイと引っ張るが、妻が腕を放さず動こうともしないので、ヴィルヘルムが動けずにいると、そのことに気が付いた、つむじが妻を睨む。

「我が宰相を放せ」

「宰相？ 誰れのことや〜？ この人は私の副長や」

ヴィルヘルムの腕を抱え、勝ち誇ったような顔で流し目をつむじに投げるはやて。その挑発にまんまと乗って、つむじが瞳を吊り上げた。

「貴様、またしても、我が前に立ち塞がるか!!」

「ついにここまで来たかつむじよ。この大魔王に逆らおうなど身の程をわきまえぬ者じゃな」

「我が家には、勇者不在だな」

王様口調の娘と、ノリノリの大魔王さまに、取り合ってもらおうのは気分が良かったが、大魔王はホルモンバランスの乱れから、最近不安定で少し意地悪である。

ヴィルヘルムが大魔王に上申する。

「ほら、大魔王さま、副長めに、宰相の仕事をさせて頂きませんか？」
「知らなかったのか…？ 大魔王からは逃げられない…」

わざわざ娘に見せつけるように、ヴィルヘルムの腕に頬摺りをする。つむじの唇がどんどん尖っていくのもお構いなしである。

「おい、いい加減にしないか、大人げないぞ」

「あ、妻が甘えているのに、つれない言い方。ビルの愛はもう冷めてしもたん？」

「愛の証人なら、三人とお腹の中に一人いるだろ」

「証人じゃなくて、証言が欲しいんや」

「おとんは私を手伝うんや」

つむじの自制心がそろそろ限界のようだ。ヴィルヘルムとその妻の間に割り込むように体を入れ、ヴィルヘルムにしがみつく。つむじの目が涙目になりつつある。

さすがに妻も、まずいと思ったのか、少し前からつむじが作り方を覚えたがっていたマフィンの作り方を交渉材料に平謝りした。

「つむじ、ゆるしてえな。後でマフィンの作り方を教えてあげるから、ビルを後3分かしてえな」

「ほら、王様、寛容なところを見せてくれ」

つむじの頭を撫でながら、ヴィルヘルムも宥めると、やや不満げにだったが納得してくれた。

「マフィンの作り方、忘れるでないぞ」

ヴィルヘルムから離れ、つむじが言った。そのまま、ホームパーティーの準備に戻っていく。

十年もたてばお父さん嫌いとも言ってくるんだろうな。と、ヴィルヘルムが世の父親と共通の悩みを思い浮かべていると、腕を放して彼の妻が両手でヴィルヘルムの顔を掴み正面を向けさせた。

「ほれ、証言を早よう」

催促に、どうせなら妻の故郷の言葉で答えてやろう。と、口を動かす。

ヴィルヘルムがこの言葉を使うと、妻の幼馴染の同僚が目を白黒させるが、この柔らかなイントネーションの関西弁という言葉は気に入っている。

「愛してんで、はやて」

はやてが答えるように、顔を近づけてきた。

おもちゃ箱編

32チーターをなのは達と絡ませてみた1

新暦78年の夏も終りに差し掛かったころ、無人世界カルナージ。1年を通して温暖で豊かな大自然が広がっているカルナージだったが、その一角に先進世界の都市部にしか見られない建造物が密集している街がある。その建造物には人の気配がなく、通りにも人っ子一人いない……。ゴーストタウンではなく、レイアー建造物で作られた偽物の街、陸戦魔導士訓練場である。

空を見上げれば、エクシードモードのバリアジャケットに身を包んだ高町なのは。雲一つない空に白を基調としたジャケット姿は良く映えた。

その姿を憧れの表情で見上げながらトレーニングウエア姿のスバルが言った。

「ねえ、ティア、今日の予定に模擬戦って入ってたっけ？」

「いいえ、なのはさんの呼んだ……。エイブラハムさんって人が飛び込みで参加になったからでしょ」

スバルの問いに、ティアナが答えると、足の屈伸運動をしていたエリオが続けた。

「明日やる練習会にむけての、お披露目だと聞いています」

「なのはさんは、Bランク位ですけど、変わった魔法を使う方だと行ってました」

白銀の竜の傍らでキャロもエリオに続く。皆、スバルと同じくトレーニングウエア姿で、軽いウォーミングアップをしながらである。「変わった魔法？レアスキル持ちなのかな？さすがなのはさん、いろんな知り合いがいるなー」

二人の話を聞いて、スバルが期待に胸踊らせ興奮気味の表情で言った。が、ティアナは首を捻った。

陸戦Bランク、数年前機動六課に配属されるころティアナ達がそう評価されていたランクである。現在のティアナ達のランクはAA

A＋、はつきり言つてエイブラハムの方が格下である。

もちろん、魔導士ランクとは、「規定の課題行動を達成する能力」の証明であるため純粹な戦闘能力ではないのだが、ランクが上の魔導士を複数相手取つて勝てる者はほとんどいない。恐らく初見では対応しづらいレアスキルを持つているのだろう。

ティアナは羨ましく思いつつも、冷静にこちらの戦力を最大限行かせる方法を考える。以前だったら、一般的なミッドチルダ式の自分と比べて嫉妬や、焦りを感じていたかもしれないが、ここ数年の実績が小心を押しつけてくれている。

「どんなスキルでも構わないわ。なのはさんに私たちの成長を見てもらうわよ」

「うん」

「はい」

「はい」

元機動六課のフロントメンバーの四人で、話していると空間モニターが開かれなからはから通信が入った。

「それでは、これから模擬戦を始めます。アグレッサ―はエイブラハム…、アビー君ね。アビー君は、変わった戦い方をするから注意が必要だよ」

なのはの言葉の途中でもう一画面空間モニターが開かれ、敵役（アグレッサ―）のエイブラハムの姿が映し出された。

「……ッー」

その姿に四人とも息を飲む。

エイブラハムは、すでにバリアジャケットをセットアップしていた。ベルカ時代の軽装歩兵をイメージさせる服装に、カード型簡易デバイスフォルダーや複数のナイフをベルトで吊っており、右腿のフォルスターに回転式の拳銃型ストレージバイスを収めていた。しかし、何よりもスバルたちの目を引いたのが、ストールの巻かれた顔だった。覆面のように巻かれた隙間から、周りに火傷の跡のような酷い変色のある右目が、こちらを覗いている。

宿泊ロッジで見かけたときにはなかつた傷に思わず動揺してしまった。恐らく変身魔法の一種でキズを隠していたのだろう。画面の中のエイブラハムが軽く会釈をして、空間モニターを消した。

「…えっと、失礼な態度取っちゃったかな？」

「うーん、そうかもね…、まあ、あとで謝りましょう」

いいながらティアナが待機モードのデバイスを取り出すと、スバル達もティアナに続く、

「じゃあ、行くわよ。元六課フロント組！セーの！」

「二「セーッ！アーツプ!!」二」

リンカーコアから魔力がデバイスに吸い上げられ各々の魔力光に包まれる。

フロントメンバー達は誰かが、

「割り込み入力、セツトアップファイル、強制停止」

と、呟いたように感じた。

魔力光が消え、ティアナが最初に感じたのは、太陽の陽気とそよ風が直接肌に触れる感触だった。手の中のクロスミラージュはカード型の待機モードのまままだ。

「え？」

訳が分からず周りを見れば、スバルも待機モードのままのデバイスを持った右手を見つめている。その姿はバリアジャケットを着ていたが、上衣のインナーとホットパンツだけの姿で、ローラーブーツのマツハキヤリバーが待機モードのため裸足だった。

「うわああああああ!!!」

悲鳴が上がった方を見れば、エリオがいた。こちらも上衣のインナーとズボンという姿で、顔を真っ赤にしてこちらを凝視している。悲鳴の意味を聞こうとしてエリオと目が合うと、エリオは慌てて背を向けるとしやがみ込んだ。

「見てません…、見てませんから…」

懺悔のような、自分に言い聞かせるような、どちらとも取れる様子で硬く目を閉じるエリオ。とても話が出来る状態ではなさそうだ。

ティアナはふっとエリオが凝視していた自分の体が気になって見

下ろす。

最高峰と言わなくても、なかなか育つてくれた双子山。その山肌は執務官の激務にも関わらず、みずみずしさを保ち。その頂きには、奇麗な色をした頂上標石が鎮座している。

「ッー！」

息を飲みながら、ティアナは気づいた。自分がシヨーツしか身に着けていないことに…。

咄嗟に両腕で胸元を隠すと、しゃがみ込みながら渾身の力で悲鳴を上げた。

「きゃあああああああああ!!!」

「ティアナさん！エリオ君も！」

キャロの声が聞こえる。ティアナが確認するとキャロも同じくシヨーツ姿だった。

成長の芽が見え隠れしてきている体のつるりとした卵肌を惜しげもなくさらし、こちらに近づいてきた。

「ティアナさん、大丈夫ですか？どこか痛いですか？」

キャロの天然が炸裂。悲鳴を上げて屈みこんだティアナを見て負傷したものと勘違いしたようだ。ズレた発言のおかげで、ティアナの羞恥と驚きのピントが少しずれ、冷静になれた。

エリオは弟みたいなものだし、六課時代に一緒に銭湯に入ったこともあるのだから…、ノーカン。と、気持ちを切り替える。

「キャロ、私は大丈夫よ。ちよつと驚いただけ」

言いながら、あ、かわいいローライズ履いてるわね。と、キャロにつられてズレた思考がティアナの頭をよぎる。

「そうですね、良かった」

いうが早いのか、キャロはエリオの方に、ぺたぺたと裸足の音を立てて向かっていく。

ここでティアナは自分たちが攻撃を受けたことに気が付いた。

これは念話などの通信魔法を利用したウイルス攻撃。あのエイブラハムという魔導士はサイバー戦の達人と言ったところか。ナンバースで言えば、NO.4クアットロのようなタイプ。きっと性格も

陰険で姑息に違いない（偏見）。

確かに、相手の魔法プログラムに侵入し、クラッキングを行えるほどの技術を持つているものは、まず出会うことはない。JS事件の際もフロントメンバーでクアットロと対峙した者はいなかった。そういう意味での経験値で言えばこの模擬戦はかなり意味のあることだろう…。しかし…。

（さすがに、これはないんじゃない!?なのはさん!!）

こんな屈辱的なウイルスを送信してきたエイブラハムという男もそうだが、なのには対する怒りもふつつと湧いてきた。

（そもそも、セットアップ…、じゃないや、変身が終わる前に攻撃を仕掛けるのは、ズル（チート）じゃないの…!?)

あの男、どうしてくれよう…!魔力資質的には後衛型、武装が多いのもそれを誤魔化するためのものでしょう。接近して包囲してしまえば…）

ティアナが報復方法を考えている間に、キャロの足音に気が付いたエリオが、しゃがみ込んだまま振り向きかけたがキャロの姿を確認して、すぐさま明後日の方向を向いた。

「うあっ!!キャ、キャロ!!」

「エリオ君は、大丈夫?立てないの!」

「十分立ってるから!いや、立てるから!」

「そこ、押さえているけど、痛いのか?見せて!」

「痛いわけじゃないんだ!お願い、キャロ!そんな恰好で近づいてこないで!!」

わかっているのか、いないのか?エリオにグイグイと体を寄せるキャロ。思春期に入った男子には辛い?状況にエリオが悲鳴を上げる。

エリオに助け舟を出したのはスバルだった。

「あー、おっほん」

わざとらしく咳ばらいをすると、二人に近づきエリオからキャロを

引き剥がす。

「ほら、キャラ、こつち来て。エリオは、こつち向いちやダメだよ」

「は、はい。もちろんです!」

スバルはキャラを連れて戻ってくると、白銀の竜、フリードに話しかけた。

「フリード、翼をこう私たちを包むようにしてもらっていい?」

フリードがその巨軀を使って、ティアナ達を覆う。竜の体で作られた天蓋は三人が入っても十分なスペースがあった。

「いいキャラ、ちよつとお話を聞いてね」

眉をよせ、立てた人差し指を教鞭のごとく振るって見せるスバル。

「…ギンねえに、けつこうきつく言われているんだけど…、いいキャラ、男の子相手には、スキを見せたらダメだよ。…スキを見せると、男は基本的に、『女の子ならだれでもいい』から…、『近くにきてもいいよ』ってスキを見せてると、お互いにキズつけちゃうこともあるの」

「そーなんですか…」

「…そーなんです」

「え、ちよつと待って…、え」

スバルの言葉に実感を持たずに、曖昧な口調で返すキャラに、スバルが静かにしつかりと返した。

その様子に、今の言葉は知識だけでなく、経験としての重さを感じたティアナは焦った。ティアナは執務官試験から、マリアージュ事件まで、一年半の間スバルとは直接会う機会がなかった。

しかし、ティアナが執務官の研修や凶悪事件に追われている間に、この元相棒にいったい何があったのだろうか?

焦るティアナに、続くスバルの言葉が追い打ちを掛ける。

「ヴィヴィオは、そーゆーの結構、わかってる感じだけだな。さつき、なのはさんや、コロナと、そんな話…：…してたような」

「ウソでしょ、さ、先を越されてる…」

「わたしたち、世間を知らなさすぎるんでしょうか?」

初等科のヴィヴィオ達の名前が出たことで、キャラ達の心にも言葉が刺さった。特にティアナには効果がばつぐん過ぎた。

「あ、あれ？二人とも落ち込んだじゃった…。悪いこと言っちゃった…
？」

333 チーターをなのは達と絡ませてみた2

そのころ、陸戦魔導士訓練場の上空では、時空管理局本局武装隊で教導を行っているときには、凛々しくも優しい表情で生徒たちを見守っている高町なのはが、目を点にして間の抜けた表情をしていた。元六課のフロントメンバーのあられもない姿に思考が停止してしまっている。

(あれ? 何でこんなことになったんだっけ?)

決まっている。自分が呼んだエイブラハムの仕掛けたウイルス攻撃により、元六課の教え子たちがセットアップに失敗したからだ。

なのはとエイブラハムが出会ったきっかけは、機動六課の解散後、なのはとヴィヴィオが巻き込まれたある事件が切っ掛けだった。この事件は海鳴市までも巻き込んだが、管理外世界で起こった出来事であり、事件の首謀者が特殊な立場にあったため報道規制が引かれ、認知度は低く抑えられている。

その事件で解決の為に派遣されたエージェントの一人がエイブラハムだった。出会った当初、管理世界ではまず見ることはないエイブラハムの戦闘方法に、なのはも驚かされた。

彼特有の戦闘方法は、元六課のフロントメンバーにもいい刺激になる。と、考えていたのだが、なのは達が巻き込まれたのは根の深い事件だったため後処理に時間がかかった。

最近は、ようやくひと段落がつきエイブラハムのスケジュールにも余裕が生まれてきたらしい。丁度、春はみんなの都合が合わず、開催を延期していた『大自然旅行&オフトレーニング』にも休みが重なっていたようなので、なのはの誘いで半ば強引に参加してもらった。

そして、今に至る。

確かに、なのはもエイブラハムがウイルス攻撃をするだろうと、予想はしていたのだが、まさかいきなりこういう攻撃を選択するとは思ってなかった。

「なのは」

遠くで誰かが読んでいるが、なのはが反応できずにいた。

すると、変身シーンで攻撃するというお約束破りの張本人が、なのはが飛んでいる近くの建造物の屋上までやってきた。バリアジャケットの腕に仕込まれたワイヤーガンを駆使した見事な動きだったが、今のなのはの目には入らない。

「おい、なのは!!」

「え、ええ!!」

かなりの大声を出されてなのははようやく相手に気が付いた。見るとエイブラハムが顔からストールを下ろして声をかけていた。黒髪の短髪、あまり際立った特徴のない顔の右目には傷跡が、左目は眼帯型のヘッドマウントディスプレイで覆われている。

「デバイスのセットアッププロセスを妨害するウイルスを使ってみた。始めて使うウイルスだったが、索敵も攻撃もない所を見ると上手くいったようだな」

実戦では相手がバリアジャケットを着るタイミングなど分からないので、お蔵入りになっていたモノが試せてうれしいと上機嫌なエイブラハム。それに対して混乱気味のなのはが詰め寄る。

「アナタ君、あれ、わざとやったの?」

思わずエイブラハムの本名、というか、友人しか知らないプライベート用の名前を呼んでしまった。

「そつちの名前を呼ぶということは、動揺しているな。なにがあつた?」

「え、つと、ティアナとキャロが……なんというか……、あれな姿に……」
年頃の娘達が素肌を晒しているとは、さすがに言いづらくなのはの声が尻すぼみになっていく。

「ん?、セットアッププログラムが走らないようにウイルスを組んだつもりだったが、想定していた効果は出なかったみたいだな」

エイブラハムの使うウイルスによる攻撃は、効果がある時は強いが確実性がある技ではない。デバイスのウイルススキャンに引掛かり、魔法効果を減衰させる程度に留まる場合もあるし、全く効果が出ない場合もある。コンピューターゲームのRPGなら、相手の能力を下げるデバフや、状態異常をひき起こすスキルがあると思ってもらえ

れば分かりやすいだろう。

実際に相手の魔法プログラムに攻撃するには、何よりも相手の情報が必要とされる。その情報収集の一環として、エイブラハムはなほに尋ねた。

「因みに、どういった効果が出た？ミッド式と近代ベルカ式で効果に差はあったのか？」

言いながらエイブラハムが、フロントメンバーのスタート位置が見えるよう、屋上のへりに向かおうとする。いくらフリードが目隠しになつてくれているとはいえ、ティアナ達を完全に覆い隠せているわけではない。エイブラハムのような後衛型のサーチャーなら、まるっと見えてしまうかもしれない。

そう思ったなのは、あわててエイブラハムの前に回り込んだ。

「わっ！ダメダメ！今は見るの禁止ー!!」

「…？ウイルスの効果は出ているんだな？なら、どの段階で効果が出たんだ？説明してくれ」

「えっと、…ベルカ式の二人はバリアジャケットの生成途中で…ミッド式の二人は…その…脱衣の最終段階というか…、とにかく、セツトアップ中の攻撃は禁止ー!」

なのはの肩越しにフロントメンバーを見ようとするエイブラハムをバタバタと手を振って止める。ずいぶんと子供じみた仕草をしてしまったが、エイブラハムは動きを止めてくれた。

が、眉間によったしわの数を増やす。

「その怒り方、ヴィヴィオにそっくりだな。いや、ヴィヴィオが君に似ているのか…」

エイブラハムは嘆息してから続けた。

「ヴィヴィオが真似するから、そういった感情表現は辞めた方がいい。アリサも言っていたぞ。君達の怒り方は、ミスター・ゴボラのようなと…」

「な…、ひ、ひどいよ。アリサちゃん、そんな風に思ってたの!!」

Mr. Gobboraは、第97管理外世界の日本で世界的に有名な特撮怪獣映画である。50年以上前に上映された『ゴボラ』に始まる

一連のシリーズ作品及び、それらの作品に登場する架空の怪獣の名称である。

発言者のアリサとしては、ピンク色の破壊光線を撃ちながら戦うのはに対して、半ば冗談まじりに言った発言だったのだが、第三者（エイブラハム）からのまた聞き効果で誇張して聞こえてしまった。思いのほか傷ついた表情を見せたなのは、エイブラハムは慌てた。

「いや、アリサも冗談で言ったんだと思うぞ。…まあ、女性に対してミスターは酷いよな」

「そこじゃなーい!!!」

ビミョーな女心を理解しないエイブラハムに、なのはがヒートアップしていき、更に動転したエイブラハムが失言をくり返す。

「ああ、そ、そうだな。怪獣な訳ないよな…。最近、C W社と武装試験を行っている姿はカツコイイからな。グレートガイアに出てくる連邦軍の白いヤツ…?」

「ああ、言った!!とうとう、言った!!アナタ君が、言っちゃいけないことを言いました!!!」

グレートガイア、第97管理外世界の日本における往年の名作アニメ。鉄鋼艦隊・グレートガイアを始めとする一連の作品群のタイトルである。各作品はいくつかの世界を共有して発表されている。その他、従来からのグレートガイアとは異なる世界観に基づいて描かれた新しいグレートガイアシリーズも発表され、それらもまたアナザーグレートガイアとして、根強い人気がある。

「あ、あれ?カノンの発射音はどう聞いても、ビームライフルだと…、すずかも同意していたんだがな?」

「すずかちゃんまで!!そんなこと言うチャーターさんは、BANだよ。BAN」

「うあ!!レイジングハートをこっちに向けるな!!!」

故郷における代表的な怪獣とスーパーロボットに例えられ、なのが高度を取りながら遺憾の意を伝える。と、エイブラハムもその場から飛び退く。

エイブラハムが両手のひらを何度も下げる「落ち着け」のジェス

チャ―をしながら、なのはに言った。

「ところで、俺の戦技を教え子に体験させたいのは分かるが、生徒に肩入れし過ぎじゃないですかね、教官殿」

含みのある言い方をするエイブラハムに、なのはが答えず笑みを返すと同時に、激しい雷鼓が轟いた。

34 チーターをなのは達と絡ませてみた3

激しい雷鳴が響いたと同時に、なのははエイブラハムから離れて高度を取った。フロントメンバー、エイブラハムの両方を視界に収める。

フリードのそばで、エリオが稲妻を纏うと完全なバリアジャケット姿になった。同時にフリードが作った天蓋の隙間から、無数の光の道が伸びる。光の道、ウイングロードは上下左右に蛇行しながら絡み合い、それに乗って進む者の軌道を読みづらくさせている。

ウイングロードでエイブラハムの視界からフリードが隠れそうな頃合いを見計らって、スバルがウイングロードでの疾走を始めた。もちろん、バリアジャケットもデバイスも完全な形でセットアップされている。

エリオもそれに合わせて動いた。目がくらむような雷光を柵引かせ得意の高速機動魔法で、エイブラハムを右回りに迂回する。速い、恐らくキャロのブーストも上乘せされている。

二人の機動力を生かした前後からの挟撃。

(…と、思わせて…)

フロントメンバー達のことをよく知り、俯瞰した視点から様子を伺っているのはには分かった。

スバルのスタートが僅かにだが早すぎる。自分の接近する軌道を隠すなら、ウイングロードが相手の視界からフリードを完全に隠してからでも遅くない。エリオも雷光が強すぎる。発している雷光は無駄な魔力消費でしかない。今のエリオならもつと効率的な魔力運用ができる…。

つまり…、

(これは陽動、相手の意識をそらせるように動いている…)

何の前触れもなく、エイブラハムの左側面にあるビル屋上にティアナが姿を表した。もちろん、バリアジャケット姿で。

対象を見えなくする幻術魔法と、アンカーショットの組み合わせで密かに忍び寄っていたのだろう。ティアナの周囲に無数の魔力ス

ファイアが生成される。

「…死なすークロスファイアシユート！」

執務官にあるまじき台詞と同時に、全力のが誘導弾が撃ち出された。挟撃を陽動とした側面攻撃。

並みの使い手なら対応はおろか、反応すらできないコンビネーション。さらに、模擬弾を使っているとはいえ、当たると相当痛そうな全力攻撃に、なのははティアナの殺意を感じた。

(ティアナ…、怒るよね。いきなり裸にされたら…)

ウイルス攻撃からのショックを乗り越えた後、フリードの天蓋のなかで作戦の準備をしていたのであろう。

前衛の二人を陽動に使い、自分の手で攻撃しようとするあたりが、なんとも気の強いティアナらしい。

(だけど…、それじゃ、ダメだよ)

《改竄思念感知》

なのはの思考に答えるかのようなタイミングで、レイジングハートが報告してきた。同時にティアナの撃った誘導弾が軌道を変え、スバルとエリオに襲い掛かる。

(やっぱり、ティアナの動きは聞かれていた)

武術を使う人の中には、視覚に頼らず相手の位置や動きを察する技術を持つ者がいる。なのはの家族が修める御神流で言うならば、『心』と、呼ばれる技である。

味方が近くにいる状況、ティアナの中距離に着いた位置取りで、エイブラハムは誘導弾による攻撃を予想していた。誘導弾の発射と同時に思念誘導を欺瞞し、誘導弾の攻撃目標を変えさせている。

「えー」

「なー」

味方からの攻撃を受ける羽目になった二人は、それでも素早く反応した。スバルはバリア展開、エリオは回避を選択した。

複数の誘導弾を躲し切ったエリオ。

(キレのあるいい動きだけど、弾幕の目的は移動制限だよ)

なのはからは、エリオが回避行動に移る姿と、エイブラハムが左腕

のアンカーガンを床に撃ち込み、エリオの回避先に先回りするのが辛うじて見えた。もし二人と近距離で対峙していたら、一瞬見失うほどの速度で瞬間的に移動している。

超高速移動魔法のブリッツアクションを使用したエリオに対して、エイブラハムは魔法を使用していない。人間の潜在能力を発揮させることで可能になる動き。御神流の歩法『神速』と同格の技。

「ッ!!」

魔法の気配すらなく、先回りされたエリオは驚愕の表情を見せる。そのスキを見逃さず、エイブラハムの左拳がエリオの脇腹に当てられる。

途端、雷光が走った。エリオのサンダーアーム、魔力から変換した電撃を体の一部に集中発生させ、触れたものに電撃を流し込む攻勢防御。

だが、電撃はエイブラハムの撃ったアンカーガンのワイヤーを伝って、床へと流れていく。

防御をすり抜けたエイブラハムは、ビシツと音を立てて床にヒビが入るほど踏み込む。

エリオの体かくの字に曲がった。

今度は御神流『徹』と同じ打撃法である。衝撃を表面ではなく裏側に通す撃ち方で威力を『徹す』打撃。

バリアジャケットのフィールドを飛び越え、体内で炸裂した衝撃に、エリオが膝から崩れ落ちた。エイブラハムは、いつの間にか抜いていた銃型デバイスで二発。

《エリオ、LIFE：0》

一発ごとにカートリッジをロードしたシユートバレットを頭に受け、エリオが撃墜された。

しかし、エイブラハムは攻撃の手を緩めない。今度は、バリアを発生させるプログラムに感染するウイルスを送信。

欺瞞誘導されたクロスファイヤーシユートを受けきったスバルに向かつて、デバイスを向けながら左手を振るった。

「うおおおおお」

右手に装着しているリボルバーナックルを振りかざし、エイブラハムに突進していたスバル。だが、急に腕を引かれて失速する。見れば、手首部分の高速回転するナックルスピナーに、ワイヤーが絡まっている。エイブラハムが避雷針代わりに使ったアンカーガンのワイヤーである。

スバルの動きが乱れると、エイブラハムはワイヤーをパージ、シユートバレットを残ったカートリッジの数だけ放つ。

バリア発生を妨害するウイルスを検知していたスバルは、素早く前面にシールドを発生させて、これを防いだ。だがそれは、エイブラハムが付け入るに十分すぎる隙だった。

件の歩法でスバルの脇に回ったエイブラハムが、銃を放り出し拳を走らせる。人体の急所の一つ脇の下に当たったに見えたが、拳がスバルのバリアジャケットの上を滑っていく。スバルは体を捻ることによって、『徹』の打点をずらし威力を半減させることに成功した。

(スバルのストライクアーツの中にも、似たような打撃法、アンチエン・ナツクルがあつたね。その対策かな?)

なのはの思考の間にも、スバルが反撃する。左のバックナックル、エイブラハムが身を屈め躲し、指で突いてきた。しかし、強靱なフィールドを破れず、スバルにとっては押された程度、ダメージもない。

バックナックルの反動を生かして、体を半回転させたスバルは、リボルバーナックルに絡みついたワイヤーごと拳を振り下ろした。全身の回転で押し出された拳は、アンカーを引き抜いても威力を落さぬまま、床に叩きつけられた。

スバルの拳を、エイブラハムは大きく間を離して回避していたが、その足元に1発のシユートバレットが撃ち込まれる。

撃つたのはティアナだ。

誘導弾を奪われ利用されたティアナは、欺瞞誘導される余地のない直射弾での攻撃に切り替えた。距離を縮めたのは誤射を避けるためだ。

(ティアナには、誤射に苦い経験があるからね…)

なのはがアンカーショットで隣のビルから移動し、塔屋に陣取っているティアナを見る。

クロスミラーージュの一丁をダガーモードに変化させ、中短距離どちらにも対応できるように身構えたティアナ。上空にはバリアジャケット姿のキャロを乗せたフリードが旋回している。

ティアナ達が、エイブラハムを包囲したようにも見えるが…。

「あ、あれ？…なんで…!?!」

スバルが突然崩れ落ちた。両手を床に付き、生まれたての小鹿の様にガクガクと震え始めた。予想だにしていなかった事態に、ティアナは一瞬気が取られてしまった。

瞬きする間すらない時間で、エイブラハムはナイフの抜き打ちから始まる4連撃を繰り返した。クロスミラーージュのダガーを払った後に、間髪入れずに2撃目を背後から放ち、更に3、4撃目を別軌道で叩き込む。

《ティアナ、LIFE：0》

連撃を浴びて、ティアナが撃墜された。レイジングハートがなのはに報告を上げるころには、エイブラハムはナイフをスバルに投げつけていた。

訓練用のダメージ判定プログラムは、スバルの首筋に当たったナイフに付与された魔法が、スバルに致命的なダメージを与えたとして、無情な判定結果を算出する。

《スバル、LIFE：80。LIFE：100未満のため、治療が行われるまで、活動不可》

エイブラハムが呟く。

「戦闘機人つてのは、すごいな。点穴まで、有るのか…」

『点穴』、全身に存在するツボを付き、内力の循環を操る技術である。初歩的なものはミッドチルダの整体施術で、体調を整える目的で使われている。が、エイブラハムが行ったのは全くの逆、内力の循環を止め、各種の身体機能を乱すために利用している。

（美沙斗さんも驚いていたよね。香港国際警防隊でも、会得している者は2人といない武術の奥義だって。魔法文明の人にとって、魔法に

見えるかも…?)

冗談じみたことを考えながら、なのははキャロを見守った。

キャロは次の手を打てずにいた。キャロ自身も中距離射撃戦を行うことは出来たが、自分以上に中距離からの攻撃を得意とするティアナを制した相手に、正面から攻撃を当てる自信はなかった。フリードのブラストレイなら通用するかもしれないが、AAランク以上の砲撃魔法は味方を巻き込んでしまう。

「ここでは撃ちにくいか…。どれ…」

言つてエイブラハムは、残ったアンカーガンを使つて隣のビルに移った。余りに無防備な動きだったため、キャロがかえつて攻撃を躊躇していると、

「これで、撃てるだろ…」

撃つて来いと挑発するエイブラハム。さすがに、機嫌を損ねた顔したキャロがフリードに命じる。

「フリード・ブラストレイ！」

キャロの命を受けて、フリードがその顎を開く。竜の強力な魔力が炎熱返還され、砲弾として形を成していく。

同時に、

「錬鉄召喚、アルケミックチェーン！」

キャロの声と共に鋼鉄の鎖が召喚され、エイブラハムに襲い掛かった。

砲撃魔法に意識を取られていたエイブラハムの反応が遅れた。無機物操作で操られた鎖が、投網のように動きエイブラハムを捕らえ拘束する。

ブラストレイのチャージが終了する。今まさに砲撃されるという時、エイブラハムが何かを呟いた。

「ファイア!!」

フリードが放った炎の奔流が、エイブラハムのいるビルに迫った。ドゴオオオン!!

が、その途中で爆裂四散する。

ブラストレイの魔法プログラムに侵入したエイブラハムが、着弾時

爆裂効果を意図的に暴発させた。キャロがそうと気が付いた時には、エイブラハムの姿が少し変わっていた。エイブラハムの背中ら大小6対の翅のような廃熱板が展開していた。

「見よ、すべて火をともし者、剣をつかむ者。その者は、自らがともした火の中に倒れ、自らがつかんだ剣の上に倒れるがよい」

飛び散ったはずの炎が、エイブラハムの言葉に誘われるように集まっていく。集められた炎は、パイロシューターに変わり、エイブラハムの周りに複数のスフィアが形成された。

「発動中の魔法プログラムを書き換えるなんて……」

目の前で起こったことが信じられずに呆然としているキャロ。

エイブラハムは更にパズワードを唱える。

「剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする」

こちらは魔法プログラムデータを破壊するウイルスのようだ。

アルケミックチェーンの鎖が力を失って落ちる。

エイブラハムがキャロに言った。

「感謝する。竜を落すには、俺の火力では難しくてな」

「……ッ！」

キャロがはっと気づくのと、パイロシューターが放たれるのは、ほぼ同時だった。

フリードが吠え、炎の魔弾をアクロバット飛行で回避したが、その余りの激しさにキャロはエイブラハムを完全に見失ってしまったようだ。

キャロがエイブラハムの位置を捕らえたのは、背後から組み付かれ、喉元にナイフを突きつけられた時だった。

なのはからはよく見えていたが、エイブラハムがウイングロードの魔法プログラムに侵入、強引に光の道を曲げ、フリードに飛び乗る足場に使っていた。背中 of 翅は飛び移る際に、パージされ、魔力光を発しながら消えていった。

キャロのLIFEはまだ残っているが、これからどんな魔法を使うにしても、エイブラハムが止めを指す方が早い。捕獲されたと言っていないだろう。

「うん、ここまでだね」

フロントメンバー：行動不能1名 捕獲1名 撃墜2名

エイブラハム：戦闘継続可能

試合時間9分41秒

フロントメンバーの全員の戦闘不能につき エイブラハムの勝利

35チーターをなのは達と絡ませてみた4

「ほほう！なのはちゃんのお兄さん達みたいに動けて、サイバー戦の達人と…。確かに、初見やとびつくりするやろな」

声を潜めながらも、はやては感嘆の声を上げた。

なのは達が午前中のトレーニングと模擬戦を終え、食事と休息を取るため宿泊ロッジに戻ると、川遊びに出かけていたヴィヴィオ、コロナ、ルーテシアと引率していたフェイトが、遅れて到着したはやて達、ヴォルケンリッターと食事の準備をしていた。

そのまま全員で食事となったのだが、すこぶる機嫌の悪いティアナ。内臓にダメージが入って食が進まなくなってしまったエリオ。左頬に湿布を貼って気まずそうにしているエイブラハムと、揃った面子の割には、普段より会話の進まない食事になってしまった。

これは午前中の模擬戦で何かあったのだろうか、はやてはなのはに尋ねたのだが、なのはの答えもいまいち歯切れが悪く。エイブラハムがサイバー戦と体術を駆使して、フロントメンバーに勝ったという答えしか返ってこなかった。映像を見せてくれと言っても、模擬戦の戦鬨ログは全て消去して、記録に残していないそうだ。

教導隊であるのはが、そんなことをするのはおかしい。カンではあったが、はやては面白そうな話の匂いを嗅ぎ付けた。

当然、

「で、なのはちゃん。なんで、ティアナはあんな不機嫌なん？」

「…え、えつと…」

タヌキフェイスになったはやてが、取り調べを開始した。

「あ、あの、はやて…、そんなに追及しなくても」

なのはの困り顔に、フェイトははやてを止めようとしたが、全く聞き入れる様子がない。

追及を逃れようと思わず身を引いたなのはを、はやては逃がさないように抱きつき。ついでに胸を揉みながら迫る。

「…あつん、あのーは、はやてちゃんー！」

「答えんって言うなら、最近、ビルのヤツがうるさくて出来ない、スキ

ンシップに付き合ってもらおうで」

セクハラおやじよりもゲスな目をしている友人に、さしものエース・オブ・エースも観念した。

「ティアナとキャロを、ひん剥いたやて…!!なにその羨ま、けしからん能力!!」

「いや、アビー君も意図的にやったわけじゃ…」

「これは…、もう、友達になるしかあらへん!」

ティアナの不機嫌の真相を聞いたはやての第一声がこれである。

なのはとフェイトは心の中で、明日到着予定のはやての部下に当たる男に助けを求めたが、残念ながら二人の通信魔法はそこまで性能が良くないので、願いがその男に届くのはもう少し後になる。

はやてが周りを見渡し、元部下たちをひん剥いた男を探す。

エイブラハムはテラスの端でヴィヴィオとコロナに、何かの魔法を教えているようだった。空間モニターにプログラムソースとフローチャートを表示しながら、プログラマブル・ルーンライターを操作している。

作業が終わったのか、ルーンライターの脇からカード型簡易デバイスが、パチンと音を立てて頭を出した。

「さて、こんなものだろう」

エイブラハムが言いながらカードを引き抜き、テラス前の広場に投げける。

カードが地面に落ちると、召喚魔法に似た魔法陣が展開し、盛り上がった土がカードを中心として人間大の塊となり、起伏をくり返しながら、硬質な人型ロボットの形になった。ゴーレム創成、魔力を込めた物質により、自分でゴーレム（動く泥人形）を創生して操る魔法である。

ゴーレムは日本で育ったことのある人であれば、一度ぐらいは見たことのあるサブカルチャーのロボットと同じ姿をしていた。

「それ…!!グレートガイアだ!!」

それを見た瞬間、すこし離れた席にいたヴィータが声を上げた。エ

イブラハム達のもとへ駆け寄ってきたヴィータの目はキラキラと輝いている。見た目年齢と相まって今のヴィヴィオ達と同じくらいの子供のように見える。

「なあ、あれ、グレートガイアだろ!!」

「ああ、正確には…、」

「正確には、超電導加工実験機のM型や、Gアルファ、Gテリオスには分離せえへん」

エイブラハムがヴィータに返答しかけたのを遮って、はやてが話に混ざる。

はやてを一瞥してから、エイブラハムが言った。

「ほお、いける口だな、八神2佐」

「アビー君、やったつけ? はやてで、ええで。なかなか、渋いチョイスするやん!」

初対面で深い沼の底にいる者同志のような、謎のシンパシーを感じている二人だったが、続くコロナの声で沼から浮かんできた。

「ねえ、ヴィヴィオ、グレートガイアってなに?」

「ええっと、ママの出身世界のアニメで…」

「ああ、すまん、ゴーレムのモチーフは、この際どうでもいい…」

エイブラハムが軽く咳払いをしてから、ヴィヴィオとコロナに講義を続ける。

「俺はゴーレムの真価は、人型を取っていても人ではない所だと思っている」

「??」

「…要するに、ギミックを付けることが、出来るってことさ」

首を捻るヴィヴィオとコロナに向かって言いながら、エイブラハムは自身の創成したゴーレムに命じた。

「ガイア。目標、正面20m。グレートドリル!!」

「なんやてー!」

「おおー!」

エイブラハムの命令に、はやてとヴィータが驚嘆の声と歓声をあげる。

ゴーレムは命令をうけて、手首の先を螺旋の溝が切られたドリルに変化させ、そのまま高速回転させる。

さらに、

「ファイア!!!」

エイブラハムの掛け声でゴーレムの腕がひじから切り離され、炎を吹き出しながら発射された。

発射された腕は20mほど先で、地面に当たり簡単に碎けた。そのまま煙幕となって消える。非殺傷設定を利用したエフェクト演出だ。

「なかなかの再現率！ええ仕事しとるな、アビー君」

「ブラヴオー!!」

「…ええつと…」

「ふんふん、なるほど…、いわゆる、ロケット・パンチか…」

キャツ、キャツとはしゃぐはやとヴィータの反応に、若干引き気味のヴィヴィオに対して、コ罗纳は何かを思いついたようで、うん、うんと頷いている。エイブラハムは、ゴーレムの創成が得意だというコ罗纳が、何かを掴んだかのようなリアクションをしたことで満足したようだ。一度だけ満足げに頷き、

「もう一つ、ゴーレムに込められた魔力を一気に開放することで、こういうこともできる」

言いながら、エイブラハムははやとヴィータに目配せをした。何だ、何だと、キョトンとする二人に構わずエイブラハムは続ける。

「銀河の悪を、叩いて砕くー!」

その一言で、はやとヴィータははつと気が付き、続けた、

「…くらって砕けろおお…ファイアアイナルう、クラー…ツシユ!!」

二人の声に合わせるかのように、ゴーレムの胸部がVの字に展開したかと思うと、ゴーレムの胸部から閃光が発射され、地面に当たると今度はドクロ型のきのこ雲を巻き起こす。

「見よ!!鋼の拳は、叫んで、咆えている!!」

「うう…。カナコちゃん、天国で幸せにね…。見事や、アビー君…、いや、おっしよーと呼ばせてもらっても?」

「む、まあ、いいだろう。入門を許可する」

「…」

はやてにヴィータ、エイブラハムのノリに、ついていけなくなった
ヴィヴィオが無言で困惑している。

と、ゴーレムが力を失って崩れ落ち、土くれに返ってゆく…。

「ああ、崩れちゃった!!」

「仕方ないんや、対消滅エンジンのエネルギーを使い果してもたん
や…」

サブカルチャーファン同士ののような会話を続ける二人を置いて、コ
ロナがゴーレムを評価する。

「うーん、稼働時間を縮めるような攻撃はちよつと…」

「ん、その辺の魔力の割り振りは、要工夫と言ったところだ」

「なるほど、あ…、うん、そうだ」

コロナの言葉を否定せず、エイブラハムが頷くと、コロナは何かを
思いついたようだ。納得したように頷く。

「あ、なにになに?どんな仕掛けを思いついたの!?!」

「んく、ふふ、まだ、ひ・み・つ!」

楽しそうに会話をするヴィヴィオとコロナを見て、気を良くしたエ
イブラハムは何の気なしに聞いた。

「学者型のヴィヴィオと、創成が得意なコロナか…、文系コンビって所
かな?」

「そういうのも好きだけど、体を動かすのも好きだよ。最近、ノー
ヴェにストライクアーツを習ってるんだ」

「え、ノーヴェって、ナカジマ3佐が引き取っていう娘か?…でも、エ
クササイズ…、だよな」

「わたしは、そうですね、ヴィヴィオは結構本格的ですよ」

「へ、へー」

だんだん、歯切れが悪くなっていくエイブラハムの態度に、ヴィ
ヴィオは不安になり、エイブラハムの袖を引いて耳打ちをする。

「あの、アナタさんは、わたしがストライクアーツを習うの反対ですか
?」

「いや、良いんだ。聞いていなかったから、ちよつと驚いただけだよ。体は動かせるに越したことはない。雫に負けないように、頑張れ！」
「うん！」

エイブラハムが微笑みながら返すと、ヴィヴィオは安心したようだ。なのはの兄の娘、ヴィヴィオにとっては従妹に当たる雫の名前も聞いて、笑顔を取り戻す。

「ほら、二人ともこのルーンライターは貸してあげるから、行動コマンドを試してみな……。俺はすこしヴィヴィオのママに話がある」

そう言つてエイブラハムは、子供たちから離れると、なのはに向かつて手招きをした。

36 チーターをなのは達と絡ませてみた5

「おい、なのは……」

「どうしたの？アナタ君」

焦った様子のエイブラハムに、なのはが何事かと近寄ると、エイブラハムが頭の痛い問題を抱えたように、なのはに尋ねた。

「ヴィヴィオがストライクアーツを始めたというのは本当か？」

なのはは何が問題なのか分からず小首を傾げる。

「元々スバルに基礎だけ教わっていたのを続けていて、自主練習していたのは知っているよね？」

「ああ、てつきりエクササイズだと、思っていたんだよ」

「最初はそうだったみたいだけど、ノーヴェに教わっているうちに、楽しくなってきたみたいだよ」

「楽しみを見つけるのは、別にいいことなんだけど……。格闘技を始めたこと、桃子さんに話していないだろう」

そこが問題だ。と、エイブラハムがなのはに指摘した。

なのはもあつと声を出して、同意する。

母（桃子）との電話やメールは、娘に友達が出来たとか、こんなことを言ってくれたとか、本当に平凡な母子の会話がほとんどで、何かの資格を取ったとか習い事を始めたなど、報告を忘れがちになる。

「そうだったかも！メールを送って……」

なのはが、思い出したかのように地球の通信端末を取り出すと、エイブラハムが慌てて止めた。

「いや、待て待て!!」

「どうしたの？」

なぜ止めるのか？と、問うなのはにエイブラハムは、少し遠回りの説明をした。

「恭也さんの所の下の双子いるだろ」

「晶ちゃんと蓮ちゃん？」

「ああ、あの二人も最近、御神流を始めたらしい……」

「うん、聞いている」

「この間、翠屋を尋ねたら、その話を桃子さんに聞かされてな。こう続けていたんだよ」

「う、うん」

不穏なものを感じたなのはが身構え、エイブラハムが顔を引きつらせて続けた。

「これで戦うことと関係を持っていないのは、わたしとヴィヴィオだけになっちゃったのよ。ヴィヴィオは司書の資格も取ったって言っていたし、剣とか武道とか攻撃魔法とかに興味ない、イイ感じの女の子に育ってくれそう。と、とてもニコニコしながら言っていたぞ」

地球に住んでいるなのはが家族は武術を修めている。なのはが魔導士して、争いごとや危険と隣り合わせの仕事を選んだ際にも、「そういうもの」として受け入れてくれるのも早かった。

しかし、武術とは無縁な母、桃子はそう言った感覚を共有できずに、一人で思い悩んでいたかもしれない。仲間外れ気分を味わっていた桃子は、武道や戦技を行っていない（あくまで桃子視点で）ヴィヴィオが高町家の子になったことで、戦うこととは無縁の者同士のシンパシーを感じていたのかもしれない。

「え、えっと、どうしよう…（すっごっく、言いにくくなっちゃった）」間違いなく桃子は、ヴィヴィオが格闘技を習うことについては、本人の意思を尊重して反対などしないと思う。ただ、少しだけ残念そうにする桃子の姿も簡単に想像できた。

「えーと、えーっと（想像したら、本当に言いにくい）」

自分が地球を飛び出すことを認めてくれた尊敬する大好きな母である。悲しい顔や肩を落す姿は見たくない。できればなるべくショックを与えずに、母に報告する方法はないかと、うめき声を上げるのは。

すると、エイブラハムがなのはの肩に手を置いた。なのははエイブラハムが妙案を思いついたのかと、顔を上げた。が、

「じゃ、桃子さんへの報告は頼んだぞ」

面倒な仕事を部下に押し付けるパワハラ上司のように、言うだけ言ってエイブラハムは去ろうとしたが、なのははその背中に組み付い

た。

「…放せ、なのは」

「アナタ君、お願い！見捨てないで!!」

エイブラハムがチラリとヴィヴィオ達の方を見ると、大人二人がもみ合っている姿にさすがに気が付いたいるようだ。心配そうにこちらの様子を伺っている。

なのはとエイブラハムはが、「なんでもない」と、誤魔化すと、ヴィヴィオとコロナは怪訝な顔をしながらも、ルーンライターの操作に興味を移した。

エイブラハムとなのはは、続きの会話を念話で行う。

『見捨てるも何も、普通に報告するしかないだろ!』

『だって、だって、そんなこと聞かされたら、すつごく言いにくいよ!』

『知るか!その辺の話は、家族の話だろ!どうかしてくれ!』

『酷いよ!話を持ってきたのは、アナタ君じゃない。無関係じゃないでしょ』

『そうは言ってもな!あ、君が管理局に入る時はどうだったんだ?』

『あの時は、そう、フェイトちゃんとはやてちゃんも一緒に入局するって話になって…、一緒に同じ道を進みたいなら…って、話をリンデイさんとしてたことが…』

『お、その手で行こう!!コロナの他にも、最近仲良くなり始めたって子いたよな』

『リオちゃんね!そ、そうだね、友達と楽しくエクササイズしているうちに…、って感じに…』

と、会話をしていると、エイブラハムがなのはを突然抱えて飛び退く。ほぼ同時に、

《Protection》

レイジングハートのオートガードが二人を包んだ。そこに、ゴーレムの拳が飛び込んできた。拳はエイブラハム達が先ほどまで立っていたところに落ち、派手に煙を上げながら四散した。テラスの床や家具も壊れていないのは、非殺傷・安全設定の賜物だろう…。

「ママ!!アナタさん!!」

「お二人とも、大丈夫ですか!!」

ヴィヴィオとコロナが声を上げ、駆け寄ってきた。

どうにも、ゴーレムの出力操作を失敗し、振り回された腕がすっぱ抜けて、テラスに向かって飛んで来てしまったようだ。

「ビックリしたー、うん、でも、大丈夫だよ。アナタ君も、平気？」
「問題ない。だが、気を付けろよ、いくら非殺傷設定とはいえ、痛いものは痛いからな」

言いながらエイブラハムは、ヴィヴィオ達が駆け寄って来る際に放り出したルーンライターを拾い上げると、ゴーレムのに入力された行動コマンドを確認した。

「うあ、なんだこれ？どんな理屈をこねたら、こんな魔法の組み方になるんだ？」

「ご、ごめんなさい・・・」

エイブラハムの言葉に謝ったのはヴィヴィオである。つまり、ゴーレムの操作を失敗したのもヴィヴィオと言うことである。

素直に謝罪するヴィヴィオに感心しながら、エイブラハムは言った。

「ヴィヴィオ、君の魔法のセンスはいい方だとは思うが、ゴーレムの様に繊細さが要求される魔法を、理論ではなく感覚で組んではいけない。どんな副作用がでるか分からないからな」

「はい、以後、気を付けます・・・」

ヴィヴィオが殊勝な態度を取る傍らで、なのはが気まずそうにそっぽを向いた。まるで、身に覚えがあるかのようだ。

フォローのつもりか、そこでコロナが提案する。

「あ、アビーさん。私、前に自分で組んだゴーレムの行動アルゴリズムがあるんです。試していいですか？」

「ん、見せてもらっていいかい？」

コロナが自分の端末から、プログラムソースを表示する。エイブラハムが確認すると基本に忠実な手堅い内容だった。

「ああ、これなら問題ない。試してみるといい」

「うう、こういう魔法はコロナには敵わないな」

「ふふ、どうでしょう?」

言いあいながら、再びゴーレム操作に挑戦し始める二人。子供たちを心配したフェイトが寄ってきて見守っているのです、今度は万が一、ゴーレムが暴走するようなことがあっても問題なさそうさだ。

他の大人たちもそう思ったようで、個々の雑談に戻っていく。

だが、視線を感じてエイブラハムが見れば、背の高く髪をセンターポニーにした女性がこちらを見ていた。女性、シグナムはエイブラハムにニヤリと笑いかけてから、視線をそらした。

「あーあ、おっしょー、完全にロックオンされたでえ」

その様子を見ていたはやてが、エイブラハムに寄ってきた。

「どういう意味だ、はやて?」

「咄嗟に飛んできたパンチを躲すような、いい動きなんてするから。バトルマニアを刺激してしもたんや。明日の模擬戦は要注意やで…」
ケツケツケツとはやては怪しく笑った後、エイブラハムの左頬に貼られた湿布を見た。

「しつかし、スバル達もヤルようになったなあ。シグナムかて、なのはちゃんのお兄さんと始めて打ち合った時には、対応しきれんかったんやけど…。昼間の模擬戦であの子達、おっしょーにイイの入れたんやろ?」

「…いや、これは模擬戦後、別件だ…」

聞いてきたはやてに対して、エイブラハムが口ごもりながら答える。

「ん? どういうことや?」

「あんたは海鳴出身だったな。ティアナとかいう…、あの執務官はアリスに性格が似ている…」

「ティアナにやられたん?」

「そうさ。後は自分で考えろ、あんたは捜査官だろ」

頭の上に疑問符を並べるはやてに対し、エイブラハムは話を打ち切った。

37 チーターをなのは達と絡ませてみた6

時間を戻して模擬戦終了後、なのはがスバル達のいる屋上に降りると、キツネに摘まれたような顔をしたスバルが、ぺたんと座ったまま言った。

「ま、負けちゃった」

「て、いうか、何なんですか？あの人？本当に人間ですか？」

スバルの言葉にティアナがつづく。ティアナにとって、強い人＝魔法の上手い人なので、魔法をほぼ使わずに、魔導士や騎士と渡り合う者がいるのが信じられない。

自身も魔法を使わない攻撃で、撃墜判定をもらったにも関わらず、何かしらのウイルスで、判定にズル（チート）されたと、思ってしまった自分がいる。

「戦闘能力者。わたしの実家では、アビー君ぐらい白兵戦が強い人を、そう呼ぶんだ」

「俺ぐらい強い…ね…。俺は美由紀さんに勝ち越したことないぞ」

なのはが説明をすると、エイブラハムが反論しながら、フリードから飛び降りる。

キャロもフリードを屋上に着地させると、一番辛そうにしているエリオを介抱し始めた。それを見たエイブラハムが言った。

「ああ、騎士の坊や、もう少し我慢してくれ…」

言った後、スバルに近寄る。

「下半身の力が入らず立てない。で、あっているか？」

「あ、はい」

戸惑いながら返事をするスバルの背中にエイブラハムが、手を置いた。

「わー！」

スバルが驚いてフィールドの出力を上げたが、

エイブラハムは気にせず、スバルの背を指でやわらかく触れた。

（あの柔らかさがクセモノだよね）

その様子を見たいたなのはが思った。

通常バリアジャケットを着た魔導師に、外部からダメージを伝えるには3つの方法がある。1つ目は最も一般的な方法、ジャケットのフィールドの防御力を越えた出力の攻撃をぶつける方法。この方法だと100の防御に200の攻撃をぶつけると、その差分の100がダメージになる。一番単純だが防御より攻撃が上回らないと、攻撃はすべてはじき返されてしまう。

2つ目はジャケットの防御設定にない物質で攻撃する方法。JS事件の地上本部襲撃際、戦闘機人が使用した新型のシビレ薬がこの方法に当たる。

3つ目はジャケットが反応しない弱い力を利用する方法。

バリアジャケットは光や音など、人体に影響のないほど弱い力は通過ぎてしまう。外部からの刺激をすべてはじき返してしまうと、術者の視覚や触覚といった五感を確保することはできないからだ。指で押された程度の力では、フィールドは必要な刺激として取り入れてしまう。エイブラハムはこのフィールドの性質を利用して点穴を仕掛けている。

「ほらよ」

「うわ、とと…、おお、た、立てる！」

エイブラハムがスバルの腕を引くと、フラつきながらもスバルが立ち上がる。

次にエイブラハムがエリオに近づき体の数か所を指で突いた。するとエリオの苦痛も和らいだようだ。

「打撃の衝撃で混乱した体を落ち着かせただけで、ダメージが抜けたわけではない。昼飯は軽いものにしたほうがいいな」

「…どうも」

返事をしながらも、エリオは少し残念そうにしている。

育ち盛りの上に、朝からの訓練でお腹を空かせた後で、節食を命じられるのは大食漢のエリオにはかなり辛いことのようにだ。

「すごい技術ですね。サイバー戦については、理論的に可能だろうと噂程度には聞いたことがありますけど…」

「いや、それより戦闘技術でしょう。ルーフェン武術界の拳仙と呼

ばれる人の中には、顔出しNGの人もあるって聞いたこともありません。もしかして…」

エリオを治療するエイブラハムの様子を見ていたティアナとスバルが言った。

「そんな上等なモノじゃない。まともな名前すらないぐらいの技だ」

「えー、勿体ない」

「この技は相手を制するための技じゃない。魔法をろくに使えない連中が、戦場で生き残るために編み出したもの。基本的に邪道の類なんだよ」

エイブラハムは皮肉気に顔を歪めると言った。

「それとも、お前たちは、だれか殺したい相手でもいるのか？」

突然の物騒な言い様に、スバル達がギョツとして首を振る。エイブラハムは満足げにニヤリと笑いうと続けた。

「なら、王道を学びな。俺と違って、才能と教師にめぐまれているのだから」

自分自身を卑下するような物言いを聞いたなのはが、ムツとした表情になり言った。

「またそんな言い方して、その技術でわたしと、ヴィヴィオを助けにくれたじゃない」

「どうだったかな…。まあ、管理局の相手は基本的に犯罪者やはぐれ者だろうからな。相手が使ってくる前提の模擬戦ぐらいには、役に立つかもな」

「もうっ！」

頑なな態度のエイブラハムに、なのはが口を尖らせた。

二人の会話を聞いて、ティアナには思い当たる話があった。

「なのはさん達を助けたって…、もしかして、次元航行船拿捕事件ですか？」

ティアナが言ったのは、新暦76年に起きた事件である。ロストロギアの不正使用を行った次元航行船が第97管理外世界で拿捕されたという事件で、初動対応したのが休暇中のなのはだった。と、発表されている。が、執務官や捜査官の中でも、全容がいまいち掴めない

まま、記憶の彼方に押しやられていつている事件だ。

「うん、まあね」

「あの事件って結局…」

「ああ、ええつと…」

「その事件は捜査中でありませう。高町1尉」

「にやはは…。だ、そうです」

「…」

なのはに釘をさすように、会話を遮るエイブラハム。ティアナは胡乱な目を二人に向けたが、調査中の事件の守秘義務も分かっていたので、それ以上は追及はしてこなかった。

少しだけ、気まづくなってしまうた空気を破るように、通信用の空間モニターが開いた。

「さー、みんな、お昼ですよー」

柔らかな声で昼食の準備が整ったことを知らせていたのは、ホテルアルピーノのオーナー、メガーヌである。

メガーヌは皆がバリアジャケット姿でいるのを見ると、あらまあと少し驚いた顔をした。

「まだ訓練中でした？もう終わるころだろうと思っていたのに…」

「え、まだ、終わってなかったの？こっちは我慢しているのに！」

メガーヌの脇から、メガーヌを色々小型化というか、幼くしたような女の子が空間モニターに顔を出した。メガーヌの娘、ルーテシアだ。

数年前までは置かれていた環境のせいで、感情を表に出せずに無口で大人しかったが、現在は母の元で本来の明るい性格が表に出てきている。

「ちよつと、ルーテシア！失礼よ、お客様に向かつて！」

「ああ、イイですよ。ルーテシアはお友達ですし…」

「もう、甘やかさないでください、なのはさん。こう言うことは他のお客様相手でも出るんですから」

娘を叱るメガーヌをなのはが宥めようとしたが、娘のイイ性格が最近表に出始めていることを把握しているメガーヌは厳しかった。

ルーテシアの方もこうなったら素直に謝った方が、身のためと思っ
たのか殊勝な態度を取った。

「はい…、失礼しました。お客様…」

しかし、後にあの子の悪だくみは洒落にならないと称されるルーテ
シアは、ニヤリと笑い続けた。

「でも、お客様方、急いだらうがよろしいと思いますよ。八神司令達が
到着していますし、ヴィヴィオとコロナはお腹と背中がくつついちゃ
いそうな顔をしていますから」

暗に急がないと昼食がなくなる。と、言っただけでルーテシアは空間モニ
ターを閉じてしまった。

エリオに負けず大食漢のスバルが慌てた。

「なのはさん！急ぎましょー！」

「ふふふ、そうだね。最近、ヴィヴィオもよく食べるようになったから
…」

スバルの声に、なのはが微笑みながら返し、バリアジャケットを解
除。トレーニングウェア姿に戻った。

それに習い、他の者たちも次々とバリアジャケットを解除したのだ
が、

「…ッ!!」

「ふえっ?」

ティアナとキヤロが驚きの声を上げた。皆が見れば、トレーニング
ウェアの二人の前に、ヒラリと布状の物がひるがえる。

ティアナはそれが地面に落ちる前、皆がそれが何か気が付く前に
引つ摺むと、背中を向けてしゃがみ込んだ。そのまま、ぶるぶると肩
を震わせ始めた。

キヤロはそれが地面に落ちるまで、キョトンと何が起こったか分か
らないといった顔をしていたが、それが地面に落ちた後、自分の下腹
部やヒップを触ってからひと言。

「スースーします」

キヤロの目の前に落ちたのは、可愛いデザインのローライズだっ
た。

「わっ！」

「…腰が冷えるぞ。…痛っ！」

それを見たエリオが慌ててそっぽを向き。いらぬ感想を漏らしたエイブラハムは、バチンとなのはの両手で目を隠された。

「ああ、もう、ほら、キャロ！すぐ履いて…、イイヤもう、しまつて、しまつて」

男二人の耳にそんなスバルの声が聞こえ、衣擦れのような音が聞こえたかと思うと、

「はい、もういいよ」

なのはの許しの声があがる。同時にエイブラハムの目からも、手が離される。

エイブラハムはヒリヒリと痛みの残る脛を擦りながら周りをみる。ティアナはしゃがみ込んで肩を震わしたままだった。キャロの上衣のポケットが、なんとなく膨らんでいるように見えるのは、気のせいではないと思うが、それを追及するほどエイブラハムも命知らずではなかった。

「ああつと、すまん。多分、最初のウイルスの副作用だろう。分解途中の衣服の組成がズレて、再構成の際の位置座標にバグが出たんじやないかな？」

エイブラハムは気まずそうに言った。それを聞いたエリオの想像力が働いてしまう。

（キャロとティアナさんは、同じミッド式でウイルスの効果が同じだった。つまり、ティアナさんも今、履いてなッ…。いや、なにを考えているんだ、ぼくは!!）

考えてしまった自身を責めるエリオ。

一方女性陣の方もエイブラハムの言葉には全く納得はできない様子で、

「ああ、なるほど…？」

「はあ…？」

「…」

「アナ…、アビー君…ッ」

ティアナは一度ピクリツと大きく肩を痙攣させるだけだったし、憮然としたなのは、フォーマル用の名前を呼んで、エイブラハムに非難する視線を向けた。

「…一応言っておくが…、意図してやったわけじゃないぞ…」

「…ッ！」

なのはの視線に耐えられなくなったエイブラハムが言い訳じみたことを言ったが、ティアナは今度は二度、肩を痙攣させただけだった。「…ダメだな、アリサが完全にへそを曲げた時と同じリアクションだ」「そういう時、どうしてるんですか…」

何故か少しだけ語気を強くして、なのはが言った。エイブラハムはなのはの態度に頬を引きつらせながら答える。

「とりあえず、一発もらうかな？それで、とりあえずは気が晴れるらしい…」

アリサの場合、キックだけど。と、言葉の外に続けるエイブラハム。皆の反応は素直だった。しゃがみ込んだままのティアナ以外が、ススツと、エイブラハムから距離を取る。

「…」

エイブラハムは、ため息を着いてから、覚悟を決める。ピシツと気を付けの姿勢を取る。

「よしー来いー！」

次の瞬間、勢いよく立ち上がったティアナが、拳を振りかぶる。その拳から少しはみ出した布の色を見たエイブラハムが、「情熱的な色だな」と思った瞬間、ティアナの右フックが頬を捕らえた。

38 ナカジマ・ジムより、新暦80年 Vividな春 上

新暦80年春、ナカジマ・ジム

ズドン!!

と、重たい音を立てて、シエエ・ローゼンのはめたパンチングミットが跳ね上げられた。手のひらからじんわりと伝わってきた痛みが目尻に涙が溜まるのと同時に悲鳴が漏れた。

「イッターー」

いつもなら、シエエが失態を見せると軽口を飛ばしてくるはずの相手、イエン・ランカイもその赤い瞳を点にしている。

ミットを跳ね上げるほどのパンチを放った相手は、初等科5年生の高町ヴィヴィオ。その細身で愛らしい外見とは、裏腹に鋭いキレのあるパンチだった。

ヴィヴィオは、戦技披露会のエキシビションにて、フリツカーを使用する新しいスタイルを見せたが、それが更に自分のモノになっている。

二人が思っていることはただ一つ。

(ヤバい、ヴィヴィオちゃん、また強くなってる…)

格闘技暦で言えば後輩の成長速度に二人が慄いていると、二人が習っている春光拳の総師範レイ・タンドラが、まさに好好爺といった顔で細い目を更に細くした。

「ほっ、ほっ、領域にだいぶ近づけているようじゃ。ヴィヴィオは、親と指導者にめぐまれてるのう」

言ってタンドラは、ヴィヴィオの指導者達に向き直った。

「いえ、周りのみんなが良くしてくれているだけで」

「あ、あたしも、まだまだだっていうか…」

なのはとノーヴェが拳仙の言葉に謙遜した。

「伝統的な我が春光拳とは、違うが良い鍛錬所じゃ。うむ、朝早くから

出向いたかいがあったの」

レイが立ち上げ間もないナカジマジムをぐるりと見回す。

幅広い世代が汗を流せるように。と、考えられたジムは近代的な運動器具が揃っており、普段ならD S A AのU15の王者、アインハルトの所属しているジムとして、賑わいを見せている。

しかし、今いるのは格闘技施設を使用している7人だけだ。

「そうでしょう、そうでしょう、なにしろ、チャンピオンが所属しているジムだからね！じーちゃんの道場も新しくしていかないと、追い抜かれちゃうかもよ〜」

そう言うのは、祖父と幼馴染の二人がミッドチルダに出てきていて若干テンションが高めのリオ・ウエズリーである。

「いいおったな、こいつめ」

レイが孫であるリオの額を指で軽く弾いた。

拳仙と讃えられるレイであるが、目に入れても痛くないほど孫が可愛い好好爺でもある。

今回は、普段孫が世話になっているノーヴェエが、ジムを立ち上げたとき。わざわざルーフェンから尋ねて来たのである。

春光拳道場の総師範が立ち上げ間もないジムを尋ねたとなると騒ぎが大きくなりすぎると、営業時間前の時間を選んだのだが、そこで、朝練に来ていたヴィヴィオと再会。そのまま、レイ自らがヴィヴィオに教えた『神眼』の鍛錬成果を見ることになった。そして、先の結果である。

孫が日常を過ごしている環境に満足したレイは言った。

「ノーヴェエ師範、孫も気に入っているようじゃ。改めてリオのことを、よろしくお願いします」

「いえ、こちらこそ」

拳仙の言葉に恐縮していくノーヴェエを微笑ましく見るなのは。

なのはは、出勤前にヴィヴィオの見送りと、ノーヴェエにジム立ち上げ祝いを言いに来ただけのつもりであった。が、娘がルーエンで世話になったレイと合えた幸運をよろこんだ。

（ノーヴェエとリオのおじいさんの関係は、わたしとファーン・コラード

先生の関係に近いのかな？)

そんなことを思っていると、胸元のレイジングハートが念話で通信の呼出を知らせてきた。

その相手はすぐ近くにいらしいが、ノーヴェとの直接の面識がないため、ジムに立ち入るのは遠慮したようだ。念話で用件だけ伝えると、念話を切ろうとする。

『あ、待って。ヴィヴィオも久しぶりに会いたがっているから…』

なのはは念話相手を引き留めると、ノーヴェに向き直る。

「ノーヴェ、もう一人、ここに連れてきてもいいかな」

「もう一人？まあ、なのはさんの知り合いなら、問題ないです」

「うん、ありがとう。ヴィヴィオ、ちよつと外すね」

そう言つて、なのはがジムから出ていった。

ジムの前には、中肉中背の目立たない顔立ちの男が立っていた。服装もビジネスカジュアルで街の中に溶け込んでいる。エイブラハムだ。なのはが案内し、格闘技スペースに向かう途中、ジムの設備を見回しエイブラハムが、なのはに向かつて口を開く、

「本格的な器具が揃っているが、収容人数が少なそうだな」

「出来たばかりのジムなんだよ。始まりはこれで十分だと思うよ」

「そうか？…エースオブエースに勝った、格闘競技選手がいるジムと聞いていたから、もっと大きな所を想像していた」

「…むう」

不満げな声を出したのは男、エイブラハムを小突いた。

「おっと、試合の後は笑っていたのに…、やっぱり、悔しがっていたのか…」

昨年度の話になるが、管理局主催で行われる戦技披露会にて、行われた高町親子対決は格闘技選手と空戦魔導師の戦いとして高い評価を受けている。しかも、その勝利者はまだ初等科4年生だったヴィヴィオである。なのはとしても、一人娘の成長を素直に喜んでいるのだが、現役の魔導師としては悔しさもある。

「娘相手に、大人げない」

「そう言う、アナタ君だって。冬休み、雫に一本取られたんじゃないか」

たの？すつごく、悔しがっていったって聞いたけど…」

家族に聞いた最近のエイブラハムの様子を使つて、なのはが反撃する。今度はエイブラハムが不満げな声を上げる番だった。

「あれはちよつとした事故だ。実戦だったらかすり傷だ」

「それはわたしも同じです」

などと言い合いをしていると、いつの間にか、格闘技スペースにたどり着いた。

二人の声を聞きつけたヴィヴィオがなのは達に振り向く。

「あ、アナタさん、お久しぶりです」

「おう、ヴィヴィオ、直接会うのは1年ぶりぐらいか？元気にしていたようだな」

ヴィヴィオが明るい声で挨拶をしながら駆け寄つてくると、エイブラハムはくしやつとした笑顔で返した。

「戦技披露会、見てくれましたか？」

「ああ、ずいぶん動けるようになったみたいだな。雫が試合してみたと言っていたぞ」

「えへへ、それはそれで、楽しみ」

などと、久しぶりに会う親戚のような会話をしていると、ノーヴェ達が近寄ってくる。

『ここからは、アビーで頼む』

念話でヴィヴィオに言うと、エイブラハムの顔からスツと笑顔が消える。

「始めまして、ナカジマ会長。私はエイブラハム・ハーヴェイ。営業時間外に申し訳ありません」

礼儀正しくあいさつしたエイブラハムだったが、愛想が見事にならない事務的な態度。

「ど、どうも、ノーヴェ・ナカジマです」

ノーヴェ自身もそこそこ人見知りをするタイプであるのだが、エイブラハムはノーヴェとの交友を拒絶し、ドライな関係性を求めているようである。

最近、格闘技関係でウェットな交友関係が増えていたため、不意打

ちを受けたようにノーヴェが戸惑っていると、なのはがエイブラハムの背を突きながら口を開いた。

「ええっと、エイブラハム君は教会とか、古代ベルカ王族の王権関係の調整の仕事の部署で働いているんだ」

「はあ…」

なのはの言葉に生返事をするノーヴェ。

ほかのみんながエイブラハムと自己紹介をしている間に、なのはは念話で続けた。

『アインハルトにヴィヴィオを引き合わせたのはノーヴェでしょ。エイブラハム君は、ヴィヴィオがベルカ王族関係者と交友を持つことを、余り快く思っていないの。ベルカ王族関係者のなかには、聖王として利用しようとする人もいるからって』

実際、聖王信仰者のなかには、ヴィヴィオとオリヴィエ聖王女を混同する者もいる。この時はただの一信者だったが、地位や権力を持つ者がそれを利用しようとするとは厄介なことになりかねない。

『あたしはーそんなつもりは!!』

『うん、それは分かっている。だから、直接見てもらおうと思つて。そうすれば、エイブラハム君は分かってくれるから』

なのはとノーヴェが会話をしている間に、ヴィヴィオがエイブラハムの手を引く。

「アビーさん、こっちに来て。わたしがノーヴェに教えてもらったストライクアーツを見せてあげる」

ヴィヴィオは「ノーヴェに教わった」を強調した。ヴィヴィオにも、エイブラハムがノーヴェに対して余り好意的ではないことが感じ取れたからだ。感謝している会長が友人に良く思われていないのは悲しい。ヴィヴィオなりにノーヴェの株を上げようとしての行為だった。

互いにバリアジャケット姿になったヴィヴィオとエイブラハムが対峙する。わざわざ変身までしたのは、自分の成長を見せたいヴィヴィオが希望したこと、防護服を着ていないとヴィヴィオが無意識に加減をしてしまうとエイブラハムが配慮したからだ。しかし、右目の傷跡は変身魔法で隠したままだ。普段、戦闘中なら少しでも魔法のリソースを増やすため変身魔法を解除するのだが、危険と隣り合わせの管理局員ならいざ知らず、ヴィヴィオの友人を驚かせるのも、いかなものかとエイブラハムが思ったようだ。

左のガードを下げたヒットマンスタイルのヴィヴィオに対して、エイブラハムは武器を持たずに半身で構えた。

ヴィヴィオがエイブラハムをしっかりと見据える。対してエイブラハムはあえて焦点を合わせず、相手の全体を見るような俯瞰した眼差し。ポーっとしてしているようにも見える目つきだったが、『神眼』を体得しつつあるヴィヴィオは、エイブラハムがそれと同等の極限の見切りを使っていることに気が付いた。

構えたきり、二人が動きを止める。エイブラハムは自分から動く気はなさそうだが、ヴィヴィオは明らかに攻めあぐねていた。何をしようとしても、あの目で何もかも見透かされているように感じる。

「……」

「……」

沈黙が敗れたのは、更に来訪者が現れた時だった。

入り口の扉が開き二人の娘が入ってくる。

「おはようございます」

「まいどー」

碧銀と黒、長髪をツインテールに結った二人の娘、アインハルトとジークリンデの挨拶が耳に届いた瞬間、ヴィヴィオが動いた。エイブラハムの意識の一部が二人の娘に取られたような気がしたからだ。

ヴィヴィオが鞭のようにしなるジャブ、フリツカーを放つ。しかし、軌道を読みづらいとされるそれをエイブラハムは片手で払いのけた。

それを見たりオが驚く。フリツカーとヴィヴィオの当て感の相性

は非常によく、D S A A の上位ランカーでも防ぐのは難しいはずなのに、エイブラハムはそれを容易に払いのける。

リオにとつては驚きだったが、ヴィヴィオに取つては想定内だった。エイブラハムの隙を作ろうと左を連打。数度の攻防の後、エイブラハムが払いの強さを変えた。ヴィヴィオの体が流れるようフリッカーを払うと、その隙を見逃さず抜き手を放った。点穴を狙うためだ。

この瞬間こそヴィヴィオの狙いだった。点穴は防御フィールドが反応しないように、敢えて弱く繰り出す技だ。どうしても、攻撃の速度も遅くなってしまう。

ヴィヴィオの集中力が一気に高まる。世界の全てが遅く感じるほど、全感覚の全開稼働『心眼』を使用しての…

アクセル・スマッシュ!!

最速の拳がエイブラハムに迫る。しかし、ヴィヴィオに拳打の感触が伝わることはなかった。

拳が捉えたと思つた瞬間、エイブラハムの姿がかすんで消え、伸びきった腕を掴まれる。と、同時に後ろから、ひかがみを蹴られ、膝カックンの要領で体制を崩された。

あつと思う間もなく、頸動脈にピタリと指を突きつけられた。

「ふえッ！」

「はい、終了だ」

実戦だったのなら、ヴィヴィオが致命的な一撃を貰っていたことは間違いない。

39 ナカジマ・ジムより、新暦80年 Vividな春

下

アインハルトが、ナカジマジムの格闘スペースに入ると最初に見えたのは、黒づくめの男とヴィヴィオが対峙している姿だった。

男はヴィヴィオのフリツカーを軽く払い。男が放った抜き手に合わせたカウンターを、恐ろしい反応と蛇のような柔軟な動きで躲すと、ヴィヴィオの死角について背後に回り込む。アサシンのような男の姿に薄れていた霸王「クラウド・G・S・イングヴァルト」の記憶がフラッシュバックする。

『あれは危険だ!!』

霸王が経験したベルカ平定戦争。その際対峙した放浪民族の暗兵。その者がオリヴィエを捕らえている。騎士甲冑を纏い身構えるが、それよりも、早く動いた者がいる。

黒髪をなびかせ、こちらも素早く武装した『リッド』がレイザーを付与した鉄腕で拳を繰り出す。

暗兵はこれにも反応した。素早くオリヴィエを突き倒すと。『リッド』に対して迎撃の構えを取る。「ニャー」

誰かの猫型補助制御デバイスが、魔法プログラムに対しての不正通信をしている。と、警告する。

暗兵が顔をわずかに横にそらして、『リッド』の拳を避けようとする。だが甘い。「黒のエミリア」の鉄腕はかするだけでも、相手の命を刈り取る。受けも紙一重の避けができないのも、鉄腕の恐ろしさ…。

きわどい所で『リッド』の拳を躲した暗兵だったが、レイザーの魔力が覆面を掠める。すると拳の勢いのまま、暗兵の覆面が引き裂かれた。覆面の下から変色した酷い傷跡のある顔が出てきた。しかし、暗兵は何の痛痒も感じていないかのように、『リッド』に掌底を放った。

(念話での魔法術式干渉！鉄腕の威力を落された！)

そう『クラウス』が判断した時、暗兵の掌底が『リッド』のコメカミを捉えた。『リッド』の体がビクツと痙攣したが、すぐさま体制を立て直す。両手には先ほどとは比べ物にならない魔力。「エミリアの神髄」の発動である。

だが、その隙を見逃すほど暗兵は甘くなかった。先ほどオリヴィエ相手に行ったように蛇のような動きで、『リッド』股の下を潜って背後に立った。恐ろしい柔軟さがあって初めてできる奇策のようなものだが、攻撃の空振り、視線誘導のフェイントと組み合わせられては、やられた相手からは消えたように見えるかもしれない。

「リッド！」

警告の声の前に、『リッド』は背後からの心臓に向かっての一撃を受け、今度こそ体を支える力を失う。

『リッド』を倒した暗兵は肘打ちの姿勢を取ったまま、動きを止めていた。

「霸王断空——ッ！」

『クラウス』が必殺の拳を放とうとした瞬間、懐に老人が潜り込んでいた。

背中から体を寄せ、霸王の踏み込み、膝の引きつけ、腰の切れ、肩の回転……。一撃に必要な主要な要素を全て封じられたかたちになっている。

「くッ！」

老人の技術に驚愕し、『クラウス』の口から声が漏れる。間合いを放そうと、足に力を入れたところで……。

「それ以上はいかんよ。ボウズ。アインハルトに体を返しておやり」

「——ッ！」

言われて、アインハルトが我に返った。飛び退くために力を入れていた足から、突然力が抜けたためバランスを崩して、無様に尻餅を着く。

「キャッ！」

尻の痛みに思わずアインハルトが悲鳴を上げた。

女の子らしい悲鳴と、体の動かし方が女性的になったアインハルトを見て、エイブラハムは構えを解いた。足元に倒れている黒髪の少女の呼吸が確かなことを確認すると、ヴィヴィオに手を差し伸べながら、愚痴をこぼす。

「まったく、これだから古代ベルカの王族ってのは……」

ヴィヴィオはエイブラハムの手で引き起こされながらも、状況が掴めずに目をぱちくりしている。

「アナ、アビーくん、ヴィヴィオ、大丈夫？」

エイブラハムに声を掛けたのはなのはだ。足元には魔法陣。エイブラハムが危ないところだったら、バインド系の魔法でジークリント達を拘束する用意ができていた。

「問題ない。変身の魔法はとけてしまったがな」

言いながらエイブラハムは右目の周りをなでた。右目の周りには火傷痕に似た酷い変色がある。戦いの時ならば、それはエイブラハムを迫力のある顔にしてくれるのだが、一般的な受けが悪いので変身の魔法で隠している。この変身魔法は使用していることを気づかせない隠匿性は高いのだが、外部からの刺激に弱かった。イレイザーを付与した拳が掠めただけで、術式ごと見事に崩壊してしまった。

「え、え、なんで？ジークさんがなんで、アナタさんを？アインハルトさんも？」

「俺ではなくて、古代ベルカ時代のツイゴイナーでも、殴るつもりだったんじゃないか？」

エイブラハムが口に乗せたのは、ベルカの歴史では敵役として登場する放浪民族である。聖王や霸王は輝かしい武勇を誇った英雄とされるが、それを向けられた側からすると、虐殺者であり暴君である。（しかし、当時の軽歩兵をモチーフにしたバリアジャケットに、『黒のエミリア』が反応した。て、ことは、『シュトゥラの霸王』を討つたのは、うちの民族だと言われているのは、あながち間違いではないのかな）

そして、現代では聖王の関係者と仲良くしている…。

エイブラハムは歴史的な皮肉を感じながら、ジークリンデに屈みこみ、指で数度突く。

「けほお、ほ」

点穴の要領で内力を循環を良くしてやると、ジークリンデが意識を取り戻した。キヨロキヨロと周りを見渡すと、最初に目に入ったのがエイブラハム（傷あり）。

「ッ!!ほんま、すんません!!!」

シュツバー!つと音を立ててジークリンデが額を床に擦りつけた。フワツとしたツインテールの彼女がやると謝罪の姿というより、ごめん寝のように見えてしまう。

「ウチ、ご先祖さまの一部の記憶を継承してまして、それで…」

「黒のエレミアだろ、さすがに知っているよ、有名人。そっちのアインハルト、チャンピオンもな。そっちは、霸王イングヴァルトだったか…」

二人とも先祖の記憶を受け継ぐ記憶継承者である。古代ベルカの王族が自分の知識や思考を何とか残そうとした技術なのだが、今の様に力を暴走させてしまうこともある。事情を初めて聞いた時のエイブラハムの感想も、子孫に取り付く古代の亡霊。で、古代ベルカの王族へ対する評価が下がった。

「それでも、とんでもないことを…」

ひたすら恐縮してジークリンデが、チラチラとエイブラハムの顔を見てくる。リオ達も似たような視線をエイブラハムに投げている。エイブラハムもそこで合点がいった。

「ああ、これ（顔の傷痕）は君のせいじゃないよ」

いいながら変身魔法をかけなおし、傷痕を消すと、ジークリンデもホッとしたようだ。

「己の肉体は、己の魂だけのものじゃ、過去の記憶にふりまわされているようでは、二人ともまだまだじゃな」

尻餅をついてしまったアインハルトを立たせながら、レイが言った。

「脳震盪と心臓打ち、脳は言うに及ばず、心臓はリンカーコアの傍で最も神経網のある臓器……。どちらも古代の王の記憶が取り付きやすい場所じゃな」

周囲に説明するように、エイブラハムがやったことを、レイが言葉にした。

そのおかげで、ヴィヴィオにも分かった。エイブラハムは、ジークの中で暴走している記憶に衝撃を与えることで、『エレミアの神髄』を解除させていた。

『神眼』と軟体の組み合わせ、そこを突く……。若いのによくできているのお……」

レイはニコニコと笑っているが、その声に上機嫌以外の何かが乗り始めた……。

「そう言う爺さんこそ、年の割には素早いな……。ヴィヴィオのカウンター。教えたのは爺さんか？」

「さあ、どうかのう……」

レイがヴィヴィオに『神眼』を会得させるために行った賭けは、かなり危険を伴うもので、ノーヴェエや孫たちにばれると、怒りを買うと分かっているレイは誤魔化した。

しかし、エイブラハムは続ける。

「……ヴィヴィオの年で出来るってことは、それなりの教え方（止める気のない攻撃）をしたってことだよな」

エイブラハムの声に隠す気のない不機嫌が乗ると、ヴィヴィオ達の肌が粟立つ。

ヴィヴィオ達は、エイブラハムとレイを別の姿に幻視する。

レイにはどこまでも広がる草原の中、久しぶりにじゃれつく相手を見つけて、上機嫌に啗う古龍を……。エイブラハムには、寒風吹きすさむ荒野に、不機嫌な顔をして佇む魔神をである。

ヴィヴィオ達はおろか、ノーヴェエすら二人の激突は避けられたいと、覚悟した時……。

「アビーくん、ダメだよ喧嘩なんかしちや」

横からひよいっと、現れた天使が二人を諫めた。

「この話は前にしたでしょ。格闘技の事はノーヴェに任せてるって…」

「いや、今回はノーヴェ先生のことでは…」

「問題がある技なら、ノーヴェが止めています」

「しかしだな…」

「自分は教えないって、公言しているのに、不満だけ言うのはずるいと思うな」

「ぬ…」

ズイツと、なのはに迫られて、エイブラハムの纏う雰囲気から強さが抜けていく。

（やれ、ああなつてはいくら焚き付けても、相手はしてもらえんのお）
実はエイブラハムが入ってきた時から、武道家として興味を持ったレイは、立ち合いを申し込むタイミングを図っていた。この年になつても、こと武道に関しては血気盛んである。

レイが小さく落胆していると、

「ジーちゃん、エイブラハムさんの言う『それなりの教え方』って、どういう方法なの？」

「え、大した方法ではないんじゃないが…」

リオが瞳のハイライトの消えた笑顔で聞いてきた。レイの妻を怒らせた時と同じ表情をするリオに、レイが思わず後ずさりすると、

「あたしも興味ありますね、レイ師範」

ノーヴェが背後に立っていた。

「確かに、先生方に任せられた方がいいな」

無双無敗の伝説の武術家が女性陣に袋叩きにされている姿に、なのはの主張が正しかったと、エイブラハムが一人納得していると、なのはが耳打ちをしてくる。

「アナタくん、そろそろ」

「ああ、そうだな。突然予定を変えてしまって申し訳ないが、聖王教会に向かう」

言いながらエイブラハムは、バリアジャケットを解除。普段着に戻った。

エイブラハムが答えると、なのはは愛娘に向き直る。

「ヴィヴィオ、今日、わたしは遅くなるかもしれないから、アイナさんに来てもらおうね」

「え、今日はいつもの時間に帰るんじゃないかなかった？」

「海鳴であったことで、予定変更」

「うん、分かった」

なのはとエイブラハムは、連れだって本局に向かう。

「ヴィヴィオ、大きくなったな、力がなくて悔しいって言っていた子とは、思えない」

「ふふ、そうだね。でも、もう、四年も経ったんだよ」

「そうだな。そして、後処理に掛かった時間でもある」

「時間がかかってゴメン。なんて、言わないでね。アナタくんが、ヴィヴィオが、高町ヴィヴィオでいるためにがんばってくれていたから、今、こうしていられるんだから…」

「…そうか」

目の前にいるなのはの顔を見ながら、エイブラハムは、4年前、モニター越しに見ていたなのはの姿を思い出した。

40 遠い昨日、新暦76年夏休み前のお話

新暦76年7月11日 AM1030

「い、いたい、いたいです、シャマル先生」

航空戦技教導隊第5班がある第01次元航行部隊隷下 クラナガン・ウエストランド港湾地区局に設けられた、医務室のベッドに横になったなのは小さく悲鳴を上げた。

J S 事件後、管理局体制の見直しと改革を急ぐ管理局であったが、同時に主戦力になるはずだった従来型のデバイスしかもたない魔導師部隊が A M F に対していかに脆弱であるか露呈してしまったため、その対策にも乗り出さなければならなかった。

その応急処置として、教導隊には各部隊から対 A M F 戦闘の訓練依頼が殺到。「戦術の切り札」と呼ばれる戦技教導官のなのはも休めぬ日々を送っていたが…。

夏期休暇目前にして、大魔力運用をすると全身に痛みが走るといった症状が出始めた。特に利き手の左腕の痛みがひどく、ブレイカー級の魔力はとも運用できそうにない。

なのはにとつてこの痛みは経験のある痛みで、昨年起こった J S 事件の際に無茶な魔力運用を行った時の痛みと同種のもだった。そこで、なのはは J S 事件の際部隊医官だったシャマルに来てもらい、検査をお願いした。

「ふう、やっぱり、痛みが悪化してしまっているわね」

触診をしながらつぶやいたシャマルはそのライトブラウンの瞳に涙を溜めた。そのせいでいつもなら柔らかな金髪のショートヘアを揺らし、ほんわかとしたおねーさんといった雰囲気も影を潜めている。

シャマルは、こちらに椅子を勧めるといくつかの間診をする。

「最大魔力値もさらに数%落ちてしまっているのね…」

「はい…」

「そう、やっぱり J S 事件のダメージが抜けきらなかったのよ。ごめんなさい、なのはちゃん。やっぱり無理矢理にでも、完全休養をさせ

るべきだったわ」

完全休養の話はJS事件が落ち着いたころ一度出た話だったが、なのは生徒達に伝えたいことがあると言って拒んだ。シャマルはこちらの意思を尊重し、見守っていてくれていたのだが、自分の判断を後悔しているようだ。

シャマルの悲しそうな顔を見たなのは一瞬だけ申し訳なさそうな顔をした後、相手を心配させまいとして笑顔を作った。

「でも、大丈夫です！ 教導期間中は魔力値が下がることもありませんけど、一日休めばJS事件後の状態までには戻っていましたから」

むん、と両手で拳を握って自分の健康をアピールするのはだったが、シャマルはため息をつくだけだった。

「…それは今はまだ若いから…多少の故障も、自然治癒でなんとかちゃうけど、…治療魔法といっても、万能じゃないんだから…本当に壊れちゃったら、もう治せないわよ…?」

シャマルは拗ねた表情になると、責めるように言ってきた。なのは空戦魔導師としての勘で危険を察知した時のように、なんだか落ちて着かない気分になる。

「…まして、なのはちゃんは武装隊なんだから、…ささいな故障でも、大騒ぎして連絡をくれたって、いいくらいなのに」

「…全く以て、その通りです…」
「もう…。…いつも、そうやって返事ばかりなんだから…」

「…いえ、誤解です…。…本当に、最近は調子がよかったです…」

なのはは必死に弁明を試みたが、シャマルはいつそう口を尖らせるだけだった。

「…教導が終わった後のシャワー中や、お家で寝ているときに痛みで悲鳴を上げるひとが…?」

「…え、え」と

言葉に詰まるのを見て、シャマルは再びため息をついた。

「…情報は、ちゃんとかんてるのよ…」

「…ヴィータちゃんとフェイトちゃんでしょうか?」

「さあ、どうかしら」

困るなのはの顔を見てシヤマルは少しだけ気が晴れたようだったが、本音も漏らしてきた。

「…元六課の関係者では、なのはちゃんが一番、医者にとってもひどい患者さんです」

「…」

「…医者の仕事は基本的に『手遅れ』なのに…。…危険信号を見つけているのに、きちんとした治療をさせてもらえないのは…結構、つらいのよ…」

「…すみません…」

「…ほんとに、事あるごとに、見せて欲しいのよ…」

「…すみません…」

最初の「…すみません…」には申し訳ない気持ち、次の「…すみません…」は柔らかな否定をのせると、シヤマルはその両方を受け取ってくれた。

シヤマルは泣き笑いのような顔をするとなのはをまつすぐ見つめ、コレだけは聞いてほしいと訴えた。

「今度とる夏期休暇では、絶対に完全休養を取ってね。お願いよ…」

「はい…。約束します」

シヤマルは少しだけ安心して微笑むと、話題を休日の予定に変えた。

「そういうえば、なのはちゃんは夏期休暇はどうする予定？」

「ヴィヴィオの学校の予定にあわせて、8月から取ることができそうです」

「そうなの？流石は教導隊。はやてちゃん達のお休みは不定期だから、休みは重なりそうもないわね」

「はやてちゃんもですか？フェイトちゃんも今回のお休みは合わなくて…」

「そうなの、ちよつと寂しいわね」

「ええ…。でも、折角なのでヴィヴィオのお披露目がかねて、海鳴でゆつくりしようかなって思ってます」

「まあ、それはいい案ね。」

ほんと手を叩いて、シャマルはなのはのプランに賛同すると、少し意地悪な顔をする。

「海鳴市なら、なのはちゃんが無茶なことできないでしょうし」

「にやはは…、しませんよ」

釘を刺されてなのはは苦笑いをした。その顔を見ていつもひどい患者に手を焼かされている医者は満足したようだった。

「ヴィヴィオにとっては始めての次元旅行になるのかしら？手続きとかは大丈夫？管理外世界に旅行となると手間が掛かりそうだけど」

「それは大丈夫でした。私が向こうの出身なので問題なく。ただ、生まれがちよつと特殊とゆうことで、今、追加の免疫検査を受けています。担当医は…」

「ああ、新しく聖王医療院から赴任してきた先生だったわね」

「はい、終わったら、海鳴市のみんなへのお土産選びです」

などと会話をしていると、レイジングハートがヴィヴィオからのメッセージを受け取ったと報告。ヴィヴィオも検査が終り、受付で待っているとのことだった。

「それじゃあ、シャマル先生。ありがとうございました」

言っただけなのはは立ち上がる。

「完全休養、忘れないでね」

「にやはは…」

背中から追いかけてきたシャマルの忠告に、なのはは苦笑いをした。

「重い荷物を捨てろー」

自分のことを父と呼ばせていた男の声が、そんなこと言ったような気がしたが、よく聞き取れない。

何しろ僕がいたのは揺れるトラックの中で、無理矢理に詰め込んだ家財道具がガタガタと騒音を立てていた上に、近くで爆発音が響いていたからだ。ただ、今でもはつきりを覚えているのは、人前では自分

のことを母と呼ばせていた女の行動だった。

「…わかったわ」

そういうと女は真っ先に僕を抱き上げた。

いつも思う。どうして、父と母の髪、目、肌の色は全く違う色をしているのだろうか？

荷台から放り出され、空を見上げながら、僕はそんなことを考えていた。

〈新暦76年7月11日 AM1053 対象N及び対象V 航空戦技教導隊 発〉

教導隊所属 1等空尉 高町なのはとその養子ヴィヴィオが航空戦技教導隊敷地内から出てくると、モニターの脇に自動的に監視対象のログが記録され、推測される移動ルートから次に対象が映るであろう公共のカメラが、自動で選択され映像を読み込み始めた。

画面が切り替わったことで、記憶の世界から今の世界に戻ってきた。

少々ノイズの入った映像が和気あいあいと歩く高町1尉達の姿を映し出す。二人のまさしく仲のいい娘と母、見ている者の顔をほころばせる光景である。

「走行中のトラックから放り投げる母もいれば、自分と血のつながりのない娘を愛情をもって育てる女もいる・・・か」

「おいおい、訓練兵。相手に情を移すと情報にベクトルがかかるぞ」
若い男が思わず呟いた声に、壮年の男の声が返した。

「それぐらい、知ってるさ。しかし、情報というものはそう言うものだから、歴史がそれを証明している」

「お、スクライアのワシに対して、歴史を語るか・・・」

「スクライア？あんだ、古代の遺跡堀がいやで、部族を飛び出したんじゃないかったのか？」

「歴史は好きさ。いま、起こっている歴史がな。一族の連中はなぜかそれが理解できんらしい」

憤懣やるかたないといった様子で壮年の男が、自分の部族に対する不満を返す。それを見て若い男は現状所属している組織の不満を口

にした。

「俺が理解できないのは、今回の仕事だね。対象を監視しろってだけなら、俺たちは必要ないだろ」

通信インフラの発達したクラナガンでは、何の警戒もしていない相手を追うのに殆ど人手は必要ない。AIに任せても十分な成果があげられる。男たちが不満を並べている間にも、AI達は黙々と監視のログを記録している。が、

「しかも、さつきから映像にノイズが入って鬱陶しい。クラナガンのインフラは次元世界一なんじゃなかったのか？」

「そう言えば、対象Vの受けてた検査に使われていた医療器具にもノイズが出ていたみたいだな。まあ、教会騎士団が行ってる対AMF通信実験の影響じゃないか？」

「なんで、たかだか宗教法人の私兵どもが、そんなことを出来ているんだよ」

「さあ、金と票を持っているからじゃないか？ま、この辺が管理局が批判されるところだよな」

壮年の男が肩を竦めてから続ける。

「だが、俺たちが必要な理由は分かる」

「へえ」

「翻訳魔法を介さずに、現地の言葉を使える人間が少ないからだ。通信環境がこちらと違う管理外世界では、結局マンパワーに頼ったりするからな」

「俺は英語の方が得意なんだが・・・」

「ああ、確か普及しているのはそっちの方が多いと聞いて必死に覚えたら。現地では日本語が主流だったってやつだな!!」

「うるせえー!」

前に話した失敗譚を笑われ、若い男が怒鳴り返す。が、すぐに仕事の顔に戻って聞いた。

「行くのは俺たちだけか？」

「いや、8課からも2名」

「元地上本部のクラナガン出身者達か・・・、どうも選民主義で好きに

なれん」

「そう言うな、それとこいつを連れて行けど・・・」

言いながら壮年の男が空間モニターに、小型肉食恐竜を模したようなロボットの画像を映し出す。

「L3S、陸戦魔導師サポートシステム（land sorcerer support system）。確かAMF対策用の小型魔力炉と燃料電池駆動の支援兵器だったか？一時期話題になってたのは覚えてるぞ。致命的欠陥がどうのこうので立ち消えになったやつだろ…。使えるのか？」

「その欠陥とやらは、地上本部のインヘリアルを推進するための工作だったらしいぞ。で、レジアス中将が居なくなったのこれ幸いと、反レジアス派が中将に止められていた予算を復活。先のJS事件で有用性が証明された戦闘機人とガジェットの連携を、魔導師とコイツでやろうってことで、倉庫の肥やしになっていた試作機が回ってきた」

「それこそ、教導隊様の仕事だと思いがね」

「まあ、イイじゃないか。最新機器を湯水のように使ってもいいと、言われているのだから」

「ハイハイ、それだけは金を持っているクライアントのいい所だな」

「それと、」

「まだあるのか？」

「お前のコードネームが決まった。今日からお前は・・・」

41 ヴィヴィオに、従妹出現!

久しぶりに先生の故郷に来たせいだろう、彼女と初めて会った時のことを思い出した。

「Hi, boy. Your mom? (ねえ、ぼうや。君のママは?)」

荒野をさまよい歩いていた僕に先生が初めてかけてくれた言葉だ。彼女は砂よけ用の帽子をかぶり、砂塵にさらされた白衣を着ていた。胸のIDカードにはNGOの医師であることが示されていた。

ミッドチルダ語の意味は分かっていたが、母のことは言いたくなかったので黙っていると、今度はベルカ語で、

「Darf ich mit Ihnen sprechen? (ちよつとお話しできるかな?)」

再び黙っていると、

「貴方、言葉分かる?」

聞いたことがない言葉を言った。思わず聞き返す。

「What is Anata? (アナタって、何?)」

ミッドチルダ語で聞くと、女は驚いた顔をした後、

「Anata is you in my home language (アナタは君よ、私の故郷の言葉で)」

『おい、何をしてるんだ』

突然、交代で対象を監視していた相棒から念話が入った。

『なについて、休憩中だ。交代時間まであと3時間は…』

懐かしい気分を邪魔されて、思わず右目の周りをなでながら返すと、相棒は焦ったように続けた。

『違う、すぐ側だ』

『しまった…』

新暦76年7月27日 AM1423

〈第97管理外世界「地球」極東地区「日本」海鳴市〉

「よーし、宿題今日の分は終りー！」

「いえーい！」

黒髪を短く切りそろえた少女が言うと、金髪で右目が緑・左目が赤の虹彩異色の少女が元気よく歓声をあげた。

二人とも出会って数日しか経っていなかったが、初めてできた従妹と言うことであつという間に仲良くなった。

黒髪の少女、月村雫がキビキビとした動きで問題集や参考書を片付けながら、従妹のヴィヴィオに言った。

「さあ、ヴィヴィオ、翠屋に行こう」

「うん、3時のおやつは、桃子ママのシュークリーム」

ヴィヴィオがその言葉を口にするると二人の顔が緩む。

焼きたてのサクサクのシュー皮、その香ばしさに包まれたたっぷり
のクリーム……。じゅるり、と、思い出しただけで出てきた唾液を、
二人そろって飲み込み、高町家なのはの部屋を飛び出す。

二人が階段を駆け下り、玄関に直行せずに縁側に向かう。縁側では
のんびりと麦茶を啜る雫の母、月村忍が庭で木刀を振るう二人の男を
眺めていた。男は高町士郎と、月村恭也だ。雫にとっては実の祖父と
父に当たる。

「あら、あなた達、宿題は終わったの？」

「うん！」

「バッチリです！」

「そう、じゃ、これから翠屋ね。携帯は忘れてないわね？何かあったら、すぐ連絡を入れなさい」

「うん、わかってるよ」

男たちも雫達が降りてきたことに気が付いていたようで、剣の訓練
の手を止め雫達に向き直っていた。

「父さん、士郎父さん。翠屋に行ってくるー」

「行ってきますー」

雫が手を振りながら言った。士郎まで父さんと呼ぶのは士郎の外
見が衰えず、お爺さんと呼ぶには違和感を覚えるからだ。

「楽しんできなさい」

「・・・車に気を付けろ」

ヴィヴィオも雫に続いて手を振ると、人好きのする笑顔で士郎が返し、そっけなく恭也が警めた。無愛想な恭也の態度だったが、情のない人ではないことはヴィヴィオも分かっていた。

「はーい」

二人は高町家を飛び出し、翠屋に走った。

「し、雫、ま、待って〜」

数分も走っていると、雫の後に続いて走っていたヴィヴィオが、あまり上手くない日本語で、悲鳴のような声を上げた。足を止めないまま雫が振り返ると、ヴィヴィオと差がずいぶん開いて離れてしまっていた。

（これはいけない。わたしの方が3ヶ月お姉ちゃんなんだから、ヴィヴィオちゃんに合わせてあげないと・・・）

そう考えた月村雫は速度を緩めて、従姉妹になったばかりのヴィヴィオを待った。ミニスカートにキャミソールのヴィヴィオが、サラサラした金髪を揺らしながら走り寄ってくるが、かなり息が上がってしまっている。ヴィヴィオは余力体力がある方ではないようだ。

夏の太陽は無遠慮に照りつけ、雫の体力もハイペースで削られていたが、

（わたしは3歳のころから鍛えている『みかみりゆう』の剣士。この程度でネを上げてはいけない）

と、見栄を張って、やせ我慢した。

「も〜、だらしないな。ヴィヴィオちゃんは」

「だって〜、結構走ったよ」

季節は夏。海鳴市はその名の通り海に面した町で、海からの風は心地よかったが、それでもわたしが着ている半袖のワンピースと黒髪の短髪は汗で湿っている。

なのは達との約束は、翠屋に15時集合。歩いて行っても何とか間に合うだろうと雫は考えた。

（お喋りしながら、ゆっくりと歩いていくのもいつか）

と、ヴィヴィオに気を取られ前方不注意になっていた雫は、曲がり

角の先にいた人物に気が付かなかった。

ドンツ!!ドンツ!

雫はその人物にぶつかり、後ろを走ってきたヴィヴィオに衝突されてサンドイツチにされる。

「むぎゅっ!」

「はわ!」

雫達は、すてん、と地面に尻餅をついて…、相手もよろめいて、近くの家の塀に左手をつく。

「!!!」

その人物、特徴のない容姿をした男が顔をしかめた。しかし、男はそれをすぐに消し、

「すみません、大丈夫ですか・・・?」

雫達に左手を差し出そうとして、思い直したように右手を差し出した。

「あなた」

「うううっ!」

雫が男の手に惹かれ立ち上がると、次はヴィヴィオの番。

「・・・?」

男がヴィヴィオを助け起こすとき、雫は男が少しだけ奇妙に口元を歪めたのを見た。なんだか、恭也（父）が意地悪をするときの表情に見える。後で聞いたら皮肉な表情と言うものらしい。

（なんだろ、このひと、ヴィヴィオの知り合い?）

ヴィヴィオも男の表情に気が付いたらしい。

「・・・えーと?どこかでお会いしましたっけ?」

「あー…、君、山田さんのところの娘さん…だよね?」

「…わたし、『高町』です……」

「…勘違いだったみたいだな…、失礼しました」

と、男が踵をめぐらす。

「あ…、ちよつと待って」

ヴィヴィオは男の腕を掴んで止める。

「…いつツた!」

男が苦痛の声を上げる。ヴィヴィオが思わず掴んだ男の左手のひらには僅かに血が滲んでいた。先ほど二人に衝突されよろめき、壁に手を着いた時に壁の金属部位で切ったのであろう。

「…はああーぐ、ごめんなさい」

「いや、イイよ。大したケガじゃない」

二人の反応で雫も男の怪我に気が付いたようだ。

「あ、怪我。ごめんなさい。さつき私たちがぶつかったときのですよね」

「ああ、でも、それも気にしないでいいよ。前方不注意はお互い様だ」
男は無事な右手で傷を扇いだ。左手の傷の血はすでに乾きつつある。

確かに大した傷ではなかったようだ。と、雫は思った。男の手の皮が、雫の父のようにぶ厚かったことも幸いだったようだ。

しかし、武道と縁のないヴィヴィオはそうだったことは分からないようだ。心配そうな顔のまま言った。

「えーと、えーと、こういう時は…：大人に助けてもらおうのが、一番確実…」

そう言つて、ヴィヴィオは名案を思いついたと手を打った。

「翠屋に行けば、ママが手当てしてくれるよ」

「あ、そうだね。確か救急箱ぐらいあつたはず…」

雫もヴィヴィオの提案に賛成したが、男は違つたようだ。

「その大人の中に、私も入れてほしいな…」

そう言つて懐の中からカーキ色で十字のマークがはいった布ケースを取り出す。ファーストエイドキットという小型の救急箱といえるしろものだ。そこから、消毒液と絆創膏を取り出し、ササッと手当てをしてしまう。

「ほら、もう大丈夫だろ」

絆創膏を張りながら男は言った。

男としては、放つておいても大丈夫と思つていた傷だった。が、子供に心配させたままにするのもどうかと思ひ、二人の目の前で手当てして見せたのだが、雫達はかえつて恐縮してしまつた。

「あの、本当にごめんなさい」

「ごめんなさい、手当ても出来ないで…」

「ああ…、えつと…」

シヨンボリとしてしまった二人を見て、男は二人がちやんとした詫びを入れようとしていることに気が付いた。右手で右半面に触れながら男が聞く。

「あー、そうだな。じゃあ、この辺で手土産になりそうな名物があれば教えてくれないか？女の人が喜びそうなやつ…」

男の提案に二人がパツと顔を輝かせ、二人そろって声をあげる。

「それなら!!」

42 翠屋にて…。上

あたしとすずかとなのはは小学校1年生からの友達同士。最初のきっかけはケンカから始まった間柄。

そのあと数年してその仲にフェイトとはやてが入ってきて、その新しい友達となのはが魔法の世界に行き、自分達の道に進み始めてから、かれこれ十年。

なのはが大怪我したり、フェイトが二度受験に失敗して落ち込んだりと、心配をしている間になのは達は結構重要な先生の役職になって、自分の生徒を連れて来たりと驚かされることが続いている。

そんなこんなで彼女達から目の離せない、あたし——アリサ・バニングスだったりします。

そして、最近また驚かされることがあった。なのはに娘が出来たのだ。聞いた直後は「父親は！」と騒いでしまったが、そういうことではなく。仕事で保護した女の子を母親として引き取ることにしたそうだ。

そして、この夏なのはは、長期休暇を利用してその娘を連れてきた。今日この翠屋に集まったのは、その子と私の顔合わせ。

「まったく、メールに『私に娘が出来ました』て書いてあった時は何事かと思ったわよ」

「そうだね。あたし達にはまだ彼氏も出来ないのに！ってアリサちゃんは大騒ぎだったね」

「あ、なによ、すずかだつて。メールを開いたまましばらく固まっていたじゃない。目をこくんなに大きくして」

「あ、ひど〜い。そんな顔してないよ」

あたしがメールを貰った直後のすずかの顔真似をしながら、その時の様子を面白おかしく話すとなのはを楽しそうに笑った。

騒ぎの発端は自分の送ったメールだというのにしようがない子だ。

「笑っているけど、なのは。あんたの説明不足が原因なんだからねっ！」

「え〜、ちゃんと説明したよ」

「足りてないわよ！もう、全然！」

叱つてやると、なのは唇を尖らせ反論した。

だが、すずかもあたしの意見に賛成のようだ。魔法世界でなのはと同棲しているフェイトの話を持ち出した。

「そういうえば、フェイトちゃん。春にもなのはちゃんの説明不足でアタフタしたって話してたよ」

「え、そうなの？」

「うん、魔法の…試合？で、自分だけ聞かされてなかったとか」

「あ、卒業式の。あれはたまたまだよ」

それだけじゃないわよ。と、思ったが、今はさっさと話を進めたい。

「どっちにしろ、今回の事はあんたの説明不足よ。」

「そうだね。てつきり、ユーノ君が責任を取る事態になったのかと思っただけど」

「え、ユーノくん。何か失敗したの？」

あ、心の底から言ったわね、この子。はあ、ま、幼馴染が必ず恋仲になるとは限らないんだけどさ。ここまで何もないとつまんないわよね。

「で、あの草食系男子はほっとくとして、なのは。あんたの娘は何処にいるのよ。紹介してくれるんでしょ」

厨房でも手伝っているのかしら？それとも、ウエイトレスとして登場？なのはの母——桃子さんが考えそうな話だ。

15時前人の入りが僅かに少なくなる時間帯の翠屋店内を見渡しながら、あたしが想像していると、なのはが申し訳なさそうに言った。「それがちよつと遅刻しているみたいで…」

「雫達、今日の午前中は士郎さんの実家で過ごして言ってたよね…」
実はまだヴィヴィオに会っていないのはあたしだけだ。なのは達がこちらに着いたばかりだったし、あたしの方も大学ゼミなんかで忙しかったからね。

ちなみにすずかの方は既に顔合わせを終えている。なにせ、すずかの姉の忍となのはの兄の恭也は夫婦だ。兄に顔を見せに行つた時に、一緒に会つたらしい。

…仲間外れにされたようで、ちよつと悔しい。

「ちよつと、ちよつと、なのはママの躰はどうなっているのよ」

「にやはは…、ごめんなさい」

謝るなのは腕組み寛大な心で許してやる。

「まあ、いいわ。先にどういった経緯で、その子を娘にすることにしたのか聞かせてちょうだい」

「うん」

聞くとなのは嬉しそうに娘のヴィヴィオとの、出会いの話を始めた。病院の庭での出会い。はじめてママと呼んでくれた時の事。犯罪者に連れ攫われ、ぶつかり合った残酷な現実。伝え会った想い。実にうれしそうに語る姿から、なのはがどれだけその子を思っているかが分かる。

（ああ、本当になのはは母親になったんだ…）

まだ、なのは自慢の娘に会っていないというのに、実感がわいてしまった。元々、意思が強くて優しい子だったけど、その優しさに何とか愛情とか母性といった芯が入った感じがする。

…えつと、何言っているんだろ、あたし。まあ、ともかく、あたしの友人は幸せそうだったこと。

「…いらつしやいませー…」

「いらつしやいましたー」

レジに立っているメガネの似合う美人のウエイトレス——美由希さんの声に入口を見ると、すずかの姪——雫と一緒に元気のよさそうな女の子が店の中に入ってきた。元気と意思の強さを示すような左右のことなる虹彩の瞳、ゴールドとベージュとの間くらいの金髪を長く伸ばした頭。メールに添付してあった写真の顔。

なるほど、この子がヴィヴィオか。

「来たね二人とも、でもちよつと遅刻かな？人を待たせるのはダメだよ」

「ごめんなさい、美由希さん」

「ゴメン、美由希姉さん。お客さんを連れてきたから、大目に見てよ」

「お客さん？」

「ごめんください」

声を聞いて美由希さんが振り向いた。店の入り口に特徴があまりない男が一人。いつもなら、すぐに対応するはずの美由希さんだったが、珍しく間を開けた。

すると男は両方の手のひらを見せるように上に向け、両肩をあげる。

「場違いな店に来た自覚はあるよ。でも、噂のクリーム・パフを2、3頼めないか？手土産用に…」

クリーム・パフ、英語圏でのシュークリームの呼び名ね。日本語も微妙にアクセントがおかしいし、日本人じゃないようね。

ともかく、注文を聞いて美由希さんが接客モードに入った。

「申し訳ございません。クリーム・パフは焼き上がりまで、少々お時間を…、15分ほど頂きますが、よろしいでしょうか」

「ああ、構わない」

男が頷くと手近なカウンター席に腰を掛ける。懐をまさぐりタバコを取り出したが、同時に灰皿がないことと、店内禁煙の表示に気が付いて、ため息をつきながらタバコのケースを懐に戻した。

美由希さんはすかさずメニューを手に取る。

「お待ちの間、こちらのコーヒーセットはいかがでしょうか？こちらのケーキは男性のかたでも…」

更に商品を勧める美由希さんの服を、雫が引いて止めた。なのはの元にもヴィヴィオが神秘的な面持ちでやってきた。

雫とヴィヴィオは一度顔を見合わせた後に、意を決したように口を開いた。

「実は…」

二人がいうには、男にぶつかり怪我をさせてしまったとのこと。聞いたのはは慌てて立ち上がり、ヴィヴィオと共に男に謝罪する。

「すみません、うちの子の不注意で…」

「…ッー」

男は一瞬眉を上げたが、

「いえ、私の方も、他のことに気を取られていたので…」

ペコリと頭を下げるのはに、男は手の平を向けて、恐縮しなくていいと示した。広げた手の平に絆創膏が見える。それが雫たちの言う怪我らしい。なのはも男の絆創膏に気が付いたらしい。視線がそこに向かう。

男が視線に気付き笑う。

「本当に大したことないんです。これだって、大袈裟なくらいですから…。それより、その子たちに怪我がなくてよかった。女の子に怪我をさせたとあつては、先生に何を言われるか分からない」

男は、まあ悪い奴ではないらしい。先ほども、一目で人種が違うと分かるのはとヴィヴィオの親子を訝しく思ったようだが、もう、気に入った様子も見せていない。

なのはも男の反応に安心したようで、もう一度頭を下げた。

なのはに続いて、わたしも友人の娘のフォローってわけじゃないけど、男に声を掛ける。

「あんた、この辺の人じゃないわよね。手土産ってことは、人をたずねるんでしょ？場所は分かるの？案内板は読める？」

日本語は会話することと、読み書きすることではまた別の難しさがある。今年は帰ってこなかった薄情な執務官とやらの友人が、昔、苦勞していたことを思い出し、お節介を焼いてみる。

「フジミダイというところですが…、案内板も最近じゃ英訳もついているから問題ないと思います」

「あ、それもそうね。フェイトは英語も出来なかったから、苦勞してたのよね」

「そう言うあなたも、この国の人には見えませんが、苦勞はしなかったと？」

「わたしがするわけないわ。同級生の中じゃ日本語も英語もトップだったもの！」

エツヘンと胸を張りながら答え、チラリと友人たちに視線を投げると、文系は平均点の上下をふらふらしていた二人は、娘と姪の耳を塞いでいた。成績優秀な母や叔母でいたいらしい。

二人が視線で抗議しながら、話題を変ええる。

「えっと、お詫びになりませんが、飲み物でもおごらせてください」

「外は暑いですから、このアイスコーヒーのセットがお勧めですよ」

「さすがはいつの間にか、メニユーを手に入っていた。二人とも実家の手伝いや、高校時代のアルバイト先として、この店で働いていただけあって、流れるような接客だった。」

「ああ、ここで断るのもかえって気を使わせるな…、じゃあ、お言葉に甘えて…」

「はい、アイスコーヒーセットをお一つ、こちらの席でお待ちください」

「それでは…」

男がカウンター席に戻り、注文を待ちながらスマートフォンを操作し始めたのを見て、わたし達も、ボックス席に戻る。

「ずいぶん、回り道をしたけど、ようやく本題に入れるわね。」

視線をなのはに投げて、自慢の娘を紹介するように催促する。

再び上機嫌の顔に戻ったのはは、愛娘を隣に座らせるとヴィヴィオとあたしを互いに紹介した。

「アリサちゃん、この子がヴィヴィオ。今年の春に正式にわたしの娘になりました。ヴィヴィオ、この人がアリサさん。フェイトママと同じでわたしの子供のころからの親友」

あたしを紹介されたヴィヴィオは、若干緊張した面持ちで、発音を微妙に間違えた挨拶をしてきた。

「高町ヴィヴィオです。えっと…はじめまして」

「アリサ・バニングスです。あなたのママとは、10年以上前から友達で今でも仲良しです。ヴィヴィオとも友達になりたいです」

「うん！わたしも！」

「パー！と花咲くようにヴィヴィオが笑う。」

「うん、いい笑顔だわ。ただ…」

「じゃあ、友達として警告してあげる。あなたのママはいい所はいっぱいあるけど、一度言い出したなら、絶対曲げずに徹底抗戦ってところは真似しない方がいいわよ。二代そろって突撃ロケットじゃ、見ているこつちがハラハラするから」

「…あーはい…」

ヴィヴィオはわたしの言ったことを一瞬考える素振りを見せたが、思い当たる節があったのかためらいがちなながら返事をした。

「突撃ロケットト…って、ヴィヴィオも、はいって言った!」

頭上に大きく「ガーン」と書き文字が見えそうな顔をして、なのはが不服申し立てをしようとしたが、

「…突撃ロケット、…ツッぷ」

わたしの的確な表現にさすがが吹き出したのを見て、なのはは涙目になりながら肩を落した。自覚はあつたらしい。

「子供ってのは、よく見ているもんなのよ」

とどめとばかりに言ってやると、雫が口を開いた。

「アリサさん、私にもいつつも言っているもんね。『すずかさんは、いい所はいっぱいあるけど、マッドなところは真似しない方がいいわよ』って」

それを聞いてさすが猫が獲物を狙うような顔をする。

「へー、それって、どんなところ?」

「な、何よ。わたしの車に、忍さんと共同開発した新機能を取り付けようとするのは、マッドでしょうが…」

この顔をした時のすずかは押しが強くなる。負けないように言い返したが、思わず身を引いてしまった。しかし、すずかはこちらの腕を引いて、身を寄せてくる。

「ううん、そこじゃなくて…」

「なによ…?」

「私となのはちゃんの『いっぱいあるいい所』って、どこのこと? 教えて?」

「…なっツッ!」

そんな恥ずかしい真似できるわけないじゃない!

顔が熱を帯びるのを自覚する。子供たちはキラキラと『ママと叔母が褒められるところを見たい』と言う顔をしているし、なのはは含みのある笑顔でニコニコと渡っている。

く、突撃ロケットトって言った仕返しね!

何とか、『面と向かって友達を褒める』と言う、恥ずかしい真似から逃れようと視線を巡らせると、カウンター席で呑気にコーヒーを啜っている男と目が合った。

43 翠屋にて…。下

「何見てるのよ」

「ああ、申し訳ない。あまりに、楽し気な会話が聞こえたものでね」
「それは、ど、う、も」

アリサが語気を強めたが、男は気にせず続けた。

「しかし、いいものをみせてもらった。…これが日本名物のツンデレと言うヤツか」

「違うわよー。だいたい、なにその名物!」

アリサが勢いよく立ち上がると、その弾みでテーブルの上のティーセットがガチャンと音を立てた。しかし、男は得心が行ったという顔をする。

「アア、そうやって男を罵るのが商売なんだな」

「違うっていつているでしょ!」

たまに大学で、「罵ってください」「蔑んでください」と、言い寄ってくる男どもから、「あたしはそんな趣味はしてないわよ!!!」と、逃げ回っているアリサは更に声を上げる。

そのまま、アリサが詰め寄ると、スツールから立ち上がりヒョイと避ける。

「おっと、私はくぎみー病ではないので、遠慮しておく」

言いながら、男は両手を上げて降参のポーズを取りながらレジの方を向いた。

男につられて、アリサも視線をレジに向ける。

「二人とも他にお客さんがいなくても、店内では暴れないでね」

アリサ達を注意しながら美由希は、金属製のシャープで伝票をトンと叩いている。結構怒らせてしまったのかもしれない。

「あ、ごめんなさい」

「私は巻き込まれただけですよ、店員さん」

「喧嘩は両成敗です」

「おお、怖い、怖い。美人で強い看板娘か…。店員さん、仕事の終り時間はいつですか?騒がしたワビといつては何ですが、食事に招待させて

…」

「ダメ。お誘いはうれしいけど、フリーじゃないので」

「あなたのためなら。カレシさんと殴り合うのもやぶさかではありませんが…」

「ダメ、そうになったら、赤星さんの味方をしちゃう」

「おや、残念。そうになると私に勝ち目がなくなってしまうな」

「あ、やっぱりわかるんですか?」

「腕に覚えがあるつもりだったんだけどな。私もまだまだだな」

男は美由希に興味を持ったのか言い寄ろうとしたが、美由希にあつさり振られる。

しかし、男は振られたにも関わらず、へらへらと美由希に愛想を振りまいている。よほど美由希のことが気に入ったらしい。

(しかし、腕に覚えがあるね…)

アリサには美由希達の武道や、なのは達の魔法のことはよく分からなかった。しかし、父のデビット曰く、鉄砲を持ったボディーガードを10人雇うなら、高町家の士郎、恭也、美由希の誰か一人に警護を頼んだ方が安心できると聞いていた。

アリサはすらりとした士郎さんや恭也さんもさることながら、美由希さんまでが大の男10人より頼りになるということは、ちよつと信じられなかった。しかし、父の人を見る目は確かである。

(まさかこいつも?)

アリサが改めて男を見ても…年の頃なら20前後、中肉中背の普通の男…というか特徴のない人と言った方が正確に思えた。少なくとも、強そうには見えない。

(強引に身体的特徴を上げるとしたら、ちよつと低めの鼻ぐらいだらうか?でもこれ長所じゃないわね。)

まじまじと男を見てしまったわたしの視線の意味を読み取ったのか、男は美由希さんに尋ねた。

「……店員さん、参考までに聞きますがどの位に見えますか?黒帯を貰えたりしますか?」

「うーん、そうだねー?」

美由希さんが小首を傾げ、男の頭から足までに視線を走らせる。

「私のやっているものに段位はないけど、師範代にはなれるんじゃないかな?」

「え、そんなに!?!」

聞いていたなのは感嘆の声を上げたが、正直言つてアリサにはあまりよくわからない。とりあえず、高校生ぐらいの時の美由希さんが、そう呼ばれていたような気がするので、師範と呼ばれる現在の美由希さんより、弱いという理解の仕方だった。

なあんだ。と、アリサは思ったのだが、

「おお、師範代!!」

雫が声を上げる。目をキラキラさせて、男と美由希さんの話に飛びついた。

「あのあの、わたし、小太刀二刀御神流の月村雫と申します。あなたは何という流派なんでしょうか?」

「え、流派か。あー、そうだな。私がやっているのは、この国で言うところの忍術みたいなもので、答えてはいけない。と、言う教えなんだ」「忍術!!忍術、忍術なんですか!?!」

雫は両親の仕事の関係上、ドイツで過ごしている時間も多し。あちらでも、サムライやニンジャは人気のコンテンツらしいので、雫も憧れみたいなものを持っているのかもしれない。

アリサやすずかから見たら、美由希たちが手裏剣みたいなモノを投げる姿を見たことがあるので、似たようなものじゃないかと思つた。が、雫は違うものと認識しているらしい。

男はちよつと困つたように目を引き寄せたが、強く否定することもないと思つたのか、

「ああ、うん、そう、私は忍者のエイブラハム・ハーヴェイ、つてことで」

と、名乗つた。

「忍者が名乗つてどうするのよ」

「え、そうなの? 漫画でシナチクは名乗つてたじゃないか」

アリサが思わずツツコミを入れると、男…、いや、エイブラハムは

サブカルチャーの人気キャラクター『SYNACHIK―シナチク―』を喩にだして返してきた。どうもこの人は間違った日本観を持っているようだ。

しかし、この漫画中の忍者は、幼い雫には丁度良い喩だったようだ。「エイブラハムさんは上忍ですか。中忍ですか？」

「うーん、どうだろう？中忍ってことはないと思うけど、鹿驚先生よりは弱いかもしれないな」

「おお、と、言うことは…、美由希さんは火影レベル」

雫の疑問に、エイブラハムが答えると、雫は得心が行ったと頷き。エイブラハムがそれに乗っかる。

「なるほど、そうなるのか。もう、店員さん、なんて呼べないな。店員様と、お呼びした方がよろしいでしょうか？」

「もう、お客さん。からかわないでください!!」

調子に乗るエイブラハムを美由希が少し大きな声で叱った時だった。

「あら、なにになに、ずいぶん、賑やかな声がきこえるわね。桃子さんも、混ぜてくれない」

そんなことを言いながら桃子が厨房の方からやってきた。手にはシヨーケース用トレイにいっぱい並べられたシュークリーム。翠屋名物が焼き上がったようだ。

「さて、そろそろ、失礼するかな」

シュークリームの焼き上がりを待っていたエイブラハムが、手付かずだったチーズタルトを口の中に放り込む。途端、

「…ッ!!…ほおおお…」

目を丸くしたエイブラハムが感嘆の吐息を上げていた。

「気になっていただけましたか？」

「…いや、凄いです…、驚いた」

桃子がシュークリームを持ち帰り用の容器に入れながら尋ねると、笑いじわができるほどくしゃつとした笑顔で、エイブラハムが称賛した。桃子もその賛辞を笑顔で受け止めている。高町家の面々もニコニコと嬉しそうにしている。

エイブラハムは桃子にありつけたけの褒め言葉を言った後、シューク
リームを受け取り、なのは達のいるボックス席に振り向く。

いや、エイブラハムの視線は雫とヴィヴィオに向けられている。

「雫と…、山田？」

「高町!!高町ヴィヴィオ!!!」

エイブラハムが言うと、ヴィヴィオがムキになって言い返した。

なのは達はヴィヴィオがムキになった理由が分からずキョトンと
していたが、エイブラハムは笑みを浮かべた。

「…フフ、二人とも、外に出るときは、誰かにぶつからないように…気
を付けて」

「…あう、…そうします…」

エイブラハムの言葉に、二人が息の合ったりアクションをして。エ
イブラハムが悪戯が成功したような笑みを浮かべる。

(…笑うと、愛嬌のある顔になるわね。イタズラ好きっぽいけど…。)

なのはがエイブラハムに挨拶をする。

「ホントに娘がすみませんでした」

「いや、こちらこそ。それに、いい店を紹介してもらった。それじゃ
…」

エイブラハムは翠屋をあとにした。

その後、なのは達はおしゃべりで盛り上がって、男のことは記憶の
奥に押しやられていった。

44 海鳴市の夜Ⅰ

女に連れていかれた、難民キャンプでは、女は先生と呼ばれていた。難民キャンプで身よりのない子供達の世話は、別のNGOスタッフが担当していたが、当然、人数が足りるわけではなかった。

僕はスタツフの目を盗んでは抜け出し、手伝いと称して先生に会いに行った。今思えば邪魔にしかならない僕を先生は受け入れ、簡単な雑務を与えてくれた。そして、話をした。僕のこと、先生のこと…。「先生はなんで、地球からここに来たの？」

「そうね…、ヤタがいなくなってしまうたからかな…？」

「ヤタ？」

「それに、ビリビリ、得意だったのよ」

「ビリビリ？」

先生はそう言うと、ピースサインを作る。指の間はバチバチっと火花放電が起こった。

「おい、仕事だ」

昼間に起こった出来事につられて、昔のことを思い出していると、相棒の声で今に引き戻された。仕事熱心なことだ。と、皮肉を考えてから答えた。

「状況を説明しろ」

いつもの夜間訓練の後、恭也と分かれ士郎と帰宅の途に付いていた美由希はフツと気配を感じて空を見上げた。

眼鏡の位置を直しながら目を凝らすが見当たらない。

「どうしたんだ？美由希？」

「うん、ちよつと…」

士郎は気が付いていないようだ。

(気のせい？…いや。)

御神流『心』

目を頼らず周囲の状況を知る御神流の技術で探る。すると確かに

何処かの家の屋根が軋む音がする。

(動いた！左方向、距離50m！)

月明かりの中、透明な何かが蠢いている。何かは跳躍し隣の家の屋根に跳び移りながら移動している。

(ジャンプする前の僅かな振動。なのは達が魔法を使う時に似ている。魔法を使う人…?)

以前、妹のなのはが訓練をしているところを見学させてもらったが、その時に感じた魔法を使う気配によく似ていた。

「父さん、あつちに魔法を使う人！」

「…なるほど、確かに…」

意識を集中して士郎も、何とか気配を捉えたようだ。しかし、そうこうしているうちに距離がずいぶん離れてしまった。

「あつちは家の方角…、なのはの知り合いかな？」

美由希はなのはに確認するのを躊躇った。

(なのは、この時間ならもう寝ているね…)

もともと、なのはは体を休めるために帰郷している。聞いたとしてもなのはが知っているとは限らないし、移動している方向が偶然家の方向に向かっているだけで、魔導師と家は全く無関係かもしれない。

魔法関係の知人——ハラオウン家に連絡するのも深夜ということに遠慮した。

(なのはには、できるだけゆっくりと休養させてあげたい)

それが美由希の本音だった。しかし、要人のSPとして働いていた士郎は違った。

「いや、それはおかしい。なのはの知り合いならこんな時間に姿を消して尋ねてくるとは思えない」

士郎が携帯電話を取り出しながら言った。

「行きなさい、美由希。もう父さんじゃ追い付けない。なのはには父さんが確認する」

「…わかった」

美由希は肩に掛けた凶面ケースの重さを確かめる。中身が凶面ではあり得ないしっかりとした重量を感じる。

「気付かれない距離を保って後を追う。何もなければ、そのままやり過ぐす」

言いながら美由希が眼鏡を外す。士郎が頷くと美由希の体が夜の街に舞った。

「もう、恭也にも美由希にも、勝てないだろうな…」

美由希の背中を見ながら士郎が呟き、電話を掛ける。

「あら、あなた？どうしたの？」

電話に出た最愛の妻の声は、残念ながらノイズ混じりだった。

この辺境の原始人達にも街灯を作るだけの知恵はあったようだが、ミッドチルダの夜景に比べてこの町の灯のなんと貧相なことか…。

『つまらん町だ。戦艦の砲撃で消滅させてしまえば手っ取り早いだろう』

『ごねるな。管理外世界には可能な限り不干渉が管理局の方針だろ』

思わず本音を口にする、遙か上空の小型次元船からこちらを管制している相棒が得意の正論を言ってきた。

『その方針のおかげで、魔力素の存在すら理解できない猿人共に合わせて、質量兵器でのピンポイント攻撃だぜ。バカバカしい』

『魔法文化がない世界は、この方法が一番騒ぎにならない。不破という家系も爆弾で滅ぼされているし、同じ相手に犯行を擦り付けてやることも可能だ』

『慈悲深いね親と同じ死に方をさせてやるわけか。情報工作は？』

『問題ない。ただ、元アースラクルー達が管理しているサーチャーにだけは気をつけろ』

海鳴市には、機動六課が解決したロストログア逃走事件の際、設置されたサーチャーが耐久実験のため回収されずに稼働していた。

『了解。この世界の技術程度では、管理世界の存在を知ることすら不可能だったな』

『そうでもない。この世界の著書には管理局のことを書いているもの

もあるぞ』

『ああんっ!?!』

思わず声を荒げる。管理世界は、この世界の科学技術より百年近く先を行っている。彼らの技術を誤魔化す方法などいくらでもあるはずだった。

こちらの反応に気をよくした相棒が、得意げな声で続ける。

『管理局の創設期、管理局の次元航行部隊は、各世界に無翼機を飛ばしまくって文化や文明レベルを徹底的に調査した。その時、偶然にも無翼機を目撃した現地人は、無翼機をUFOと呼び研究し始めたそう
だ』

『つまり俺たちは超常現象のたぐいつてか?』

『いや、どちらかというトインベーター』

『はっ！侵略者かいいいじゃねえか！それらしく、壊滅させてやればいいだろ』

繰り返すと相棒は呆れたようだった。ため息を付いて仕事に戻るように促してきた。

『わかった、わかった、不満なのは、わかったから、仕事に戻ってくれ。プロだろ、給料を払ってくれる相手のオーダーには答えろ』
『へ、しかたねえ。給料には義理立てしてやるか』

美由希は一定の距離を保ったまま、相手の死角を縫うように移動する。相手は真っ直ぐ高町家の方向に向かっている。追跡をまくため
の攪乱や陽動の様子も見せない。

相手はこちらに気が付いていないようだ。

もちろん美由希も可能な限り、気配を消し、静かに後を追っているが、着ている服は単なるトレーニングウェアと普通の服でしかない。魔導師が本気で索敵を行えば、位置ぐらいは簡単に特定されてしまうだろう。つまり、魔導師は透明になる魔法を使うことで、気付かれることはない
と油断してしまっている。最も無防備になる跳脚後の着地においても、静粛さに欠け隙だらけだ。

なのはが撃墜された時がそうであったように、どんなに強い力や高い技術を持っていても、それを扱う人の不調や油断によって、それらも無価値になってしまう。

(姿を隠せるといっても、存在が無くなるわけではないのに……。油断というより、高慢さ……。強い武器を持って自分が強いと勘違いした新兵つて、母さん(美沙斗)なら言いそうだね……)

魔導師は高町家から約1km地点の民家の屋根で止まった。透明なままなので確かめようがなかったが、進行方向から向きを変えた気配はなかったので、魔導師は家の方角を向いている。

ポケットの中の携帯がブルつと震える。魔導師から視線を切らないように、携帯を確認しようとすると、

魔導師から首筋が粟立つ気配！

(これは殺気！方法は分からないけど攻撃を仕掛けようとしている?!)

間違いなく魔導師は暗く熱い殺気を高町家の方向に放っている。

(止めなきゃ！)

目標にしていた民家の屋根に跳び移ると、着地の衝撃でドスンと大きな音がしたが気にする必要はない。

今深夜で家の者も深い眠りにについている。そうそう起き出すことはないだろうし、民家の住人が外に出て、屋根の上を見上げたとしても魔法による光学迷彩で、こちらの姿を確認することなど不可能だ。

すぐに通信を送る。

『目標ポイント到着。誘導信号、送信準備完了』

可能な限り管理外世界に不干渉を守るため、今回の作戦ではわざわざこの世界と同じ規格の質量兵器が小型次元船に装備されていた。一体どうやって用意したのかは知らなかったし、知る必要もないと考え、気にすることはしなかった。

とにかく、この地点から赤外線レーザーを目標に当ててやれば、そこに向かって炸薬の詰まった質量弾が飛んでくるらしい。

『こちらも受信準備完了だ。やってくれ』

『送信開始』

短杖を構えて昔ながらの赤外線レーザーを発射する。もちろん、肉眼では確認することなど不可能だったが、ヘットマウントディスプレイは、赤外線レーザーが目標の家屋に当り、反射して円錐状に広がっていることを教えた。

小型次元船が質量弾を発射し、このまま数分たてば目標の家屋など跡形もなく吹き飛んでしまうだろう。あの民家にいる高ランク魔導師も、完全な不意打ちには対応できない筈だった。

「貴女は誰！なにをしているんですか！」

背後からの突然の誰何に体を強張らせる。一呼吸遅れて何者かがこちらの真後ろに立ち、こちらを認識していることをデバイスが無機質に伝えてきた。

(女の声！エース・オブ・エースは気が付いていた!?)

思考を否定するように、相棒の狼狽した声が通信で届く。

『馬鹿な！一瞬で10m以上移動した!?!その現地人、魔導師じゃないぞ!』

相棒の言葉を聞いて、頭に血が上った。

(無知で野蛮な原住民に背後を取られただと！ふざけやがって！)

45 海鳴市の夜Ⅱ

声をかけた瞬間、鋭い殺気。僅かな振動。

透明人間が振り返るのを待たず、回り込むようにステップ！

光の礫がたった今まで美由希がいた空間を通り過ぎ、背後に設置されていたパラボナアンテナを穿つ。まるでライフル弾だ。殺気に攻撃、是非もない。

既に相手の横手に回り込んでいた美由希は、凶面ケースのベルトを引き、透明な相手の後頭部辺りに叩き付けた。

2本の小太刀が入ったそれは、遠心力により警棒で殴り付けた位の衝撃がある。普通の人間なら悶絶している所だったが、ベルト越しに伝わってきたのは鈍い衝撃。なのは達がフィールドと呼ぶ防御に阻まれた。防御との激突でケースは壊れ、小太刀が飛び出し宙を舞う。再び、僅かな振動。

2発目の攻撃を避けながら、美由希は腕を捻る。敵の3発目に合わせて、何も無い空間に向かって叩きつけるように腕を振った。御神流の鋼糸が相手に巻きついた。鋼糸、特殊な繊維にごく微細な鉄粉を焼き付けた糸によって、相手は大きくバランスを崩して狙いを外した。今！

脱力からの鋭い前蹴りを放つ！

御神流 『徹』

衝撃が相手の防御を飛び越えて、直接相手の体内で炸裂する。

平均的な体格の格闘家が放つキックは900 kg程の威力がある。人間のアバラ骨など簡単に叩き折ってしまう威力だ。体格で劣る美由希だったが脚力は男性格闘家のそれを上回る。

確かな、手ごたえ！

相手は体をくの字に曲げ膝を付いた。カラン、と音を立てて短杖が転がり、相手が姿を晒す。相手の姿は一言でいえば、ハリウツド忍者という出で立ちだった。全身を覆うピツタリとした戦闘服。ヘツドマウントディスプレイの様なゴーグルと目だし帽で顔は見えない。

美由希が更に腕を振ると、屋根に落ちた小太刀が鋼糸に引かれ、弾

かれるように美由希の手の中に収まった。

美由希が体得している技——御神流は競技としての武道ではなく、実戦を戦う戦士としての武術。その中には、ワイヤーの様な暗器の扱いや、表面を傷つけず衝撃で物の内部だけに破壊を引き起こす『徹』と呼ばれる技術もある。それらを駆使できる限定的な戦闘ならば、御神の剣士は魔導師に決して劣らない。

2本の小太刀のうち1本を抜き、構える。

「両手を上げたまま、武装を解いて。下手に動くとは折れたアバラが肺に刺さりますよ」

〈…原始人が！〉

相手がフットフォルスターの拳銃に手を伸ばす。

突き！

刀がフィールドを突き破り、相手の右肘を砕いた。刀を引き抜き、更に峰で左鎖骨を打つ。小さな衝撃と共に、相手の左腕が力を失う。

美由希が冷酷なのではない。相手を傷つけることに対する躊躇は、家族に向けられた殺気に対する怒りと、殺害を目的とした攻撃を受けたことでの恐怖で一時的に消え去っていた。

〈ぐっ！がっ…、…フィールドを…〉

魔導師の口から洩れた言葉は、美由希には分からない言葉だったが、相手は御神流の威力に驚愕しているらしい。

それはそうだろう。魔導師のフィールドは原始的な武器ではまず破ることが出来ない。だが、御神流は防弾ガラスさえ一撃で破る威力があり、受動的な強化していないフィールドで防御出来るほど、甘い術法ではなかった。

美由希は血の付いた切っ先を、一度相手に突き付けてから口を開いた。

「最後の忠告です。武装を解いて…。なぜ…、うちを襲おうとしていたの？」

構えながら美由希は覚悟を決めた。

いくら御神流といえども、戦車装甲並みのバリアを張ることが出来、それを突き破る攻撃ができる魔導師を相手に、不殺で制すること

など不可能だ。

これ以上抵抗されるなら、殺すしか手段がなくなってしまう。

〈く…〉

魔導師がうめき声を上げた瞬間、別方向からの敵意！

咄嗟に背後に跳ぶと、美由希と魔導師の間を割るように降り注いだ透明な礫が屋根に当たって弾けた。

敵意を感じた方向から、音もなく新たな魔導師が拳銃を構えたまま現れ。美由希の前に立ちふさがった。

先程までの魔導師と同じ姿。違う点は脇の下にナイフ類を吊っていることくらい、いずれにしても仲間なのだろう。

仲間の出現を好機と見た短杖の魔導師から僅かな振動。いや、先程の礫とは違い振動が大きい。

（攻撃するつもりなら、加減できない！）

美由希がそう判断した瞬間、美由希の中の枷が外れた。

極端な集中による感覚時間の引き延ばしを行い、肉体のリミッターを外す、御神流・奥義の歩法『神速』。

未だこの動きに初見で対応できた魔導師に、美由希は出会ったことがなかった。なのはの友達——八神はやてに仕える騎士と呼ばれる魔法戦士達ですらそうだった。

（神速の爆発的な加速によって、新たな魔導師の脇を抜け、短杖の魔導師に止めを刺す）

周りの景色が色を失い、心臓の鼓動さえも、ゆっくり動いているように感じる。

美由希を取り巻く全てがスローモーションに…、ならない！

2人目の魔導師がセピア色の世界の中、美由希を阻止しようと迫ってくる！

ガギインツ！！

火花を散らして刃が銃身で弾かれた。横合いからの力に、体が流れ、勢いが殺される。

「！！」

新たな忍者からの大型ナイフでの一撃を、美由希は受け流し、2合、

3合と打ち合う。

打ち合って分かったが、速さはこちらが上だ。だが、相手は見切りの早さと、小太刀よりさらに小回りの利くナイフで食い下がる。さらに相手のナイフは何か細工がしてあるようだ。刃が触れ合うだけで火花が飛び散り、刀が削られていく。

短杖を持っていた方の魔導師の姿と気配が消える。転送魔法と呼ばれるものだろう。

目論見が外れて、いったん間合いを外す。間合いを決める権利はスピードで上回るこちらにある。

(この人、御神を…。いや、神速の領域を知っている)

残った魔導師がこちらの攻撃を防いだ時、魔法を使う時の独特の気配がなかった。この魔導師は魔法に頼らず武術で対抗している。

(厄介な人)

今、相手との距離は10歩と離れていない。本来なら御神の剣士の方が有利だ。

高ランク魔導師が詠唱不要の高速起動魔法を使っても、刹那の魔力チャージが必要になる。御神の剣士ならばその刹那に、致命的な一撃を加えることが出来る。

つまり、攻撃の初速を競い合うような状況ならば、御神の剣士が魔導師の一步先を行くのである。しかし…。

(速さではこちらの方が上だけ…。この人、神速の深度が深い)

深度とは、感覚時間を引き延ばす度合いのことで、これが深くなればなるほど相手の攻撃も見切りやすくなっていく。動きの速さに劣る魔導師は、見切りの早さで美由希に拮抗していた。

(あとは武器の性能)

構えた刀には大きな刃こぼれがあり、鎬すら超えて欠けてしまっている個所まである。刃物として最高峰の日本刀とはいえ、美由希が手にしていたのは練習用で、そうたいした業物ではなかった。魔法を相手にするならば、あと1、2度打ち合うのがせいぜいだろう。

もう1本の刀を抜かず、あと1、2手で倒すべきか？

折れかけの刀でその隙を作り、もう1本で仕留めるべきか？

他の武器や体術の方が有効か？

今度は魔導師の方から動いた。攻撃するのではなく後方へ大きくバックステップ。屋根から飛び下りながら銃を乱射。敢えて狙いをつけない事で命中率は下がるが、射線を読みにくくしている。

銃声はなく、魔法の礫のほとんどが小さな風切り音を残して通り過ぎたっていったが、そのうち一発が偶然にも直撃コースで美由希に迫る。

バキイインツ！

咄嗟に刀を盾にすると、傷ついた刀は真二つに折れた。

魔導師はまだ空中。

美由希は折れた刀を捨て、空中でくるくると回転していた切っ先の方を引つつかむ。

魔導師の腰から伸びたケーブルの様なマジックハンドが、カードを2人の間に放り投げた。

美由希が切っ先を投げるのと、カードがはじけて大量の煙がまき散らされるのはほぼ同時だった。

視界に頼らず戦うことが出来る美由希は煙の中に飛び込むつもりだったが、煙に触れた瞬間後方に大きく飛んだ。

煙の触れた肌にピリピリとした刺激がある。何かの非殺傷兵器用の薬品をばら撒かれたようだ。

風上に移動して『心』に集中するが、魔導師の気配は消え去っていた。

「毒を撒かれていたら、やられていた…」

魔導師と御神の剣士の間に出る大きな差はその防御力だ。魔導師は設定さえしてしまえばNBC攻撃や熱にも簡単に耐える。それに引き換え、御神の剣士はあくまでも生身の人間でしかない。毒や炎には極めて弱い。

「どういふことだろう…？」

魔導師が撃った弾が当たった屋根を見ても、少し焦げ目が付いているだけだ。1人目の魔導師は問答無用で殺傷攻撃をしてきて、2人目は非殺傷攻撃。この二人の行動は一貫していないように感じる。

「なんだか騒がしいな」

「ーッ！」

ガラツと民家の窓が開く音と共に、住人の声が聞こえた。

さすがに騒ぎを聞き付けた家主が、窓から体を持ち出し屋根の上を見上げようとしているのを、美由希の耳が捉える。

(ここにいと、たいへんアレだよね…)

足元を見ると、屋根には凹みやヒビが入ってしまったている。神速の苛烈な踏み込みに屋根が耐えきれなかったのだ。

イヤな汗をかいた美由希はゆつくりと身を屈めると、静かに折れた刀を拾う。

「…ごめんさ〜い」

民家の住民に気が付かれないよう、小声で謝するという矛盾した行動をとりながら、美由希はその場を逃げ出した。

「クソ…あのアマ…」

小型次元船に回収された途端、毒づきながらバリアジャケットの設定を変更。マスクとゴーグルを解く。

それだけのことなのに砕かれた肋から激痛が走る。

「動くな、ヴィッカー。治療器に連れて行ってやる」

相棒のホイペットが駆け寄ってきた。ホイペットを追いかけるように自走ストレッチャーが移動してくる。

「…後でいい」

魔法で自走ストレッチャーに乗せられながら、無精ひげのホイペットに指示を出す。

「それよりも、あの一帯を焼き払え…、あるだけのエネルギーで…多目的誘導弾を打ち込めばできるはずだ」

「おい、落ち着け」

「落ち着いていられるか！…俺たちミッド人が…原始人に舐められたんだぞ」

管理局世界発祥の地で、現在も最先端に行く由緒正しいミッド人

が、管理外世界の野蛮人に傷つけられる謂われなどない。

そもそも、未熟な管理外世界の住人は、先進世界のミッドが数多の危険から守ってやっている。と、いうのに……。野蛮な原始人は礼儀という者を知らないらしい。

「なにしている。早くやれ！」

「本気か？」

「当然だ。犠牲を最小限に留めてやろうとしていたのに、恩を仇で返しやがって……。当然の報いだ」

「まあ、他に方法もないしな……」

ホイペットも特に反対はしなかった。彼にとつても管理局世界の住人が、どうなろうともなんの痛痒も感じることはない。先進世界の住人にとつて管理外世界の事件など、せいぜい3面記事の話題でしかない。

先進世界出身という矜持が、ヴィツカー達を高慢にしているが、本人達は気が付かない。自称文明人の無分別な行動を止めたのは合成音声だった。

〈相変わらずミッド人は高慢だな〉

いつの間にか先ほど援護に来た魔導師が転送ポートに立ち、銃を構えていた。

「13課だな。進入ブロックを掛けていたはずだが……」

〈デバイスに進入コードが残っていたぞ。こんな暗号化では、解析してくれと言っているようなものだ。8課の警備体制はずいぶんお粗末だな〉

ホイペットの言葉に答えながら侵入者は、ヴィツカーが放棄した短丈型デバイスを放り投げた。いつの間にか回収していたらしい。

「てめえ……。なんのマネだ」

魔導師のデバイスはしっかりと魔力チャージを終わらせている。迂闊に動けば本気で撃つ気だ。

名前は忘れたがこの魔導師は管理外世界出身のメルカバ人と記憶している。同じ野蛮人同士情を移して裏切るつもりだろうか？

〈なんのマネ？もちろん、任務を遂行している〉

「なら俺たちと同じ任務のはずだ。デバイスを下ろしてくれ
へそれは無理だ。もうお前達は任務の邪魔にしかない」

ホイペットが隙を作ろうと声を掛けるが、侵入者は引き金に掛かる
指に力を込めた。

「ま、待てー」

銃声が2発。

『終わったのか?』

『ああ、眠ってもらった。増援を要請しておいてなんだが…。やはり、
他の課の連中は当てに出来ない。こう、独断専行されてしまうとな』
『だが戦力はどうする?いま、13課で動けるのは、俺とお前だけだ
ぞ』

『撃墜数を競い合っている訳じゃない。俺達が敵を倒す必要はない
さ』

『互いに潰し合ってもらおうわけだな。必要なモノは現地調達。諜報活
動の基本だな』

『8課の装備品も使わせてもらう』

『ああ、回収する。拳銃型デバイスのHGS-712に、L3Sのフル
セット…。なんだ、これはナイフ?』

『ああ、高町美由希に投げつけられた』
『変わった刃物だな。ここまで造り込んでいるモノは、なかなかない
んじゃないか?』

『ああ、魔法文化は、基本的に足し算の文化だからな。面白い概念だ。
参考になる』

『しかし、ここまでモノを作るには…。それなりの積み重ねと歴史が
あつたに違いない!』

『…はあ、…また、はじまった』

『ん、何か言ったか?』

『いや、なにも』

『では、手早く回収を済ませよう。調べ物の用事が出来た』

『…分かったよ』

46 ボールと、再会と、ネコと…Ⅰ

NGO職員に借りた双眼鏡で無翼機を見上げると、陸、空、海をモチーフにした紋章が見えた。それは管理局治安維持隊に所属していることを示していることを、NGOの男性職員が誇らしげに教えてくれた。

「どうだ、坊主。管理局はあんな装備まで持っているんだ。旧体制や貧相なゲリラなんかには負けるわけない」

ボクには自分の所属している組織でもないのに、なぜ胸を張っているのかわからなかったが、とても強い存在なんだと理解した。

それでもボクはあまり興味をもてない。だって、空を飛んでいる無翼機より、先生達の方がよっぽど人の役に立っている。

「なんだ、興味なさそうだな」

「うん」

素直に返事していると、無翼機のお腹がパカッと開いて何かを落とし始めた。

「あれは、なに?」

「え?」

ボクが指す方を見て男性職員は呆けた声をあげ、数秒後には蒼白になった。

「誤爆だ!」

その叫び声と同時に、巨大な音と衝撃の壁に殴り倒された。

「……」

仮眠から目を覚ました時の気分は最悪の一言だった。交代時間まであと数時間。

「散歩でもしてくるか…」

『なのはちゃん、忍者みたいな魔導師たちについて、報告が入ったよ』

『もうですか!まだ2日しかたっていないですよ』

『ふ、ふ、ふ、休職中の身とはいえ、このエイミーさんの情報収集能力

をなめてもらっちゃく、困るね〜』

2日前の深夜、桃子に呼ばれ魔力による戦闘を感知したなのは単独で現場に急行。途中で美由希にバツタリと出くわした。

事情を聞くと、あまり言いたくなかったのか、曖昧な言い方で「忍者のような魔法を使う人に、ちよつかいを出したら攻撃されてしまった」と、答えた。

休暇中の上に教導官のなのはは、捜査権を持たない。

そこで、次元航行船で通信指令をしていたエイミー・ハラオウンを通して、管理局に通報。調査を依頼していた。

『と、言っても、実際に調べたのは、ウチの旦那だけだね』

『…クロノ君に、お礼を言っておいてください』

エイミーは夫のクロノにこり押しで調査をさせたようだ。やり手の次元航行部隊司令官も妻に掛っては、かたなしのようである。

『美由希が言っていた相手の特徴からいって、地球に来ていたのは、評議会調査室の装備みたい』

『評議会調査室…?』

『前評議会からあつた諜報部隊をラルゴ・キール元帥が再編した部隊だよ。元々はミッドチルダ出身者達だけで構成されていたんだけど、ラルゴ・キール元帥は方針を変えて、いろんな世界の…、管理外世界の人まで採用しているみたい』

『管理外世界…、まさか、地球ですか?』

『いや、さすがに地球はないと思うけど…。ヴェロツサが随分気にしていたみたい?』

『アコース査察官がですか?』

『それはそうだよ。今後の管理局の運営方針に係わることだからね。ま、元帥としては、前評議会のミッドチルダ一極集中からの転換を強く打ち出して、他の世界とも上手くやっていこうって方針みたい…』
『JS事件の後始末と改革…、スカリエッティの逮捕からまだ1年経っていませんからね…。もしかして、ヴィヴィオや戦闘機人の子達とも、何か関係があるんでしょうか?』

なのはの念話に緊張が乗った。

J S 事件の実行部隊だった戦闘機人は言うに及ばず、ヴィヴィオは聖王オリヴィエのクローン体であり、製造主こそ明らかになっていないものの、スカリエツティの起こした事件の要になっていた少女である。スカリエツティの雇い主だった前評議会からの方針転換を撃ち出している組織の人が、好意的な理由で地球に来ていたとは思えない。

『その辺の真意は分からないし、楽観もできないけど…。取り敢えず、この人たちは地球から、離れたみたい』

『どうして、分かるんですか？』

『教会騎士団所属の巡回部隊が、小型次元船が第97管理外世界から離れて行く反応を捉えたって、教会から管理局に通報があったみたい』

『じゃあ…。』

『うん、美由希にやられちゃって、逃げていったみたい。優先度は低い任務だったんじゃないかな？…ま、後の追及や非難については、ヴェロツサ君のお仕事になるから、なのはちゃんは心配しなくていいよ。念のため、なのはちゃんの実家周辺にサーチャーを追加しておくね』

エイミイの報告を聞いて、なのはは安堵した。

機動6課だった時の主だったメンバーは、全員が何かしらの任務に就いておりすぐに駆けつけてくることができないう状態にあったし、管理外世界での捜査活動というのは、何かと面倒な手続きが必要になる。警戒用のサーチャーが増えるだけでも、気は楽になった。

『ありがとうございます』

『いえいえ、いざとなったらアルフだっているんだからさ、ゆつくり休まないとだめだよ。なのはちゃんは休養に帰ってきたんだからさ』

『にははは、エイミイさんまで、そういうんですね』

どうやらわたしはみんなに心配されっぱなしらしい。と、なのはは自覚して苦笑した。

するとエイミイは口調を真剣なものにする。

『評議会調査室は政治がらみの案件を扱うことが多いと言われていたんだ。ヴェロツサが動き始めた以上、評議会調査室は地球での活動を

控えることになると思う。けど、現場だけの判断で勝手に動いたりすると、ヤブヘビになりかねないから、下手な行動は控えて、様子を見たほうがイイ。と、あたしは思う』

『うん、分かりました』

『じゃあ、そういうことで、休日を楽しんで〜』

「お話、終わった？」

念話ではない肉声で、なのは自分がどこにいるか思いだした。念話に夢中になりすぎていたようだ。

プリントブラウスにストレッチハーフパンツ姿のすずかがこちらの顔を覗き込んでいた。

あまりいいとは言えない念話の内容が表情に出ていたようで、すずかの表情は心配そうだ。

「…うん、ごめんね。折角、一緒にいるのに…」

返事をするなのはの鼻を、風に乗った潮の香りがくすぐる。なのは達は海鳴臨海公園に子供達を引率して来ていた。

なのはとすずかが腰掛けているベンチ正面のグラウンドでは、高町家、月島家、ハラオウン家の子供達とアリサが元気にサッカー(?)をしている。子供達はポジションやパス回しと言った基本が理解できていないらしく、ボールの周りに集まりお団子状態でサッカーボールを追いかけている。

ルールを把握しているアリサとアルフが指示を出しているのだが、夢中になっている子供達の耳には届いていないらしく、結局一緒になつてドットフリルの付いたミニスカートを翻している。

「みんな元気だね」

「…うん」

すずかは優しい。

アリサのように強引にでも話を聞いて、一緒に悩んでくれる優しさとは違い。なにも聞かず、それでも話したら、全て受け入れそのままでいてくれる優しさを持っている。

その優しさが話せない罪悪感に染みて返答を鈍らせると、それを察したすずかは気分を変えるように世間話を振ってきた。

「そう言えば、ビルさんってどんな人？」

「…へ？」

今度は全く別の意味でなのは反応が遅れた。その名前がすずかの口から出てくるとは思っても見なかったからだ。

「ビルさん、って、ヴィルヘルム副長のこと？」

「うん、背が高くからって偉そうで、皮肉家で、はやてちゃんの言うことをあまり聞いてくれない、ビルさん」

「…副長のことだね」

J S事件の際、はやての副官だった男の話で間違いないようだ。

現在、二人は違う部署に配属されているのだが、以前、はやてが似たような愚痴をこぼしていたのを覚えている。あまりな言い様だったが、まあ、女子会での遠慮無しでの会話というのは、男の悪口と相場が決まっている。

「すずかちゃん、副長といっ知り合ったの？」

「ううん、会ったことはないんだ。ただ、最近、はやてちゃんとメールやお電話でやり取りしていると、その名前が出てくるが増えているから…」

「…へー、そうなんだ。他には？」

すずかの話によると、はやてとヴィルヘルムの二人は六課解散後も頻繁に連絡を取り合っているらしい。六課立ち上げからの戦友同士親睦を深めている。とも、取れるが…、邪推することを誰が止められようか…。

含みを持たせた楽しそうな顔のすずかにつられて、ついついなのは顔にも、子供が悪戯の標的を見るような笑みが浮かぶ。

「今度、追及しようかな…？」

「いいと思うよ…」

二人そろって人の悪い薄笑いを浮かべていると、足下にサッカーボールが転がってきた。

「ママー、ボール取ってー」

グラウンドからヴィヴィオが手を振っている。

子供達はサッカーをしているのだから、ここはキックでパスするの
が様になると考え、娘にいいところを見せようと、なのはは立ち上
がる。

目標をヴィヴィオの手前にさだめて、返事をする。

「いくよー」

この時点でのなのはのイメージの中では、蹴られたボールは見事な放
物線を描き、ヴィヴィオの手前でワンバウンドするはずだった。

しかし、実際にはボールをキックしようとした瞬間、右足を後ろに
振り上げすぎてバランスが崩れる。不自然な体勢でキックした衝撃
が、さらに重心を狂わせる。なのはの好むロングスカートという、動
きにくい格好が更にそれに拍車をかける。

それら全てを補おうとして、連鎖的に重心が乱れていく。空中にい
るときには誰にも負けない姿勢制御が、地上ではなぜか状況を悪化さ
せてしまう。

「わ、わ、わ」

なのははとうとうひっくり返って尻餅をつき、ボールは明後日の方
向に飛んでいった。

即席サッカー選手達の視線は二つに分かれた。なのはを心配する
視線と、ボールを追う視線。なのは自身は後者となった。

頼りなく飛んでいくボールの軌道上に男の人の後ろ姿が見える。
背を向けている男はボールが迫っていることに気がついていない。

「危ないー！」

「ん？」

なのはの叫び声に男が振り向いた瞬間、サッカーボールが襲いか
かった。

47 ボールと、再会と、ネコと…Ⅱ

この暑い中、薄手のブルゾンにジーンズといった格好の男は、ボールの直撃を受けた顔を押しさえながらサッカーボールを拾い上げた。最初に駆け寄ったのはアリサだった。ヴィヴィオ達がすぐ後に続く。

「すみません、大丈夫でしたか？」

「ああ、問題ない」

他人用の対応をするアリサに男は掠れた声で短く返事をする、ボールを拾い上げ、ヴィヴィオに手渡した。

男は唇を斜めに上げた。

「ほら、やま…」

「ヴィヴィオ！高町ヴィヴィオ！もう、何回言えば、覚えてくれるの?!」

男が吊り上げた唇を見た途端、ヴィヴィオが機先を制して言った。

「いや、ゴメン、ゴメン、ヴィヴィオがいい反応するものだから、つい」

鋭い言葉のカウンターだったが、男は愉快そうに笑っている。

「やっぱりわざとだ！次、間違えたら二度と口きいてあげないよ。エイブラハムさん」

「おっと、それは勘弁してくれ。翠屋に行きにくくなってしまおう」

ヴィヴィオに責められ降参のポーズを取る男。その顔をまじまじと見て、アリサはようやく相手がエイブラハムだと気が付いた。意外な所での再会に思わず態度を崩したアリサが口を開く。

「なんだ、アンタだったんだ」

「ああ、縁があるね、ツンデレさん」

「ツン…、…アリサ・バニングスよ。私の名前は一回で覚えなさい！」
と、二人が言い合っていると、すずかに助け起こされたのはが駆け寄ってきた。

「ごめんなさい、エイブラハムさん!!」

「いや、問題ありませんよ、ヴィヴィオのママさん。グラウンドの周りで油断していた私が悪い」

「あ、名前も言ってますんでしたね。わたし、高町なのはと言います。重ね重ねすみませんでした」

寛容に笑うエイブラハムにますます恐縮するなのは。すると、エイブラハムはちらつとアリサを見てから、

「高町なのはさん、覚えておきます…。一度で」

聞いたアリサが顔に怒筋を浮かべる。不穏な空気を読み取った月村の双子が姉の袖を引っ張った。

「おねーちゃん、おねーちゃん」

「しづくねえ、あの人だれ？」

「あの人がおととい言ってた。忍者のエイブラハムさんだよ」

「えー、あの人、忍者っぽい格好してないよ」

「クナイフォルダ付けてないよ」

「晶と蓮、忍者はスパイでもあるんだよ。普段から忍者ってわかる格好をしちゃいけないの」

「えー！そうだったんだ」

「えー、シナチクだと、みんな普段から忍者の格好をしているよ」

「蓮、それはね。えんたーていめんと、ふいっくしよんなんだよ」

子供たちの会話を聞いていたアリサがニヤリと笑う。

「忍者さんの割にはずいぶん油断が多いようですね」

「雫達の話聞いていなかったのか？バニングス。忍者というのは正体や実力を隠すものなんだよ。大体、あんな悪意も運動センスも感じない動きから、危険を感じ取れるか」

「はうっ！」

アリサの言葉に、エイブラハムがそう答える。その言葉は流れ弾となって、なのはの胸に飛んでいった。

つづけて、さすがが長年疑問だったことを口にする。

「そうだよね。なのはちゃんって、訓練？とかでフェイトちゃん達の相手をするときのフォームはとても綺麗なのに、一般的な運動は苦手だよね？なんでだろう？」

「…うにゃ〜！」

「訓練…、高町は消防、警察の関係者なのか？」

「ええっと、教官の1尉だったけ？」

追撃を受けてHPが0になったのはに代わり、さすがが答えた。が、さすが自身は階級制度のことをよくわかってなかったりする。

「なんと、日本軍の将校でしたか。…貴女も？」

「…？そう見えます？」

エイブラハムがなぜそう思ったのか分からず、さすがが聞き返す。

「いえ、正直に言うと、貴女が一番体を使えそうに見えるので…」

エイブラハムは一応、なのはに気を使って、声のトーンを抑えていった。が、その内復活することが分かっているさすがは変わらぬ調子で言った。

「うん、運動は得意だったかな。でも、私は普通の大学生、月村すずかです」

「すずかお姉さんは、ママの妹なんだよ」

雫が自慢げに補足した。

「雫の…、道理で面影が」

エイブラハムは納得したように頷く。

「でも変な話よね。わたし達の中で一番運動が苦手だった。なのはが教官だもん」

「ううっ…、アリサちゃああん」

友人たちの遠慮のない口撃に、なのはが涙目になった。この程度、女友達のじゃれあいのようなものと、本人たちは認識していた。が、男のエイブラハムは、なのはを哀れに思ったのか、口を開いた。

「それだけ、高町1尉が努力したってことでしよう。ねえ、1尉」

「そう、そうなんだよ。エイブラハムさん」

エイブラハムの言葉に乗るなのはだったが、すぐにアリサに捕まっていた。

「へえー、言ったわね！じゃあ、その努力の成果を見せて貰いましょうか、なのは。次はアンタも混ざりなさい」

「え、あ、ちよっとー！」

アリサはなのはの腕を抱えると、グラウンドに引っ張って行く。そのまま、サッカー？を再開した。

「…貴女は参加しなくていいのですか？」

「雫ちゃんに言わせると、わたしが入るのはチートらしいので…」

姪っ子に言われた言葉を思い出し、苦笑いしながらすすかは答えたが、エイブラハムは素直に称賛の言葉を返した。

「それは凄い。身体能力の優れた大学生と、教官の1尉…。やはり、スカウトか何かでしりあつたのですか？」

「ううん、幼馴染なんだ。通っていた小学校が一緒に、もう、10年以上の友人」

「それは羨ましい。十年來の友人か…、私のは…、ずいぶん減ってしまつたな…」

憂鬱な様子で言つたエイブラハム。すすかは、連絡を取らなくなる内に疎遠になつてしまつた友達でもいるのかと思ひ言つた。

「…連絡、取つてみたらどうですか？案外、いる場所や立場が変わつても、変わらないままでいてくれるものですよ」

「そんなものかな？」

「この間、尋ねに行つた人はどうでしたか？お土産、渡したんですよね？」

エイブラハムはすぐには答えずに、懐からタバコを取り出した。が、園内禁煙の立札を見つけ、ため息を着いてから答えた。

「…まあ、確かに…。変わらずにいたかな…」

エイブラハムが右目の周りを撫でながら答えた。

…その時。

キキキー！ …ドン！！

少し遠くで、車のブレーキ音と、何かがぶつかる音。

背筋の粟立つような甲高い音は、子供たちにも聞こえたようで、ボールを追い駆けることを忘れてキョロキョロと周りを見ている。

すすかには音の方角が正確には分からなかったが、エイブラハムには見当が着いたようで、

「駐車場の方向だな。ここに来るのに何を？」

「車、二台」

「様子を見に行つた方がいい」

エイブラハムが言うはずかは頷き、なのは達に向かって手を振った。

「アリサちゃん、なのはちゃん、駐車場の方だつて！」

「あー、わかったわ、なのは」

「うん、様子を見てくるね」

アリサとなのはが返事をして、子供たちにすずかというように言い含めると、駐車場に向かった。

…のだが、

「わたしも見てくる」

「わたしもー」

「あ、こら。待ちなさいー雫、ヴィヴィオ」

活発な雫が駐車場の方に走り出し、それにつられてヴィヴィオがついていく。アルフが叫んで追い駆けたが、これがいけなかった。今のアルフは省エネモードで雫やヴィヴィオより、少し上のお姉さんにか見えない。下の子達には楽しそうに走っていく年長者に見えただろう。

そうなると、もう子供たちを抑えることなど不可能だった。下の子供たちまでも駐車場に向かい始めるのを追って、すずかも駐車場に向かった。

一人残されたエイブラハムは、周りに人がいなくなつたことを確かめてから、煙草に火をつける。

「…衝突音から言つて人ではなさそうだがな」

銜え煙草のまま一息ついたエイブラハムは、名残惜しそうに煙草を携帯灰皿に放り込むと、駐車場に向かった。

ざわ、ざわ、ざわ……………。

エイブラハムが駐車場に着くと、人が足を止めて、その現場を見ている……………。

アリサとアルフが人垣の外側で月村、ハラオウン両家の双子の相手をしていた。なのは、すずか、雫とヴィヴィオの姿は見あたらない。

ヴィヴィオ達を探し視線をさまよわせていると、アリサがこちらに気がついた。

「あ、あら、アンタ、結局来たの？」

「バニングス、何があったんだ？高町1尉達の姿か見えませんが？」

「なのは達は奥よ。なのはとすずかが様子を見にいったんだけど…」

「どうした？」

言いよどむアリサにエイブラハムが聞く。

「事故にあったのネコだったみたいなのよ。なのはは応急手当とか出来るし、すずかはネコに詳しいから…」

そこでアリサは子供たちに聞かせないように声を潜め、

「血がたくさん出ているみたいだったから、子供達にあまり見せないほうがいいって思ったんだけど…」

アリサが止めたにも関わらず、ヴィヴィオと雫は、なのはとすずか共に人垣の奥に入ってしまったようだ。

アリサは小さな子たちには刺激が強いのではないかと、心配しているようだ。

「雫は一応見習い剣士だからいいとして、ヴィヴィオは少し心配だな。私も見てくる」

そう言つて、エイブラハムは人垣の中に入つていった。

アリサの言うとおり、事故にあったのはネコ。

一匹のネコが地面に伏せ、赤い血が地面にゆっくり、広がっている。母ネコだったのだろう、伏せたのネコの周りを二匹の子猫がミーミーと鳴きながら、ウロウロと動き回っている。

なのはとすずかが手当てをしようと、ハンカチを出しているのだが、母ネコが毛を逆立てて威嚇しているの、ネコに触れることが出来ずにいる。

ヴィヴィオと雫が子猫だけでも、助け上げようとしているのだが、そうすると母ネコがかえって興奮してしまうため、こちらも手を出せずにいるらしい。

「なるほど、少し厄介だな」

「あ、エイブラハムさん」

「高町1尉、変わります」

言つてエイブラハムは懐からファーストエイドキットを取り出し、針を一本取り出した。

右手に針を持ったまま、無造作にネコに近づく。

シャーと、威嚇の声をあげるネコにエイブラハムが左手を差し出すと、ネコの怒りのネコパンチが繰り出される。

「ッー」

ネコの爪でエイブラハムの皮膚が裂かれるのと同時に、エイブラハムの右手が動いた。

野次馬達にはエイブラハムた少し手を動かした程度にしか見えなかったが、なのはとすすかには、エイブラハムが針で数度刺したのが分かった。

途端、ネコの体から力が抜ける。

(今の、美沙斗さんが言っていたことのある点穴!? 出来る人なんてほとんどいないって…)

なのはが驚いていると、

「不思議…、手品みたい…」

原理は分からなくても、エイブラハムの技にすすかが感心した声を出した。

二人の様子に気が付いているのかいないのか、

「雫、ヴィヴィオ、子猫を頼む」

「うん」

「はい」

雫達が子猫を抱き上げると、エイブラハムが母ネコを抱きかかえ道の隅に移動させる。

「あ、ハンカチ…」

すすかが適当な場所にハンカチを敷くと、エイブラハムはそこで、キットの道具を使って傷口を縫合し、包帯を巻いた。

「助かりそう? エイブラハムさん」

「コレで、大丈夫でしょう」

なのはが聞くと、包帯を留めながらエイブラハムが答えた。声の調

子も気の抜けたモノになっているので、彼なりに確信があるようだ。
ヴィヴィオ達もその言葉を聞いてパツと笑みをこぼす。

「それでも、出来れば獣医に見せた方がいいでしょう」

「え、凄くいい手際でしたけど、エイブラハムさん、獣医さんじゃないんですか?」

家で飼っているネコ達を見てもらう獣医を思い出しながらすすかが聞いた。

「まさか、職業柄手当ての知識がありましたして…」

エイブラハムは消毒液のついたシートで手を拭いながら答えた。

「職業柄…ですか?」

「民間警備会社で、医療の知識が少しばかり…」

隣でそれを聞いてなのはが思いついたのは、イーグレットSSのよ
うな人材派遣会社である。少し悪意のある言い方をするなら傭兵。
エイブラハムがなのはだけに階級を付けて呼ぶのも、その習慣のため
のようだ。

エイブラハムが手を止めると、すすかは慎重に猫を抱き上げた。

「なのはちゃん。改めて車をお願い」

「うん。でも、その前に…」

なのははエイブラハムの手を取った。手には母ネコの爪で裂かれ
た傷があり、うつすらと血が滲んで来ているところだった。

なのはが取り出していたハンカチを傷口に巻き付ける。

「これでよし、後で傷口をもう一度洗った方がいいかも」

「ええ、そうします。感謝します。…では、高町1尉、月村。あとは、
任せます」

「え、エイブラハムさんは来ないの?」

彼が最後まで付き合ってくれるものと、思い込んでいたなのはが
言った。すすかも少し驚いた顔をしている。

「確かに、そうしたいところですが…」

エイブラハムは両手を広げて、自分の姿を見せた。エイブラハムの
服にはネコの血が付き、まだら模様になってしまっていた。

「これを何とかしないと、お巡りさんのお世話になりそうだ」

48ボールと、再会と、ネコと…Ⅲ

エイブラハムと別れて、猫を榎原動物病院に連れていくと院長は、猫の様子を見て深刻な顔をして処置室に猫を運び込んだため、なのは達を不安にさせたが、思いのほか早く戻ってきた。

「手当てが適切だったみたいね。2〜3日入院は必要だと思うけど、そこからはちゃんと、持ち直すと思うわ」

茶色の髪をショートカットにした院長がそう言うと、なのは達は異口同音に「良かった」と胸をなでおろした。

「へえ、まるでダメな、マダオっぽい顔している割には、エイブラハムってそれなりに使えるやつだったんだ」

冗談めかしてアリサが言うと、素直な雫とヴィヴィオが異を唱えた。

「アリサさん。なんでそんなこと言うの!」

「そうだよ。エイブラハムさんを悪く言っちゃダメ!」

「…いや、じよ、冗談よ。分かるでしょ…っ!」

子供らしいまっすぐな正義感をぶつけられ、しどろもどろになりながら視線でなのはとすずかに助けを求めるアリサだったが、二人はくすくすと笑うだけで一向に助けようとしなない。アルフも同じく意地悪く笑うだけだったし、年少組の四人は雫達の味方のように、攻めるようにアリサを見てくる。

多勢に無勢、アリサがおれた。

「わ、悪かったわよ…。ゴメン」

「もう、わたし達に言ってもダメだよ!」

「エイブラハムさんに、あやまって!」

「…はい…」

言い負かされ、しおらしく返事をするアリサの姿を見て、なのは達はどうとう声を立てて笑い始めた。

「そこー笑うな〜!」

「にやはは、ゴ、ゴメン」

「でも、ふ、ふふふ」

「あつはは、二人ともたいしたもんだね。ちゃんとアリサを叱れるんだからさ」

アルフがヴィヴィオ達の頭をなでまわす。

院長はそんなやり取りを微笑ましく見つめながら、ヴィヴィオ達の抱く子猫に視線を向ける。

「その子達、あの猫の子？」

「はい、この子達をママに合わせてあげていいですか？」

「うん、いいけど…。同じケージには入れられないわね。この子達が傷口を触ってしまうといけないし…」

「じゃあ、じゃあ…」

雫が少し考えてすずかに言う。

「すずかおねえちゃん。この子達うちで預かっていい？」

「え、うん、大丈夫だと思うよ。ノエルさんやファリンさんも子猫の世話したことがあるし」

「ほんとー！ヤッター！」

「でも…」

喜ぶ雫だったが、ヴィヴィオは不安そうだ。

「子猫たちはママがいなくて平気かな」

「大丈夫よ。お泊りのようなものでしょ」

「お泊まり？」

「なに？ヴィヴィオちゃん、お泊まりもできないの？」

お姉さん風を吹かせて雫が、エツヘンと胸をはる。

同学年の雫に『子供』扱いされ、お泊まりとやらをしたことがないのは、自分だけか他の子供達の様子を見る。

月村の双子は姉を羨望の瞳で姉を見つめ、ハラオウンの双子・カレルは悔しそうに口をへの字に結び、リエラはアルフにしがみついている。

もう一人、子供の姿をしているが、中身はそれなりに大人のアルフは双子の様子を見ながら、

「ああ、そういえば、まださせたことが、なかったねえ」

と、のんきな声を上げている。

ヴィヴィオはお泊まりをしたことがないのが、自分だけではないことに安堵した。

「ふふくん、やっぱり、できないんだ」

しかし、勝ち誇る雫の態度を見て、闘争心に火がついた。

いや、こんなことではダメだ。わたしはエース・オブ・エースの娘。お泊まりぐらいできるはず。

「お泊まりぐらい、わたしもできるもん！」

「ふくん、じゃあ、今日やってみる？」

勢いに任せて言うヴィヴィオに、雫が不適に笑う。

笑われたヴィヴィオは急に不安になる。お泊まりとはいかなる奥義なのだろうか？

しかし、もう引き下がれない。

「い、いいよ、やってあげる」

「じゃあ、決まり。ヴィヴィオちゃんはわたしのお家にお泊まりね」

雫は喜び、すずかにその旨を母に頼むようねだり始めた。すずかは視線でなのはの同意を得ると、携帯電話で月村邸に連絡を取る。

一方、ヴィヴィオはなのはの袖を引き、雫に聞かれないよう、お泊まりとはどういうことか？と、こっそりと訊ねた。

「ねえ、ママ。お泊まりって、どんなことをするの？」

なのはは娘の様子に、この負けず嫌いは誰に似たんだろう？と、思いながらも答える。

「他の人のお家で、一晚過ぐすことだよ」

「なあんだ」

ヴィヴィオは安心した声で続ける。

「じゃあ、いまでもわたし、ママのママのお家でお泊まりしているんだ。ママも一緒なら簡単だね」

娘の勘違いに気が付いたなのはは、困った顔をして訂正する。

「あの、ヴィヴィオ、お泊まりっていうのは子供だけでするんだよ…」

「エ…」

ガーンという効果音が聞こえてきそうな、ヴィヴィオの表情を見たなのはの方が、よほどお泊まりに不安を覚えた。

「おじやまします」

「「「ただいま」」」

アリサやハラオウン家の面々と別れたなのは達が隆宮市の月村邸につくと、なのはの兄・恭也、すずかの姉にして恭也の妻・忍と月村邸の侍女のファリンが迎えてくれた。

月村の下の子供達が母の忍に飛びつく。

「おとつ！皆、お帰り。なのはちゃんとヴィヴィオちゃんはいらっしゃい」

「はい、忍さん。今晚はよろしくお願いします」

「こちらこそ、よろしく♪今日が初お泊まりだったわね」

「お母さん、この子達もお泊まりだよ」

「うん、分かってるって。ファリン」

「はくい、この子達はわたしが預かりますね」

ファリンが雫とヴィヴィオから、慣れた手つきで子猫を受け取り、下がっていった。

「あらためて、いらっしやい。ヴィヴィオちゃん」

忍はヴィヴィオと、いろいろな話をしてみたかったようだが、双子に服を引つ張られて断念する。

「お母さん、お腹すいた」

「ペッペッ」

「あらまあ、今、ノエルが用意してくれているから、手を洗って待ってましょう」

「なのはもこっちで食べていくんだろ？」

恭也から誘いを雫が止めた。

「ダメダメ、それじゃあお泊まりにならないでしょー！」

雫のなかでは夕食も親が同伴しては、お泊まりにならないらしい。今すぐ、母と離されることに不安を覚え、一瞬ひるんだヴィヴィオだったが、すぐに虚勢を張って言い返す。

「わかってるよー！」

どうにも意地になっているらしい。

ヴィヴィオはクルリと振り返り。

「ママ、送ってくれてありがとう。バイバイ」

「…え、ええっ!」

まるで邪魔者のように言われて、なのはは少し傷ついた。意志が強い子になってくれるのはうれしいけども、もう少し言葉を選んでほしい。

もつとも、ヴィヴィオがこちらを傷つける意図があったわけでもないことも分かっている。この位の子供は相手を傷つけずに、自分の意見を通す会話の技術は持っていない。

母と娘を見比べて、すずかがからかうように言う。

「頑固なところが、なのはちゃんにそっくり」

「そ、そんなことないよ」

思わず反論してしまったが、凶星だった。恭也も忍も意地悪く笑っている。

ひとしきり笑った後、忍は子供達に向かって言った。

「それじゃ、ヴィヴィオちゃんもいらっしやい。洗面所に案内するから」

「はい、でも、桃子ママにお電話してからでいいですか?」

「いいわよ。到着の報告?」

「ハイ、ご挨拶します」

「いい心掛けね。じゃあ、雫、電話が終わったら、ヴィヴィオちゃんを案内して上げて」

「うん!」

「じゃあ、なのははちゃん。今度はヴィヴィオのお泊まりじゃない時に、のんびりして行ってね」

そう言い残して、忍は双子の手を引いて洗面所に向かった。

通信用端末（ミッド製）で、高町家に電話をかけるヴィヴィオを見つめ、恭也が口を開く。

「なのはは…、もしかして、教育ママだったりするのかな?」

「そうなのかな?でも、挨拶は大事だよ」

「そうだな」

恭也が納得して頷く。

「恭也さんも、剣術を教えている時は、教育パパに見えますよ」

「え、そうかな?」

「ええ」

すずかに言われ恭也は頬をかく。照れているようだ。

その様子になのはとすずかが顔を見合わせていると、挨拶を終えた
ヴィヴィオが端末を持ってやってきた。

「ママ、桃子ママが、ママに代わってだって」

代わると母の優しい声が耳を擦る。

『もしもし、なのは?』

「うん」

『なのははごっちでご飯を食べるのね?』

「うん、お泊まりでママの同伴はダメだって」

そんなつもりではなかったのだが桃子の優しい声に甘えてしまい、
思わず娘に言われたことに対する愚痴が出してしまった。

『ふくん、寂しい?』

「え、そんなこと…」

『寂しいんだ』

「う、うん」

きつとそうだ。桃子に自分でも自覚していない本音を言いあてら
れてしまい。なのはははずがしそうに返事をした。

やはり、母には勝てそうにない。

『ふふ、じゃあ、今日はお母さんと寝よっか』

「ええっ、もう、子供じゃないんだから」

母の提案に気恥ずかしさを感じなのはが言い返したが、桃子が続け
る。

『いいじゃない。一緒に寝ましよう』

「(いいよね。たまになら。)う、うん」

返事をしながら、思わず口をすぼめる。

『じゃあ、気を付けて帰ってくるのよ』

「うん、また後で…」

端末を切ると、ヴィヴィオがこちらを見ていた。会話の内容を切られたかとなのはの顔が赤くなり、顔を手で覆ったが…。

「ママ、お電話しているとき、お耳キーンてしない？」

「え、キーン？」

なのはの予想とは違う質問をヴィヴィオがしてきた。しかし、意味がさっぱり分からない。

「高音域のノイズが入ったのかな？ 子供の方が高い音には敏感だって言うし」

なのはが首を捻っていると、ヴィヴィオとの会話を聞いていたすずかが教えてくれた。ヴィヴィオの持っている端末はミッド製のモノなので、地球の電話回線との齟齬を生んでノイズが入っているのではないかと、すずかが説明する。そう言うこともあるのかもしれない。

「ヴィヴィオ、耳とか頭とか痛くなったりしない？」

「ううん、平気だよ」

「じゃあ、気にする必要ないと思うよ」

「うん、気にしない」

納得したヴィヴィオが、雫につれられて行くのを見送って、なのはも帰ることにする。

「それじゃ、お兄ちゃん、すずかちゃん。お邪魔しました」

「うん、今度は遊びに来てね」

「気をつけて帰るんだぞ」

「じゃあね」

恭也は妹の車が見えなくなるまで見送り食堂に向かった。

食卓に向かった恭也の懐から軽快な音楽が流れた。携帯電話にメールが届いたことを知らせる着信音。

「ッー！」

メールを確認した恭也は、ガレージに止めてある自分の車に飛び乗り、妹の後を追った。

49 暗夜の砲撃

月村家のある隆宮市から、高町家のある藤見町までは結構距離が離れている。

日が落ち人気の少なくなった郊外の道を、なのはが車を走らせる。両親や姉が待っている実家に帰る道のりだというのに、一人だけの車内を物足りなく感じているのは、家に帰るとヴィヴィオが迎えてくれるということが、当たり前前になっっているから。それだけ娘のことが可愛いから。

少し親馬鹿かな。と、なのはが自分のことをおかしく思っていると携帯が鳴った。

路肩に車を止めてディスプレイを見ると、恭也からの着信を示している。通話ボタンをプッシュ、電話に出と兄の堅い声が聞こえた。

「なのは、いまどこだ？」

「え、まだ、帰っている途中だよ？どうしたの？お兄ちゃん？」

「実は…、…が届い…」

突然、通話にノイズが入り電話が切れた。

レイジングハートが警告の声を上げる。

《警告、緊急事態です》

一泊遅れて、周りの風景が霞かかった色合いに代わる。

「閉鎖領域!? 戦闘用の強装結界!!」

誰かがわたしに攻撃を仕掛けようとしている。車のドアノブに手をかけた瞬間。

《直上！来ます！》

攻撃の種類を見極める間もなく、なのはは車外に飛び出し宙に舞った。バリアジャケットには、レイジングハートの警告を受けた瞬間にとっくに着替えている。

爆音。

強力な魔力砲に車が吹き飛ばされる。

身構え、射線から射撃位置を特定。いた。

銀髪に青い目の男が、真っ白なローブを風になびかせながら宙に浮

いている。手には舞い散る羽の彫刻をあしらった長杖。その長杖からは余剰魔力が湯気のように立ち上っている。

《魔法術式推定・ミッドチルダ式、空戦オーバーSランク》

『だよね…』

言われるまでもなく、相手から漂ってくる空気ではにも分つた。相手は総量だけでも、とんでもない力を持っている。

これほどの力を持った魔導師がいきなり襲いかかってくる理由は一体？

いや、目的は後にしよう。既に相手は殺人未遂犯だ。たとえ一般市民でも現行犯逮捕ができる。

「こちらは時空管理局…」

「高町なのは」

名乗り上げようとしたなのはの声を遮り、男が言う。

「本局武装隊 航空戦技教導隊 第5班所属。階級は1等空尉。エース・オブ・エースの二つ名を持つ『砲撃魔導師』」

(どうやら…)

男が笑いながら続ける。

「出会えたな…。私はガンナー。比べよう、どちらがより『砲撃魔導師(ガンナー)』に相応しいか」

(わたし自身が目的みたいだね)

狂喜を孕んだ視線に鳥肌が立ちそうになる。相手には話し合いどころか、あらゆるコミュニケーション手段が通じるようには見えな

い。
閉じこめられた結界を破壊するにしても、まず、ガンナーを無力化する必要があるそうだ。

(分からないことばかりだけど、戦うしかない)

間合いは長・中距離の間。射撃を得意とする魔導師の間合いである。

ほんの少しでも、攻撃と防御がしやすい位置を奪おうと、なのはとガンナーは同時に動いた。

前後左右、上へ、下へ、互いに相手の死角に回り込もうとしては失

敗し、相手の斜線から逃れようとして高度な三次元機動を繰り返している内に、2人は徐々に円を描くように旋回し始めた。

まさに、巴戦。ドッグファイトの戦闘機動。

牽制もなしで相手の死角を奪うのは不可能。そう判断したのもほぼ同時だった。互いの周囲に次々と光球が現れる。

「シュートッ！」

杖を振り魔法を発動。出現させたシューターを惜しみなく全て撃ち放つ。ガンナーも撃ってきた。

不規則な軌道でガンナーに迫っていたシューターが全て撃ち落とされた。さらにガンナーの魔力弾が3発迫る。

(手数が多い)

一発の威力と追尾性能はこちらの方が上だが、一度に管制できる弾数は向こうの方が上のようなのだ。

弾の種類は恐らく誘導弾。大きく避けたのでは誘導弾の追尾から逃げ切れない、引きつけて敵弾の軌道修正範囲外に飛び出す必要がある。

魔力をチャージしつつ上昇することで減速する。相手の弾が近づいたところで、急転進と急加速で誘導弾を振り切りつつ、ハイ・ヨー・ヨー機動の応用で、斜め上から相手の背中に回り込む作戦だ。

だが、敵の誘導弾が突如として加速、まるで吸い寄せられるようになるのはに迫る。

(振り切れない!!!)

「…うッ！」

《プロテクション》

咄嗟に、再加速用にチャージした魔力を防御に変換。しっかりと受け止める。

(重い…)

想像以上の力強さに顔をしかめる。敵弾が力を失う頃には、チャージした魔力を殆ど削り取られていた。

再チャージしようと、魔力出力を上げると全身に痛みが走った。JS事件で使ったブラスタの後遺症。

(こんな痛みなんかには…)

痛みには耐えられたが、『命を削るようなもの』とまで言われた自己ブーストで焼き切れかけた体が言うことを聞いてくれない。魔力出力を上げることができず、魔力を大量消費する戦闘機動中に、チャージは遅々として進まない。

ガンナーが斜め上に宙返りをするようなシヤンデル機動を取りつつ、杖をこちらに向け砲撃魔法の構えを見せる。

牽制のため、残った魔力で三つシューターを放ち、相手の砲撃のタイミングを見計らう。

敵の砲撃はシューターごと、なのはを薙払おうとしていたが、発射の直前でシューターを散開させるようにコントロール。なのは自身は落下するように降下して照準を外した。

シューターはそのまま3方向から、ガンナーに迫る。これに対してガンナーは砲撃をキャンセルしただけで、他には何もしなかった。

「えー」

余りに無防備な姿に、なのはは驚きの声を上げたが、驚きはそれだけには収まらなかった。直撃コースでガンナーに迫っていたシューターが、ガンナーに近づいた途端、突然軌道を変えてあらぬ方向に飛んでいった。

『誘導妨害？それとも、改竄思念？』

《不明。どちらも検知できません》

レイジングハートに尋ねても、彼女のセンサーではとらえられない技術を使っているようだ。

降下していたなのはは斜め―45度に下方宙返りし、位置エネルギーを速度に変換するスライスバックの機動を取り、拮抗状態を取り戻す。

ガンナーが先ほどのお返しとばかりに、誘導弾を5発出現させ、放ってくる。先ほどと同じ弾なら回避は難しい。防御するのが妥当だろう。

だが、防御しただけでは、チャージ速度に差ができてしまっている今の状態では、追い打ちを掛けられたらそこで終わりだ。

「フッ！」

なのははバリアを展開させると同時に、先ほど外されたシューターを再誘導。シューターは、敵誘導弾がこちらに到達するより早く、ガンナーの背後から襲いかかった。

「むっ！」

直前で気づかれた。背後からの不意打ちにガンナーには、バリアを展開する猶予はない。

だが、シューターはまたしてもガンナーを掠め、あらぬ方向に飛んでいく。そして、敵の誘導弾もなのははのバリアに接触することなく、掠めただけで狙いを外した。

（相手も外した？ どういうこと？ 広域波長の誘導妨害なら、自身の誘導さえ妨害してしまうこともあるけど、それならレイジングハートが検知して、教えてくれるはず…）

しつこくシューターを操りガンナーを牽制すると、ガンナーは一気に降下しシューターを引き離すと、同時にこちらとも距離を取った。

ガンナーがなのははの誘導範囲を離れた。単純な慣性誘導になったなのははのシューターに、ガンナーが杖を向ける。

その射線の先には、なのはは。砲撃魔法でもろとも薙ぎ払うつもりのようなのだ。

だが、距離が離れすぎている。この距離の砲撃魔法なら、左右に蛇行飛行をするシザース機動で、十分に躲すことができる。

なのははは左右移動を繰り返しながら魔力をチャージ。砲撃の打ち終わりの硬直を利用して、相手に一撃を叩き込むつもりでいた。

敵が砲撃魔法を発射。

直射型砲撃魔法の光の奔流がシューターを薙払ったが、予想通りなのはへの狙いは外れている。

なのははが足を止め、砲撃魔法の射撃体制に入る。

《マスター!!》

「えっ？」

レイジングハートの警告。

警告の意味を理解する前に、全方位バリアを展開していた。

ズンツ!!とバリアにかかる負荷を感じて、ようやく何が起こったの
か理解する。ガンナーの砲撃が孤を描き、なのはに襲いかかったの
だ。

(砲撃自体は確かに直射型の砲撃だったのに!?)

なにかタネがある。そう確信してももう遅い。ガンナーが、一度捉
えた獲物は逃さないと言わんばかりに、砲撃の出力を上げた。こちら
も出力を上げ、バリアを強化しないと防ぎきれない。

無理だ。出力が上がらない…

「あ、ぐっ!」

魔力の代わりに痛みが走った。

《…スター、マスター》

「レイジングハート…?」

遠くに聞こえる愛機の声がなのはの朦朧とした意識を呼び覚ます。
意識がぼやけて自分が何をしているのか分からない。

《状況を確認して!!戦闘の継続を!》

「せんとう?…ッ」

初めて聞くようなレイジングハートの叱咤で、意識が覚醒した。

なのはは先ほど走っていた公道に倒れていた。周囲のアスファル
トにはクモの巣状の亀裂が入り、撃墜され地面に叩きつけられたこと
を教える。

バリアジャケットは上着が消滅している。リアクターページが作
動して墜落の衝撃を緩和してくれたようだ。

なぜか追撃が来ない。

空中にいるガンナーは、こちらを道に転がる石を見るような顔をし
て見下ろしている。

《警告。新たな魔力反応3。至近です》

ガンナーと挟まれる位置に、フードつきの黒いチュニツクを身に付
けた男たちが現れた。

腰には長い柄に放射線症に棘のついた輪を鎖でつなげた武器・ヒツ

ターを下げています。アームバンドブレスや脛当てにもなるブーツを履いていることからみて、接近戦を得意とする陸戦魔導師であることが分かる。

陸戦魔導師の行動はフォーマンセルを基本にしているから、結界の外でその強化を行っているフルバックも居る筈だ。

その内一人・フロントアタッカーがヒッターを掲げる。

「ジベット」

「あつっ！」

男の呪文とともにバインドをかけられ、人がようやく入れる程度の魔力の檻に閉じ込められた。レイジングハートにも封印処置が施される。

男たちの内、指揮官らしき男がガンナーに向かって声をかけた。

「流石だな、ガンナー。空のシユタールをこうも容易く」

「ぬかせ！エース・オブ・エースと戦わせてやる。と、言われてきてみれば…。キズモノではないか！」

「ほう…。JS事件の負傷が癒えていないという噂は本当だったのか…。」

指揮官がなのはを品定めするように、視線を這わせながら答えると、ガンナーは不機嫌な声で挑発するように指揮官に言った。

「そんな壊れたオモチャなど、どうでもいい。どうだ、貴様とて陸戦AAAランクの魔導師だろう、私と比べてみないか？」

「物足りないということか。それも一興だが、貴様の傭兵としての信用はどうする？依頼人に攻撃を仕掛けてくる傭兵など誰も雇うまい」
「娯楽を知らぬ、つまらん男だな。まあいい、こんな女では感じることもできん。依頼は達した、引かせてもらおうぞ」

言い捨ててガンナーは転移魔法で姿を消した。それを見届けると指揮官は自分のデバイスを手に取り。格納していたモノを取り出した。

光が指揮官の手の中に収まる。光の元は球体の宝石の形をしている。立方体の封印魔法で封印されたそれは、ジュエルシードによく似ているが、また別物のようだ。

「あなた達は？わたしをどうするつもりですか？」

男たちは答えない。それはそうだろう。

なのは自分の声がどれほど空しく響いているか考えた。撃ち落とされ、拘束された自分は完全に無抵抗だ。取るに足らない相手の言うことなど誰が聞く？

それでも時間稼ぎをしなければならぬ。出力の上がない今の状態でバインドから逃れるためには、どうしても時間が必要だ。

なんでもいい。相手の気を少しでもそらせる方法は？

最後まであきらめないのが知恵を巡らせていると、指揮官の前に空間ウインドウが開いた。

通信相手は被っているフードのおかげで顔は見えないが、強装結界を張っているフルバックだろう。

『隊長、車両が一台近づいてきます』

「それがどうした？この世界の者なら、結界で…」

『乗っているのは、高町恭也です。それに、まっすぐこちらに近づいてきます』

なのはハツとして顔を上げた。理由は分からないが兄が追いかけてきたようだ。

「やめてー！」

叫ぶが指揮官は動揺すらしなく、無情に部下に命令を出す。

「…始末しろ」

『了解』

空間ウインドウが消え、通信が途絶えた。

「お願い！やめてー！」

叫び抵抗を試みるが、関節を締め上げるバインドはビクともしない。い。

宝石を片手に指揮官が近づいてくる。

フツ、と、

シャボン玉が割れるように、強装結界が解除され、結界内部特有の霞かかった夜空から、あざやかな星空に代わる。

外側から結界を強化していたフルバックが、立ち尽くしているのも

見える。

(結界が解けた?)

魔導師が強化している結界が自然に解けるなどあり得ない。結界破壊の術式を使うか、術者が解除するか、或いは…。

指揮官がフルバックに向かって口を開く。

「貴様、なにをしている」

「…」

魔導師は答えない。返事の代わりに…、糸が切れた操り人形のように崩れ落ちる。

結界が解ける理由、もうひとつは、術者が結界を維持できない状態になることだ。

その場にいる者達が息を呑む間も、なにが起こったのか理解する時間も与えず、魔導師の陰から剣士が飛び出す。

50 御神の剣士Ⅰ

倒した魔導師の陰から一瞬で飛び出し、恭也は指揮官らしき男の首に一撃を走らせるが、ガツンと想像以上の反動が手に伝わってきた。並みの相手なら、抵抗すらさせずに仕留める事ができる一撃だったが、妹達が魔力と呼ぶ力が、発光するほど首に集まり刀が防がれた。相手に与えた傷は皮一枚を傷つけた程度、致命傷には程遠い。

(フィールド・ライズとかいう能動的な防御だったな。一撃だけでは、防御は抜けないか…)

完全な不意打ちを受けたにも関わらず、相手は素早く反撃をしてきた。左手に宝石のような球体を持ったまま、分銅が付いた打撃武器・ヒッターを振るってくる。

(…できるな)

不意打ちを受けてから反撃に移るまでの時間で判断すると、相手はかなりの経験を踏んでいるプロだ。結界の外にいた魔導師を含め全員が、服装や武器を統一しているところを見ると、複数での連携を重視した戦いもできるはずだ。

恭也は振り下ろされたヒッターを、あえて紙一重では避けず、大きく攻撃をかわした。手に持っているヒッターの攻撃範囲は把握していたが、相手は魔導師だ。武器の形をそのまま真に受ける事はできない。

案の定、ヒッターの分銅に纏わりついていた魔力が衝撃波となつて、恭也のいた空間を襲った。紙一重で躲していたのなら衝撃波に巻き込まれていたかもしれないが、そのころには恭也は、指揮官の側面に回り込んでいた。逆手に構えた刀の柄尻でわき腹を、つま先で膝を狙う。もちろん『徹』を使つてだ。

だが、これは敵も読んでいたようだ。器用に手足を折り曲げブロック。こちらの打点をずらし、最小限のダメージで防御する。

恭也の躲した衝撃波が街灯をなぎ倒し、ガードレールが飴細工のように曲がる。

「隊長！」

街灯が倒れる耳障りな金属音に、他の魔導師が我に返った。

一人がジェット機のような加速で接近してくる。高速機動を売りとするガードウイングだ。

すれ違いざまの放たれた一撃を、恭也は身を沈めてやり過ぎすと、加速の付きすぎた相手との間合いは大きく離れた。

その隙に指揮官に足払いを仕掛け、続けて刀を振るい牽制攻撃。いくらフィールドで体が傷つくことがなくとも、体重や重心が変わるわけではない。指揮官らしき男はたまらず、踏鞴を踏んでバランスを崩した。

『心』でとらえた音が状況を伝える。

指揮官が体勢を立て直すまで、2〜3秒。もう一人の魔導師は、なのはを拘束するので手一杯のよう動きがない。

一番の脅威は…、

(背後からの、高速攻撃)

土煙を上げ急制動を掛けたガードウイングの魔導師が、反転し突進しようと身構えている。

いくら御神の剣士が、目にも留まらぬ高速戦闘を可能としていても、それはあくまで人間の力。初速で勝つていても、最高速度や総合的な機動力では圧倒的に不利だ。魔導師の攻撃を防ぐとしたら、魔力チャージや詠唱時間といった出足を潰すか、避けるしかない。だが、恭也は今、ガードウイングに対して背中を向けた状態にある。

回避するしかない。

経験と直感の告げる判断に従い、殺気でタイミングを見計らう。ス Tepp でフェイントを入れてから、二人の敵から離れる方向に『神速』で跳躍。

敵のガードウイングは、再び恭也をとらえ損ねたことを悟ると急停止した。

短い滞空時間の間、空中で腕を振るってバランスを取りながら着地する。

休んでいる暇はない。体勢を立て直した指揮官が、着地のわずかな隙を逃すまいと衝撃波を放ってきた。さらにガードウイングが、再度

の突進攻撃を狙っている。

『神速』を継続させながら、恭也は衝撃波をギリギリの所で躲した。すぐ足もとで衝撃波が地面を叩き、砕かれた無数のアスファルトや土塊が恭也の体を打った。通常の魔導師なら大した問題にならない事だったが、『神速』の速さで行動し、大きな運動エネルギーを持った恭也には違った。

「くっー！」

小さな物体でも、相対速度が大きければ衝突時の衝撃も大きくなる。しかも、御神の剣士にはフィールドという防御能力はない。僅かばかりだが恭也の体制が乱れる。

ガードウイングが加速し始めた。阻止することも、回避することも間に合わない。

攻撃を追い払うように、腕を振るう恭也。相手からは最後のあがきに見えただろう。…だか、

「かっ?!」

「ぐっ?!」

高速攻撃を仕掛けてきた、ガードウイングが大きく仰け反り、指揮官が突然腕を引かれたかのようにつんのめった。

ブツンと響く、異音。

指揮官との間合いを離すとき、あがきに見せたとき、恭也は指揮官の腕とガードウイングの首に極細のワイヤーを絡みつかせていた。極細と言っても瞬間的には1tの重量にも耐えるワイヤーだ。それを引きちぎられるほどの加速魔法の力が、衝撃に変換されガードウイングを襲い、彼の意志を数秒どこか遠くに弾き飛ばす。

彼の手に持つデバイスが使用者を保護しようと、自動で首周りのフィールドを強化した。だが、術者の意識が混濁しているため、フィールドに対する魔力供給が間に合っていない。

他の部位のフィールドは薄くなっている。

(躊躇うなー)

相手の力の強弱を『心』と直感で感じ取った恭也は、間髪いれずに間合いを詰める。

御神流・奥義 『薙旋』

鋭い4連撃を、デバイス単独で受けきることは不可能だった。2度目の斬撃までは、デバイスがフィールドを調整して弾いたが、続く2斬を防ぐには魔力が不足していた。

ガードウイングの急所が切り裂かれ、血飛沫が2度アーチを描く。3度目はなかった。

そんなものに気を留めず、恭也は小太刀に付いた血を払って、構えなおす。

「御神不破流の前に立ったことを、不幸と思え」

「貴様……！」

「バレンタイン！」

恭也のおこした惨劇に、指揮官とセンターガードのポジションにいる魔導師が唸るような声を出した。

「お兄ちゃん……」

「すぐ助ける。動くな、なのは」

なのはの声に答えながら、恭也は敵の前だということを忘れて、顔を背けそうになった。

（そういえば自分が人を殺すところは初めて見せたな。できれば見せたくなかったな……）

なのはは辛そうな顔をしていたが、蒼白になったり、こちらを見て怯えたりすることはなかった。「傷つけることなく制する力」を使うとはいえ、なのはもまた戦いに身を置くもの。妹も相応の覚悟を持っていたようだ。

このことがきっかけで、恭也は溺愛していた妹に嫌われなかったことに喜ぶべきか、自分の手を離れ遠くに行ってしまったことを残念に思うべきか、悩みを抱えることになったが、それは戦いが終わってからの話。

恭也は思考を戦闘に集中させている。

武器の残りが、どの程度あるのか、常に頭の片隅に置き。

『心』で、二人の敵の魔力の強弱を見極め。

相手の防御や見切りをさらになが見切り、『貫』を通すタイミングを探る。

戦いの組み立てを数パターン同時にシミュレートする。

魔導師達がマルチタスクと呼ぶ戦闘思考。この技術は魔導師特有のスキルではない。地球でいえば認知心理学、脳科学の分野の超並列脳と呼ばれる技術で、訓練次第では恭也のようにリンカーコアを持たない人間でも、使用することができる。

指揮官とセンターガードは念話と呼ばれる通信手段で、一言二言話を交わしたらしい。指揮官が左手に掲げていた宝石を宙で押すと、宝石は水平に移動して、センターガードの手に渡った。

指揮官がヒッターを構え直す。

恭也は構えなおす際に、仕掛けることができないか探っていたが、指揮官はそんな隙は一分も見せない。

敵もどうやら本気になったようだ。先ほどのガードウイングは己の優位を確信して、攻撃が単調になっていたが、今度はそういうわけにはいかないだろう。

指揮官が接近戦を挑んでくる。魔法が使用される際の独特の振動。指揮官の放ってきた打ち下ろし攻撃を看破し、魔力が力を持つより一瞬早くヒッターを打ち軌道を逸らす。同じ要領で数合打ち合う。

先に集中力を切らしたのは敵の方だった。大振りになった横薙ぎを跳ね上げ、ヒッターが再び振るわれる前に、強引に懐に潜り込んで左手を抱え込む。

御神流 『枝葉落とし』

投げと斬撃をあわせた技で、相手を地面に叩きつけたが効果は薄い。引きながら切りつけた腕にも傷一つない。しっかりと防御されたようだ。

もちろん、恭也もこの程度で倒せるとは思っていない。仰向けに倒れた相手に即座に追い打ちを掛けた。

御神流 『貫』

相手の見切りを、さらに見抜き盲点から攻撃する技。相手から見ると恭也が放った突きは、防御をすり抜けて来たように見えたはずだ。

だが…

堅い手応え。心臓を狙った突きは、またしても強化されたフィールドに阻まれた。

(読まれていたか)

いくら鍛えられた御神の剣士とさえ、高ランク魔導師の強化したフィールドを貫くことなどできない。相手の予測を越えた攻撃で虚を衝くか、『徹』を利用して直接ダメージを届ける必要がある。

指揮官が爆発するような勢いでバリア展開。恭也を弾き飛ばす。

「ぐっ！」

攻勢の魔法ではなかったので、幸い大したダメージにはならなかった。

指揮官はドーム状のバリアを展開させたまま、ゆつくりと立ち上がった。こうなると流石に手が出せない。戦車の装甲板のような魔導師のバリアは、人間の力では破ることは不可能だ。

バリアを展開させたまま、指揮官はヒッターの分銅を回転させた。ヒッターに魔力が込められていくのが、肉眼で確認できるほどだったがバリアが邪魔で阻止できない。

バリアが突然解除されると同時に、分銅の先から細かな魔力弾が、まるで灌水用スプリンクラーのように吐き出された。

弾は小口径拳銃程度の威力しかなかったが、生身の恭也にとっては十分すぎる脅威だ。距離を取って無作為に動き回り、回避を試みたが数発が体を掠め、幾つかの傷を作る。

「っ！」

痛みにかまっている暇などない。指揮官が間合いを詰めてきた。恭也はさらに後退してチャンスを待つ。今は弾幕の密度が濃すぎて近づくのは危険すぎる。

指揮官が追ってくる。恭也が先ほど倒したガードウイングの死体を飛び越え、間合いを詰めてくる。いや、それだけではない、地面に転がっていたガードウイングのヒッターを蹴り上げて、左手で掴むと地を這うような衝撃波も放ってきた。

恭也は見切ることでできた弾丸を数発刀で弾き、弾幕の隙間に滑り

込んで衝撃波もどうにか躲した。さらに間合いを詰めてこようとす
る敵に対して、刀を口にくわえて、リストバンドに仕込んだ棒手裏劍
『飛針』を数本投げつける。

指揮官は今までの攻防で、こちらの攻撃を侮ってはいけないと学習
していた。追撃速度を一旦は緩めフィールドを強化したが、フィール
ドが飛針を力強く弾き返すと、通常のフィールドでも脅威にはならな
いと判断し、攻撃に集中して間合いを詰めてくる。

超人的な身体能力を持つ御神の剣士だったが、それだけでは魔導師
相手に勝つことなどできない。単純に能力を比べるなら、御神の剣士
は新米武装隊員にすら劣る。高ランク魔導師ともなると、その差は圧
倒的と言っている。

しかし、それがどうしたというのだろう。圧倒的な武器の差、人数
の差を、火器に頼らず白兵戦のみで覆して来たのが御神の剣士。人間
の限界はまだ少し先にある。

再び、恭也が飛針を投げつける。

顔を狙った攻撃を意にも介さず、指揮官は突進してきた。

飛針がフィールドに接触し、閃光を発した。

「かッー」

突然の閃光に目を焼かれ、指揮官は完全に恭也を見失った。

恭也は、美由希が数日前に魔導師と遭遇戦を行った事を受けて、念
のために魔導師を出し抜く方法を数手用意していた。妻に頼んで
作ってもらったマグネシウムが仕込まれた飛針も、その内の一つだ。

突然目を焼かれ一瞬怯んだ拍子に、弾幕魔法が指揮官の制御を離れ
て霧散する。

視覚を奪われたままの突進は危険と判断し、後退しながらも指揮官
は冷静さを失っていなかった。

弾幕魔法を霧散させてしまったことは失敗だったが、まだまだここ
らの方が有利だ。

敵の剣士の初速は、こちらの魔法の発動より素早いのが、それは魔法
に魔力チャージの時間があるからだ。すでに纏っているフィールド
を調整するだけならば互角。相手の攻撃を読んで急所を守れば、バリ

アを展開させる時間は稼げる。

相手の狙いはやはり首か心臓だろう。

フィールド調整をしようとする指揮官に、自分の体が回転しているような感覚が襲う。

(また、投げ技?)

指揮官はまた投げ飛ばされた事を考えた。が、閃光に焼かれた視界が戻ってくると、それが違うことに気が付かされた。

(いや、俺の体は立ったままだ…)

回る視界の中で指揮官が見た最後の光景は、首から上が無くなった自分自身の体だった。

小太刀二刀御神流斬式・奥義の極み 『閃』

あらゆる動きを超越する御神流最後の秘技は、高ランク魔導師の魔力運用速度すら越えていた。

背後で指揮官の体が倒れる音を聞いて、恭也は一閃の残心を解いた。

これで3人。

1番の強敵を倒したとは言え、魔導師は決して油断できる相手ではない。恭也は気を抜かずに最後の敵を見る。

51 海鳴市の夜Ⅲ

ドサリ、と、重い音を立てて、指揮官の体が崩れた。

「な、何が…」

最後に残されたセンターガードは、恭也の動きを見切ることができずに、混乱していた。恭也の動きを捉えきれなかったこともあるが、何より自分たちの指揮官を信頼していた。表に出る仕事ではないため無名だったが、陸戦において自分たちの指揮官（エース）が負けることはないと信頼があった。例え相手が、噂のヴォルケンリッターであったとしても、単騎であれば自分たちのチームなら確実に仕留められる。とすら確信していた。

だから、彼は頭上に凹凸のある長方体型の魔法陣が現れた事にも、忍者の姿をした魔導師が背後に降り立っていたことにも、気が付かなかった。

凹凸のある長方体型の魔法陣は、蝶番で留められた開き戸のように開いていた。その先には全く違う光景が見えており、空間と空間を繋ぐ転移魔法であることを示している。

（確か、メルカバ人が考案した『動く本棚』。短距離転移魔法で発動速度も遅いけど、秘匿性に優れていて、追跡も難しいのが特徴だったよね）

あまり普及している魔法ではなかったが、なのはは教導隊の資料で見かけたことがあった。

センターガードの背後に降り立った忍者の位置取りは狡猾で、もし、恭也が忍者を敵と見て攻撃しても、なのはとセンターガードを盾にできる。

そのことに気が付いた恭也がセンターガードより、忍者に意識の割合を割いたことで、センターガードも忍者の存在に気が付いた。センターガードは振り返ろうとしたが、そのころには、忍者はセンターガードの体を指で何度か突いていた。

センターガードが今まで感じたことのない感触を味わう。体の力が抜けていき、リンカーコアの働きまで鈍くなっていく。

「…なにが…」

「起こっている?」と、言葉が続けようとしたセンターガードの首を忍者が抱える。

次の瞬間。

魔導師の首はあらゆる方向を向いた。フードからのぞいた口がパクパクと数度動いて止まる。

忍者は死体を抱え後方に跳ぶと、センターガードの腕から宝石を奪い取った。

術者が居なくなつたことで、なのはを拘束していたバインドが崩れ始めた。機を逃さずなのはが拘束を振り払うと、バインドは砂糖菓子のように崩壊した。

「なのは、無事か?」

「うん」

駆け寄ってくる兄にそれだけ答え、レイジングハートを再起動。忍者に問いかける。

「評議会調査室の方ですよ。地球での活動は…」

〈死体から離れろ〉

忍者はなのはの言葉など聞かずに魔導師の死体を放り出し、なのはよりも恭也の牽制をしながら、さらに後方へ跳んで間合いを離す。

《警告。炎熱魔法4》

再起動したばかりのレイジングハートが警告して、対炎熱バリアを展開する。魔法陣がなのはと恭也を包むと、直後。

死体が燃え上がり、4つの火柱が夜空を照らす。チームの全滅を確認すると、魔法が発動するようにデバイスにあらかじめ組み込まれていたプログラム。明らかに証拠隠滅用の細工だ。

火炎が収まる頃には、魔導師達の遺体は跡形もなく燃え尽きていた。敵のデバイスも殆ど原型を留めていない。

そして、忍者もまた姿を消していた。どきくきに紛れて現れたときと同じように、転送魔法で撤退して行ったのだろう。

「なのは、今の奴らに心当たりはあるか?」

『心』で周囲に敵がないか探った後、恭也が聞いてきた。

「フードの人たちのことは、分からない。でも、あの忍者はお姉ちゃんと戦った忍者で間違いないと思う」

「狙いはお前だな」

「たぶん、理由は分からないけど…」

「そうか、俺の仕事に巻き込んだかと思っただが…。相手が魔導師となると違うようだな」

恭也が珍しく言いにくそうだ。

恭也の仕事はボディーガードで、まれに要人や有名人の護衛を務めることもある。当然、加害者側から逆恨みを受けることもある。だが、襲ってきたのが魔導師となると無関係だろう。

「そういえば、お兄ちゃん。どうして、すぐに追いかけてきてくれたの？」

「ああ、これだ」

なのはの疑問に、恭也は携帯を取り出す。

開かれたディスプレイには、メールが開かれており内容は、

『高町なのはの命はもらった』

と、ある。簡潔な脅迫文だ。

「一応、送信元は調べてみるつもりだ」

恭也の口調から察するに望み薄のようだ。通常の地球の技術でもこの手の追跡を逃れる方法はあるし、相手が管理世界の魔導師だった場合は、地球より数十年以上先の先進世界の技術を使っている可能性が高い。通信経路からの犯人の特定はまず不可能と言っている。

しかし、なのはは兄の心遣いに感謝し、そのことには触れなかった。

「ありがとう。フードの人たちのことは、完全にこっち（魔法）のことだから、自分で調べてみるよ」

「大丈夫なのか？」

「うん、エイミイさんの得意分野だから…」

心配する兄に説明すると、早速、エイミイからの通信が入った。先ほどの戦闘を監視システムが捉えたのだろう。空間モニターが開き、エイミイの姿が映し出される。

『なのはちゃん！聞える!?!』

「はい、エイミイさん。こちら、高町なのは」

『よかった、やつと繋がった。強装結界は張られているし、通信は繋がらないしで、心配していたんだよ。怪我はない?』

「大丈夫です」

エイミイの言葉になのはは答えると、武装隊員の顔をして報告をする。

「魔導師6名と遭遇。5名に襲撃を受けました。1名は撤収。3名は撃退。1名は例の忍者が撃退しました」

『忍者!今そこにいるの?』

モニターの中のエイミイが驚きの声を上げて、こちらの背後を覗き込もうと体を左右に動かす。

「いいえ、襲撃され戦闘を行っている間に、忍者の一名が現れ襲撃犯の一名を撃退後、撤収していきました」

『そう…、それにしても、流石だね。後遺症が残っているのに3人もやっつけちゃうなんて』

エイミイはなのはが魔導師達を撃退したものと信じて疑っていないようだ。呑気な声を上げている。

「いいえ。その…、魔導師達を撃退したのは私の兄です。逃亡した魔導師以外の4名は全員死亡しました」

『え、ええっ!…あッ!えっと…』

エイミイは魔法の使えない人間が魔導師を倒したことも、恭也が人を殺したことも信じられないようだ。エイミイも美由希が武術を習っていたことも、その師匠が恭也であることも知っていた。

しかし、エイミイの常識では、訓練された魔導師相手に肉体だけを利用した白兵戦だけで戦うことなどできない。と、思っていたし、普段の恭也と美由希は善良そのもののため、相手を殺傷するところなど想像できなかった。

驚愕を露わにするエイミイに対して、なのはは兄を弁護した。

「エイミイさん、魔導師達は殺傷設定の危険魔法を使用していました。兄の行為は正当防衛です」

『あ、うん。ちよつと驚いちゃって』

エイミイは驚くのを心の中で後回しにすることにしたらしい。深呼吸をして冷静さを取り戻すと、他に気が付いたことはないかと尋ねてきた。

「魔導師達は、わたしになにか魔法の処理をするつもりだったようです。」

『根拠はあるの?』

「魔導師達はわたしにバインドをかけた後、ロストログアと思われる宝石状の魔導物質を使用しようとしていました。魔導物質は戦闘中に忍者が強奪しました。が、魔導物質及び魔導師たちの画像を送信します」

『確認したよ。調べて見る。いま、アルフを向かわせているから合流して』

エイミイの通信を引き継ぐ形で、新たなウインドウが開く。

映し出されたのは狼の耳と尻尾をもつ15〜16歳ぐらいの少女の姿をしたアルフ。執務官フェイト・T・ハラオウンの使い魔だ。

『なのは、あたし、アルフさ。もう少しで着くから恭也から離れるんじゃないよ』

「うん」

返事をしながら兄に腕を絡めると、恭也は頬をかいた。

間もなくして、アルフが空から舞い降りてきた。普段は戦闘員としての現役を退いた彼女は、普段魔力消費の少ない10前後の少女の姿をしているのだが、緊急時ということでは本来の姿に戻っている。

「なのは、大丈夫だったかい」

「わたしは平気。でも、お兄ちゃんが…」

「かすり傷だ、問題ない」

そうは言っても治療を受けたほうがいい。

アルフが治療用の結界を張り、恭也の回復を待つ間、なのはとアルフはフード付きが使用していたデバイスの残骸を回収することにする。

その残骸の一つをアルフが摘み上げる。

「あちゃー、これじゃ復元できなさそうだねえ」

「フリートウッド・シリーズ40から70のどれかだと思う」

「知っているのかい？」

「これでも教導官です」

エツヘンと胸を張って答える。

フリートウッドは、管理局黎明期に構造の単純さと耐久性で、各世界に広く出回った量産型デバイスだ。既に管理局の主要デバイスは、長杖型と槍型が主流となり旧型になっているが、その分安価な払い下げ品が地方世界や後進世界で多く使われており、いまだに改良型パーツやソフトウェアの更新が行われている。

なのはの所属している戦技教導隊は、最先端の装備や戦闘技術の研究をしている部署ではあるが、訓練部隊の仮想敵としての役割を担うこともある。必然的に、地方世界や後進世界の出身の魔導師達が使っているデバイスにも詳しくなっていく。

「でも、大量に生産されているってことだから、持ち主の特定は難しいね」

「なるほど、こりゃ、クロノに頼んで、とつと捜査部隊を送ってもらうしかないね」

捜査は門外漢のなのは達では太刀打ちできない。残りの残骸を小型のクリスタルケージで回収して、撤収準備をする。

「終わったのか？なのは」

恭也の治療も終わったようだ。撤収に掛る。

「これからどうする？なんなら俺がついてようか？」

「…ヴィヴィオに余計な心配をかけたくないから…」

迷ったが、狙われているのが自分なら、今晚は娘を恭也に預けた方が安全だと判断した。月村邸に戻るよう言うと、恭也は納得できない表情をしている。どう説得しようかと、なのはが迷っているとアルフが助け船を出した。

「大丈夫さ、高町の家周辺はセンサーを増やしているから、何かあったらあたしがすぐ駆けつける」

「そうか…」

恭也はこれ以上妹の力になれないことを残念に思っていたが、それ

以上は言わず、代わりに気になっていたことを口にした。

「ところで、なのは」

「なに？」

「帰りはどうするつもりだ？」

「飛んで帰るよ？」

当たり前のように答えたが、兄の質問の意味が分からず首を捻る。

恭也は答える代りに視線を周囲に戻した。

周りには、ガンナーの砲撃を受けてひっくり返っているのはの車。外灯やガードレールがひしゃげ、無数のヒビがはいった路面が広がっていた。

確実に警察沙汰になる。

「非常にアレな状態なんだが？どうする？」

「…あっ」

52 たまには、のんびりお休みⅠ

壊滅した難民キャンプから、僕を回収したのは612の番号を付けた兵士たちだった。

兵士たちに連れてこられた消毒液臭い施設で、僕を含めた数名の子供達は毎日のように、検査を受けていた。

ボクの検査をしている白衣の人物達が、ミッドチルダ語で話をしてる。どうにも、こちらがミッドチルダ語を話せないと思っっているらしい。

「なかなか、いないわね。レリックに対して適性のある素体は…」

「そんなものだろう。もともと、古代ベルカ王族血統にのみ許された技術だ。ここにいる連中は、その真逆だろ。精々旧式の戦闘機人システムに適応があるのが数人か…」

「あれ、戦闘機人と言えるのか？出力の低い人工リンカーコアを作る出すのが精一杯だっただろ」

「確かに、必要ないわね。タイプ・ゼロ計画は進行中でしょう。比較実験をするための素体程度に思ってるんじゃない？無限の欲望は…」

「評議会はヤツにおもちやを与えすぎじゃないのか？お、この子も適性ありか…」

「よし、保存して置きますよ」

白衣の一人がボクの傍に来て、現地語で言った。

「さあ、この筒の中に入って、眠りなさい」

目を覚ました時、始めに見たのは眠る前に声を掛けてきた白衣の一人だった。が、前より少し若さが無くなっているように見えた。

「いいかい。君達には明日から順番に引っ越しをして貰うことになった。まずは君からだ」

男は僕を違う部屋に連れていくと、椅子に座らせ、僕の腕にゴムのチューブを巻いた。

そして、一度見たら忘れない、危険を感じさせるデザインのマークが印刷されたアンブルを取り出した。

「これを注射したら出発だ。引越し先のバタシユまでは車で移動するから、そこからは自分で管理局のバタシユ駐屯地を目指しなさい」
注射してくる男に、何処のことかと聞いた。町の名前は聞いたことがない。

「んん？なんだ、出身地が違っているのか…。：適当な書類作りやがって…。まあ、いい、：そうだな、町に着いてから、陸、空、海をモチーフにした紋章を付けた人達に聞きなさい」

男は慎重に注射針を引き抜くと、添え付けの有線通信で誰かを呼んだ。

扉を開けて男が二人、入ってくる。

「準備は完了だ。今から24時間後には、発病する。念の為、12時間後以降の接触は避けるよ」

うなずいた男達が僕を見る視線は、怯えていた。

猫なで声で、話しかけてくる。

「さあ、おいで、坊や」

男の後に続いて地下駐車場に、用意されていた車高の高い車に乗り込むと、運転席に座った男が声を上げた。

「あれ、エンジンが掛からない」

「あん？なんだよ、整備不良か？」

「坊や、少し待っていてくれ」

男達が車を降りたと、同時に照明が全て落ちた。

「ッー」

「な？」

男達が発した声はそれだけ、その後は一言もしやべらなくなった。

駐車場の非常灯が2〜3回瞬き点灯した。

オレンジ色の照明の中に、いつの間にか現れた数名の兵士たちが立っていた。兵士達は手にした武器はまちまちだったが、全員が一人の兵士の方向を向いている。

…女の人だ…。

兵士達は砂塵よけのクワイーヤを覆面風に巻いていたが、その兵士のシルエツトはひと際小さく丸みを帯びていた。彼女が腕を振る

うと、兵士たちは素早く散開する。

一人残った女兵士と目があった。

3日間相手の動きがない状況に、暇を持て余したマルチタスクの一つがまた昔の記憶を思い出した。この間訪ねた相手を懐かしんでいるのか、芋づる式に思い出が蘇っている。

ピピッと、電子音。管理局と違うシステムのためか、ノイズの入る現地の通信網の状況を改善しようと、L3SのAIにノイズの種類を解析させていたが、該当がないと結論が出た。この世界の通信会社も困惑しているようで、復旧の目処が立っていないらしい。

「…面倒だな」

もうひと仕事をする前に休憩を挟みたい。

「ちよつと、出てくるぞ」

「俺の仮眠時間を削らないならな」

なのはに対する襲撃事件より、既に3日。なのは達は事の次第を管理局に通報していた。

管理外世界のこととなると面倒な手続きと規則（ルール）、制約が多い管理局だったが、今回は教導隊の幹部が襲撃され、ロストログアと思しき魔法装置の使用未遂も確認されたことから、エイミイには管理局員としての権限が一時的に与えられ、サーチャー等の無制限の使用などが許可された。また、なのは達が滞在期間中は付近に武装隊が1チーム派遣されることになった。

なのは達は相談の結果、いったんはミッドに戻ることも考えたが、ミッドに戻っても、しばらくの間護衛が付くことには変わらない。そして、次元世界の住人にとって管理外世界というのは、辺鄙な田舎であり、渡航者があればどうしても目立つ。もし襲撃が続くとしても人の出入りをチェックするだけで、簡単に察知することができるという地理的利点を考慮すると、むしろ地球に留まっていたほうがいいという結論に達した。

事件調査は、犯人グループが既に死亡し、ロストログアも奪いさら

れていることから、危険性は低いと判断されており、『闇の書』事件のように次元航行船が地球の衛星軌道上に、停泊しての捜査探査は行われず、最寄りの艦艇が巡航途中において出来るだけの現地観測するに留まった。

ロストログアを強奪したと思われる評議会調査室は、現地で活動している室員は一人もいないとして知らぬ存ぜぬの一点張りを決め込んでおり、一切情報が降りてこなかったため、独自で幾つかの資料を集めていた。

「ごめん、なのはちゃん。ガンナーの方は管理局の方でも、殆ど情報が掴めていないようだよ」

「そうなんですか？」

「うん、ガンナーって言うのは、地上部隊が付けた通り名で、今では自分自身で名乗っているみたい。過去幾つかの高ランク魔導師が関わった事件に、関与しているみたいなんだけど、頭のいいやつみたいで足取りが掴めていないみたいなんだ」

「わたしが後遺症で本調子じゃないって分かると、指揮官らしき相手を挑発していましたね」

「強い魔導師を相手にすることによって、自分の力を誇示しているつもりなんだ。それが動機かな？」

エイミイの話によるば、この手の相手はより強いと感じられる相手を見つけると、それまでの標的を放りだし、そちらに標的を移す傾向があるらしい。

「後遺症が治った時が、危ないかもね」

「うれしくない追っかけですね…」

そう締めくくったエイミイに、引きつった笑みでなのはが答えると、彼女も苦笑いをしながら新しい空間モニターを開いた。

「で、これが評議会調査室の最近の動向」

「ありがとうございます」

ハラオウン家が管理する演算室で、エイミイが表示させた空間モニターの資料を読みながら、なのはは何となく居心地の悪さを感じていた。闇の書事件でも使われ、なのはも何度となく訪れたことのある部

屋だったのだが、10年前とは全く別物に感じるのは、この部屋が既にハラオウン夫妻の家になったためか、それとも一緒に囑託魔導師として働いていた幼馴染の二人がいなかったためか…。

(落とされたショックで、すこし不安になっているのかもしれないな…)

元機動六課の隊員達は、既にほかの任務に就いており、今回の担当にはならなかったが、絶え間なく連絡を入れてくれていた。

しかし、どれほどの偉丈夫であれ、実戦というものには強いストレスを受ける。特に攻撃を受ける防側は、攻撃側と比べると3倍以上の負担がかかると言われている。まして、落とされたとなると、その精神的ダメージは計り知れない。

(食欲もあるし睡眠も取れているから、今はまだ大丈夫かな?)

主治医のシャマルに聞いた話を信じて、なのははそう結論付けると書類に意識を戻した。

評議会調査室は、管理局最高評議会・議長の直轄組織であり、次元航行部隊やその他陸上警備隊からは独立して存在している。

調査室が収集した情報の他に、警備部や次元航行部隊、捜査部、平和維持部隊の情報部、査察部などからの情報を集めて分析し、管理局最高評議会に報告する。言うなれば、次元管理局の情報機関の中心になる組織である。

直接又は間接的な情報操作、管理局がおおっぴらに関与する事の出来ない「裏稼業」を行っているのではないかと、疑念の対象にされることも多い。

前年度暴露された管理局最高評議会のスカリエツテイとの繋がりなどが、指摘されラルゴ・キール元帥の手によって再編されたが、たった半年間で全体の改革ができたとはいえず、古き皮袋に新しき酒になるのではないかとの指摘もある。

「危険な組織というわけですね」

「うん、少なくとも疑って掛る方が、賢いと思うよ」

読み終わって出た感想に、エイミイが賛同する。

「でも…。フードの人達とは、対立しているみたいですね。炎熱魔法

も警告してくれたし」

「どうだろう？一人でも捕縛できていたら、もう少しいろいろ分かっただかもしれないけれど…」

「分かっています。口封じだったかもしれないですね」

楽観論を出したなのはに警告するように、エイミーが対案を出してくれた。

なのはもその辺りは理解している。

何かの秘密作戦を行う際には、実際に行動を起こす実行部隊（フード付き）と、彼我の行動を観察する観測部隊（忍者）に分けて行動することもある。フード付きが全滅しそうになったので、忍者が口封じの為に姿を表したのかもしれない。

また、フード付きがなのはを捉えようとしていたのも、炎熱魔法が作動したときに忍者が警告してきたのも、なのはを殺さずあのロストロギアを使うことが目的だったため、という可能性もある。

「ロストロギアの方はどうなっていますか？」

「ユーノ君が調べているみたい。だけど、画像だけでは難しいみたいだね。徹夜で調べてるみたいだよ」

「昨日通信でお話した時には、もう目に隈が…」

「愛のなせるわざだね」

「ユーノくん責任感強いですから、あまり無理しなくていいのに…」

初めて会ったときから、責任感から無茶をしがちな友人を、なのはが思っていると、エイミーがこちらを見ていることに気が付いた。

なんとなく、楽しみにしていた映画が、期待はずれだったような表情をしている。

「どうしたんですか？」

右手で空間モニターを削除する操作をしながら聞くと、口を尖らせながらエイミーが答える。

「べつにつく、どちらにせよ、しばらくの間は警戒が必要だね。出かける時には、ちよつと面倒だろうけど連絡よろしく」

「はー」

なのは達が演算室を出ると、バニラエッセンスのいい香りがした。

「お、いい匂い。アルフ、何か作ってるの？」

「エイミィ、仕事は終わったのかい？」

言いながらキッチンの方から顔を出したアルフはエプロンをしていた。ヴィヴィオと、エイミィの子供カレル、リエラも子供用のエプロンをしている。ヴィヴィオの鼻の頭に薄力粉がついているのはご愛嬌。

「ママ、今ね、アルフにクッキーの作り方を習っているの」

ヴィヴィオがニコニコと笑いながら、ボールを見せてきた。

バター、砂糖、卵に薄力粉がこねられた、クッキーの種がかぐわしい匂いを放っている。

「へー、イイ感じだね。わたしも手伝おうっか？」

ヴィヴィオなら、「一緒に作ろう」と、言ってきた。と、期待してなのはが言った。

「ダメ、ママが手伝ったら、わたしがクッキーを作ったことにならないの!!」

強い口調でヴィヴィオに拒否されて、なのはは目を丸くした。娘の予想外の台詞になのが固まっていると、アルフが教えてくれた。

「あー、なんというか…。雫のヤツが…。フアリンに習ってクッキーを作ったことを自慢したみたいだね…。張り合っているのさ…」

「えええ…」

またしても、娘に仲間外れにされてしまった。ちょっと寂しい。と、思いながらも、アリサやすずかと出会ったばかりの頃を思い出した。なのはも小学生の頃は、全教科成績優秀だったアリサや、スポーツ万能なすずかを何とか負かせてやろうと、試行錯誤をしていた。フェイトと魔法に出会ってから魔法でも、友人と切磋琢磨している時間というのは、それだけで楽しい。大人が入り込む方が無粋。

(あ、フェイトちゃんが、エリオ達の成長に戸惑っていたのは、こういうことだったんだ)

親友の様子を思いだし、なのはは苦笑いをした。

53たまには、のんびりお休みⅡ

午後から訪ねる予定の月村邸への土産は、ヴィヴィオ手製のクッキーに決まったところで、なのはは月村家の猫に対して土産を買いに出かけることにした。

ハラオウン家を出た後、僅かに人の気配を感じる…。が、これには悪意を感じられない。管理局に置ける警護任務の基本的な位置取りに沿って行動しているのが分かる。恐らく護衛の人だろう。

(基本に忠実に、よく訓練されている。うん、わたしが採点するなら…、もう一工夫で『良好』を付けてもいいかな)

つい本職の癖が出て、護衛の人たちを採点してしまった。

(いけない、いけない。…どこかに、行こうかな)

特に考えもなしに歩く。足は翠屋があるのとは、少し方角の違う商店街に向かった。

なのはと同じ年頃の女が数人でおしゃべりをしながら歩いていく。知り合いでも見つけたのか、道の対岸に手をふり始めた。思わず振り返ると、髪を派手な色に染めた女が手をふり返している。

(学生さんかな？ 案外、聖祥大附属の同級生だったりして…)

そうだったとしても、おかしくはない。魔法と出会わなければ、あの輪の中にいる可能性の方が高かった。

翠屋の入っている、『海鳴南商店街』だと、行きかうひとは顔見知りだったりにして、声をかけてもらったりすることがある。けど、ここだと、わたしに話し掛けてくれる人はいない…。

…なんだか…

とても、淋しくなる。

賑やかな場所なのに、淋しくなる。

(だけど、フェイトちゃんやユーノ君に出会えなければ、他のみんなに出会うこともできなかつた。…もちろん、ヴィヴィオにも…)

そう思いながら足を進めると、ペットショップにも寄らず、商店街を抜けて坂道を歩いていた。

…人通りの多いはずの時間なのに…。

どういうわけか、今は誰もいなくて…。

いや、知っている。この時間帯、この辺りには人通りが少なくなることを、わたしは知っている。

わたしの手が今よりもずっと小さくて何も出来なかったころ、誰かを助けられない自分が嫌いで、…誰かに、そばにいてほしいのに、誰にも会いたくなくてこの近くの公園でひとりでいたことがある。

あの時の、…世界中に、自分ひとりだけののような気分をおもいだす。わたしは思わず首から下げたレイジングハートに手を触れようとして…。

「…ッ！…痛っ！」

左手に痛みが走った。右手で左手を抱え痛みには耐えたと痛みは徐々に引いていく。

「…悪化しちゃったな…」

完全休養のつもりで休暇を取ったのに、Sランク魔導師との戦闘。幸い戦闘での外傷はなかったが、中の方はかえって深刻だった。JS事件の後遺症も癒えぬまま、同格の魔導師とよりにもよって砲撃戦を繰り広げたのだ。傷んでいた配線に無理矢理負荷を掛けたようなもので、そこから漏れた魔力が体を内側から蝕んでいる。

（こんな状態なのに…、わたし、一人になろうとしている…）

なのはは自分の状態を自覚した。

（わたし、怖いんだ。忍者やガンナー達の目的がわたしで、誰かを巻き込んでしまうのが…）

本調子でないときに、いつ襲ってくるか分からない相手のプレッシャーに堪え切れず、無意識下で『一刻も早く解放されたい』という逃走に近い願望。

…それとも、子供のころ胸を占めていた『みんなを守って終われるなら、それもいい』という独りよがりな信念か…。

（久しぶりに帰ってきたから、当てられちゃっているのかな？）

目をつぶって、背伸ばしストレッチ。息を吸いながら、左腕が傷まないようにゆっくりとした動作で…。息を吐き力を抜くころには、少し心に余裕が生まれた。

(大切な人を悲しませてはいけない。自分が死んだら大切な人は悲しむ)

少し、前向きなことを考えられるようになってくると、誰かにそばにいてほしい気持ちになる。

取り合えずヴィヴィオの顔を見たくなくなってきたところで、目を開けて踵を返したとき…。

「高町1尉」

「にやッ…！」

突然声を掛けられて変な声が出た。

「…高町1尉…」

「…エイブラハムさん…」

ビツクリした。思い描いていたヴィヴィオとは…全然、似ていない姿。当然だ。声をかけてきたのはエイブラハムだった。

「…こんにちは。…また、…会えたね…」

「…そうですね。次会う時は、てつきり、ここでだと思っていました」
言いながらエイブラハムは翠屋のロゴの入ったケーキ箱を掲げて見せた。

「あ、ご利用ありがとうございます」

「うん、あなたのお姉さんのクリーム・パフは、きっと先生も気に入ったと思う」

「それは良かったです。でも、そのシュークリームは姉が作ったものじゃないんです。姉はホールが専門なので…」

美由希の料理の腕前は…、『頑張れば並み』程度である。一度、桃子に習ってシュー作りも試してみたようだが、散々な結果に諦めてしまった。それを思い出しながらなのはが言ったが、

「え、桃子は今日も厨房で働いていましたよ？」

エイブラハムが怪訝な顔をして返した。この返しに今度はなのが小首を傾げ、

「え、桃子はわたしの母ですよ？姉はホール担当の美由希です」

なのはの答えに、エイブラハムが右目の周りをなでる。

「…確認しますが、桃子とは、あなたがこう…、髪を下ろして、あと4

「5年、年を重ねたような容姿をしている女性のことですよね」

「はい、間違いないと思います」

「…若」

エイブラハムが、なのはにとつて見慣れたリアクションを取った。桃子は若いころから童顔だと言われていたが、最近では、『年を取らないのでは?』と、半ば本気で言われ始めている。エイブラハムは桃子の容姿の衝撃を、避けるように話を変えた。

「…となると、店員さま（美由希）は父似と言ったところですか?」

「ええ、まあ、そんなところですよ…」

姉妹の割にはなのはと美由希の容姿があまり似ていない。と、エイブラハムは思ったようだ。なのはと美由希は正確には従妹になるのだから当然だが、家の事情を話すのもどうかと思ったなのはは相槌を打った。

「なるほど、翠屋のあの雰囲気は家族経営だから出せるものだったか。ひとつ疑問が解けた」

「そうかもしれません。今度、エイブラハムさんの先生も翠屋に誘って来てください」

きつとエイブラハムが先日訪ねると言っていたのは、先ほど口にしていた先生のことだろうと思ひ。翠屋を売り込むのは。

「おや、商売上手ですね、高町1尉。でも、残念。先生は喫茶店には出歩けない。なにしろ…、その住民なので」

「…え」

エイブラハムが指さした方を見やって、なのはは声を失った。『藤見台墓地』、エイブラハムが指した先にあったものだ。つまり、エイブラハムの言う先生は…。

「……………」

「……………?」

「…ご、ごめん…、ヘンなこと、聞いちゃったかも」

「…いいえ、…私が、勝手に言いました」

エイブラハムは、黙って…遠い空を見上げた。

「……………」

「……」

会話が止まってしまった。そういえば、わたしはこの人のことを、何も知らない。

気まずい雰囲気を変えようと話題を探す。

「あ、そうだ。あの子！」

「…？、…ああ、この間のネコ？あれから、三日？まだ、入院中ですかね？引き取り手が見つければいいのですが…」

指折り数えながら言ったエイブラハムに、なのはが答えた。

「それなら大丈夫です。すぐかちゃんか面倒を見てくれています」

「それは何より。あの猫はツキがある」

「うん、でも、体が上手く動かせないみたいで…。獣医さんは怪我とは無関係のはずだって言っていたんだけど…」

それを聞いてエイブラハムは腕を組んでから、右目の周りをなでると項垂れた。

「ああ、もしかしたら、私のせいかもしれない。…を強くうち過ぎたか？」

「ええっと、エイブラハムさんが針であの子を突いたアレですね？」

「よく見えていますね。ええ、こちらでは何と言ったかな？ツボ…だったかな？あの時は出血を抑えるためと、暴れて傷が深くなるのを恐れて、体の動きを鈍らせるツボを使いました」

「それで、あの子は元気になりますか？」

「そのままでも、徐々に回復すると思いますが…。逆の効果があるツボを使えば、すぐに良くなるでしょう。あのネコを連れてくることは出来ますか？」

「丁度、午後から様子を見に行こうとしていたところです。一緒に来てもらってもいいですか？」

「もともと、私の不手際です。こちらこそお願いします」

「それじゃ、ええっと…」

なのはが腕時計を確認すると、すぐか達との約束の時間まで少しある。

「13時に海鳴駅前でしょう。車で迎えに行きます」

「それでお願ひします、高町1尉。変更がありましたらここに…」

エイブラハムがビジネス・カードを差し出してきた。カードには最も使われているコミュニケーション・アプリのアカウントが書かれていた。

「うん。あと、わたしのことはなのはでいいよ。部隊でもみんなそう呼ぶし…」

なのははカードを受け取りながら、そう提案する。エイブラハムは少しだけ苦笑すると、

「了解しました。それでは失礼させていただきます。高町1尉」

「…ッ！もう！」

口を尖らせたなのはには答えず、エイブラハムは墓地に歩いて行ってしまった。

54 たまには、のんびりお休みⅢ

眼前に広がる雲海の中から、敵が飛び出してきた。包囲は右後方5時の方角、数は2。

視界の右下に表示された小さなモニターに映し出された、センサーの情報がわたしにそのことを伝えた。

(大丈夫。やっつけることはできる)

突然の襲撃にも関わらず、わたしは冷静にそう思えた。

一気に距離を積めてきた敵は、中距離から威力が大きい誘導弾を2発放ってきた。

わたしは急激にスピードを上げ敵のとの間合いを離しながら、誘導弾を十分に引きつけ、もつとも効果的なタイミングで誘導妨害用のチャフを撒く。

目標(わたし)を見失った誘導弾の安全機能が作動自爆する。その光を目くらましに、わたしは雲海の中に飛び込んだ。

雲の中はどちらを見ても真つ白で、自分がどちらを向いているのかさえ分からなくなりそうだったが、わたしには自身を斜め後ろから眺める俯瞰した視界とセンサーがもたらす情報があった。それらを駆使して難なく敵の背後に回り込む。

相手はこちらを完全に見失ったようだ。単純な索敵フォーメイションのまま飛行している。

(今だ)

今度はこちらが短距離から誘導弾を発射すると同時に加速。

先頭の敵に誘導弾が突き刺さるのと、わたしが僚機を追随していた敵に、至近距離からの猛射を浴びせかけるのはほぼ同時だった。

敵の撃墜を確信した途端、わたしの活躍を祝福するファンファーレが流れた。

「ねこちゃん、見て見て、飼い主はまた、ハイスコアだよ♪」

すずかは、ゲーム機×箱360のコントローラーを放り出すと、寝床のバスケットで丸くなっているネコの母子に、ちいさくガッツポーズ

ズを取った。

反応を返してくれたのは母ネコだけで、その母ネコも億劫そうに瞼をあけこちらを見ると、再び眠ってしまった。

「もう、薄情だな」

そういつてすずかは口を尖らせながらも、テレビのリモコンを引き寄せ音量を絞った。

母ネコは、数日前エイブラハムと共に助けたあのネコだった。

状態は安定していたが、病み上がりになり放り出す訳にも行かない。予防接種などを受けさせた後、子猫と一緒に月村家で引き取るようになった。しかし、ネコはいまだに体がうまく動かせないらしく、寝床で1日の大半を寝て過ごしている。

もうしばらくの間は安静にしておいた方がいい。

「ねこちゃんも、遊んでくれないし…：今日は、講義も特になし…」すずかは、ひとり昼間からゲームをして過ごしていた。

子供達は恭也と雫と共に修行に出て行き。両親と忍は下の子二人と侍女のノエルをつれて、親戚への挨拶回りに行ってしまった。

もう一人の侍女のファリンは、朝食の時ひっくり返した紅茶のシミを、絨毯から取る作業で忙しい。手伝いを申し出たが、

「ひとりでやらないと、姉さんにおこられるんです」と、泣いて断られた。

「アリサちゃんは、午前中は講義だし、なのはちゃん達が遊びに来るのは午後からか…」

今着ている買ったばかりのパーカーチェニックとハーフパンツを見せびらかしに、出かけるのも悪くはないが、外は真夏日で少し気が引ける。

「…：んー…：、どうしようかな…」

やることがないと、だんだん気分がだらしなくなっていく。

「…：こういう時は…うん、寝よう。」

わたしはハーフパンツを脱いで、ベッドに入る。洗いたてのシーツの肌触りと、微かに残っている洗剤の香りが気持ちいい…。

リモコンでテレビの電源を切ると、急に、部屋の中が静かになる。

目を閉じたまま、仰向けになったり、横向きになったり、枕を抱えてみたり…。

ため息が出た。

(寝ちやおうかな、と思ったけど…)

眠れない。それはそうだ、今日は思いつきり朝寝坊をして起きたのだから。

「…本でも読もう、かな…」

寝るのを諦めてベッドから這い出すと、本棚に向かう。

「まだ読んでいない本は、なにかあったかな…。そういえば、お姉ちゃんが貸してくれた本、まだ読んでなかったね」

すずかは分厚い一冊を手に取ると、ベッドの中に戻った。

タイトルには、『三角形の心』とある。

本の内容は聞いていなかったが、忍が大学生時代に雑誌で話題になったことが切っ掛けで、シリーズ化した小説らしい。

「…折角貸してくれたんだから…少し、読んでみようかな…」

忍が奨めて…というか、強引に押しつけてきた時の薄笑いを思い出したが、すずかはパラリツと、ページをめくる…。

内容は…いわゆる『ハードボイルド』なのかな…？一章のテーマになっっているのが『守りたいモノありますか？』だし…。

主人公のボディガードを目指している青年は、恭也さんに少し似ていてカッコいいかもしれない…。

「わー」

…この主人公とヒロイン、ことあるごとに…。ええつと、愛を確かめ合うんだね…。なんかこう、甘い言葉をささやきあいながら…。

「…うう…」

ほとんど無意識に身を振らせてしまう。

…昼間つから、読む本じやないかもしれない、これ…。

でも、なんか…ドキドキする。

「…いい、いいよね、どうせだれも見っていないんだから…。…お姉ちゃんに早く返してあげないといけないし…」

誰かに言い訳するように独り言を言うと、すずかは本を読み進め、

一気に一卷を読み終えてしまった。
ぱん、と本を閉じる。

「ふー」

赤くなつた頬をさますように、すずかは長く息を吐いた。

上気した体からは、汗がにじみ出ており、いつの間にか艶のある長い黒髪が額や頬に張り付いていた。

「…うう…」

へんな気分になつたすずかがうめき声を出した、その時…。

「そんな面白かつたの？その本？」

すぐ隣から聞きなれた声が降り注いだ。

「ッ！」

声なき断末魔を上げ、ベッドから逃げ出そうとして、すずかはシートに足を取られる。

スッテーンという擬音が聞こえてきそうなほど見事に転び、ベッドから転がり落ちたすずかは尻を強打した。

「いった〜」

そんなすずかを呆れた表情で見下ろしていたのはアリサだった。

彼女はベッド脇でワゴンに乗ったサンドイッチをつまんでいる。

なぜ、講義のはずのアリサが？

サンドイッチはどこから？

疑問が頭を掠めたが、混乱して言葉がうまく出てこない。かわりにキョロキョロと視線を彷徨わせると、掛け時計が目に入った。時刻は午後1時を回ってはいぶたっていた。

車で移動するアリサが講義を聴き終えた後に遊びに来ていても、おかしくない時間帯だ。サンドイッチはきつと、いつまで経つても部屋から出てこない、すずかのために、ファリンが作って、部屋の前にも置いてくれていたのだろう。

4時間近く小説に夢中になり、来客にも気がつかなかつたらしい。

「こ、こんにちは、アア、アリサちゃん…」

「うん、こんにちは、すずか」

震える声で挨拶しながら、表情が不自然に引きつるのを自覚する。アリサの方もいつもの挨拶の時とは違う笑顔になっている。なんというかこう、毒を盛ったワイングラスを相手に渡すときの頬笑みと、言えばいいのだろうか？

おかしい。結果的にアリサを無視してしまっていたわけだから、普段のアリサならもつとストレートに怒りを露わしているはずだ。

「すずか……」

「な、なあに……。アリサちゃん」

声を掛けられ、ハタと自分の恰好を思い出した、すずかはあわててパーカーチェニツクの裾を引っ張る。

……あう、湿ってる……

しかし、アリサはこちらのことなど見ていなかった。その視線の先には、逃げだそうとした時ベッドの上に放りだした文庫本。

アリサがニヤツと笑う。

「ダメー！」

文庫本に飛びかかるが、一瞬遅かった。

アリサは文庫本素早く拾い上げると、ベッドの上うつ伏せに倒れたすずかに馬乗りになった。

「アリサちゃん！返してー！」

「いいじゃない文庫本ぐらい」

もがくがベッドが柔らかすぎでうまく身動きが取れない。アリサはそんなすずかをニヤニヤと笑いながら、文庫本を開いた。

（ああ……。もう、お嫁にいけない……）

羞恥で顔を赤くしたすずかは、昭和のマンガのようなことを考えながら、シーツを頭にかぶった。

そして、罵倒とか揶揄など、とにかく降りかかってくる言葉に耐えようとしたのだが……

「……………」

覚悟していたカラカイが、何時まで立ってもこない。

すずかが不振に思って、シーツを少しだけあげ、背中に乗ったアリサを肩越しに見上げる。

アリサは…

「…うわ…すごい…」

興味津々のご様子。

耳まで赤くなっているアリサだったが、それでも紙面から目を離さない。

「や、ヤバくない？こんなことまで…！」

アリサが赤くなったまま表情を変える姿はおもしろかったが、さすがに4時間待たされるのは堪らない。意をけっして話しかける。

「あ、あの、アリサちゃん、面白かった？その本？」

「へっ…」

我に返ったアリサと目が合う。真っ赤になっていたアリサの顔が、一旦真っ青になり、再び赤くなった。

「あ、あ、あ、あ…」

「…？」

「アリサ・キック!!」

理不尽に背中を蹴飛ばされたが、アリサが不自然な姿勢だったため痛くはなかった。

「あ、あんたねえ、なんてもん読ませるのよ！」

「え、アリサちゃんが勝手に…」

「Be quiet！」

アリサがベッドの上に立ち上がり、怒鳴りつけてきた。

至極まっとうな意見を言ってみたが、羞恥のあまり混乱しているためか、聞き入れる様子がない。

「っだ、だいたい、こ、こんな本何時の間にか買ったのよ！」

「お姉ちゃんが貸してくれたんだ」

「あ、あのひとは…！」

そこまで怒鳴ってから、アリサは急に勢いをなくし、穿いているキュロットスカートの裾を気にし始めた。

「…、…替えたい…」

消え去るような小さく呟くアリサの声を聞いて、さすがの滅多に表に出てこない衝動がくすぐられた。

すなわち、攻撃衝動だ。

すずかは立ち上がり、アリサの隣に並ぶと、甘えた調子で言った。

「ねえ、アリサちゃん。一緒にシャワー浴びない？」

「へ、ええー！」

「ほら、今日は暑いし、汗かいちやったから…」

体を寄せ、抱きつくように腰に手を回す。

「あ、あたしはいいってば…、いま、このテンションでシャワーなんて浴びたら…」

「あびたら…？どうなるの…？アリサちゃん」

腕から逃れようとしているアリサの抵抗を、力任せにねじ伏せる。

大学の友人達には意外に思われることが多いが、実は活発なアリサより、物静かなすずかの方が力が強い。

「ほら、分かるでしょ…。…てか、すずかなんか変…」

「いつもどうりだよ。だから、イイでしょ、アリサちゃん」

すずかの力強さに、アリサがビツクと怯える。いつも強きの友人が、滅多に見せることのない姿に、すずかの嗜虐心が刺激されてしまう。

(…アリサちゃん、意外とベーコン・アスパラ系女子だよね…)

「だから、ダメだってば…！あつ」

「アリサちゃん！」

さらに力を込めてしまったすずかから逃れようと、アリサが無理に体をよじってバランスを崩した。

すずかは慌てて支えようとしたが、もつれ合うようにベッドに倒れ込んでしまった。

「きゃッー！」

「んっー！」

すずかはアリサに覆い被さるるように倒れていた。アリサの体温を感じながら、さすがにふざけすぎたかと反省する。

「ごめん、アリサちゃん。大丈夫？」

「平気よ…、コレくらい…」

退こうとして身を起こすと、アリサと目が合った。

「…あ…」

互いに感嘆をあげてしまった。

アリサの瞳は涙が溜まり潤んでおり、上気した頬は朱を注いだように赤く染まっている。感嘆の吐息を吐き出した唇は小さく震えていた。

(アリサちゃん…、すごく…、すごく、かわいい)

アリサとはいつも一緒にいるが、これほど近くで顔を見るのは、いつ以来だろうか？彼女が髪型を変えて以来、なかったかもしれない…。

頭の中に霧が掛かったようにぼくつとしてしまう。

「すずか…」

名前を呼ぶアリサの声が遠くに聞こえる。

わたしの中で、必死にわたし自身を止めようとしている自分がいるが、自分がなにをしようとしているかが、分からないので、止まりようがない。

蜜のような空気に溺れて、息もできない。

「アリサちゃん…」

唇に吸い込まれそうになっている。と、気が付いたときにはアリサの顔はすぐそこまで来ていた。

(と、止めて…)

55 たまには、のんびりお休みⅣ

午後になり、海鳴駅でエイブラハムを拾って、月村邸に向かう。（壊された車はバックアップデータを使用し、魔法で復旧。注意点：何度も魔法での復旧をくり返すと劣化する恐れあり）

車の中でエイブラハムはヴィヴィオの質問攻めにあっていたが、エイブラハムは笑って対応していた。しかし、忍者設定は健在のようでは、プライベートな内容は、曖昧に答えていた。

月村邸に着くと、

「結構な…、歴史がありそうな屋敷だな」

「うん、月村の家は結構由緒正しい家らしいよ」

「雫のお家は西洋館って言うんだよ。旧暦の終りのころから、新暦の始まるの頃の建物のことをいうの」

「…あ」

エイブラハムが月村邸の感想になのはが返し、ヴィヴィオがお泊りの時に聞いた話を披露した。しかし、ヴィヴィオは建物が立てられた時期をミッドチルダの暦に変換して覚えていたらしい。それを口にしたことでははドキリとしたが…。

「新暦…。ああ、日本には独自の年の数え方があったな、昭和、平成とか…」

「ええ、そうなんです…」

幸いエイブラハムが勘違いしてくれたので、なのははそれに乗ったが、ヴィヴィオが小首を傾げる。エイブラハムが勘違いしていることに気が付いたのだろう。

「さあ、行こう。ヴィヴィオ」

ヴィヴィオが口を開く前に、なのはは土産の品が入ったトートバックを片手にヴィヴィオの手を引いた。

「うん」

少し困惑を残した顔でヴィヴィオは従ったが、やや強引に手を引かれたことよってヴィヴィオがバランスを崩し、なのはの腕にしがみつく。その手は左腕だった。

「…いっ！」

左腕から痺れるような痛みがなのは体を襲った。何とかヴィヴィオの手を離すことはなかったが、傷んだ左腕ではヴィヴィオを支えきれず、トートバックを放り出してヴィヴィオを支える。

(あ、ヴィヴィオのクッキー…)

トートバックの中身を心配して目で追うが、視線だけで落下は止められない。しかし、トートバックは地面に落ちることはなかった。既の所でトートバックを掴み、なのはごと抱き寄せる形で、ヴィヴィオを支える手があった。

「大丈夫ですか？」

「…あ、はい」

エイブラハムの力強さに驚く。

「ヴィヴィオもか？」

「うん…、大丈夫…」

返事をしながらヴィヴィオは不安そうになのはを見上げた。苦痛の表情をしたなのはを心配してのことだろう。

「大丈夫だよ、筋肉痛みたいなものだから…」

「…」

なのはが娘の不安を掃おうとしたが、ヴィヴィオには難しい説明になったようだ。ヴィヴィオが更に眉を寄せる。すると、

「明日か、明後日には治るって言っているんだよ」

エイブラハムが言った。

「本当？」

「ああ、本当だ。そうだろう？高町1尉」

「うん。本当だよ」

「うん。よかった！」

ヴィヴィオがようやくやく安心して笑った。ホツとするなのはにエイブラハムが小声で言った。

「…荷物は私が持ちましょう。左腕、痛めているのでしよう？」

「…うん、じゃあ、お願いします」

なのは達が月村邸に入ると、お疲れ気味のフェアリンが出迎えてくれ

た。訪ねる相手にエイブラハムが追加されたことを連絡した時に聞いたのだが、朝から重労働をする羽目になり疲れてしまったらしい。

フアリンは土産を受け取ると、エイブラハムを応接間に案内する。

なのはは勝手知ったる月村邸を進む。目的の部屋に着くとオーク材の扉をノックした。

「す、ず、か、ちゃくん」

「す、ず、か、さくん」

茶目つけたつぷりのなのはの口調を、ヴィヴィオが真似る姿にほほ笑みながら、返事を待っていると一拍の間の後、

「うひゃあー!」

「きゃッ…!」

扉の向こうから2つの小さな悲鳴が聞こえた。続いて、バサツと何か落ちる音が聞こえた。

最初の声は…アリサちゃん?でも、悲鳴を上げるなんて何かあったのだろうか!?

「入るよ!すずかちゃん!」

大きな声で言ってから、ドアノブを掴む。

「ま、まちなさい!なのは! Wait a moment! 入るな!!」

扉を開けかけた処で、今度こそ間違いないアリサの怒鳴り声が聞こえてきた。

「あ、アリサちゃん?」

「なのはちゃん?ヴィヴィオも一緒だね。ごめん、ちよつと待ってね」

アリサの剣幕に驚いて動きを止めると、すずかの声も聞こえてきた。なぜだか声が高揚している。

なのはは何がなんだか分からなかったが、とりあえず、二人とも大丈夫そうだったので、ドアの前で待つと、一分もしないうちに返事が来た。

「なのはちゃん、ヴィヴィオ。もう、いいよ」

促されて部屋の中に入ると、すずかは開け放たれた窓の前で、髪を

整えようと手櫛で梳いており、アリサはベッドに腰掛け自分の鼓動を確かめるように、胸を押さえていた。

「こ、こんにちわ…」

いつもと違う2人の様子に、ヴィヴィオが遠慮がちに挨拶をする。ヴィヴィオを落ち着かせるつもりで、頭を撫でながら、なのはは聞いた。

「どうしたの？二人と…」

「ううん、何でもないよ」

言い終わる前に、さすがが答えてきた。なんだか様子がおかしい。姿もだ。

いつもキチンとした格好をしているすずかの髪が、微妙に崩れているし、着ているパーカーチェニツクの裾が、ハーフパンツの中に入っ
てしまっている。

まるで慌てふためいて穿いたみたい…。

指摘しようか迷っていると、アリサが口を開いた。

「なのは…」

「うん？なに、アリサちゃん？」

「あ、ありがとう。お礼を言っておくわ…」

「へ、ど、どうしたの!？」

突然、礼を言われてなのはは動揺した。

アリサはどちらかというと、他者に感謝していても、素直に言葉に出せないタイプだ。態度に出ているので、心情を把握するのに困ったことはなかったが、お礼を言われるとは…。いったい何があったのだろうか？

「アリサちゃん、わたし、何かしたっけ？」

「いろいろ、危ないところだったのよ…」

「危ない？なにが…」

「それは知らなくいいの！いいから！黙って！受け取っておきなさい！」

「う、うん…」

お礼を言われているはずなのに、すごい剣幕でなんだか怖い。

なのはがパチクリしていると、すずかがボソツと何かをつぶやく。
「わたしはちよつと、惜しかったかな」

「す！す！か！それ以上ふざけたら、つき合い方を変えるから（怒）」
「はい」

三白眼になるアリサと、喜々として返しているすずか。

すずかの呟きは、なのはには聞こえなかったが、今のやりとりで何となく察しが付いてしまった。すずかが、アリサになにか悪戯をしたらしい。こういう姿を見ると姉の忍にそっくりに思えてくる。

「すずかちゃん、もしかして、今日はお寝坊さんだった？すずかちゃんにはメッセージを入れたし、フアリンさんに電話したんだけど…」
「え…」

すずかがベットから落ちていたスマホを拾い上げると、未読のメッセージと通信障害に対するお詫びが受信されていた。

「あ、ホントだ！着信も…。ゴメン、なのはちゃん、ちよつと本に夢中になつちやつて…」

すずかがなのはに訳を話しながら、アリサにチラリと視線を送ったが、アリサは少しだけ顔を赤らめてそっぽを向いた。

すずかは続けた。

「それはそうと。いらっしやい、なのはちゃん、ヴィヴィオちゃん」

「おじやましま〜す」

「おじやまします。ネコちゃんも、こんにちわ」

ヴィヴィオが声を掛けると、一連の騒ぎで目を覚ましていたネコが、億劫そうにだが一鳴きした。

返事をもらったヴィヴィオがパタパタと籠に近づいていき…。

足下に落ちていた文庫本に躓いて転んだ。

「ヴィヴィオー！」

「ヴィヴィオちゃん！」

「あ、大丈夫」

驚いて駆け寄ろうとした、友人達をなのはは止めた。

ヴィヴィオはちゃんと手を突いて転んでいたし、幸い月村邸の床には上等な絨毯が引かれている。怪我はないはずだ。

案の定、すぐに四つん這いになると、照れくさそうに振り向き笑った。

「えへへ、転んじやった…」

「…大丈夫？」

「うん、一人で立てるよ！」

なのは娘の姿に一際優しい表情を見せた。ヴィヴィオは、なのはの笑顔を背中に浴びながら立ち上がろうとして、自分が躓いた文庫本が目の前にあることに気が付いた。

「ッ！」

ヴィヴィオが文庫本を手にとると、なぜかアリサとすずかが息を飲んだ。

「あ、ああ…」

「まあ…」

2人が声を上げられずにいる間に、好奇心旺盛な子供らしきで、ヴィヴィオが文庫本を開く。

「ヤスナリもヤスナリなりに、ファイアツセの・に・わせて、・け・うよ
うに・いついた」

「え、なにそれ…?」

ヴィヴィオが読み上げた、内容にアリサが声を上げた。

「えく、そうかいてあるよく」

「あ、ヴィヴィオちゃん。漢字ってしってる？」

「漢字？」

アリサの言葉に不満そうな声を上げたヴィヴィオだったが、ずずかの質問に首を傾げた。

すずかの指摘通り、ヴィヴィオにはまだ漢字を教えていなかった。漢字を読み飛ばして読んだらしい。

「どれどれ…?」

「はい、ママ」

なのはも興味が沸いてのぞき込むと、ヴィヴィオがページを開いたまま、文庫本を渡してくれた。

「……………」

黙読して、本の内容に体温が上がる。頭に血が上りボンヤリした気分になると同時に、顔が赤くなるのが止められない…。

「どうしたの？ママ」

「…えーあつ…、えつと、ヴィ、ヴィヴィオには、まだ、ちよつと早いつて言うか、む、難しいんじゃないかな？この本…、にや、にやははあ…」

なのはの様子が急変したのを見て、心配したヴィヴィオが言ってきたが、この本の内容をまだ説明するわけにはいかない。

なんとというか情操教育的に…。

何とか苦しい言い訳と、笑いでごまかし、ヴィヴィオが疑問を口にする前に強引に話を変えようとあたりを見渡すと、母ネコ達が寝そべっているペット用のベット籠が目に入った。

「そうだ！ヴィヴィオ。ネコちゃんをエイブラハムさんの所に連れていってくれるかな？」

言いながらなのはベット籠を静かに抱く。揺れる籠の中で子猫たちは、なのはを不思議そうに見上げる。母ネコは煩わしそうに目を開け、なのはに敵意がないことを確認すると、大あくびをしてから再び目を閉じた。

「ん？その子、この間のこでしよ？あんまり、動かさない方がいいんじゃないの？ただでさえ元気がないんだから…」

「うん、それをエイブラハムさんなら、直せるかもしれないって…」

「え、エイブラハムって、この間の人でしょ、なんであいつが出てくるのよ」

「針治療だよ、アリサちゃん。エイブラハムさんは針治療が出来る人なんでしよ？」

「なんで、すずかが答えるのよ」

「なのはちゃんのメッセージにエイブラハムさんなら、ねこちゃんを何とかできるかもしれないから来てもらおうって。それにわたしはエイブラハムさんがねこちゃんを手当てするところを見ているから…」

すずかの言葉に、アリサが目を大きくして言った。

「へー、応急手当だけじゃなくって、東洋医学もできるのね」

アリスが納得したところで、ヴィヴィオにベット籠を抱かせる。初等科1年生のヴィヴィオには重いだろか?と、思ったが母ネコは小柄な方だったので問題なさそうだ。

「なるべく、優しく連れて行ってあげてね。できる?」

「うん!できるよ」

「そう、お願いね…」

ヴィヴィオが部屋を出て離れていくのを確認すると、なのはは困った友人達に向き直った。

アリスとすずかは、こちらと目を会わせないように、明後日の方向を見ている。

努めて冷静を装って声を出そうとしたが、失敗した。震え気味の声が出る。

「2人とも、お話があります」

「はい…」

アリスは殊勝な態度で返事をし、すずかはちよつと困ったように笑った。

なのはが言葉に詰まりながらも二人に説教をし始めた。

「こ、こ、こういうのはいけなと思います。その、ヴィ、ヴィヴィオもいるんだから」

「悪かったわよ。でも、ちよつと隠すのが遅れただけじゃない」

「で、でも、こんな…え、エッチなの、読んじゃ…」

文庫の内容を思い出し言い淀む。

さすがになのはも二十歳を過ぎた女性だ。そういった知識はあるが、正式に男性と付き合ったこともなければ、そういった経験のないのははもっぱら聞き役だった。

こう言ったことを口にする側になると、恥ずかしさの方が先に立つ。

「あんだ、そんなんで、ヴィヴィオが好きの人ができましたって言って、男の子を連れてきたらどうすんのよ」

「だ、大丈夫だよ。き、きつと…」

「そうっ？」

と、なのはにススツとすすかが近づいてきた。
なんとなく目つきがあやしい。

「ところで、なのはちゃん」

お腹は空いていないが、暇を持て余した猫がネズミを見る目をした
すすかは、なのはのあいている腕をしっかりと抱いた。

すすかの豊かな双丘の感触と体温が、なのはに伝わる。

「す、すすかちゃん？」

すすかから、異様な雰囲気を感じ取り、なのはが少し怯えたように
身を引いた。

それがイケなかったのかもしれない。

次の瞬間、すすかの目から光が失われた。なのはの弱気な対応が、
すすかの嗜虐心に燃焼促進剤を放りこんでしまったらしい。

すすかの手に力がこもり、ガツチリと腕を掴んだまま、耳元で言っ
てくる。

「ねえ、なのはちゃん。この文学作品のどこがエッチなの？おしえて
？」

「ツーえ、え、どこってー！」

耳に掛る吐息の熱さに、なのはは悲鳴を上げそうになった。

さらに、すすかが追及してくる。

「ねえ、どこなの？読み上げて…」

「よ、よよよ、読み上げてっ!?なに言ってるの！すすかちゃん！」

とても無理。そんなこと恥ずかしくって出来ない。

本能的な危険を感じて逃げだそうとしたが、しっかりと掴まれた腕
はびくともしなかった。

「さあ、なのはちゃん…！早く、教えて…」

「えと、え、えつと…」

逃げることができずに、まるで妖気を放つ吸血鬼じみたすすかに迫
られ、背筋に寒気が走る。

混乱したなのはは溺れている人間がそうするように、手近なものに
縋りつこうとした。

「そ、そういうことは、アリサちゃんの方が…」

「ほらほら、どこがいけないのよ。わたしにも教えなさい！」

しかし、一瞬で吸血鬼の軍門に下ったアリサがさすがの反対側から、なのはに抱き付き一緒になって、さらになのはを追い詰める。

「さあ、さあ」

二人係で追い詰められ、混乱したなのはが、羞恥で顔をトマトより赤く染め、涙目になりながら口を開く。

ヤスナリもヤスナリなりに、フイ…舌に合わせて、溶け合うように…。

ふ、ふ、ふたりに抱きしめ合い、息が苦しくなるほどに、し、舌を…。

そんな、く、くり返しに飽きると、…ツセが目でヤスナリに合図する。

…ヤスナリの手が…の横髪を梳き、お、おお、後れ毛をわずかに梳きながら、うなじを通り、少しだけ服の下に、く、く、くぐらせるようにして襟元に。

あ…

…ツセは陶然とし、しした表情になる。

もう一度、お、同じように指を頬からゆるりと流す。

はあ…

じよ、じよ、じよ、上気した口から今一度、甘い吐息。

…もう一度、軽いキキキキスを交わしつつ、ヤスナリはフイアののののシャツのひとつ目のボタンに、に、に…

ここまで読んで、なのはは許しを乞うような表情でさすがを見た。後で冷静になってみれば、「なんで、わたしが謝る側になってたんだろう?」とも、思ったが、この時は混乱してそんなことには気が付かなかった。

そんな様子にすずかは満足したのか、標的を変えた。

「じゃあ、続きはアリサちゃん。お願い」

「えっ？ええー！」

突如として、攻撃の矛先を向けられて、アリサが声を上げて二人から離れようとしたが、今度はなのはがアリサの腰に腕を回して離さなかつた。

なのはの目には涙がたまり、なんだかやけっぱちで、「死なば諸共」と言っているようにも見えたが、とにかく、アリサを逃がすまいとしている。

「アリサちゃん。なのはちゃんが読んだ続きを…」

「ここだよ、アリサちゃん」

「ひッ…」

小さく悲鳴を上げるアリサに迫りながら、さすががペロリと唇をなめる。なのはが目をすわらせたままニツコリとほほ笑む。

今度はアリサが恐怖に震える番だった。唇も震え呂律がうまく回らない。

「ちよちよ、ちよつと、ま、待って…」

「次」

「ここからだよ」

「ッ…！」

二人が大きな声を出さないことが、かえって怖い。

恐怖に負けたアリサが文庫の続きを読み始めた。

56 たまには、のんびりお休みV

「ヴィヴィオー」

「しず…、しいー」

ヴィヴィオがベッド籠を抱き応接間に向かってしていると、修行に行っていたはずの雫が廊下の先から駆け寄ってきた。思わず大声で返事を返そうとしたヴィヴィオだったが、元氣のない母ネコを抱えていることを思い出し。雫に静かにするように促した。

「おつとと…」

ヴィヴィオに促されて口元に両手を当てた雫が、減速しながら近寄ってくる。

雫の体から漂う石鹼の香りがヴィヴィオの鼻をくすぐった。修行の後に銭湯にでも行ったのだろう。

声を潜めて雫が言った。

「ねこちゃんをエイブラハムさんのところに連れて行くところ？」

「うん、でも、なんで分かったの？」

「父さんに聞いたの、ヴィヴィオのママがエイブラハムさんを連れてくるって」

「あ、ママ、恭也さんにも言ってたんだ」

「うん、メッセージが届いた時は修行中だったから、呼んだのはお昼を過ぎてからだだったけどね。父さん、メッセージを読んだとき、ヘンな顔をしてすぐに戻るぞって言い出してさー」

むむむーと眉を寄せて、父親の見せたヘンな顔を再現しようとする雫だったが、不機嫌そうな咳払いに止められた。

咳払いの主、恭也はティーセットの乗ったワゴンを押すファリンと一緒にだった。

「雫、俺はそんな顔をしていない」

「してたもん」

「…」

譲らない娘に恭也はかぶりを振ったが、本題に戻ることにしたらしい。

「とにかく、その猫を元気にしてくれる人が来てるんだろ。余り待たせてはいけない」

言いながら恭也はヴィヴィオからベッド籠を受け取ろうとしたが、「わたしがママから頼まれたの…」

と、ヴィヴィオが言ったので任せることにした。頼まれごとをやり抜こうとしている姿は、恭也としてもなかなか好感を持てた。

応接間のドアの前まで行くと、恭也は『心』で部屋の中の様子を伺う。すると、応接間にいる人物はこちらに気が付いているようだ。『心』が応接間のソファから立ち上がる気配を捉える。

(少なくとも、目だけを頼る相手ではないようだな)

恭也がソックをして、返事が返ってきてから扉を開けると、エイブラハムが背筋を伸ばしてこちらに正対していた。

「いらつしやい。エイブラハムさんでしたね」

「はい、エイブラハム・ハーベイです。留守中に押しかけてしまい申し訳ありません。月村さん」

「いや、妹が乞うて来てもらったのだろうか？ 肝心の妹の姿が見えないが…」

「件の猫を連れてくると言っていたのですが…」

挨拶をしながら恭也は呼びつけた客を一人にしてしまっていることに申し訳なきを感じていると、猫という言葉を聞いてヴィヴィオが応接間に入ってきた。

「エイブラハムさん、ネコちゃん連れてきたよ」

「おや、ヴィヴィオが連れてきてくれたのか？」

エイブラハムが尋ねると、ヴィヴィオは猫親子が収まったベット籠を近くのソファアに下ろしながら答えた。

「うん、ママはさすがさんとアリサさんとお話があるって」

「アリサも来ているのか…」

言いながらエイブラハムが天井を見上げた。エイブラハムが顔を向けた方角を見て、恭也はエイブラハムが『心』と同等の技を習得していることを確信する。エイブラハムが顔を向けた方角はさすがの部屋を指していたからだ。

「ねえねえ、エイブラハムさんがねこちゃんを元気にしてくれるって聞いたけど、どうやるの？元氣のでの治療忍術があるの？」

ヴィヴィオに続いて応接間に入ってきた雫がエイブラハムに尋ねる。

「忍術ってほど派手なものじゃないな…、針治療ってやつさ」

言いながらエイブラハムはポケットから樹脂製のケースを取り出した。中には包装に包まれた針が数本。

エイブラハムが母ネコの体に触れ、様子確かめる。母ネコはエイブラハムを一瞥した後、されるがままになつていたが、その手の動きに興味を持った子猫たちが、じゃれつき始めた。

「…ッ」

「雫、ヴィヴィオ、子猫を…、抱いてあげなさい」

困惑して眉を寄せたエイブラハムに恭也が助け舟を出す。雫とヴィヴィオが子猫達を抱き上げる。

「感謝します。月村さん」

「恭也でいい。そちらの方が慣れてる」

「了解しました。恭也さん」

言ってからエイブラハムは数本の針を取り出し、数本の針を母ネコにうつす。

「このまま数分待てば、問題ないでしょう」

「ほう、感謝する」

恭也が言ったが、その後言葉が続かず口を閉ざした。会話が続かない。

もともと、口下手で10代のころからよく枯れていると、妻にかわれている自分の性格を呪っていると、ファリンがお茶の用意をして声をかけてくれた。

「待っている間、こちらをどうぞ」

茶請けに置かれたクッキーに早速雫が手を伸ばす。

「んー、おいしい」

その一言を聞いて、ヴィヴィオが満足げに笑った。クッキーはヴィヴィオの手製らしい。

ヴィヴィオはすずか達にも食べてもらいたいと言ったが、肝心の妹達はまだすずかの私室から出てくる気配がない。フアリンが気を利かせて「呼んできます」と出ていき、数十秒後…。

「！！」

『心』を習得している恭也の耳に、すずかの部屋の方からの悲鳴のような声が聞こえた。しかし、争っているような気配は感じられない。恭也が様子を見に行くべきかと考えあぐねていると、フアリンが数人を引きつれて戻ってくる気配がある。

「お待ちせしました…」

「客を待たせるものじゃないぞ。なにをしていたんだ？」

「え、えーっと…」

応接間に入ってきたなのはに恭也が苦言を呈すると、なぜか顔を赤らめ、目線を逸らした。すずかとアリサも似たような反応。

「小説…、の、話で盛り上がってしまったようです…」

フアリンがニタリつとほくそ笑みを浮かべながら答えると、なのははますます赤面しうつむき、アリサがフアリンを睨み口をへの字に結び、今にも「くっ、殺せ！」とでも言い出しそうな顔をする。最後にすずかはなぜか照れ笑いをして身を振らせた。

「…？」

「…小説？さっきの悲鳴のような声と関係あるのか？」

女たちの表情の意味が分からず恭也が困惑していると、やはり、気が付いていたらしいエイブラハムが疑問を口にした。

「…アビーは黙ってなさい！」

率直な質問になのはとアリサがビクツと体を震わせてから、アリサが怒気をはらんだ声でゆっくりと答えた。

この件に関しての質問は一切受け付ける気はないようだ。なのはもうつむいたまま、コクコクと頷く。

エイブラハムもそれを察したのか、別のことを口にした。

「それにしてもアビーか…」

「別にいいでしょ。エイブラハムは長いのよ。それともエイブかアブラの方が良かった？」

「呼びやすいなら、アビーで結構。この名前に愛着もないしな…」
「あら、そう？折角もらった名前でしょうに…、なのはの名前の由来とか、感動ものよ。ねえ」

「え、わたしの？」

と、言った流れで、雑談が始まり10分程。

「さて」

言って、エイブラハムはベツト籠に近づく。治療中の針にイタズラしないよう子猫たちは離されたままになっていたので、手早く針を抜くことが出来た。母ネコの気怠さは針とともに抜けたらしい。体の調子を確認するように伸びをすると大あくびを一つ。

その様子に子猫たちが気が付き、雫とヴィヴィオの膝の上から、ミイミイと母ネコを呼び始めた。母ネコが一鳴きして応え、軽快な動きで子猫たちの首根っこをくわえて床に下した。

「へえ、もう大丈夫そうね」

「良かった。しばらく、ご飯もあまり食べてくれなかったから」

猫の動きをみて、アリスとすずかが言うと、ヴィヴィオが思い出したように言った。

「ママ、ネコちゃんにおやつあげていい？」

「んー、すずかちゃん、今の時間で、あげてもいい？」

聞かれたのはだったが、月村家では猫の健康を考えて栄養素や与えるタイミングを管理している。長年、猫たちと過ごしてきたすずかに話をふる。

「うん、大丈夫だよ。ファリンさん、出してあげてください」

「かしこまりました。丁度なのはちゃんがお土産に持ってきてくれたものを使わせていただきます」

おやつという単語は母ネコも理解しているようで、耳をピンと立ててヴィヴィオの方に顔を向ける。

「現金だな」

「わたしもあげたい。ファリンさん、いつもの棚の所でしょ。わたしも行く、ほら、ネコちゃん、おやつあげるよ」

雫が立ち上がって言うと、母ネコが雫の足に頬摺りし始めた。

「なんか、ズルい！」

ヴィヴィオが言っつて立ち上がると、負けじとわたしもエサをあげると言い張る。

「エサを与えたなら、運動もさせた方がいい」

「それなら、お庭の方がいいかな？フアリンさん、お願いします」

「かしこまりました」

そのまま、フアリンが猫たちと二人を引きつれ応接間から出ていく。

子供たちの様子を見たさすがが言った。

「あの子たちを見てみると、親に似るんだなーって、思うなあ」

「どっちが？」

「両方、お姉さんぶってる雫ちゃん、負けじと言い返しているヴィヴィオちゃんって…。昔、なのはちゃんに意地悪しているときの恭也さんと、それに怒るなのはちゃんに、そっくりだと思わない」

「確かに、なのはって恭也さんに怒ってたもんね。こらーって言っつて」
当時のなのはの様子を思い出し、握った両拳を目一杯高くあげるポーズを取ると、アリサはニヤニヤと兄妹に視線を送る。

「…」

「そ、そうだったかな？」

その視線から逃れるように恭也は視線を避け、なのはは忘れたことにして誤魔化そうとしたが、エイブラハムと視線が合う。

「…なるほど、当時から活発だった…」

「今は、そんなはしたなく怒ったりしませんよ！」

エイブラハムに分別のない人間と思われてはたまらない。と、なのはは慌てて言った。が、

「やっぱり覚えてるじゃない。今だってそんなに変わらないでしょ」

「アリサちゃん!!」

更に煽られてなのはが思わず両拳を振り上げ掛けた時、ズキリと例の痛みが左腕を襲う。

「…ッ！」

「なのはー！」

顔を歪めたなのはにアリサが慌てて駆け寄る。

「大丈夫。ちよつと痛めているだけだから」

「ちゃんと病院に行つたんでしようね」

心配する友人に、なのははエイブラハムの方にチラリと目線を動かしてから、いわずらそうに言った。

「管理局関係で、…の使いすぎが原因だからちよつと…」

「…そうっ」

断片的な言い方になってしまったが、『魔法の使い過ぎで痛めている』ことをアリサは察してくれたらしい。不機嫌そうに返事をする。

アリサの不機嫌は、なのははに怒っているのではない。友人が苦しんでいるのに、何もしてあげられないことに怒っている。アリサの不器用なやさしさをくすぐったく思っていると、

「アビー君のツボ治療って、人には出来ないの？」

すずかが口に出した。名前を出されたエイブラハムに視線が集まると、

「出来るぞ。技術的には…」

エイブラハムは言いながら、なのはの体を見る。

「ん、長年酷使されてきた一部が酷く痛んで、全体のバランスを崩してしまっているように見えるな」

「…治るのか？」

若いころ無茶な鍛錬をして膝を壊し掛けたことがある恭也が言った。恭也の場合、父が止めてくれた。が、なのはは魔法の才覚があり過ぎたため、蓄積された負荷に誰も気がつけず瀕死の重傷を負うまで気がつけなかったことがある。

あの時の後遺症が残っているのだろうか。と、恭也が心配していると、

「完全に直すとなれば、1年は掛かりますが、余計な痛みがでない程度ならすぐに」

「ほう、そんなに早く治るものなのか？」

「痛みが出たのが最近ならば…。高町1尉、古傷がある場所を何度も

酷使しましたね」

エイブラハムが恭也に説明していると、恭也がジロリとなのはを見る。

なのはは心配させないよう、JS事件で命を削るようなものと言われるような無茶をし、その後も休みを取らずに、教導に務めていたのだが…。そのことは家族には教えていない。

これはこの後、かなりしつかり目に叱られるかもしれない。と、思いつつなのははサツと目をそらした。

しかし、そらした目線の先にはアリサと、さすがが居た。目線が合うとアリサとすずかはニツコリと笑った。二人とも眉間に縦じわを浮かべた笑みだった。

「うん、じゃあ、やってあげてください。アビー君」

「いいのか？俺はこの国での免許を持っていないから料金は要らないが…。すぐに効果がある方法は…。かなり痛いぞ」

「全く問題ないわ。やっちゃいなさい、アビー」

「え、なんで二人が答えるの!?!」

「そうだな、少しぐらい痛い方が、本人も反省するだろう。アビー、やってくれ」

「では、そのソファアにうつ伏せになってもらえますか？高町1尉」

「あれ、お兄ちゃんとおアビー君まで!!」

一切意見を聞かない4人の勢いに怖気づいたなのはを、アリサとすずかが強引にソファアに寝かせる。

「針を使う前にマッサージをします。痛いのはここだけなので、少しの間我慢してください」

「はいー!」

「任せなさい!」

「わ、二人とも抑えないで!」

エイブラハムの口調が、歯医者者の「痛かったら手をあげてください」と、同じに聞こえたのはが起き上がろうとしたが、手足をすずかとアリサに押さえつけられた。恭也はエイブラハムの後ろに控え、無言のままエイブラハムの動きを見ている。

エイブラハムは人差し指と中指を立てた姿勢で一度意識を集中し、
「っ！」

なのはの背中をトトンとリズムカルに数度突いた。

「はわ…わわ…っ！」

なのはの感覚では、突かれた場所から何か温かいものが、しみ込んでくる感覚。

「で、それから…」

エイブラハムが言いながら、指の関節をぽきぽきと鳴らし、クイクイと指の準備運動をすると、力強く指圧マッサージを始めた。

「ふにゃあ!!」

なのはがビクツツと体を震わせるが、エイブラハムはお構いなしに指圧を続ける。

「力加減はどうだ、痛みが酷かったりしないか？」

「ちよつと痛いけど…、それ以上に…、気持ちいいよ。アビー君」

なのはの目つきがトロンとしてくると、手を抑えているすずかも何故か顔を火照らせているのが見えた。足を抑えるアリサの手からも、身じろぎの気配が伝わってくる。

「ん、ん…もう、いいんじゃないか？」

表情は見えないが、恭也が気まずそうな声を出している。

「いや、本番はここからだ…」

極めて冷静な声でエイブラハムが答え、力加減と押しこむ場所を変えた。

57たまには、のんびりお休みVI

「ふぎやあ、ぎあにやああああ」

エイブラハムが本番の指圧をし始めると、なのはは尻尾を踏まれた猫のような声を上げ始めた。

まるで体の中をめぐる血液が逆流しているか、体をバラバラに解体した後もう一度組み直しているような気分である。

「あつーはあうー」

ただ痛いだけならなのはも堪えることが出来たのだが、エイブラハムの指に力が入るたびに、体内の魔力の流れが整理され、正されていく、それが無茶な魔力運用での痛みを和らげ、疲労や凝りを取り除いて何ともいわれぬ快感が生まれるのがいけない。

痛みと快感の間を行ったり来たり、天国と地獄のジェットコースター。

「ダメー、エイブラハムさん。おかしくなっちゃ…、あ、に、やつ!!」

「問題ない。体を痛めている奴に限ってそんなことを言う」

なのはが懇願しても、エイブラハムはどこ吹く風といった様子で、指に力を込める。

「やだやだ、そんなところ突かないで!ん、ああ、あ!すずかちゃん!アリサちゃん!お願い、放して!!」

手を緩める様子のないエイブラハムに、なのはが助けを求める先をすずか達に変えたが、

「ダメよ、なのはちゃん。しっかり…、最後まで直さなくっちゃ…」

そう言っつて、なのはの腕を抑えるすずかの力が増した。

「痛い痛い、すずかちゃん」

「あ、ごめんなさい」

静かな声で謝りつつも力を弱めないすずかに、なのはが視線を向ける。

「ひいっ!」

「どうしたの?なのはちゃん」

「な、何でもないよ」

「すずかの声は『あくま』で静かだったが、その表情を見たなのは心には未知の恐怖が走った。すずかはなのはを見ながら恍惚といった様子をしており、ネズミをいたぶる猫か…、いや、もうはつきり言おう、好みの獲物を見つけた吸血鬼の様なSっ気を出している。こうなったらもうひとしきり満足するか、心臓に杭でも撃ち込まれでもしない限り、絶対に放してくれなさそうだ。

「なのはは顔を伏せ覚悟を決めた。とにかく手早く終わらせて貰った方がいい。」

「アビー君！お願い、早く！」

「わかった。では、少し本気を出そう…」

「え!!やっぱり、ちよつとま…。に。やっあ。あ。あ。あ。あ。」

その後、数分間悲鳴と嬌声を交互に上げ続けたなのは。

エイブラハムがマッサージを終わらせても、なのはは全身の骨が抜かれたかのように、しばらく動かなかった。たつぷり五分以上息を整えてから、ゆつくりとなのはが身を起こす。息も絶え絶えのその表情は長湯でのぼせた人の様にふわふわとしている。

その様子に顔を赤らめたアリサが言った。

「ねえ、アビー、これって大丈夫なの？テキーラのショットを決めた酔っ払いだって、もっと、シャンとしてるわよ」

「指圧自体での痛みがなければ、問題ない。どうか？高町1尉、体の調子は？」

「なのはは体をふらふらと揺らしながらも、肩や腕を回し体を捻ると、」

「…すつごく、良かったです」

と、答える。

「ホント？腕とかはどうなの？さつき、あんなに痛がつてたじゃない」
「…大丈夫みたい、少しまだ痛みがあるけど…」

アリサが念を押すと、なのはは左腕を曲げ伸ばしをしながら答えた。

「では、針を数本打っておこう。腕を…」

促されるまま、なのははパフスリーブトップスの袖を捲り上げる。と、エイブラハムの顔が近くにあることに気が付き慌てる。

何気なくやってしまったが、袖下から下着が見えてしまうのでは？と、思ったが、エイブラハムの真剣な表情で触診している姿に安堵する。見られてはいないようだ。

エイブラハムはなのはの手を取り狙いを定めると、針を数本打った。痛みはなく何かスーツと入ってくる感触だけがあった。

「このまま、そうだな。15分ほど待機で」

結構、時間がかかる物なんだな。と、思ったのはなのはだけではなかった。

「ふくん、急に暇になったわね」

「本を読むにはイイ時間かも」

「すすずか（ちゃん）」

すすずかが混ぜ返すので、思わず怒気のはらんだ声を二人が出すと、すすずかが悪ふざけをしていたことを知らない、恭也が怪訝な顔をした。エイブラハムも首を捻りながら、懐からタバコを取り出そうとして、応接間に灰皿がないことに気が付く。エイブラハムがため息とともに、タバコをしまおうとしたが、

「すみません。喫煙スペースは別に用意してあります」

「悪癖ねー、せめて加熱式にしなさいよ」

「警備会社で待機中に、時間を潰すのに丁度いいんだ。携帯ゲーム機や、アプリゲームも待機中のお供だ」

「へー、アンタもゲームとかやるんだ。何やってるの？」

「SAM Y機ならBOAと、GODだな。アプリならINNOCENT GAME Sのブレイブデュエル」

「マジ!!勝負しちゃう?」

最近ハマっているゲームソフトの名前が出てきて、アリサの目が色めいた。周りにはこのゲームをやる人がいなくて、対戦相手に飢えていたのだ。

「吸わせてくれるなら…」

アリサの様子にこれは逃げられない。と、思ったのかタバコのケー

スを取り出しながらエイブラハムが答えた。

「なのは、悪いんだけど、すこしアビーを借りていくわよ」

「ふふ、こつちです」

かっこの獲物を得たと喜ぶアリサの様子に微笑みながら、エイブラハムを案内するすがすがが応接間から出ていく。

二人つきりになったところで、恭也が口を開いた。

「なのは、事件に進展はあったのか?」

「ううん。犯人の身元とかはまだわからないけど、近くの次元航行船が調査してくれるって」

「まだ、これから始めるという段階か…」

「にやはは、でも、護衛もつけてもらっているし大丈夫だよ」

「ああ、近くの気配はその連中か…」

恭也の念話に不機嫌な雰囲気に乗った。

護衛達の練度は決して低くない。少なくともレイジングハートのパッシブセンサーでは捉えることができない。しかし、恭也には気配が分かるらしい。

兄の護衛としての腕前に驚きつつも、なるべく心配させないようになのは冗談めかしていた。

「大丈夫だよ。いざとなったら、お兄ちゃんが助けしてくれるんでしょ」

「あ、ああ、まあ…」

ニコリと微笑みながら言うと、恭也は何も言い返せなくなってしまう。仕方なく、話題を変える。

「それで、どう思っているんだ?」

「え?」

「あのアビーという男だ」

「…」

「海鳴で忍者姿の魔導師が現れるようになったのは、あの男となのが会ったところ、なんだろう?そんな偶然があると思うか?」

恭也はアビーに対して疑惑を持っていた。

この部屋に入ってから、アビーの行動を意識の中に置いていたし、なのはに施術を行っている間は、ほんの少しでも悪意や殺気を感じ

じたら対処しようと、エイブラハムの死角に立っていた。今も、エイブラハムの気配を捕捉しているので、すずか達に何かあればすぐに駆け付けることが出来る。

「うん、私もそう思っ、注意している」

今もなるべく隠密性をあげたサーチャーで、エイブラハムの様子を監視し映像と音声がレイジングハートを介して送られてきている。

タバコをくわえたエイブラハムと、アリサが手元のスマホを操作している。

「ちよ、ちよつと、待ちなさいよ！」

「もう、遅い」

「ああー！」

レイジングハートのイメージ映像越しに、アリサが悲鳴をあげたのと同時に、間の抜けた効果音が響いた。

「俺の勝ちだな」

「く、だ、誰が1回勝負って言ったのよ。3回勝負よ、3回勝負！今のはあんたにハンデをあげるのに、わざと負けてあげたんだから！」

エイブラハムとアリサのアプリゲーム勝負は、どうやらアリサが劣勢に立たされているようだ。

意識を恭也との会話に戻す。

「アビー君には魔導師には必ずあるリンカーコアがないの」

「リンカーコア？」

「うん、魔導師の力を作っている場所って言えばいいのかな。これがないと魔法は使えないんだ」

3日前の戦闘中忍者は確かに魔法を使用していたし、忍者自身からの魔力も感じ取れた。レイジングハートの見立てでは、魔力出力クラスB。武装隊員としては、一人前と言っ、いい力を持っているが、魔力出力が落ちているのはにとっても、大した脅威とは言えないレベル。

魔法の知識の無い恭也のために、なのはが簡単に説明すると、すぐに疑問を返してきた。

「気配を隠すことは出来ないのか？」

「魔導師にとっては呼吸みたいなものだから、長時間止めておくことはできないの。それに、こっさり、アクティブ・スキャンを掛けてみたけど、それらしい反応はなかった。アビー君の着ている服は普通の服みたいだから、僅かでも魔力の流れがあれば車の中で、レイジングハートは気が付いたはずだよ。少なくとも、今、アビー君にリンカーコアはない」

教導隊で見た資料によると、特殊なBJや戦闘機人が使用していたステルスジャケットのような武装を使用して、魔力の流れを遮断することは可能だ。しかし、今度はその魔力の流れの空白地点を特定することで、位置の特定が可能になってくる。エイブラハムには、リンカーコアから発せられる魔力も、それを遮断している形跡もない。

「そうか…、だが…」

「どうしたの？」

「あのエイブラハムという男。腕前を隠しているしな」

「隠す？」

「運動でもなんでもそうだが、武術でもある程度以上の腕前になると、動きに一定のリズムが出てくる。そのリズムで特定されるのを嫌っているか、あるいは自分に敵意がないことを示しているかどっちかな。美由希が警戒して、シャーペンを投げつけそうになったと言っていたぞ…」

美由希がいつも持ち歩いているシャーペンは、工業用の鋼鉄製で御神流で使う「飛針」の代用として使うこともできる。万が一の備えという奴だが、なのはは初めて知った。

翠屋で美由希がお静かにと、エイブラハムに警告していた時、それほどまで一触即発だったことを知ったなのはの声がひきつる。

「そ、そんなことになってたんだ…」

「取り合えず、こちらに悪意はなさそうだ。父さんと美由希も同じ考えだ」

「う、うん」

「…そういえば、…お前もアビー君と呼ぶんだな」

「え、ああ、アリサちゃんエイブラハムは長いつて言っていたし、多

分、わたし達と同じくらいかなって…」

兄が複雑そうな顔をして聞いてきた。いつものことと言えば、いつものこと。ユーノ、クロノ、ヴァイス、グリフィスと兄が始めて知る名前を出すたびに見る顔だ。

そんなことを話していると、アリサの声が直接耳に届いた。

「うつそでしょー！」

レイジングハートが状況を教えてくれた。

「そ、そんな！嘘よ！このパーフェクトな、あたしが…」

「これで、俺の3連勝だな。5回勝負でも俺の勝ちだ」

「ぐぐっ！」

エイブラハムの3連勝が確定したところのようだ。さすがに言い訳もできずに、アリサが拳を握りしめている。

「ま、いい暇つぶしになった。腕を磨いたのなら、また相手をしてやってもいいぞ」

「すずか〜！」

「ええ、無理だよ。このゲームはアリサちゃんの方が得意でしょ」

「く、くううー！」

アリサは、すずかに敵を討ってもらいたかったようだが、断られて涙をのんでいる。

エイブラハムはくわえていた煙草を、携帯灰皿に押しこむと、

「そろそろ、いい時間だ」

エイブラハム達が戻ってくる。

「さて、効果があればいいが…」

「…」

応接間に戻って来たエイブラハムに針を抜いてもらったのはが、ゆっくりと深呼吸をする。

なのはは体内の魔力がスムーズに流れていることを理解する。

今に比べたら休み前の状態は、体が石になっていたかのように思える。体を交換したかのような気分にする。

「どうしかしたのか？なのはは」

なにも言わないのはを心配した恭也が訪ねて、ようやく茫然自失状態から抜け出した。

「すごい！体が軽いよ！アビー君！」

「効果があったようだ」

興奮気味のなのはの様子に、エイブラハムは満足したようだ。うれしそうに笑う。

「あら、なのは。よくなったの？よかったじゃない！」

「よかったね。なのはちゃん！」

「うん」

アリスとすずかに声を掛けられた、なのはは快調具合をアピールしようと、エイブラハムがいるのも忘れて、魔力出力を上げて簡単な魔法を使おうとした。

「…あつ！」

しかし、小さな違和感で冷静さを取り戻す。魔力の集まりが普段とは違う。

「なのはちゃん？どうしたの」

「えーっと、なんて説明したらいいのかな？力の入り方が違うとか…、遅いって言えばいいのかな？」

「ちよつと、失敗したんじゃないの、アビー」

なのはが声を上げたことで、すずかとアリスがエイブラハムに詰め寄る。

「この治療は怪我を直すわけじゃない。ケガが治りやすいように体を整えるものだ」

「…？」

「なんだ、治んないの？」

「アリス、勘違いしてないか？怪我や病気は医者が治すものじゃない。本人が修すものだ。医者はその助力をしているだけだ」

「ふーん、そんなもかしら？」

「ああ、この治療の意義は、負荷のかけ過ぎで傷んだ部分にバイパスを通した…。あるいは、直流を並列と言った表現がいいのかな…」

「ああ、なのはが無茶しても、リスクが分散するようにしたってこと

ね」

「まあ、そんなところだ」

エイブラハムの説明を、アリサは自分なりに飲み込めたようだ。アリサが意味ありげな視線をなのはに向け釘をさす。

「無茶したりすると、治らないんだって」

「…にやはは」

なのはは慌てて視線を逸らしたが、逸らした先ではさすが待ち受けていた。アリサと同じ視線を投げってくる。兄に助けを求めようとして諦めた。アリサ達と同じ顔をして頷いている。

「全くだな。折角休養に来ているのだから、ゆっくりしていればいい」
「…気を付けます」

その様子を見ていたエイブラハムが口を開く。

「良い友人を持っているな。高町1尉」

「うん、自慢の友達だよ!」

「良い友人」そう言われて、なのはは思わず飛び切りの笑顔で返す。言葉通り小学生の頃から、アリサ達と友人になれたことは自慢の一つだった。

「なのは、あんた…。そう言う台詞をよく恥ずかしげもなく言えるわね」

アリサが恥ずかしそうに言った。

「そうかな?」

「だよね。わたしも言えるよ。アリサちゃんとなのはちゃんは良い友達だよって」

会話に入ってきたさすががしれつとした様子で言った。

こうなると、アリサの分が悪い。二人が「良い友達」と口にしたのだから、アリサ自身も言わなければいけないような気がするが、面と向かって言うのは恥ずかしい。

「……」

「……」

なのはとすずかが、アリサを見る。アリサは目線を合わせないようにしていたが、二人の無言の視線攻撃に負けて、絞り出すように小さ

な声を出した。

「くっ、…解ったわよ。…ふ、二人は良い友達よ…」

「うん、うん!」

「ふふっ!」

なのはが元気に頷き、すずかがうれしそうに微笑む。赤くなったアリサはそっぽを向いて膨れていたが、嫌がってははいまい。

「意志の決定権を握っているのは、一番活発に見えるアリサより、1尉達なんだな」

「ああ、正確には、二人がアリサの手綱を握っていると云った方が…」
三人の関係性にエイブラハムが感想を言うと、恭也が続け掛けたが…。

「恭也さん!」

キツ!と、アリサにすごい剣幕で睨まれて、肩をすくめて恭也が黙る。

話を逸らすようにエイブラハムが咳払いをした。

「先にも言ったが、傷ついた部分が治ったわけではない。無茶は厳禁」
「うん、ありがとう。でも、本当にすごいよアビー君。スポーツ障害のお医者さんみたい」

「医者ねえ…、まあ、先生のまねごとが出来たのなら、良かったとしよう」

答えながらエイブラハムは出していた鍼治療道具をしまい込む。

「さて、治療も終わった。そろそろ失礼する」

「もう帰るのか? 治療費はいくらだ?」

「こんな素人芸で報酬は貰えませんよ」

「なら、お茶ぐらい飲んでいってくれ」

報酬も受け取らずに帰ろうとするエイブラハムを、恭也が引き留めた。このままろくな礼もせずには帰すのは、礼儀に掛けると思ったようだ。

アリサもそれに加わる。

「それに、あんた。勝ち逃げするつもり?」

「勝ち逃げ?」

「決まってるでしょ、デュエルよ！」

「勝負はすでに、決まったはずだが？」

「だから、さっきの勝負はあんたの勝ちでいいわ。その上でもう一回勝負よ！」

どうやら、勝つまで帰す気がなさそうなアリサの様子に、エイブラハムが助けを求める。

しかし、なのは達にできたのは、せいぜい苦笑を返すことだけだった。

「今日中に帰れるんだろうな…」

エイブラハムがボヤいていると…

「二人とも、おりてくださいさ〜い！」

応接間の窓から見える庭から、ファリンの必死な声が聞こえてきた。

58 たまには、のんびりお休みVII

ファリンの必死な声に、恭也が庭に出てみると、

「…あ、ヴィヴィオ、そっち、そっち！」

「あわわ、ダメ、そっち行っちゃダメー！」

最初に庭に飛び出したアリサが目丸くして言った。

「わあ！雫？ヴィヴィオ!？」

庭に植えられた木によじ登り、雫とヴィヴィオが子猫達を追っていた。

木の根元では、母ネコが心配そうに見上げている。

「あ、危ないよ、ふたりとも！」

「なにやってるのー」

アリサに続いて庭に出たすずかとなのはが声をあげる。二人はそこそこ高い所まで上ってしまった。

「あ、お父さん！」

「ママー」

心配するなのは達に対して、雫とヴィヴィオはいたって呑気に、こちらに向かって手を振った。ファリンがこちらを見つけていつてくる。

「申し訳ありません、恭也さん。子猫たちがおやつを取り合いをしているうちに、喧嘩をしまして…」

「そうそう、その内この子が木の上に逃げて…、その子が追い駆けたんだけど…」

「高く登り過ぎて、降りられないんじゃないかって…」

「それで、救助活動を」

恭也に説明するファリンの言葉は途中から雫とヴィヴィオに引き継がれ、最後には声が重なった。

女たちの後に続いた恭也はすぐに動けるように身構えながら思った。

（二人とも息が合うほど仲良くなってくれるのはいいが、腕白な所まで一緒にならないでほしかったな。雫はともかく、ヴィヴィオもなか

なかにお転婆のようだ)

普通の運動が苦手だったのはと違い、その娘の運動神経は悪くないようだ。雫についていけている。

「ですから、わたしが梯子を持ってくるまで待つてください。と、言ったのに」

言ったフェアリンの足元には脚立が置いてある。多分、物置に脚立を取りに行ったフェアリンを待ちきれずに、二人が木に上り始めてしまったのだろう。

大人たちの心配をよそに、雫達は子猫たちに声を掛ける。

「ねこく、ねこねこー…。…ちつちつ」

「ほら、おやつあげるから、こっち、おいで」

「ふみいいい」

子猫たちは気が立っているようだ。喧嘩した勢いのまま高い木に登り、興奮がそのまま不安に変わってしまったのだろう。

「あ…」

「だめ、あの子」

子猫のかたわれが、地面を見ながら体を丸める。枝の先から飛び降りようとしているようだ。それにつられて、もう一匹の子猫も跳躍しようとしている。

「!!」

子猫たちが跳んだ瞬間、雫とヴィヴィオが手を伸ばし、子猫達を確保する。が、

「…あー」

ズルつと足を滑らせ。二人そろって、体勢を崩した。

御神流・奥義 『神速』

瞬間的に自らの知覚力が爆発的に高められ、全身の毛が逆立つ。モノクロの視界の中、恭也は走り出す。

普通なら届くはずのない距離を、ゆっくりと詰めていく、ズシリと周囲の空気が重く煩わしい。他の物が完全にスローモーションに見える世界の中、それよりいくらか速い速度で、恭也は二人のもとへ走る。

いや、一人だけ恭也と同じ速度で、動いているものがある。エイブラハムだ。

位置の関係上、恭也の方が一步だけヴィヴィオに近く、エイブラハムは雫に近い。

(どうする?)

自分の娘をこの男に任せていいのか? チラリとそんな考えが、頭を掠めたが…。視線の端に映るエイブラハムの目は、まっすぐ木から落ちる二人しか見ていなかった。

恭也は近いヴィヴィオに向かって走った。途中、肌に魔法が使われる時の独特の振動を感じたが、ヴィヴィオと子猫をしっかりと受け止める。

「はわ!」

「むきゆう!」

ヴィヴィオと雫が間の抜けた声を出す。雫と子猫の片割れはエイブラハムが受け止め、抱き上げていた。

「…軽いな、ちゃんとご飯食べてるか? 雫。好き嫌いするといいい剣士には慣れないぞ」

エイブラハムが雫を下ろしながら言う。そう、受け止めたヴィヴィオも軽すぎる。目線をなのはに向けると、小さく相槌を打った。対象に浮遊の効果を与えるフローターと呼ばれる補助魔法を二人に掛けたいらしい。エイブラハムがいる前で、魔法を使うとは大胆だなと、思いながらヴィヴィオを下す。

子猫がするりとヴィヴィオの手の中から抜けて、母ネコの元に駆けていった。

と、

「エイブラハムさん! 女の子に体重のこと言っちゃダメなんだよ!!」

「…む、そ、そうか…」

雫がエイブラハムを説教していた。

まず、助けてもらった礼を言うのが先だろう。と、雫の頭をパツチンとやりながら、エイブラハムに頭を下げる。

「娘が危ない所をありがとうございました」

言いながら、恭也は雫の頭を掴んで下げさせた。

「いいえ、貴方の腕ならば二人とも、受け止めることが出来たでしょう。要らぬ世話を焼きました」

エイブラハムが謙遜して答える。

「ヴィヴィオ、雫、大丈夫だった？」

「うん」

「平気」

なのはが駆け寄って来て、2人が元気に答えるとホッと息を付いた。

が、なのははすぐに母親の顔になり、恭也も雫を叱った。

「平気じゃないだろ、雫！あんな高いところまで登るなど言っているだろ」

「ヴィヴィオもだよ。危ないことしちゃいけないって約束したよね」

「ごめんなさい」

子供達をしかる兄妹の表情はよく似ていた。子供たちも、シユンとして聞いている。

「おお、なのはがちゃんど、ママをやっているわ」

「そうだね。でも、なのはちゃんって、昔から怒ると怖かったよね」

「そういえばそうね。そういうところ、桃子さん譲りよね」

「そうなのか？桃子が？想像つかないのだが…」

「うくん、桃子さんの場合、怖いだけじゃなくて、本当に悪い事した気分…」

外野になってしまったアリサ、さすが、エイブラハムの三人が、そんな会話をしていると…

エイブラハムの近くでニョキッと何か伸びた。

「何だ？散水スプリンクラーか？」

エイブラハムが言う。確かにそれはスプリンクラーによく似ていた。

ガシャコン、と、砲身のようなものをエイブラハムに向け、狙いを定めるまでは…。

「ん？」

「あ、ちよつと！」

「アビーさん!!」

エイブラハムが暢気に砲身を覗き込み、アリサとすずかが警告した瞬間だった。

ボフンツッ!

圧縮空気のちよつと間の抜けた音がしてエイブラハムの顔面にゴムボールが飛んできた。

「イっつっ!何だこれ!」

ボールを避けずに(避けるとアリサとすずかに当たる)咄嗟に手で払ってエイブラハムが叫んだ。

「大丈夫、アビーさん!?それセールス撃退用のトラップ!」

「セールス?そんなレベルのものか!?これが!顔に当たろうものなら、鼻が引つ込みそうだぞ」

払った手がかなり痛かったようだ、言葉遣いが荒っぽくなっていく。

そんなエイブラハムにアリサが一言。

「もともと低いじゃない」

「なんだと!あんたこそ出すぎた性格を引つ込めたらどうだ!」

「なんですって!すずか!どんどんやっちゃって!」

エイブラハムに言い返され、激昂したアリサに呼応するように、ニヨキ、ニヨキと新たな砲身が現る。

「うわ、本当に増えた!」

言ったアリサ自身が驚いている間に、射撃が開始される。

咄嗟にエイブラハムの後ろに隠れるアリサ、すずかは飛んでくるボールが見えているので、ヒラリと避ける。

「ッ!」

エイブラハムは命中コースのボールをキャッチして見せた。が、流れ弾や跳弾がなのは達にも降り注いだ。

「わあ、わあ!」

驚きながらも、なのははボールの軌道が、初めからわかっているかのように、手のひらで受けていた。目の利く人には、ボールを受ける

なのは手のひらから、桜色の何かが弾けるのが見えていただろう。
「あわわわ」

フアリンは頭を抱えてしゃがみ込んでいるが、なのはが近くにいたおかげで、無事のようなのだ。

「おっとー!」

恭也も子供たちに飛んでくるボールを払っている。こちらはこういうことにはちよつと慣れていて。と、言った風情だ。

「ちよつと、アビー! アンタが狙われてるんじゃないの!? あつち行きなさい!」

「やかましい。見てわからないのか! 無差別に撃っているじゃないか!」

「じゃあ、せめて盾になりなさいよ、男でしょ!」

「その言い方は最近じゃ、炎上案件だぞ」

言いながらもエイブラハムの後ろに隠れたアリサを、飛んでくるゴムボールから守るエイブラハム。

トラップの装弾数がなかなかあるようで止まる気配を見せない。

「すずか、忍が止める合言葉があるって言ってなかったか?」

「そんなのあるの! きゃあ! すずかちゃん、止めて!」

「そ、そうだね。確かコード・ブルー(Z)」

すずかの言葉に機械達が射撃を止める。が、

《あなたのデータは登録されていません》

機械の発した言葉と共に攻撃が再開された。

「な、なんで、どうして?」

すずかが珍しく驚くが射撃は止まない。

《警告、警告、月村家では、セールスその他の勧誘を一切お断りしています。ただちに退去してください。退去が確認されない場合は威嚇射撃を行います》

「いまさら、警告?! おそ!!」

「にやあああ、もう、撃ってるよ!」

「プログラムの優先順位が変わってる!」

「この家の交戦規定は、どうなっているんだ!」

機械から響く合成音に、弾雨にさらされているもの達が大声を上げる。

「そういえば。忍がトラップを改良したと言っていたな。昨日」
冷静な恭也の声。

見れば雫達をトラップの射線が通らない安全な木の影に隠し、高みの見物を決め込んでいる。

「あ、ずるい！お兄ちゃん」

「もう、お姉ちゃん！また、失敗して！」

それぞれの兄と姉に不満を言うのはとすずか。2人の口ぶりからこういうことは、1度や2度ではないようだ。

すずかが伏せながらスマートフォンを操作し始める。オンラインでシステムの設定を確認し、

「あ、この設定だと、登録にない人が一定時間いると、撃つ設定になっているみたい」

「あ、もう、やっぱり、あんたのせいよ！とつとと、帰りなさい！」
混沌としてきた状況にとうとう、アリサがキレて足元にあつたボールをエイブラハムに投げつけた。

「いてー言われなくてもそうするさ。こんな危険地帯！」

「あ、でも、車……」

「適当にタクシーを捕まえるさ!!」

別れの挨拶もそこそこに、エイブラハムは月村邸から逃げ出した。

59 海鳴市の夜Ⅳ

「すでに感染してしまっているのは、その子だけらしい」

司令官と呼ばれている男がそう言った。

女兵士とその部下達が施設を『せいあつ』したあと。僕は女兵士に元いた部屋に連れ戻された。理由はよく分からなかったが、先ほど打たれた注射が問題になっていいるらしい。

女兵士が司令官に尋ねた。

「…助ける方法は？」

「こちらの装備では、無理だ。…強いていうなら、疑似リンカーコア・システムを埋め込めば、マイクロ・デバイスがウイルスを殺してくれる可能性が高い」

「それなら…」

女兵士が少しだけ声を弾ませたのを、司令官が遮った。

「システムを受け入れられる適性を持っている人間は、4人に1人程度。この子の適性を調べている時間はないんだぞ」

「適性を持っている可能性もあるわ」

そんなことは分かっていると司令官は顔をしかめた。

「今のこの世界の法律では、システムを使っている者は危険な戦闘機人として、殺されていっている。それをかばった人間もだ。管理局の自称平和維持軍でさえ、捕虜にすらしていないこの状況だぞ」

「分かっているわ。だから、私の隊で引き取る」

「今、我々に余裕はない。隊で引き取るということは、戦いを手伝わせることになるんだ。彼は将来思い悩むことになる」

「いいえ、そんなことは私がさせない。そだててみせるわ。勝って高慢に、負けて卑屈にならず、どんな困難も乗り越えていけるタフな男にね」

「…そこまで言うなら君に任せよう。だが、本人の同意を得た後にだ」
観念した司令官が最後にそれだけいった。

女兵士がこちら視線を合わせると、僕の置かれた状況を説明してくれた。だが、正直、ゲリラだの、バイオ兵器だの、当時の僕には分か

らない単語だらけで、内容の半分は理解できなかった。ただ、女兵士達の提案を受け入れなければ、自分が死ぬことは分かった。

「あと3時間ほど、猶予が…」

僕を怖がらせないよう、なるべく優しい言葉を使って慰めてくる女兵士を遮って、僕は答えた。

『次はく、…、…、お降りの際は…』

タクシーから電車に乗り継ぎ、しばらく揺られていると、追って来ていたサーチャーの気配が消えた。ようやく索敵圏外に出たらしい。

ぼんやりと物思いに耽る真似も終りだ。

「取って返す、ルートはどうするか…」

エイブラハムが月村邸から逃げ帰った後、アリサとすずかは大学の教授から呼出を受けた。成績の上昇を確保するため、なのは達と別れ大学に向かった二人が帰途についてしたのは、夏の日すら落ちた後だった。

帰り道、ハンドルを握るのはアリサ。月村邸に向かう道は、夜間になると車の往来が少なくなり、彼女のお気に入りであった。普段なら鼻歌交じりに車を運転するアリサだったが、今日は鼻歌の代わりに不平不満をぶちまけていた。

「なんなのよ！あのバカ教授！人を突然呼び出しておいて、教え子に自分の論文の見直しさせる?!フツー!!」

「まあまあ、アリサちゃん。それだけ、アリサちゃんを頼りにしているんだよ」

アリサの愚痴を受け止めるのは、助手席に座るすずかだった。すずかはいつものように、笑ってアリサを宥める。

「頼り？ふん、この完璧なあたしをタダで使える助手か何かだと勘違いしているのよあいつ！」

「でも、勉強になったよ。学生へのなによりの報酬は知識ってことじゃないかな」

「すずか、あんた人がよすぎよ。今回の働きは次の研究室での飲み会

で、支払わせるべきだわ！」

「ええ、そんなの悪いよ」

クツクツクツと、いやらしく笑うアリサにそう返しながらも、教授が差し出してきた缶コーヒーだけでは物足りない。と、思ってしまう
「さすが。」

「いいのよ、どうせ大学から研究費を結構貰っているんだから。研究に貢献しているあたし達が、イイ思いしたって罰は当たらないわよ」
「なるほど、そうかも…」

そんな会話をしていると、体が運転席に傾く。車が緩やかな左カーブに入っていく、対向車のフロントライトで、すずかの視界が一瞬真っ白に染まった。

「捕まって!!」

アリサの悲鳴のような警告と、同時に前に放り出されるような衝撃と、キィキィツツ!という、気味の悪い悲鳴のようなブレーキ音が響く。

目の前に夜間ライトも点けていないワゴン車の後ろ姿が迫る。

シートベルトに押さえつけられた左肩が鈍く痛む。でも、それだけ

…

急ブレーキが功を奏して、車はギリギリのところまで止まっていた。

「……」

すずかが隣を見ると、目を見開いたアリサが息を呑んでいた。視線に気が付いたアリサは、額の汗も拭かずに振り向いた。

「だ、大丈夫? すずか?」

さすがのアリサもあわや衝突という事態に肝を冷やしたようだった。震える声で聞いてくる。とはいえ、こちらも似たようなもので、上手く声が出ずに、コクコクと頷いて無事を知らせる。こちらの意図は伝わったらしい。

アリサが表情を緩めて、安堵の溜息を付いた瞬間…、

「っ…!」

今度はアリサの警告すらなかった。突然の衝撃に瞬間的なパニックを起こすが、視界だけが奇妙な鮮明さで窓の外の光景を映し、車が横回転していることを知らせた。車が半回転、反対車線のガードレール

ルに衝突して止まる。

車が半回転したお陰で、後ろから追突してきた車が正面に見えた。スポーツカータイプの車に男女4人が乗っていて、運転席の男が降りてくるところだった。男は無表情にこちらを観察している。

「あく、もう、ちよつと、文句言つて来る」

「まっつて、アリサちゃん」

衝撃によるショックを頭を振ってやり過ぎしなから、アリサがドアを開ける。

止めようとしたが、すずか自身が思っていたよりもショックが大きかったらしい。寸での所で届かずアリサが車の外に出してしまう。

閉じたドア越しに、

「あんたはここにいなさい。」

と、強めの口調でいうと、相手ドライバーのところへ、向かつていく。

(なんだろう？…なにか、おかしい…)

相手ドライバーは、こちらを観察していた。まるで自分の行動の効果を確かめているかの用だった。絶対に事故で怪我をしていないか心配するとか、事故を起こした自分を嘆いている表情ではない。

すずかは不安を覚えて、アリサの後を追おうとしたすずかの体が止められる。

なに？…あ、シートベルト。邪魔！

先ほどフロントガラスに顔を打ち付けることから、救ってくれた命綱を荒っぽく外し、運転席側のドアから外に出る。

チカッ！

車から降りた途端、光が瞬いた。すずかは写真を撮られたのかと思っただが、すぐに考え直す。相手の車に乗っている男女はカメラを構えてはいなかったし、アリサが突然グラグラとよろめき始めたからだ。

「アリサちゃん！」

声を掛けながら近寄ると、アリサは我に返ったようで、すずかを見る

アリサがフツと鼻で笑った。さすがが初めて見る侮蔑の笑み。その顔にすずかは酷い不快感を覚えた。まるで、悪霊がアリサに乗り移って笑っているのではないか。と、本気で思ったくらいだ。

「気分はどうですか？」

相手ドライバーが口を開き、すずかの知らない言語を口にした。

「奇妙な気分になるものですね。女の身体というのは」

と、同じ言語で《アリサ》が答えた。声の出し方も普段とは違いうですずかには別人の声に聞こえた。

なにか特別なことが起こったのが分かったが、仕組みが全く理解できない。

(地球のモノじゃない！魔法?!)

そう思った瞬間、踵を返して走り出す。アリサのことは心配だったが、今だれかに知らせることができなければ、アリサを助けることは絶対にできない。そう思ったからだ。

走りながら、スマートフォンに入ったポケットに手を伸ばす。

足が何かに引っかかり、つんのめって転ぶ。咄嗟に付いた手と膝に焼けるような痛みが走ったが、構っていられない。見ると分銅の付いた鎖が足に絡みついていていた。鎖の延長線上には、先ほどのドライバーが鎖に繋がれた杖のようなモノを握っていた。

ドライバーは男。しかもかなり鍛えられた逞しい身体をしている。振り払うことなどできそうにない。

指紋認証でロックを解除。

「OK、ラリーー！電話で…!!」

ドライバーが鎖の柄を振るった。

「ッ！」

途端、ズンと重力が10倍にもなったような気がした。体重を支えられずに地面に伏す。

一瞬、意識も失っていたらしい。

いつの間にか手放してしまい地面に転がったスマートフォンが、目の前でブスブスと煙を出していた。

身体は、…シビレてうまく動かない。その上、ひどい倦怠感と吐き

気がする。

高い電力の電気を流されたらしい。すぐに意識が戻ったのは奇跡的だったかもしれない。

鎖が巻き戻されるように短くなり、地面を引きずられる。擦り傷が増えたが、痛みはシビレのお陰で感じなかった。

すれ違ったはずの対向車が戻ってきて、人が降りてきた。

事故に気が付いて、助けに来てくれた。…訳ではなさそうだが、ドライバーと話をしている。

止まっていたワゴン車からも数人が降りてきた。こちらも知らない言語でドライバーと《アリサ》に話しかける。全部で十数名。

(みんなグル…)

それだけ理解した。身体は…、ダメだ。下半身にほとんど力が入らない。

「っ！」

力の代わりに、悪寒が身体を巡る。

ワゴン車から降りてきた人達の一人。背が高くガツチリとした体格の白人の男が、ニヤニヤと笑いながらすずかに下卑た視線を投げている。

すずかは逃げる方法を模索することで、男の視線の意味を考えないように勤めた。そうしないと、怯えてふるえ出しそうだった。

その男が《アリサ》に、声を掛けると《アリサ》がヒステリックに叫んだ。しかし、男がニヤニヤとした顔のまま、もう一言二言言葉を発すると、軽蔑した表情を浮かべながらも頷く。

男が近づいてくる。

「…イ、…ヤ」

上半身だけで這って逃げ出そうとするが、簡単に追いつかれる。担ぎ上げられ、ガードレールの外に放り投げられた。

ガードレールの外は急な坂になっていて、すずかの身体は勢いよく転がり、その先に広がる雑木林の一本にぶつかって止まった。

男はすずかが木にぶつかった痛みをこらえている間に飛び降りてきた。数mの高低差などものともしていない。そのまま、すずかの髪

を掴むと雑木林の中に引きずり込む。

すずかも男の腕を振り払おうと抵抗したが、ビクともしなかった。

男に20m以上林の中を引きずられ、さらに傷が増える。林の中は暗く数mの視界もなかったが、僅かに届く月と街灯の光が反射した、男の目だけがやけにはつきりと見えた。

そのまま、荒々しく引き倒される。男が馬乗りになり、すずかの豊かな胸に彫りの深い顔を埋めてきた。

キツイ男の体臭がすずかの鼻についた。

「……っ！」

嫌悪感に泣き出しそうになるが、それ以上にこのまま弄ばれてたまるものかと、反骨する気概の方が強く沸き上がってきた。

男が顔を上げ、すずかのパーカーチェニツク裾を掴んだ瞬間、言うことを聞かない身体を叱咤して、すずかは思いつき右腕を振るった。

平手打ちなんて甘いことは考えなかった。爪を立て顔をねらった指に、皮膚となんだか柔らかいものをひつかいた感触。

「…ギヤッ！」

男が短い悲鳴を上げる。左目から血の混じった涙が流れていた。してやったと喜ぶ間はなかった。激昂した男に胸ぐらを捕まれる。

ガッン！

突然、目の前で火花が散った。鼻の奥がツーンと痛くなる。頬が熱くなり、口の中に広がる血の味で、すずかはようやく殴られたことに気が付いた。

衝撃で頭がクラクラする。意志とは関係なしに、溜まった涙で視界がゆがむ。

それでも、両腕を振り回してあらがおうとしたが、男の片手で押さえ込まれてしまう。

「…誰か…っ、いや…」

叫ぼうとしたが、殴られた直後のショックのせいで、声が上手く出ない。

男がもう一度拳を振り上げた。

60 海鳴市の夜Ⅴ

思わず目を閉じた。身体を竦めて、殴られる覚悟をする。

が、殴られる音の代わりに、小さな風を切るような音が耳にはいると、両腕の拘束が弛んだ。

「え?」

理解できずに目を開けると、男は喉を押さえて苦しんでいた。男は声を上げずに代わりに、管から空気が抜けるような奇妙な音を出していた。

草と落ち葉を踏む音がして、雑木林の闇の中から染み出してくるように、黒い人影が現れる。

すぐに馬乗りになっていた男の重さが消えた。

「え、え?」

呆気にとられて、瞬きすると涙が流れて視界が鮮明になり、男の重さが消えた理由を理解した。

湯気を立ち上らせる拳銃を持ち、無数のナイフをベルトに付った忍者が男を左腕一本で宙吊りにしている。

忍者は長身というわけではなく、身長170cmぐらいで中肉中背だったが、恐るべき臂力で男の首を締め上げおり、指の間からは男の血が漏れ出していた。

首の痛みと息苦しさに苦しんだ男が手を組んで、祈るように命乞いをしたが忍者は構わず拳銃を男の胸に押し当てた。

忍者が何をしようとしているのかを察した、さすが目がつぶって顔を背けた瞬間。

小さな風を切るような音が今度は二回、続けて数m先に重いものが放り出される音が聞こえた。

思わず音のした方を見ると、茂みから男のジーンズをはいた足だけが見えた。

へすまない、来るのが遅れてしまった。立てるか?」

忍者が使った言葉は少しアクセントが怪しい日本語だった。

(助かった?)

忍者の言葉に緊張の糸が切れかかるのを、すずかはどうかにかこらえた。忍者はこちらを襲ってきた相手とはいえ、人を撃ち殺した相手だ。簡単に信じていいモノではない。

〈味方と言えない立場だが、危害を加えるつもりはない〉

こちらの様子に、忍者が言ってきた。

すずかが答えずにいると、忍者は構わずに近寄り、すずかの身体を抱え上げた。

「ッ！放して…」

再び暴れて忍者を叩くが、忍者はビクともしない。特に大柄でも筋肉質にも見えないのにすごく力強い。

〈危害を加えるつもりはないと言っただろう。連中は君には死んでもらいたくないはずだ。ここにいるのはまずい〉

言いながら忍者は、すずかを抱えたまま雑木林を進む。途中で何度か忍者の弾帯から延びている内視鏡型マニピュレーターが動き、せつせとカードを数枚放り投じている。

忍者は枯れた小川に降りるとすずかを降ろした。小川が長年掛けて作り出した溝は意外と深く、戦争映画の塹壕をイメージさせた。

肉体的にも精神的にも、そろそろ限界を迎えそうになっていたすずかが座り込む。アリサはどうなったのか？と、見れば、低い目線のお陰で、外灯に照らされたシルエットがはつきりと見える。

道路上で《アリサ》がドライバーや同乗者達に指示を出している。まるで《アリサ》がドライバー達のリーダーのような姿である。

その《アリサ》達に向けて、忍者が拳銃を向ける。

(撃つ気だ！)

そう思った瞬間、すずかは拳銃を掴んでいた。

〈ッ！なんてことを〉

これはすずかが後から知ったことだが、暴発の可能性がある危険な行為をしてしまったらしい。

「待って…。アリサちゃん…友達が…」

慌てて引き金から指を放す忍者に、アリサのことを伝えようとするが、呂律が上手く回らない。

へ知っている。アリサにあてたりはしない」

要領を得ない説明にも関わらず忍者はそう答え、すずかの手を無理に振り払おうとはしなかった。

へとりあえず、話して…、チッ！」

忍者が鋭く舌打ちをすると、あたりが急に明るくなった。明暗の差に眼が眩む。

光源を探ると茂みの男の遺体から火柱が上がった。ただの炎ではないらしく、ほかの木々に燃え移ることはなかったが、《アリサ》達も異変に気が付いたらしい。同乗者達が《アリサ》を守るように円陣を組んだかと思ったら、その姿も変わる。

全員がフード付きの衣装に替わっている。なのは達がBJと呼んでいる特殊な防護服だ。

へこちらに来る。伏せていろ」

忍者の言葉の通りフード衣装の中の3人が、ガードレールを乗り越え此方に近寄ってくる。今すずか達のいるところは、火柱が上がったところから離れていたが、すぐに見つかってしまうだろう。

それでも忍者は落ち着いていた。

へ1号機、うて」

淡々と忍者が言ったかと思うと、空から数発の閃光が降り注いだ。その閃光の中の一際大きな光が、《アリサ》達と3人の間に突き刺さり、衝撃で土煙を巻き上げる。同時に前の3人に向かって残りの光、その数六つが迫った。

3人の内一人が、閃光を素早く回避し、一人が光の盾ではじき返した。最後の一人は全身を包むドーム上の防壁を展開させたが、防壁は2、3度瞬いたかと思ったら光が着弾する前に消えた。

ドドン！

打ち上げ花火のような重い音を立てて、閃光が最後の一人に直撃し、大きくよろめかせる。

続けて忍者の持つ拳銃が跳ねた。発射音も発火炎もなかったが、血飛沫をあげて最後の一人が倒れる。

フード付きも黙ってはいなかった。辺りに光弾を各々の方法で撃

ち始めた。素早く身を屈めた忍者とすずかの頭の上を、何発もの光弾が通り過ぎストロボのようにすずかの顔を照らした。

その光で忍者は何か気が付いたようだ。こちらの顔を見る。

すずかはハツとして頬に手を当てると、殴られた頬が鈍い痛みと熱を持ち腫れていた。殴られた後時間がたつて頬が腫れ上がって来たようだ。今、鏡を覗くのは勇気が必要そうだ。

〈動くな〉

忍者が手をかざしてきた。思わず身体を竦めたが、頬の痛みがゆつくりと引いていく。

治療魔法というモノらしい。すずかも以前シャマルが使っていたのは見たことがあった。

(シャマルさんが使っていた時は、もつと、パツと治していたのに…) 魔法関係の知り合いと比較して、この忍者は大した力は持っていないのかもしれない。と、すずかは思った。

すずかがそんなことを考えている間に、光弾が立てる風切り音の回数が増えていく。フード付き2人が弾幕を張りながらジワリ、ジワリと距離を詰めてきているようだ。

忍者がすずかに手をかざしたまま、弾幕の合間を付いて反撃する。

命中！フード付きの一人がよろめき、うめき声と悪態を吐いたがそれだけだった。BJを貫くには至っていない。それでも撃たれたフード付きは、見えない攻撃を恐れたのか速度を鈍らせ、替わりに光弾を更に激しくばら撒いた。

そのころには忍者は、銃を見ながら愚痴をこぼす。

〈む、治療魔法を使いながらだと、出力が下がるな〉

言いながらも忍者は手をかざすことを止めなかった。

すずかには、『すでに出てしまった被害は後回しにして、とにかく反撃をする』という戦闘のセオリーは分からなかったが、忍者が恭也達のような優しい性格をしていることは分かった。

61 鴉の夜A

アリサ・バニングスと月村すずかを監視していたL3S1号機からの報告を受け、隠密転移魔法『動く本棚』をくぐり抜けると、最初に眼に飛び込んできたのは、女を襲っている白人の男の姿だった。

面食らい、転移座標が狂ったのかと思ったが、そこは間違いなく目的の場所。なにしろ、馬乗りになられても、激しく抵抗しているのは月村すずかだったからだ。

しかし、抵抗虚しくすすすが両手を押さえられ、組み敷かれてしまう。

男が拳を振り上げた！

(この○眼野郎！)

そう思ったときには、身体が動いていた。

フットフォオルスターの拳銃型デバイスを引き抜き、躊躇なく発砲する。空薬莢と共に、紫外線の魔力光を発するシューターが吐き出され、男の声帯を裂く。

∨通信防止結界 作動

― モード：対ベルカ 防止範囲：超短距離

数メートル範囲程度でしか作用しない通信妨害を掛けながら接近。男の喉を掴んで吊り上げてやると、男はジェスチャーで命乞いをしてきた。

(ダメだ)

思ったのはそれだけだった。銃口を男の胸に当て止めを刺す。

するとすぐにセンサーが微弱な魔力をとらえた。魔力が人為的に動く時の反応。

すぐさま敵デバイスAIとプログラム間の通信をスニファして、プログラム内容を推測する。

(ベルカ式、タイマー付きの炎熱魔法。証拠隠滅用だな)

炎熱魔法の発動には数分の余裕がある。

(さすがに戦闘を行えば、ハラオウン達にも察知されるな。高町1尉が転送の魔法を得意としているとは、情報にはない。その護衛とここ

にたどり着くまで10分弱と言ったところか)

残りの敵の数はアリサを含めても12人。正面から戦うのでは不利だが、敵はまだBJも着ていない。不意打ちで半数を倒すことができたなら、すずかを庇いながらも十分目的を達成できると判断する。

『パーシング、仕掛けるぞ。1号機は?』

『すでに射撃ポイントに着いている』

『合図を待て』

相棒に指示を出しながら、すずかに近づく。

〈すまない、来るのが遅れてしまった。立てるか?〉

こちらの声にすずかは驚いたようだ。構わずに続ける。

〈味方と言えない立場だが、危害を加えるつもりはない〉

すずかは当面の危機が去ったことで、すこし放心しているようだった。この状況でパニックにもならずによく自制している。

(たいしたものだな。この日本の女はみんなこうなのだろうか?)

すずかを抱え上げながら思う。

十数年ぶりに尋ねる世界だったが、作戦前にざっと調べ直しただけでも幾つか資料が追加されていた。

そのなかでも、目を引いたのが、PT事件での高町なのは、闇の書事件での八神はやてだった。この二人は魔法の存在も知らなかった年端もいかない少女だったにも関わらず、ベテラン武装隊員でもビビるような大事件を解決に導いたという。

読んだ時には、広報が吹聴して歩いている作り話か、噂話が一人歩きたデマだろう。と、同僚と笑っていたのを覚えている。

しかし、腕の中で暴れるすずかを見ると、真実味があるように思えてくる。

「ッ!放して…」

〈危害を加えるつもりはないと言っただろう。連中はキミには死んで貰いたいはずだ。ここにいるのはまずい〉

言いながら、攻撃に都合が良さそうな位置に移動する。途中に送信用のカードを有線でBJに繋ぎ、幾つかのトラップのカードを仕掛け

ておくのも忘れない。

十分に放れた場所に移動。小川が作り出した溝に隠れて射撃体制に入る。

〈よし、いける！〉

引き金に指をかけた瞬間、白く細い手が横からニュツと出てきて拳銃を掴んだ。

（誰だ！）

すずかだった。反射的に引き金から指を放して、暴発を防ぐ。

〈ッ！なんてことを〉

思わず鋭い声が出た。すずかはコツキングピースを掴んでいる。暴発していたら、人の指ぐらい簡単にへし折られてしまう危険な行為をしているというのに、それに気が付いていないのか、必死に訴えてくる。

「待って…。アリサちゃん…友達が…」

まずい、予定が狂いそう。思っていた以上に、すずかは行動的だ。〈シツテいる。カノジヨに当てたりしない〉

そう言いはしたが、焦った態度が表に出たらしい。アリサの心配をしているすずかが、なかなか銃を放そうとしない。

〈取り合えず、放して…、チツ！〉

説得しようとしたが、先に炎熱魔法が発動してしまった。

立ち上る火柱に気付いて、アリサの周りに残っていた男女がBJを纏って、円陣を組む。

ハラオウン家のセンサー群に感知されるのを恐れているのか、広範囲・高性能のアクティブ探査を使わずに、3名が火柱が上がった方向を警戒しながら近づいていく。

〈こちらに来る。伏せていろ〉

予定が狂った。

まだ相手に位置を特定されていないとはいえ、今から攻撃を仕掛けても倒せるのは精々1〜2名がいいところだ。

情報リンクで状況を把握していたパーシングの通信が入る。

『どうする、金髪の子は諦めて、いったん引くか？』

『いや、当初の予定通り、高町1尉達とつぶし合って貰う』

『戦闘のどさくさをねらうのか?』

『ああ、それまで踏みとどまる』

斥候の3名が円陣から十分に離れた瞬間。

〈1号機、撃て〉

同時に、

▽デバリア ウイルス送信

― モード：対ベルカ

L3Sの主砲と追加兵装の誘導弾を使った射撃が降り注ぐ。

主砲は円陣組と斥候達の連携を分断するため、本命は斥候に襲いかかる誘導弾。不意打ちであったにも関わらず、3人はそれぞれの方法で誘導弾を回避、防御しようとした。その中の一人が展開したバリアが、バラ撒いたウイルスに犯され消滅。斥候の一人が誘導弾の直撃を受けた。なんとかフィールドを強化して誘導弾には耐えたようだが、フィールドの出力は著しく低下している。

チャンスを見逃さずに射殺し、相手が倒れる頃には身を伏せる。

残った斥候は、無誘導弾を連射して牽制してきた。が、こちらの弾は威力は低いが極小音・魔力光を紫外線に調整しているため、射撃場所を特定できなかったらしい。有効な牽制になっていない。

(よし、いいぞ。なんとかかなりそうだ)

すずかの方を見ると、先ほどのやり取りで最後の体力も尽きたのか、おとなしくしている。

頭上を通り過ぎた敵弾の光が、すずかの顔を照らす。お陰で気付いてしまった。すずかの整った顔立ちが腫れて歪んでいる。

こちらの視線に気が付いた、すずかが隠すように頬に手を当てる。とりあえず治療魔法を掛けてやる。ここで気の利いた慰め台詞が出てくれは良かったのだが、生憎そんなストックは持ち合わせていなかった。

代わりに敵に対しての怒りがわいてくる。それを押しとどめたのは相棒の通信だった。

『おい、治療は後回しにしておけ、隠密行動の出力で治療しながらの戦

闘は無理だ』

『……っちは数分保たせるだけでいいんだ。計算じゃ、まだ少し余裕がある』

言いながら間合いを詰めてくる残り二人の斥候に牽制射撃。

うめき声と悪態を吐きながら斥候の動きが鈍る。しかし、斥候は反撃してきた。

撃ってきたのは斥候だけではない。円陣を組んでいた敵も、斥候が射撃している辺りに向かって射撃を行っている。

突然砲撃された混乱から立ち直ってきたようだ。

通信には乗せずに愚痴をこぼす。

美女を片手に抱えて、敵をなぎ払うヒーローするには、魔力不足らしい。しぶしぶ認めて、治療の方は顔だけで我慢して貰おうと決める。

斥候の二人が引いた。攻撃方法を変えてくる予兆だ。

対応の速度としては遅いくらいだが、それは敵がデータ通信を行っていないからだ。原始的な口答とハンドシグナルだけで連携を取っている。

(こちらのクラッキングや妨害能力があることを理解したらしいな……)

データ通信を利用して敵全体にウイルスを感染させて一網打尽という訳にはいかないようだ。一つ一つの戦闘用プログラムの脆弱性について対処する必要がある。

敵の立場ならどうする？ 敵はこちらの正確な位置がわからないせいで、大雑把な攻撃しかできない。なら当然……

センサーの設定を調整し、対砲戦に最適化する。早速、反応があった。直射砲撃の反応が1つ、榴弾の反応が3つ。共にチャージをしている。

(やはり、面による絨毯攻撃か)

すずかを抱えたまま回避するとなると、強力なフィールドを張って彼女を高速移動の負荷から保護する必要がある。だが、そんなフィールドは相手のパッシブセンサーでもすぐ関知されてしまうので、火力

を集中されて一巻の終わりだ。

(並の魔導師だったら。有効だったな)

直射対して緊急周波数を使って大量にアクセス信号を送信してやる。

緊急回線は魔法の才能がある者なら受信してしまう念話周波数だ。場合によっては肉体操作など、攻撃にも使用されるためデバイスは危険の有無を常に判定する処理を行っている。そこに大量の信号が送り込まれたため、砲撃のチャージを行っていたフード付きのデバイスは、処理容量が飽和状態になってしまった。

制御を失った砲撃用の魔力が暴走し、乾いた炸裂音と共に術者自身を殴り倒した。

(次！)

榴弾が放物線を描く、こちらは威力・効果範囲が直射砲撃ほど大きくはないがチャージが早いため、発射前には阻止できない。その分防ぐのは簡単だった。センサーで解析したデータを元に、榴弾の信管を誤作動させる共振周波数の念波を放ってやる。

〈伏せろ！〉

すずかに警告したが、頭の回転が早い彼女にしては珍しくキョトンとしている。

しまった。今のはミッド語だった。

警告し直している時間はない。無理矢理引き倒して、覆い被さる。

「きゃっ…ふっー」

連続花火のような音を立てて、榴弾が加害効果範囲外で爆発している。それでも、ビリビリと空気が震える。衝撃波が耳に入っていたら耳がおかしくなっても不思議ではない。

〈無事か〉

「……」

身体をどけて聞くが、すずかは答えなかった。その代わりゆっくりを身を起こした。顔にたっぷりと腐葉土をつけて…。

どうやら、顔から地面に引き倒してしまっただけらしい。

気まづくなつて、敵の出方を窺っているフリをしていると、すずか

は後ろを向いて、ポケットからハンカチを取り出す。

小さく、ぺつ、ぺつ、と、聞こえてくるところを見ると、口の中にも入ったらしい。

さすがが後ろを向いている間に、敵は攻撃方法を変えてきた。

飛行系の魔法が出す漏れ魔力を関知する。パターンを解析すると使用プログラムがミッド式飛行魔法だとわかる。

(ミッド式のプログラムをエミュレーターを介して、現代ベルカ式のデバイスOSでも使用できるように細工してあるな)

航空戦力で頭を押さえるのと同時に、上空からの熱源探査でこちらの位置を掴むつもりだろう。

こちらは先ほど立ち上った火柱の影に位置していたので、BJを着ていないすずかの体温も捉えられずにすんでいたが、さすがに上空からは丸見えだ。

飛行系魔法のプログラムに感染するウイルスをバラ撒こうとして一瞬躊躇する。

戦闘用のこのウイルスは敵味方の区別なく感染してしまう強力なものだ。使えば自分自身を含めて念話通信波の届く範囲で飛行系魔法は使用できなくなってしまう。

通信波に指向性を保たせたとしても漏洩通信波というのはどうしても出てしまうため、控えさせているL3Sが飛行して一息に援護に駆けつけることはできない。また、高町1尉達が接近してくるのを躊躇するおそれがある。

せめて敵が使っているプログラムが、ベルカ式の飛行魔法だったならより分けることが出来るのだが、それも無理だ。

『一号機、飛ぶんじゃないぞ』

居場所がばれた方が今は危険と判断して、一号機に警告してからウイルスを送信する。

▽ノー・フライ ウイルス送信

― モード：対ミッド

ウイルスを乗せた通信波は光も音も出さなかったが効果は絶大だった。宙に浮かび掛けていた敵4名が魔法のコントロールを失っ

て地面に叩きつけられる。しかし、フィールドに守られて大きな怪我には至っていないようだ。すぐに立ち上がり射撃魔法を放ってくる。その射撃は通信波の送信元周囲を狙っている。敵は妨害信号や現在送信中のウイルスの送信元のおおよその位置を特定したようだ。密度の高い射撃で行動の自由を奪った後に、左側面から接近して仕留めるつもりらしい。

2名が大きく迂回して送信元に近づいていく。

同士討ちを避けるために敵の射撃が止むと、同時に2名が送信元に突っ込んで行く。

〈耳を塞げ〉

バラ撒いて置いたカードの数枚が作動して、2人を吹き飛ばした。

その内一名が腕を吹き飛ばされて地面をのた打ち回る。もう一人は最大効果範囲外にいたようで軽傷ですんだようだが、このまま攻撃するのは危険だと判断したらしい。立ち上がると相棒を抱えて後退していく。

(よし、かかった)

敵が後退していく様子は、十数m放れた枯れた小川でも何とか捕らえることが出来た。

こちらが使ったのは、センサーや通信の送信場所と受信場所を離すバイスタティックという技術の応用だ。カードの一枚を有線ケーブルで繋ぎ、そこからウイルスや妨害信号を送信。こちらの位置を欺瞞していたわけだ。

すずかの方をみると、今度は事前に日本語で警告したため、しっかりと耳をふさいでいる。

こちらの視線に気が付いたすずかが顔を上げ、何とも粘りけの合る視線を向けてくる。

「……」

マスクの中でこめかみに一筋の汗が伝っていくのがわかる。

こちらが黙っていると、すずかはあまつさえハンカチを取り出し、顔を拭くまねをしてみせる。

やはり、先ほど顔から腐葉土に押しつけたことに不満があるらし

い。

「仕方ないじゃないか」と言いたかったが、『じくくく』という視線に負けて謝ってしまう。

〈悪かった〉

「……」

すずかはそれ以上睨んでくることはなかったが、耳を塞いだまま背を向けた。拗ねてしまったようだ。

（俺、なんで頑張っているんだろう？）

再開された敵の射撃を牽制しながら。ふとそんな思いにかられる。

（この後のタバコは、どんな味になるだろうか？）

62 鴉の夜B

敵は散発的な射撃をウイルスの送信場所に撃ち続けている。

ウイルスやトラップ、さらには長距離から攻撃したL3Sが潜在的脅威になっているお陰で敵は攻め手に欠いているようだ。

元々、ベルカ系の魔法は1対1で正々堂々切り結ぶ、個人の優を重視してきた魔法で、一部を除いて探査や射撃を軽視している傾向がある。敵もどうやら、ご多分に漏れないベルカの騎士のようだ。

彼らの射撃精度では、的の小さな送信用のカードに当たる確率は殆どないだろう。このまま、ずるずる時間が過ぎてくれれば、高町1尉達が現れ、その際に乗ずることが出来ると、内心でほくそ笑む。

決して油断しているわけではなかった。しかし、勝利の女神はその驕りはお気に召さなかったようだ。

ジジツ!

通信に小さなノイズが混じったかと思うと、有線で繋がっていたカードからの反応がなくなる。敵の撃った魔法弾にケーブルが撃ち抜かれていた。こちらの戦術ミスというよりも完全に運の問題だったが、拮抗していた流れが大きく傾く。

(まづい!)

ウイルスの送信が止んだ隙を見逃さず、敵は再び飛行魔法を起動させようとしている。阻止するには直にウイルスを送信しなければならぬが、そうすると通信波を捉えられ、こちらの正確な位置が敵にばれる。

しかし、それは敵に飛ばれても同じことだ。それならば、頭上から撃ち下ろされるリスクは避けるべきだ。

へゼツタイ、頭を上げるなよ

すずかの耳元で警告してからウイルスを再送信する。

飛行魔法の反応は消えたが、魔法弾の密度が増す。先ほどまでとは違い確実にこちらを狙っている射撃だ。牽制の為に撃ち返す隙がない。

更に飛行を取りやめた4名が魔力榴弾と直射砲の魔力をチャージ

している。先ほど同じ方法で妨害を掛けるが、今度はこちらの処理容量が限界を迎える。つまり、もう他のウイルスや妨害波を送信できない。

敵の4名が魔力出力を上げ、右側面から回り込んでくる。右側面にはトラップを設置していない。

『1号機、ガン発射!』

命令に応じてL3Sの右腕に装備されたイーグレットSS製の重機関銃から、黒の香(ブラックパフューム)Type-Aノイジー・ウッドペッカーが分間600発の連射で吐き出される。通常の魔法とは違い、黒い爆薬を用いた弾丸は今の探知魔法では発見されにくい。

だが、約1km先からの射撃を、4人はシールドとバリアの複合防御でしつかりとガードした。

さすがにしつかりと警戒されている。攻撃方法を変えて誘導弾で攻撃してみるが結果は同じだった。誘導弾の弾幕は足止め程度の効果しかない。L3Sの魔力コンデンサーの値が見る見る減少していく。

(まずいな)

手詰まりだ。

せめて、もう2、3人数を減らせていけば、相手の懐に飛び込むことも出来たのだが。もう、目的を諦めて残りの装備を使って逃げ出すのが精一杯だ。それは同時にアリサを見捨てることにもなるが、こちらの力ではどうすることも出来ない。

〈掴まっついろ〉

「えっ」

逃げ出すためにすずかを抱えると、只ならぬ雰囲気を感じ取ったらしいすずかが不安げに見てくる。

気休めにぐらいは言ってやろうとして、取り止める。

その必要はなくなったからだ。

パッシブセンサーでも分かる力強い魔力反応が5つ。高町なのはとその護衛の空戦魔導師の反応だ。

パーシングが少し弾んだ声をだした。

『識別信号に合致、高町1尉に間違いない』

『想定より早いな』

『さすがエース・オブ・エース様ってことだろう』

新たな反応に敵も気が付いたようだ。動きに一瞬の動揺が走る。

∨ノー・フライ ウイルス停止

ウイルスの送信を止め、右側面に発砲。側面の敵の注意がこちらに向いた瞬間、L3Sの主砲が火を吹いた。攻撃は防がれたが爆炎と衝撃が相手の行動を封じ込める。

隙を逃さずL3Sが飛行魔法で一気に合流。木々の枝を折りながら目の前に着地する。

「ドラゴン?」

L3Sの姿を見たさすが疑問系で感想を漏らす。空戦用ユニットを装備したL3Sは、ファンタジーの中に出てくる西洋の竜に見えなくもない姿をしている。

L3Sの背中がバイクの座席のように変化。陸戦魔導師を支援するための鉄の竜は、魔導師を騎乗させることも想定されている。この座席はそのためのものだ。

その背にすずかを強引に乗せる。

「え、え、わたし、操縦なんて無理だよ!原付免許も持ってないよ!」
へ大丈夫だ。操縦は遠隔操作で仲間がやる。事故ったらそいつを訴えろ」

悲鳴に近い声を出したすずかを、L3Sのフィールドが包み込むのを確認すると、1人と1機は跳んでその場を放れた、そのまま乱数回避機動に移行する。

次の瞬間には、元いた場所に魔法弾が数発叩き込まれる。側面の敵が立ち直って撃ってきたようだ、敵弾のうち数発は、体の大きいL3Sに命中したが、丈夫な装甲とフィールドがこれらからすずかを守った。

これですずかの安全はある程度保証された。

回避しながら戦況を見直す。ウイルスが止まったことで敵空戦戦

力が、高町1尉達に向かっていくのが分かる。

居場所の分かっている支援型魔導師なら、戦力を二つに分けて空戦戦力が高町1尉達を足止め。その間に残りでこちらを倒すことが可能だと考えたようだ。

戦力を分散させることになり、離れた敵航空戦力は『アリサ』達からの援護を受けられなくなってしまっているが、これにはまだ『アリサ』の姿を高町1尉に見せたくないという意図が感じ取れる。ようするに敵の目的は『アリサ』の姿で高町1尉に近づくのが目的だったのだらう、すずかところは消しておきたい目撃者という訳だ。

しかし、こちらにとってはチャンスでもある。今アリサの護衛をしているのはたった2名しかも一人は、トラップを受けて負傷している。

『1機で何秒持たせられる?』

『60秒』

『上等だ』

短いやり取りの後、カードを一枚取り出し右側面に投げつける。カードから放たれた光が一瞬視界を奪う。

◇メンダクス・ペルソナ モード切替

―モード 電磁メタマテリアル

JS事件で死亡した戦闘機人の固有スキルを模倣したプログラムによって、BJの表面が変化。可視領域の光を反対側に迂回させる電磁メタマテリアルに変化する。所謂光学迷彩モードを起動させた。妨害波の送信を止め、必要以外の魔力をすべてカット。人工リンカーコア出力を最小限で森の中を疾走する。

魔法の強化がなくとも林を抜けるのに1秒も掛からなかった。外灯に照らされた『アリサ』達を灰色の視界で捉えた。

『アリサ』の前にはフード付きが一人、立ちふさがるように立っている。負傷している方は後方で、結界の中で傷を癒しながらも警戒している。結界の種類は、防御と回復を同時に生み出すラウンドガード・エクステンドのベルカ版だろう。

脇に吊っている投擲ナイフを2本引き抜き、両手で構えて最後の坂

を駆け上がる。

∨警告 探査波 感知

― 解析結果（クレアボヤンス・ビジョン）

相手がアクティブ・スキヤンを感知したが、敵はもう目の前だ。身を隠せる障害物も、欺瞞している時間はない。それに、今更止まれな
い。

速度を落とさず、結界に向かって投擲ナイフを結界に投げつける。柄に防御破りのプログラムが付与されたナイフの切っ先が、結界内部にめり込んだ瞬間、刃に仕込まれた指向性炎熱術式が炸裂した。結界内という密閉空間で、炎熱魔法はその破壊力を余すところなく発揮し、内部の術者を焼いた。

手前のフード付きは味方がやられても動揺せずに反撃してきた。単眼鏡のような空間モニターを左目で睨み、映し出された情報を頼りにヒッターを振りかぶる。

間合いはまだ遠い。だが、何かある。

こちらは魔力出力が下がっているため防御は出来ない。転倒するかのように体を倒し、体をほぼ水平にしたまま駆ける。

ヒッターが振り抜かれると鉄鎖が伸び、バチバチと放電しながら頭上を通り過ぎる。

手首の力のみで、ナイフを投擲。刃がフード付きの喉元に向かって真っすぐに走った。

それに対してフード付きは手首を捻る。たったそれだけの動作で、鉄鎖がうねりナイフを弾く。

その衝撃でプログラムが作動し、炎熱魔法の余波が両者を襲う。フード付きはフィールドで守られたが、低魔力のこちらはBJが焦げ電磁メタマテリアルが効力を失う。

これが相手の油断を誘った。

雷を纏ったヒッターが振り下ろされる。魔力の大きさに頼った単調な動き。見切るのは用意だった。

「なげこ！」

地面を叩いたヒッターに驚愕するフード付き。相手からはこちら

が再び姿を消したように見えただろう。

灰色の視界の中、愕然としている相手の周囲を回るように、蹴り、掌底を連続で叩き込み、止めに顔面に肘打ちを叩き込む。恭也や美由希が見ていたら見事な『貫』と『徹』だ。と、言ったかもしれない。

「ッー！」

衝撃がフード付きを襲い、最後の肘打ちは鼻骨を砕く。鼻骨の破片は脳まで届いた。

フード付きが血の固まりを吐きながら崩れ落ちると、すぐさま『アリサ』に振り向く。

「お、王命を授かった私に手を挙げるか!? 聖王の神罰が下るぞ!!」

『アリサ』が後ずさりをしながら、ベルカ語で言った。植え付けられた『種』の影響か、アリサとは思えない発音だった。

〈その体で、気持ちの悪い話し方をするな〉

人工リンカーコアの出力が上げ、右手に『リンカーコア捕獲』と同型の魔法を付与して胸を突く。

「ヒッー！」

『アリサ』は武の心得はないらしく、殆ど無抵抗に突きが命中する。透過した手が、魔力反応のある物質を掴む。手を引き抜くとそれは青い水晶クラスタのような形状をしていた。大きさは握り拳ほど。

糸の切れた人形のように力を失ったアリサの体を支え、マニピュレーターで銃型デバイスを引き抜いた。

水晶クラスタを格納し、ブルームハンドルを掴む。

照準は空へ。

「動かないで！」

そこにはレイジングハートを構えた高町なのはがツインテールを夜空になびかせていた。

63 海鳴市の夜Ⅵ

襲いかかってきたフード付きの魔導師は、護衛達との連携で素早く倒せた。バインドでフード付きを拘束。

戦闘現場に急行したなのはが見たのは、青い水晶クラスターのような魔導物質を銃型のデバイスに格納する忍者の姿。

「動かないでー」

警告しレイジングハートを向けると、忍者も素早く銃を引き抜き、こちらに銃口を向けた。

「こちらは時空管理局武装隊、高町なのはです。管理外世界での魔法の使用、デバイスの持ち込み許可の提示をお願いします」

数日前に遭遇した時には出来なかったが、手順に従って忍者に声を掛ける。

『レイジングハート、この人の力は？』

《魔力出力クラスB、今のマスターでも、さほど脅威にはなりません》
レイジングハートはそう言ったものの迂闊には動けない。

アリサは気を失っているようで、忍者に支えられてぐったりとしている。顔色はいいので無事のようなだが、人質になっているようなものだ。

護衛の魔導師達もそれを理解しているようで、近寄らずに間合いを計っている。

不意に、魔法弾の発砲音。

すぐ近くでも戦闘が行われている。護衛の内2名が発砲音のした方向にデバイスを向ける。

へー号機、すずかを連れてこい

「えっ」

忍者が変声された声を出すと、それに呼応するように林の中から大きな影が上空に飛び出した。影——ドラゴン型のロボットは左右のユニットから誘導弾を地上に放つと、そのままこちらに飛んでくる。

「ちっ！」

「待ってー！」

忍者の味方が攻撃行動に出た。と、判断した空戦魔導師の護衛キャバリエとクロムウエルがロボットに向かって攻撃しようとするのを、なのははあわてて止める。

ロボットの背中には、見知った顔。すずかが乗っていた。

アリサとすずかは一緒にすることが多い、近くにいっても不思議ではなかったが、なぜあんなロボットに跨がっているんだろう。

「あ、なのはちゃん…、今晚は」

地上から17〜18mの空中、なのはを見下ろす位置でボバリングしているロボットの背中で、チョココンと座ったすずかが遠慮がちに挨拶をする。

場にそぐわない間抜けな行為だが、こういう時どういう反応をするというのか分からないのだろう。

すずかが跨がっているのは管理局の兵器開発部門が、AMF対策の一つとして開発していた陸戦魔導師サポートシステム(L3S)の試作機だ。

教導隊でも研究班を設置していると聞いていたが、肝心の地上部隊ではアインヘリアルを主軸とした防衛構想が主流だったため、3機ほどで運用試験を行っている程度の小さい規模だった。

(実戦投入されていたんだ…)

なのはが浮かんだ疑問を推測する前に、L3Sが飛んできた方角に新たな反応をレイジング・ハートが捉えた。

《マスター、転移魔法反応、多数。種別：現代ベルカ》

『追って!』

《不可能です。多重転移の可能性大》

『ごめ…!こつち・間に合わなかった』

ノイズ交じりの通信でエイミーが言った。

エイミーも自宅から各種機材を使い、サーチャーの主警戒エリアを再設定。転移魔法の追跡を行おうとしたが、タッチの差で間に合わなかった。

『でも、サーチャーの再設定は完了。その忍者が逃げてても追跡できるよ』

『お願いします』

なのははエイミイの言葉を受け、忍者達に集中する。なのはは警察権執行のマニユアルに従い。自分の権限を宣言した。

「管理局に所属している部隊の方のようですが、法的根拠がないうえで、管理外世界への干渉は、重犯罪にあたります…。また、先日のわたしに対する襲撃事件に付いて事情聴取のため任意同行を求めます。武装を解除して！抵抗しないなら、弁護の機会もあります」

忍者はこちらを注視しながら、アリサを地面にそつと寝かせた。アリサを巻き込む意図はないようだが、銃型のデバイスを下ろす気配はない。

互いに動くに動けず、緊張感だけがピリピリと上がっていきこうとしたとき、遠慮がちなすずか声がした。

「あ、あのく、なのははちゃん。できれば、その人を見逃してあげてくれないかな」

「どうして？」

忍者から視線を離すのは危険と考えたなのははが、すずかを見ずに聞き返すと、すずかは場違いな発言をしたと思っただけ。少し自信なさげで声も小さくなった。

「え、えっと、その人さっきのフードの人達にひどいことっていうか、待ち伏せされたところを助けてくれて…」

一瞬どうしようかと迷うが、フード付きと敵対しているならば、彼らの情報を少なからず持っている可能性が高い。友人からの頼みに絆されそうになったが、手順を踏んだ行動が結果的にみんなの為になることを信じて行動することにし、なのはは忍者にデバイスを向ける。

警戒レベルを上げるこちらに対して、忍者はむしろ逆の反応を見せていた。

<捕まってやってもいいが、弁護士は呼べるんだらうな>

忍者の合成音声が響き、投降を示すかの内容に護衛たちが気を緩めてしまう。

《警告。炎熱魔法、多数》

同時に各デバイス達が警鐘を鳴らす。殆ど同時に近くに倒れていたフード付き達の体とデバイスが火を噴いた。それだけならまだしも背後でも火柱があがる。あの方角はなのは達が魔力ノックダウンしたフード付き達のが倒れていた方角だ。

(気を失わせていたのに、そんな！)

これにはさすがのなのはも驚き忍者への注意が散漫になる。

次の瞬間、忍者は空中のロボットの背の上にいた、BJに仕掛けられているワイヤーガンを利用したようだ。

騎乗の人となった忍者は、そのまますずかを抱き上げる。

「へ、あ、ちよちよつと」

〈すずか、こいつは1人乗りだ〉

「そ、そうなんだ…」

忍者の腕に力がグツとこもったことに、すずかはイヤな予感を感じた。顔に冷や汗がつつたう。

〈降りてくれ〉

「ちよ、ちよつと、まってええ〜！」

すずかが叫んで忍者にしがみつこうとしたが、それより早く忍者がすずかをなのはに向かって放り投げた。

ばたばたと手足を振り回して落下してくるすずかを、なのはがあわてて受け止める。

「きゃー、きゃー、きゃ〜!!」

「すずかちゃん、落ち着いて!」

混乱したすずかが有らん限りの力でしがみついてきて、なのはの視界を塞いだ。

その間に忍者はロボットの尻尾に装備されたディスプレイジャーから発煙弾を発射する。

視界を奪われて一瞬動きを止めてしまった護衛たちの隙をつき、忍者を乗せたロボットが離脱していくのをなのはの超人的な空間認識能力が捉えた。

アリサもすずかも忍者から離れている。

「待ちなさい!」

忍者のいる空間にバインドを複数設置しようとしたが、

《空間座標にエラー発生!!バインド設置不能》

「ッー」

バインドの魔法プログラムの座標設定に、外部からあらぬ数値が入力され魔法が中断される。

焦れた護衛の1人——陸戦魔導師で名前をマークと聞いていた——が思念誘導弾を忍者の予想進路に複数撃ち込んだ。

《改竄思念感知!》

「くッー」

レイジングハートの警告。同時に気味の悪い予感に突き動かされて、その場にいる全員を防御魔法で包んだ瞬間。発煙弾の煙が揺らいでマークの誘導弾が飛び出してきた。

「ッーッーッーッー」

護衛達に向かって飛んできた誘導弾は、なのはのバリアが受け止めたが、これには魔法弾を放ったマーク自身どころか、全員が動きを止めてしまった。

「魔法プログラムに対するハッキング……。空間座標の書き換えに、誘導弾の乗っ取りが出来るなんて……」

あの忍者はサイバー戦において間違いなく達人（マスター）クラスの使い手だ。このレベルの使い手になると、魔力出力や魔導師ランクなど当てにならない。いい例が第四陸士訓練学校のファーン・コラード校長だ。彼女は自分より高ランクの魔導師を2人まとめてねじ伏せるほど腕が立つ。

驚いている間に、なのはの空間認識の中で忍者の位置がどんどん離れていく。

『追跡できてるよ。高度1000、TN87。方向に逃走中』

「追います、クロムウエル!」

「おう」

一拍遅れて、護衛の空戦魔導師のキャバリエとクロムウエルが、エイミーの音声管制で忍者を追跡し始めた。

煙幕はかなり広範囲に散布されており、視界からもデバイスのセン

サーからも忍者の姿を隠していたが、主搜索範囲を再設定したエイミーのサーチャーからは逃れられないようだった。

なのはも手助けしたいところだったが、すずかを抱えたまま高速機動を取るのには危険だったし、アリサの様子も気になる。

忍者がアリサから魔法物質を取り出した魔法は、人体に影響のない魔法のようだが、なにかしらの後遺症がある可能性は捨てきれない。すずかを宥めながらゆっくりと着地する。

「もう、大丈夫だよ。すずかちゃん」

「きや…、へっ！」

地面に足が着いたことで、なのはにしがみついていたすずかが、瞑っていた目を開ける。近くにあるのがなのはの顔であることに気付くと、ほっとため息を付く。

「ありがとう、なのはちゃん。…あ、アリサちゃんが！」

「大丈夫、無事みたい」

詰め寄ってくるすずかを宥めながら、まだ晴れきっていない煙幕の中を進むと、3人の人影が見えた。

忍者の追跡に参加しなかった女性陸戦魔導師のコメットがアリサを介抱し、マークが周囲を警戒していた。

「アリサちゃん！」

「大丈夫なんですか？」

駆けより容態を聞くと、コメットが微笑む。

「目立った外傷はなし、バイタルも安定しています。気を失っているだけです」

ほっとして、アリサとすずかを護衛たちに任せて、エイミーに通信を行う。

エイミーの話によると、護衛の二人はそろそろ忍者との交戦圏内に入るようだ。こちらも見聞きしたことを報告する。

『忍者はアリサちゃんの体内から、水晶状の魔法物質を引き抜いています』

『なんだって！』

通信に新しい声加わる。無限図書館でフード付きが使用しよう

としていたロストロギアを調べてくれていたユーノの声だ。

『なのは、その魔法物質の形は？球体じゃなかったのかい？』

『えっと、水晶がいくつかくつついたような形をしてて…』

『くそっ！なんてことだ！』

ユーノの焦った声に、なのはが戸惑いながら答えると、彼は齒噛みをして悔しがった。

どういうことか。と、尋ねようとしたなのはの耳に、すすかの声がかかって入ってきた。

「アリサちゃん！」

見るとアリサが目を覚ましている。コメットに支えられ半身を起こしたアリサはキョロキョロと周りを見回していたが、さすがに手を取られるとギョツとしている。

「よかった、気が付いたんだね。アリサちゃん」

なのはも近づきかがみ込むと、アリサは怪訝な顔する。

「だれよ…。あんた達…」

「…!!」

「…え？」

アリサはまるで初対面の人間に馴れ馴れしくされたように、なのは達を不愉快そうに見る。

その視線になのはは背筋を凍り付かせた。

64 海鳴市の夜Ⅶ

《索敵波感知2、6時方向、2 mile》

『それなりの腕利きらしいな。追いつかれるぞ!』

L3Sのセンサーが捉えた情報を通信で監視していたパーシングが言った。

センサーの6時方向を精密モードに切り替えると、さらに詳しい情報が体内のシステムに送られてくる。

追跡してきた魔導師の出力は2人ともにAランク相当、立派な空戦魔導師といえる。さらにエシユロンやアブレストといった連係攻撃の訓練も受けていることも考えるなら、その戦闘能力はAAランク相当と考えるのが妥当だろう。出し惜しみできない相手ということだ。だが、

『高町1尉がいないなら。何とかなるだろう』

自惚れではなく、冷静な戦術眼からそう答えた。陸戦ならともかく、単独の空戦ではやられてしまうところだが、L3Sの支援があるなら問題はない。

すずかを放り出して高町なのはに追跡をためらわせた甲斐があったというものだ。

『そう、うまくいくかあ?』

『いけない。アリサの容体を知ったら、間違いなく追ってくる』

『じゃあ、どうするんだ』

後方支援が専門とはいえパーシングも素人ではなかったが、相棒の手持ち装備では2名+オーバーSランク相手に有効な戦術を思いつけなかった。

『正攻法では、無理だな』

『諦める。なんて言わないだろうな』

『まさか、課に入ったばかりで課長に消されてしまう』

『じゃあ、どうする気だ?』

『引っかけてやればいい』

最初の追っ手と高町なのはが交戦圏内に入る時間にはタイムラグ

がある。

素早く対処できれば、逃げるチャンスは十分にある。考えた作戦を実行するために、L3Sに命令を送る。

『1号機、武器ボックスを開ける。2号機、指示する行動にかかれ』

エイミイの操る通信機材に中継されたユーノからの音声のみの通信に。

なのは達は忍者のハッキング攻撃を警戒し、情報リンクは行わず単純な音声のみの通信を使用している。これにより情報交換の高速化は出来ないが、その分ハッキングの影響を受けにくいという利点がある。

声に疲労と焦りを滲ませたユーノが言った。

『イデア・グレンヌ。あの宝石はそう呼ばれているロストログアで、JS事件の際、聖王教会中央教堂の宝物庫から盗まれた者のリストの中から見つけた。あの宝石に体内に入れられるとその相手の「記憶」を食べて大きくなんだ』

『それじゃあ、アリサちゃんは!!』

ユーノの言葉に驚きながら、アリサを見る。

さすががアリサに自分達の話を聞かせているが、アリサはまるで覚えのない話をされているかのように、怪訝な顔をするだけだった。

個人的な記憶——思い出の一部がすっかり抜け落ちてしまっているようだ。

『そう、アリサの記憶はあの宝石に取り込まれている。消化された記憶は、超純エネルギーに変換されてしまうらしい』

『そんな!』

『追って!なのは!エネルギーとして、記憶を消費される前にあの水晶を取り戻すんだ!それで記憶を取り戻せる可能性がある』

『ホント!』

『ああ、盗まれる前にこのロストログアを研究していた女性がいたんだ。名前は…たしかエメリ・ド・ヴォワ…』

説明を続けようとするユーノの通信を遮って、キャバリエとクロムウエルの通信が割り込んできた。

『被弾した！どっから撃たれたんだ！メーデエー、メーデエー！』

『あいつは、逃げたんじゃない！避難したんだ！対空攻撃が…！』

通信越しに先行した護衛達の戦況が伝わってくる。今、クロムウエルの反応が急に微弱になった。落とされたようだ。護衛達は劣勢に立たされているようだ。

(急がないと)

こちらの状況に気が付いた、ユーノが説明を止める。

『記憶を戻す方法を調べておくよ』

『わかった！お願い！ユーノ君！』

飛行魔法フライアーフィンを発動させると、忍者を追跡することを察しただずかが心配そうに見上げてきた。

その隣では、なのは達との記憶を失ったアリサが、空飛ぶ人間を見て慄然としている。

アリサにへんなものを見るような目で見られて、胸の奥に鈍い痛みを感じる。

「すぐに戻るから！待ってて！アリサちゃん！」

そうだ、ロストログアを取り返せば、アリサからこんな目を向けられることもなくなる。

アリサを安心させるために言ったつもりの言葉だったが、むしろなのは自身の闘志が湧いてきた。

逆にいえばアリサの視線は、それだけなのはを狼狽させた。

「二人を頼みます！」

「了解」

陸戦魔導師のマークとコメットに任せ、なのはが飛んだ。

ほんの数秒で、音と彼女の狼狽は置き去りにされた。

夜空を飛ぶこと数分、なのはが洋上に入ると、キャバリエからの通信にノイズが入った。

『敵は2…』

《妨害波動検知》

キャバリエの通信はそこで途絶えた。

突如として割り込まれた通信妨害によって、通信を経たれてしまったようだ。

なのはは即座に通信妨害を逆探知し、防衛機動（ブレイクターン）を取った。ここまで強力な通信妨害が届くということは、敵の攻撃誘導波も届くということだ。

案の定、すぐにレイジングハートが敵の誘導弾の反応を捉えた。キャバリエと合流させないための牽制攻撃。

対抗攻撃として、だめもとで遠隔制御の誘導弾を一発だけ放つ。出現から数秒で桜色のデイバインシューターは反転し、術者であるのはに襲いかかってくる。やはり、誘導能力を持つ術式では忍者の改竄思念で利用される。遠隔操作のブラスタースピットも使えないと考えた方がいい。

なかば、諦めてきたことなので冷静にフィールドのG中和能力限界の回避軌道とショットバスターで誘導弾を迎撃するが、それだけ時間と手間を取らされることになる。

ドン！ゴウン！

フィールド越しに衝撃波を感じた。

レイジングハートが分析。遠距離で大口径榴弾と砲撃を検知。

『…ら…。バイ・リ・反応を…』

要領を得ないキャバリエからの通信の後に、再び衝撃！大口径榴弾だ。ダメ押しの一撃を食らってキャバリエが沈黙する。

真っ白なパラシュートが夜空に広がる。キャバリエのデバイスが被弾を検知し、BJの形状を変化させたのだろう。昨今のデバイスが活きているなら、術者が気を失っていても自動的に術者を守る保護機能が付いている。それが作動している限り、魔導師の生存率は極めて高い。

保護を彼の愛機に任せて追跡を続行する。

『これで一対一…。いや、違うね。L3Sはスペック上、ある程度だが

自動で戦闘を行うこともできたし、遠隔操縦も可能だから一対二と考
えるべきだよね』

《いいえ、マスター。二対二です》

主の問いに、レイジングハートは自分を忘れるなど反論した。そん
な愛機に頼もしさを覚えながら、なのはは意見を求めた。

『そうだね…。でも、彼のウイルスは脅威だよ。飛行系魔法がウイル
スにやられちゃうと、そのまま墜落ってことになりかねない』

《問題ありません。目標のL3Sが使用しているのはこちらに近い
ミッド系飛行魔法。今、ウイルスを使用した場合、目標自身の飛行魔
法にも影響が出ます。》

『そうだね。じゃあ、行くよーレイジングハート！』

相手との速度差を考えると、そろそろ射程距離に入る。

「エクシード、ドライブ」

《イグミツション》

追跡の為の高速機動、省魔力の概念を切り捨て、防御力と高出力優
先の戦闘態勢に入る。BJも変化しミニだったスカートもロングス
カートに替わる。

今まで敵の解析を恐れて使用していなかったレイジングハートの
センサーをアクティブに、密度の濃いパルス波動が照射される。たと
えどんなに敵の妨害能力が優れていたとしても、これで数秒間はロッ
クオンが可能だ。

「センサーコンタクト！ショートバスター！」

砲撃。桜色の光が夜空を切り裂く。

さすがの忍者も初見で、なのはの最速砲撃に妨害を仕掛けるのは出
来なかったようだ。避けるため敵は右旋回をしつつ、位置エネルギー
(高度)まで利用し回避行動を取りつつ、再び誘導弾を放ってくる。

これに対して、なのはは魔力出力を弱めず、位置エネルギーを落下
の加速に変えて更に加速。同時にチャフをばら撒いた。

敵誘導弾は相対速度の大きさとチャフによって、なのはを見失いあ
らぬ方向に飛んで行った。

一方、忍者とL3Sの回避はそれほどうまくいかなかった。ショー

トバスターが巻き起こした衝撃波に煽られ、速度を落とす。敵との距離を一気に詰め、有視界での戦闘が可能な距離まで詰め寄る。

(見えた！)

有視界に忍者の跨がるL3Sを捉える。ここまで近づいてしまえば、たとえ相手が誘導能力に勝っていても、優劣の差にはならない。

忍者は速度・位置両エネルギーを失い、こちらはタツプリと加速した速度エネルギーがある。魔力出力は相手が忍者・L3S合わせてA+程度に対して、こちらはS+、こちらの方が遥かに上だ。

空戦において相手より高エネルギーを保持していることは圧倒的な優勢を示している。しかも出力が勝っているということは、急上昇・急加速などでエネルギーを回復させる能力も勝っている。と、いうことだ。

「ストレイト」

《ウィルス検知、射角妨害》

レイジングハートの警告。

砲撃の射線に誤差を生じさせて狙いを外すプログラム。感染力が強く、効果がでるまで期間が短いウイルスだが魔法を完全に無力化するほどの力はない。

構わず、発射！

「バスター」

反応炸裂効果が高めてあり、敵密集地では敵対象を伝播して連鎖爆発を引き起こす直射砲。加害範囲の広いこの砲撃なら、多少狙いが外れようと避けきれぬものではない。

砲撃が炸裂！衝撃をまき散らす。忍者がいない。

砲撃直前に躲かれた！

視覚ではない空間認識能力が敵は後方だと告げている。肩越しに背後を見る。視界に移ったのは、跳ねまわる自分のツインテールの一房。

いた！

L3Sの腹が見える。忍者はL3Sの尻尾を真下にして機首を垂直にさせ、急減速をさせていた。

ピッチング（横軸）方向に姿勢を上下させるが、高度の変化がほとんど出ないコブラという機動だ。効果はご覧の通り、なのはは急激に変化した速度差に対応できずに、オーバーシュート（追い越し）をしてしまった

L3Sの機首が下がり、水平方向に復帰する。

機上の忍者が銃を構える。銃の先でカード型デバイスが魔法陣を展開していた。L3Sは口を左右に開く、中からのぞく砲門。

先に撃ったのはL3S。迫る大口径魔力砲弾をなのはは急速旋回して躲した。砲弾の信管が作動し爆発したが、十分に速度を保っていたなのははその加害範囲から余裕を持って離脱できた。

続けて、忍者がシュートバレットを魔法陣に向けて発射した。そのとたん、魔法陣の放つ魔力反応が急激に上昇した。

《警告！敵魔力出力、急速上昇》

『まさか、バイナリーボム…!?!』

通常ではあり得ない魔力の反応に、レイジングハートが警鐘をならす。なのはは驚きはしたが、教導隊の資料で理論を聞いたことがあった。二つの異なる魔法をぶつけ合わせることによって、激烈な魔力反応を起こさせる合体魔法の一種。しかし、運用には複雑な制御能力が必要な筈で大抵は不発に終り、安定した運用は出来ないとされているのだが、忍者は制御能力にかなり自身を持っているようだ。

（落ち着いて、いくら忍者が制御能力に優れていても、バイナリーボムで複雑な弾道誘導はできないはず）

なのはの読み通り、魔法陣から放たれた魔力が濁流のように襲いかかってきたが、誘導のない直射砲撃だった。

なのははこれを殆ど直角に上昇して躲す。

フィールドの中和能力を超える強烈なGと、高出力魔力運用の負荷に歯を食いしばって耐える。

誘導弾の追撃に備え、チャフを自動射出できるようにレイジングハートに指示を出したが、それはなかった。チャージしていた魔力をすべて使い切ったのだろう。今度はこちらの番だ。

上昇したことで速度を下げ、そのまま、忍者を後方から見下ろす位

置に着く。

旋回、加速能力に劣っていると自覚のある忍者は、エイミイのセンサーが地形の関係から死角になる座標に向かって一目散に逃げている。あまり時間はかけられない。

このまま、上昇することで稼いだ位置エネルギーを速度に変換し後方から攻撃しても先手は取れるが、また、速度差を利用してオーバーシュートを狙ってくるかもしれない。そこでなのはは上方から螺旋軌道を取りつつ忍者を追った。

こうすることで、なのはは忍者よりも長距離を飛ぶことになるが、高い速度エネルギーを維持しつつ、進行方向に対しての速度差を減らすことができる。万が一、相手をオーバーシュートしてしまったとしても、通常の軌道に戻ることです早く離脱することが可能だ。

激しく回転する視界の中、レイジングハートがパッシブセンサーで相手を捉える。

ダメ！忍者はまたこちらの射角を乱してくるに違いない。それには今日は月が出ているせいで魔力風が大きい。

直感で照準を修正…。

今！

「ショットバスター！」

発砲！

忍者はウイルスと回避機動で逃れようとしたようだったが避け切れず、L3Sの防御を破ると尻尾の付け根から伸びているスラストを根こそぎ吹き飛ばした。

L3Sは推力を失って落下、水柱を上げながら緊急着水する。

その直前、忍者はL3Sを飛び降り、背中のアンカーガンのワイヤーをパラシュートに変え落下速度を制御すると、水面に着地した。水の上を歩く魔法を持っているようだ。

忍者が銃を構えて、再びバイナリーボムの構え。だが、砲撃の威力はこちらの方が上だ。切り札になる一発を用意して、スピードを落とさず旋回。正面から砲撃を狙う。

ガッン！

突然の衝撃に蹴り上げられる。

「……！」

エクシードの分厚いフィールドのお陰で体は傷付かなかったが、飛行のバランスが大きく乱れる。2発、3発と被弾した後、何とかバリアを張り続く数発を受け止めたところには。

攻撃は何処から？

見回すと海面からセンサーの付いた頭だけ出したL3Sが見えた。

2機目！

不利な状況でのフード付きとの戦闘中も姿を現さなかったのは、ずつとこの退路を確保させていたようだ。クロムウエルを不意打ちしたのも、この機体だったのだろう。

忍者の砲撃が来る。再加速を諦め、足を止めて砲撃に移る。

「エクセリオン・バスター」

ほぼ抜き打ち気味で反撃。狙いとタイミングでは、忍者の方が圧倒的に優位だったがそれでもパワー負けはしなかった。砲撃同士がぶつかり合い、エクセリオン・バスターが徐々に押していく。

なのはがカートリッジをロード。更に魔力を込めようとした瞬間、突然、敵砲撃が止んだ。

「！」

背後に気配に振り返る。見覚えある本棚型の魔法陣から忍者が飛び出してきた。

手が届くような接近戦。詠唱不要の高速起動魔法でも、今からチャージしていたのでは間に合わない。奇妙に間延びした時間の中、忍者の指を伸ばした左腕がゆつくりと近づいてくる。

(かかったー！)

桜色の閃光が走った。

あらかじめ起動しておいたアクセルシューターが、スカートの中から飛び出し忍者に襲いかかったのだ。

アクセルシューターは誘導能力のある射撃魔法で、忍者に乗っ取られる可能性があるが、改竄思念と言っても万能ではない。誘導弾の誘導方式や通信方式によって、いくつも種類がある。忍者は起動した魔

法を素早く見極めそれに適した改竄思念を発生させている。

つまり、魔法の発動に気づけなければ、有効な改竄思念は使えない。なのはが切り札として用意していたアクセルシューターは、あえてフィールド出力と同じ程度の魔力に威力を落とし、外部から魔力センサーでは見分けがつかないように調整していた。

魔力出力の低い忍者にはこれで十分…、

ガッ！

この不意打ちにもかかわらず、忍者は右手に持ったままだった拳銃のブルームハンドルで受け止めた。だが、さすがにバランスを崩し攻撃を中断した。拳銃も衝撃で弾かれ明後日の方向に飛んでいく。

(いまだー)

エイブラハムの治療のお陰で快復してきたとはいえ、未だに残る違和感を無視して最大出力。フィールドの強度に任せて頭から忍者に突っ込む。

戦術もへつたくれもない。子供の喧嘩以下の突進に、完全に意表を突かれた忍者が弾き飛ばされ海面に叩きつけられる。

忍者をいったん無視、そのまま飛んで、アクセルシューターが弾き飛ばした拳銃型デバイスを空中でキャッチした。デバイスはグリッ部分が焦げてはいたが、その他の部分は新品同様だった。

「やった」

《第一目標、クリア》

そう、なのはは忍者を逮捕することにこだわってはいなかった。第一目標はあくまで奪われたアリサの記憶を取り戻すことだ。

すぐさま、拳銃型デバイスにアクセス。ロックは掛かっていなかった。ストレージデバイスなのでAIの抵抗も機械的だ。

格納されたイデア・グレンヌを探す。

最も新しい無名のファイル。

あつた！

《フープバインド、起動》

ファイルに触れた瞬間、拳銃の残弾カートリッジが自動的にロードされ、拘束輪がなのはの周囲に複数出現した。

(罨！)

気が付くのがワントンポ遅すぎた。

(でも、アイデア・グレンヌは何処に?)

そう思いながらも、バインドを破ろうと足掻くが、カートリッジ数発を利用した4重のバインドはそう簡単には破れない。

波の音を立てて忍者が再び水面の上に立つ。手には数枚のカード。そのすべてを使ったクリスタルケージが発動し、なのはは更に嚴重に拘束された。

その忍者に水中戦装備をしたL3Sが、空中戦装備の機体をけん引してきた。忍者は空中戦の機体に近づくと、武器ボックスから『刀傷の付いた拳銃型デバイス』を取り出した。

バインドの制御権が刀傷の付いた拳銃型デバイスに引き継がれた瞬間、なのはの手の中の拳銃型デバイスが煙を吹いた。記憶媒体や演算装置が焼けて、アクセスしようとしても何の反応もしなくなる。(やられた！)

忍者はなのは達から逃れている間に、デバイスをすり替えていた。

忍者の使っているのは量産型ストレージデバイス。レイジングハートのように強力なAIを持っているわけでも、強力な魔力増幅器を持っているわけでもなかったが、癖がなく同じ機種なら殆ど同じ感覚で使用できる。

また、この手の量産型はレイジングハートのように魔導師の相棒ではない。単なる道具を破棄しても惜しくはない。

量産型の殆ど唯一と言っていい強みを利用された。アイデア・グレンヌも『刀傷の付いた拳銃型デバイス』の中だ。

L3Sが僚機をけん引したまま、潜航し始めた。拘束されたままの不自由な体で、クリスタルケージに体当たりする。ダメ。ビクともしない。

抜け出すには最低でも数分は掛るだろう、そのころには忍者は追跡不可能なエリアまで離脱しているはずだ。

なんとか、忍者を引きとめようと、なのはは最後の賭けに出た。

「お願い！待って！アビー君！」
忍者は振り向かなかつた。
その名前を拒絶するように、海中に姿を消した。

65 海鳴市の朝、友達と、これからと…

アイデア・グレンヌを取り戻して、アリサ達の処に戻ると、空を飛んでやってきたなのはの姿にアリサは目を丸くしていた。

「アリサちゃん！」

「えっ…：な、なによ！」

なのはが声をかけると、魔導師などの魔法関係の記憶も失っているアリサが虚勢を張って答えたが、すこし腰が引けている。

アリサが自分を見て怖がる姿に、傷つきながらも取り戻したアイデア・グレンヌを渡そうとして…、それがないことに気が付く。

アイデア・グレンヌを握っていた右手には、なにもない。

「え！なんで、ないの?!…：間違いなく…！」

驚いて声を上げると、アリサに付き添っていたさすがが心配げに聞いてきた。

「あの、どうかしましたか？」

「さすがちゃん！アイデア・グレンヌが…！」

なのはが答えようとすると、さすがは気味が悪いように身を引き。不審の眼差しを向けて言った。

「どうして、わたしの名前を知ってるんですか？」

「な…：にを…、わたし、なのはだよ…！」

「なのはさん？いいえ、知りませんよ、初対面ですよ。ねえ、アリサちゃんの知り合い？」

さすががアリサの方に振り向き、問いかけると、

「知らないわよ。誰なのよ。あんた」

アリサがそう答えた。

「え…、なんで…！わ、わたし…！」

「それがアイデア・グレンヌの効果です。高町1尉」

混乱するなのはの背後から、聞き覚えのある声が聞こえてきた。振り向くと無限書庫にいるはずのユーノがいた。

「ユーノ君！」

名前を呼んでも、ユーノは軽く会釈をしただけで、説明を続けた。

「人の記憶を吸収して、成長する機構石。それがアイデア・グレンヌの正体です。一部とはいえ記憶を吸収した種が奪われた以上、…残念ながら『バニングスさん』の記憶を取り戻すことは…」

他人行儀な口調で淡々と話すユーノの態度に、なのはは腹を立てた。

「ユーノ君！何で、そんな簡単に諦めるの！」

思わずキツイ言い方になったのはに、ユーノが不愉快そうに柳眉をつり上げた。

「高町1尉、僕たちのチームの検索能力は管理局でもトップと自負しています。他のチームでも結論は同じものになりますよ」

ユーノの対応に、なのはは怒りよりも不安を覚えた。

声を荒げて態度が悪くなってしまったのは事実だが、普段のユーノならこちらの心情を察して、もう少し柔らかい対応してくれたはずだ。

だが、これではまるで…。

「…あの、ユーノ君？アリサちゃんのこと…、覚えているよね…。地球の…」

「地球…？地球、ええっと、…ああ、確か97管理外世界のことを現地の人はそう呼称しているんですね。資料で読んだことがあります」

「…っ！」

言葉が出なかった。

これ以上ユーノと会話をするのが怖くなり、次の言葉が出る前に背を向ける。

すると…。

「…っ。…ぐすっ」

うさぎのぬいぐるみを抱いた、金髪の女の子が泣いていた。

女の子は特徴的な左右非対称の瞳に涙をためて、息をつまらせている

「ママ、ママ」

娘の姿に驚き駆け寄る。

「どうしたの、どこか痛いのか？」

「ママが、いないの…」

「大丈夫だよ。わたし、ここにいるよ」

娘が顔を上げ、ハッキリとこつちを見る。

「あなたは、…ママじゃない」

「…なにを言ってるの?」

この子も記憶を失っている!?

こちらを真っ直ぐ見ながら言ってくる娘の言葉に衝撃を受けながらも、どうにか口を開く。震える声が出る。

「…わたし、なのはママだよ、…!!」

名乗って、娘の名前を呼ぼうとして愕然とする。

娘の名前が出てこない。

「あ、…あ」

娘の名前を叫びたいのに、出てくるのは無意味な喘ぎだった。

助けを求めて左右を見渡すと、ここにはいないはずの家族や友人達の姿。その家族達も赤の他人の奇行を見るような怪訝な顔をしている。

助けを求めようとしたが、彼らの名前も思い出せない。

いや、いた一人だけ名前の思い出せる相手があった。目立たない容姿で低めの鼻が特徴と言えば特徴だった。手には水晶クラスターの様な物質を持っている。

「——ツ——」

夢の中で何かを叫んだことだけ覚えていた。

自室のベッドでシーツを押しつけながら身を起こすと、夏だというのに肌寒さを感じて身震いをする。

ひどい寝汗の為、寝間着がひどく湿っている。寝相も相当悪かったようだ。

忍者との戦闘から丸一日。アリサ達の病院への搬送、フード付きや忍者の遺留品の回収、ようやく駆けつけた騎士団所属の次元戦艦『ベルソー』への報告を終える頃には、さすがのなほもクタクタになってしまっていた。

とはいえ、被害者になつたのは友人ということもあり、なのはは捜査への協力を申し出たのだが、なのはの疲労具合を見たベルソーの艦長ベルトラン・ド・ヴォワチュールは、

「事件担当の当艦が到着した以上、捜査の指揮権は私達にあります。ご友人が心配なのは分かりませんが、今は体を休めるのがよろしいでしょう。捜査に進展があり次第報告しますので、ご安心ください」

と、申し出を断り、なのはを帰らせた。

家に帰ると、憔悴した姿を心配したヴィヴィオが側を離れたがらなかったが、ヴィヴィオを必要以上に心配させるのが嫌で、桃子にうまくヴィヴィオを引き離すように頼んでいた。

（おかしさん達がヴィヴィオを預かってくれてよかった）

いつもなら隣で寝ているはずのヴィヴィオは、桃子と士郎の寝室で寝ている。もし一緒に寝ていたら、起こして心配させてしまっていたかもしれない。

ヴィヴィオに心配かけずに済んで安心したが、酷く喉が渴いている、寝間着や下着が肌に張り付いて気持ちが悪い。

ベッドから這いだし寝間着を脱いで裸体になっても、肌には大粒の汗が浮かんでいた。

「ふう」

思った以上に疲れているみたい。

ノロノロと汗を拭いた後、着替え、キッチンに向かった。

途中、士郎と桃子の部屋の前を通りかかり、ほんの少し襖を開けて覗いてみる。

なのはの両親に挟まれヴィヴィオが寝ていた。子供の頃なのは自身が時々そうして貰っていたように…。

（わたしも、あんな感じだったのかな…？）

少しだけ元気が出た。

ふと部屋の中に二つの光るものに気が付いた。

士郎の瞳がこちらを見ている。目が合うと士郎はパチリとワインクを見せて見せた。

よく眠っている。安心していいよ。

そう言っているようだった。返事の代わりにウインクを返して、キツチンで水を飲んでから二階に戻ると、自室の前で美由希が待っていた。

「どうしたの。怖い夢でも、見た？」

「…なんにも…忘れてないよね？わたしのこととか…みんなのこととか…」

聞いてきた美由希に、なのはが聞き返す。

「…忘れてないよー、…高町なのは、3月15日生まれのO型、好きなおやつはシュークリーム…、今回は休暇で帰省中」

「…うん…」

美由希の優しい表情に、安心したなのはは少し甘えてみた。ぎゅーっと、美由希に抱き付く…

…よかった…。

「…久しぶりに、一緒に寝ようか？」

抱きついたなのはの頭を撫でながら、美由希が言った。

「…うん…」

姉と一緒に潜り込んだベッドの中はとても安心できて…。

「…ちよつと暑いね。くっついて寝ると」

「うーん、夏だからね…」

少しだけ寝苦しかった。

翌日、ずいぶんと遅めに起床したなのはは、午前以内に海鳴大学病院を訪れアリサとすずかを見舞った。

優秀とされる日本の警察も、アリサ達の巻き込まれた魔法による事件を解明することは出来なかったようだ。

証人になるはずのアリサは記憶を失っていたし、すずかの方も魔法の話を出して警察を納得させることは出来ないと考え、当時のことは気を失っていて覚えていない。気が付いた時には道路がメチャクチャになっていたと一貫して通したそうだ。

これに困った警察は、道路に残された焼け跡や爆発のあとから、ア

リサ達に追突した車が何かしらの危険物が積まれており、事故の衝撃でそれらが落下、道路上で爆発し道路を損傷させた。追突した車の持ち主たちはそれらの発覚を恐れて逃走したものと、とりあえず結論付けられたらしい。

ハッキリとした人的被害がなかったためか、マスコミも地方紙がわずかに取り上げた程度で済んだ。

「ごめんね、すずかちゃん。管理世界の事件に巻き込んだじゃって」「ううん。なのはちゃんのせいじゃないでしょ」

個室の病室で謝るなのはに、体に複数の包帯を巻いたすずかが言った。一つ一つの怪我を見ると軽傷でしかないのだが、一緒にいたアリサが記憶を失ったこともあり、検査の為医師達に殆ど強引に入院させられていた。

「でも…。わたし、なにも…」

自分を責めるなのはを見て、すずかは、少し気負いすぎているな。と、思った。

なのはは子供のころから、気持ちの強い子だった。その強い気持ちに責任や使命に向かうのは悪いことではないのだが、気持ちを暴走させ無意味に考え込んでしまっているのかもしれない。考えすぎて思いつめてしまうのは、なのはの数少ない欠点かもしれない。

このなのはの欠点と、察しが良く気遣いが細かいため突っ走りすぎるアリサの手綱を緩めるのは、半歩引いて友人を見守ってきた自分の役割だとすずかは思っている。

「なのはちゃん、それ以上言うとしばらく口を聞いてあげないよ」

すずかは眉間にしわを寄せて叱ってみせると、なのはは目を丸くしたが、すぐにこちらの意図に察しが付いたらしい。困ったように笑った。

「すずかちゃん、ときどき厳しいよね」

「そうかな」

「そうだよ」

すずかは、うん。と納得してから続けた。

「でも、なのはちゃん。本当に頑張りすぎないでね。わたしはなのは

ちゃんが危ないことをしてまで、アリサちゃんの記憶を取り戻す必要はないと思っっているから」

「え!!!」

これにはなのはが驚いた。

驚くなのは置いて、すずかは個室の窓に近づき、庭をのぞく。

「確かに、アリサちゃんがわたし達のことを忘れちゃったのは悲しいけど、いなくなっちゃったわけじゃないから」

言いながらすずかは窓の外に何か見つけたのか、クスリと笑った。

気になったなのはも窓に近づいて外を眺めると、ヴィヴィオがアリサの手を引いて庭に出てきたところのようだ。ヴィヴィオ達は背を向けているために表情は読み取れなかったが、躊躇いがちなアリサの仕草は、初めて会う子供に強引に手を引かれているように見える。

アリサはヴィヴィオに関しての記憶も失っている。ヴィヴィオにもアリサの容体は伝えてあった。それでもヴィヴィオは、花壇に連れっていく。

その様子を見ながら、すずかが言った。

「いなくなっちゃったわけじゃないから、また友達になればいいんだよ。わたしもきつとアリサちゃんも、なのはちゃんが、また大けがしちゃったり、いなくなったりしちゃう方がヤダよ」

すずかは8年前、なのはが撃墜された時のことを思い出しているよ
うだ。

「…うん。気をつけるよ」

なのはは一旦、そう、頷いたが言葉を続けた。

「でも、やっぱり、出来るなら思い出してほしいよ」

「なのはちゃんって、ときどき欲張りだね」

子供の頃から変わらない頑固さを見せたなのはに、すずかが微笑みかけたことで、

「上昇志向だって言っただけじゃなかったな」

ぎこちないながらも、なのはも笑い返すことができた。

66 イデア・グレンヌ

「それじゃあ、ヴィヴィオ。カレル達といい子にしてるんだよ」
「うん、留守番くらいできるよ」

すずか達を見舞ったその日の午後、高町家からハラオウン家に向かうのはがそう言うと、ヴィヴィオは頬を膨らませた。

娘の見せたプライドに驚き、目をぱちくりさせているのはの様子を見ながら、美由希とエイミーが笑う。

「あやや、来たばかりの時は結構なのはにベツタリだったのに…」

「子供の成長は早いよ。ちよつと他の世界に行つて、珍しい経験しただけで行動が変わつたりするもの」

「へ〜」

母歴数年のエイミーが言うのだから、そう言うものなのだろう。と、美由希が素直に納得していると、拗ねたヴィヴィオに攻められていたのはからチラチラと視線を感じる。

助けを求めているらしい。

美由希が動く前に、エイミーが口を開いた。

「ほくら、ヴィヴィオちゃん。その辺にしてあげなさい」

「う〜ん」

「ふう」

ヴィヴィオが不満の声を上げていたがなのはを解放し、ホツとしたのはが安心して美由希に言った。

「じゃあ、おねえちゃん。ヴィヴィオをお願い」

「うん、まかせて。何かあったら電話するから」

「カレル、リエラ。美由希おねえちゃんのいうことを聞いて、いい子にしているんだよ」

「はい」

「は〜い〜」

こちらは素直に返事をするカレルとリエラ。

子供達の反応を見て、子育てでも面白そうだなと感心する美由希に子供達を預けると、なのはとエイミーはハラオウン宅に移動した。

十数分で到着したハラオウン家で早速、通信を開いて事件への対策を話し合う。

まず口を開いたのは通信ウインドウに映ったユーノだった。

『なのは、体の方は大丈夫かい?』

「うん、平気。わたし達が受けたのは魔力ダメージだけだったから…」
『…そう』

なのはは、記憶を失ったアリサや、検査とはいえ入院しているすずかに比べて、怪我が軽かったことを気に病んでいる。なまじ、自分より他人のことを優先してしまう優しい性格の為か、二人を傷つけた相手を捕まえられなかったことも、アリサの記憶を取り戻せなかったことにも、必要以上に責任を感じてしまっているようだ。

そのことを承知しているユーノは安易に「君の所為じゃない」とか「仕方ない」とは、言わなかった。そんな言葉より、事件に少しでも進展があった方が、なのはの心の負担を取り除くことができる。そう思っただけユーノはエイミイに捜査の進展状況を聞くことにした。

『エイミイさん、捜査の方はどうなっていますか?』

「それが次元戦艦『ベルソー』のチームに捜査権が移って、あたし達、捜査から外されているんだよね」

『え、どうしてですか?』

「そりゃ、向こうが正規に派遣された部隊だからね。あたし達の捜査はあくまで臨時のだから」

『だからって…、直接の被害者はなのはなんですよ』

「だからこそだよ。捜査の客観性、裁判になった時の法の下での平等性のことを考えると、むしろ当然のことだよ」

『…そう、ですか』

エイミイの答えに、指揮官と言えばリンデイやクロノを思い浮かべるユーノは納得いかないようだった。が、普通の指揮官ならベルソーの艦長と同じ対応をするだろう。

むしろ、リンデイ達のように手間がかかるが、柔軟で細やかな配慮

が出来る指揮官の方が少数派だ。

「ま、このまま引き下がる気もないんだけど。ね、なのはちゃん」
「うんー！」

『あ、やっぱり、そうなんだ』

そして、エイミイもなのはもその少数派の指揮官の元で鍛えられてきた強者達だった。この程度の法的束縛など、気にも止めない。

「捜査を禁止されてアクセス制限は厳しくなったけど、機材の使用を止められているわけでもないからね」

言いつつ、エイミイがキーボードを叩くと幾つかの情報が表示される。

「ニンジャの転送魔法は、転送速度より隠密性を追求した魔法みたいだから痕跡が殆ど残ってなかった。けど、フード付きの転送は、それほどでもなかった。痕跡を分析した結果、少なくとも彼らは次元転送を使ってないね。現在もこの世界に留まっているよ。発生する予兆も分析できたから、次があるなら確実に追跡できるよ」

「次…、また、アリサちゃん達を狙ってくるのかな？」

「それは大丈夫だと思うよ。今はアルフに就いてもらっているから。アルフならそう簡単にやられないって！」

そう言いながら、エイミイはあえてケラケラと笑って見せた。

実際のこところアルフはオーバーS魔導師の使い魔。Aランクの魔導師に匹敵する力を持っている。それに防戦に徹するなら別に敵を打ち倒す必要はない。アリサとずかずかを抱えてさっさと逃げてしまえばいいのだ。

その後、敵が追ってきたのならば、そのまま、なのはとその護衛達と合流。キルゾーンに誘い込んだのち、自爆術式を発動させる時間を与えずズドン！と、いうのが理想的だ。そこまですまじくいかなくとも、少なくともこちらが有利な条件で戦闘ができる。

「それに、念の為ヴィヴィオにも陸戦魔導師の二人に就いてもらっている。衛星軌道上でベルソーが監視している今、複数の転送を気づかれずに行うことは出来ないし、単体の転送はこちらのサーチャーで捉える事が出来るから、不意打ちされることはまずないよ」

なのはが休んでいる間にも、エイミーと護衛の魔導師達は防御態勢を整えていてくれたらしい。

「うん、ありがとう、エイミーさん」

「でも、アリサちゃんの記憶を取り返すには、守りを固めているだけじゃダメだよ。あのニンジャからアイデア・グレンヌとか言ってたっけ？あの石を取り返さなきゃ」

『そうですね、アリサの記憶は、まだあの石に取り込まれている可能性が高いと思います』

「本当!? ユーノくん」

『うん、石さえ確保できるなら、記憶を元に戻すことができるかもしれない』

「やったー!」

「おっと、喜ぶのは早いよ」

明るい声を出したなのはを、エイミーが諫める。

「今のところ、居場所が掴めてないんだから」

「あ…」

「いい、なのはちゃん。アリサちゃんを助けるには、ニンジャより先にフード付き達と残りのアイデア・グレンヌを確保することが一番だと思う」

『なるほど…、アイデア・グレンヌを確保してしまえば』

画面越しに頷くユーノになのはが続いた。

「アイデア・グレンヌの回収を任務にしているニンジャはこちらに接触してくるしかない…」

「そう言うこと」

なのはの言葉にエイミーが頷き、さらに続けた。

「そうになると、やっぱりアイデア・グレンヌのことをもう少し知りたいな。なにができるかで、相手がなにをしたいのか、推測できるかもしれないから。ユーノくんお願いできる?」

現在は休職しても、エイミーは執務官補佐を長年勤めてきただけあって、こういう時の分析能力は侮りがたい。

ユーノは素直に従い、説明に入った。

『では、あのロストロギアの更に詳しい情報をお伝えします』

空間ウインドウが開き、ニンジャが手にしていた球体が表示される。

『昨日も少し言ったけど、この宝石はイデア・グレンヌと名前のつけられている情報物質です』

「たしか特殊な魔法で情報自体を物質として保存したものだよね」

次元艦乗りとして、多くのロストロギア事件に関わってきたエイミーには聞き覚えのある単語のようだ。

『はい、エネルギーとしても演算機としても応用可能。形を変えて送信することもできるようです。性質としてはレリックに近いといえるでしょう』

「レリック…」

ユーノの追加説明に、なのはは誰にも聞こえない小声で呟いた。

レリックはJS事件の際に、携わることになったロストロギアだったが、そのロストロギアの為になのはとヴィヴィオは間を引き裂かれそうになった。それだけに、ユーノの説明を聞くなのはの表情も真剣だ。

『もともと、聖王教会中央教堂に4個保管されていたものだけど、その全てが聖王の聖骸布とともに盗み出されたと記録にはある』

新たなウインドウが2つ開いて、一方には聖王教会中央教堂が管理しているロストロギアのリストが表示された。イデア・グレンヌの備考に盗難と記録され、その日付が記述されていた。

もう一方には、当時の新聞のデータと思しき画像が表示される。そこには見出しに聖骸布の盗難とあり、記事の内容の中に聖骸布他数点の文字が見える。聖遺物が盗まれたことに偏っているため、扱いはとても小さいが確かに書かれている。

『それで、この宝石は古代ベルカ時代、滅びつつあった国の国王が自身自身の魂を保存するために造らせたものだと、一部の文献にはあるんだ』

「魂を？保存？」

「えーっと、じゃあ、アノ宝石に古代ベルカ時代の王様の魂が入ってい

るってこと?」

「…っ! そうかも、アリサちゃんが急に別人みたいになったって、すずかちゃんも言ってた!」

病院で昨夜あったことをすずかから聞いていたのはは、アリサがベルカ時代の王に体に乗っ取られたのではないかと考え言ったが、ユーノがそれを否定する。

『いや、それはないと思うよ。アイデア・グレンヌは古代ベルカの時代には使用されなかったみたいなんだ。完成出来なかったのか、それとも、使用する前にその国が滅ぼされたのか分からないけど…。ベルカの諸王達は、アイデア・グレンヌに魂を保存するよりも、自分の子孫たちに記憶を継承させることを選択したみたいなんだ』

新しい空間ウインドウが複数開き、アイデア・グレンヌに古代の王達の魂が保存されているか、否かを確かめる実験を行ったレポートが表示される。

なのはがレポートに目を通すと、実験内容は実際にアイデア・グレンヌの1個を使用するというもので、1度目の実験では成果が上がらず、2度目の実験で被験者が記憶の大部分を失い、精神を病むという事故が発生して実験は中止になっている。この際使用されたアイデア・グレンヌは破棄されたと記録にはある。

「これって人体実験?」

『いや、あくまで臨床実験となっているよ。ちゃんと同意書も書いてあるらしい。被験者は敬虔な聖王教徒。実験前被験者達は「この身を古代ベルカの技術に捧げることができるとは、身に余る光栄です」とコメントしていたらしいよ』

なのはの質問にユーノが答えて続ける。

『この後、臨床実験は中止になったようだけど、使用されている術式の解説や技術の解明は公民両方の機関で続けられた…』

ユーノは一旦言葉を切って言いにくそうに続けた。

『その中のミッド中央技術開発やアレクトロ社の名前もある。おそらくだけど、プロジェクトFの基礎理論の1つになったロストロギアだ』

「プロジェクトFか」

ハラオウン家とも因縁の深い技術だけに、エイミーが渋い顔になる。技術自体に善悪はなくとも感情が付いていかないのだろう。

『違う点があるとするなら、記憶を保存、転写するだけでなく吸収して超純エネルギー、混じりけのない純粋な魔力に変換されてしまうこと。これは2度の実験の際、被験者の記憶が失われていくのと同時に、アイデア・グレンヌが成長。最終的にリンカーコアと融合して、リンカーコアの肥大が確認されている』

「リンカーコアが肥大？」

「ああ、あれじゃないかな？昔の王様の記憶をうまいこと他の人に写せたとしても、写した相手の魔力が小さかったりすると、古代ベルカ式の魔法が使えなくなったりするでしょ」

言いながらエイミーが視線で、なのはに同意を求める。

「そうですね、ミッド式に比べて古代ベルカ式は個人の資質に大きく左右されるところが大きいですから。後天的な工夫では使えないものが多いですね」

「だよ、で、当時の王様って言ったら強くてなんぼってところがあつたから。写った先で魔法が使えなくなったりしないような細工をしたってことじゃないかな？」

『おもしろい仮説ですね。いまのところ否定する材料もありません』

エイミーが考えた推論にユーノが頷く。しかし、なのはは納得いかないようだ。

「でも、このロストログアで、いったい、なにがしたいんだろう」

『アイデア・グレンヌは記憶に関係するロストログアだから、単純に考えるなら、なのはの洗脳？アリサ達を襲ったのは、なのはに近づくためとか？』

「でも、わたし、そんなに偉くないよ？」

ユーノの意見になのははすぐに疑問を投げかけた。

なのは自身は現在の教導官・1等空尉と言う立場は、生徒達が夢を叶えるために助力をするという、責任とやりがいのある立場であると感じている。

だが、現在のなのはの主な業務内容は人材育成であり、政治から一定の距離が離れているし、新規採用デバイスのトリアルなど大金が動く業務にも関与していない。

年齢の割には高い階級にあることは自覚していたが、JS事件後の昇格人事を断つため、しばらく出世の見込みもない。

犯人達がロストログアまで持ち出して洗脳しても、犯人側に見返りがあるとは思えなかった。

『それは少し自覚が足りないんじゃないかな？ 奇跡の部隊・機動六課の高町なのはには、ネームバリユーがあるんだよ』

「そ、そうかな？」

『うん、僕がみんなと知り合いだと知ると、君たちの話をほしいとせがまれるくらいさ』

無限書庫に籠もっているユーノでさえ、職員達が噂をしているのを耳にすることがあるというのに、指摘されたなのは戸惑いを隠せないようだ。

しかし、エイミイの意見は違った。

「ん、でも、あたしはなのはちゃんに賛成かな。その手の話は水物だからね。犯行動機としてはちよつと薄いんじゃないかな？」

そう言いながらエイミイは少し顔をしかめた。

執務官補佐として長年働いていた身として、人心の移ろいやすさ、マスコミが手の平が返す時の素早さを思い出してしまった。

恐らく数年もすると、部隊長の八神はやての顔を覚えている人はいても、なのは達の顔を覚えているのは、直接面識のあった人達か、管理局関係者程度になっていくだろう。

「なのはちゃんの名前を利用して、悪いことをしても刹那的な効果しか得られないと思うよ」

「でも、はやてちゃんやクロノくん達への牽制になるかもしれません」
『あるいは騎士カリムに対するだね』

なのはの推測に、ユーノが付け加える。今挙がった名前はなのはの直接の上司と言っていい間柄の人物だ。そして、今管理局の中でもっとも勢いのある若手幹部達と言ってもいい。

それを快く思わない人々は、出世競争の相手から犯罪者まで、残念ながら非常に多い。

「だとしても、1度目の襲撃の時にイデア・グレンヌの使用に失敗しているのに、同じ手を使ってくるかな？洗脳された人になにをさせても、イデア・グレンヌの存在をあたし達が報告した時点で、その人は保護すべき人物になってしまおうから…」

「はやてちゃん達が評判を落とす理由には弱い…」

『私人としてのクロノ達に対する…』

プレッシャーと言い掛けたユーノに、なのはとエイミイが注目する。と、

『…に、なる訳ないか。かえって、やる気を出しそうだし』

ユーノは肩をすくめて自らの言葉を否定した。同意するようになるのが頷く。

「そうだね。三人ともまだJS事件の後片づけに追われているから、あの規模の実行チームを使えるような外部の組織と対立関係にないし、今のところあたしの旦那達と政治的に対立している派閥も聞いてないんだよね」

『ぼくらの知らない犯行動機があるのかもしれないね』

「うーん、ガンナーはどこにでも現れる傭兵みたいだから、今わかつていること以外分からないしな」

煮詰まったエイミイがコンソールに座っていた頭を抱えて反り返る。

それから、姿勢を戻さないまま、なのはに聞いた。

「なのはちゃん。フード付きかニンジャ達と、直接対峙してなにか気が付いたことない？何でもいいんだけど」

「え、そうですね…」

思い悩んだのち、前回の戦闘で思わず口に出た名前を言った。

「今、アビーくんが、どこにいるのか分かりますか？」

「アビーくんって、ああ、猫の人のこと？子供達に聞いてるけど、どうしたの急に」

『誰だい？』

直接面識のないエイミーは、なぜ急にその名前が出てきたのかわからないようにキョトンとしている。

ユーノに至っては名前すら聞き覚えがないため怪訝な顔をした。「この休みであった人だよ。わたしやヴィヴィオも良くしてもらったんだ」

『そうなんだ…』

なのはが答えると、ユーノはなぜか喉の奥に魚の小骨が刺さったかのような顔をして答えた。

「それで、どうして、そのアビーさんを探すの？」

言いながらもレイジンググハートからエイブラハムの顔データを受け取り、コンソールを叩くエイミーに、なのはは若干躊躇しながらも言った。

「多分、アビーくんがニンジャです」

67 聖王再臨

山岳地下深く、網の目のように掘られたゲリラの基地は珍しく蜂の巣を突いた様な騒ぎになっていた。無線電波、念話回線はもちろん、有線や口頭のすべてを使つて、各署での意思疎通が図られようとしていた。しかし、敵に侵入された際のサイレンと放送がない。

通信・索敵術者になったばかりの僕は、許容量を超えた大量の情報を受信してしまいパニック状態になってしまった。

「おい、ちびっ子シツカリしろ」

まだ、顔に幼さが残っているゲリラ兵士が声をかけてくれたが、ろくに返事もできなかつた。

「通信班長、ちよつとまずくないか？」

「チビに回している回線をいったん切れ！」

立派な顎鬚を蓄えた通信班長がクーファイヤーの後布を揺らしながら言うのと、処理限界を超えて送られてきていた情報が突如としてなくなった。個人的にはありがたいことだが、その分他の兵士達にシワ寄せが行っていると思うと心が痛んだ。

それを察したのかどうかは分からないが通信班長が言った。

「暇をさせてやるほど、余裕はないぞ。14番観測所に行つて通信器代わりに来い！ライカン！お前は16番だ！途中までチビに付き添つてやれ！」

「はー。」

最初に声をかけてくれた兵士に引き連れられて、坑道内を小走りに移動していると、徐々に受信した情報を整理することが出来始めた。

どうやら、管理局の次元戦艦が攻撃的な行動を取っているらしい。

何年も掛けて掘られたこの基地は広く、外界からの攻撃を力強く受け止める。その防御力は管理局、政府軍双方の高ランク魔法にも何度となく耐えてきた。この基地が最も脅威とするのはアルカンシエルのような戦略兵器を利用した軌道上からの攻撃だが、当然使用は厳しく制限されているため、今の状況では使用されることはない。と、司令官達は分析していた。

「まさか、管理局はアルカンシエルを撃つつもりなのか？」

「何言っているんだ。ちびっ子。そんなことしたら、さすがにミッドのバカ世論も黙ってないだろ」

兵士は言って笑おうとしたようだった顔を引きつらせて失敗に終わる。

アルカンシエルの様な破壊兵器は抑止を狙った防衛的、戦略的な存在意義が強い。実際に地表に向かって使用されるとなると、破滅的な破壊をもたらしてしまうだろう。

14番観測所にたどり着くと、兵士は無言のまま自分の持ち場に向かった。

観測所といっても、そこは簡単な掩蔽をした塹壕でしかない。見張りはこちらにすぐに気が付いた。

「どうした、坊主」

「…手伝いに来た」

「そうか、感心だが少し遅かったな。次元戦艦はこっちの頭上を越えていったみたいだぜ」

回線を切られている間に状況が変わってしまったらしい。機械的な通信器を弄りながら言われた兵士の言葉に拍子抜けしてしまう。

「なんだ、たんなる偶然か…」

「いや、狙いがここではないというだけだ。政府軍の衛星をハッキングした結果だと、首都の方に向かってるようだが…。…ツ！の野郎！首都をロックオンしやがった！」

「目視確認をする！」

塹壕に設けられた銃眼から首都の方角をのぞき見る。この観測所から首都までは100km近く離れているが、首都の超高層ビル群の頂上ぐらいは確認できる。

天気は良かった。視界の遥か彼方に剣山のように高層ビルや電波塔が見える。

「あ、マズイー…見るな！」

見張りが叫んだ瞬間、銃眼を覗き込んでいた右目が真っ白に染まった。

（あの時、これがあつたなら、この傷はなかつたな。さすが多次元組織は太っ腹だ）

評議会調査室13課が用意したセーフハウス——安アパート室内で、監視カメラを起動させたL3Sを遠隔操作しながら、昔所属していたゲリラと現在の身を置いている13課の装備の差を思いながらエイブラハムは右目周辺に触れた。

指には普通の肌とは違うデコボコした触感がある。鏡を覗き込んだならそこには火傷の痕の様な変色があるはずだ。醜い傷跡ではあるが、部隊では最も年下で魔導師ランクも高くないエイブラハムにとっては、過去の戦歴を示す勲章代わりなので気に入っていた。が、平和な世界では人目を引きすぎたため、町に出るときは変身魔法の亜種（メンダクス・ペルソナ）を使い傷痕を隠していた。

（研究室が戦闘機人の固有技能を解析して作った廉価版の魔法。室内で退屈しているよりは、多少危険でも対象の近くで、監視していたほうがいいと思っていたが、さすがにやり過ぎたか…）

昨日、咄嗟のこととはいえヴィヴィオ達を助けるために、全力を出したのは間違いだったかもしれない。特になのはこちらの正体に確信を得てしまったようで、姿を晒してコンビニに行くこともままならなくなってしまった。

ヴィヴィオ達の笑顔や平和なこの国の雰囲気にはだされて、のめり込み過ぎたようだ。

（いやいや、あれは仕方なかったって。大体、研究室も欺瞞効果高いけど、物体の表面だけ変化させる魔法ってなんなんだよ。元々、自身の体を変化させる変身偽装能力じゃなかったのか？ライアーズ・マスクって）

エイブラハムが言い訳じみたことを考えていると、エイブラハムに換わり町に買い出しに出かけている相棒——パーシングから電話で連絡が入った。

『エイブラハム、機材の調子はどうだ？』

「いたって正常だ。光学迷彩で監視任務中のL3Sとの回線に少しノイズが入っているが…、規定値内だ」

『この地球で使われている回線と強引に繋げているからな。エンコーダの際、どうしてもノイズが出てしまっているんだろう』

「大丈夫なんだろうな」

『アッチ(管理世界)の通信手段を使えばハラウン夫人に気が付かれちまうだろ。通信環境のことを考えれば、アッチの人間は普通ニツポン(管理外)の技術は使わない。それにニツポンは日常的に行われている通信もたいしたものだ、紛れてしまえば特定するのはそれなりに…、心理と技術両面からの偽装というわけだ』

「そっちじゃなくて、信頼性の問題だ。回線にノイズが入っているし、原因も不明と発表しているしな」

『お前がバックドアを付けて回ったせいじゃないのか？ いざとなったら、この辺の通信網を乗っ取って演算容量を稼ぐつもりだろ』

「そんなヘマはしないさ。いざとなったらちよつと借りるかもしれないがな」

『ヘマはしただろ、乗っ取りの下準備に夢中になり過ぎて、相手がぶつかってきたのに気が付かないとは…。見ていたこっちが、肝を冷やした』

「へいへい、そう言うなら。アンタこそ子供には気を付けな」

言って通信を切る。

監視対象が映っている面に意識を戻すと、その中には単純な図でL3Sの機体状況を図も含まれている。

全長40cmほどの鳥型の図。この姿こそ現在のL3Sの姿だった。デバイスの待機モードと同じ原理で、ほぼ戦闘能力のない姿になっているが嵩張らず、輸送や市街地での偵察活動をするにはこの姿のほうが有効だ。

図はすべて異常なしを示す青で塗られていたが、エイブラハムは不満げに鼻を鳴らす。

(機体表面を電磁メタマテリアルに変えると光学センサーに影響が出るな。画像解析ソフトを更新しないと最大望遠の時には影響がでる

かもしれない)

L3Sのカメラが写す先、高町家の庭ではヴィヴィオ達がバレーのようにボールをパスしあっている。

時々ボールの機動が逸れ、柵にきれいに並べられている盆栽に飛んでいったが、美由希が目にも留まらぬ早業で死守していた。

(鋭い動きだ。速さだけならミスター恭也より速いんじゃないか？それに気配を読むのにも長けているから、迂闊に近寄れない)

エイブラハムにとっては、攪乱方法をいくつか知っている管理局のセンサーより、美由紀達御神の剣士達の方がよほど驚異である。おかげでかなり遠巻きに、ヴィヴィオを監視しているのである。

エイブラハム個人としては、なのはやすずか達の様子も気になったが、オーバーSランクの魔導師やAAランク級の使い魔を抵抗もさせずに倒すことは難しく、特に警戒を強める必要はない。と、というのが13課職員としての結論だった。

何しろ高町なのは達は監視対象ではない。

(アイデア・グレンヌ、理念の種か…、この『種』は過去の実験で1つ、今回の騒動で2つ使用されている。となると、次に使用されるのが最後の1つになるな)

ここ数日間で行われた襲撃よりも、攻撃が行われるかもしれない。(問題は駆けつけている次元艦だな。艦長はメルセデス・ベネディクト…、いったいどこまでするつもりだ…)

エイブラハムの思考を遮るように、視覚のなかに新しいウィンドウが開く。そのウィンドウは高町家に電話が掛かってきたことを知らせる盗聴器からの信号だ。

映像では美由希が家の中に消えたが、電話の子機を持って再び姿を現す。美由希は手招きをして、ヴィヴィオを呼ぶと子機を渡した。

相手のナンバーは翠屋。回線を開いて内容を盗み聞く。

『もしもし、ヴィヴィオ。桃子だよ』

『はい、桃子ママ。ヴィヴィオです』

かけてきたのは桃子で、内容はヴィヴィオとなのはの夕飯の予定を確かめているだけのようだ。

高町家の平凡だが暖かい会話に、エイブラハムが心を和ませていると、むずがるように体をクネらせ不満げなこえをあげた。

『むー』

『どうしたの、ヴィヴィオ？』

『お耳、キーンってなるの』

『キーン？あら、ハウリングでもしているのかしら？それじゃあ、一端切った方がいいわね』

『切る？』

『そう、電話をかけ直すの、そうしたらキーンってならなくなると思うわ』

『うん、分かった！』

『それじゃあね、ヴィヴィオ。なのはよろしく』

『うん』

ヴィヴィオが電話を切り、遊んでいる内に落とさないよう、縁側に置いていた携帯電話をかけた。始めた。

(キーン…ね。また例の通信障害か？)

この地球は文明レベルBと言っても管理外世界である。先進世界の技術になれた人間には僅かなノイズも耳障りなのかもしれない。

(管理外世界の技術での通信ノイズか。今後、管理外世界に出たときの参考になるかもしれない)

朝から外出できずに退屈していたエイブラハムは、退屈しのぎ言い訳を考えつくと、全くの興味本位でヴィヴィオの言うノイズを分析し始めた。

(ああ、確かにあるみたいだな。高音域ノイズ。うちの機材が出すノイズとはまた別のパターンだな。…ん？)

エイブラハムはノイズの出す波形や位相グラフに違和感を覚えた。(このパターンどこかで見たことがある？最近のはずだ。いや、音データなんて、触ってないぞ)

違和感が徐々に不安に変わっていく。

エイブラハムの不安など意に介さず機械は黙々と働く、盗聴器がヴィヴィオとなのはの電話内容を拾いエイブラハムに届ける。

『もしもしー!』

『あ、ママ。お仕事、お疲れ様です!』

声に引かれて、エイブラハムが意識を映像の中のヴィヴィオに向ける。ヴィヴィオが地球の通信機械に話しかけている。

(ヴィヴィオ、通信、機械…?! ノイズのパターン。ヴィヴィオを検査していた医療器具のノイズ!)

油断していた、とエイブラハムは失態を認めた。

恭也が撃退した地球で初めての襲撃の際、使用された『種』が実体を持つていたため、実際に使用する際は物理的に持ち運ばなければならないと思いこんでいた。

『種』は情報物質。通信機器などの媒体を通して音や映像に変換。直接相手に送りつけることも可能だった。敵はそれを利用したらしい。しかも探知されやすい念話や管理局の通信技術を使用せず、地球の電話回線に潜り込ませるあたり、手が込んでいる。

(管理局の人間は、管理外の技術は使わない。そう思いこんでいた、俺も8課の連中と対して変わらないな)

自身に毒つきながら、エイブラハムは電話回線に侵入する。

『お耳…、…キ、なっ…ホ、ホン…ト…、キキ、つて、ててて、な…ッ!』

ヴィヴィオの様子がおかしくなってきた。もう少しで『種』の送信が完了する。高町家の近くにある中継施設に強制的に電話を切るように命じる。

(間に合え!)

プツリと電話回線が切れる。盗聴器からの音が途絶える。

(どうだ!)

ヴィヴィオは携帯電話を持ったままピクリとも動かない。心配した美由希がヴィヴィオの肩に手を掛けたところで、異変が起こった。

ヴィヴィオの足下にベルカ式の魔法陣が現れ、大量の魔力が吹き出してくる。

(間に合わなかった。まずい)

美由希が咄嗟に飛び退き、魔力の噴出で起きた突風からカレル達を

かばった頃には、ヴィヴィオの様子は変わっていた。漏れ出す歓喜を押さえきれないとばかりに薄ら笑いをしている。少なくともヴィヴィオがこんな笑い方をするなど想像できない表情だ。

エイブラハムはL3Sの待機モードを戦闘モードに切り替えさせ、現場に向かわせるよう信号を送りながら、手の届くところに置いてあったデバイスを掴む。

＜外部デバイス（G）接続

— HGS—712 「カートリッジ搭載型ストレージ」 装填済

み 残弾11

＜疑似リンカーコア出力上昇「battle」

＜バリアジャケット セットアップ

視覚野の画面の中では、異変に気がついた護衛のマークとコメントが駆けつけたところだった。

『大丈夫ですか』

『いったい、なにが』

美由希が返事をするまもなく、ヴィヴィオが腕を振るい。魔力弾を撃ち放った。二人の護衛は守るべき対象から攻撃を受けるとは思っ
てなかったのだろう、辛うじて直撃を防いだものの衝撃で吹き飛ばされた。

続けてヴィヴィオは振り上げた手を美由希に向けて牽制をした。

普段の美由希ならデバイスの補助のない魔力弾など、容易に避けて反撃することも可能だったが、今はカレル達をかばっているし、相手はヴィヴィオだ。迂闊に動けず、足を止めている。

エイブラハムがカードを抜いて転移魔法を発動する。行き先は高町家。豹変したヴィヴィオの正面に出ることになるが、この際構って
いられない。

L3Sから送られてくる情報の中に、高町家に転移魔法の反応が加
わる。その数4。

4！のこり3は敵の増援!?

一瞬のブラックアウト。景色が一変したときには、目の前にフード
をかぶった3人組が突然現れたこちらに驚きを止めている。

3人とも襲撃の際に現れたフード付きの格好をしていたが、1人だけ反りのある剣を持っていた。

(ヤツだけ違う装備。リーダー格？レアスキル持ち？理由は分からないが、とにかく潰す)

エイブラハムが拳銃型デバイスのHG S-712を引き抜くと、それを阻止するようにヴィヴィオも魔力弾を放ってきた。

体勢を反らしながら発砲。ヴィヴィオの弾は頭を掠めて覆面とゴーグルを引き裂いた。こちらの撃った弾は目標を逸れて、背後の柱を抉った。

「なにをしているの。撃ちなさい！」

ヴィヴィオがフード付き達の持つ剣を掴みながら、指示を跳ばすとフード付き達は弾かれたように攻撃してきた。

通常ならかわしながら、デバイスの起動阻止信号を出してやるころだが、攻撃の効果範囲には美由希達もいる。

敵の弾道を狂わす攪乱信号を送信しながら、カードを引き抜いてバリアを展開。

攪乱信号は効力を発揮したが距離が近すぎた、ほとんどが展開したバリアを削り取っていく。

フード付きの背後で『ヴィヴィオ』が剣を受け取り、魔力光に包まれる。

『2号機、撃て！』

念話で指示を出した瞬間、戦闘体型に戻ったL3Sが飛び込んで来た。

L3Sが機銃をバラ撒く。攻守が逆転し今度はフードつきたちがバリアを張って攻撃を受け止めた。

「エイブラハムくんだよ、どういうこと！」

こちらが攻勢にまわったところで、美由希がシールドが攻撃を防ぐ騒音に負けない大声をあげた。

「事情は、あとで!!」

叫び返すと、視界の隅で『ヴィヴィオ』に弾き飛ばされたダメージから立ち直った、護衛の二人が見える。

昨夜、矛を交えることになったただけあって、エイブラハムが美由希達を守るように行動していても、警戒を解かず、エイブラハムとフード付き双方にデバイスを向ける。

「撃つなよ、こっちも管理局だ」

「所属は！」

「調査室だ。あんたらの子供たちと定員さんでも守ってる！」

エイブラハムが護衛の二人に、ミッド語で話しかけると、少なくともコミュニケーションを取れることに安心したのか、護衛達の態度が軟化したように見えた。少なくとも後ろから撃たれることはなさそうだ。

美由希にむかって慣れない日本語を捻りだす。

「美由希、子供たちのそばに！」

「……」

幸いなことに、美由希はこちらの指示に素直に従った、子供たちを引きつれてマークとコメットに合流したところで、遅ればせながら、到着した1号機が周囲に強襲結界を張る。

(よし、取り敢えず……)

閃光が走った。

フード付きのバリアを引き裂き現れた閃光は、機銃弾などものともせず、L3Sの装甲を貫いた。

ダメージを負った2号機は痙攣するように機体をふるわせ墜座した。

閃光を放った人物は、全身を覆うプレートメイルから金属音を響かせながらゆつくりと現れた。

身の丈は160cm強、面当てを跳ね上げた兜を被った顔は、年の頃なら18歳ほど。翠と紅の左右非対称の瞳……。

現れた人物を見て、美由希が声を漏らす。

「ヴィヴィオ……なの？」

『ヴィヴィオ』は風の音でも聞いたかのように、ベルカ語で言ったフード付きの1人に聞いた。

「ヴィヴィオ……わたくしのことかしら？」

「そのようです」

「聖王たるこのわたくしの名前も知らないうえに、下賤な者が声を掛けるなんて……!」

声を掛けられたフード付きが答えると、『ヴィヴィオ』は嘆かわしいと首を振る。

ヴィヴィオらしい面影のない尊大な態度が、エイブラハムを苛つかせた。

「美由希！ヴィヴィオは任せろ！」

返事を待たず、1号機に強襲結界の設定を変えさせる。

灰色の景色が一瞬揺らめき、『ヴィヴィオ』とエイブラハム以外の人間が結界外に押し出される。

敵が結界を張っている1号機に狙いをさだめる前に発砲。これは剣で簡単にはじかれる。が、魔力弾が砕かれた火花を利用して、相手が防御しにくい死角に移動し再び発砲。

だが、これも防がれた。ただ、反射神経がいいとか、魔力がでかいだけではない、こちらの行動を読む老獪な戦術眼がある。強力な結界を張りながら戦闘するにはL3Sは能力不足だろう。

『結界の外に出て、結界と通信の維持に勤めろ!』

死角、死角に滑り込みながら発砲し、命じると1号機も姿を消した。チラツと『ヴィヴィオ』の視線が、1号機の消えたあたりの空間を向く。

(油断か?)

開いた死角を利用してカードを放り投げ、さらに発砲。上方と側面の2方向から攻撃する。

魔力弾が弾かれた瞬間にカードを起爆。ちよつとした時間差攻撃だ。

非殺傷設定の衝撃と閃光をまき散らす。

「ッー」

衝撃の余波が止む前に、魔力センサーの数値が跳ね上がる。

勘で右に跳ぶ。

ほぼ同時に、エイブラハムのいた空間を閃光が切り裂いていった。

「卑怯者！戦いの礼も知らぬか！」

『ヴィヴィオ』が叫ぶが、ダメージを受けているようには見えなかった。どうやら、『ヴィヴィオ』は相当な腕前を持っているようだ。強力な魔力を手に入れて浮かれている素人だと思っていると致命傷を受けかねない。

『ヴィヴィオ』が面を下ろしながら口上を続ける。

「卑劣な金貸しのメルカバ人！この聖王に向かっての狼藉、万死に値します」

古い戯曲の一節を使い、歌い上げるように言う『ヴィヴィオ』にエイブラハムは罵声で応じた。

「なにが聖王だ。ジンのようにヴィヴィオに取り付きやがって！」

「まあ、なんと無礼な！今の発言はわたくしだけでなく、聖王家に対しての侮辱。その不敬は万死に値します」

聖王は舞台役者のように、剣を掲げると口上を続けた。

「聖王たる、このオリヴィエ・ゼーゲブレヒトが直々に成敗してさしあげますわ」

「現在に不敬罪なんてものはないんだよ！」

正面から突進してくる聖王に、エイブラハムは素早く身をひるがえした。

68 エイブラハム・ハーベイ

「は?…て、ええー!」

『どうして、そう思うんだい?』

「戦闘時の動きやリズムだよ。武装隊や教導隊でいろんな人の戦い方を見てきたけど、ギリギリの戦いをするとき、ひとりひとりの癖が必ず出るものなんだ」

入局当時から教導隊を目指していたなのは、若干二十歳と年齢ながらにして見巧者である。

たとえば航空魔導師の場合なら、顔を隠した全く同じ背格好の人達が編隊飛行をしても、誰が何番目に飛んでいるか。どの程度の腕前なのかを把握することができる。

その技術で、月村邸でエイブラハムが見せた神速の動きから、なのはエイブラハムとニンジャが同一人物だと確信していた。

『そこまで、分かるものなんだ』

「うん」

「さすが、天下の教導隊つてわけだね。でも、できれば、もう少し早く言っただけ良かったな」

「ごめんなさい、エイミイさん。すずかちゃんのお家に行った日には確信があつたんですが…」

「確証がなかった。ま、確かにね、『疑わしきは罰せず』は刑事裁判の基本だからね。とりあえず、このアビーつて人をサーチャーの監視対象の一人に設定する」

『じゃあ、僕は地球への渡航記録でその人がどこにいるか探してみるよ。その人の名前は…』

「ええつと、エイブラハム…、ハーヴェイ?じゃない、ハーベイ。エイブラハム・ハーベイ」

『ハーベイか、ミッドの古い発音形式の方だね。他に分かっていることはあるかい』

「…もしかしたら、地球出身かもしれない…」

「ええ、地球出身?!海鳴で育ったとか、そんな感じのこと言ってたの

？」

なのはが答えにエイミイが驚きの声をあげる。

「ええと、前に先生のお墓が藤見台にあるって言っていたんです」

「なるほど、お世話になった人が海鳴出身なら、エイブラハムって人も、地球出身なんじゃないかと思っただね」

『ええと、第97管理外世界「地球」極東地区日本・海鳴市出身者からの移住者…』

ユーノが無限書庫のライブラリーに検索を掛ける。

『いた、海鳴市出身じゃないけど、20年以上前に日本から神埼玖遠さんという人がミッドチルダに移住している…、でも…、NGOに参加しているときに亡くなってしまったみたいだね。その人の旦那さんが、神埼弥太さん…。海鳴の出身のようだね』

「それで海鳴にお墓が…」

ユーノが検索した情報を共有すると、

「その人が参加した支援活動の行先は…、マガフ…か…、もしかしたら、メルカバ人なのかもね…。」

「メルカバ人？」

「十数年前からマガフはメルカバ人って民族が、革命を成功させて政権を取っているんだけど…、メルカバ人は古代ベルカ社会から疎外されたり、聖王統一戦争の際には「ゆりかご」の被害を一番受けたとも言われているんだ」

「…それは、300年前も昔のことなんじゃ…」

『残念だけど…。新暦になっても、酷い所は残っていたみたいだね。黎明期には迫害も残っていたらしいよ…』

「リンディ提督の世代でも、なんとか自称ナショナリストとか、自称ファシストの歴史学者は、偉大な覇王を殺した罪人なんて言いか、自方をする人もいるらしいから…」

『歴史的事実、宗教的解釈が混ぜ合わさって…、そんなところかな、差別を許している理由にはならないんだけどね…』

言いながらユーノは、メルカバ民族の概要を表示した。

要約するとメルカバ民族とは、数千年前、アルハザードから逃れて

きた人々の末裔と呼ばれている民族で、遺伝的にリンカーコアの発生率が少なく、アルハザードでは奴隷として働かされていたと伝えられている。

宗教的に偶像を禁じているため、自らの家系を偶像のように扱っていた古代ベルカ時代の王達には受けが悪く、弾圧の的になった。現在でも聖王教会の一部には、聖王を認めなかった民族として、罪人扱いをする宗教家もいる。その弾圧は新暦になっても続き、黎明期には強制居住区（ゲットー）や、強制収容所が、まだ存在していた世界もある。

戦乱や弾圧を逃れるために各世界に流浪し、各世界に散在しているため人口は次元世界では少数派になる1億ほどと言われているが、正確な人口は分かっていない。

『ミットチルダにいますとあまり感じないけど、排他的な世界に行く可他民族に厳しい政策を取っている世界は…、あるからね…。』

空間モニター越しにユーノが顔を曇らせた。遺跡発掘をして流浪の旅をするスクライア一族である彼も悩まされたことのある問題のようだ。

「それとエイブラハムってひとが、マガフのメルカバ人ならもう一つ納得がいく理由が一つ…」

『…?』

神妙な顔でエイミーが言ったので、なのはとユーノが顔に疑問符を浮かべていると、エイミーは得意げに続けた。

「女戦士イレイン…!」

が…、

「…?」

「…は〜」

エイミーの言葉に聞き覚えのないのははますます首を捻るだけだったが、ユーノはため息を付いた。

「エイミーさん、それは単なる都市伝説ですよ」

「そんなことないよ! って言うか、この記事書いたのスクライアの人でしょ?!」

「そうですけど、その人は突飛な記事を書くことで有名な人ですよ。いくら何でもたつた一人の女戦士が、魔法を一切使わず管理局の支援を受けた基地を殲滅したというのは…」

「残念でしたー。それはその人の書いた記事を元に流行った、ソーシャルメディアの切り抜きですー」

「え、えーつと…、いったい何の話ですか？」

話についていけないのはが疑問を口にする。

『ああ、ごめん。十年ぐらい前にマガフの革命に関する報道で話題になった話だよ、新暦の60年くらい？なのはが魔法と出会う前の話だから知らなくても仕方ないよ』

「そう、魔法を使わずに刃物や電撃ワイヤー、携帯火器を駆使して高ランク魔導師と戦った女戦士がいたって話があつてね。その人の技が伝わっているなら、美由希相手に魔法を殆ど使わずにやりあつたつても、納得いくでしょう？」

「その手の戦闘技術と言うと、真つ先にルーフェン伝統武術が上がりますけど…、他の世界にもあるんですね…」

「でも、その技術の映像とか、資料が残ってないんだよね。その謎めいた所がソーシャルメディアで流行った理由でもあるんだけど…」

『一応、イレインと言う女性は実在しているんだけどね。革命後の暫定政権だったショット国家主席の第1夫人。民間軍事会社「静かなる蛇」の設立者であり、特別顧問。ただ、新暦64年・亡くなっているね。お葬りの規模が国葬みたいな規模で執り行われた。と…が…い…』

説明の途中で空間モニター上のユーノの動きが止まり、声も途切れってしまった。

「ああ、もう、まただ…」

エイミーが毒づいて、通信回線の状況を調べる。いくつかの通信エラーが出ていたが、原因は分からないようだ。それらを調べているうちに、突然、通信状況が改善した。モニターの向こう側で、キョトンとした顔のユーノが手を振っている。

「なのは、聞こえてる？」

「うん、見えてるよ、ユーノくん」

ユーノの姿が始めて動画を取られている人のように見えてしまい、なのはクスッと笑いながら答える。と、ユーノは振っていた自分の手を見ると、照れた調子で言った。

『通信環境が悪いみたいだね』

エイミイが続ける。

「ごめんね。どうも海鳴一帯で通信障害が出てるみたいなんだよ。原因も、いまいちわかってなくってさー」

「あのニンジャは通信魔法を使ったウイルス攻撃をしてきました。もしかして…」

「うーん、そういうのとは、症状が違うっぽいんだよねー。なんと言うか、ウイルス攻撃がすり抜けるって感じなら、こっちは手当たり次第にバラ卷いているものが、たまたま、こっちに当たったって言うか…?」

通信障害と聞いてもしやと思ったが、ニンジャと今の通信障害は別の問題らしい。なのははここ最近地球の通信ネットワークにも障害が起こっていることを思い出した。ミットチルダの環境に慣れているなのは、管理外世界ならこんなものかと思っていたのだが、日本ではそれなりに珍しいのかもしれない。

そんなことを考えていると、カバンの中か電子音。スマホを取り出してみると通信障害のお詫びの通知が届いていた。海鳴に帰ってきてから何度か見た内容と同じだったので、カバンに戻そうとすると今度は着信の電子音が鳴った。

ディスプレイの表示は、ヴィヴィオ。

「はい、なのはママです」

『あ、ママ。お仕事、お疲れ様です！』

「はい、お疲れ様です。ヴィヴィオ、どうしたのっ…」

『あのね、桃子ママがお夕食は一緒に食べることが出来るか聞いてたってー！』

「あ、え、ええつとー！」

フード付き達の狙いが自分にあることが捨てきれないのはが返

事を躊躇っていると、ヴィヴィオは拙い日本語の語彙で、桃子の作る夕食がいかに素晴らしいのか語り始めた。

元気なのはを送り出してくれたヴィヴィオだったが、アリサの記憶が亡くなってしまったことは理解でき、そのことでなのはが気を病んでいることを心配していた。なのはの姿を数時間見ないことで心配が不安になり、帰って来てほしがっているようだ。

「うん、大丈夫。夕食までには帰るから」

こんな顔をされては仕方がない。さすがのエース・オブ・エースも自分の娘には勝てずに言うと、ヴィヴィオがパツと顔を輝かせる。

『ホン…！』

喜びの声を上げかけたヴィヴィオが、突然、言葉を止めた。

「ヴィヴィオ？」

『お耳ガ、キーンって…なって…』

不審に思ったなのはが名前を呼ぶが、ヴィヴィオの声から抑揚が亡くなっていく。

『お耳…：キ、なっ…ホ、ホン…ト…：キキ、つて、ててて、な…ツ！』

とうとう、言葉がままならなくなると、ブツリと回線が切れた。

ママ、お電話しているとき、お耳キーンてしない？

この宝石はイデア・グレンヌと名前のつけられている情報物質です。

形を変えて送信することもできるようです。

「なのはちゃん？」

「家に戻ります！」

ヴィヴィオの声が聞こえていないエイミィが怪訝な顔をするなか、部屋を飛び出すなのはを追うように、強力な魔力反応を感知したことを示すアラームがハラオウン家に響いた。

69二つの一対一

バリアジャケットを纏い空に舞い上がった途端、景色が急変。なのははつぶらな瞳を細めた。

「これは、強装結界…」

このタイミングで偶然はあり得ない。誰かが意図的になのはがヴィヴィオと合流することを阻んでいる。

身構え、バリアジャケットをエクシードに切り替えると、エイミーから通信が入った。

『なのはちゃん、おかしいよ。長距離次元間通信が使えない』

『どういう、意味です?』

なのはが疑問の形で答えた。

通常、次元間における通信は直接次元を超える信号を届ける方法と、中継施設を経由で信号を届ける方法がある。長距離の通信となると、前者は高い魔力出力が必要になり、後者は施設の性能に依存することになる。

ハラオウン家は後者に当たったが、元々闇の書事件の解決のために設置された経緯のあるシステムだ。そうそうトラブルは起こらない。

『システムが妨害を受けてる。被害の拡大は防げたけど管理局に通報が出来ない!』

『それだけ、組織立ってやっているか、すごい技術者がいるってことですな』

『そうだね、あるいは…』

エイミーとの通信中、なのはの背中を誰かの殺意が撫でた。出力を上げ回避機動を取ると視線の端に誘導弾が数発見えた。

見覚えのある魔力光を放ちながら誘導弾は、通常の自動誘導ではあり得ない軌道でなのはに迫ってくる。回避を諦めディバイン・シューターを誘導弾の数だけ生成する。

「シュートター…」

シューターはなのはの心像に描かれたとおりの軌跡を辿って、誘導弾を撃ち落とした。

「その出力、その運用速度！この間とは比べものにならないではないか！」

奇声に近い歓声に目を向けると、太陽を背に人影が見えた。逆光になって姿を確認できなかったが、声と魔力の性質で分かった。ガンナーに間違いない。

「…随分と回復しているようではないか」

太陽を背に取られた戦術的不利よりも、粘り気のある視線で体をなめ回されたことに、なのはは生理的嫌悪を覚えつつも口を開いた。

「どいてくださいーいまー！」

「娘の様子が急変した、だろう？」

なのはの言葉の途中で、ガンナーが笑い混じりの声で遮った。

「この結界の解除理論は簡単だ。結界内にいる術者を倒せばいい。そら、どうした？まだ、間に合うかもしれないぞ」

逆光の中で体をふるわせ笑う影法師。

なのははその口が三日月のように裂ける姿を幻視した。

「ッー」

理性の鎖が切れ、瞬間的に集められた魔力がはじける。

《シヨートバスター！》

なのはの最速砲撃魔法がうなり声をあげてガンナーに向かっていく。

しかし、ガンナーはすばやく反応した。まるで待ち構えていたように防御魔法が展開され、光の奔流が拡散し跳ね返されていく。

それでもいくらかの魔力が防御魔法から削り取られていく。それを見たなのはがさらに出力を上げ防御を抉り貫こうとしたとき、ガンナーがバスターの射線から弾き出されるように抜け出した。

ガンナーが太陽を背にした位置から移動したことで、姿が見える。手にしたデバイスには輝く魔力球。さらに、

《警告、照準波感知!!》

攻撃をデバイスが、自身は防御に専念。ガンナーとデバイスとの連携も相当高い。打ち出された魔力球が鋭い曲線を描き、なのはの側面から襲いかかってきた。

相手を挑発し、その隙をつく。そういった類の攻撃だったようだ。頭に血を上らせたせいで、まんまと引つかかってしまった。

魔力球が鋭角に曲がり、最後に急激に加速。目で追うことしかできないなのはに迫った。

だが、デバイスと連携がとれるのはガンナーだけではない。

『プロテクション』

「ほうー」

破裂音と共にガンナーの放った魔力を、レイジングハートが小さな魔法陣の盾でしっかりと受け止めると、ガンナーが感嘆の声をあげた。

「私とボフォースの攻撃を受けきるかー」

ガンナーはそう言って、目眩を追い払うかのように頭を振った。

攻撃の切れ目に、レイジングハートがなのはに語りかける。

《マスター、まずは目の前の敵に集中を。そうしなければ、ご息女を迎えに行くのは困難です》

『うん、ごめんね。レイジングハート』

どこまでも冷静な愛機の声で、なのはも落ち着きを取り戻し、ガンナーの攻撃を思い出す。近づくと思ひ寄せられる様に急加速してくる攻撃。それとは逆にこちらの攻撃を反発させるような防御。

魔力素自体に働きかけるレアスキルの類だ。間違いない。

前回の襲撃以来、なのはも対ガンナー対策をなにもしてこなかった訳ではない。「打ちのめされた経験から学び取る」のは、なのはの所属する教導隊の教育方針でもあるのだ。

ガンナーの使用しているレアスキルの理論をいくつも検討し、それに対抗するための戦術を編み上げ、分割思考を使つてのイメージファイト訓練も重ねてきた。

「ブラスタター」

《了解、ブラスタタービット展開》

エクセリオンモードのレイジングハートのヘッド部分に似た、遠隔操作機が四機出現する。途端、消費魔力が増大。ビット制御の為、送受信されるデータがレイジングハートの処理装置を圧迫する。それ

に構わず自身と四機に魔力を均等に配分する。

『エイミーさんは、そのまま通信障害の対応を』

『了解！まかせて！』

念話を使ってエイミーに頼むと、暗号通信のため内容は分からないにしても念話を使っているのを察したらしいガンナーが顔を不満で歪める。

「タカマチ、私と対峙しているというのに、他の者など捨てておけー！」
ガンナーの魔力出力がグングン上昇し、無数の魔力弾がガンナーの周囲に生成される。杖の先端にも魔力球が膨れ上がって行く。

反応炸裂魔法！でも、近すぎる！

「命を賭けた戦いこそ、人間とつての至高の行為。だからこそ、貴様はこの懦弱な辺境を捨て、戦場に現れたのだらう！」

炸裂魔法は今のような間合いで放てば、自爆めいたことになりかねない無茶な攻撃だったが、ガンナーは何の迷いもなく砲撃してきた。

が、無茶と思いい切りの良さでは、なのも負けてはいなかった。

「エクセリオンバスター!!」

ブラスターモードでの砲撃は、抜き打ちであるにも関わらず力負けしなかった。いや、それどころか相手の砲撃を破壊しながら突き進む。

「ちいー！」

咄嗟に砲撃を取りやめたガンナーの防御魔法にバスターが命中すると、やはりガンナーが射線から弾き出されて直撃させることができなかった。ガンナーが生成していた魔力弾も弾かれたように分散し、砲撃に巻き込まれた弾はないようだ。

「いいぞ、タカマチ」

恍惚の表情をしたガンナーの声がだんだん裏返ってきた。

「我々の戦いはこうでなければいけない!!」

ヒステリックに叫ぶガンナーに呼応して、飛び散っていた魔力弾達が高活性化した。四方からなのはに向かって突き進んでくる。

高い誘導性能を持つ魔力弾を大きく躲すことはできない。回避をするならば、寸前で躲するのがセオリーだったが、ガンナーはそのセオ

リーを逆手に取るレアスキルを持っている。躲したと思っても全く別の誘導方法で、魔力弾の軌道を変え誘導することが可能なのである。

むろん、防御魔法で受けることは出来る。しかし、受けることでも魔力は消費されていくのである。互いの実力が拮抗している場合の戦闘では、その消耗は勝敗を左右する。

なのはもそれをよく理解した上で、大きく回避行動を取った。四機のビットが後に続く。

砲撃を撃った直後の自身に比べて、ビット達の出力が高いのを確認すると、なのはは2機ずつを組ませてビットを散開させた。すると、魔力弾達はビットを追った。さらにビット達が二手に別れ、出力を交互に上げ下げ変化させると、魔力弾達は目標を決めかねるように揺れ動く。ビットに誤誘導されているのである。

ここでのなのはが反撃に出た。直進しかしないシュートバレットをあえて甘い照準で放つ。

本来はずれたはずの弾丸は、ガンナーに近づくと吸い寄せられるように軌道を変え、ガンナーに向かって飛翔した。

ガンナーが身を翻しバレットを躲したのと、誘導弾の追尾が止んだのはほぼ同時だった。

バレットをギリギリのところまで躲したガンナーが飛翔を止めると、なのはも攻撃の効果を確かめるため空中で停止した。

ガンナーが自分の頬に触れる。そこはシュートバレットが掠めた衝撃で血がにじんでいた。それを確認したガンナーが、くくくと含み笑いをし始めた。

「傷、傷だ、1対1で傷を負ったなど、いつ以来だろうか？」

熱に浮かされたように自答するガンナーを見ながら、なのはは愛機と戦術を討議する。

ガンナーのレアスキルは、特定の魔力に対して磁石のような吸引力や反発力を持たせることができる。と、いうものだ。これを利用し、攻撃の際は魔力に吸引力を付与し攻撃を強化。防御の際は反発力を持たせ相手の魔力そのものを反発させることで、攻撃の直撃を反らし

ているのだろう。

だが、当然ながら無敵の能力ではなさそうだ。なのは達が気付いただけでも三つ欠点がある。

第一に特定の魔力に反応させるといふことは、多人数からの同時攻撃には対応できないということ。たとえば、2人組の相手から同時に攻撃を受けた場合、2人の内1人の攻撃にはスキルを発動できるが、もう1人の攻撃に対しては、通常の防御としてしか意味をなさない。チーム戦向きではない能力ともいえるのだが、今回のような場合には欠点になり得ない。

第二に吸引力にしても反発力にしても、互いの出力に左右されすぎってしまうことだ。攻撃の場合なら、目標と同質でより出力のある魔力があると、そちらに誤誘導されてしまう。防御の場合は、砲撃のようなパンチ力のある攻撃を受けると、その反発力によつて空中に踏みとどまっていることができずに、弾き飛ばされてしまう。この時の急制動で生まれるGはフィールドの吸収能力を超えるので、肉体にかなり負担が掛かることが推測できる。

最後に吸引力と反発力を同時に発動させることができない。と、いうことだ。使い方を誤れば攻撃は逸れてしまうし、なにより、自分自身に攻撃を引き寄せてしまうことにもなりかねない。

そういつたこれまでの攻防で得た相手の能力をふまえて検討した結果、レイジングハートは砲撃による打撃を重ね、相手の体力を削り取っていくことを提言した。

《砲撃戦を推奨。殴り合いなら負けません》

『いい考えだけど、それだと時間が掛かりすぎる』

レイジングハートの意見はより勝率の高い物だったが、ヴィヴィオの元に駆けつけるために、なによりも時間が惜しかった。

『ちよつと危険だけど、勝負に出よう。相手に撃たせてそのスキを突くよ。付き合ってくれる、レイジングハート』

《大丈夫、やりましょう。マスター》

レイジングハートは即答した。どうやら、なのはと同じ考えにたどり着いたようである。

デバイスからの信頼と愛情を感じながら、なのはは飛翔した。

風を切る鋭い音と共に、魔力弾が体のすぐ側を掠める。

お返しに一発撃ち返す。が、相手のとつた行動は片腕をあげて頭を守る位だった。

ガンツ、と中身の入ったドラム缶を殴ったような音がして、魔力弾がガントレットに命中したが、コイン程度の凹みを作った程度で、エイブラハムの放った魔力弾は弾き返されてしまった。

「ちっー！」

舌打ちをしながらフェイントを入れてステップ。へ自称へ聖王の放った魔力弾がエイブラハムのいた場所を貫いて行く。幸いにして相手の射撃を躲すのは難しくなかった。

もともと、ベルカの騎士は射撃を得意としている者は数が少ない。このへ自称へ聖王もまた純粋なベルカ式のプログラムしか用意していないらしく、射撃戦は苦手のようだ。攪乱信号も有効に働いている。今のエイブラハムはリソースに制限があるため、複数の術式に干渉することは難しかったが、体術だけでも単純な射撃だけでやられることはまずない。

しかし、へ自称へ聖王の防御は厚く、エイブラハムの放つ魔力弾による攻撃がごとごとくはじき返されてしまう。

もちろん、分厚い装甲を突破、または無視する攻撃方法がないわけではなかったが、それを行ってしまうとヴィヴィオが無事ではすまない。

肉体、精神、魔法的にもヴィヴィオはまだまだ脆い、特に精神と魔法に関していえば、『種』が取り付き記憶を吸収している間は不安定に

なっているのが感じ取れる。魔力ダメージでノックアウトという乱暴な手段をとると、深刻な後遺症を残してしまうかもしれない。

（魔力ダメージにしても、点穴にしても、あの騎士甲冑が邪魔だな）
不意でも突かないと、あの騎士甲冑がまともに機能しているときは、あの装甲を貫くのは難しい。点穴を仕掛けるにしても、全身を覆った鎧が邪魔をする。先に騎士甲冑を破壊するか、〈自称〉聖王自体を無力化する必要があった。

そこでさきほどから、軽い脳震盪をさせてやるつもりで頭を狙っているのだが、アリサの時とは違って、この〈自称〉聖王はかなりの腕前を持っているようだ。単純な攻撃には引つかかってくれない。

「ちよろちよろとネズミのように…、この卑怯者が！」

〈自称〉聖王が魔力弾を撃ちつつ距離を詰めてきた。見た目は重量級だが出力が高いだけあって、なかなかのダッシュ力がある。だが、初速や小回りを含めた総合的な機動力はこちらが上だ。

かき回してやる。

十分に引きつけたのち、カードを投げつけてやると、〈自称〉聖王は避けきれずに炎熱魔法の中に飛び込んだ。エイブラハムもこの程度で、相手が倒せると思っていない。

センサーが魔力の上昇を検知。

魔力弾を火炎の中に撃ち込み、高く跳躍する。炎熱魔法も魔力弾もものともせず、〈自称〉聖王がバリアを張りつつ、火炎から飛び出してきたのはその直後だった。

白刃が閃き空を切る。〈自称〉聖王が炎熱魔法と射撃が攻撃を空振りさせるための誘導だったことに気が付いた時には、エイブラハムは〈自称〉聖王の背後に降り立っていた。

一瞬の脱力からの加速。振り向いた〈自称〉聖王の側頭部へ掌底打ちを叩き込む。違和感。

ビクツと痙攣する〈自称〉聖王。違和感。

よし、勝つ…。違和感。

柔軟体操のように、体を反らせる。と、甲高い音をたてて刃風が鼻先を掠めていった。

鼻が低くてよかった。いや、そんなことはどうでもいい。

〈自称〉聖王の胸当てを蹴り飛ばして間合いを取る。相手のバランスを崩したはずなのに、追ってくる殺気。攪乱信号が効いていない。急所を守るため咄嗟に腕を上げると、左腕に深く痛みが走る。

互いに体勢を立て直して、にらみ合う。

(くそ、ヴィヴィオを傷つけることを恐れて、加減しすぎた)

本当にどうかしている。入れ込み過ぎもいいところだ。

痛みをしかめなれないように左腕を見れば、短剣が突き刺さっていた。近世ベルカの騎士達が戦場にでる際持っていた短剣を模して、騎士甲冑と共に魔力で編み上げたものだろう。よく相手の姿を観察すると、腰に小さな鞘だけがぶら下がっていた。そこに差していた短剣を投げつけたのだろう。プログラムを使用しない投擲攻撃には攪乱信号は通じない。

「いいのか？その短剣、たしか騎士が名誉の自刃するためのモノじゃなかったのか？」

「おだまり!!貴様のような畜生を追い払うのに、騎士の礼など不要ですわ!!」

時間稼ぎのつもりで口を開くと、〈自称〉聖王が激高する。

「おや、おかしいな。その風習が出来たのは、最後の聖王オリヴィアの後だった筈だぜ。なんで、〈自称〉聖王のあんたが知っているんだ?」
「…ツ!!あなた、あなた、わたくしを聖王と認めないとおっしゃるの!!」

エイブラハムはニヤニヤと笑いながら、スクライア一族に聞いた教科書に載っていない古代と近世の風習の違いを指摘した。日本でいうなら、ピラミットはお墓じゃないぞ。と、雑学を披露して相手をかからかうようなものだ。挑発を受けて〈自称〉聖王は歯噛みをして悔しかった。

挑発で出来た隙にエイブラハムは短剣を引き抜き、バリアジャケツトで患部を締め上げ、止血を完成させる。小指の腱が傷ついたようだが、武器を握るときに、気を付けてさえいれば問題なさそうだ。

だが、どうする?頭に血が上っているとはいえ、相手だつてバカ

じやない。今の攻防でこちらが頭を狙っていたことぐらい気が付いただろう。そうそう、隙を突かせてはもらえない。

どうしたものか。と悩んでいると。相棒のパーシングから連絡が入った。異変を感じてセーフハウスにあわてて戻ってきたようだ。

『エイブラハム状況は?』

『見ての通りだ。ちと、まずいな』

『仕方ない。8課の後追いをするようで、気に入らないが第2プランに…』

『いや、ヴィヴィオをあきらめる前にやってみたいことがある。電話、テレビ、ラジオ。ヴィヴィオが接触した可能性のあるすべての媒体のデータを集めてくれ。ヴィヴィオが通っていた聖王医療院でのノイズとやらもな…』

『一体なにに…? ああ、そういうことか』

セーフハウスのモニターに、表示された通信ログや、エイブラハムが処理しているのデータをみて、パーシングが言った。

『察しがよくて助かるね。頼んだぞ』

エイブラハムが答えて牽制のために銃をむけると、〈自称〉聖王も構えなおし、自らのデバイスに命じた。

「オートクレール! カートリッジ、ロード」

〈自称〉聖王の持つ剣に搭載されたカートリッジシステムが3発炸裂する。すると手にした剣の形が変化。刃が三股に分かれたのち、真ん中の刀身が2倍近くに延びた。

変化が終わったときには奇妙な形の長剣が出来ていた。さらに〈自称〉聖王の周囲に複数の宙に浮く剣が出現する。

「クレティアン・ド・トロワ!!」

剣が次々と射出された。速度も破壊力も先ほどまでの魔力弾とは比べものにならなかつたが、エイブラハムの行ったことは攪乱信号の種類を変えた程度だ。相手の照準方法は、スターダストフォルに代表される物質加速型射撃魔法と同じモノ。対応策はいくらでも用意してある。

射出と同時に、〈自称〉聖王が延びた刀身を真っ直ぐこちらに向け突

進してきた。だが、剣の長さが違うといってもエイブラハムにとって、この突進攻撃は先ほどと何の変わりもない攻撃に見えた。

射撃からの突進。余裕で対処できる。そう思って回避のタイミングを合わせようとした瞬間。

「フー！」

「ッ！」

刀身の延長部分が射出されてきた。咄嗟に左に避けて逃れたが、三股に分かれた刀身の左側がこちらに向いているのに気が付いた。

ヤバい、間に合え。

引き抜いて盾にしたナイフに衝撃。同時に何かが千切れていくような異音と痛み。

残弾をフルオートで撃ち込み、腰の2本のマニピュレータがカードを投げつける。先ほどの教訓からかへ自称〱聖王は、先ほどの二倍の火炎の中に飛び込んでまで、深追いしてこなかった。

(危なかった)

左小指は…、まだ何とか動く。

しかし、射出機能付きの剣とは恐れ入った。しかも、狙い剣を向けた角度で操作するので、攪乱信号が入り込む余地がない。

銃とナイフを持ち替える。左手では1、2合攻撃を受けただけで小指の腱が切れそうだった。

(ま、それでも、うまくやるしかないんだけどな)

そう思いながら身構えると、へ自称〱聖王が再び複数の剣を出現させるところだった。

システムに対するハッキングによる被害の拡大をどうにか押しとどめ。相手の居場所を突き止めてやろうと、タタタツと淀みのない動きでキーボードをタイプするエイミーの視線が、空間ウインドウに写された数字の羅列で止まった。

「なにこれ？大きく迂回しているけど…。妨害の発信点、意外と近い…」

ポンツ！と、警告音が鳴って、ハッカーの痕跡を逆探知する作業と並行で行っていた作業の終了を示す表示が、別の空間ウインドウに映し出された。ハッカーのプログラムが何処の世界で作られてきたのか解析する作業が終了したようだ。

プログラムには、使用された機材のOSやBIOS、プログラミン
グ言語などによって癖がでる。素人目には同じミッドチルダ式のシ
ステムに対する命令プログラムだったとしても、エイミーには人の顔
のように個性豊かに見えるのだ。

「このプログラムの出身地…」

プログラムの『顔』を見たエイミーが眩き、目まぐるしく手が動く。

エイミーは何度か空間ウインドウを開閉させた後、目当てのデータ
を見つけた。

「やっぱり、この船の船籍と同じ…、いったいなにをたくらんでいるの
？」

次元船の航海プランを引っ張り出し、エイミーが言った。

そのまま、乗船名簿の中から個人通信端末のパワーを落としていな
い迂闊者を探し始めた。

70二つの一対一Ⅱ

出力をあげたビット2機が、相手の誘導弾を引き連れ離れていく。続けてガンナーの魔力が上昇。相手の砲撃のタイミングを見計らって、さらにビットを散開させると、ガンナーの砲撃が弧を描いてビット達を追っていく。

なのははガンナーの追尾から逃れようと、旋回能力いっぱい防衛機動を取った。が、振り切れない。ガンナーは交差角を合わせ、ぴたりと付いて来た。

エクシードモードは出力と装甲に優れていたが、その分機動力を切り捨てた側面があるため、旋回能力においてはガンナーの方が上手のようだ。しかも、相手の誘導からのがれるために、なのは自身の出力を落とさなければならなかったため、速力任せに振り切るのも難しい。

ガンナーが魔力を再チャージ。ガンナーの杖が、デコイ代わりのビットを失ったなのはに、狙いを定めようと動く。

桜色の砲撃が二人の間に割り込んだ。誘導弾の追尾から逃れたビットが引き返して放ったものだ。

ビーム・デイフェンス・ポジション、別名サッチ・ウィーブ。味方同士が互いに内側に旋回し、攻撃を受けている味方の後方に迫る敵を、もう一人の味方が正面から攻撃する航空戦法だ。教導隊でも教えられるこの戦法は、本来、相互連携を基本とした集団戦闘に用いられる囲戦術であった。が、高い空間認識能力を持ち、複数のビットを自在に操ることが出来るのはにとつて、一対一の状況でもキルレシオを飛躍的に向上させることができる必勝パターンになっていた。

ガンナーは砲撃の直前、ビットに気が付き、攻撃を取り止めて際どいところで魔力砲撃を回避する。しかし、魔力に吸引力を付与していたため、なのはの砲撃にガンナーの体が引き寄せられてしまい思うような機動がとれていない。

砲撃したビットと組になっていたもう1機から、追撃の砲撃。

これは避けられない。なのはがそう思った瞬間、ガンナーがスキルを反発力に切り替え、一撃目の砲撃との反発力を利用して第二撃を回

避した。まるでプロレスラーがロープの反動を利用するような機動に、流石の教導隊員も驚いた。

「そんな機動までとれるの！」

なのはが動揺した隙をつき、ガンナーが再びスキルを吸引力に変える。

目標は砲撃したビット。先に邪魔になるビットを撃ち落とすことにしようだ。なのははガンナーが放った砲撃を、もう1組のビット達を使って誤誘導させた。

ガンナーの砲撃が止む瞬間を狙って、なのはは無数の誘導弾を放った。誘導弾は整列したかのように一直線にならび突き進む。一点を狙ったピンポイント攻撃。これをくれば高ランク魔導師といえどもただではすまない。

だが、直撃するかに見えた誘導弾達は、ガンナーの体を掠めバリアジャケットを浅く裂くに留まった。

被弾する可能性の高い誘導弾を弾くだけのリソースはきつちりと確保している。狂人のような言動とは、裏腹に戦術的なミスをしないアンバランスさがガンナーには見える。

ガンナーが愉悦を覚えたように笑った。

「そうだ、タカマチ。もつと来てくれ。もつとだ…、もつと！もつとだ！！」

裏返った声で叫びながらガンナーが迫ってくる。

振り切れないことは分かっていたが、なのはは相手が狙いをつけづらいように、蛇行飛行に上下方向の動きを加えた、ローリング・シザーズ機動に持ち込んだ。互いにバレルロールを行い、相手をオーバーシュートさせようとせめぎ合う。

『スキを狙って、攻撃を撃ち込んでいるのに防がれちゃう。きつと反応速度の差なんだ。攻撃が止むのを待っていたんじや、間に合わない』

《はい、想定よりも、スキルの発動速度を上方修正します》

レイジングハートが答えた。状況がより厳しくなっているというのに、彼女の声には気力が漲ってきているように感じられる。

『それでも同じ魔導師なんだ。もつと速く。もつとギリギリのところ
で撃ち抜くんだ』

《ええ、やれます。マスターなら》

二人が決意を固めていると、ガンナーが魔力弾を放ってきた。今度
は複数の弾を同時に当てるのではなく、小さな弾を連射することで、
こちらの魔力を削り取るつもりらしい。ビットを使った囮は、同時に
二組が限度。この軽いが手数が多い攻撃に使ってしまうと、より重い
砲撃を食らってしまう。

《チャンスです。マスター》

『うん、わたしも痛い我慢するから、レイジングハートもつき合っ
て』

《もちろんです》

なのはは魔力弾をあえて魔力を防御の強化に回さずに受けた。エ
クシードの重装甲は初めのうち魔力弾をはじき返していたが、フィー
ルドの魔力が削られ距離が詰まると、数発がフィールドを内に飛び込
み、バリアジャケットを引き裂いた。レイジングハートが必死になっ
て、フィールドの調整とジャケットの修復を行うが、なのはの柔肌
にも血が流れる。

ガツンと杖を握る手に衝撃。調整状況を知らせるレイジングハー
トの声が一瞬止まった。彼女も被弾したようだ。

ガンナーとの距離がさらに詰まる。

嵐のような連射にも歯を食いしばり、ビットを引き連れたままロー
リング・シザーズ機動を維持していたなのはがビットを全機散開させ
た。放たれていた魔力弾がビットに引かれて離れていく。

「ヒアハアツツ!!」

奇声をあげながら、ガンナーはタカマチに迫っていた。被弾したタ
カマチは耐えかねたようにビットを散開させた。

砲撃を叩き込む絶好のチャンスだ。狙いを定めようと相手を見る
と、ガンナーの前を飛ぶタカマチのデバイスから、キラキラと光を反
射させながら何かが剥離していく。

(「デバイスの破片か?」)

タカマチのデバイスが被弾したのは確認している。ガンナーがそう考えたのも無理もないことだった。だが、それが勘違いだったことはすぐ知れた。剥離した物体の一つが、偶然ガンナーのフィールドに衝突し目の前を通り過ぎる。

ガンナーの前でキラリと光ったカートリッジの薬莖はアツと言う間もなく視界から消え、入れ替わるように高町なのはが現れた。

(「ッ!」)

デバイスを構え直す暇もなかった。タカマチとそのデバイスが唱える。

《「ブラスター2」》

「デバインバスター!!!」

視界一杯に広がる桜色の魔力光。吹き飛ばされながらも、ガンナーの意識はまだあった。反発力を発動させると、竜巻から弾き出された木っ端の如く魔力の激流から放り出された。

そこに待ちかまえていたかのようなビットからの砲撃をくろう。反発力が作動しているため直撃ではなかったが、そのかわり、交通事故を遥かに超えるGが、ガンナーの体を徹底的に叩きのめす。その数5回。

5回目の衝撃は真上から……。頭上から打ち下ろされた砲撃に吹き飛ばされ、地面に激突した衝撃だった。

傷の痛みに熱された体を冷まそうと、なのはは息を吐いた。

「うまくいったね。レイジングハート」

『お見事です。横転コルク抜き、実戦における初成功です』

なのはが行ったのは、バレルロールが上方に到達した瞬間に空力を変化させるフィールド調整だ。

フィールドの空気抵抗を変化させることにより発生する横滑りは、本来のバレルロールの機動より体を速く回転させる。

このとき生まれた時間差で相手をオーバースhootさせる高等飛

行テクニツク。

横転コルク抜き。

あれだけ接近した状態でやられたガンナーにとっては、なのはが瞬間移動したように見えたかも知れない。

交差の瞬間に一撃を叩き込むため、防御に魔力を使わず、温存していたことも功を奏した。

「…んッ！」

気を抜いた途端全身に痛みが走った。ガンナーに受けた傷だけでなく、内側からの痛みもある。エイブラハムの治療で改善されたといっても、治りかけの体でブラスター2は無理があったようだ。

大出力魔力運用によって傷付いた体の痛みがぶり返してきた。

《大丈夫ですか？マスター》

「うん、大丈夫だよ、レイジングハートは？」

《問題ありません》

全然大丈夫では無かったが、心配してくれる愛機についてそう答えてしまった。もつとも、聞き返すと答えたレイジングハートも自己修復の途中なのでお互い様だろう。

こういうところが、一心同体ゆえに一緒になって無茶をする。と、ある執務官を心配させているのだが、性格というものはなかなか直らないものらしい。

（ごめんなさい。シャマル先生。なのはは、やっぱり悪い患者さんです）

見上げると灰色がかった景色が、虫食いのようにもとの青空に戻っていく。

地面に叩きつけられたガンナーには、もう、結界を維持するだけの力も無いようだ。自分でやっておいてなんだが、地面に出来たクレターを中心で、踏みつぶされた蛙のようになってるガンナーを見ると、だんだん心配になってきた。

「やりすぎた？」

『いいんじゃないでしょうか』

苦笑いしながら口にしたのは、しれっとした口調でレイジング

ハートが言った。

「だよね」

それに合わせて、なのはもケロツとして答える。体だけでなく神経も頑丈な二人であった。

ガンナーをバインドしようと地上に降りると、ガンナーが倒れたまま含み笑いをしていた。

「くくくく、強いな。タカマチ。強いぜ」

ガンナーのバリアジャケットはすでに機能を停止し、デバイスにも無数のヒビが入っている。このまま放置したら、デバイスは修復不可能なレベルで根幹部分の機能が失われるかも知れない。

ガンナー自身もそうだ。魔力ダメージを受けた上に、強烈なGにもみくちやにされ、内蔵にもダメージが蓄積されているはずだ。さらに近づいて気が付いたことだが、右足があらぬ方向に曲がっている。だというのに…。

「もつとだ。もつと、ヤろう…」

ガンナーは立ち上がった。

傷ついた杖で体を支え、実に幸せそうな表情をなのはに向けた。それを見たなのはの表情が曇る。

(この人はこんなものには、喜びを感じることが出来ないの?)

なのはには分からない。

PT事件の時、闇の書事件の時も、JS事件の時だって、強敵を打ち倒したことや、事件を解決できたことなんかより、そこにあった出会いや、生徒達の成長の方がうれしかったのに…。

どうして、この人はこれを選んでしまったの? わからないよ…。

それでもなのは口を開いた。

「あなた、戦うのが好きなんだね…。でも、もう終わり」

「もつとだ…。もつと、もつと! 終わっちゃ…」

風を切る音と共に飛来した青と緑の輝きが、ガンナーを横殴りにした。さらに立て続けに数発の魔力弾が飛来する。なのはの魔力に波長を合わせていたガンナーの反発力は作用せず、直撃をくらったガンナーは今度こそ倒れ伏し動かなくなった。

そのまま、ガンナーに二重のバインドが掛けられる。

「大丈夫ですか？なのはさん」

「ええ」

結界が解かれたことで駆けつけた護衛のキャバリエとクロムウエルに答える。2人もバリアジャケットが損傷していた。またフード付きが現れたようだ。

護衛達に振り向いた拍子に、髪の毛のツイントールの一房がほどけていることに気がついた。被弾していたらしい。

バランスを取るためもう片方のリボンも解く。

「家に向かいます」

「了解」

なのはは最後に一度、ガンナーに振り向いてから、高町家へ急いだ。

魔弾となって打ち出される複数の剣を、エイブラハムは軽いステップで避ける。〈自称〉聖王は打ち出される剣を完全に牽制用にするつもりのようなだ。無理に狙いを付けようとせず、こちらの動きを制限するための弾幕代わりにバラ撒いてくる。

〈自称〉聖王はこちらが避けたところを狙って猛然と踏み込んでくる。それに合わせてエイブラハムがカードを投げつける。炎熱魔法が起動。

しかし、三度目となると相手も読んでいる。手早く耐火バリアを張った〈自称〉聖王が剣をエイブラハムに向ける。

刃が打ち出されるより早く、エイブラハムが発砲した。魔力弾が〈自称〉聖王の腕に当たり、僅かに狙いを狂わせたが〈自称〉聖王は構わず刃を一本射出してきた。

高速で打ち出された刃は、エイブラハムを掠めただけだったが、剣と刃で左右を挟まれる形となったエイブラハムの足が止まった。

〈自称〉聖王が延びた長剣に魔力をたっぷりと乗せ振りかざした。これだけの魔力がこもった一撃なら、エイブラハムの防御やナイフなど、もろとも叩き切られてしまう。

「取りましたわー！」

ギギン、と、必勝の一撃が金属を響かせながら火花をあげたが、エイブラハムの体には届かなかった。

いつぞや恭也がフード付きにやったのと同じ要領だ。小さな力しかなくとも、タイミングさえ間違わなければ、高ランク魔導師の一撃を受け流すことは可能だ。

だが、恭也のよりうまくいかなかった。強烈な負荷がナイフに掛り、部品同士がガタつき始めた。

しかし、〈自称〉聖王は受けながされるとは思っていなかった。驚きと攻撃を受け流された勢いが〈自称〉聖王に空足を踏ませた。

すかさず、バランスを崩した〈自称〉聖王の頭部に銃を向け引き金を絞る。が、魔力弾はボクサーのスウェービングのように、首を振った〈自称〉聖王にかわされた。

(さすがに警戒しているか…)

銃撃をかわした〈自称〉聖王が犬を追い払うかのように剣を薙払う。これが普通の長剣だったのならば、エイブラハムにとつては単なる縄跳びにしかならなかったのだが、おそらく飛び上がったところに刃を射出するのが〈自称〉聖王の狙いだろう。と、エイブラハムは考えた。

ジャンプと同時に射撃。さきほどと同じ要領で刃の狙いを反らしでやる。さらにカードを一枚投擲。耐火バリアに阻まれダメージは与えられないだろうが、着地のスキを埋める目隠しに利用する。着地の瞬間すぐさま横に飛ぶと着地地点あたりに刃と剣が突き刺さった。

火炎が消え、〈自称〉聖王が姿を現す。すでにカートリッジをロードしたようだ。剣を含めた刃がすべて揃っている。

『エイブラハム、待たせたな！準備できたぞ！』

『揃ったか、じゃあ、そいつの中から…』

『もう、終わっている。送信するぞ、受け取れ!!』

『いいね、さすがは、スクライア』

『データを見つけたすのは、得意分野だ』

エイブラハムは軽口を叩きながら、パーシングが送信してきたプログラムを確認すると、出来栄えに思わずニヤリと笑った。

「なにが可笑しい！」

その笑みをどう受け取ったのか、〈自称〉聖王が怒鳴声と共に剣を放ってきた。

間合いが遠い。難なく回避する。

(待つてろよ、ヴィヴィオ！)

銃をフォルスターに戻し、マニピュレーターにはカードを一枚づつ、細く息を吸い。

走る。

同時にエイブラハムの世界から音と色が消えた。引き延ばされた時間の中、〈自称〉聖王が剣を向けようとするのがはつきりと見える。

(いまだ！)

エイブラハムは攪乱信号を維持しつつ、相手のデバイスに刃の射出命令を送りつけた。

射出信号はホワイトリストに含まれていたため、デバイスは正規のものと同認した。デバイスが刃を全弾射出させる。狙いの甘い刃がエイブラハムを掠める。

〈自称〉聖王が迎え撃とうと身構えたところに、マニピュレーターの一本でカードを投げつける。

カードは炎熱魔法。パターン化された攻撃に〈自称〉聖王が素早く対処した。破裂する火炎を耐火バリアが受け止めた瞬間、火炎が電撃に変わる。エイブラハムが発動中のプログラムを書き換え、魔力変換『炎』を、『電』に変換したのだ。

「ッ！」

耐火バリアをすり抜けた電撃が〈自称〉聖王を打つ。再変換された電撃は炎よりも減衰していたが、虚をつかれた〈自称〉聖王の動きが止まる。

間合いが詰まる。後、数歩。

〈自称〉聖王の周囲に剣が現れる。もし、エイブラハムの聴覚が働いていたら「バタイユ・デ・ロンズヴオー」と、いう〈自称〉聖王の呪文が聞こえていたかもしれない。

現れた剣の数は先ほどの数倍。

(なっ！)

剣がフランクス部隊を思わせるような密度で生成された。

動きを止められれば、〈自称〉聖王が射撃か剣で牽制してくることは予想していたが、その数が増えることは予想していなかった。

大きくかわして、仕切り直すべきか？ いや、この数ではかわし切れない。

(退くな！攻めろ！)

感覚をより鋭く。集中力を高める。イメージするのは美由希と対峙した時だ。あの時は自分より数段上の使い手が持つ気配に当てられ、より感覚を深く潜らせることができた。

あの時を思い出せ！

エイブラハムは自分自身の体と、世界の動きがより減速して行くのを感じた。

減速した世界で、〈自称〉聖王の剣が射出される。手近な数本の剣の切っ先の狙いは狂っている。攪乱信号の影響は出ている。

影響のなかった剣のうち、真っ先に飛んできた一本をナイフで打ち払おうとする。灰色の中では空気抵抗がまるで水あめのように重く感じる。それでも、何とか剣の弾道にナイフを振るう。ナイフと剣が火花を上げた。

つづく剣はほぼ同時に放たれた三連射。一本に左手を伸ばし、残る一本にはマニピュレータが保持していたカードで、小型ながらも強力なシールドを張ることにする。

迎撃に耐えきれずに折れたナイフを捨て、最後の一本になった剣に右手を伸ばす。

剣がシールドに弾かれ甲高い音を立てた時、エイブラハムの手には2本の剣が握られていた。

(左小指の腱が、切れた)

痛覚から機械的にそう判断する。感覚が深く潜り過ぎていて、痛覚はただの信号になっていた。かまわず、接敵する。

〈自称〉聖王も黙ってはいない。手にしたデバイスを袈裟がけに振り下ろしてくる。左の剣で打ち払う。

金属音と衝撃。

小指の支えがない左手から剣がすつぽ抜ける。が、〈自称〉聖王の構えも崩れた。

エイブラハムは右手の剣に込められた付与魔力の設定を、甲冑破壊に最適な数値に書き換えた。そのまま、膂力を総動員して〈自称〉聖王の胸部装甲に剣を叩き付けた。

(フィールド・ブレイク)

装甲が砕け、破片が舞った。

〈自称〉聖王が剣を引きもどし反撃してくる前に、エイブラハムはインナーが露出した胴に向かって組みついた。そのまま、股の間に強引に足を差し入れ押し倒す。

エイブラハムは素早く、〈自称〉聖王に馬乗りになると、『リンカーコア捕獲』を付与させた右腕で突く。

「ああ…」

いつの間にか、聴覚が働いていた。リンカーコアを掴まれた〈自称〉聖王が小さく悲鳴をあげ抵抗してくる。エイブラハムは、剣を振り回そうとした〈自称〉聖王の右手を掴んで、捻り上げようとしたが小指が動かないせいであまりうまくいかない。体重を掛けて地面に押さえつけておくのが精一杯だった。だが、十分だ。〈自称〉聖王はリンカーコアを握られているため、まともに魔力が使えていない。腕力ならこちらの勝ちだ。

なりふりかまっていられなくなったのか、〈自称〉聖王が口を開いた。

「放しなさい！アイデア・グレンヌを抜いたりしたら、この子の記憶は失われるのよ!!」

「人質を取ったつもりか！馬脚を出したな、カルト野郎！」

〈自称〉聖王がことさらに剣を振り回そうしたことに対し、エイブラハムが対抗して体重を前に掛けた。

直後、

ガッ！

目の前が真っ白になる。体重を掛けるため顔を下げたことで殴ら

れたらしい。相手の右手とリンカーコアは放さなかったが、この隙に、転がるように体勢の上下も入れ替えられた。

片腕でしか抵抗できないエイブラハムの首に、体重を乗せられた剣が大型裁断機のようにじりじりと迫った。

71 御神の剣士II

「あぁっ……」

コメットが腹のど真ん中に魔力弾を食らい、悲鳴をあげながらひっくり返った。バリアジャケットは魔力弾の貫通は防いだが、衝撃まではストップしきれなかったようだ。

コメットの穴を埋めるように、L3Sが機銃を連射する。フード付きは素早く道場やエイブラハム達が戦っている結界の影に隠れた。

L3Sの弾幕に、マークも加わりフード付き達の頭を抑えつける。

「美由希さん！動いて！」

「二人とも、こっち」

ハラオウン家の子供達を庇いながら、摺座したL3Sの影へと移動する。子供達はたいしたものだ。カレルはリエラの手を握り締め、勇気づけようとしており、リエラも泣き出さずに堪えている。

「OK！」

コメットが体勢を立て直して声をあげると、L3Sは美由紀達を庇う位置取りに移動する。

(ほぼ、互角？いや、私達がいるぶんだけ不利)

美由紀はそう判断した。もちろん、美由紀には魔法の知識は殆ど無かったが、戦いの流れそのものならわかる。護衛達の方が戦いのリズムを取りかねているように感じる。

保護対象を守ることを念頭に置いているため、思い切った行動が取れていないのだろう。

(ボディーガードの仕事なら、即離脱がセオリーなんだけど)

美由希は子供たちを抱えて逃げることも考えたが、結界とよばれる魔法の所為でそれも出来そうにない。

戦闘に参加しようにも、手持ちで武器になりそうなものがシャープン1本では、いくら美由希でも危険過ぎた。

(なにか武器になりそうな物は？)

視線を彷徨わせると、それはすぐ近くにあった。摺座したL3Sに取りつけられているコンテナ部分が破損して中身が覗いている。

中身は小銃とそれに取り着けるための銃剣のようだ。

美由紀はコンテナの中から、なるべく静かに銃剣を引き出す。鞘からぬくと、真黒に塗られた刀身が鈍く光る。銃剣の方は刃渡りが40cm近くある大型。

これなら使える。

美由紀達、御神の剣士達が使っているのは、60cmほどの小太刀と呼ばれる日本刀で銃剣は20cmほど短いのだが、間合いが短い分はその分踏み込めばいい。

子供たちに体を低くするように言いつけて、穿いていたスカートにスリットをいれるように裂く。

御神流 『心』

耳をそばだてるが、L3Sや護衛達の攻撃音が邪魔をして敵の位置がイメージしにくい。もっと集中しなければならぬ。

間近で戦闘が起きているのに目を閉じることを、美由紀は一瞬ためらったが、すぐに目を瞑ると更に心静かに集中する。

結界の影に1人、道場の裏に2人。その内二人が散発的に遠距離からの攻撃を繰り返している。

味方の方はマークがバリアを張り、コメットとL3Sが応射しているようだが、決め手に欠いている。

本来のL3Sは、もう少し善戦できる能力をもっていたが、強固な結界を維持する為に魔力リソースの大半を使っており、火力に回すだけの魔力が残っていないかった。

不意に、美由紀の『心』が敵の様子を鮮明に捉えた。不思議に思っ
て目をあげると、『心』の邪魔をしていたL3Sの攻撃、機銃の射撃が止んでいた。

「触媒（たま） 切れね…」

コメットが小さな声で呟き、L3Sの攻撃がやんだ分だけ手数を増やした。

しかし、L3Sの触媒（たま）切れに気が付いたのは味方だけでは
ない。道場裏に隠れていた一人が密かに、屋根の上へ上がり、棟の反

対側で身を低くしている。

一気に接近してくる気だ。護衛達は他のフード付きの頭を押さえるのに手一杯で気が付いていない。

(味方に警告する?…いやー)

屋根の上のフード付きが跳躍した。

不意を突かれたマークとコメットの対応が遅れる。頭上という死角を取ったフード付きがヒッターを振り上げながら、勝利を確信して口端を上げる。

その笑みがヒッターを振り下ろす間もなく、苦痛に歪んだ。

小太刀二刀御神流裏 奥技之参 『射抜』

美由紀は摺座したL3Sの脇から飛び出し、砲弾の様な勢いで相手に銃剣を突きたてた。が、慣れない武器での技は完璧とは言い難かった。

(ダメー浅い!)

銃剣はバリアジャケットを貫き、敵に深手を負わせたが、まだ意識を絶てていない。美由紀は空中で、相手に組みつくのと体の捻り、主導権を持ったまま落下した。

御神流 『萌木割り』

「ギャッ!」

地面にぶつかる衝撃とともに気味の悪い音と悲鳴が上がり、ヒッターを持つ敵の腕の関節が破壊された。それでも、美由紀は動きを止めず、引き抜いた銃剣で今度は膝を破壊する。

「ッ!」

悲鳴すら上げずに、フード付きはのた打ち回る。

普通の人間ならばこれで戦闘不能だったが、魔導師となると油断はできないと判断して、美由紀はその場から飛びすさった。

「えっ!」

誰が声を出したのか。

魔導師が魔力を一切持たない女性に、白兵戦で敗れる。管理世界の常識ではあり得ない自体に、その場にいた魔導師達全員が同時に凍り付く。

しかし、立ち直るのは窮地を救われた護衛達の方が若干早かった。

「…あ、今！」

「おう！」

マークとコメットが同時に放ったスタンバレットは、無防備になったフード付き達を捕らえた。

「ふー」

『心』で相手から抵抗する気配が消えたことを確認し、美由紀が一息付いたところで、マークが叫んだ。

「美由紀さん！離れて！」

「…！」

マークの声と同時に魔法の発動音を捕らえた美由紀が身構えた。が、途端片足が固定されたように動かなくなる。見ると光の輪が足首をしつかりと固定していた。

バインドと呼ばれる束縛魔法だ。

「神罰をくれてやる…」

美由紀に腹を突かれたフード付きが、知らない言葉で呪いを吐きながら、動く手足だけで飛びかかってきた。

足を封じられたとはいえ、傷ついた相手の動きは単調で余裕で対処できる。しかし、行動をとる間もなく、大きな影が割って入り、フード付きを蹴り飛ばした。フード付きはワンパクな子供に蹴られたボールのように、壁に叩きつけられ崩れ落ちる。

フード付きを蹴り飛ばしたL3Sが、美由紀に覆いかぶさるようにかがみ込むと、視界が赤く染まる。見上げるほどの火柱が、フード付きの体から立ち上っていた。一泊遅れてマーク達が倒したフード付き達の体からも火柱が上がる。

「…自爆」

炎の熱はL3Sの体のお陰で殆ど遮られたが、あのまま対処していたら巻き込まれていたかも知れない。

「ありがとう、助かっちゃった」

美由紀は危ういところで、助けてくれたL3Sの装甲をポンと叩いて礼を言った。

するとL3Sは首を巡らせ、お辞儀のようなジェスチャーをした。意外と人なつこい仕草をする。

そう思いながら火柱が上がった辺りをみると、フード付き達は地面や壁に黒い影を残すのみとなっていた。

「戦うのって…好きになれないな…」

美由紀は自分にしか聞こえない小さな声で呟くと、数秒目を閉じ緊張の糸を切らない程度に、昂揚を押さえた。

(とりあえず子供たちに人死に見せずにすんだね)

そう考えることにして、出来るだけ普段通りの声を出すよう意識しながら、子供たちに声を掛けた。

「カレル、リエラ、もう大丈夫だよ」

美由紀が声に、カレルが摺座したL3Sから頭を覗かせ、周りを確かめると、リエラに何かを言ったらしい。

L3Sの裏からリエラが飛び出した。リエラは美由紀の姿を確認すると、一目散に駆け寄ってきた。

「美由紀おねーさん！」

「リエラ、よしよし」

リエラにガツシリと抱きつかれ、よろめいた美由紀だったが、やさしくリエラの頭を撫でる。

やはり怖かったのだろう。カレルの方はどうだろうと見ると、美由紀から数歩離れた所で止まり唇を噛みしめている。

美由紀はカレルも怖かったのだろうと思い、手招きをしたが、カレルは唇を尖らせ首を左右に振った。

恥ずかしいのか、片意地を張っているのか？最初はそう思った美由紀だったが、カレルの表情に見覚えがあることに気が付いた。

あれはそう、まだ美由紀が幼かった頃、大けがをした父を見舞いに行ったときに、恭也が見せた表情だ。なにもできない自分自身に対して、怒りを感じている時の顔だ。

そのことを思い出して、美由紀は「この子は将来大物になるぞ」と、思った。

この表情をしたあと、恭也は剣の訓練や家の手伝いも真摯に取り組

み急成長して行った。きつと、カレルもこの悔しさをバネに成長してくれるのではないだろうか？

美由紀がカレルに幼かった頃の恭也の姿を重ね、頼もしさを感じていると、マークとコメットが苦笑しながら近寄ってきた。

「助かりました。美由紀さん、あなたにかかったら魔導師も形無しだ」「ええ、ありがとうございます」

二人は助太刀に対して礼を言いつつ、美由紀達を背後に誘導し、L3Sとの間に割ってはいる。

「確保する」

「兵装封印！」

マーク達はそういつてL3Sの結界維持に必要な機銃などの武装にリング状のバインドを掛けていく。L3Sも特に抵抗するように命令されていないのか、縄を掛けられ梱包された彫像のようになっていった。

その姿を見たカレルが不満そうな顔をしたが、二人の魔導師は気が付かないフリをして、それ以上近づくことを許さなかった。

単純に自分に味方してくれたから良い者と考える子供と違い、二人はエイブラハムが管理局と名乗ったからといって、所属不明の相手を使う兵器を無条件で信頼できないのだろう。

「はい、二人とも動いている車には近づいちゃダメって、お母さんに言われているでしょう」

「ええ、ロボットだよ」

「大きなロボットも同じです」

護衛二人の心情を察した美由紀が、護衛達の味方をして、子供達にL3Sから離れるように促すと二人はほっとしたようだ。

護衛達は眼だけで礼を言うと、結界とL3Sから注意を離さないようにしながら、通信を試みたようだ。空間ウィンドウが開き、ノイズ混じりの画面に妹の顔が映った。

『こちら、1等空尉 高町なのは。マークさん、コメットさん、聞こえますか？』

「なのは！」

妹の姿と声に思わず、マークを押しつけ空間ウインドウの前にたつてしまった。

画面の向こうでなのはが突然変わった通信相手に、戸惑ったようだがすぐに気を取り直して聞いてきた。

『おねえちゃん？今そつちに向かっているんだけど、結界の中はどうなってるの？』

「ええっと、とりあえずフードを被った人たちを3人やつつけて…」

聞かれた美由紀が答えようとしたが魔法の知識が乏しいため、どう説明したらいいか分からず言葉が止まってしまった。

「変わります、美由紀さん」

横からコメットが助け船を出してくれた。彼女は淡々とヴィヴィオが大人の姿に変身し、エイブラハムと戦っていること、その様子が2重に張られた結界の為に分からないことを報告していく。

デバイスによるデータ通信も行われ、口頭より遥かに多くの情報を交換していく。

「結界内に入ります」

それを確認したなのはが宣言すると、大気が震えた。

見上げると、轟音を立てて灰色の景色に穴が空き、青空が見える。その穴からなのはと空を飛べる護衛の魔導師が飛び込んでくる。

なのは達はL3Sの1機が活動しているのを認めると、デバイスを向けないまでも警戒しながら降りてきた。

「おねえちゃん、大丈夫？」

「なのは！それはこつちの台詞！」

直に妹の姿を見た美由紀が声をあげた。

先ほど空間モニターに映った姿は不鮮明だったため気が付かなかったが、なのはのバリアジャケットはあちらこちらが裂けており、覗いた素肌からは血が滲んでいる。

「大丈夫、かすり傷だから」

「だからって…」

美由紀は言いかけて途中でやめた。今言っても、どうにもならないことだと知っているからだ。

なのは自分の道を自分で選んでいる。心配はしても、信じて待っていることにしたんだ。と、自分に言い聞かせる。

そうこうしているうちに、なのは達は内側に張られた結界に入ることと決めたらしい。結界とそれを維持しているL3Sを交互に見比べる。結界を破るかL3Sを破壊するか考えているのだろうか。美由紀にもそれが分かった。

《そいつの耐久試験は終わっている。撃たないでやってくれ高町1尉》

L3Sから響いた声に、魔導師達が身構える。だが、実際に変化があったのはL3Sが維持していた結界の方だった。結界表面が揺らいだかと思ったら。空気が抜けた風船のように萎んで、あっけなく消滅した。

結界の消滅跡に、エイブラハムとヴィヴィオが現れる。エイブラハムは地面に寝そべった姿勢で、右手に球体状のイデア・グレンヌ、左手には剣を持ち、腹の上に意識のないヴィヴィオを乗せている。

「…アビーくん？」

「…そちらに危害を加える理由も意図もないよ、高町1尉」

なのはエイブラハムの右目の周囲から頬に掛けての傷跡に驚いたように、確認するように名前を呼んだ。

エイブラハムはなのはの様子に肩を竦めながら答えた。

72十数年前の宿題

「剣を捨てろ」

なのはの護衛、空戦魔導師のキャバリエがデバイスをエイブラハムに向けながら言った。

昨夜エイブラハムと戦っているためか、声が堅くなっている。

「物騒だな…、同じ管理局職員じゃないか」

言いながらもエイブラハムは、聖王から取り上げた剣を自分の手の届かないところまで放り投げる。

空いた手でヴィヴィオを支えて、ゆっくりと上半身を起こした。

「動くなど、言っているだろ」

「こちらの任務の方が優先だ。従う義務はないんだぜ。キャバリエ警護官」

「なら命令を見せてみる」

キャバリエは高圧的に言ったが、エイブラハムは気にした素振りも見せず、倦怠感のある声で言った。

「手元にはないな、キール元帥府に問い合わせてみる」

言いながらエイブラハムはバリアジャケットの背から、大小6対の翅のような廃熱板を展開させた。キャバリエ達を軽くあしらいつてぶてしい態度を取るエイブラハムに、キャバリエが攻撃を仕掛けるかと思われたとき、それをなのはが止めた。

「待って、キャバリエさん」

なのはが割って入り、エイブラハムに声をかける。

「アビーくん」

声には憎悪や嫌悪が色はなく、ただただ真摯な強さが乗っていることに、エイブラハムが片眉を挙げた。

（友人だけでなく、娘まで危険な目に遭わせた相手だというのに、たいしたものだな）

エイブラハムがなのはを見返すと、なのはは真っ直ぐ見つめてくる。

エイブラハムが言った。

「いつから気が付いていた？」

「初めてあつた日かな。そう思った理由は…説明できないけど。たぶん、そうなんだろうな〜って」

「気が付いているんだろうな。とは、思っていた。そのうえで、黙っていてくれてるんだろうな。とも…」

なのはの眼差しに、エイブラハムは鼻白む。いままで黙っていたことが、とても悪いことをしてしまったかのように思えてきてならない。

「アビーくん達にも事情があるのは知ってる。でも、こうなつてしまった以上、聞かないわけには行かない」

なのはは悲しむような、切ないようなそうな瞳をしてから、聞いてきた。

「アビーくんの目的はなに？」

エイブラハムは答えることにした。

今右手にある『種』を確保した時点で、エイブラハムの任務は終了している。後処理にエイブラハムが係わる公式な理由はない。

「…オレだって、たいしたことを命じられているわけじゃない。ヴィヴィオの周囲で『種』を使おうという動きがある。あらゆる手段を使ってそれを阻止しろ。と、命令を受けただけだ」

エイブラハムはそこまで言つてから、右手の『種』を見る。

「これ『種』を処置するのは命令だ。悪いが渡せない」

「そんな〜でも、それには…!」

「ヘンな気を起こすなよ。オレの所属と命令の内容を知つた以上、公務執行妨害になる」

「……ッ!!」

こう言われるとさすがになにも言い返せない。なのはが顔を青くする。

「アンシンしろ、ヴィヴィオの記憶は無事だ」

「え…!」

「ほら、ヴィヴィオ…」

エイブラハムの言葉に驚きながらも、少しだけ緊張をゆるめるなの

はを後目に、エイブラハムはヴィヴィオの背中を軽く叩く。が、ヴィヴィオはむずがるだけで、なかなか起きてくれない。

その様子になるのはの顔色が心配で再び曇り、話を聞いていた美由紀が怪しむ。

「頼むから、起きてくれっ！君のママ達が悪魔みたいな顔をしている」

二人の様子に焦ったエイブラハムが余計なことを言っつて、なのはがムツとしたところで、ヴィヴィオがぼんやりと目を開けた。

「ヴィヴィオ、俺が誰か分かるか？」

「エイブラハムさん…？」

ヴィヴィオが呟いてから、エイブラハムを見上げると、ビクリと我に返ったようだ。

「エ、エイブラハムさん。あの、あの…」

ヴィヴィオは視線をエイブラハムの顔と自分の手に行き来させると、眼に涙を溜めて震えだした。余程動揺しているのか、日本語を使う余裕もないようだ。言葉がミッド語になっている。

その様子にエイブラハムは、戦闘時ほんの少しでもリソースを確保するために、顔の変装用魔法を解除していたことを思い出した。

（そりゃ怖いよな。眼を開けてすぐに、醜い傷顔の男に抱かれているんだから）

右手で顔を隠そうとしたが、手に『種』を持つていたことを思い出す

エイブラハムは溜息を吐くと、左手でヴィヴィオを立たせ、改めて左手で傷跡を隠した。

「ほら、ヴィヴィオ。ママのところに行きな」

「でも…」

「いいから、行った。行った」

自分はヴィヴィオに怯えられたことに、ショックを受けているらしい。

エイブラハムは自分でも驚くくらい、つつけんどんな声が出たことに驚いた。

さらに情けないことには、その声を怖がるヴィヴィオを見たくなく

て、エイブラハムは態度のことを、謝りもせず眼をそらしてしまった。
(うわ、情けない)

そうは思ったが振り返る勇氣は出なかった。聴覚だけが、高町親子の様子を伝えてくる。

「ヴィヴィオ、大丈夫？ママの事、忘れてない？美由希おねえちゃんは？カレルとリエラは？フェイトママの事は？」

「…そんなにいっぱい…聞かれても、一度に答えられないよ。なのはママ」

エイブラハムの態度に怯えてか、涙声のヴィヴィオが答える。

「……！」

「わわ、苦しいよ、ママ」

なのはは自分の名前を呼ばれた事に安堵したようだ。ヴィヴィオを抱きしめる衣擦れの音が聞こえてくる。

なのはのキツイ抱きしめに、ヴィヴィオがタップアウトするようになるのはの体を叩いたが、なのはは構わず満足するまでヴィヴィオを抱きしめた後、思い出したように疑問を口にした。

「でも、どうして？」

『種』を抜きだされたヴィヴィオの記憶が無くなっていないことに疑問を感じているのだろう。しかし、美由紀は当然のことながら、ロストログアの知識のない護衛たちも答えられない。

そこにいる大人達の視線が答えを求めるようにエイブラハムに注がれる。

「ヴィヴィオが触れた可能性のあるデータの通信ログを洗って、ヴィヴィオに送り込まれた『種』と本来の記憶をより分け、切り離したんだ」

言いながら、エイブラハムは右手の『種』を視線で指した。エイブラハムの手の中で光る宝石は完全な球体をしている。なのはが初めてガンナーの襲撃を受けたとき、指揮官らしき男が持っていたのと同じ姿だ。

エイブラハムは説明を省略したが、これはエイブラハムの能力というより、相棒のパーシングの検索プログラムの優秀さのたまものと言

えた。パーシングは人間の記憶を図書やデータに見立てて、ヴィヴィオ本来の記憶と、電話の音を触媒にして侵入してきた『種』本体とをより分ける検索系の魔法を組み上げた。エイブラハムはそれを使用し、より分けられた『種』のみをヴィヴィオから抜き出した。

それでも、戦闘中に行うような魔法ではないので、その反動が熱という形で体内に籠り、排熱板でようやく体温調整をしているのが現状だ。

「この『種』は、もともと、ベルカの王族が子孫に記憶を移すための技術だからな。種から切り離された記憶結晶を体の中にのこしておくば、元の記憶としてヴィヴィオの中に戻る」

エイブラハムは説明したつもりになっていたが、専門が違う戦闘部隊の魔導師達は分かったような、分からないようなあいまいな顔をした。

「とにかく、ヴィヴィオの記憶はなくなることはないんですね」

なのはの質問にエイブラハムが頷く。

「記憶をより分ける？うん、ファンタジー小説は読むけど。魔法のことはおねえちゃんにはちよつと難しい話だね」

「管理局世界の魔法はファンタジーじゃない。リツパな科学体系だ」

読書家らしい美由紀の感想に、エイブラハムが律儀に反論する。

続いて、なのはが何かを思いついたのか口を開く。

「アイデア・グレンヌと記憶を切り離せるなら、アリサちゃんの記憶も元に戻せるんじゃない」

「無理だ。アリサに送り込まれた『種』は、今回の『種』とはまた別の人格データが込められている。そのデータを手に入れないことにはな…」

さすがに言いにくい事だったが、はっきりと否定するとなのはの顔が沈む。

それを見たヴィヴィオが心配すると、なのははヴィヴィオの頭を撫でて、何でもないと言っていた。

エイブラハムはデバイスにアイデア・グレンヌを格納しながら、なのは達に気まずさを感じていた。

アリスの記憶に関して言えば、元に戻せる可能性が全くないわけではなかったが、無責任に希望を持たせることもいえず、エイブラハムが黙っていると、周囲の景色が揺らいで見えた。

(目眩、思った以上に疲れているのか?)

ほとんど無意識にシステムをチェック。体内環境を調べる。

＜体内環境：規定値内

＜システム：異常なし

疲労でも、システム異常でもない。では外的要因だ。

次に各センサーのチェック。

＜GPS機能にエラー

―計測誤差拡大中

(周囲の空間が乱れている?これは…、結界か!)

＜儀式魔法感知

―広域結界型 種別：空間歪曲 ディストーション・シールド

排熱作業に追われて気がつくのが遅すぎた。魔法が完成して内部に閉じこめられる。

ディストーション・シールドは特殊な空間の歪みを発生させ、範囲内の干渉や攻撃を抑えたり、無力化させたりする儀式魔法だ。この中に閉じこめられると、空間座標を正確にロックできず、あらかじめ転送ポートを設置していない転送系の魔法は使うことができなくなってしまう。

しかも、今回の結界は規模が半端ではない、ざっと計測しただけで結界の直径が100kmはありそうなほど巨大な結界だ。

なのは達も気がついたようだ。子供達が遠くの景色が陽炎のように揺らいで見えるのを不思議がっている。これは夏の日差しの為ではない。空間が曲がり、光が直進していないためだ。

なのはが視線を投げてよこす。

「違う。俺達じゃない!」

結界を張ったかを問う視線と判断して答えたところで、空間ウインドウが現れ、エイミイを映し出した。ジャミングの影響が映像が乱れている。

「なのはちゃん、大変。今すぐ一番近い次元転送ポートへみんなを連れて逃げて」

「…どうしたんですか？エイミーさん」

青い顔色で静かな声で言ってくるエイミーに感じるものがあつたのか、なのはが聞き返す。

「聞いて、今、次元戦艦ベルソーが軌道上でここを目指している」

「じゃあ、連絡を取って…」

「違う！助けにくるんじゃない！」

なのはの言葉を遮って、エイミーが声を荒げる。

母親の感情的な声にカレルとリエラがビクリと怯えたがエイミーはそんなことにも気がつかなかつたようだ。

「ベルソーはこの海鳴市にむけて、アルカンシエルを発射しようとしている」

「え？」

あまりのことになのははエイミーがいったいなにを言っているのか理解できなかつた。

「…いったい」

「それって…どういう」

動揺する護衛達の声でようやく言葉の意味を理解する。

アルカンシエルは、次元戦艦に装備される艦砲魔法の一種。

その威力は凄まじく、着弾地点を中心に百数十キロに空間歪曲と反応消滅で破壊をまき散らす、管理局最大クラスの無差別破壊魔法である。

当然、魔法技術を持たない世界の町など、跡形もなく消滅してしまう。

「エイミーさん！どういうことですか！」

「分からない！ただ、乗組員達の会話を盗聴したら、イデア・グレンヌが暴走して、そのままだと第97管理外世界そのものが危険だからだと言っててる！」

動揺し混乱するなのは達とは違い、エイブラハムはフード付き達が次元航行部隊などの正規部隊を抑える政治的な力を持っていること

は聞かされていた。ベルソーにどのレベルまで手が伸びているのかは分からなかったが、だからこそ、評議会調査室が出向いている。

が、さすがにこの事態は予想していなかった。

通常の管理外世界への巡回航海でアルカンシエルが装備されることなどあり得ない。ベルソーにも装備されていないと思いきんではない。

エイブラハムが相棒のパーシングと連絡を取る。

『聞こえているか』

『ああ、ハラオウン婦人の言っていることに間違いはない。ベルソーが接近してきている。ディストーション・シールドの出所もベルソーだ』

『ベルソーはなぜアルカンシエルを装備している？』

『ベルソーの任務が出港直前に、定期巡回からエクリプス・キャリアー（EC）因子保有者対処に変更になっている』

エイブラハムと同じ疑問を持ったのだろう、パーシングが次元戦艦の運航計画を検索しながら答えた。

『ああ、最近うちよろし始めたって言っているあれか…』

パーシングの答えにエイブラハムは心の中で舌打ちをした。

EC因子保有者とは、古代ベルカ時代に開発されたウイルス兵器の感染者の事だ。まれにこのウイルスに適合してしまった感染者が、強い破壊・殺人衝動を抱え、なおかつ一般的な攻撃に対してはほぼ不死身となる。という極めて厄介な症例が確認されている。一説によるがその不死性はアルカンシエルすら防ぐと言われている。

その感染者が昨今、組織だった行動を管理外世界でし始めたと言う噂はエイブラハムも聞いたことがあった。

アルカンシエルはこのEC対策という名目で、装備されたのだろう。

『ロストロギア対処の為…。法律上許されているから…。だとしても、アルカンシエルを地表に向かって打つとは…。管理局の連中にとって、管理外世界は単なる未開の地と言うわけだな』

エイブラハムが顔をしかめると、パーシングも同意する。

『管理局の対応も酷いが、フード付きどもは海を操って、自分の崇める救世主を証拠ごと消滅させる気にいるのか？こつちも、不信心にも程がある』

『連中に取りつては自分を全肯定してくれる存在が神で、それ以外が異端者なんだろ』

エイブラハムが鼻で笑いながら続ける。

『それに、操られているとは限らないぜ。ベルソアの所属は聖王騎士団系統の多い部隊だったな。黒幕は読めてきたが…』

『分かったところで、今はそれどころじゃねえ。俺まで地上に降りてきたのは失敗だったな。このままだと証拠ごと俺たちまで消されちまう』

うなり声のように言葉を絞り出したパーシングはこの世界に来た当初、通信衛星に紛れた小型次元船で地上を監視していたが、ベルソアのセンサー群が地球を覆域に納めて以来、船の機能を眠らせ地上に降りて来ていた。

次元船の転送機能を利用した迅速な撤退を捨て、次元船の隠ぺいを優先するための行為だったが、裏目に出ってしまった。

『仕方ない。お前はまだ撤退できるはずだ。転送ポートまでいそげ』

『お前は？』

『こちらからでは、一番近い転送ポートにも間に合いそうもない。別の方法を使う』

アルカンシエルと空間歪曲系の結界を併用している以上、相手は誰も逃がさないつもりだろう。

当たり前の方法を取っては逃げ切れない。

(十数年前の宿題か…)

73 機械の叛乱

「ここから一番近いポートは！」

「まずいぞ、よそよそによっている時間はない！」

「落ち着け、緊急マニュアルにしたがつて、民間人を優先だ」

「それだと、お前達が！」

「覚悟はできているわ…、急いで」

「時間がない、間に合うかどうか」

護衛達が焦燥を隠せない声で、言い合っている。

『エイミー！今からそっち行くよ！』

「だめ。すずかちゃんとアリサちゃんを連れて月村の家に向かって。もしかしたら間に合うかも！」

『何言ってるんだい！カレルとリエラにはまだお母さんが必要なんだよ！』

アリサ達の護衛のため病院に待機していたアルフが、状況を聞き付けエイミーを怒鳴りつけている。

(どうしよう…。どうしよう…。時間が足りない。間に合わない)

言葉が飛び交うが、状況を打破する意見は出てこないようだ。

空間ウィンドウの向こうではエイミーは盗聴だけでなく、ありとあらゆる方法で状況を把握してくれた。しかし、残念なことに、そのすべての情報が絶望的な状況であることを補強してしまっている。

転送が使えない以上、航空移動での避難になるが、人を抱えたまま飛ぶとなると、最も機動力のある空戦魔導師のなのでもかなり速度が落ちる。ベルソーが攻撃位置に着くまでに、転送ポートに移動、ポートの起動、転送を行えるか怪しい。

しかも転送は同時に2〜3人が限度だ。転送だけでも時間が掛かってしまう。せめて召喚魔導師がいれば複数同時転送で時間を短縮できるが、あいにく、護衛達にも召喚術が使えるものはいないようだ。(だめ、たとえアビー君とL3Sが協力してくれたとしても、今、ここにいる人の中から何人か置き去りにしても、間に合わない)

いくら考えても、魔法に出会ってから培ってきた経験がそう決断を

下す。

今すぐ、ヴィヴィオだけ助ける方法はないか。と、考えている自分を発見して。なのはは自分のエゴイズムにゾツとする。なんとか気持ちを押しとどめて、せめて数分だけでも攻撃を遅らせることが出来ないか。と、考え直す。

それが出来れば少なくとも数人は確実に助かる。

(数分遅らせる…、あ…)

それを思いついたときののはの鼓動が激しく打たれた。

(ある。一つだけ…、少なくとも数分攻撃を引き延ばせる…、でも…) それを実行したらもうみんなには会えない。それだけは確実にだった。

全身から冷たい汗が噴き出した。体がふるえだし歯の根があわな

い。今までたくさん思い出をくれた家族と友人、そして、これからたくさん思い出を作っていくと約束した娘を残していかなければならないと思うと、今にも足から力が抜けて座り込んでしまいそうだった。

「ママ、大丈夫？怪我が痛いのか？」

ハツとして振り返ると、ヴィヴィオが心配そうにこちらを見つめていた。

エイミイの報告から数十秒。それほど考え込んでいたわけではなかったが、どんどん悪くなって行くのはの顔色を心配したようだ。

そんな愛しい娘の前にかがみ込み、目線を合わせると、なのははヴィヴィオの顔を両手で包み込む。ヴィヴィオの子供らしい弾力のある頬の感触を両手に感じる。

しかし、頬に埃と煤を付けてしまった。戦っているうちに、いつの間にか手が汚れてしまっていたようだ。

ああ、最後なのに、こんな恰好で…。

「ヴィヴィオ、聞いて。ママは行かなきゃいけないところがあるの…」「お仕事？」

ヴィヴィオが不安そうにこちらを見返した。この表情は見覚えが

ある。JS事件の際、公開意見陳述会の警備のため、出発するなのは
をヴィヴィオが見送りに来た時の表情だ。ヴィヴィオが言葉に出来
ない漠然とした不安を抱えている。あの時の顔だ。

なのははヴィヴィオの不安を取り除こうと、努めて笑顔で答えるよ
うに苦勞しながら娘に答えた。

「うん、でも、すぐに帰ってくるから。キャバリエさん達とアリサちや
んのコテージに行つて」

「絶対？」

「絶対に、絶対」

笑顔で言つたつもりだったが、ヴィヴィオの表情の憂いは増してい
く。

最後に笑顔が見たかつた…。なのはママ。と呼んで、微笑んでほし
い。そう思つてしまった。

もう駄目だ。もう、作り笑いもできない。

なのははヴィヴィオから、逃げ出すように顔を背けエイブラハムを
見た。エイブラハムもなにかできないか、考えているように俯いてい
た。

『アビー君、お願い。わたしが数分作るから、L3Sで誰かをポートま
で運んであげて！』

念話でエイブラハムに語りかけると、エイブラハムがこちらを見
た。

返事を待たずに護衛達にも、美由紀達を連れて逃げるように指示を
出した。

最後にヴィヴィオに何か言おうとして止めた。きつとなにを言っ
ても言い足りない。結局、ヴィヴィオに背を向けたまま、くだらない
小言を口にする。

「ヴィヴィオ、フェイトママの言うことを聞いて、いい子にしなきゃダ
メだよ」

言つた直後に、最大上昇能力で空に上がる。

ヴィヴィオからの返事を聞くのが怖かつた。

データ通信以外の通信をすべてカット。ハラオウン家からのデー

夕通信からベルソーの予想射撃位置を割り出し、アルカンシエルの推定射線をロックオンする。

軌道を修正して、1分ほどで人工衛星の周回軌道に到達した。気温は氷点下以下、空気もほとんどない状況にフィールドの生命維持機能が最大稼働する。ここから更に上昇するには、大気中飛行用のプロگرامでは飛べない。宇宙航行用のプロگرامが必要になってくる。

姿勢を制御し、レイジングハートを構える。

「アルカンシエルは、着弾前に弾殻が破壊されると、通常の魔力爆発を起こし、消滅反応は起こらない」

教導隊の資料で読んだ記憶のある魔法論文の記述をあえて口にしてみる。

そう、なのははアルカンシエルを迎撃するつもりだった。

もちろんそれは銃で撃たれた弾丸を、同じ銃で撃ち落とすようなものだ。まして、相手が宇宙から撃ってくるなら、荒唐無稽な神話の話だった。が、不可能ではない。

圧倒的に有利な次元戦艦が、動かない地上に対して攻撃する為に回避行動を取りながら攻撃してくるとは思えない。最適な発射位置から攻撃してくると仮定するなら、アルカンシエルは今なのはのいる空間を通過して地表に降り注ぐ。ここで待ちかまえているならタイミング次第でアルカンシエルの弾頭を迎撃できる。

もつとも、暴発させるには魔力値にして500万以上の出力が必要になるため、なのはの高魔力をもってしても、かなりの至近距離で砲撃が必要になる。

つまり、成功したとしても大量の魔力を放出し無防備になったところで、艦砲クラスの魔力爆発に巻き込まれることになる。もちろん、その爆発には非殺傷の設定はない。

(きつと、一瞬で粉々にされて、痛いと思うこともないかな?)

なのははヴィヴィオ達と別れるのはあんなに恐ろしかったのに、自分の死には無頓着にそう考えている自分を奇妙に感じた。

ヴィヴィオ達の比重がそれほど大きくなっているのか?それとも自分の命は諦めてしまったのだろうか?それとも恐怖のあまり自分

はおかしくなってしまうているのだろうか？

それは分からなかった。

アルカンシエルの発射まで数分、自問して結論を出す時間はなさそうだ。

それよりも最後の時間で愛機に、いままでの感謝と、こんなことに付き合わせてしまった謝罪をしようと、空を見上げながら語りかけた。

「わたしはレイジンググハートに会えたおかげで、空を飛べた。レイジンググハートのおかげで『自分はこれがやりたい！』って思えることを見つげられた。…本当にうれしかったんだ。いままで、ありがとうレイジンググハート」

なのはの言葉にレイジンググハートは答えなかった。なにかを考えているようにチカチカと明滅している。

レイジンググハートも思うことがあるのだろうか。なのはは気にせず続けた。

「ごめんね。レイジンググハート。でも…」

なのはがレイジンググハートを構え、砲撃の姿勢に入る。

「これが最後の全力全開！」

使用魔法はなのはの持つ最大火力の収束砲撃スターライトブレイカー。残りの数分間をチャージに使えば、魔力値500万に到達できる。

レイジンググハートが答えた。

《いいえ、拒否します。マスター》

74 The Art of Intrusion

(ちっ、ディスプレイションシールドの影響で、月からと大気中の魔力の接触面で魔力分離反応が起っているな。分離層のせいで念話波が遮断されている。待機中の次元船まで信号が届いていない)

試験的に信号を打ったエイブラハムが、次元船からの返信がないことを確認すると、どうにか信号が届ける方法がないか考えた。次元船に信号が届けることができるなら、アルカンシエルを相手にしてもまだ打つ手がある。

L3Sの装備が情報戦仕様だったのなら、分離層で減衰しても次元船に信号が届くだけの出力で念話を打てたのだが。生憎、陸戦仕様と空戦仕様の装備をさせている。

こうなったら、無事な空戦仕様の1号機で可能な限り、次元船との距離を縮めるしかないだろう。

そう考えていると、黙り込んでいたなのはがヴィヴィオに話しかける声が聞こえてくる。

「ヴィヴィオ、聞いて。ママは行かないといけないところがあるの……」
エイブラハムが横目でチラリと見ると、なのははこの窮地には似つかわしくない妙に明るい表情をしている。

ヴィヴィオと目線を合わせるために、身をかがめていたなのはが立ち上がり、こちらは振り返って念話を使って言ってきた。

『アビー君、お願い。わたしが数分作るから、L3Sで誰かをポートまで運んであげて!』

なのはがエイブラハム達に背を向ける。

只ならぬ、気配を感じ取ったエイブラハムが呼びとめようとしたが、手を伸ばす間もなく、

「ヴィヴィオ、フェイトママの言うことを聞いて、いい子にしなきゃダメだよ」

それだけ言い残して、なのははあつと言う間に遙か彼方に上昇して行った。

「ちよっと、なのはーどっか行くの?」

驚いた美由紀が声を上げたが、なのはには届かなかった。代わりに
エイブラハムが思いついたことを口にする。

「AAAランク以上の砲撃なら、アルカンシエルを誘爆させることができる…」

エイブラハムの言葉に、護衛達が信じられないと驚きの声を上げる。が、魔法の知識のなさゆえに状況を把握できていない、美由希はいつもと変わらぬ調子で聞いてきた。

「ええっと、つまり、なのははなにをしようとしているのかな？」

「今、我々は宇宙からの攻撃にさらされていて、彼女はそれを阻止に向かっています」

美由紀はエイブラハムの答えをSF小説のようだと思ったが、自体の深刻さを理解するには十分だった。ニュースを見ているだけでも、宇宙から飛んでくる物体を撃ち落とすには相当な技術力が必要なことぐらいは分かる。

自然と両唇に力がかかり、心配で言葉が震える。

「それって、危ないことじゃないの？」

「危ないどころか、無謀です」

エイブラハムは言い切った。

確かに本来のなのはの実力なら、アルカンシエルを防ぐことは可能かもしれないが、防いだ後、彼女が生き残れる可能性は極めて低い。その上、なのははもともと不調に、戦闘でのダメージが残っている。そもそもAAAランクの出力を出せるような状態ではない。

「ママが…、どうしたの？」

エイブラハム達の会話に不穏な空気を感じ取ったヴィヴィオが、怯えた声を上げた。

「ええっと…」

美由紀はヴィヴィオの不安を和らげようとして、なにか誤魔化せる言葉はないかと考えたが、エイブラハムが割って入った。

「キミのママが一人で危ないことをしようとしている。ツテ、話さ」

エイブラハムに声を掛けられて、ヴィヴィオが気まずそうに目を伏せた。

「ちよ、ちよつと…」

「大丈夫だ」

止めようとする美由紀に構わず、エイブラハムは右手で顔を覆い、ヴィヴィオに変色した顔を見せないようにしながら続けた。

「まっっている。すぐにママに会わせてやる」

「…」

エイブラハムが言ったが、ヴィヴィオは不思議そうに首を捻り、なにも言わなかった。

(やはり、信用されないか…、オレの顔を見て逃げ出さないだけでも、肝が据わっている方だよな)

エイブラハムはそう思いながら、L3Sに掛けられたバインドの解除パスワードを解析。バインドを外すとL3Sの背中に跨る。

「アンタ達は予定通りの行動を取ってくれ！」

最後に護衛達にひとこと言って、なのはを追って飛び立つ。センシング技術を生かしてなのはを探すと、既に射撃ポイントに着いていることが分かる。

(さすがに早い。仕方がない。レイジングハート、高町1尉を死なせたくないのなら、力を貸せ)

《いいえ、拒否します。マスター》

「えっ！」

なのはのつぶらな瞳がひときわ大きく開かれ、手にしたレイジングハートを凝視した。

驚きのあまりレイジングハートがなにを言ったのか理解できない。

もしかして、拒否された？

しかし、戦術的に間違いがあつた時を除いて、レイジングハートがこちらの願いを聞き入れなかったことは、今まで全くなかった。

「どうして？レイジングハート！」

《AM-45 SN:04657からのプランを推奨します》

レイジングハートが突然、空間ウィンドウを開いて。外部から届け

られたプログラムの実行の許可を求めてきた。

いや、許可ではない、ウインドウの隅にカウンタが表示されている。反対しなければ、自動的にコマンドを実行すると言っている。

「ちよ、ちよと待つて、レイジングハート!!」

《待てません、マスター》

なのは止めようとしたが、レイジングハートは指示を受け取らずに、ウインドウに作業中の表示を出しただけ。ウインドウにはほかにもタスク・マネジメントが表示されており、演算装置、メモリ、ネットワークの使用状況が100%を示している。

「どうなっているの?」

わけが分からない。思わず周りを見渡し、答えてくれる人を探してしまつたが、衛星軌道上にはそんな人…。

いや、なのはの視界の隅にチカツと光が反射するのが見えた。ほぼ真下から何かが上昇してくる。

それは赤く燃える火の玉が上昇してくるように見えた。

だが、近づいてくるにつれて人を乗せたL3Sだと言うことが分かった。乗っている人間が強烈な熱を発しているのだ。

乗っている人はまるで宇宙飛行士が着ている宇宙服の様なバリアジャケットに身を包んでいた。遮光されたヘルメットのせいで顔が見えないがエイブラハムなのだろう。

船外作業服と違う点はヘルメットから三本のブレードアンテナが付きだしている事と、背中に有るはずの生命維持装置の換わりに翅の様な排熱板が幾つも突きだしていることだろう。

L3Sに仁王立ちしたエイブラハムが、なのはと同じ高度で停止した。

「アビーくん?」

なのはが声をかけたが、エイブラハムは反応すらししない。

《彼も作業中です》

「え、ええ、なんで、レイジングハートが答えるの?」

《現在、彼のシステム、AM-45と並列化中》

レイジングハートは独断でエイブラハムと手を組むことを選んだ

ようだ。

ある意味ではなのはを裏切ったことになるが、レイジングハートは自分の主を守るためには最良の選択だと判断していた。今、レイジングハートはほとんどの能力をエイブラハムのサポートに使っている。

エイブラハムの通信魔法を通して、レイジングハートはベルソーマインAIに触れた。

《ベルソーマインからのトレースを感知。ベルソーマイン、ブラックアイスを起動》

ブラックアイスとは、報復機能を搭載したコンピューター・ファイアーウォール機能の代名詞である。民間での使用は禁止されているが、モノによっては、逆探知した相手の電気系統や魔力炉を暴走させ、物理的に相手を攻撃することも可能な危険なプログラムだ。

レイジングハートがいつもの通り口頭で危険を警告したことで、なのはにも二人の狙いが分かった。

「まさか、アルカンシエルに侵入するつもりなの？」

《はい、作業状況を表示します》

なのはの言葉に反応して新たな空間ウィンドウが開き、アルカンシエルの発射までの残り時間、作業の進行状況が表示される。

恐らくエイブラハムとレイジングハートは、プログラムをクラッキングしてアルカンシエルを白壊させるつもりなのだろう。と、なのはは考えたが、あいにく、なのはは第5の戦場では門外漢だ。優勢なのか、劣勢なのか分からない。

間に合うのか？確かにエイブラハムの方法なら魔力爆発も起こらないかもしれないが、戦艦が扱うような巨大なプログラムにこの短時間で侵入できるものだろうか？

こうしている間にも頭上の遙か彼方では、次元戦艦が一瞬で都市を消滅させる事が出来るほどの魔力チャージを終えようとしている。

なのはが魔力光は見えないか。と、空を見上げた時。背後から突然、パンツ！と、渴いた破裂音。

「うああ、な、なに？」

ウィンドウに集中していたなのはの口から少々間の抜けた声が出

た。

エイブラハムの翅が1枚はじけた音だった。断面からは何かの液体が噴出してている。

「なにがあったの?」

《冷却モジュール2-11 (A3A2A011) fault 導力異常》

「あああ、もう!」

レイジングハートはエイブラハムと並列化しているため、エイブラハムの状態は自分のことのように把握していたし、エイブラハム個人をシステムの一部と捕らえていたため、新たに出力されたエラーを端的に報告した。

しかし、レイジングハートからの口頭での報告しか受けていないのはにはうまく伝わらなかった。

ストレスを感じながらもレイジングハートに指示を出した。

「アビーくんの状態を表示して!」

空間ウインドウにエイブラハムのシステム情報やバイタルが表示される。

『人造魔導システム最大運用中。魔力生成：MAX 魔力配分は演算を最優先。ネットワーク：オンライン』

なのはに答えて文字列が流れていく、その中には見過ごせない文字もある。

『冷却水流出中：BJ内温度異常上昇、通信モジュール：温度エラー、魔力漏出、生体パーツ：体温危険値を突破、なおも上昇中、心パルスに異常』

エイブラハムは体内のシステムの演算能力を最大限使って、眼には見えないが激しい戦闘をしているらしい。だがこのままだとアルカシエルをハッキングする前にエイブラハムの神経が焼き切れてしまいそうだ。

なのはは開きっぱなしの作業状況とエイブラハムの状態を見比べる。確実に悪くなっていく状態と減っていく残り時間に対して、作業進行状況は遅々として進んでいないように見える。

再び、破裂音がして翅が一枚弾け飛んだ。異常を出した通信モジュールと連結されているブレードアンテナで、漏出した魔力がスパークしてヘルメットにヒビが入った。

『液体呼吸ユニット・中破、魔力不足により自己修復不可能、生命維持に深刻な影響発生』

映し出されたウインドウに新しい障害が表示される。

ヘルメットのヒビから漏れ出した呼吸用溶液が、L3Sの装甲に落ちると、横滑りしながら蒸発していく。エイブラハムの排熱で装甲が加熱されているのだ。

これだけの排熱を必要とするなら、いったい体への負担はどれほどのものになるのだろうか。

「もお、いい。もお、いいよ。アビーくん!…あつっ!!」

エイブラハムの体に触れたなのはの指先に痛みが走る。なのはのフィールド越しにも熱が伝わってきた。

これではエイブラハムに声が届いていたとしても、聴いている余裕はなさそうだ。

なのはは訴える相手を変える。

「レイジングハート」

アルカンシエル発射まで、あと数十秒、今すぐ逃げだせばエイブラハムは魔力爆発から逃れることが出来るかも知れない。

「まだ間に合う。わたしに撃たせて!」

レイジングハートが答えた。

《拒否》

なのはが更に言いつのる。

「いい子だから、お願い!」

《いいえ、マスター必要ありません》

「え?」

《見てください》

言われて見上げると、明けの明星のような光が見えた。アルカンシエルのバレルが展開され、チャージされた魔力が放つ輝きが地上まで届いている。

《わたし達の勝ちです》

75 機械仕掛けの神は「星光、あれ」と…

《わたし達の勝ちです》

次の瞬間なのはは全身に圧力がかけられ、呼吸が困難になるほど息苦しさに襲われた。まるで水の中に飛び込んだかの様な感覚。

視界はオーロラか、万華鏡の中にいるかの様に千変万化する光に包まれている。だが、なのはのバリアジャケットは何の反応もしていないし、痛みもない。

(魔力流だ)

なのはは直感的に感じた。プログラムに制御されていない、意味を持たない魔力が宇宙から降り注いでいる。

全身に感じる圧力や息苦しさは、魔力濃度が急激に上昇したことに着いていけない体が、誤って脳に伝えている錯覚だ。

光の濁流は数秒間で拡散した。空を満たしていたオーロラが消え、高魔力濃度の息苦しきだけが残る。

「アルカンシエルは…」

アルカンシエルの光を探すが見あたらない。魔力濃度が通常の数倍になっている大気で見上げる空は、いつもよりも揺らめいているように感じた。しかし、さきほどの明光は見あたらない。

「すごい、本当に防いじやった…。発射までのわずかな時間で」

素直な気持ちだが、口に乗った。

振り向くと、エイブラハムは未だに宇宙服を纏ったままだ。先ほどより幾分弱くなっているが、放熱も続いている。

「アビーくん…?」

アルカンシエルの第一撃は防ぐことが出来た。幾ら次元艦とはいえ再チャージには十数分以上掛かるはずだ。エイブラハムの立場ではすぐさま撤収してしまえば十分に逃げられるはずだ。疑問に思っただけなのが声をかけた。

エイブラハムは答えない。代わりにレイジングハートが答える。

《現在、全演算能力を使用し、作業中につき回答は不可能と思われるます》

「作業中？だってアルカンシエルはもう…」

なのは今一度アルカンシエルの魔力光があつた辺りを見たが、魔力光は見あたらぬ。代わりに周囲に飛び散つた魔力の残滓が小さな光の粒となつて現れていた。

その粒達がゆつくりと漂い、引き寄せられるようにこちらに寄つてくる。

「自壊したアルカンシエルの魔力が集まつていく…」

輝きと数を増やし、それらはエイブラハムの目の前で小さな塊になつていた。集まりつつある残滓を見ながら、なのはは信じられない思いで言った。

通常一度でも使用を終えて空中にバラ撒かれた魔力を再度実用レベルまで集めるのは、それだけでSランクを超える高等技術だ。それもその魔力のほぼ全てがほかの術者や機械のものとなれば、集めることなどほとんど不可能のはず…。

そう思っているうちに、まるで流星群のように、集い、輝きを増していく魔力は、なのはの知っている大きさを越えてなお、貪欲に周囲の星屑達を集め続ける。

《プログラム書き換え作業終了》

レイジングハートの声で、なのははエイブラハム達の狙いに気が付いた。彼とレイジングハートはアルカンシエルの自壊を狙つていたのではない。実行中のアルカンシエルの魔導プログラムを書き換える事が目的だったようだ。

自壊し意味を失つた魔力達に細工を加え再利用するために…。

《プログラム実行。実行ファイル名…》

なのはの思考に答えるようにレイジングハートが言う。

光球を囲うように新しい環状魔法陣がセットされた。

もう間違いようがない。この魔法はなのはが魔法に出会う切掛けとなつた事件の際に、レイジングハートと共に考え、知恵と勇氣、戦術の全てを使って作り上げた最後の切り札。

レイジングハートが勝利宣言の様にその名前を歌い上げた。

《スターライトブレイカー》

エイブラハムの前に集いつつあるそれは、星空から流星が落ちるように、集い輝きを増していく。それも複数……。

「わ、わ、大きい、大きい！」

従来の大きさを遙かに越え直径10m以上に膨れ上がった巨大な光球は、心臓が脈打つように鼓動しながら輝きを強めていく。

なのははぞつとした。スターライトブレイカーは自己の限界を超えた砲撃を可能にするプログラムとはいえ、それでも制御に失敗したら暴発させてしまうことがある。なのはも過去に失敗して酷い目を見たことがある。魔導師単独で戦艦主砲の魔力を使うなんて、幾ら何でもやりすぎだ。

自分がこれを撃つ時、周りの人達はこんな気分になっていたのかと、今までの自分の所業を棚に上げてなのはが尻込みをしていると、レイジングハートがターゲットに狙いを定める。

《モード：マルチレイド》

レイジングハートがエイブラハムのセンサー越しに捕らえたセンサー画像を表示した。

狙いは遙か上空のベルソーをしっかりと捉えている。ベルソーの方はまさかアルカンシエルが防がれると思ってもいなかったのであろう、アルカンシエル発射による出力の低下も相俟って無防備だった。

《シユート》

天が割れるような閃光と轟音をたて、星屑の塔が空にそびえ立った。

何とかフィールドの光学防御を調整して、センサー画面を見るがその映像が一瞬ホワイトアウトする。

白く塗り潰された画面が復旧した後には、複数の個所から火を噴くベルソー。

エイブラハム達の放ったスターライトブレイカーは、貫通力にその力を集中させて撃たれたモノのようだ。狙いも動力炉を狙わず艦橋からのコントロール、戦闘能力を奪うように狙われていた。

もう、アルカンシエルが発射されることもなければ、戦艦が地球の

重力との拮抗を失って墜落して行くことはなさそうだ。

《冷却ジャケット、パージ》

レイジングハートの声と共に、炭酸飲料のふたを開けたような弾ける音がいくつも聞こえた。

エイブラハムを包んでいた宇宙服から、翅が抜け落ち、体を守るための溶液が勢いよく排出されると、魔力の残滓になって消えてゆく。宇宙服本体も解れて消えつつあったが、エイブラハムはそれを待たずにガチャガチャとヘルメットを脱ぎ捨てた。

そのままL3Sの背に手を突いて、咳込み始めた。咳とともに口から水より粘性のありそうな液体を吐き出す。

「アビーくん！」

喘ぐエイブラハムの背中をさすると、それだけで宇宙服が解れて消え、その下から破損したままのバリアジャケットが出てきた。

エイブラハムはさらに数度せき込んだ後口元抑える。指の間からポタポタと落ちる赤い滴に、なのはが慌てる。

「血が、大丈夫!?!」

「毛細血管が切れただけ、単なる鼻血だ」

顔色を確かめようとなのはが顔をのぞき込むと、エイブラハムはこもった声を出した。気恥ずかしそうな目は、真っ赤に充血している。

「ああ、シマらないな。くそ」

不満げなエイブラハムを見て、なのははあっけに取られてしまった。

レイジングハートのサポートがあっただけとはいえ、魔導師単独で次元世界最高クラスの艦砲を退ける快拳よりも、その負荷で毛細血管が切れたことの方が気になるらしい。

目が合うとそっぽを向くエイブラハムと、彼の行った快拳にギャツプがありすぎて、自然と笑みがこぼれた。

そこに通信が入る。

『なのはちゃん聞こえる?』

「エイミーさん！」

『シールドが消えて、次元航行部隊への通報が出来た。すぐに援軍を

送ってくれるって!』

「じゃあ」

『もう大丈夫だよ。アルカンシエルもあの状態じゃもう撃てない』

「うん!うん!」

エイミイはディストーションシールドによる通信障害が消えた隙を見逃さず、すばやく本局の信用できる部隊に連絡を入れたらしい。これでもうベルソーを操っている犯人も、うかつなことは出来ないはずだ。

『それにしてもさすがだね、なのはちゃん。まさかブレイカーで、戦艦を大破させちゃうなんて』

「あ、それはわたしじゃなくて…」

なのはには安堵して、雑談する余裕ができた。

ベルソーを大破させた、経緯を説明しようとエイブラハムに振り向く。血を止めたエイブラハムが空を睨みつけていた。

「アビーくん?エイミイさんが通報してくれたから、もう…」

「マダだ…、ベルソーは換えの利く単なる駒だ。コマを指している黒幕を捕まえないと意味がない」

「だから、今次元航行部隊が…」

「ブタイが着くまでどのくらいかかる?ベルソーの艦内に黒幕の手先がいるなら、証拠になるデータは全て消される。ソレでは黒幕には届かない。黒幕を捕まえないと似たような事がまた起こる」

「そんな…ッ!」

ここまで言われれば、なのはにもエイブラハムの言いたいことが分かった。

一艦長の権限ではさすがにここまでの規模の騒ぎを起こす事は出来ない。ベルソーの背後にはかなりの大物が控えている。少なくともエイブラハムはそう考えているようだ。

黒幕の目的は聖王の血を引く、ヴィヴィオを手に入れるか、それがかなわないなら消してしまうことだ。

それならば黒幕を捕まえない限り手を変え、再びヴィヴィオを狙ってくるかもしれない。実行部隊でしかないベルソーを無力化するだ

けでは足りないのだ。

根本的な解決をするには、黒幕を捕まえるか、ヴィヴィオの引いている血に意味がなくならなければならぬ。後者は無理だ。なら、黒幕を捕まえて似たようなことを企む者が出来ないことを祈るしかない。

エイブラハムは銃型のデバイスの弾倉を外し、スライドを引いて装填されているか確かめると、L3Sの武器ボックスを開けて中身を確認し始めた。

「なにをする気なの？」

「ベルソーに突入して、演算室を抑える」

「なら、わたしも…」

「ダメだ。アンタはこの出身者で、ヴィヴィオの母親だ。近しいものが証拠を抑えても証拠として使えない場合がある」

なのはが聞くとそう言いながらエイブラハムはデバイスに弾倉を戻した。そのデバイスにばたばたと血が落ちる。また、鼻から血がこぼれてきている。

「くそ…」

エイブラハムが毒づき手の甲で顔の鼻血を拭うが、すぐに新しい血が垂れてくる。すずかの話によれば、エイブラハムは治癒の魔法も使えた筈なのに傷が治っていない。呼吸も荒いし様子が変だ。

「アビーくん、顔色悪いよ」

「ヤメロ、必要ない！」

手を伸ばし覆面の裂け目から額を触ると、エイブラハムに鬱陶しそうに払われた。だが、その僅かな時間でも分かるほど、エイブラハムの体温は高かった。

「アビーくん！熱いよ、熱が！」

「大丈夫だ、まだ戦える」

なのはは言い募ったがエイブラハムはそう言つて、カードを一枚フォルダから抜いた。

「オレのことより、早く戻ってヴィヴィオを安心させてやれ」

言うが早いのか、エイブラハムはカードをこちらに放り投げた。

思わず受け取ると、中に封じ込められていた強制転送の魔法が発

動。
なのはの視界はブラックアウトした。

76 儀礼艦ベルソー

カードに封じ込まれていた魔法でなのは姿が消え、ヴィヴィオの現在地のすぐそばに転送されたのを確認する。転送誤差なし。

(ヴィヴィオに言ったことは守れたな…)

スターライトブレイカーのダメージで、ディストーションシールドを含めたベルソーの防御機能の幾つかは消えている。

エイブラハム達の放ったスターライトブレイカーが、ベルソーの決定権を持っている艦長クラスが詰めている艦橋と、演算室を繋ぐ回線網を巧みに打ち抜いたため。メインAIは艦長達が死亡したと判断。人命を最優先した自閉モードに入り、ダメージコントロール以外の船員達に退艦準備を奨めているが、ダメージが復旧可能だと判断したならば、方針を変えるかもしれない。

それまでにAIの演算室を抑えることが出来たなら、そこにはベルソーに対して命令をしていた黒幕を特定する証拠が残っている可能性が高い。

(これを抑えることができたなら、高町1尉達は普通の母子にしてやれるな…)

手元にあるベルソーの情報を確認する。と、割り込むように通信が入ってきた。

『よお、うまくいったみたいだな』

『パーシングか？ 脱出しろと言った』

『この年で走るには脱出用ポートは遠すぎてね。それに言っただろ、俺は今起こっている歴史が好きなのさ。残ったお陰で単独の魔導師によるアルカンシエルの阻止を捧めた。これは少なくとも兵器史に残る出来事だ』

『都市伝説の類になるのがオチだ。誰も信じない』

無駄口を叩きながらも、こちらの意図を汲んだパーシングが情報を送信してくる。管理局で登録している情報では詰めている武装隊員は3個分隊程度、他に高ランクの魔導師は詰めていない。巡回任務の次元戦艦としては平均的な数といえる。

『お前の魔力は底を突きかけている。制圧は無理だ』

『ここで終わっては意味がない。予備の装備もある。やりようはある』

『ポートを開いてくれ』

『分かった…』

パーシングが返事をする、エイブラハムの周りを転送用の魔法陣が取り囲む。本来なら次元船のポータは、船のオペレータ達が許可を下ろさなければ開かない。

しかし、現在、ベルソーはAIの制御下にあり、パーシングはエイブラハムのADの所属の欄をシルバー（防災部）に偽造し、救援活動のためと偽って乗艦許可をAIに出させた。

『突入する。視覚野の映像を送る』

『了解。録画を開始』

エイブラハムが転送魔法の光に包まれた。

ベルソーの転送ポータに、L3Sとエイブラハムが現れると艦内警備用のオートスフィアが一斉にシュートバレットを撃ち込んできた。

L3Sを盾にして反撃したが、空戦装備の1号機はそれほど強力な防御力は持つておらず、オートスフィアを全て戦闘不能にするころには、1号機の機動力も奪われてしまった。

エイブラハムはオートスフィアの残骸に、マニピュレータを侵入させ無事なメモリーから、ベルソーの警備システムの情報をダウンロードする。

それと同時に、エイブラハムはL3Sの武器ボックスからヴァンデイン・コーポレーションの刻印が刻まれたカービン銃を取り出し、戦闘準備を整える。

ベルソーの航海計画によれば、この船には1小隊の騎士団が編成されていたが、あからさまな侵入があったというのに姿を見せていない。ダウンロードした情報でも、騎士たちに警報を出したログもない。おそらく、騎士たちはフード付きとして、地球に降りてきた者た

ちだったのだろう。

しかし、どこにも警報を出さなかったわけではないことも判明した。この船には強力な傀儡兵が配備されているらしい。

(対物戦闘になるか…)

対物戦闘になると、エイブラハムの格闘能力はほとんど役に立たない。いくらフィールドの隙を突けるとしても、膂力だけでは装甲を持った機械を破壊することは難しいからだ。

(この怪しげなカービンが頼りか…)

苦々しく思いながらカービンを眺める。

SAP-76。小型魔力炉と新機能「ケースレスカートリッジシステム」を搭載し、魔導師でなくても強力なシュートバレットを発射することができる最新鋭カービン。地球の基準でいうなら50口径アサルトライフルといったところで、軽装甲車のエンジンでも数発でオシヤカにする高い破壊力を持つ。

最新鋭と言われれば聞こえはいいが、現場の人間から言わせれば実績がなく、どんな瑕疵があるか分からない生まれだてのシステムである。

正直、単独では使いたくなかったが、エイブラハム本人には高出力の魔力がない上に、その魔力も底をつきかけ、カード型デバイスや魔力を付与したナイフも、心もとない数になっている。

もし、傀儡兵が通信インフラやプログラムを使用しない兵器システム、例えば火薬式の大砲や機関銃を装備し、物理装甲に覆われたタイプであるならば、エイブラハムでは火力不足だ。

不安ではあるがこのカービン以外他に補う手段もない。覚悟を決めて予備弾倉をタクティカルベルトにつられたポーチにねじ込み、聖王との戦闘で折れた銃剣の予備もベルトに吊り下げる。

「後で改修してやるから、大人しくしている」

足を破壊された1号機に言ってみると、L3SのAIが武器管制システムを閉じた。

『エイブラハム、いくつかの艦内センサーを掌握した。参考に使ってくれ』

武器のチェックをしている間に、パーシングも手を打ってくれたようだ。1号機からマニピュレータが延び破れた内壁の中に潜り込んでいる。何かの配線に接続してハッキングしたのだろう。

時には儀礼鑑としての用途もあるため、このベルソーは次元戦艦としても巨大だ。一部だけでも様子が分かるのはありがたい。

『助かる、ドアを開けてくれ』

返事をするとも1号機を通じて格納庫の開放信号が送られ、重い隔壁扉が開いていく。

その先に見えたのは斧を手にした3mを超す大きな鎧。

傀儡兵だ。早速出くわしてしまった。

「ッー」

咄嗟に引き金を絞って、カービンを発砲すると魔力弾は吸い込まれるように胸部装甲を貫いた。

傀儡兵はビクリと体を振るわせたが、震えるような動きでこちらに振り向こうとする。続けて発砲。装甲の穴が2つ増えたところで、傀儡兵は金色の魔力を噴き出し完全に動きを止めた。初めて見る傀儡兵だったが運良く動力部を捉えたようだ。

崩れ落ちる傀儡兵。それを見ながら舌打ちをする。

(倒すまで数秒掛かったのにも関わらず、通信らしき信号を出さなかった…、完全自律の兵器だと？なにを考えているんだ)

通信を行わないということは、各機体の情報の共有もなければ、指揮所からの指揮や統制も受けていない可能性がある。

人間が制御しない無人機は元々倫理的な問題が指摘されているし、JS事件でも大量の無人機が使用されたこともあって、現在、法律的にも境界線上の存在だ。

エイブラハム自身も「制御のきかない兵器など、フランケンシュタインの怪物と変わらない」と思っている。それに通信を解析してAIを乗っ取るという手も使えない。

「くそつたれ!!」

毒づきながらAIまでの最短ルートを走る。途中、非武装の船員と出くわし、混乱した相手に投げつけられた空き缶を潜り抜ける。

1号機を経由して送られてくる監視カメラの映像に2体の傀儡兵を捉えた。

プレートに配線室と書かれた近くの扉を開くと、50cm四方の小さな空間に大小沢山のケーブルがむき出しになっていた。その内の一本にマニピュレータを繋ぐ。小部屋からカービンだけ通路に突きだして待ち構える。

映像の傀儡兵が死角に入った。聴覚に集中してタイミングを計って、先頭の一体を撃つ!!

装甲を貫いた鈍い音は聞こえなかった、それよりも高い音を立てて魔力弾は弾かれた。偶然だが手にしていた斧にあたってしまったようだ。

「ッ」

舌打ちする間もなく連射するが、単純な反応なら機械の方が早かった。瞬時にバリアが張られて全弾反らされる。傀儡兵はAランク魔導師相当の出力を持っている。そのバリアを貫くことは、いくら50口径ライフルとはいえ難しい。

傀儡兵達はこちらを火力不足とみて、2体目がシールドを展開。距離を詰めてきた。一拍遅れて1体目もバリアを張ったまま続く。

シールドを無力化するウイルスを送信しながら引き金を引き続ける。斧の間合いに入る前に、シールドを展開した傀儡兵は倒せたが、もう一体のバリアを解除する暇はない。

(間に合えー)

マニピュレータを通して隔壁を強制封鎖。通常、乗組員の安全を配慮してゆつくりとしか動かない開閉機に過剰な電圧が印加され、傀儡兵にギロチンのように襲いかかった。

バリアごと隔壁に挟まれた傀儡兵は動きを止めたが、バリアに守られ破壊される事はなかった。隔壁を押し戻そうとバリアの出力が徐々に上がる。

エイブラハムにはそれを黙って見てやる義理はなかった。バリア弱体化ウイルスを流し込んでやる。僅かなタイムラグの後、バリア出力がみるみる減衰していく。

すかさずカービンを叩きこむと、魔力弾はバリアと装甲を貫き、傀儡兵は胸に大穴をあけて沈黙した。

エイブラハムは傀儡兵の挟まった隔壁をくぐり抜け、再び走る。(たった2体相手に手こずり過ぎた。演算能力が低くなっている)

走りながら体内のシステムをチェックする。システムの自己判断はまだ戦闘可能レベルを指していたが、とても当てにならない。

先ほどから各通信の帯域幅が狭くなり、送信できる情報量が減っている。正常なら妨害ウイルスは戦闘中でも複数同時運用可能なのだが、今はとても無理だ。

聖王との戦闘、アルカンシエルへのハッキング、と、連戦によって、システムに負荷がかかり過ぎたのかもしれない。

魔力も体力も底を突きかけ、頼みのウイルスも効果が減っている。長引けばどんどん不利になる。

(この状況で傀儡兵を突破するのはむりか?)

弱気な考えを振り払い、突破するしかないのだと自分に言い聞かせる。一つの部屋そのものが昇降機になっているエリアの壁に背にあるワイヤーを打ち込んで、通常の建物の数階分を駆け上がる。

頭上から2機の傀儡兵、空が飛べる飛行型。ウイルスでバリアを減衰させながら手前の1機に射撃する。ワイヤーで吊られた不自然な姿勢で撃つたため、動力のある胸部に当たらず下腹に当たる。傀儡兵はそれだけでまさに糸が切れた操り人形のように落ちていく。

残った1機がスピアのようにとがった腕を突き出し突進してきたのは、通路に転がり込んで躲す。

振り返ると傀儡兵が追ってくるのが見える。射撃するが傀儡兵の防御手段が変わっていた。魔法弾がシールドに堅くはじき返されるが、牽制のために撃ち続ける。

腰のマニピュレータでカードを引き抜き、傀儡兵のシールドをすり抜けるように床を滑らせると、カードの術式は傀儡兵の真下で炸裂した。

傀儡兵の足がひしゃげ、崩れ落ちる。

(よー)

カービンの弾倉を手早く交換しながら、踵を返そうとした足にズキリと痛みが走り、脈打つように痛みが広がっていく。

見ると傀儡兵の破片が腿に刺さっていた。

（抜けば出血が酷くなるだけだな）

手当はバリアジャケットの機能で血管を締め上げるだけに留め、痛みをこらえて走る。

なるべく足を意識しないように、見回せば通路の意匠が凝ったものに変わっていることに気がついた。

「儀礼艦だったな…」

聖王教会式の派手さはないが、人を圧倒する内装に思わずつぶやく。

エイブラハムは信心深い方ではないが、こんな場面でなければ厳かな気分になれたかもしれない。いや、信者に清貧を説く割には金が掛かっているじゃないか。と、皮肉を言ったに決まっている。

『ああ、その通路を抜けた先には1000人が入れるホールまでであるぞ。その舞台裏のエレベーターが、AIのある中央ブロックに通じている』

『了解』

モニターしていたパーシングが、こちらのつぶやきに答える。エイブラハムが通信で返事をする、さらに警告してきた。

『おっと、前方十字路。正面から2機、右から2機、正面とは5秒後に接触するぞ』

警告と同時に送られてきたデータを参照すると、確かに4機の傀儡兵が近寄ってきているが、互いに通信をしていないため、連携が取れていない。2組との接触にはタイムラグがありそうだ。

エイブラハムは十字路まで素早く移動し、右通路側に見えたいくつかの火災報知器の周囲に数発発砲した。着弾した魔力弾が報知器の間近に穴をあけ、余ったエネルギーが熱を生む。報知器はその熱を火災と判断したようだ。けたたましいベルがなり、隔壁が降りてくる。これで右から来る傀儡兵に対してはかなり時間が稼げる。

通路正面方向から射撃魔法。T字状になった通路の壁に隠れて射

撃をやり過ぎ、やむと同時にウイルスを送信しながら応射する。ウイルスは有効に働いたが、今度の敵は両腕の代わりに巨大な物理装甲を持つ防御型と、銃身になっていて射撃型の2体編成だった。防御型がカービン弾をはじき返し、射撃型が牽制射撃をしながら悠々と距離を詰めてくる。

(通信で連携をしていないなら、目潰しも利くだろ)

隠れたままマニピュレーターでカードを放り投げる。炸裂する閃光術式にあわせて、飛び出し投擲ナイフを2本投げつける。魔力を封じ込められたナイフは狙いどおりに機能し、防御型の両方の装甲を吹き飛ばした。

腕代わりの装甲を吹き飛ばされた防御型がバランスを崩して、射撃型により掛ったすきに、スライディングで股下を潜りながら、腰だめに構えたカービンで傀儡兵達の下腹を撃つ。

腹に穴を開けた傀儡兵達は突然制御を失って動きを止める。

先ほどの飛行型の時に気が付いたが、どうやらこの傀儡兵の脳は腹に配置されているらしい。

爆発のような衝突音が聞こえて振り返ると、閉鎖していた隔壁がボコリと突出していた。さらにもう一度、衝突音がすると隔壁の一部が外れ、隙間から防御型のアイカメラが覗く。

慌ててカービンを構えると、ストックに押しつけた頬に激痛が走った。顔を離して確認すると、頬の皮膚がストックに張り付き、イヤな臭いを立てていた。

SAP-76の小型魔力炉の熱が、いつの間にかストックまで伝わってきていた。冷却システムに欠陥があったようだ。

「欠陥品め!!」

カービンを捨て、拳銃型デバイスで覗いているアイカメラに射撃。破壊する。しかし、衝突音は止まない。隔壁に体当たりをしている防御型の背後には無傷の射撃型もいる。

出力が下がっている今では拳銃型デバイスの射撃では火力不足。そう判断したエイブラハムは倒した射撃型の腹部の穴にマニピュレーターを滑り込ませた。まだ生きている神経達に繋げる。

射撃型の動力を再起動したところで、隔壁が破られた。隔壁を突き破った防御型が勢い余って倒れ込む。その背後から射撃型が姿を現した。

射撃型はこちらに銃口を向けたが、その脇腹を魔法弾が貫く。先に倒した射撃型の掌握が間に合った。そのまま、アイカメラを失い立ち上がれずにいる防御型を破壊する。

「なかなかの威力だ」

腕から射撃後の魔力残渣を排出する射撃型を起きあがらせる。

脳がなくなっているので自主的な行動は取ってくれないが、そのぶん道具としての使い勝手はいい。

L3Sの代わりに背中に乗る。いや、取り付くと言った方がいいか、

「乗りやすさは、1号機の方が上だな」

傀儡兵の背中で揺られながら言っている間に、彫刻されたオークの木を表面に貼り合わせて装飾した扉にたどり着いた。

パーシングが1号機を経由して信号を送ると、重い扉が左右にスライドしていく。

ホールの内装は神殿や教会をイメージさせた。正面に5m以上ある武装した女性の像が設置され。その像の正面にイスがズラリと並んでいる。さらにそのイスを囲むように、傀儡兵と同じサイズの鎧姿の像が並んでいる。何代か前の聖王とその守護騎士たちを模しているようだ。

エイブラハムはホールの雰囲気違和感を覚えた。聖王教徒ではない自分が、教会のようなどころにいることで、落ち着けずにいるのだろうか？

「よお、聖王さん、教徒じゃないんで、祈ったりはしないぜ」

像に向かって軽口を叩き、気を紛らわしてみるのが、違和感は消えない。

仕方なく小さく深呼吸をすると、焚かれた香の臭いに混じり機械油の臭いがする。

(スクライアを主人公にした冒険小説だと、ああいった像は大抵…、い

や、やめておこう…)

危険な思考をあわてて追い払ったとき、低い音を立て、守護騎士達が小さく震えだした。

「やっぱり動くのか!」

射撃型を操り守護騎士達に魔法弾をバラ撒く、エイブラハム自身も銃を抜きバイナリーボムを利用した砲撃呪文を用意する。

「バイナリーバスター」

起動途中の像が砕かれていくが、全てを破壊するには至らなかつた。背後にランサー系統のスフィアの出現を感じたエイブラハムは、遮蔽物を利用し自分の操る傀儡兵を回避させた。数秒前までエイブラハム達のいた空間に鋭いランサーが通り過ぎていく。エイブラハム自身も背後を取られないように傀儡兵を壁際によせながら応射。ランサーを放ってきた像を破壊した。

続けてその隣の像に向かって、射撃するがバリアが展開、はじめられる。残った像が戦闘の構えを取った。もう、無抵抗にはやられてくれないようだ。

エイブラハムは使える全センサーを利用して、像達をスキャンする。個々の見た目はずいぶん異なっているが、像は基本的に傀儡兵と同じ構造、同じ動力で動いているようだ。いわば傀儡兵のカスタム機。

うち1体が円盤のような子機を4機操り、周囲に旋回させ始めた。子機達からよく知る術式を感知したエイブラハムは、素早くマニピュレーターでカードを引き抜き中に放り投げ、カードとは反対方向に傀儡兵を射撃させながら突進させた。途端、投げ放たれたカードと射撃を塗りつぶすように子機が現れた。子機の2機がこちらの攻撃を体内に取り込んでしまい内部から破壊される。

エイブラハムは子機の使う術式がショートジャンプに使われるものだと見ると、転送ポイントを予想し、転送された瞬間、攻撃が当たるように行動していた。エイブラハムにとって、ショートジャンプは攻撃の絶好の機会にしかない。

左右に残った2機の円盤が現れ糸状のバインドを放出してエイブ

ラハムを捕らえようとしたが、効果範囲は狭く、突進する傀儡兵はすでに効果範囲から脱出した後だった。

複数の敵に囲まれている状態で足を止めるのはまずい。エイブラハムは射撃を継続させ、傀儡兵を一体の像に突進させた。

射撃が像に当たるかに見えた瞬間、その像はその巨体に似合わぬ俊敏さでヒラリと跳躍し、四肢を使って着地した。頭部からは鬣が延び、まるでライオンのような姿に変わっている。しなやかな動きで飛びかかってくる鋼鉄の猛獣にマニピュレータでカードを投げバインドする。同時にカートリッジを激発。バリアを展開する。

1体の像が進路を塞ぐ形で回り込んできていた。その両手には炎が揺らめいている。

鞭のように伸びた炎がバリアを叩く。受けきれなかった熱が露出した肌から水分を奪う。

エイブラハムは炎の間隙を縫って応射したが、それは他の一体の巨腕に跳ね返された。シオマネキのように片腕だけを強化された1体は見ただけでもわかるパワータイプ。装甲も厚い。

接近されると不利と考えたエイブラハムは、傀儡兵を後退させた。が、傀儡兵の脚部が突然破壊され、マニピュレータで繋がれたエイブラハムごと転倒する。

なんとか傀儡兵の下敷きになる危機から逃れたエイブラハムには、うつすらと輪郭だけの像が見えたような気がした。オペティックハイドで姿を消せる機体もいるらしい。

最後の一体が手にした剣を傀儡兵の胸に突き立てると、マニピュレータを通じてエイブラハムにも攻撃的な魔力が流れ込んできた。あわてて、マニピュレータを切り離すが、間に合わずシステムにダメージを受ける。しかもエイブラハムの命綱、ウイルスを送信する送受信系にも被害が広がった。

(しまった！非接触でのウイルス送信が出来ない！)

体内にわずかに残った像の魔力が、エイブラハムの魔力連結をジワジワ解除していく。あの剣には毒のような魔法が付与されているらしい。

巨腕の像がドストドスと接近してくる。毒剣の像も剣を引き抜き追撃の構えを取った。

立ち上がるいとまも惜しく、エイブラハムは背のワイヤーを使って後退。残ったマニピュレーターでカードを引き抜きつつ牽制射撃。

像達はアイカメラを守るために足を止めたが、巨腕の像だけは違った。エイブラハムの銃撃などともせず、巨腕を盾にして突っ込んでくる。

(銃は弾切れだが、バイナリーバスターで対応できる)

カードの魔法陣を展開させながら、弾倉を交換しようとしたが、弾倉を握った左手はいうことを聞いてはくれなかった。動かない小指の隙間から弾倉を取り落とす。

意味をなさない魔法陣が虚しく宙に浮いている。巨腕の像はもう目の前だ。

像がその巨腕を振り上げた瞬間、エイブラハムは背中に粟立つような圧倒的なプレッシャーを感じた。母親に怒鳴りつけられた子供のように、本能に任せて頭を抱えてその場に伏せた。

次の瞬間、エイブラハムの視界を桜色の閃光が埋め尽くした。

77 Don't be long!

転送魔法に包まれ、一瞬のブラックアウトの後、なのはが見たものは驚きに唾然とした姉と娘の顔だった。

「うあ、なのは…!!」

「…ママ」

魔法を見慣れていない美由希が驚きの声をあげたが、ヴィヴィオは町角から知り合いが出てきた程度の反応だった。

対照的な二人の様子に、思わず笑みが浮かんだ。左右を見渡すとハラウン家の子供たち。子供たちのそばには空間モニターが開いており、エイミイの姿が見える。もちろん護衛の魔導師達も一緒だった。皆、少し弛緩した表情を浮かべていたが、護衛の魔導師達はなのはの姿を認めると姿勢を正した。

「お見事です！高町1尉！おかげで命拾いしました！」

「護衛対象に何度も命を救われる…、警護課としては情けない限りですが…」

アルカンシエルが撃たれていた場合、退避を諦めていたマークとコメットが言った。二人とも殉職を覚悟していただけに、それを救ってくれたと思っっているのはを見る目に激賛を浮かべている。二人の同僚も同様に惜しみない称賛を送ってきた。

「ママ…」

もう一度、ヴィヴィオに呼ばれて振り向く。

「ママ、一人で危ないことをしようとしたの？」

「えっ…」

ヴィヴィオは少し不機嫌そうだ。

「エイブラハムさんが、言ってた…」

「あ、うん」

予想していなかった娘の言葉に思わずうなずいてしまっただけから、「しまった」と、思ったが。遅かった。

ヴィヴィオの不機嫌が増した。

「じゃあ、すぐ帰ってくるって、嘘だったの？」

「いや、嘘じゃ…」

嘘だった。アルカンシエルの迎撃に向かう前、ヴィヴィオに言ったときはもう戻れないと思っていた。ヴィヴィオを、いや、娘だけじゃない自分自身が怯えないようにするための嘘だった。

「やつぱり、嘘だ。ママが嘘ついた！」

目を潤ませたヴィヴィオが叫んだ。ヴィヴィオは聡い子だ。なのはが気休めについた嘘などばれていた。

親が何かを隠そうと嘘をついてくる。子供が不安がるのに、これ以上の理由は要らないだろう。

「いつも、嘘ついちゃいけないって、言っているのに…」

体に乗っ取られかけた恐怖、アルカンシエルで混乱する大人達を見た動揺、最大の上るべのママが嘘について居なくなった不安が、ヴィヴィオの両目から噴き出した。

「ご、ごめん。ごめんね。ヴィヴィオ…」

すぐに娘を抱きしめる。興奮したヴィヴィオは抱きしめられたまま、なのはの体を叩いてきたが、すぐに縋りついてきた。

抱きしめた娘の柔らかさ、温もり、子供特有のにおいが、なのはに伝わる。それらは全てもう感じることでできない。と、諦めたもので…。

なのはの中で何かの堰が切られた。

「…ああ、ヴィヴィオ、ヴィヴィオ」

「あやや、二人そろって…」

親子揃って声を上げて泣いていると、美由希が二人を包むように背中を撫でてくれた。数分そうしていたら、あふれ出していたものが収まって来た。

なのはの腕の中で涙を流したままのヴィヴィオが、ふと気が付いたように周りを見た。

「エイブラハムさんは？」

「え、エイブラハムさんは…」

「エイブラハムさん、すぐママに会わせてあげるって言ってくれたの…」

次元船に突入しているはずだ。とは、言えずなのはが言いよどむと、ヴィヴィオが鼻を嚙りながら続けた。

「強くなるって約束してたのに、わたし、前みたいに聖王になって、エイブラハムさんを殺そうとしたのに…、ずっとわたしを傷つけないように戦ってくれて…、それなのにいっぱい殴ってしまうのも止められなくて…、悔しくって。まだ、ごめんなさいって、言えなくて…、だから、エイブラハムさん、怒って帰っちゃったのかな…」

「そんなことないよ」

そうだ。わたしをここに帰すために、助けてくれた人がいる。

「エイブラハムさんは、わたしにヴィヴィオを安心させてあげてって、先に返してくれたんだよ」

あんなに傷ついているのに…。

「じゃあ、わたし、エイブラハムさんに、ごめんなさい出来る？」

「もちろん、エイブラハム…、アビー君のお仕事が終わったらね…」

まだ戦っている人がいる。

「いつ終わるかな？」

「うーん、わからないけど…、これからママが手伝ってくるから、早く終わると思うよ」

先ほど嘘で安心させた時とは違い。言葉に力が乗った。

その力を感じ取れたようで、ヴィヴィオが安心したようだ。

「うん、ママが手伝うなら、すぐ終わるよね」

会話を聞いていた護衛達が慌てた。

「待ってください。まさか、次元艦に突入するつもりですか!？」

「はい、もう一度あがります。アルカンシエルの光を見た人も多いと思うので、皆さんは一般人への認識操作をお願いします」

「いや、わかりますけど…。我々の任務は本来…」

「大丈夫です。わたし、こう見えても頑丈なんです」

「いや、そう言う意味では…」

護衛達が呆気にとられていると、美由希が進み出る。護衛達は家族ならば止めてくれるかと期待したが…、

「なのは、晩御飯までには帰ってくるんだよー」

美由希の言葉により混乱を深めるだけだった。ヴィヴィオも続ける。

「ママ、早く帰って来てね」

「うん、行ってきます!」

なのはは再び天に上る。

飛びながら、エイミーに通信。

「エイミーさん、次元船内にゲートを開けますか?」

《AM-45が使用した侵入ルートを推奨。ゲートが閉じ切っていません》

「よし、それなら大丈夫!行っちゃえ、なのはちゃん」

レイジングハートがエイミーにデータを渡すと、エイミーは遠隔操作で次元船の転送装置を操作。先ほどアルカンシエルを迎撃した空域に侵入用ゲートが開かれる。

なのはがゲートに飛び込むと、景色が傀儡兵の残骸が転がる次元船内に変わった。

ダメージコントロールのため状況確認に来ている一般的な次元船乗組員が数名、ギョツとした驚きの表情をしていた。

「た、高町なのは?なんで?」

「エース・オブ・エース?」

乗組員の表情から、ほとんどの乗組員が状況を聞かされていないことを悟ったのはは乗組員に警告を発した。

「武装隊1等空尉高町なのはです。この艦には不正なアルカンシエル使用の嫌疑があります。全員セーフルームで待機しなさい!」

この警告を数度くり返しながら先に進む。エイブラハムが向かった先は戦闘の痕跡を辿るだけなので間違い様がない。

砲撃の音と激しい射撃の音が聞こえたかと思うと、数名が争う乱戦の音が聞こえてきた。

《AM-45が包围されつつあります》

レイジングハートのセンサーでも捉えたようだ。しかし、かなりまずい状況のようだ。なのはの飛行魔法には次元船の通路は狭すぎたが、無理やり加速して先を急ぐ。

大きなホールの入り口にたどり着いたのはの目に、太い腕を振り上げエイブラハムを叩き潰そうとする像の姿が見えた。

「エクセリオンバスター!!」

なのはの呪文と共に吐き出された砲撃は、エイブラハムに迫っていた巨腕の像を押し流し、その先に鎮座していた王の像に当たって炸裂した。

入り口をくぐってホールの中を見渡す。かなりの大きさだ。空中戦とはいかないが、3次元の戦闘が可能な空間が広がっていた。床には破壊された鎧姿の像が数体。まだ、動いている像もある。

エイブラハムも無事だった。荒っぽい援護になってしまったが、砲撃を撃った瞬間にその場に伏せていたことから、こちらの意図が上手く伝わって…。

「高町1尉、何しに来た!!」

いなかった。エイブラハムが取り落した弾倉を拾い銃型デバイスに再装填すると、こちらに向けながら言ってきた。

「何しにって、助けに!」

エイブラハムがシュートバレットを放った。応じるようになるのもアクセルシューターを放つ。互いのデバイスが排莖したカートリッジが床に落ちる。

バレットがなのはの背後の空間に突き刺さると、火花をあげながら細身の像が染み出すように現れた。

シューターは弧を描きエイブラハムの背後で跳躍しようとしていたライオンの像を仕留める。

《カートリッジ、残弾0。AM-45、魔力枯渇》

レイジングハートが自機とエイブラハムの状況を伝えるころには、なのははエイブラハムが放り投げたカートリッジシステムの弾倉をキャッチ。

エイブラハムもなのはからのデバインドエナジーで魔力を回復させた。

「あれほど至近で砲撃支援を受けたのは初めてだ」

「ナイスでしょ?」

子機を操っていた像がなのは達に向かって、腕を向けると小手に仕込まれたボルトを発射してきた。なのはは急上昇しホールの天井を撫でるように跳んでかわし、エイブラハムは一足飛びで像に向かって接敵するように躲した。そのまま予備の銃剣を引き抜く。

「てつきり、とどめを刺しに来たのかと思ったよ！」

像が子機を二人の回避先にショートジャンプをさせようとしたが、天井と自機に近すぎた。子機を転送させる空間が確保できずに攻撃を断念した像。それとのすれ違いざまに、エイブラハムが魔力を付与した斬撃を四度叩きこむ。

「ひどい!!ピンチみたいだから、急いできたのに!!なんで、わかってくれないの?!」

急所を切り裂かれた像が倒れる。

攻撃の残心を残したエイブラハムの横合いから、毒剣の像が攻撃をくわえようと迫ろうとした。が、なのはのショートバスターで胸部に大穴を開けられ、頭部と両腕を四散させながら沈黙した。

「じゃあ、紙のような防御しかないのに、砲撃魔法を至近で炸裂される恐怖を…、なんでわかってくれないんだ」

魔力を一点に集中、切っ先を単分子サイズまで研ぎ澄ました斬撃を使ったエイブラハム。対して、なのはの砲撃は実に豪快だ。射程と威力を犠牲にした最速砲撃ですら、物理的な装甲のある像を軽々引きちぎる。

ならば、反応炸裂型砲撃魔法の威力のほどは…。と、考える方が普通である。

「う、だって、アビー君が危ないと思ったら力が入って…」

「これで本調子じゃないってんだから…、とんでもない、馬鹿魔力だ」

金属がきしむような音を立てて、女性の像が動き出しその目の前に設置されていた椅子を踏みつぶした。

「シャルロット大帝が、ご機嫌斜めになったようだな」

エイブラハムが皮肉気に言ったが、相当な力を持った傀儡兵だ。先ほど巨腕の像ごとエクセリオンバスターを受けたにも係わらず、表面の装甲には致命的な傷がない。

「一回りでかいだけあって、防御が硬い」
「うん」

エイブラハムが観測したデータをレイジングハートに回してくれた。相手の防御の術式、最大出力。

今のわたしでもカートリッジを多用することで、防御を貫くことが出来そうだ。

「まかせてー」

なのはがレイジングハートを構えてデイバインバスターを使おうとしたが、

「待てーあいつの後ろは、演算室だ。壁抜きなんてももの使われたら、証拠ごと吹き飛んでしまうー！」

「じゃあ…」

聖王の像が魔力斬撃を飛ばしてきた。二人が左右に躲す。

「左右からの砲撃で押し潰す。合わせろ、なのはー！」

「っあ、…うん、うん、うん!!」

聖王の像から放たれる斬撃を器用にかいくぐりエイブラハムが進む。なのはは一拍待ってから、聖王の像が斬撃を放つタイミングを待った。

聖王の像が剣を振りかぶるのにあわせて、レイジングハートを構える。

「ショートバスター」

魔力斬撃に向かって放たれた砲撃が爆ぜ、魔力煙がおこった。煙に紛れて一気に聖王の像の側面に回り込む。カートリッジを2発ロード。

「エクセリオンバスター」

先に攻撃位置についたエイブラハムは6枚のカードで六芒星の魔法陣を展開させていた。カートリッジを6発ロード。

「バイナリーバスター、ヘキサグラム」

「せーのっー」

なのはの声で、砲撃のタイミングを合わせる。

「シユート!!」

聖王の像は全身を覆うバリアを展開し、左右からの砲撃に耐えていたが、二人の砲撃がやむ前に動力炉が悲鳴をあげた。

動力炉が爆発を起こし、鎧の隙間から火が噴き出すとバリアが崩壊。文字通り押しつぶされる形になった聖王の像が圧壊した。

レイジングハートから余剰魔力が水蒸気のように排出され、エイブラハムの背に翹型の排熱板が出現する。

排熱作業が終わるのを待たず、エイブラハムは聖王像が立っていた後ろのハッチに取り付き、解放コードを解析して演算室の扉を解放させた。エイブラハムが扉が開ききる前に、隙間に滑り込み演算室に飛び込んだ。なのはも後を追う。

演算室に入ったなのはが見たのは、マニユピレーターや腕のアンカー、デバイスからの有線接続など、あらゆる手段で次元船のAIと接続しているエイブラハムの姿だった。

エイブラハムが通常インターフェイスのキーボードを叩きながら言った。

「ここまで来た以上、利用させてもらうぞ、高町1尉」

「えーアビー君!？」

先ほど、なのはと呼んでくれたのに、高町1尉に逆戻りしてしまった。なのはが驚いていると、エイブラハムが続ける。

「アンタは事情を知らずに、俺たち13課に利用されたんだ。事情を知らず俺の協力要請に応じただけ…、わかったな、武装隊の高町1尉」
「あっ…」

エイブラハムは法律上の責任の所在を気にしているようだ。この船は管理局内の船でありながら、聖王教会の騎士団に所属している船でもある。政治的なごたごたに巻き込まれると、なのはが管理局世界で生きていくには面倒になるかもしれない。最悪、里親の資格なしとして、ヴィヴィオと引き離される事態になる可能性もあるかもしれない。エイブラハムはそういう心配をしているようだ。

「…うん、ありがとう。アビー君…」

感謝しつつも、非難や責任がエイブラハムに向かってしまうことに、罪悪感を感じながらなのはが答えた。

「気にするな。君がいなかったなら、そもそも任務は失敗だった」

言いながらエイブラハムが艦内の情報とカートリッジの弾倉を渡ししてくる。

情報は艦内の警備用スフィア、傀儡兵が演算室に向かってきていることを知らせていた。完全自立型に見えて、何かしらの方法で情報共有はしているようだ。それが分かれば、エイブラハムなら制御を奪うことが出来るだろう。

「それで看板だ。申し訳ないけどな…、」

最後の弾倉を渡しながら、エイブラハムが言ってきた。

「180秒くれ、その間にこの艦のシステムを掌握してみせる」

「任せて、アビー君！」

なのはが元気よく答えると、エイブラハムがチラリをなのはに視線を向けた。

「…アナタ」

「えっ?」

「エイブラハムはコードネームだ。本名じゃない…」

「…」

なのはが目を丸くしていると、エイブラハムが続けた。

「先生が俺のことをそう呼んだ。だから、俺は戦友にはアナタと名乗っている」

「アナタ、アナタ君?」

「そうだ。頼んだぞ、なのは。バックアップを！」

「うん、うん!!」

再び、エイブラハムがキーボードを叩き始めると、なのははサーチャーを飛ばしてホールの様子を伺った。警備用スフィアと傀儡兵数体が姿を見せていた。

78 思い出は水晶のなかに…

姿を見せた警備用スフィアと傀儡兵にレイジングハートを向ける。すぐさま、アクセルシユーターで迎撃していく。残った傀儡兵は種類も少なく、攻撃手段も単調でなのは苦も無く倒すことが出来た。それを何度か繰り返し返していると、傀儡兵が足を止め、警備用スフィアが機能を停止させて床に落ちた。

艦内の隔壁がゆつくりと降りていき、艦内での自由な行き来を禁じる表示が空間モニターに浮かび上がる。

念の為サーチャーを使って停止した傀儡兵の観測をそのまま、なのはエイブラハムに振り返った。

「アビー…、アナタ君」

「システムの掌握を完了した。生命維持機能以外の全ての操作を禁止。個人単位での外部との通信接続もな。君の無事はハラオウンに伝えておいたから、外部との連絡が出来ないのは、勘弁してくれ」

エイブラハムが有線接続を引き抜きながら答えた。

「晴れてこの船は今回の騒ぎを起こした黒幕を、締め上げるための証拠品になった…」

「黒幕ですか…」

「そうだ。ヴィヴィオに取り付こうとしたヤツだ。…蝶番め」

エイブラハムが憎々しいとばかりに顔を歪めて。傷とあいまってかなりの迫力だったが、ヴィヴィオの為に怒ってくれていると思うと、不思議と悪く思えない。

「蝶番？」

「おっと、それはおいおいわかるだろう。正式な逮捕状が出るまで、知らない方がいい」

謎解きはお預けのようだ。

エイブラハムが空間モニターを表示し、映る映像を指した。

「それより、ここいつの所に行こう…」

なのはが空間モニターを見ると、一人の男が艦橋と連絡艇のある格納庫の間で、隔壁に閉じ込められて立ち往生している。

エイブラハムが意地悪く笑っている。

「この人が、どうしたの？」

昔、自身に意地悪をしてきた時の兄に近い笑い方をするエイブラハムに、その笑い方の時はいまいちだね。と、思いながら、なのはが聞いた。

「艦のデータの中に、イデア・グレンヌの使用記録もあった…。こいつがアリサに取り付いていたイデア・グレンヌの主だ」

「ええ!!艦長さんが!!」

そう、モニターに映っているのはこの船の艦長の姿だった。中年のお腹が出てきてしまった小太りのおじさん。と、いう風体である。その魂がアリサの体に入っていた…。

「…」

想像してしまいなのはが黙っていると、エイブラハムが遠慮なく口を開いた。

「おぞましいな」

「あ、待って」

言いながらエイブラハムが歩き始めた、慌ててなのはがついていく。

「イデア・グレンヌは記憶を物質にするって聞いていたのに、艦長さんは無事なんだね？」

「ん?…ああ、魂を体から引っこ抜いて物質化するイメージか？」

「うん、アリサちゃんの記憶は抜けちゃっているし…」

「推測でしかないが、球体の部分に使用者の記憶がコピーされ、そのあと別の人間に取り付く。取り付かれた人間の記憶を糧にしてリンカーコアを生成。使用者の記憶が体に乗っ取る。って、プロセスなんじゃないか？」

「使用実験の資料だと、そんな結果は出ていませんでした」

「使用者と取り付き先が、一緒だったからか?ベルカ時代の記憶のコピーがすでに入っていた…?実験結果は改ざんされたものだった…?追加で調べなきゃならない要件が増えたな…」

話しながら艦長のいる場所に向かう途中、エイブラハムが近づくと

閉じていた隔壁がなのは達が進む分だけ開く。今この船は完全にエイブラハムの掌握下にあるようだ。

途中で、セーフルームから顔を出した船員と出くわしたが、
「そのまま、セーフルームで待機しなさい」

なのはがそう言うと、みな大人しく従った。機動六課や、エース・オブ・エースの名前が知れ渡っていたことが役に立ってくれた。

なのはが複雑な思いを抱きながらエイブラハムを追うと、ある区画でエイブラハムが立ち止まり、銃型デバイスを引き抜く。その区画が艦長を閉じ込めている場所だと、なのはが気が付いた時、エイブラハムが隔壁を開いた。

突然開かれた隔壁と、そこから姿を表したエイブラハムと顔に艦長は動揺したようだったが、少しでも優位に立とうと虚勢を張る。

「なんだね、君たちは。この船は聖王騎士団にも所属している…」
「めんどくせえ」

艦長の口上の途中でエイブラハムが、スタンバレットを撃ち込んだ。そのまま、無造作に近寄って、ボカスカと暴行を加える。艦長が「痛い」「やめて」と叫んでもお構いなしである。最後に股間を蹴りあげられた艦長が泡を吹いて倒れる。

「アナタ君、やりすぎじゃない?」

なのはは口ではそういったが、殴られているのは親友の体に乗っ取ろうとした相手である。痛快に思ってしまった。そんな、心情を察しているのか、エイブラハムが続ける。

「そうか? きつとアリサがここにいたら、もつと殴っているだろ?」
「にやはは、そうかも」

なのはが返すと、エイブラハムが気を失った艦長の頭を鷲掴みにして吊り上げると、魔法陣を展開させた。

「思考捜査?」

「いや、脳の電気信号を測っているだけだ。稀少技能ほどの力はない。だが…」

エイブラハムはアイデア・グレンヌを取り出した。アリサから取り出した水晶クラスター型のアイデア・グレンヌである。

「こいつには使える」

「それ！」

「ああ。アリサの記憶を吸収しているモノだ」

エイブラハムが魔法陣と翅型の排熱板を展開させる。すると、氷にヒビ割れるような音を立てながら、アイデア・グレンヌの水晶クラスターが剥離していく。剥離した水晶はアイデア・グレンヌを中心に宙をくるくると回っている。水晶が全て剥がれ、アイデア・グレンヌが完全な球体に戻ると、エイブラハムは艦長を放した。

バタリと倒れる艦長を放置して、エイブラハムが両手でより分けるような仕草をすると、左手にアイデア・グレンヌ、右手に水晶の欠片が集まり、一つの結晶になった。

「こつちがアリサの記憶だ。本人の体に押し付けてやれば、記憶が元に戻るだろう」

ヴィヴィオに送信されたアイデア・グレンヌを取り出した時の様に、エイブラハムはアイデア・グレンヌの元となった人物の情報と、アリサの記憶をより分けてくれたようだ。

「うん！うん！ありがとう！」

アリサの記憶に戻る。素直にうれしい。自然と笑顔がこぼれた。

なのはが水晶を受け取りながら礼を言うのと、エイブラハムがそっぽを向いて右目の周りに触れた。

「礼には及ばない、アリサあのままにしていたら、後々祟られそうだしな」

「…アリサちゃんは怒りっぽいけど、今回のことでアナタ君を恨んだりする子じゃないよ」

「そうか？納得いかないと地縛霊になって、関係者を呪殺しそうなタイプじゃないか？」

エイブラハムに言われ、なのはは少し想像してしてしまった。半透明な姿ながら元気に宙に浮く幽霊が気さくに話しかけてくる姿を…。

あれ、余り違和感を感じないのは、どうしてだろう？

なのはが首を捻っていると、エイブラハムが身震いをしてから、青い顔をしていった。

「ま、まあ、これで、取り返せるだけのものは取り返したな…」

エイブラハムが背中の中を消した。

「さ、これでこの船には…、用はないだろ。ヴィヴィオのもとに行つてやれ」

エイブラハムがなのはの背を押す。このルートは転送ポートに向かつているらしい。背後で隔壁がしつかりと閉じる。船員の移動は許可する気はないようだ。

「エイミー・ハラオウンの通報先は…、腹立たしいが…この件について信用できる部隊だ。1時間もしないうちに…この船を拿捕するだろう」

「腹立たしいって?」

「通報を受けて動いている部隊の指揮を取っているのが…、カリム・グラシアの子飼いだ…、犬使いのヴェロツサ・アコースだ。…どこまで知つてやがったんだか…」

「…?」

エイブラハムの言葉の意味がわからず首を捻っていると、それを察したのかエイブラハムが続けた。

「聖王教会も一枚岩ではないってことさ…。カリム・グラシアはオラクル派、聖王が受けた神託とその教えをよしとする連中…。この船の船長とその後ろにいる奴はファクション派、直系ではないにしても…、ベルカの消滅から逃れた聖王家の血筋、シャルロット・ボーソレイユをベルカの正統な後継者としていた派閥だ…。ま、オラクルよりも、禁忌や制約がどうのこうのうるさいから…、人気はねえな」

「…もしかして」

「ああ、そのファクション派のやんごとなきお方が…、聖王家直系の肉体を手に入れようとした…。てのが、真相だろう」

「でも、クローンに相続権はありませんよね。ヴィヴィオはベルカ自治領との友好調印文章も作成していますし…」

ベルカ自治領との友好調印文章、この場合はヴィヴィオは聖王家の後継者ではなく、聖王家の遺産相続の権利を主張しない。と、いう内容である。これをやっておかないと、ヴィヴィオを祀り上げて、ベル

カ自治領に住んでいた人々から土地の使用料などの請求をしようとする輩が出てくる可能性が無ではない。

「ベルカの歴史の中には…、一度王位継承放棄して、そのあと返り咲いたヤツがいたな…、たしか放棄してから1年後の話だ…。それを前例とするなら、JS事件解決の際…、ヴィヴィオが文章に調印して1年弱…。まだ、調印文章を反故にしていって論調なんだろう…」

「歴史的に前例があるからって、約束や法律を破っていいんですか!?!」
「いい訳ないだろ…。だが…、あの艦長が優先しているのは、法律ではなく宗教だ…。理屈じゃないんだよ…」

エイブラハムがうんざりしたように言うと同時に、紫煙の匂いがしてきた。

「こんな時に…」

なのはが振り向くと、エイブラハムがいつの間にかタバコを銜えている。

「…こんな時だからさ、俺の出身世界が荒れていた時でも…、周りの連中はこいつを銜えていた…」

「……」

「多少の悪癖を持っていた方が…、神が不在の時に…、気のいい悪魔が助けてくれる」

「ヴィヴィオには聞かせられない金言ですね…」

なのはがそういうと、エイブラハムが愉快だと言わんばかりに口元を歪める。

「そうだ…、俺は多少の悪癖では…、すまないからな…。ヴィヴィオには、…近寄らない方がいいだろう。…この見た目を怖がっていたころだしな」

エイブラハムが右目の周りの傷痕を撫でながらいうと、なのはが不機嫌な顔になった。

「ヴィヴィオは見た目で人を判断したりしません！」

「…?イデア・グレンヌを…、引き抜いたあと、怖がっていただろ…?」

「それはアナタ君に、悪いことをしてしまったと思っていたからです」
「…悪いこと?」

エイブラハムが首を捻ると、なのはが娘の気持ちを代弁しようと熱弁する。

「体を操られて、アナタ君を殴ってしまったって…」

「んん…？…それはヴィヴィオのせいじゃないだろう？」

「アナタ君はそう思ってくれるかも知れないけど。JS事件で似たようなことがあって、そこからなにも変わってないって…。何もできずに守られてばかりなのが、悔しいみたいです」

「ゆりかご騒動のとき…、の話だよな？初等部に入ったばかりの子供が…、言うセリフか？」

「…わたしも何もできなくて、…悔しくて辛かった時期があります。どうして、わたしの手はこんなにちいさいんだらうって」

「…」

「アナタ君も、そう思ったことない？」

「さあ、どうだったかな…、忘れてしまったよ…」

「とにかく、ヴィヴィオはアナタ君にきちんと謝りたいんです」

「それなら…、…そんな必要はない。と…、…アンタが早く帰って教えてやればいいだろ」

「だから、わたしの言葉だけじゃ納得してくれないんだって。ヴィヴィオって結構言い出したらきかないんだよ。なんでわかってくれないかな」

それを説得するのが親の仕事だろ。と、エイブラハムはさらに帰るように促したが…。無駄な努力だと気が付いたようだ。

ヴィヴィオの謝罪を直接エイブラハムが受け取らないと納得しないのは、ヴィヴィオだけではない。

エイブラハムが別の言葉を吐き出した。

「…ヴィヴィオが頑固なのは、アンタのまねをしているからじゃないのか？」

「え、わたし、頑固なんかじゃないよ！」

「…アリサが、…記憶を取り戻したら聞いてみな…」

「む」

エイブラハムの声に呆れが混じったことに、納得がいかないのは

が膨れて、不満げに声をあげた。

エイブラハムに背中を押されて歩いていると、転送ポートまでたどり着いた。

最後の一突き、エイブラハムが背中を押してくる。

「さあ…、引継ぎは俺がやっておく…。ヴィヴィオのもとへ帰れ…」

そう言っただけを送り出そうとしてくるが、だんだん、エイブラハムの声に力が、なくなっていくのが気になった。

なのはが振り向くと、エイブラハムがL3Sに背を預けて、ズルズルと座り込むところだった。

「アナタ君!!」

「あー…、問題ない…、さつき貰った魔力が…、まだ残っている。」

エイブラハムが緩慢な動作で、足に刺さった破片を引き抜く。

「んんっ!!」

血があふれ出るかと思われたが、同時に治療魔法を発動させたのだろう。出血は最小限におさまった。

「…大丈夫…じゃないよね、これは…」

「そういうアンタも、結構な格好だぞ」

言われて自分の体を見下ろす、バリアジャケットの機能は生きていたが、あちらこちらが裂けており、露出した肌には擦過傷、挫滅創が見える。

「あ…」

傷だらけの体が恥ずかしくなり、体を縮こませていると、足元に魔法陣が浮かび上がり傷の痛みが和らいだ。見た目だけがバリアジャケットの裂け目も消えていく。乱れていた髪型も普段しているサイドテールにまとまった。が、少し再構成の設定が間違っている。

「わたしはいいよ。まず、自分を優先して…」

自分より体調の悪そうなエイブラハムが、治療魔法を使ってきたことに驚いてなのはは言った。が、エイブラハムが首を振る。

「元々アンタの魔力だ…。返しているだけだ…。…それに俺は人工魔導師だ。旧式とはいえ…、体内のマイクロデバイスのおかげで、…そう簡単には死なない」

荒い息をつくエイブラハムの額に触れる。と、やはり熱い。あちこちが破れたB Jの隙間からは、無数の古傷、生傷が覗いている。「…」

ふと父や兄の体を思い出す。事故や厳しい鍛錬で傷だらけだったが、叩き上げられた剣士の体。エイブラハムの体はそれを彷彿とさせた。

「…おっと、見苦しいものを見せたな…」

「ううん、でも、どうしてこんなにまでなつて…」

「…俺は、なにかを生み出したり…、誰かを育てつたりつてことが…、出来たためしがないからな…」

「…」

なのはが黙って聞いていると、ぼんやりとした表情で口を開く。限界を超えた魔法の制御による反動と疲労で、意識が朦朧としているようだ。

「…だから、余計に…、そんなやつらの敵を狩る人型兵器…、それくらいしか、俺に価値は無い…」

「…ダメだよ…そんなこと言っちゃ…、大切な人だつて、いるでしょう…?…」

「…」

少しの沈黙。

昏睡してしまったのか?と、なのはがエイブラハムの顔を覗き込むと、僅かだがエイブラハムの瞳は開いていた。

「…大切だった人は、…死んじまった…。先生も…、師匠も…、こいつ(タバコ)をやつてた連中の大半も…」

「…これからだつて…大切な人はいくらでも、できていくんだよ…、生きていたら…人と触れあつていくんだから」

「…いないさ…。そんなことになったら…、また…、何もできずに失うだけだ…」

朦朧としていても、エイブラハムの声に嫌悪のようなものが乗る。それも、自分に向けての…

(ああ、アナタ君は自分が好きじゃないんだ)

なのはにも覚えがある。父の怪我の後、大切な人が困っているとき、苦しんでいるとき、無力だった時の自分への憎しみ。それが他人には優しくできても、自分に優しくなることを阻んでいる。

「そんなことないよ。少なくともわたしやヴィヴィオ、海鳴の人たちを助けてくれたじゃない…」

わたしには周りのみんなが…、自分のことは好きになれなくても…、わたしを好きでいてくれるひとたちが、それを包んでくれた。なら、

「少なくとも、わたしは…、アナタ君にいなくなれたら…困るよ」「…なぜ？」

「翠屋のメニュー。まだ、食べてないのあるんだよね。常連になってくれるかもしれない人にいなくなれたら…困るよ」

なのはの言葉にエイブラハムは震えながら息をはいた。笑ったつもりのようだ。

「…そうか。それは…、足しげく通わないとな…」
そう言うとエイブラハムの瞼が落ちていった。

79 戦いの終り

『管理局が派遣軍の第66管理外世界からの完全撤退を表明』

そのニュースがベースキャンプを駆け巡ったとき、隠密高度をよしとしていた戦士たちからも歓声が上がった。付近の村々の様子も浮かれており、歌い出すもの、叫ぶもの、自動車のクラクションを鳴らすもの、祝砲という名目で空に向かって発砲するものが出ており歯止めが聞かない状態だった。

「おい、チビ、お前も飲め！」

「いやこつちだ、賭けダーツだ」

熟練の兵士がタバコと酒の匂いをさせながら声を掛けてきた。酒を飲みながらダーツをやっていたらしいが、娯楽専用のダーツの矢なんてものはなかったので、ナイフを矢、管理局の前指揮官の写真を的に見立てているらしい。貴重な嗜好品や食料を広げずいふんと浮かれている。巻き込まれると厄介だと判断した僕は、子供に酒を勧めるなどと言ってその場を離れると、診療所に向かう。

「師匠、いますか？」

「アナタか？ 入れ」

他の兵舎や倉庫のバラックと変わらない診療所の薄いドアを開けると、半裸の女性と医官がいた。半裸の女性はボクの右目と同じ変色が、左半身のほぼすべてを覆っていた。

「あ、出直します…」

女性の半裸の姿に驚いた僕は引き返そうとしたが、女性が止めた。

「構わん、我々は見られて、どうこういう仲ではないだろう」

「…はい」

少し照れるが返事をした。

「管理局の撤退が向こうの放送局で流れているようです…」

「なるほど、指揮官は新しく来たロシア大将の提案を飲むことにしたみたいだな」

「信用できるんですか？」

陸のこととなるとずさんな管理局に懐疑的な態度で言うと、師匠は

子供に言い含めるように言った。

「信用するのではない。相手の状況を読み、今は戦費と世論が戦力の派遣に後ろ向きだ。穏健派で知られる教会騎士の将軍をよこしたことで自体が、相手の回答と言うことだ」

「しかし、連中は軍の解体を求めています」

この提案を飲むことになる、僕には居場所がなくなってしまふ。

「…ああ、安心なさい。確かに新設されるマガフは、軍がない所から始まるだろうが、我々は解体されない」

「？」

「我々が軍人を辞めて民間軍事会社の社員となる。マガフ政府から依頼を受け、軍事の一切を引き受ける民間企業としてな…」

ちよつと難しかったが、取り合えず師匠たちとわかれずにすむらしい。

「指揮官と師匠の計画通りと言うことですね。良かった…」

「安心しているが戦闘が少なくなる分、勉強量は増やすからな」

「え、いや、でも…」

「でもじゃない…、戦いしかできない男になるな。アナタ」

「…はい、イレイン師匠」

P M C 「静かなる蛇」が軌道に乗ったころ、師匠は死んだ。

聖王教会の廊下を背筋を伸ばして二人の女性が歩いていった。

一人は金髪碧眼の若い女性。教会所属の騎士の黒いキャソックスを纏い、腰まで伸ばした髪をなびかせている。

もう一人はシスター用のトウニカを着て、目深にベールを被っている。ベールのため表情は見えないが、カバンを小脇に抱えキビキビとした動きから若さを感じさせた。

二人がある一室の扉の前で立ち止まる。と、シスターが騎士に耳打ちをする。

「念話中のようです…、騎士カリム」

「ええ、暗号化されているようね。内容はわからないわ…、弟を連れて

くるべきだったかしら、シャツハ？」

「いえ、証拠はすでに、彼が抑えたようです」

「では、堂々と行きましょう」

カリムが目の前扉をノックする。

しばらくの間の後、威儀を正した声がする。

「お入りなさい」

許可を貰ったのでカリムは扉を開いた。シンプルな執務室のデスクに、赤いキャソック姿の老年期の女性。

動揺した様子はなく、女性は手にしていた通信用のデバイスをデスクに置く。

「ルクレール枢機卿、我々がここに来た理由は、お判りでしょう。次元戦艦『ベルソー』の行いは、管理外世界に対する虐殺行為です」

踵を鳴らして部屋に入ったカリムは、前置きもなしに言った。

「聖王を名乗る不届き者と、ロストログアの暴走による文明世界の崩壊など、見過ごせるものではありませんわ」

枢機卿は泰然と座している。アルカンシエルを市街地に撃ち込むことに、何の躊躇もない。と、言わんばかりの態度に、カリムの方が苛立たされた。

「そんなものは、ありません！あのベルソーの艦長に指示をし、その筋書きを実行させたのは、枢機卿、あなたでしょう」

思わず語気を強めたカリムに対して、枢機卿は落ち着いて返した。

「わたくしは儀礼艦へ、エクリップスウィルスの調査を命令し、アルカンシエルの装備許可を出しただけ。高利貸しの末柄のオートマトンこそ、管理外世界で何かを企んでいたのでは？」

しらを切った枢機卿だったが、カリムの方はすでに論戦の準備ができていた。

「評議会調査室に問い合わせたところ、彼らは命令により行動していたとのこと。突入の際の録画データもこのっっています。今回の行動の詳細は極秘に当たるので、発表が遅れたようですが、書類の日付は、ロストログアの紛失が明るみに出た日になっているそうですよ」

「ここはベルカ自治領、評議会とはいえ、自治権を犯すことは許されません」

「おや、我々は管理局として、この部屋に訪れた覚えはありませんよ」
カリムが答えながら、シャツハに合図すると彼女がカバンからスクロールを取り出す。カリムはそれを目の前の教皇の最高顧問の一人に掲げて見せた。

「教皇命です。枢機卿ルイーズ・L・ルクレール。ロストロギアの不正使用、教皇選挙に対する干渉行為の疑いにより査問会に出頭せよ」

「…っ！」

自分の所属する宗教の最高位聖職者の命とあっては、枢機卿と言っても言い返せない。反論を封じられた枢機卿が肩を震わせる。

「わたくしに罪はない。罪があるのは聖王陛下の御身体をかどわかし管理外世界者と、それに加担する者だ！」

枢機卿が手の届く所に立て掛けてあった剣型のアームデバイスを掴んだ。が…、

「逆巻け！ヴィンデルシャフト」

鞘から抜く間もあたえずに、シャツハが双剣を枢機卿に突きつけた。

「…くっ！シスター・シャツハ…。わたくしがあと数年若ければ…、お前などには…」

「ええ、そうでしょう。そして、わたしもそうやって後輩に、追い抜かれていく時が来ます」

シャツハの頭に、自分と同じ双剣を使う不良シスターのことが掠めて笑みがこぼれる。

「…」

シャツハの笑みを余裕と見たのか…。枢機卿がデバイスを鞘に納めたまま手を離す。剣はゆっくりと床に倒れた。

「シャツハ、連行してちょうだい」

カリムが命じると教皇にバインドが掛けられる。枢機卿はシャツハを一度睨みつけた後、カリムに向かっていった。

「わたくしを管理局に突き出せると思っているのかしら。枢機卿であ

るこのわたくしを…」

枢機卿の下には、部下に当たる聖職者や、多くの信者がいる。聖職者や信者として人間。自分の上司に当たるものが、逮捕されることに反発を覚えることもある。対応を誤ると暴発させてしまうだろう。

「今は無理でしょう。ですが数年かけてじっくりと、教え子たちとの縁を切っていただいます」

カリムは出来るだけ意地が悪そうに見えるよう、枢機卿に向かって口角をあげた。

「へー、そんなことがあったんだ」

「ああ…、そうだ」

数日後の昼下がり、昼食時には遅いが学生たちで賑わうには早すぎる時間帯の翠屋にて、大まかな事情を説明されたアリサが納得したように頷くと、ぐったりと疲れた表情のエイブラハムが続けた。

「証拠品に当たる船は管理局の部隊が拿捕。乗組員の身柄も押さえている…。と言っても、実行部隊として動いていた騎士団と一部の幹部以外は、自分の船がなにをやっていたかさえ分かっていないだろう。今回の騒動の首謀者を、正規のルートで檻の中に放り込むのは、数年さきになりそうだ」

「ああ、いいわよ、その辺の話は、あんた達が上手くやるってことでしょう」

言いながらアリサは新メニューのローライズカップケーキを頬張る。

エイブラハムに事の顛末を聞いてきたのは、アリサだったはずなのだが、話を遮ったアリサにエイブラハムが困惑する。

（意図的な交通事故にあっただうえに、一時、記憶を奪われたとは思えないほど元気だな…）

記憶を取り戻したばかりとは思えないアリサ。そのバイタリテイに焙られたエイブラハムの素直な感想がそれだった。

カップケーキを飲み込んだアリサが続ける。

「事件の黒幕よりも…」

言いながらアリサが二人が座っているカウンター席の背後、ボックス席の方に視線を投げる。エイブラハムもつられて背後を振り向いた。

そこにはなのはとヴィヴィオ、それにさすが座り、いつもより多め（しかもお高め）のメニューを並べて談笑をしている。空席になった席の奥には、ハイブランドのショッパーが数点置かれている。

「なんで、なのははあんなに怒っているのよ。あんたに」

そこで、なのははカウンター席からの視線に気が付いたのだろう顔をあげた。エイブラハムとなのはの視線が一瞬あった。しかし、その一瞬でなのはは口を尖らせると、すぐさま他の二人との雑談に戻ってしまう。

「いったい何をやったのよ。いつもだったら、宥める側のすずかも、全然、止める気なさそうだし…」

アリサが体を横に倒しエイブラハムの背中を覗く姿勢を取ると、エイブラハムの背中にプライスPOPが貼り付けられていた。アリサには見覚えのある文字で掛れたPOPの文字は、お値段『急降下』、『投げ売り』価格。括弧で強調された文字に強い意思を感じる。

（恭也さんも似たようなことされていたな…）

アリサが親友たちの兄妹のことを思い出してすずかを見ると、すずかは不敵に笑ってウインクを返して見せた。

「二人同時に敵に回すなんて、バツカねー、あんた」

「うるさいな…、アリサもあちら側に回っていたじゃないか…」

エイブラハムが言いながら、カウンターテーブルに置かれたショッパ―を見る。アリサの持ち物になったそれは、女の買い物に付き合わせられるATMと化したエイブラハムの吐き出した金で買ったものだ。

「返さないわよ」

「わかってるさ…」

答えたエイブラハムがアイステイーを啜る。そのお茶以外、エイブラハムの前に皿はない。

実はアルカンシエルのプログラムを解体するという無茶をしたせ

いで、体内にたまった熱で内臓を痛めてしまい、固形のを食べる
ことが出来るまで回復するのにあと数日はかかりそうだ。

冷たいお茶の刺激に胃が驚いて引きつる感覚に、エイブラハムが顔
をしかめると、アリサが気を遣う。

「アナタ、大丈夫?」

「ああ、問題ない…」

いつの間にか呼び名がプライベート用の名前になっていたのは気
になったが、話題が少しそれてエイブラハムは安心した。

実はすずかも始めの内は、なのはの機嫌を取ってくれようとしてい
たのだが、その理由を知った途端、態度を変えた。エイブラハムの背
中にPOPを貼り付け、市中引き回しにした挙句、自腹を切らせたの
である。これに加えアリサが科す付加刑まで食らってはたまらない。

エイブラハムは顔に出さずに、ホツとしていたのだが…。

「…で、何をやったのよ?」

あいにくと、アリサは見逃してくれなかった。肩を掴んでエイブラ
ハムを自分の方に向けさせると、問い詰める。

「…」

エイブラハムは一度大きく深呼吸をした。気分は次弾で弾が出る
と確信しているのに、引き金を引かなければならないロシアンル
レット。

「ああつと、最後の戦闘の後、なのはの髪が乱れていたから…、魔法で
俺が整えたんだよ」

「へえ、あんたそんなこともできるの…?」

意外だと言わんばかりの表情でアリサが返してきた。

「いや、まあ、何というか…。その魔法は少し失敗したみたいでな…」

「失敗?」

アリサが眉を跳ね上げた。

「ああ、髪の結び目がいつもと、少し違ったらしい…」

「ええ…」

返すアリサの声がやや低くなった。

「今日会ったときに、その時ついた髪の癖を直すのが大変だったと、熱

弁されてな…」

「ふーん、で!!」

肩を掴んでいた手で、エイブラハムの二の腕を振りあげながらアリス。

不機嫌以外が感じ取れない声でアリスが続きを促した。

「俺はフォローのつもりで言ったんだぞ…」

「そ・れ・で!」

「た、大して変わらないと…」

ボソボソと言ったエイブラハムの言葉を聞いたアリスがニツコリと笑う。

エイブラハムを放り捨てるように手を離れたアリスが口を開いた。

「すいません! デリバリーで注文いいですか?」

エイブラハムの支払いで、父の会社への差し入れを注文し始めたアリスを止める気力もなく、エイブラハムがカウンターに突っ伏すと、コックシャツを来た中年の女性がエイブラハムの席に近寄ってきた。胸のネームには「まっちゃん」とある。女性はアイステイヤーを片付け、代わりにぬるめのハーブティを置いた。匂いからして内臓の機能を回復させる茶のようだ。

エイブラハムが感謝を伝えると、女性はほほえみ、エイブラハムにハーブティの値段を含めた伝票を置いていった。

「…こいつらを怒らせるぐらいなら、管理局艦隊と戦った方がましだな…」

再びカウンターに突っ伏す。

すると、

「アナタさん、大丈夫ですか? お腹痛いんですか?」

ぐったりとしているエイブラハムを心配してヴィヴィオがやってきた。ヴィヴィオはママ達がなんだかエイブラハムに冷たい態度を取っていることに困惑していたが、そのことを聞いちゃいけないような空気も感じているようだ。恐る恐るといった様子でエイブラハムに寄ってきた。

四面楚歌のエイブラハムにとって唯一の救いであるため、真実を濁

してエイブラハムが説明する。

「ああ、体調は問題ないよ。ただ、ちよつと失敗してしまつてね。君のママ達に叱られているんだよ…」

「ええ、可愛そう…」

ヴィヴィオが隣の席について、エイブラハムの頭を撫で始めた。慰めているつもりなのだろう。

思わず眼がしらが熱くなる。

(これが今回の戦果だな…、この子は、この子のまま、高町ヴィヴィオとして、健やかに育ってくれ…)

80おもちや箱編最終話　ロリポップ

時間は新暦80年春に戻って、午後1500

ベルカ自治領の一角、住宅地からやや離れた避暑地。その中の一軒の邸宅に数台の管理局車両が止まり、一人の老婆を乗せると静かに走り去った。

聖王教会で2番目の地位まで上り詰めたものが押送される姿としては、驚くほど静かで、いつそ哀れに見えるほどであった。

管理局車両は問題なく次元港にたどり着き、第17無人世界の「ラブソウルム」に向かう次元船が飛び立つ頃には、太陽が夜の帳を支えきれなくなっていた。

次元港の外柵、しかし、元枢機卿の乗る次元船の監視を出来る位置にいたなのは、次元船が一番星になるのを確認すると、小さく息をついた。

「栄枯盛衰って言うのかな…」

「隆盛と衰退が交互にめまぐるしく訪れるさまを表す、第97管理外世界の言葉だな」

人気のない場所を選んだつもりだったが、なのはの背後から声があった。

なのはは驚かずに振り返ったが、人の姿は見えない。

「アナタ君?」

「ああ」

なのはが呼びかけると、エイブラハムが空間から染み出してくるように現れた。朝に会った時と同じ服装だったが、口にタバコの代わりに棒付きキャンディを銜えている。

なのはは聖王教会に到着した後、エイブラハムと分かれて今回の元枢機卿の護送任務についた。エイブラハムの方はブリーフィングにも姿を表さなかったのだが、どうせこちらの背後を守る位置にいるのだろう。と、なのはは思っていたがその通りだったようだ。

「聖王教会から破門されてからは早かったな。取り巻きがいなくなる

のは…」

エイブラハムが言いながら、視線で次元船の軌跡を追う。

事前に止められたとはいえ、教会の枢機卿がロストロギアの不正使用、管理外世界への虐殺行為を指示したという事実は、地上本部崩壊直後のミッドチルダで大々的に報道させるわけにもいかず、3年の年月を掛けルクレール枢機卿の地位と権力を弱めた後、管理局による起訴が行われた。そして、更に1年の裁判期間を経て、ルクレール枢機卿の収監となったのである。聖王を手に入れようとした元枢機卿は、軌道拘置所のどこかの監房で人知れず余生を過ごすことになる。

「こういうのを見ちゃうと、なんだかなあって思っちゃうな」

「雑誌や管理局のPRに出て有名だからな、なのはは…。他人事だとは思えないのか?」

「にやはは、去年の戦技披露会も見た人が結構いるみたいで…」

有名になると親戚(自称)と友達(自称)が増える。この現象は次元世界だろうと変わらない。なのはは管理局という公の組織に所属しているし、ヴィヴィオは所属ジムのノーヴェとナカジマ家の人たちが上手く立ち回りずいぶん助けられている。

「君の周りにいる友人は、君が何か間違いをしてしまったとして、いなくなるような連中ではないだろう。よしんばそんな連中が近寄ってきたのなら、それこそBANしてしまえ」

エイブラハムが鉄砲を撃つ仕草をしながら言った。

「いいアイデアだね」

ふふふとなのはが笑う。

「それと、こいつもBANした方がいいな」

エイブラハムは拳銃型デバイスを取り出すと、デバイスに格納してあった物体を展開した。

「それ…、アイデア・グレンヌ」

エイブラハムが展開させたのは球体のアイデア・グレンヌ。それが宙に4個浮かんでいる。事件の際に使われた3個と、もう一つは実際の効果を試す実験に使われたものだろう。どういう手段を使ったかは、分からないが手に入れていたようだ。

「ああ、今までは証拠品として提出する可能性があったが、その必要も、もうない…」

エイブラハムが引き金を引いた。
撃ちぬかれた4つの魔法物質は砕け、僅かな魔力光をまき散らせながら消滅してしまった。

良し悪しはともかく、貴重なロストログアなのだが、エイブラハムにその辺の躊躇は全くないようだ。

「これでヴィヴィオを乗っ取る方法は完全に消失した」

「…大丈夫なの？アナタ君にも、スクライアの知り合いがいるんだよね？」

「問題ない。そいつには話していないし、イデア・グレンヌのほうも公式には回収されていない。上手くやるさ…」

「…わたしは、何も見なかったし、聞かなかったよ」

「そうしてくれると、ありがたい」

エイブラハムはデバイスをしまうと、一息ついてから言った。

「さて仕事は終了だ。現地解散の指示も出ている…。…これからは？」

エイブラハムの声には、何かを期待するような響きがあった。が、「ダーメ、ヴィヴィオが家で待っているし、今日はフェイトちゃんか帰ってくる日なんだ。このまま、お出迎え。今の時間なら丁度合流できさる」

「近くになかなかのコーヒーを出す店があると聞いたので、一緒にと思ったのだが…、それは残念」

エイブラハムが眉を寄せて心底無念といった顔をしたので、なのはが少し悪戯心を出した。

「その店が翠屋より、おいしいコーヒーを出すんだったら、予定を変えて付き合っただけでもいいよ」

「ああ、あいにくそこまでとは聞いていないな」

「ふふ、そうだよねー」

なのははエイブラハムに顔を近づけ、銜えている棒付きキャンディを見る。口からはみ出したキャンディの串には翠屋のロゴが僅かに

見えた。匂いを確かめると僅かにクマリン、桜餅の匂いがした。

「これ、新作フレーバー？」

「ああ、ためしてみるか？」

エイブラハムが答え、ポケットから包装紙に包まれたキャンディを取り出す。

なのも含めて周りの人間が、エイブラハムに禁煙を勧めているので、エイブラハムはタバコを控える代わりに、翠屋特製のこのキャンディを銜えることが多くなっている。

「うん、…貰うね」

予備があるなら。と、遠慮なく貰うことにする。

なののはが口に含むと、とびっきりの甘さが広がった。

「フェイトちゃん、お帰り」

次元航行船の乗客降り口で、黒い制服に身を包んだフェイトがキャリーバッグを引いていると、フェイトを呼ぶ声が響いた。

「なのは！」

顔をあげると無二の親友の姿があった。なののはが制服姿で手を振っている。

その姿に向かってフェイトは小走りで駆けよりながら、ヴィヴィオを探す。が、見当たらない。

「あれ？ヴィヴィオは？」

フェイトの記憶している予定では、なののはとヴィヴィオが迎えに来てくれる予定だった。

「うん、一度帰ってから、ヴィヴィオと来るつもりだったんだけど、お仕事の予定が換わっちゃって…。一度帰ってからだと遅くなりそうだから、仕事現場から直接来たんだ」

「あ、それで制服だったんだ」

改めてなののはを見ると、いつも以上の上機嫌の笑顔で、手には棒付きキャンディがあった。

待っている間に買ったのだろうか？

「うん、じゃあ、帰ろうフェイトちゃん。今日は久しぶりにアイナさんの晩御飯だよ」

言いながらなのは歩き出し、手に持っていた棒付きキャンディを銜えた。なのはの足取りが妙に軽い。何かいいことでもあったのだろうか？更によく見ると、なのはが銜えているキャンディが、翠屋のものであることが串でわかった。

フェイトが横に並んで聞いてくる。

「なのは、わたしがミッドから離れている間に、海鳴に帰ったの？」

「ううん。どうして？」

なのはが聞き返すと、当てが外れたフェイトが小首を傾げながら聞いてきた。

「それ、翠屋のでしょう？」

言いながら、フェイトが指したのは銜えた棒付きキャンディ。

「うん、翠屋の新作フレーバー。今日、仕事で一緒だった人が、海鳴に縁のある人でひとつ貰ったんだ」

「へー、凄い縁だね。何味？」

凄い偶然もあったものだ。と、フェイトは驚き、何気なく聞いた。

「シガーフレーバー。…もう、辞めた方がいいっているのに…」

「え、なんて、言ったの？」

意外過ぎる香りの種類に、フェイトが思わず聞き返す。

「タバコ味、ヴィヴィオには内緒にして。…ね、フェイトちゃん」

なのはの答えの意味が分からず頭上には？を浮かべるフェイトの表情をみながら、なのははチロリつと出した舌で、ずいぶん小さくなったキャンディを舐めた。

エイブラハムが調査室の13課本部に戻ると、パーシングが何かの薬品の実験データがどこまで信用できるのか検討しているところだった。

「ん、どうした？今日は直帰するんじゃないのか？」

自分のデスクに向かう途中で、こちらに気が付いたパーシングが聞いてくる。

「ああ、ちよつと当てがハズレてね。予定がないなら、戦術を練った方が有意義だろ」

エイブラハムが言いながら自分のデスクに座り、いくつかのシミュレーターを立ち上げた。次に相手取る敵の行動パターンから遭遇位置を割り出し、その地形と新装備のスペックを考慮した複数のシミュレーションイメージを、同時にマルチタスクで開始すること2時間。軽い小休止を取ることにして、懐のタバコに手を伸ばし掛けて…、取りやめた。

別のポケットから、包装にくるまれた棒付きキャンディを取り出した。

「ん、何の匂いだ」

包みを開いて口に銜えると、パーシングが匂いに気が付いたようだ。

「ああ、これだよ」

匂いの元を探り周りを見渡すパーシングに、銜えたキャンディを指しながらエイブラハムが答えた。

「ん？おまえ、煙草喫じゃなかったか？」

普段なら小休止でタバコを吸いに行くエイブラハムが、棒付きキャンディを銜えている姿に、パーシングが疑問に思ったようで聞いてきた。

「減煙中だ。それに甘いものは、嫌いじゃない。脳を酷使しているときは特に…」

「そうか…。しかし、変わった匂いだな」

エイブラハムの悪癖についてパーシングは興味がない様子だったが、エイブラハムの銜えているキャンディの独特の香りには、興味をひかれたようだ。

「ああ、キャノーラ風味だよ」

エイブラハムは嘘でも本当でもない答えを返した。

「やらんぞ」

「いるか、俺は甘党じゃない」

不思議で不可欠、女子会編

81 ガールズ・ナイト・アウト

管理局世界のトップニュースという舞台で、EC因子適合者やヴァンデイン・コーポレーションという単語がおどらなくなった時期、無人世界「カルナージ」。

ホテル「アルピーノ」の一室、キングサイズベットを複数連結させ、成人女性が5人並んで横になってもかなり余裕のある寝台の中心で、八神はやては妄言を叫んだ。

「第何回か！私立聖祥大附属校！チキチキ女だらけのパジャマ・パーティーー！」

「わー!!」

はやての言葉に、参加者たちがお約束の合いの手と拍手を送る。

しかし、アリサ・バニングスは拍手をしながらも、ツツコミを忘れない。

「女だらけって、これってバチエロレット・パーティーでしょう？男が参加してどうすんのよ…」

「ははは！世の男の人達は残念やな、ポロリもあるのに…」

「あつてたまるか！」

「そうか？みんなポロリとイキそうなかっこうやないか」

「あんたが用意したんでしようが！」

はやての言葉に乗って、語気を強めていくアリサを前にしても、はやてはニコニコと笑っている。

「でも…」

はやてからみてアリサ側の奥にいるフェイト・T・ハラオウンが顔を赤らめながら言った。

「少し恥ずかしいね…。この格好…」

枕を抱いて体を隠そうとするフェイトの姿態を見るはやての顔が、

ニコニコからニヤニヤとした薄笑いにかわる。そのままはやてはフェイトのロングスリップ姿を視線で舐めまわすと、フェイトは顔をますます赤くして俯いてしまった。

「やめなさいっての！セクハラおやじか、あんたは！」

見かねたアリサが二人の間に割って入る。しかし、はやては視線の標的を変え、アリサのキャミソールとフレアパンティの組み合わせに視線を這わせた。

「アリサちゃんも、ナイスですね！」

「やかましいー！」

何処かの監督だかお笑いタレントだかと同じ口調でサムズアップするはやてに対し、アリサが三白眼になった。

しかし、はやては気にする素振りも見せず、アリサ達とは反対側に並んで横になった友人たちに向き直って言った。

「もちろん、二人もファンタスティック!!」

「ふふ、ありがとう、はやてちゃん」

「にやはは、今日は一段とノリノリだね…」

ナイトガウンを羽織った月村さすががさりりと返し、ベビードール姿の高町なのはが困ったような笑みを返した。

「そらまあ、独身最後の夜を楽しまんと」

なのはに答えながらネグリジエ姿のはやてが、振り向いた拍子にずれたコットンブランケットをお腹に掛け直そうとする。

と、さすがが素早く手を貸した。

「羽目を外すのはいいけれど、お腹だけは冷やしちやダメだよ」

ずいぶんと目立つお腹になった友人に、丁寧にブランケットを掛けながらさすがが忠告する。

「おっと、ありがとう、さすがちゃん」

姉のほか、経験の多いすずかの言葉は、さすがのはやても素直に聞いた。

「まったく、身重なのに何だってこんなスケスケのを選ぶのよ」

アリサが自分を含め友人たちの姿を見回す。

皆、身に着けている物の種類は違うが共通点が一つ。使われている

生地のお大半がシースルーやレース、スリットや編み上げを多用していた。それらは肌を隠す、覆うなどの守りの概念が一切なく、見る者の心を狙い撃ちするための、挑発的で攻撃的なデザインが採用されている寝間着?である。

(想像が出来ない人は「Detonation ポスター付き前売券 ゲームーズ限定」で画像検索してみよう)

それらはすべてはやてが用意し、5人で入浴している間に、ルーテシア・アルピーノにそれと着替えをすり替えさせるという手段で、強引に着せたものだ。

「ええやろ、ビルには悪いけど、この子っちが出てくるまで、こんな着る機会は少なくなるやろからなく」

「ああ、はいはい」

はやてがお腹を撫でながら、明日、旦那になる相手の名前を出したので、アリサは惚気られてはたまらないと、話題を変えるために左右を見渡した。

目に入ったのはヘッドボードやサイドテーブルに置かれた飲み物や軽食。そして、参加者に事前に配られた結婚式の案内とパンフレット。

アリサがその一部を取る。表紙にはこの無人世界「カルナージ」の写真があった。

「しっかし、あたし達まで魔法の世界に来ることになるとわねー。人生何があるのか分からないものだよ」

「そうだね。新型コロナウイルスの影響もあつたし…。わたし達が御呼ばれされるとは、思ってたなかったよ」

「二人を呼ばんわけないやろ。まあ、地球の人だけ別で披露宴って話もあつたんやけど、二人のお家は長年現地協力してもらってた実績があるしな。複数の次元を結んでいる管理局は免疫チエックも充実してるからな。そんなら、ええ機会やから二人にも、こつちの世界を覗かせてあげよ思ってた」

「光栄ね。免疫検査もあつという間だったし、地球にも導入してほしいくらいだよ」

地球であった新型ウイルス騒ぎのおかげで母国と日本との往来で苦勞しているアリサが言う。

「でも、よかった。魔法の世界の結婚式には参加できないもの。って、思っていたから」

「続くすずかも実には楽しげに言うと、フェイトのほうを見た。」

「お義兄ちゃん（クロノ）とエイミイの時のこと？」

「うん。こっちでもパーティーはしたけど、日本の結婚式みたいに百人以上は入れるホテルの宴会場で…。ってことはなかったでしょ」

「うん、あの時は…。ごめんね。まだ、渡航申請が下りにくいころだったから…」

「兄達に変わって、フェイトが謝罪する。」

「ううん、いいの、その分、なのはちゃんとはやてちゃんに写真や動画を見せてもらったしね」

「すずかが言いながら、今度はなのはの方を見る。」

「うん、あの時の動画は我ながらいい画が取れたと思うな」

「すずかの視線に、なのはが少し自慢げに答えた。」

「子供のころ漠然と映画監督に憧れていたこともあるのはは、今でもAV機器の取り扱いが得意だ。今回のはやての結婚式の撮影係も担当している。」

「そういえば…。はやての選んだ式場って、エイミイさんの時とずいぶん違うのね。何と言うか…。雰囲気？」

「なのはの言葉に、当時見た映像を思い出したアリサが感想を口にした。」

「ああ、そら、ミッド系の人とベルカ系、宗教の違いやな」

「うん、そうだね。お義兄ちゃん達はそんなに信心深くないから、セレモニーも役所で済ませちゃったし…」

「アリサの感想にはやてが答え、フェイトがクロノのあじけないセンスを残念に思いながら同意した。」

「アメリカでも、セレモニーとパーティーは別々の場所でやることが多いわよ。パーティーの規模は日本に近いかしら…。？はやてはここで両方やる予定なんですよ」

「うん、教会の知り合いがおるからなー。それにベルカ系の結婚式は、いわゆる身内だけの結婚式っちゅうやつや…」

「お国柄なんだろうけど、ずいぶん違うんだね」

「すぐかも明日の予定表を覗きながら言った。すぐかが案内や事前
に聞いていた話をまとめると、ベルカ式の結婚式の特徴は以下のよう
なものらしい。」

- ・ 結婚式は聖王教会の神父が立ち会う
- ・ ウエディングドレスは購入するもの
- ・ お色直しがない
- ・ 準備・手配は全て自分たちで
- ・ 義理でゲストを招待しない
- ・ ご祝儀ではなくプレゼント？
- ・ 新郎新婦がダンスを披露
- ・ 深夜まで続く・・・
- ・ 結婚式の中心は新郎新婦とその家族
- ・ 皿割りなどのベルカならではの風習

「ふん！残念ね。ガータートスがあつたなら、しっかりと撮影してや
ろうと思つたのに！」

ガータートス、花婿が花嫁のスカートにもぐりこんで、身につけて
いるガーターを外して参列者（未婚の男性）に向けて放り投げるアメ
リカの結婚式の定番。

アリサが今までされたセクハラ（胸揉み）の仕返し。と、言わんば
かりに挑発したが、はやてはニヤリと含み笑いを返す。

「ん？もしかしてほしいん？何やったら、引き出物の代わりに渡した
るか？」

言いながらはやては身に着けたネグリジエの裾を掴み、きわどい所
までたくし上げると、ひらひらと振って見せた。

アリサが「いるか！」と、怒鳴ろうとしたが、

「わーダメだよーはやてー！」

「…ッ！」

アリサよりも早く響いたフェイトの声で、言葉を飲み込んだ。

「どうしたの？フェイトちゃん、大きな声を出して…」

フェイトの声に驚いたなのはが聞いた。なのにもフェイトが大声を出した理由が分からない。友人だけの時間に、はやてが悪ふざけをするのはいつものことだからだ。

「でも、バチエロレッテ・パーティーの格好で、そういうことをするの…、…恥ずかしい…」

「なにを恥ずかしがっているのよ。女同士でしょ…。て言うか、さっきまで一緒にお風呂に入っていたじゃない」

「そうだけど、その、お風呂以外で、こういう格好は普段しないよね…、スースーするし…」

「へ…？…ツ…す…す…って、…あんたまさか！」

もごもごと口籠るフェイトの様子に、アリサが何かの疑惑を思いついたようで半眼になった。

「フェイト、ちよつと見せなさい…」

「へッ、えっ…、怖いよ…、アリサ…」

ジト目のままに躍り寄るアリサに、恐怖を覚えたフェイトがスリッパの裾を抑えて、遠慮気味の抗議を示したが、

「うらあ！股を開きなさい！」

「ひゃあ！ア、アリサ、やめて！」

フェイトの抗議などに耳を貸さず、アリサがフェイトに襲い掛かった。アリサが、それこそガータートスを行う新郎のように、ロングスリッパの裾を捲り上げ頭を突っ込むと、『自主規制君』が「見せられないよ！」と書かれたフリッパを掲げていた。

「なんで、着けてないの！」

スリッパの中からアリサを追い出そうと、必死にアリサの頭を両手で押しながらフェイトが言い返した。

「だって、だって、はやてとすずかが、バチエロレッテ・パーティーでは着けないのが普通だって！」

M字に広げられた足の間に、顔を入れられるという、非常に恥ずかしい思いをしたフェイトが涙目になりながら、はやてとすずかを見た。

しかし、二人は…

「わお、フェイトちゃんつてば大胆！」

「開放的なのが、好みなんだね」

フェイトに嘘を教えた二人は、堂々と素知らぬ顔を決め込んだ。

「ふえっ、ええ!!」

あつさりと突き放され、ぴえん顔になったフェイトに追い打ちを掛けるように、はやてはネグリジエの裾を先ほどよりも大胆に抓み上げる。その動作に合わせてすずかもナイトガウンの前を開け広げる。

抓み上げられたネグリジエの下から総レースのショーツが、ナイトガウンの間からはシアー素材のティデイが覗いている。

すつかり騙されたことに気が付いたフェイトの体から力が抜け、アリサに対する抵抗も諦めた。

「うう…。みんながイジメる」

ベットに身を投げ出し、いじけたことを言い出したフェイトをクスクスと笑うはやてとすずか。

悪戯の仕掛け人二人を呆れた顔をしたのはがたしなめた。

「二人とも、やりすぎ。フェイトちゃんが優しくて、許してくれるからって…。久しぶりに会えてうれしいのはわかるけど、次はわたしが代わりに怒っちゃおうよ」

「は〜い」

なのはに怒られてはたまらないと、はやてとすずかが返事をする。

スリッパから頭を抜いたアリサは、フェイトに向かっていった。

「でも、あんたもよ、フェイト。あの二人の言うことを真に受けてどうするのよ。そんなんじや、変な男に引つかかるわよ！」

「だ、大丈夫だよ、それは…。ファンは悪い人じゃないし…」

フェイトの言葉の後半は小さく、アリサ達に聞かせるつもりで言っただけではなかったが、アリサ達、四人は当然のように聞き逃さなかった。

「ファン？聞いたことある名前ね。ああ、フェイトを追い抜いて資格を取った子だったかしら？」

「ああ、せやったな。いまは、弁護士やったっけ？」

「ううっ！そうだよ…」

過去の失敗のコンプレックスを刺激され言いよどむフェイトを見て、さすがは質問する相手をなのはに変えた。

「なのはちゃん。ファンさんって、どんな人なの？」

「フェイトちゃんの後輩の明るい子だよ」

「なのははそこで言葉を切ってから続けた。

「…女の子にも人気がありそうな感じの…」

「なのはのその発言をめぐって、管理局世界でのフェイトの様子を知らない二人がざわついた。

「ちよ、ま。大丈夫なのそれ？」

「はやてちゃんは、何か知ってる？」

「管理局に入局してたときは、ずいぶん浮き名を流してたって聞いているよ」

人差し指でこめかみを突きながら、渋い表情をするはやて。その表情がフェイト以外の女たちに伝播していく。

「だ、大丈夫？フェイト。あんた、お金とか渡したりしてないわよね」

「そんなこと頼まれたことないよ」

アリサが真剣な顔で言ったので、フェイトは少し慌てた。ファンが詐欺師のように思われてはたまらない。

「二人のためにこの契約の保証人になって。とか、言われても断るって約束、破ってないよね」

「破ってないよ。なのははまだ信じてくれてないの！」

「都合のいいときだけ呼びつけて、デートもなしにホテル行こか。なんて言われてもキツパリと断らなあかんで…」

「行って…：…デートはしてるけど…：…ファンはそんな人じゃないから！なんで信じてくれないの！」

DVを受けていることに気が付いていない被害者女性のような扱いを受けて、さすがにフェイトの声が大きくなった。

それを聞き4人が目配せで会話をしてから…。

「だって、フェイトちゃんは…、なんて言うか…」

「優しすぎるところがあるから…」

「せやなあ、そこが問題やな…」

「まあ、いい機会だから言うけど…、フェイトは…」

なのは、すずか、はやて、アリスの4人が異口同音に言った。

「二」付き合う男性をダメ男にする、ダメ男職人になりそう」「」

「そんなことないよ!!…いや、私はそういうところがあるかもしれないけど…」

反論した傍から自信がなくなったのか、声が小さくなったフェイトだが言葉を続ける。

「ファンの方がしつかりしているから…」

続いたフェイトの言葉には確かな信頼を感じたはやて達の口元にムフフと笑みがこみ上げていった。

「ほう、じゃあ、聞かせてもらおうやないか…」

こうして、女子会という名目の男どもの品評会が始まった。

82ヘン・パーティー（フェイト）

「フェイトを『追い抜いた』ファンって、年下だったっけ？」

言葉で軽いジャブを放ちながら質問するアリサに、一瞬怯みながらもフェイトは答えた。

「う、うん、ファンは一つ年下だよ」

「せやなあ、元執務官やから、私も少し知ってるんよ」

はやてが続けてファン・ユーゼエアのプロフィールを発表した。

氏名：ファン・ユーゼエア（出身地方の風習でファミリーネームが前に来る）

出身地：ルーフエン ビジネス都市部

現住所：ミッドチルダ北部 第7都市区画

職歴：勤務先：元本局執務官、現弁護士（個人事務所）

資格：執務官／普通自動車免許／特殊小型船舶免許

魔法術式：近代ベルカ式・総合SSランク

趣味・特技：ギター演奏、マリンスポーツ全般

身長・体重：183cm、66kg

家族構成：使い魔が3体『（亀）ビーヤードイ♂、（鳥）ホンチー♂、（虎）オラオ+』

その他：執務官時代から相手の心理を読むことに長け、油断ならぬ一曲者、若手のホープとして注目されていた。が、私的な事情を理由に退局。弁護士に転向。主に管理局員や貧困層相手に事業展開を行っている。

実はファンは機動六課編成の際に、部隊員候補としてリストに上がっていたため、はやても資料上では知っていた。因みに、候補から外れた理由は、市街地では使いにくい効果範囲の広い魔法がメインの魔導師だったためである。

「民間弁護士になつたつちゆうのにお客にしてる人達を見ると…、お金で動くタイプやあらへんな…」

「写真とかないの？試験の話をしてくれた時も、見せてくれなかったじゃない」

「それは、アリサとはやてが笑うからです！」

フアンと出会った時の話をした時、二人がお腹を抱えながら笑い転げたことは今でも忘れない。つと、フェイトが口を尖らせながらも、空間モニターに写真を映し出す。

写真には甘い顔の男が肩に載せた鳥と戯れている姿が写されている。鳥は翼開長が80cmほどの大きさで、金色の冠羽を頂いた姿が神秘的に見えた。

「へー、読モとか、やってそうな顔立ちね」

「そうだよね、付き合い始めたって聞いた時、フェイトちゃんって面食いさんだったんだ。って思ったよ」

アリサの言った第一印象に、なのはが同意する。続けて、すずかも感想を口にする。

「わたしは年下ってことの方が意外かな？てつきり、クロノさんみたいな年上がタイプなんじゃないかなって思ってたから…」

すずかの話聞いて、ほう、と感嘆の声をあげたはやてが論敵になった。

「へー、すずかちゃんはそっち派やったんやね。私はフェイトちゃんは同い年くらいで男前ーな、なのはちゃんみたいな男の子を連れてくるもんやと思っとった」

「あ、それあたしも」

「え、アリサちゃんは、なのは君（♂）派だったんだ」

「なのは君！わたしの知らないところで、そんなことになってたの？」
勝手にY染色体を着けられたなのはが、心外だとすずかの肩を掴んで揺さぶると、すずかはハハハと笑って「例えの話だよ」と返していたが…。

「な、なのは君（♂）か…」

フェイトがムムムっと、懊悩し始める。

（やっぱり、ありよりのありって感じね）

（フェイトちゃんが、新しい世界にめざめそうやけど…、今は帰ってきて

てもらおか)

(そうね、帰ってこないよ、聞きたいこと聞けそうにないものね)

アリサとはやてが密談を交わし、ヘットボードに置かれたグラスに甘い果実酒を注ぐ。

「で、そのファンって子、弟みたいな友達。って言っていたでしょ！付き合い始めたキツカケって何なのよ？」

アリサが言いながら、静かにグラスをフェイトに手渡す。

「え、ああ、えつと…」

妄想の世界から呼び戻すアリサの声で、我に返ったフェイトが辺りを見回すと、はやてがオレンジ色の飲み物を飲んでいった。

自分の手にはいつの間にかオレンジ色の飲み物が入ったグラス。妊娠中のはやても飲んでいることから、ソフトドリンクを渡されたのだろう。と、フェイトは思った。

(物思いにふけり過ぎた)

うあの空でボウつとした顔を見られたと思ったフェイトは気恥ずかしさを隠すように、グラスの中身を飲み干した。

体が熱い。身に着けている衣装のせいか、いつも以上に、はにかんでしまう？

フェイトがはやてが飲んでいるオレンジジュースにつられて、アルコール度数の高めの果実酒を飲むのを確認し、アリサは「よし！」っと、ほくそ笑んだ。人の悪い笑みを誤魔化す為に、自身もグラスに口をつける。もちろん、一気に飲み干したりせずに、舐めるように一口だ。

「で、付き合い始めたのはいつよ？はやての…、機動六課？が、解散した頃にはデートしてたって聞いてるけど…」

「え、えつと、正式にお付き合い始めたのは…、最近…」

フェイトの言葉にアリサの口がへの字に結ばれる。はやても片眉を跳ね上げていたし、なのはとすずかもじゃれ合いを止め聞いていた。

「最近？今まで、遊びで付き合ってたの？」

機動六課の解散は数年前の話だ。しかし、フェイトは最近の話と言う。

アリサが眉を寄せて怪訝な顔をした。はやてとすずかも首を捻り納得がいかないような顔をしている。3人ともフェイトが恋愛を遊びでできるほど、器用なタイプだと思っただけではないからだ。

「なのはちゃん、k w s k」

客観的な意見を求めてはやてがなのはに聞いた。一緒に暮らしているなのはなら何か知っているだろう。

「そうだね。わたしから見たら付き合い始めたのが最近と言うより、くつついたり離れたりにしている…かな〜？」

「え、そう、見えてたの？」

「うん」

即答するなのはと自分との認識の差に驚き、自分の行いを振り返るため黙考し始めたフェイト。すかさずアリサが飲み物の代わりを差し出す。フェイトは再びグラスを飲み干し気持ちを落ち着けようとしている。

アリサとはやてが邪悪な笑みを浮かべていることには、気が付いていないようだ。

フェイトが次の質問を受け付けるまで間が空きそうだと、思ったすずかがなのはに聞いた。

「なのはちゃんが、そう思い始めたのっていつなの？」

「ティアナ…、覚えてる？わたしの教え子の…」

「オレンジの髪の毛の勝気そうな子でしょ？覚えているよ」

「そのティアナがフェイトちゃんの元にいたころだから…、もう、4年くらい前になるのかな？担当していた事件を解決した後、数日予定より遅く帰ってきた日があつて…」

当時、初等科のヴィヴィオが家にいたこともあつて、何があつたかはなのはは確認はしなかった。が、洗濯籠から男性向けのオーデオロンの香りがしていたことがあつた。

「ほほう、念の為聞くんやけど、理由は仕事でないんやな？」

「はい、仕事ではありません、八神部隊長。その頃は、気にかけて欲しいと、ティアナからも相談も受けました」

キリツ顔で質問をしてくるはやてに合わせて、なのはもキリツ顔で返した。

「フェイト・T・ハラウン君！この証言に偽りはあるかね?!」

はやてはそのままの顔でフェイトに返したが、

「…そっか、ティアナにも心配かけてたんだ…」

フェイトは乗らず、少し声のトーンを落した。

「…ごめん、フェイトちゃん。聞いちゃいけないことだった？」

執務官の守秘義務があるフェイトは担当した事件の内容を話すことが出来ないことも多い。踏み入ってはいけないことだったのだろうか？と、なのはがフェイトを気遣って言った。

「あ、ううん。…その、あの時は、その、執務官と弁護士って立場で、ファンと同じ事件を取り扱うことになったんだけど…。お互いに、思うような結果にならなくて…」

「お互いに慰め合ったのが、始まりってわけね」

アリサが言いながら再度、飲み物のお代りをフェイトに渡す。

フェイトが受け取ろうとすると、アリサが僅かに目配せをしてきた。せつかく、はやての新しい門出の為に集まったのだから、暗い顔は似合わない。と、言うことだろう。

「うん、でも、その事件が切っ掛けで、ファンも自分の深い所の話をしてくれるようになって…。その、ああ、ファンもこんなところがあるんだなあ…。って…思うようになって…」

答えながらフェイトは顔が熱くなつていくことを自覚した。熱さから逃れようとグラスに口をつける。

「そっかー、フェイトちゃんは、その時が…、ってことかな？」

「…多分ね。ヴィヴィオに、この香り何？って聞かれてから。洗濯物も気を付けるようにしてみたんだけど…」

フェイトの様子を見たさすがが、唇をペロリとなめた後、なのはに耳打ちをした。なのはは、なのはで、女子会の雰囲気当てられたのか、こっそりとすずかに、フェイトの秘密を暴露した。

二人は一応フェイトに気を使い小声で話していたが、この会の主催者は遠慮しなかった。

「で、そんな時に神ったってことやな？」

「へっ？カミっ？」

はやてはフェイトを見つめ真っ直ぐな質問をぶつけたが、フェイトはそのネットミームを知らなかったようだ。

「ちよ、おま…！聞く!?そういうこと!!」

「そら、そうやろ！何のための女子会やと思ってるねん！」

暴走気味のはやてに、アリサがツツコミを入れたが、はやては怯まなかった。はやては目ぢからでフェイトに迫った。

「えっ、えっ！私、何を聞かれたの？」

「だから…！」

はやての目ぢからに怯えるフェイトに、アリサが耳打ちをする。

「SEっ、え、えええ！そんなこと聞いちゃうの!？」

助けを求めてなのはを見たが、すずかと共に目をランランとさせていた。

それならば。つと、先ほどはやてにツツコミを入れていたアリサを見たが、

「ぎ、キリキリ、吐きなさい」

一瞬で、はやて側に回っていた。アリサの目の輝きが、本当は聞きたくてたまらなかった。つと、語っている。

逃げ場がないと悟ったフェイトは、消え入りそうな声で一言。

「…はい。事件後に様子を見に行ったら、ファン…、凄く荒れてて…。わたしで、良かったら…つて、なっってしまった、その時が、初めてです…」

フェイトが答えた瞬間、他のメンバーが黄色い歓声を上げる。言質は取った。次にみんなが聞きたいことは一つ。

「…それで、その、ファン君は、どうなの？」

メンバーの気持ちを代表して、なのはが聞いた。

「普段は…、優しいです」

顔を赤く染め、伏し目がちにながらもフェイトが答えた。

「普段は！」

「は」を、強調してアリサ。

「違う日も、あるってことだよね……」

追及の手を休める気がなさそうなすずか。

「そういうことやな……」

「うん、そう言うことだよね」

はやてとなのはもそれに乗る。

4人が視線で促すと、少し心の堰が切れたのかフェイトが続ける。

「その、初めての時は、二人とも心の余裕がなくなつて、その、……ちよつと、乱暴だったかも」

フェイトの声に、心がひかれ焦がれているようなニュアンスが乗っていた。

「へえ、フェイトちゃんは、荒っぽくされるのが、いいんだね……」

すずかがフェイトに送る視線が、猫が鼠を見るような視線に変わっていく、

「なのは。すずかを抑えておいて、何だったら魔法を使つてもいいわ」

「はーい」

アリサが、すずかからフェイトを隠すように前に出ると、なのはが笑いながら本当にバインド魔法を起動する。

ガツチン！つと、音を立てて、桃色のバインドがすずかの足に掛けられた。

「ああ！ひどいよ、なのはちゃん！」

「そうかな？適切な処置だと思っけど……」

すずかの抗議を、なのはは聞き入れず、代わりにサイドテーブルのワインを手取る。

「はい、すずかちゃん、これで我慢して」

なのはが言いながら、ワイングラスを手渡した。

「んー、残念」

グラスに注がれた真っ赤なイエスの血で、すずかは喉を潤した。

なのは達の話に加わらなかつたはやては、フェイト達の相性を考え

ていた。

(フェイトちゃんはMやな。まあ、知つとつたけど…)

話を聞いてはやてはますます心配になった。生い立ちのせいかなフェイトは寂しがりで、心配性な所がある。愛されている実感が乏しくネガティブな感情が離れない。と、言い換えてもいい。

くつついたり離れたりしている。と、なのはに見えていたのも、愛されているという実感を得ようとして、フェイトが無意識にとつた行動かもしれない。

(もし、先方が、フェイトちゃんは、「心配性なだけで、ちよつと我慢すれば、うまく付き合っていけるはず!」と、思ってくれているなら、縁が切れたりしないやろが…、モテそうやな、この子)

女にモテそうなところも、「浮気されるかも」と、フェイトの心配性を煽るのかもしれない。

「…やっぱりちよう心配やな。フェイトちゃん、浮気とかが心配になっても、いきなり疑っちゃいかんよ」

「な、ファンはそんなことしないよ…、たぶん…」

「捜査なら私が得意やから、友達に凄腕捜査官がいるからなあ言うとき。きつと抑止になるから」

はやては、フェイトの味方だと伝えるつもりで言ったのだが、上手く伝わらなかったようだ。不満げにフェイトが、言い返してきた。

「そう言うはやて達はどなの? 副長とは一回り近く離れているし、よくケンカしているようにも見えるけど?」

「私達? そうやな、たしかにビルと会うのがもう少し早かったら、こんな風になつていなかっただけかもしれないね」

はやては左手で大きくなつたお腹を撫でながら、薬指の婚約指輪を見ている。

「えっ! そうなの?」

てつきり、「年の差なんて関係あらへんし、あんなケンカの内に入らへんわ」と、返してくると考えていたフェイトが驚きの声を上げた。

「せや、まあ、それでも、こうなってるんやから、縁があつたつちゆうことやろな」

はやてがそう言うと、いつの間にかフェイト以外の視線も、はやてに集まっていた。

「じゃ、今度ははやてちゃんがビルさんを語る番だね」

すずかがムフフと思わせぶりに笑った。

83 ユングゲゼレン・アブシード（はやて）

「あんたのところの副長さん？だったかしら、八つ上だったわね？」

「そうやな、美由希さんやアミティエさんと同世代になるはずや」

結婚式のパンフレットに載っている新郎新婦のプロフィールを見ながら聞いてきたアリサに、はやてが答えた。アリサとすずかは、ヴィルヘルムと今日挨拶を交わした程度の面識しかない。

すずかは、はやてと図書館の友として特に多くメッセージをやり取りしているので、はやて越しに人となりがある程度聞いていた。が、アリサは、顎からこめかみ辺りまでのヒゲが似合う、いい年の取り方をしている男。と、いう第一印象を持っているだけだった。

それをはやてに伝える。と、

「やめてほしいわあ、ビルのやつ調子に乗ってまうやろ。あの髭かて、30過ぎて生やし始めて、最初の頃はフル・ベアードやったんや」

顔面の髭をすべて伸ばしたフル・ベアード。ヴィルヘルムは、そこからあえて口ヒゲを生やさないリンカニツクと呼ばれる髭の形をしていた。どちらにせよ、体格が良くゴツゴツとした輪郭のヴィルヘルムに似合っている。

「はあ、…そっちでも、なかなか似合っているんじゃない？」

「なにをゆうてるんや。口ひげがおうたら、チューするとき、こしよばいねん」

「あつそ（#、ω、）」

ナチュラルに惚気るはやてに、ピキる頬を鎮めようと米神を揉むアリサ。

今の会話だけでも、はやてとヴィルヘルムの関係がよくわかった。

「と、とりあえず、基本スペックから語ってもらいましょうか…」

氏名：ヴィルヘルム・チエスロツク・ケーニツヒ

出身地：ミッドチルダ南部

現住所：海上警備部幹部官舎（結婚後、はやてと同居の予定）

職歴・勤務先：海上警備部副指令（結婚後の状況によっては、退局も視野に入れている）

資格：大隊指揮官／税理士／行政書士／普通自動車免許／自家用操縦士技能証明（固定翼）／艦船操舵ライセンス（小型）

魔法術式：現代ベルカ式 陸戦Dランク（初等科のころ趣味の馬上試合の参加要件を満たすために取得。以降、昇格試験を受けておらず、実際の実力はA＋とAAの間）

趣味・特技：馬上試合、銘酒コレクション

身長・体重：191cm、82kg

家族構成：義母（父の後妻）、弟（異腹）

その他：学生時代から友人とベンチャー企業を立ち上げる。19歳の時、父に誘われ酒の味を覚える。この際「できれば管理局に勤めさせたかった」という言葉（理由は不明だが、これが遺言になる）を聞いて入局する。各世界の地上部隊を渡り歩き人脈を作る。

「何と言うかこう…、副業で稼いでいる小金持ちって感じね。婚活サイトこんなスペック書いたら、サクラと思われそうだね」

「ははは、まあ、確かにそうやな。小金は持つとるわ。投資でやけど」
プロフィールを聞いたアリサが言うと、はやてが笑いながら返した。

「あ、そう言えば、若年局員向けの資産運用の講師も務めていたよね。武装隊の新人の子も受けたって聞いたことある」

「職務に専念する義務違反になるから、副業の審査は厳しいもんね、管理局は…。武装隊は現役が短いつて言われているし…。キャリアコントロールは、学んだ方がいいかも…。なのはみたいに、管理職の方にいける人はいいけど…」

魔法の世界でも、ライフプランは重要なのである。お金の大切さはどこも変わらないな。つと、思いながらさすが聞いた。

「資格をみると、経済学をやっている人なのかな？」

「せやな、通ってた学校は経済学部っちゅう話やった」

「わあ、お母さんたちが、安心しそうな三高さんだ」

「あはは、そう言えばそうやな！よし、「三平」「三優」「三生」より、人

気ないビルを拾ったって、今度言つたら」

実に楽しそうに笑うはやてに、アリサは一言言つてやりたくなつた。

「先方の体より大きな態度とるのはいいけど、クーリングオフされない程度にしときなさい」

「大丈夫や、ビルはそんな私にぞっこんやから。…少なくとも、外見はそんなに好みやない。って、言いやがったわ。あんにやろう（怒）」

アリサの言葉に調子よく合わせていたはやてが、言葉の途中でヴェルヘルムの発言を思い出し怒り始めた。

容姿だけなんて言われれば腹が立つが、容姿を褒められないのも腹が立つ。他のメンバーもそれに同調する。

「…お仕置きした方がいいと思うよ」

「へえ、確かに舐めた発言ね」

「え、副長、そんなことなの?!」

「それは、酷いね」

順にすずか、アリサ、フェイト、なのはの発言だった。が、はやてなのは以外の発言をスルーすると、なのはと自分の胸元を見比べる。

普段は互角ぐらいだが、プロゲステロンとエストロゲンの影響で、自分の格が上がっていることを確信してから。

「よし！なのはちゃんも、そう思うやろ！」

「んんん？その「よし！」は、どういう意味かな？」

なのはだけに対する自信をみせるはやてに、なのはは笑顔を見せて青筋を立てた。

すずか達もはやての態度で察しが付いた。

「ああ…、そうなんだ」

「バツカねー、男つて」

「ふ、二人とも今のままでも、十分ある（平均ぐらいは）と思うよう」
フェイトは二人を宥めようとした。が、

「「フェイトちゃん（フェイト）平均」は、黙ってて!!」

「は、はい!!」

二人に吠えかけられ、尻尾を巻いた。

「くっそー、ビルのヤツめ。見た目だけで言えば、アインスみたいなのがままボデイ、一択やからなく」

「良くないよねー、そう言うの」

はやてとなのはが、手のひらを返して同調し、友人たちの堂々たる胸を睨みつけた。

※諸説ありますが、すずか△アリサ≡フェイト△はやて∥なのは、と、させていただきます。

アリサは、ルサンチマンを発露する二人に呆れたが、ふと先ほどはやての発言を思い出した。

「もしかして、さつき副長さんと会ったのが早かったらってのは、胸のサイズがもう少し小さかったらってこと？」

「違うわー…いや、まあ、それも含めてもつと全体的なことや」
「ほう…」

「ほら、うち等小学校の頃から局で働いていたやろ。その頃、おうていたら、多分、ビルはこつちのことを恋愛相手として見れなくなんねん」
近所にすんでいるお兄さんと慕ってくる子供。という、保護者としての視点になってしまいうらしい。

「あー、なるほど…」

「エリオとシャーリーより、離れているものね…」

アリサとフェイトは納得し、

「小学生と高校生くらいだもんね…（当時の美由希さんとユーノくんくらいの年の差か…、人×獣？いや、おね×シヨタ？あ、副長さんとはやてちゃんなら、おじ×ロリ？）」

すずかは納得したうえで、妄想を撈らせ、

「風芽丘学園3年と、海鳴中央1年ぐらいが限度だよね」

なのはは何故か頭に思い浮かんだシナリオルートを口にした。

「ん？なのはちゃん、えらい具体的な例やな？」

「あれ？なんでだろ？関西弁の女の子と、年上の男の人が、って思ったら自然と…？」

言ったなのは自身もよくわからずに発した妄言らしい。あまり気

にしていけないことなのかもしれない。

「で、お互い恋愛対象になる年齢になった二人は、どう出会ったのよ」
「全然普通や。仕事の都合で、レティ提督に文官として紹介してもら
て…」

「あ、その時の話は聞いたことあったよね？」

「うん、機動六課で副長のお休みの時に聞いた話だ」

なのはとフェイトの二人が、話を聞いた当時のことを思い出しなが
ら言った。

つられてはやても、ヴィルヘルムの勤務中と休暇中の立ち振る舞い
の差に、アタフタしていた二人の様子も思い出した。

「あんときの二人の驚いた顔は、おもしろかったなあ」

「なに、なに、何があったのよ」

「面白そう聞かせて」

はやてがその時（ノツポの副長編「副長の休日」）のことを話すと、
アリサとすずかが笑う。

「へ、へー、面白い。あんたの旦那になろうとするだけのことはあるわ
ね」

「ふふ、そうだね、いかにも勤勉で生真面目な紳士って、外見だと思っ
たけど…」

「紳士、紳士やて！はっ、ビルの本性は、紳士どころか狂戦士や。その
気になろうもんやら、動く物ならなんにでも襲い掛かって、生き血を
啜るタイプや」

今までヴィルヘルムと面識のなかった友人達には、はやては熱弁をふ
るう。余りの熱の入れように、六課時代には事務処理で世話になつて
いた管理局員の二人は、普段献身的にはやてを支えているヴィルヘル
ムに同情した。なのは達が遠慮がちに、はやてを宥める。

「何もそこまで言わなくても…」

「う、うん、はやてちゃんも普段お世話になっっているでしょう」

「世話になってるんは、勤務時間中だけや」

言いながらフン！っと、鼻を鳴らすはやて。

鼻息を荒くしたはやてに、アリサとすずかが含みのある質問をす

る。

「へー、勤務時間外は紳士とは、いいがたいってことね？」

「はやてちゃんはその狂戦士を目の当たりにした時、どうだったの？」

「そうやな、ビルが本性剥き出しにしたんわなあ。機動六課解散から1年ぐらい経ってからやったから、出会って三年強やな」

はやてが口惜しげに言っけて口をへの字に結ぶ。今にもハンカチを噛んで、キーツ！と叫びそうな表情に、アリサは口元を緩めおちよくろうとしたが、さすがが自分の口元に人差し指を当てる仕草で止めた。

弄るのは話を聞いた後で…。と、言うことらしい。

「そんなときは本局で部隊の立ち上げなんかを勉強させてもろてる時でな。ビルのヤツも本局への用事のついでに、私の個人オフィスに顔を出したんや」

他の四人がうんうんと頷いて、続きを促す。

「そんな頃は、ちよう忙しいところで、連絡は取り合っていたんやけど。直接会うんわ2カ月ぶりやったから、なんやか盛り上がってしもて…」
言っているはやての口元が緩んでニヤけ始めた。つられて他の四人もニヤニヤと笑い始める。

「…そしたら、その、ガバっと…」

「ガバっと！いい、いきなり！」

「んっく！オフィスかく、うんうん」

「えー、勤務中に?!」

「そ、それは、服従違反じゃあないかな！」

興奮するアリサ。

共感するすずか。

動転するなのは。

平静を保とうと規則を持ち出すフェイト。

「気が付いたら課業時間が終わってたからセーフや。それにさすがに、そんなところでされたら、次の日から仕事が出来なくなってしまうから、ここじゃ嫌やつちゆうたんやけど…」

「やめてくれなかった。っと」

目を光らせたすずかがすかさず合いの手を入れる。

「うん、ちゆうか、そのオフィス。仮眠室がある部屋やったから。こう、横抱き…、お姫様抱っこで…」

はやてが手の平を上にして、持ち上げるようなジェスチャーをつけながら説明し、すずかが捕捉する。

「ご案内されちゃったんだ〜」

頭をかきながら、はやてが答えた。

「…はい」

「「おおー!!」」

三人があげた歓声が滑稽な残響になったころ、すずかがさらに踏み込む。

「で、どうだった?」

聞かれたはやてが口をωの形に変えて、もによもによと口籠ってから、意を決したように…、

「…殺される思った」

答えるはやて。

「いいガタイだとは思ってたわ」

「それに、年上さんだもんね」

「そっか、副長が…」

「は、激しいんだ…」

納得するアリサ。

感じ取るすずか。

慮外に思うなのは。

目を回しかけるフェイト。

「と、言うより、飛ばされる」

はやての捕捉に、女たちは甲高い声を上げた。

すずかがはやてを抱きしめ、

「頑張ったんだね。はやてちゃん」

「ありがと、すずかちゃん。でも、頑張ったんは、そこからや」

「ええ！」

「ふふふ」

「うん、うん」

「あうう」

Σ(。∩。∩)、アリサ。

(ΦωΦ)、すずか。

(´・ω・´)、なのは。

((; ∩))、フェイト。

「あまりに、一方的やったんでな」

そこで言葉を切ってはやては続けた。

「夕食を挟んで、再戦を…」

「『おおー』」

ぐぬぬ。つと拳を握ってはやてが言うと、四人は驚嘆の声を上げ、キラキラ視線をはやてに向けた。

四人に視線を向けられたはやては

「…」

しばし沈黙した後、

「すいません。見栄を張りました。…まあ、食事前よりは善戦した。…とは、思うんやけど（なんや悟りが開けた気がしたんよ）」

はやての言葉の勢いが尻すぼみになった。聞いた四人は苦笑する。

「それは仕方ないよ、初めてだったんだから。（一回だと、気が昂ぶつて、興奮が冷めないからね）」

「そうね、再戦を挑んだだけでも大したもんだわ。（身体を動かすのが億劫になるのよね）」

「はやてちゃん、そういうところでも、負けず嫌い何だね…（優しい気持ちになるんだけどな）」

「それでも凄いや。はやては…。（罪悪感でいっぱいになって、すぐ寝てしまうから…）」

皆はやてを宥めるような言葉を口にしたが、はやてには全員の認識が絶妙にズレているような気がした。

…が、今はたいした問題ではない。

「ま、もちろん、今は一方的なんてことはあらへんけどな。おかげで、こないな塩梅や…」

言いながらはやては二ヘツと、閉まりなく笑うとお腹をなでた。ヴィルヘルムには、3人という数しか教えていないが、全て女の子だということがわかつている。ヴィルヘルムとヴォルケンリッターはいろいろ名前を考えているようだ。

なかでも一番頭を悩ませているのがヴィルヘルムで、性別を知らない為男の子の名前も三つ考えているようだ。

名前のつけ方については、はやての考えているプランが一つあるのだが、もう少し黙っていようと思っている。

そのことを、同級生に伝えると、アリサとすすすが、

「相変わらずね、あんたは」

「ふふ、でも、ビルさんは楽しんでると思うよ」

と、言い。

「そうだね、二人はきつと喧嘩するほど仲がいい夫婦になりそう…」

なのはがそう言つて、微笑む。

「ありがとう。なのはちゃん」

言いながらはやては四人の様子を伺う。フェイトとすすがは果実酒とワインを結構な勢いで飲んでいたし、アリサとなのはも二人に付き合つて、ほろ酔いになっている。

そろそろ、今日話したことの責任は、お酒に持ってもらってもいい頃合いだ。

「じゃあ、最後に…3人のことを聞こうか…」

そう言つた瞬間、普段よりもハイペースで飲んでいることで、下りかけていたフェイトの瞼が閉店時間を延長した。

「…。」

無言ながらも、フェイトは目を大きく開いて友人たちを見た。

はやてが質問を続ける。

「3人も、なんで、おっしょーと関係を持ってんねん？」

84 バチエロレット・パーティー（アリサ&すずか）

「3人とも、なんで、おっしょーと関係を持ってんねん？」

はやてがそれを口にした途端、

「…なんでこうなったのかしらね。…本当に」

アリサは、おでこが急に重くなったかのように、両手で支え重さに耐えるようにうめき声を上げた。

「…困っちゃうよ…ね？」

なのはは当惑の苦笑を漏らした。

「ふふ、わたしは結構いいと思っっているけどね」

しかし、すずかだけは、上機嫌に笑いながら続ける。

「それに、アナタの出身の世界だと、お嫁さんは3人までOKみたい」
「OKで、いや、そういう文化もあるかもしれへんけど…（あ、呼び捨てなんや…）」

ニコニコと笑いながら答えるすずかに気おされ、はやては助太刀を求めてなのはとアリサに視線を投げたが、二人ともまだ懊悩していた。

「フェイトちゃんやったら、どう思う？」

「ムリだよ。…わたし、要らないんじゃないか。…って思っちゃう」

「そうやな、私も独り占め出来へん男は、ちよつと…」

はやてとフェイトがそんな会話をしていると、間に挟まれていたアリサが顔を上げた。

「わたしだって、そう思ってたわよ!!…しかも、あいつ、パツと見、普通の癖にい〜」

身悶え頭を掻きながら、エイブラハムを貶すアリサ。つやのある金髪が跳ね回るのを見ながら、

「普通に見えるところが、アナタくんの怖い所だよね…」

苦笑を消さずに、なのはが続く。

「顔の傷がなきやそうかもね。技術と経歴は結構すごいと思うけどね」

さすがが笑顔でエイブラハムのプロフィールを口にした。

氏名：エイブラハム・ハーベイ（友人に名乗る名前は、アナタ）

出身地：管理外世界「マガフ」

現住所：ミッドチルダ北東部

職歴・勤務先：民間警備会社「グリズリーAPC」（最高評議会調査室のダミーカンパニー）

資格：大型自動車免許／大型特殊自動車免許／1級船舶免許／大型二輪免許／情報処理系の資格複数（ITストラテジスト、情報処理安全確保支援士など）

魔法術式：現代ミッドチルダ式 陸戦Bランク

趣味・特技：プログラム組立・解体、暗号解読、武芸全般

身長・体重：171cm、71kg

家族構成：二種の重婚的内縁（なのは、アリス、すずか）、すずかとの間に娘あり

その他：管理外世界「マガフ」の内乱の際に孤児になり、NGOキャンプ、研究施設？を経由して、後にマガフ暫定政府になるゲリラ部隊に拾われる。内乱平定後、民間軍事会社「静かなる蛇」に所属。師匠に当たる女戦士イレインの死去を切っ掛けに、フリーランスとして各地を転戦。この頃（新暦64年の春〜夏頃）、神埼玖遠の墓参りに地球に訪れている。現在、民間警備会社「グリズリーAPC（arms & personnel carrier）」に入社。

「すずかちゃんは…、おつしよーと…、子供までつくってん…」

「うん、ちゃんと生んで、育てているよ？」

話を聞いた当時の衝撃を思い出し、途切れ途切れに言うはやてに、すずかはそれがどうかしたのかと答える。それを隣で見ていたのは、すずかの姉月村忍が兄の恭也との関係を語ったときに似たようなことを言っていたのを思いだした。が、

「…お、おふ、そうやな…」

はやては、自分の親友が自分よりも更に上の次元に立っていること

に恐れ戦いていた。はやてに代わり、フェイトがなのはとアリサに聞いた。

「…えーっと、改めて聞くけど、二人はしずか（しずかの娘）のこと、どう思っているの？」

「前に言ったことがあるかもしれないけど、自分が生んでなくても、子供が増えていく感じ？ ヴィヴィオを迎え入れた時と同じかな？」

「…悔しいけど、可愛いわ。4人で作った子供みたい…」

「そ、そうなんだ？…うーん、わたしもヴィヴィオにママって言われるのは好きだし…」

少しだけ理解を示しそうなフェイトに、一人だけ低次元に取り残されそうになったはやては、慌てて話題の修正をした。

「そうやー3人とも、おつしよーと知り合ったのは、儀礼艦ベルソー拿捕事件の時なんやろ、そんな時から、ええな。って、思ってたん？」

「最初の印象ってこと？ ヴィヴィオ達が道でぶつかって怪我させちゃったって、連れてきたのがアナタくんだったから、優しい人で良かったーって感じ？」

「そうだね、雫も興味を持ったみたいだったし、面白い人だなーって思ったかな？」

なのはとすがが懐かしそうに笑いながらこたえたが、アリサがフンツ！と、鼻を鳴らした。

「あたしは何も思わなかったわよ。モブ！以上！」

先ほど掻き毟った髪を整えながらアリサが断言する。

「それは、それで、かえって興味あるけどな？ フェイトちゃんみたいに、なんや切っ掛けとかあったん？」

「あ…、事件の時、一時的に記憶を取られたって言ってたよね。それを取り返してくれたから…、とか？」

はやてがアリサに質問し、フェイトもそれに続く。

「そうだったらしいわね。でも、その時の記憶なんてないの」
手櫛で髪を梳き続けながら、アリサが二人の質問に答える。

「まあ、感謝はしているけど、記憶にないことで恋なんて出来ないでしよ」

梳いた髪の感触に納得いったのか、最後に髪をサラリと跳ね上げてアリサは言った。

「つまり、他に恋するようなことがあったんだ…」

「うっ…」

フェイトが素直な感想を漏らすと、アリサは急所を突かれたようにうめき声を上げた。

「ふっふん！言うてみ、言うてみ…」

「…くっ！なんで、そこまで、言わなきゃいけないのよ！」

顔を赤くしたアリサは拒もうとしたが、

「私とビルの赤裸々な話を聞いたんやから、皆んのも聞かな、つり合いとれへんやろ」

言いながらはやては口元をニイツと吊り上げた。

「…あんた！」

ここにきてアリサは、はやてがヴィルヘルムとの仲を赤裸々に語った理由を理解した。相手の事情を聞き出すのに、「私は言った！アンタも、吐け！」と、言う口実の為だったようだ。

「…ッ！」

あんたが勝手にしゃべっただけだろう。と、言えばそれで終りだと分かっていながら…。友人とは対等でいたいと思ってしまうのがアリサ・バニングスと言う女だった。

「分かったわよ。って言っても、大学の時にトラブルを幾つか解決してもらっただけよ」

話し始めたアリサを見て、はやてどころかなのはが妙なニコニコ顔をし始めたので、アリサは二人を一度睨みつけた。

「大学のゼミで知り合った女の子に、女だけのグランピングに誘われたことがあってね」

「………？」

聞きながら、はやてとフェイトは視線を送り合った。

明朗快活でスツキリとした性格のアリサが珍しく憎々しげな語り草だったからだ。

「その子、学内で2番目の才女で、あんまり交流なかったんだけど、他

にも知り合いがいたから参加することにしたの…」

アリサは、いまましいげに、上あごに付けた舌先を勢いよく離して音を立てるあまり品があるとは言えない動作、舌打ちをずっと続けた。

「その子が出した車で、数人の女の子たちと山奥の会場まで出かけて、さあ、そろそろ、夜も更けた」って、頃合いよ…」

「……」

一度、言葉を切り、

「車に満席の男どもが、到着したってわけ。しかも、その男どもいい噂の聞かない連中よ」

「…え、それって!」

「……!」

人気のない山奥に年頃の娘。そこに押し寄せてきた評判の悪い男たち…。この話を聞いて良い想像をする者はいないだろう。

「(懲らしめた)後で、その子に聞いた話だと、成績が首席だったあたしが心底気に入らなかつたらしいわ」

アリサは到頭、吊り上げた口元から犬歯を剥き出しにしてから言った。

「慎み深い日本人と違って、アナタならこの数でもお相手できるでしょうですって…! 下品に笑いながら、あたしだけを置いて帰っていったわ…。あの女!」

固唾を飲んで聞き入るはやてとフェイトの顔を見て、アリサはニヤリッと笑った。

「悪いんだけど、なんにもなかったわよ。その後すぐ、アナタが迎えに来て帰ったから」

「あ、な〜んだ」

ほつと息をついたフェイトだった。が、はやては、アリサの意味ありげな笑いの中に、惚気の緩みを感じ取った。

はやてが、視線をすずかとなのはに投げる。

「その時、アナタがバイクのアクセルターンで、砂利を跳ね上げて男の子を追っ払った姿に、クラッと来たんだっけ?」

「わたし、この話、19回目」

はやての視線に答えて、すずかとなのはが暴露する。

「な、…ちよっ！な、何言ってるのよ、そんなわけないでしょ！だいたいの、アナタが来たのだから、拿捕事件後の影響の調査で監視していただけで…」

「魔法や管理局と関係のないことでも、飛んで来てくれたんだもんね。お仕事優先なら不干渉なのに…」

管理局の立場と方針は、アリサも理解しているでしょう。と、なのは。

「そ、そうなのかもしれないけど…。男どもに追われていたあたしの元に着いた時だって、「門限はとっくに過ぎていますよ、お嬢様」よ！もう少し気の利いた台詞吐けて気がしない？」

「はいはい、その後、ちよつと落ち込んでいたアリサちゃんを連れて、朝日の綺麗な海までタンDEMでツーリングしたんだっけ？不器用だけど、慰めようとしているのは伝わったんだよね」

なのはに続き、すずかも他人には話していない秘密を漏らした。

「…ッ！」

女の秘密は信用ならない。そのことを痛感しながら、アリサは話した過去の自分を恨んだ。

「じ、じゃあ、アリサは、その時、その…」

「そんなわけないでしょ！その時から、ちよつと意識し出したってだけで…、いきなり、そんなことしないわよ！」

フェイトもかなり酔いが回ってきているようだ。酒だけではなく、場の空気にも…。心のタガが外れてきているのがいい証拠だ。

それは、素面のはずのはやても例外ではない。

「じゃあ、いつなん？」

はやてが更に追及する。と、

「それは、わたしに係わる騒動の時かな」

すずかが語り手として参戦した。

「お、確か、大学の卒業旅行で、ヨーロッパ旅行をした時の話やったっけ？」

「うん、月村の親族に安次郎って、おじさんがいて…」

「さすがが左上の方向に視線を向ける。その時のことを思い出しているのだろうか…」

「EUの中で暮らしていて、あまり縁のない人だったんだけど…」

「さすがの眉が寄っていく、しかし、嫌悪している表情と言うより、幻灯のなかのぼんやりとした光景に何とかピントを合わせようとしているかのような顔だ。その様子から、さすがの中ではすでに興味が薄くなった人物だと言うことが分かる。」

「そのおじさんが、折角ヨーロッパに来たんだから会いに来て、さすがを呼び出したのよ…」

「おじの顔を思い出そうとしているさすがの代わりにアリサが言うと、さすがは安次郎の顔を思い出すのを諦めたようだ。」

「うん、まあ、親戚だし、顔を出そうと思って、わたしだけで会いに行っただけけど…」

（…確か、任侠映画の卑屈な中ボスとかに、配役されそうな人だったよね）

「安次郎の姿を知っているのはが、その容姿をそう評価した。辛口になっているのは、事情を知ってしまっているからだ。」

「勧められたお茶を飲んだら意識が遠くなって…。気が付いたら、よくわからない富豪のお爺さんと結婚させられそうになってたの…」
「えっ！」

「要約すると、事業に失敗した安次郎の借金の形代わりにされかかった話を、何でもなしのことのようにさすがは話した。が、当然ながら、はやてとフェイトは驚きの声を上げた。」

「ひと悶着があったとは聞いていたが、そんなことになっていたとは…。」

「あの時は、心配したのよ。約束の時間を過ぎても借りてたコテージに帰ってこないし、携帯にも出ない」

「ごめくん、意識がなくなる前、咄嗟にアナタに電話したみたいなんだけど…」

「折り返しても、電話に出ないって、あたしに連絡が来てね…。そっか

ら、アナタも交えてすすかの大搜索よ」

「見つけてもらった時には、ウエディングドレスを着せられていたんだけどね」

ムスツとした顔で話すアリサに対して、すすかはニコニコと笑って、いい思い出と言わんばかりだ。

「それで、アナタにウエディングドレス姿のまま連れ去ってもらったんだ」

顔を高揚させて、興奮気味に話すすすか。

薬を盛られて、拉致されたことは、どうでも良いことのようなだ。

「ビックリしたわよ。待機していたコテージにいたら、花嫁が来たんだもの」

「うふふ、映画のヒロインになった気分だったわ」

「良く笑ってられるわね。あの後大変だったじゃない。結婚式のキャンセル代だの、相手に対して慰謝料だの」

「そうだけど、私の自由意思で結婚に同意したわけじゃないし」

最終的に安次郎が責任を取らされることになった。

ごつくて怖いお兄さんたちに何処かに連れられて行く安次郎の映像を、エイブラハムがどこからか持ってきた所でこの話は終りのようだ。

「花嫁を連れ去るから、映画なんかじゃ名シーン何やけどね」

「双方の同意を得た後の結婚だと、幾つかの法に引っかかるね。略取、誘拐の罪かな？まあ、それ以前に、すすかが誘拐されているんだけど」

はやてと、フェイト、法律の番人が頬をかきながら言った。

「そうかもね。…で、折角、奪ってもらったんだから、最後まで奪ってね。って、責任を取ってもらったの」

指を組んだすすかがなまめかしく微笑む。

「ツ！ツ」

それを見て4人が息を飲んだ。

同性の彼女たちですら、色香にあてられて、自分を失ってしまいうだ。

(こ、これはあかん…)

すずかの妖艶な姿に、はやては恐怖すら覚えた。男がこの空間にいたら一呼吸で致命傷になってしまいそうだ。

「ふふ、よかったよ。…ね、アリサちゃん」

すずかが視線に蜜を塗ってアリサに投げた。その蜜には依存性のある毒が含まれている。

アリサが、すずかからの視線を外せずに、みるみるうちに真っ赤になった。

「…え？」

意味が分からず、フェイトが小首を傾げると、

「…ちよつと、声が大きかったみたいで…。アリサちゃんが心配して来てくれたの。見守ってくれていたんだよね…」

「え！そ、そこまでは、聞いてないよ！」

なのはが驚いた声を出した。つまり…

「アリサちゃん、覗いてたん!?!」

「…アリサ、…えっち…」

はやても驚きの声を上げ、フェイトが小声でつぶやくように言う。

「なっ！…し、仕方がないでしょ!!夜に、隣の部屋で、あんな大声だったから、目が覚めちゃったのよ!」

すずかと合流した晩、休んでいたコテージに響いた嬌声で、叩き起こされたらしい。

「ごめんね。でも、その後のアリサちゃんも、結構、大きな声だったよ」

赤面したまま反論を試みたアリサに対し、嗜虐的な視線を向けるすずか。

「え、え、え」

「その後って、その後って…」

「それは、まさか、さ、3ピ…」

すずかの視線に反応したのは、むしろ聞いていたのはとフェイト

とはやてだった。

「そのまま、3人で延長戦」

さすがが言いながら、はやて達にも視線の蜜を投げた。なのはとフェイトが言葉を失い、はやてがすすかだけではなく、アリサに対しても戦慄を覚える。

「アリサちゃんに、そんな…癖が…。じよ、上級者！」

「あはは、そうだね」

「やかましい！癖はないわよ！」

笑いながら肯定するすずかに、否定するアリサ。

「…でも、歴は？」

「…ッ！」

しかし、はやてが問うと、アリサは言葉を詰まらせた。そのまま、アリサが恨みがましい視線をすずかに向ける。

「…あ、あ、アンタのせいで！アンタのせいで！あたしの歴はめっちゃくちゃなのよ！」

「えー、アリサちゃんだって、途中から楽しんでたじゃない」

やり合う二人に挟まれながら、はやてはふと思った。二人はほぼ同時だったようだが、なのはの時はどうだったのだろうか？

はやての視線が、なのはのほうに向いた。

85 スタゲット (なのは)

はやての問いを乗せた視線に、なのはが答えた。

「え、わたしの時？アクロバティックなことなんてなくて、全然、普通だったよ」

「アクロバティツ…、むぐ…！」

アクロバティック、普通の人にはできないような、人を驚かせる離れ業。と、言われ反論を試みようとしたアリサの口を、フェイトが塞いだ。そのまま、アリサを抱きかかえるように身動きを取れなくなる。

酔っているせいか、フェイトの手元がくるって、鼻まで塞いでしまっているのはご愛敬。

(まあ、あと一分くらいは、大丈夫やろう…)

話を邪魔されなくなかったはやては、そう判断してアリサを助けなかった。

「ほう、普段、アクロバット飛行をしている人とは思えん発言。なのはちゃんの普通とはどないなん？」

「え、えっと、事件の時に、なんだか、放って置けないって思ったのが、最初で…」

なのはの話にさすがが相槌を打つ。

「あの頃、わたし、J S 事件の後遺症が出ていた頃で、アナタ君に針治療してもらったら…、それがとっても効いて…」

自分の左腕を突っつきなら、なのはは説明する。

「事件のあとも、治療してもらったために会ったり…、アナタ君も拿捕事件のときの無理がたたって体調が優れなかったみたいだったから、わたしが無理のないトレーニングプランを組んであげたり…。それに、ヴィヴィオが、高町ヴィヴィオとして生きること、尽力してくれて…」

なのはが懐かしそうに語ったのは、事件後の日常の積み重ねだっ

た。

(フフン?一人の女性としてだけでなく、ヴィヴィオのママとしての評価も入っているんやな)

はやては、翌日の結婚式内で似たような二人の馴れ初めLOVESピーチを行うにもかかわらず、むずがゆさと、ワクワクを感じて思わず聞き返した。

「ほう、そうやって、会う機会が増えてったと!」

「う、うん、わ、わたしも…その、不器用だけど優しい人なんだなって思ったら。…この人ならって…」

なのはが顔を赤らめ照れ隠しに、えへへと笑いながら頭をかいた。

「かわいいかよっ」

思わずはやてがそう言うと、

「うん、うん」

フェイトが頷いた。はやてがフェイトに視線を向けると、アリサが違う意味で顔を赤くしていた。

「あ、フェイトちゃん、アリサちゃんが息できてないみたいだから、放してあげて」

「ふえ?」

指摘されフェイトの気が緩んだ瞬間、

「だああ!!」

アリサが全力でフェイトを振り払った。そのまま、あえぐように酸素を取り込む。その様子でフェイトはようやく、自分がアリサの呼吸を封じていたことに気が着いたらしい。

「ご、ごめん、アリサ!!」

「ごめんですんだら!管理局も、執務官も要らないのよ!」

フェイトは慌てて謝ったが、酸欠から回復したアリサに、頬の引き伸ばしの刑に処された。

「ひひゃい、ひひゃい、ひよめんひゃひゃい」

半泣きになって謝るフェイトの声を聞きながら、はやては再びなのはに視線を戻した。

「…で!」

「で。つて…？」

はやての問いに、なのはが聞き返す。

「せやから、おっしょーとの、始めては、どないやったんや。まだ、言うてへんやろ」

「い、言うの？」

「当然や…」

静かだが絶対に退く気配を見せないはやてに、なのはは躊躇いながら口を開いた。

「わたしも、…気が付いたら、…大好きって言いながら、アナタ君の名前を大きな声で…」

そこまで何とか口にしてなのはは、はやてを訴えるように見た。これで勘弁しろと言うことらしい。

なのはに上目遣いで見つめられたはやては、可愛かったので許すことにした。続けて質問する。

「ちなみに、なのはちゃんが、おっしょーとそないな感じになったのは、いつ頃なん？」

「事件があつてから、1年後ぐらいかな？」

なのはが答えた辺りで、騒いでいたアリサ達の声が止む。二人も話に耳を傾けることにしたようだ。

「なるほど、なのはちゃんが、一番最初なんやな…？」

はやての眉が寄り、眉間に皺を作る。その仕草からははやてが何か聞きに難いことを言おうとしていることを、察したなのはが無言で待ち受ける。

「…」

「聞いても、ええ？」

「…どうぞ」

問いに、なのはが返事をする、はやてが口を開いた。

「すずかちゃん達のことを打ち明けられたとき、なのはちゃんはぶつちやけどう思ったん？」

「ええ、嘘でしょ。つて、思ったよ」

「そうやろなく」

渋柿を齧ったような顔で、はやてが頭をかきながら言った。自分だったらどうだと考えて、上手く気持ちを言語化できないようだ。そこになのはが続ける。

「混乱する一方で、「すずかちゃん達だったらアナタ君が好きになっても仕方ないな」という気持ちもあつて…。アナタ君も生まれた世界の風習が、風習だから悪気が全然ないの…。そういうことをした相手は妻にするのが決まりみたい…」

言いながらのはは口を尖らせた。4人で良好な関係を保てているが、嫉妬や独占欲と無縁でいるわけではないようだ。

「わたしが「二人のことを好きにならないで！」と言ったところで、アナタ君の気持ちが変わるわけじゃないから。アナタ君を選んだのはわたしだし、ありのままのアナタ君を受け入れようと覚悟を決めたの」

「すごい覚悟やな…。ま、まあ、3人が納得しているなら、それでええんやけど…。そんなん、恭也さんが聞いたら、おつしよーを手討ちにするって言いそうやろ？ どうやって、説得したん？」

はやてが話題を、シスコン気味のなのはの兄に変えた途端、なのはの顔がムツとした無愛想な表情に変わった。そのまま、そつぽを向く。

明らかに不機嫌な様子が伝わってくる。はやてが目をぱちくりさせていると、

「はやて、それなのはには、タブーだから」

「え、そうなん？」

はやての感覚では3人同時に関係を持っているエイブラハムのほうが禁句になりそうに思えるのだが…。

「わたしとアリサちゃんも、アナタ君と、そういう関係になった。つて、恭也さんに話した時に、恭也さんも驚いて、そういう関係は不健全じゃないかって言ってたんだけど…」

いったん言葉を切ったすずかが鋭く笑った。少なくとも、はやてにはそう見えた。

「そんなかんじで、なのはちゃんとアリサちゃんのご両親も反対はしてないかな？ 積極的な賛成もできないと思うけど…」

「そうなんや、…ッ!？」

「SANチェックを成功させたはやては納得しかけて、あることに気が付いた。」

（なのはちゃんの話聞いていたのに、話の中心がすずかちゃんになつとるな…。これって、おしよーが、3人をはべらせているんやのうて、両方いけるくちのすずかちゃんが、おしよーと2人をはべらせているのでは…）

すずかが、なのはを抱き寄せ、頬にキスして不機嫌を直そうと宥めている姿を見ながら、そんなことを考えていると、すずかと目が遭った。

「どうしたの？ はやてちゃん?…」

「ううん、何でもあらへん」

思っていたことを、表情に出さずにはやてが話題を帰る。

「…すずかちゃん（すずかの娘）、そろそろ、1歳やったっけ?…」

「まだ、9カ月だよ。つかまり立ちをし始めたから、リビングのテーブルの上が安全地帯じゃなくなっちゃった」

そのテーブルの上を荒らす御前様は、現在、父親が子守をしている。「と、なると、うーん、この子っちは、同級生にはならへんや」大きくなったお腹をなでながらはやて。親友の子供と、自分の子供が同級生と言うのも悪くないと思っていたが、そううまくいかないらしい。

「あ、すずかは、静馬くん（美由希の息子）と同級生になるんだけどな」

すずかが指を下り数えると、アリサに言った。

「アリサ社長、来年も産休いただいてもいいですか?…」

「ぶっ…!…」

聞いたアリサが口にしていた果実酒を嘔き出し掛けた。計算上、早生まれなら、まだ、間に合うかも? と、考えたすずかの発言だったが…。

アリサは少し咳き込んだのち、すずかを自分の会社の役職名で呼んだ。

「システム部長、次はあたしか、なのはの番って言ってなかった？」

現在、アリサは父のデビットから任された子会社の社長をしており、すずかはその会社の執行役員である。

「それなら、それでいいの。どう？アリサちゃん」

「ん、んん、今からだど、今年度末頃になるでしょ、社長的に…、それはちよつと…」

年末に役員が抜けるのは業務に響く、欲しいと思っけていても時間がない。残念ながら働く女性の現実である。

「なのはちゃん、フェイトちゃんも予定は？」

すずかは、民間社長の苦労も分かるので、公務員に話を振った。

「そ、そうだね。来年度でヴィヴィオも中等科卒業だからなく、そろそろ、欲しいかも？」

「え、あ、そうだね。ヴィヴィオなら、いいお姉ちゃんになるね」

なのはの希望にフェイトが頷いたが…。

「でも、ヴィヴィオ、卒業と一緒に家を出るかも…」

「え、えええええええ、き、聞いてないよ!!」

なのはの言った未来のカタチに、フェイトが悲鳴に近い声を出した。

「うん、わたしもはつきりと聞いてない。でも、アインハルトと、ルームシエアすることも考えているみたい…」

「で、でも、中等科卒業したばかりの子が、友達と二人暮らしなんて…」
なのはが娘が思い描いている構想の一つを口にすると、フェイトが子離れできない親のようなことを言い出した。

「フェイト、あたし、中学卒業と同時に、家どころか地球を飛び出して言ったやつ、知ってるんだけど…」

「そうだよね、その子も、確か友達とルームシエアをして二人暮らしから始めたんだよね？」

アリサとすずかが意味ありげな視線を、なのはに投げつける。

「にやははははー!」

身に覚えがあるのはが笑った。

「え、あ、そ、そうか」

「そら、そうなるわ」

元々、管理局世界の住人のフェイトや、家族ごと移住したはやてにくらべると、たった一人で時空を超えたなのはほとんどでもない肝っ玉に思える。その肝っ玉はヴィヴィオにしっかりと受け継がれている。

しかし、

「でも、いぎ、ヴィヴィオが出て行っちゃったら、寂しくて泣いちゃうかも…」

眉を下げなのはが、本音を言った。

「…諦めなさい！桃子さんも通ってきた道よ。アンタの順番が回ってきたの！」

アリサが語気を強めて言う。多分励ましの言葉なのだろうと、なのはは何とか口元だけを笑みの形に変え、

「にやはは、そうだね…。うん」

はやては、なのはの表情を見て、

(あ、これは今度海鳴に帰ったとき、桃子さんに甘えよ思ってる顔やな…)

早くに親をなくしたはやては、なのはに憧憬の念を抱いたが、話を少し戻すことにした。

「まあ、子供は授かりものやから。生まれてくるタイミングはしゃあないとして…。みんな、何人欲しいとかあるん？アリサちゃんなんか、お仕事が忙しそうやけど…」

「え、ああ、さっきのは、年度末はちよつとつてだけで、欲しくないって思っているわけじゃないわよ。それに、その…」

自分の本心を語るのが恥ずかしくなったのか、アリサは視線を少し泳がせながら続ける。

「あたしって、一人っ子だったでしょ。姉妹とか、兄弟って欲しかったのよ」

「そうだね、家に帰ったときに、一人っで結構寂しいもん。わたしもヴィヴィオを外で迎えて帰るようにしてた」

アリサの答えに、なのはも同意する。

「ほう、じゃあ、なのはちゃんとアリサちゃんとは二人以上は欲しいと…」

はやてが頷く。

「わたしも、あと一人か二人は欲しいかな？おねえちゃんを見ていると…」

さすがが姉の月村忍と3人の子供たちのやり取りを見ていると、そう思うことがあるようだ。

「私が欲しいって言ったたら、ファン、喜んでくれるかな？」

フェイトは少し不安のようだ。相手のことや自分の生い立ちなど、色々考えてしまうようだ。

「大丈夫やて、ビルを見てみい。顔に出してへんつもり見たいやけど、今めっちゃ浮かれてるんやから…。それこそ、ほれ、産むが易しつてもんや…」

はやてがあっけらかんと笑う。いきなり三つ子を妊娠しても、どんと構えているはやての様子に、フェイトも安心したようだ。

「はやては…、その子達の後のことは、考えているの？」

フェイトが聞き返してきた。

「うーん、ビルに言っつてへんのやけど…。この子達みんな女の子なんや」

はやてが言うと、皆が軽く感嘆の声を上げる。

「でも、ビルは男の子もほしい思ってるんや。しばらくは、この子つちに掛かりきりになりそうやけど、落ち着いたら再挑戦してもいいかもなあ」

はやてが笑みと共に言うと、皆が冷やかしの声をはやてに掛ける。それをさばきながら、

「ま、要望に答えてやるかどうかは、これからのビルの態度によるけどなあ」

エネ夫になるようなら、絶対に泣かす。と、はやてが息巻く。それにさすがが加勢した。

「あ、それ言ってるかも、アナタは普段は殆ど会えないし…」

「それねー、まあ、まめに連絡は寄こしているけど…」

「そうだね、でも、アナタ君のメッセージの内容って、淡泊じゃない？」

「あー、それねー」

「あ、おつしよーも、そうなん？ ビルのヤツ、渾身のネタメッセージをスタンプ一つだけですませよって!!」

「はは、副長もどう返したらいいか、分からなかったんじゃないかな？」

「そうか？」

「わたしは、既読が付かない時の方が気になっちゃう。」

「何かあったんじゃないかと心配になっちゃうよね」

「そのあとのフォローもないのよね。こっちがどれだけ心配してるのかわつかんないのかしら!」

「心配と言えば、タバコもやめてくれないし…」

「あー、キャンディー銜えているけど、服からタバコの匂いさせていることあるわねー」

(キャンディーが効果がないのは、なのはちゃんかキツスの小道具にしちゃうからじゃないかな?)

「フアンはお酒かな？ 飲み過ぎちゃうことがあるから…」

「そんならビールは」

あれもこれも、そっちもこっちも…。

一度言い出したら、出るは出るは男の愚痴。女たちは散々相手を貶した後、いざとなったら男を叩きだして、女だけで一緒に住もう！と、笑いあつたところで就寝となった。

翌日、バチエラーパーティーの影響で二日酔い気味のヴィルヘルムが酔い覚ましを求めて、「湖の騎士」シヤマルを尋ねると、ゆったりとした普段着姿のはやてが、瞼を重たげに診断を受けていた。シヤマルがカルテに何事か書き込んでから、はやてに釘をさす。

「はい、異常なし。ただし、寝不足には要注意!!」

「は〜い」

しまりのない返事をするはやてを見て、ヴィルヘルムが言った。

「眠そうだな。それとも頭に葉っぱを乗せ忘れたのか？」

聞いたはやてがニヤリと笑う、

「そういうビルも、フロックコート（王子様の礼服）を着てないんやな？」

「昼までには、着こんでおくさ。乞食に見られないように……」

「私かて、取って置きのお葉っぱを用意してあるからなく。ビルかて、しつかり騙したる」

自信ありげな表情で笑うはやての様子に、マリッジブルーで気持ちが悪んでいたりしてはいないようだ。と、ヴィルヘルムは安心した。

「ん、どうやら、すっかりガス抜きは出来たようだな」

「うん。もちろんや、昨日の女子会の内容……知りたいい？」

「絶対ごめんだ。女の口から出るモノは男にとっては猛毒だ」

「こんなやり取りをしながらも、はやて達の結婚式はつつがなく執り行われた。」

Force編 特務六課 ノツポの副長
86新八神さんちの日常風景 上

「ラハイマルおろしに 颯爽と」

キッチンで食洗器の規格にあわない食器を洗っていたヴィルヘルムは、聞こえてきた二つの歌声で本日のハーリングの試合結果を知った。

「ああ、今日は早寝できそうだな」

妻のはやてが鼻屑にしているチームが負けた日は、その愚痴に付き合わされるヴィルヘルムは、ハーリングチーム『マコンティアズ』の勝利に安堵していると、三女のゾイが不満の声を上げた。

「ええっ！キングスが負けた時って、王様、寝言でびえんするんだけど…」

「ん？お前たちも寝不足か？」

子供の睡眠時間を気にしたヴィルヘルムが聞いた。

「輝く我が名ぞ マコンティアズ」

はやて達の歌をBGMに答えたのは次女のマレーネだ。

「…いえ、おトイレに起きた時に、寝言を聞いただけです。王もお昼におねむになることはありませんでした」

「それならいい」

マレーネの返事に安堵しながらヴィルヘルムが洗った皿を手渡すと、マレーネが布巾で水分を取る。

拭いた皿の出来栄えに納得したマレーネは、少しどや顔で皿をヴィルヘルムに掲げて見せた。

キッチンと水が拭きとられていることを確認したヴィルヘルムが頷くと、マレーネがゾイに皿を手渡す。

「お願いします」

「りー」

受け取った皿をゾイがドタバタと食器棚に戻していく。何とも騒がしい動作なのだが、不思議と力加減は分かっているようで、皿を割ったり、躓くことはない。が、ヴィルヘルムは一言釘を差した。

「ゾイ、もう少し足音を小さく。我が家には赤ん坊がいるのだから」
「あ、は〜い」

今度はソロリ、ソロリとした動作で皿を片付け始めた。

三人の流れ作業で皿洗いを終え、ヴィルヘルムが二人の頭をなでながら礼を言うと、リビングダイニングから聞こえてくる歌も佳境に入ったようだ。

「オウ オウ オウオウ!!」

マコンティアズ!!

フレ フレフレフレ!!」

応援歌を歌う声が大きくなっている。これではゾイに騒がしくするなど躡けた意味がない。しかも、歌声の一つにはかなりの怒気が含まれている。

そろそろ、様子を見に行くか。つと、エプロンを外してリビングダイニングに向かうと、見えたのはorzのポーズを取る長女つむじと、得意になっている妻はやての姿。

応援しているキングスが負けてしまったつむじは、痛恨の表情を浮かべて言った。

「うぐぐぐ、誰やー! 負けたチームは勝ったチームのユニフォームを着て、相手チームの応援歌を熱唱せなあかん、なんて、罰ゲームを考えたんは!!」

「そら、つむじや、つむじ」

革命を起こされ政権を奪われた王のごとく悔しがるつむじ。口調も母親と同じ妙なイントネーションの言葉遣いになっている。対するはやては若干煽るような口調だ。

「ううう、7インングのあの1点がなければ勝てたのに…」

「王、引き際も肝心かと…」

「王様、スポーツマンシップなんだぞ!!」

「ぐぬぬ…、認めたくないものだな、若さゆえの過ちというものを…」
つむじの口から某赤い彗星の名台詞が出たところで、さすがにヴィルヘルムがツツコミを入れた。

「何歳のつもりだ。つむじ」

「うう、宰相」

ソファーに身を預けるヴィルヘルムに、顔を向けるつむじ。その眼には涙が溜まっていた。つむじは着ていたマコンティアズのTシャツ（大人用の為サイズが合っていない）を脱ぎ捨てると、ヴィルヘルムの膝の上に飛び乗ってきた。

「若さやのうて、幼さやる…」

はやてが放り出されたTシャツを畳みながら、自分の娘に追撃を掛けた。

「まあ、その分伸びしろがあるかもしれないな。キングスと同じで…」
キングスはここ数年Bクラスの成績が続いている。意地の悪いことに、はやてがそのことをいじってくる。

「くう〜!!!」

悔しがるとつむじがヴィルヘルムにしがみつき、顔を胸に押し付けてきた。その様子を見てはやてはニヤニヤと笑っている。

（はやてめ…。監督が変わって以来マコンティアズが、Aクラスを維持しているからって調子に乗っているな…）

これは少しつむじを加勢してやらねば。と、考えたヴィルヘルムはマレーネに視線を投げる。

マレーネは一瞬キョトンとしたが、すぐにヴィルヘルムの意図に気が付いたようだ。さすが自称『理のシュテル』を名乗る娘である。

「…確かに、ウエストリーグでは、キングスが一番伸びしろがありそうですね。マコンティアズは監督交代以来よくて2位で、リーグ優勝はありませんから…」

「うっー！」

一考してから口を開いたマレーネの言葉が、はやての心にクリティカルダメージが入る。

「あ、一昨年はフォモールに負けたんだっけ？」

「ふぐー」

ゾイが思い出したように続く。ゾイが鼻屑にしているチーム『シユヴァルベン』は、『マコンティア』『キングス』とは別リーグのため、あまり興味がないような口調だった。が、間違っていないなかったためマレーネがうん、うんと頷き続ける。

「今年もドラフトで新人の獲得に失敗したのが痛いですね…」

マレーネの言葉でつむじも勢いづいて口を開いた。

「マコンティアズ！ダメ！絶対！10ヶ条。第7条、ファンのマナーが悪すぎる」

「がはっ！」

ダメ！絶対！10ヶ条。20年以上前の話になるが、ドラフトを前にアプローチを受けていた選手がマコンティアズ入団拒否の姿勢を示すために発表した声明である。

これを武器にしたつむじの言葉に、はやてのHPが0になった。

うめき声を上げ崩れ落ちるかと思われたはやてだったが、

「うえくん（笑）、娘たちがいじめるwww」

ウソ泣きをしながらはやてがヴィルヘルムの座るソファにやってくると、しがみついていたつむじを抱き上げる。引きはがされる形になったつむじが「ああっ!!」っ、抗議の声を上げたが、はやてはそのままヴィルヘルムの膝の上に腰を下ろした。

「副長く、慰めてえん」

はやてが猫のように頬摺りをしてくる。それをつむじが阻止しようとして、ヴィルヘルムとはやての間に割り込もうと四苦八苦している。はやてはその姿をニヤニヤと性格悪そうに笑っている。

「はやて、大人げないぞ…」

つむじの頭を撫でてやりながら、ヴィルヘルムが言うと、はやてが片目でヴィルヘルムをチラリとみてから…。

「むう、もう少し、独り占めさせてくれても、ええんやない？」

「あいにく、リビングにいるときは家族の父親だ」

「リビングにいる時は…、ねえ…」

ヴィルヘルムの言葉に、はやてがふむふむと頷いてから、ヒョイと

身を離れた。はやてとヴィルヘルムの間に入り込もうとしていたつむじが勢い余ってバランスを崩す。

つむじが倒れる前に、はやてがつむじごとヴィルヘルムに抱きつく。

「むぎゅー！」

「はい、ぎゅ〜」

ヴィルヘルムも応じるようにハグしてやると、興奮していたつむじの表情も徐々に緩んでいく。

「…ん」

「あ、僕も、僕も！」

いつの間にかマレーネが手を広げてハグの催促をしている。ゾイもそれに乗っかる。

ヴィルヘルムがはやてと顔を見合わせ、二人を招き入れる。

はやて十子供たち三人さすがに重いな。と、ヴィルヘルムが思っていると、マレーネがが呟く。

「みんな、仲良し…」

「そうやなく」

答えるはやてのヘラヘラとした声に、つむじが今一度闘志を燃やしたようだ。ヴィルヘルムの胸の辺りに押し付けられていた顔をグイッと上げると、

「おとんは、おかんに甘い！そんなんだから、おかんが放恣に流れるのだ！」

ヴィルヘルムは、

(放恣なんて言葉どこで覚えてきたのだろうか…)

と、思いながら答えた。

「そんなことはないぞ。叱るときは叱っているし、意見が対立するところもある」

「え、そうなの？」

「…知りませんでした」

娘たちはにわかには信じられないようだ。

ヴィルヘルムがはやてをチラリと見ると、はやてはニヤツとヴィル

ヘルムを見た。今では家庭と職場で役割分担が出来ているので滅多にないが、結婚した当初は結構な口論に発展したことも多い。

(そういえば…)

ヴィルヘルムはふと、思い出した。

特務六課の際に、はやてと意見の衝突した時のことを…

87 公僕の下っ端と副長

新暦81年トーマ・アヴェニール以下3名を保護した特務六課は、ヴァンデイン・コーポレーションからもたらされたEC感染者の行動予測データを元に、エクリプスウイルスに対する脅威対策を勧めていた。

同時にトーマ一行を見習いとして訓練を開始。本日も訓練場にて、「オラ、どうした見習い！シャキツと走れ！武器に振り回されてどうすんだ！」

「3人ともー。カノンはしつかり保持して！銃口を揺らさない！」
戦技教導官のヴィータの檄と、なのはの優しい口調ながらも、まったく妥協を許さない指導が飛んで行く。

新装備カノンを保持したままのランニング（これがキツイ）を、なんとか終えた見習いの3人がへろへろと戻ってくると、すでに走り終わっていた先輩、元機動六課フロントメンバーが出迎えた。エリオが整理体操をしながら見習い三人に声をかける。

「3人とも。慣性コントロールを使って、重さを制御しないと体力を奪われるよ」

「…」

息も絶え絶えになったリリイはカノンを立て、それにしがみつくとで体を支えており、返事をする気力もないようだ。

「急いで、覚えた方がいいみたいだね」

トーマはリリイを気遣い支えるつもりでいたのだが、最後の意地でカノンを保持するのが精一杯だった。

最後に、

「コツとかってないの〜」

アイシスも返事を返すだけの体力は残っていたが、ランニングを乗り切ったことに安心感を覚え、集中力を切らしてしまった。あつと思った時には、指から力が抜け、カノンを取り落す。ガチャンと音を立てて、カノンが床に転がった。

「あっちゃー」

アイシスが屈みこんでカノンを拾うと、表面に僅かな傷がついていたが、機能は問題なさそうだ。もちろん、戦闘用の装備がこの程度で壊れては困るのだが…。

「慣性コントロールの前に、装備に対する愛護精神を身に着けた方が良さそうだな。イーグレット」

むつつりとした声が割って入り、アイシスが肩を竦めた。アイシスが恐々と声の主の方を見れば、長身でガツチリとした体格の男が咎めるような視線を投げていた。

訓練場に要る他の面々が男の姿を認めると、最先任のなのはが姿勢を正し号令をだした。

「気を付け！」

号令と共に、見習い3人以外が背筋を伸ばして、男に正対する。

「「ッ！」」

一拍遅れて、見習いたちが先輩たちに倣うと、

「各個訓練実施中です。ヴィルヘルム副長」

「ご苦労」

なのはにヴィルヘルムと呼ばれた男は、なのはに教本通りの答礼を返した。教本通りの動きに、アイシスに緊張が走る。どうにもヴィルヘルムに苦手意識を持ってしまう。はつきり言って苦手なタイプだ。何かされたわけでもないし、先ほどの叱責も（まあ、嫌味な言い方だとはおもいつつ）納得できる。しかし、立ち振る舞いがどうにも父や兄達を彷彿させる。今も兄達が仕事での会話をしているときの様に、いかにも事務的な様子でなのは達と話している。

「週末には、S2シールド及びヴァンガード・ドラグーンが届く。受領準備をしておけ。特にヴァンガードは重量物運搬になる。作業員の安全管理を徹底しろ」

「はい、了解です」

「はいよ。副長殿におかれましては、そんなことを言うために、わざわざいらっしやっただんですか？」

ヴィルヘルムが連絡事項を言うのと、なのはは素直に返事をしたが、ヴィータは少々棘が生えた言葉を放ってヴィルヘルムを見上げた。

ヴィータの態度の理由を察しているのはが、やれやれと、愛想笑いを浮かべる。

「いや、新兵の練度の確認が目的だ。連絡はついでだ」

言って、ヴィルヘルムは見習い三人を一瞥した。慌てて三人が背筋を伸ばす。特にアイシスは背中が泡立つような感覚を覚える。

「イーグレット。君の手にしているものは、小遣いで買った水鉄砲ではない。管理局が君に貸与している装備品。つまりは管理局世界の住民の財産だ。ぞんざいに扱っていいものではない」

「…は、はい」

アイシスは顔を引きつらせながら、返事だけはなんとか絞り出した。アイシスの返事にヴィルヘルムは懐疑的な視線を投げた。が、それ以上は何も言わず、教導官の二人に聞いた。

「訓練の進捗状況はどうか？」

「10%と言ったところです」

「まあ、そんなところだろう。しかし、見習い（陸士学校と同じ生徒手当）とはいえ、装備品を破損させるために給料を払っているのではない。と、いうことぐらいは教えてやれ」

新兵の耳にもはつきりと聞こえる声で嫌味。アイシスは顔の筋肉が引きつるのを自覚した。

実戦部隊に対して当たりが強くなってしまっている。自覚してヴィルヘルムは、今日は早めに休むことを決めた。原因は分かっている。疲労だ。

特務六課は第五世代デバイス、AEC武装と、同時に2系統の新規装備を採用している。更には各部隊から実戦メンバーを招集したため、個人が持つデバイスもワンオフのため補給業務が複雑化。その問題を解決するため、ヴィルヘルムはLS級艦船ヴォルフラムには搭乗せず後方から部隊を支えていた。のだが、シグナムとアギトの装備品は間にあわないまま、フツケバインのサイファアと接敵し、意識不明の重体。これは戦略面で言えば、完全に補給面においての失策だった。

しかも、装備を整えて臨んだフツケバイン一味との戦闘でも、隊長であるはやてが限りなく重症に近い軽傷を負った。念のためにと、ヴォルフラムからストレッツチャーで降りてきたはやての青白い顔を見た時は、ヴィルヘルムは自身でも驚くほど酷く狼狽してしまった。その精神的ストレスも強く影響しているように思える。
(とにかく、今日の業務だ)

未だに謎が多いトーマのECデイバイダー、アイシスが自作したコンバットギアまで抱えることになった補給の業務はさらに増えている。が、はやても書類仕事はこなせるまでには回復している。シグナムの退院も間近だ。あと数日持ち堪えれば、ひと段落がつく。そう自身を奮い立たせて、ヴィルヘルムが業務に臨む。

「…では、フォートレスの修繕は現地補給処整備で…。ソードブレイカーは…まだ、契約が取れていなかったな。第七補給処のカイナン1尉に連絡して契約を急がせてくれ…」

「副長、カノンとウォーハンマーの方ですが…」
「プリッツシュ・ストックが届いていないんだな。カレドヴルフ・テクニクスのレメク氏に連絡しろ。モックアップ品に使われているパーツでも、運用に耐えられる物はあるはずだ。共食いでも何でもいい、運用率を下げさせるな」

喧々囂々、すらすら、トントン

六課の副長ヴィルヘルムが部下たちの報告や要求を捌き切ると、最後に一人の部下が遠慮がちに声を掛けてきた。

「ふ、副長、すみません」

「…サウルか、どうした？」

声を掛けてきたのは需品科に配属されている任期制隊員のサウルだった。入隊時の成績もそれほど高くなく、真面目さが売りの凡庸な青年だ。管理局での経験も1年程度でヴィルヘルムでも一瞬名前が浮かんでこないほど影が薄い。

その彼が額に冷や汗をかきながら言った。

「あ、あの副長、確かに前期の業績目標の達成度は高いとは言いがたいですが…。私になにかまずいことをしたでしょうか？私に問題がある

ならおつしやつてください。か、改善して見せます。」

「待て、待て、何の話だ？」

「ああ、ええっと、私あてにこれが届きました…」

サウルが言いながら一枚の書類を手渡してきた。

わざわざ紙にプリントアウトされたそれには、再就職援護室からの案内として、希望する職業訓練を選ぶようにとの指示が書かれていた。能力開発の名のもとに予算を取っている管理局の業務であるがその大半が任期制隊員の契約更新を断るための前処理…、サウルの様な任期制隊員にとっては実質的な解雇を宣告とも揶揄されているモノである。

ヴィルヘルムはなるべく表情を変えないように努力しながら、

「ああ、恐らく隊員の教育に関する予算が余ったのだろう。少なくとも私は人事に関する削減要求は聞いていない。課長も同じことを言うだろう…」

「しかし…」

サウルは不安そうな顔をしている。

それはそうだろう。サウルの出身国は比較的の後進的と呼ばれている世界であり、管理局の仕事を失うと生活レベルを下げる必要が出てくる。サウルとしては職を失うわけにはいかないのだろう。

「繰り返しですが、私も人員の削減の話は聞いていない。折角の機会だ。ただで資格を取れるチャンスと思っていた方がいいかもしれないぞ」「いや、でも…」

「とにかく気にするな。いまはエクリプスの件で人手が足りていない。職業訓練行き自体が先送りになるはずだ。じっくりと、どの資格を取るべきか考えておけ…」

「わ、わかりました…」

サウルはそう言ったが、表情は納得していない様子だった。

ヴィルヘルムはそのことに気が付いていないふりをして、話を打ち切ると、普段よりやや速足で歩く。

ヴィルヘルムは歩きながら、自身のデバイスに命じた。

《フロイライン。本局の起案文書の中から、特務六課における予算

調整と人事計画のデータをそろえてくれ》

ヴェルヘルムは本日の予定を全て組み替えることにした。少なくとも自分の担いでいる大将の企図を確かめる必要がある。

88 副長とはやて、はやてと依頼

「どういうことですか？課長」

「え、なにい？」

特務六課の司令室にやってきたヴィルヘルムが開口一番に放った言葉に、さすがのはやても困惑した。

「需品科のサウルの元に再就職支援の話が来ている。他にも輸送科ホセア。給養科エステルも対象に上がっているようだ」

「はあ？なんやその話…、聞いてへんで？」

はやても再就職支援が通常、管理局を退職する局員向けの業務であることは理解できているので、その整った眉を潜めた。

「しかも輸送課のホセアは陸士学校出身やろ？任期、関係あらへんやんか…」

「ですが、案内が届いています」

言いながらヴィルヘルムは幾つかの文書を空間ウインドに表示された。はやてが確認すると、管理局内で予算の事業仕分けが行われる予定があり、そのあおりで特務六課の予算も削減させようとする動きがあるようだ。

「三人の増員があつたのだから、三人減らしても問題はないだろう…。新兵装を優先的に回しているのだから、その分何処かで割を食ってもらう…。」と、言ったとこですな」

「更に言うなら、フツケバインからのメッセージの件があるからな。断りづらいやろ…？と思っておるんやろな」

はやては不愉快そうに髪をかきあげた。自分の知らないうちに部下が勝手に切られ掛けていたのだから当然である。

ヴィルヘルムが提案する。

「新規のAEC装備（オクスタン）とCW—ADXと取りやめてはいいかですか？数の戦闘でAEC装備の破損率が高いことが分かっています。まだ、実戦に耐えられるような装備ではないのでしよう」

「EC因子保有者への鎮圧能力があるのは確かや、対応する局員の生存性が上がるのもな…」

はやてにはヴィルヘルムが、新しく出たばかりのAEC装備は費用対効果が悪く、そのしわ寄せが他の隊員にいつているのではないかと、言っているように聞こえた。

「AEC装備がEC因子保有者への鎮圧能力があるのは確かでしょう。しかし、もっと安価で効果的な方法があります」

いや、言っているのだ。

はやては不愉快そうに眉を歪めると反論した。

「確かにAEC装備や第五世代を使用せずにEC因子保有者との戦闘に勝利した記録は知つとる。しかし、それは相手の殺傷を厭わない方法や」

「EC因子保有者全体としての課長の基本的姿勢は、管理局憲章としても正しいでしょう。しかし、フツケバインと自称する一団はすでに、3年以上の懲役もしくは禁錮にあたる凶悪な罪を現に犯したか、既に犯したと疑うに足りる十分な理由があります」

「ッ!!」

ヴィルヘルムの言葉に、はやては発言者を睨みつけた。ヴィルヘルムが言ったのは、管理局員職務執行法における「武器（直接人を殺傷し、又は、武力闘争の手段として物を破壊することを目的とする機械、器具、装置、魔法式次第等）により人に危害を加えて良い場合」に規定されている事例である。

遠回しだがEC因子保有者の生命に気を遣う必要はない。と、言っているようだ。

「審議官や査察官に対するような口ぶりやな。裁判中のように発言が全て記録されているわけやないんや。はつきり言ったらどうや!」
「なら、言つてやろう。フツケバインに対し、手加減のし過ぎだ!理想を掲げるのは結構だが、それでやられたらどうするつもりだ!」

荒い口調になったヴィルヘルムの視線が落ち、はやての腹部に向かう。丁度、フツケバインの首領 カレンに背後からの貫かれた傷があるあたりだ。

「——っ、ふう」

ヴィルヘルムの意図が分かって、はやては苛立ちを飲み込むことに

した。

はやて自身の負傷もそうだが、シグナムとアギトも一時、予断を許さない状態にいた。ヴィルヘルムにはずいぶん心配をさせてしまっていたようだ。

（あん時、ヴォルフラムに搭乗してへんかったのも、ビルがイライラしてまう理由かもしれないな…）

ヴィルヘルムの手の届かないところで、はやて達が負傷したと思ったら、今度は自身の知らないところで、部下がクビにされそうになっている…。面白いはずがない。

恐らくヴィルヘルムの中での優先順位が、隊員の生命＜隊員の生活＞大きく離して＜フツケバインの生命ぐらいになってしまっているのだろう。

「この程度、なんでもあらへんよ。シグナム達も回復出来たしな」

「君が無事だったのは、フツケバインどもの都合。シグナム達が無事だったのは、連中が二人の耐久性を見誤ったからだ。決して慈悲を掛けられたからではない」

ヴィルヘルムの眉間に皺がよる。

飛空艇フツケバイン戦闘後、負傷した体のまま「なんでもないとって指揮を取り続けていることにも、ヴィルヘルムは多少なりとも不満を持っているようだ。

次に何かあったら、負傷を理由に指揮権を取り上げられていたかもしれない。

「それでもや。可能な限り殺生は避ける。たとえ相手が抵抗した場合でも、ほかに手段がある場合はそれを選ぶ。これは、管理局の規定でもあるし、わたしの信念でもある」

「……知っています」

ヴィルヘルムが不満そうに答えた。顔には、そこは曲げて正当防衛を上手く使えばいいだろう。と、書いてあった。しかし、はやてが頑固なことを再確認したのだろう。口には出さなかった。

「では、AEC装備の補給請求は、そのまま。それと…」

はやてが続けようとしたところで、はやてに対しての呼出音がな

る。呼出音の種類から言って外部からの連絡らしい。

「…ッ」

話を邪魔されてはやては不快に思ったが、外部からの通信となると、上級部隊からの連絡かもしれない。

「出た方がいい。フツケバインからの『借り』とやらの件かもしれない」
「…せやな、解雇の話はまた後で、ビルはわたしの机上演習N81 Design 01からN81 Design 23の熟読と、引き続き予算調整をお願い」

「机上演習はすでに目を通しています。予算に関しては大幅に変更させて頂きます」

ヴィルヘルムが口調を慇懃ながらも強い声で答え、はやての執務室を後にする。

「…あかんなく。ありや、機嫌取りをしなきやあかんなく」

執務室の扉が閉まるのを確認した後、はやてはそれだけ呟いてから、通信用の空間モニターを開く。と、スラリとしたハンサムが好きのする笑顔を向けてきた。

「やあ、はやて。久しぶり…だね」

男、ヴェロツサ・アコースのそれを向けるだけで、周囲の女性を虜にできそうな笑顔が声と共に萎んでいく。

（あれ、おかしいなく、ちよお引きつつてるかもしれないけど、とびつきり笑顔で迎えているはずなんやけど？）

はやてはそう自分に言い聞かせた。が、ヴェロツサに向けられていたのは、曇天のような笑顔の重圧である。

「あれ、なんだか、ご機嫌ななめ？」

「いや、人事と予算のことで部下と意見が対立してもうて…。大したことあらへん」

容貌魁偉なヴィルヘルムの不機嫌な顔の後に、眉目秀麗なヴェロツサの笑顔を見せられ。「何を能気な顔をしているのか」と、ヴェロツサに対して理不尽な怒りを覚えてしまった。とは言えず、はやては深く呼吸をした。

その様子にヴェロツサが薄っすらと口角を片方だけ上げた。

「人事で…。なるほど…」

「何が、なるほどなんや？」

まだ少し圧の残る声ではやてが聞き返す。気心が知れている相手のせいか、少しばかり遠慮がなくなってしまうている。

「おっと、ごめんよ、はやて。二つほど分かったことがあってね」「ん？」

はやてが怪訝な顔を見ると、ヴェロツサが笑みを消して続ける。

「先のフツケバインによるヴァンデイン・コーポレーション襲撃事件。同社は複数の世界を股に掛けるデバイスメーカーにもかかわらず、彼らに重要とみていた第八企画室室長がいた第4工場をピンポイントで襲撃している。一応、潜入を試みたようだが、その方法は稚拙で結局は強引な力技になっている」

「諜報能力は、そんなに高くない？でも、自分たちの必要なモノがどこにあるかわかっている？」

「その通り。そして、必要なモノを持っているのはヴァンデイン・コーポレーションも同じ…」

「ハラオウン執務官がハーデイス専務取締役を尋ねたとたん、感染者の行動予測データの提出を材料に取引を持ちかけてきたからやな」

「あの規模の会社ならおかしくはないけれど…。管理局と言うよりも、特務六課が事態をどの程度把握していて、なにを欲しがっているかよくわかっているようだね…」

ヴェロツサの目が細くなった。

はやてにもヴェロツサの言わんとしていることは分かる。情報を漏らしている誰かがいる可能性が高いと言っているのだ。ヴェロツサの所属している査察部か、別の部署なのかまでは分からないが…。

「水漏れが酷いんちやうん？ヴェロツサ」

「ああ、面目ない。それで漏水調査に付き合ってもらいたくてね」

「仕方あらへんなく。って、言いたいところやけど、水漏れ調査って言うより、釣りやろそれ」

「ああ、そうかもしれないね」

言いながらヴェロツサがデータを送ってくる。

資料を斜め読みして、おおよその内容を把握したはやてが言う。

「これって、うちの役割はお口の軽い魚を捕まえる針やのうて、浮きの役割やな」

「そうなるね。でも勘弁しておくれ。君たちの獲物は怪鳥だろ、魚は僕たちに譲ってほしい」

「なるほど。で、撒いたエサに魚たちが反応しているってのが、分かったことの一つなんやな」

「そういうこと」

「それって、ヴェロツサの撒いたエサのせいで、うちが割りくったって話やん」

「陸士学校出身の再就職援護室からの案内の件は無視して構わないよ。こちらで対処する。でも、予算の方は僕の所とは無関係。特務六課の計上している予算が膨らんでいるのは事実だから、どうにかしないと本当に予算の面で人を減らさなくてはならなくなる」

「え!!くうく」

ヴェイルヘルムの眉間に皺が寄ることを想像して、はやては頭を抱えたくなった。すぐるのように口を開く。

「ちなみに、もう一つの分かったってことは?」

ヴェロツサは目を泳がせてから答えた。

「あく、部下の扱いで苦勞しているってことだね」

「やかましいー!」

はやては殴りつけるような動作で空間モニターを消した。

89 出撃準備と命令

「観測指定世界ベルテシヤツアル？」

はやてとヴィルヘルム、特務六課実働部隊の幹部が集まった会議室。空間モニターに表示された資料に、見慣れない世界名を見つけたのはが小首を傾げた。

「せや、鉱山世界とか資源世界って言う人もおるけどな」

「主にダークマターの観測・採取を行うのに、大小様々なクラスの衛星が設置されている世界だよ」

はやての説明を捕捉するように、フェイトが続ける。なのはは武装隊幹部としての言葉遣いで聞いた。

「フェイト執務官は知っていますか？」

「うん。なにしろ、ヴァンデイン・コーポレーションの採掘プラントもある世界だから」

「……ッ！」

それを聞いて眉を潜めたのはヴィータだ。この鉄槌の騎士は、専務のハーデイスが我が社の研究は、エクリプス感染者の脅威を取り除くための研究と言いつつ、第4工場に大量の感染実験のなれの果てを保管していたことに嫌悪を覚えていた。

直情的なヴィータらしい反応だと思いながらも、はやては視線で制止し、話を続ける。

「そう、査察部のヴェロツサのからの依頼でな。その採掘プラントのある惑星ダニエルの警備任務や」かおにださないようにしながら、ヴィータの声に愛想笑いをしていると、「私も2尉に賛成です。」

「警備任務？それ警備部の仕事じゃね？なんでもうち(特務)に回ってくるんだよ」

砕けた口調のままのヴィータに、ヴィルヘルムが視線だけ動かして警告したが、ヴィータは気が付かなかったふりをして無視した。

はやての方は構わず続けた。

「先のフツケバインのヴァンデイン・コーポレーション第4工場襲撃を踏まえての警戒強化や。彼らに対して効果的な装備を有している

部隊は少ないから、うちにも声が掛かったんや。いやー、人手不足にも困ったもんやなー」

「笑えないってのー！」

茶化しながらはやては言ったが、

(と、いうのは、表向きやな。ヴェロツサのホントところはフェイクを使った情報漏洩箇所の発見が狙いやろな)

複数偽情報を流し、フツケバインやヴァンデイン・コーポレーションがどう動くかによって、情報漏洩の場所を測ろうとしているのだから。

(フツケバインか、ヴァンデインか、それとも他の誰かか？誰が糸を引いているの皮知らへんけど、水漏れさせている実行犯は、案外、管理外世界出身の小娘が出世するのが気に入らへんって程度の理由だったりして…)

ネガティブな考えを顔に出さないようにしながら、ヴィータのツツコミに愛想笑いをしていると、

「私も2尉に賛成です。」

ヴィルヘルムが口を開いた。

「まだ正式な予定は来ていませんが、先のフツケバインからの伝言に対する審議や査察。他にも部隊運営予算についての懸念事項も我が隊はかかえています」

『部隊運営予算』の所に、ほんの少し、はやてにしか分からないように僅かに語気を強めている。はやてとの予算のやり取りについて言いたいことがあるらしい。

はやてが、この野郎(# ^ ω ^) と反論する前に、ヴィルヘルムが続ける。

「課長ご自身の負傷を理由に断りをいれた方がいいでしょう」

「わたしも副長と同じ意見です。先日もご自愛くださいと進言したばかりですよね」

ヴィルヘルムになのはも続く。他の部下たちも同じような意見のようで、フェイトとヴィータも、うんうん、っと、頷いている。

しかし、はやては部下たちの意見をはねのけた。

「確かに断る理由としては、十分なんやけど…。この査察部からの依頼、今回は受けます」

「……………」

「よろしいのですか？」

会議の行く末を無言で見守っていたザファイラが口を開き。はやてが答えた。

「この世界の特徴から言って、私の机上演習N81 Designs 11の想定が当てはまるでしょう。局員が直接エクリプスドライバーと接触する可能性は低い。私が行うのは戦闘指揮のみで体への負担はないと言つてええ」

「Designs 11、宇宙空間における対艦戦闘。…ヴォルフラムは落されるわけにはいきません」

ヴォルフラムには魔導師ではない搭乗員もいる。いくらファイールドなどの技術が発展していても、生身の人間が宇宙空間に放り出されたら長くは持たない。今回フツケバインとの戦闘になった場合、かなり危険な状況での戦いが予想される。

「だからこそや、仮に本当にフツケバインが動くんやとしたら、前の伝言に対して、はつきりとお返事したろと思つてな」

「わかりました」

「お、おう」

はやてが普段口元に湛えている笑みを消して言うと、ザファイラは己の主の決意を感じながら了承し、ヴィータがやや気圧されて答えた。

一方、幼馴染の二人ははやてが思い詰めているのではないかと、心配しているような様子だったが、はやてがパチンとウインクをしてやると、ユーモアが消えていない程度には冷静だと思つてくれたらしい。

ヴィルヘルムも反対せずに黙つてうなずいた。

「では、この任務を受けることを前提に各部門で準備を…」

はやては、フェイトに尋ねた。

「ヴォルフラムの整備補給は？」

「デイバイドゼロ・エクリップスの後遺症は認められず。その他、予防整備も問題なし。人さえ乗ってもらえれば、いつでも出航可能な状態を維持できています」

次になのはを見ながらはやてが続ける。

「実働班は？」

「総員16名、事故3、事故内容・通院1（はやて）、入院2（シグナム、アギト）になります」

「…なのはちゃん、私は」

「事故は3です（言）」

なのはがはやてを戦闘の員数外と報告すると、はやては反論しようとしたが、なのはとシャマルが背筋が凍りつくようなとつても素敵な笑顔をしたため発言を取りやめた。

「今回の任務だと、装備品の方が問題だな。カノンとハンマーはともかく、調整項目の多いグラディエーター、オクスタン、S2シールドは使える状態じゃねえな」

ヴィータが戦闘教官としての意見を言った。

「うん、じゃあ、すでに訓練を行っているカノンとハンマーでの対処を主軸にしようか。副長、装備の補充は？」

はやてがヴィルヘルムに尋ねた。

「整備用パーツの充足請求が上がっていますが、2度か3度の戦闘になれば十分耐えられるでしょう。新規装備の前渡し物品も、一両日中には目処が着く予定です」

なんだかんだ言ってヴィルヘルムははやての指示に従い、新規のAEC装備の補給の手筈も整えてくれたようだ。

「はやて、もしこの宙域で戦闘が行われるのだとしたら、監視衛星群のコントロールがひつようだよ」

次に口を開いたのは執務官であるフェイトだ。

惑星ダニエルの周辺には旧暦時代から、かなりの数の観測衛星が稼働している。観測衛星からの情報を受けることが出来るなら、精度の高い空間座標が手に入れることができる。それに確率はかなり低い。衛星との衝突事故予防にも有効だ。

「わかつとる。すでにベルテシヤツアルの稼働している監視衛星の管制する権限を貰つとる。衛星からの各種データもうちの艦で扱える。ダークマターは目にも見えへんし、電磁波を使ったセンサーでも捉えられへんから、艦以外からの情報も欲しいやろ？」

「うん、外部とヴォルフラムのセンサーで照合が取れるなら、目標物の有効反射面積や周波数特性の問題も少なくなるから」

「では、フェイト執務官はシャリオ達と、その辺の航路図の作成、管制誘導システムのアップデートをよろしゅう」

はやてはフェイトに指示を出すと、今度はなのはとヴィータに顔を向けた。

「艦隊戦中にヴォルフラムの内部に飛び込まれるのが一番怖い。前回はこちらがフツケバインに飛び込んだ方やったけど、ドゥビルとかいうムツキムキはジャンプが得意なんやろ？」

「はい、ドゥビルの能力は戦闘中に確認しています。戦闘時には艦にデイストーションフィールドを使用。直接飛び込まれないように、座標を欺瞞します。更に、陸戦魔導師を巡回させて、即応体勢を維持します。外壁に取り付かれた時は、空戦魔導師が対応します」

なのはが答えると、はやてが納得したように頷いた。

「うん、それで行くか。では、正式な命令を発刊をまって行動に移る。以上、解散」

取り敢えず特務六課はうまく回っている…。と、はやてには思えていた。

「なんじやこりや〜〜!!!」

翌日、執務室にて命令を受け付けてしまったはやては叫び声を上げた。

十数秒後、一応ノックはあったが、返事を待たずにヴィルヘルムがはやての執務室に入ってきた。

「……」

両手を広げて、手のひらを上に向けるポーズのまま、はやてが固まっていると、ヴィルヘルムが深くため息をついた。

ヴィルヘルムがこめかみに手を当て、煩わしそうに頭を振ってから口を開く。

「……聞こう」

「これを見てみい！」

ヴィルヘルムの声で、はやてがパツと動き出す。はやては二つの空間モニターを表示させた。

特務本一般命令120号

特務機動隊六課

新暦81年〇〇月□□日から、新暦81年〇〇月△△日までの間、

観測指定世界ベルテシヤツアル 惑星ダニエルにおける、衛星軌道警備を命ずる。

本次航日日命令104号

二等陸佐 八神はやて

新暦81年〇〇月□□日から、新暦81年〇〇月△△日までの間、特別審査会への参加を命ずる。

ヴィルヘルムが空間モニターを覗き込むと、上記の内容の命令が映し出されていた。ヴィルヘルムがしかめっ面を作ってから口を開く。

「日付がまるかぶりだな。…ずいぶん人気がありますね。課長」

「皮肉を言わないな。ともかく、命令が下りてしまった以上は私は審査会で、どつきあいしてこなあかん。指揮の代行をお願いします」

「予算の調整の方が、まだ終わっていないのですが…」

「予算については、今日明日で決まることやない。衛星軌道警備を優先」

「…了解」

ヴィルヘルムは不服そうだったが、はやてにも拒否できないことは分かっているのだろう。頷いた。

「では、三等陸佐ヴィルヘルム・チェスロック・ケーニツヒは、新暦81年〇〇月□□日から、新暦81年〇〇月△△日までの間、観測指

定世界ベルテシヤツアル 惑星ダニエルにおける、衛星軌道警備任務の指揮代行につきます」

姿勢を正し、言いながら敬礼をするヴィルヘルムに、はやてが答礼を返すと、彼はそのまま執務室を後にした。

はやては副官のラインフォースⅡを呼び出すと、幾つか指示を出した。

「ライン、審査と査察用にまとめておいた資料を再度チェック。フツケバインの動向を可能な限り最新のモノにしたい」

はやてはここで思い出したように、天井を見上げた。

「ふうくん、ライン。ビルが稟議の承認を止めている予算申請も、こつちにまわしてえ。あと、なのはちちゃんとフェイトちゃんに連絡……」

90 凶鳥の影

観測指定世界ベルテシヤツアル 惑星ダニエル衛星軌道。

ヴォルフラムの艦橋で背筋を正したフェイトが言った。

「ハラOWN執務官は艦当直に上番します」

「高町1尉は艦当直を下番します」

同じく背筋を伸ばしたなのはが応じるように言うと、フェイトが艦橋勤めの仲間たちに言った。

「ハラOWN執務官が指揮を取る。勤務交代を開始。申し送りは漏れないように」

フェイトの指示に従って、リインフォーサー、シヤリオ、アルト、ルキノが勤務中に起こったこと、これからの予定の確認作業に入った。フェイトも親友に対して労いの言葉を掛けつつ報告を行う。

「なのは、お疲れ様です。高速巡航機動隊からの連絡はあった？」

「うん、フツケバインと思われる反応はないって」

今回の衛星軌道警備任務に就いているのは、ヴォルフラムだけではない。主力はヴォルフラムではあるのだが、索敵を主目的に、主力と離れて概ね単独で行動し、敵を警戒するレーダーピケットのような役割を高速巡航機動隊がになっている。

「それよりもクロノ君の艦隊が近くで訓練を行っているのは知っているよね」

「うん」

家族の名前が出てフェイトの顔が緩む。

今回の任務の期間中クロノの指揮する艦隊も遠くない場所で訓練を行っていた。

「あと2時間後に艦隊行動の訓練を行うから、センサー群にノイズが入るかもって連絡が来てるよ」

「ダークマターを避けるのに、広域スキャンでも掛けるのかな？了解です」

「それと報告、艦日点検異常なし。本日の予防整備の予定はありません。航路情報として、ラケル人工衛星群通過確認。次、軌道が重なる」

る可能性があるのは、30分後トビト人工衛星群」

「確か旧型で放棄されている人工衛星群だったよね」

「そう、旧暦時代のものだって。今のところ、外部からのコントロールは受け付けているみたいだけど…。管理責任が曖昧で整備がされていないから気を付けてね」

「分かった」

「他は…」

なのはは人差し指を頬にあて、考えるそぶりを見せた。フェイトが何だろうと、小首を捻っている…。

（副長、どうしているか分かる？）

オペレーター達に聞かれないように、なのはが念話を飛ばしてきた。

（え、…つと、ずっと予算の見積もりと睨めっこしているみたいだけども…）

（そう…）

（どうしたの、なのは？あ、もしかして、はやての言ってた…）

（うん、副長、フツケバインに対してかなり怒っているから…）

（うくん、今のところ普段通りにみえたけどな）

二人にはよくわからなかったが、はやてからヴィルヘルムの様子を気に掛けるように頼まれていた。曰く、冷静に見えて一度怒らせるとなかなか怒りが収まらないタイプらしい。もっとも、怒りの理由が部隊の仲間たちを傷つけられた為なのだから、当然と言えば当然だ。

（副長の場合、特にはやてちゃんのことになると…）

（そうだね…）

二人の内緒話を終える。

なのはが口頭で続ける。

「うん。報告は以上になります」

日誌を確認しながらなのはが報告を終える。その後は、一言二言、友人としての会話を楽しむのが通例だった。

「それじゃ、私の当直が開けたら…、昼食は一緒に出来るかな？」

「そうだね。確かメニューは…、レシピ考案はやてちゃんのカレーだ

ね」

「あ、それは楽しみ。カレーって船ごとに味が違うから…」

っと、二人が和やかに離れていると、無粋な電子音が鳴り響いた。通信を知らせる電子音に交代したばかりのシャリオが応じる。

「フェイトさん！高速巡航機動隊が新たな艦影を探知。推定サイズ次元艦クラス。進路、このダニエル宙域に向かって来ています」

シャリオの報告になのはとフェイトの顔が引き締まった。

「フツケバイン？」

「恐らく間違いないかと。画像ではまだ捉えられていないようですが、レーダーにははつきりとした艦影が写っているのに、魔法センサーでは捉えられないとのことですよ」

「ECデイバイダーの効果だね。総員起こし！戦闘配置!!」

フェイトが命じると艦内にブザー音が鳴り響き、戦闘配置を告げるアナウンスが流れる。休息に入ろうとしていたオペレーターがバツクアップ席に着く。

「接触までの時間は？」

「このルートだと、30分後にはこちらのセンサーにも捉えられます」

「特務本部に連絡！進路をポイントDへ！」

フェイトはフツケバインと思われる艦影にまっすぐには向かわず、やや迂回するルートを取った。こうすることで相手と接触する頃に、相手の側面か背後を取ることが出来る。

艦の出力が上がり、進路変更が行われると慣性中和フィールドがブルッと震えるような感覚を与える。空間モニターに映るヴォルフラムの航跡がポイントDに向かって進路を変えたところで、ヴィルヘルムが姿を現した。

「状況を」

ヴィルヘルムはそれだけ言つて、状況を確認するとフェイトの取つた行動が正しいと認め、艦長席の隣に立った。はやてが不在のため、ヴィルヘルムが艦長席についても問題ないのだが、はやてに義理立てしているのか座りたがらない。

「ケーニツヒ3佐が指揮をとる。ハラオウン執務官、高町1尉、リイン

フォース曹長、君たちも持ち場につけ」

ヴィルヘルムの指示になのはとフェイトは顔を見合わせてから、フェイトが言った。

「副長、艦橋にジャンプされた場合を考え、私は艦橋に残ります」

フェイトは接近戦を得意とする魔導師であり、万が一艦橋で戦闘になったとしても、流れ弾を出す可能性が低い。それに海の執務官だけあつて次元艦での戦いも心得ている。

ヴィルヘルムは頷いて許可を出した。

「許可する。しかし、指揮権は譲らんど」

「はい」

特に反対もされず、フェイトはホツとした。これではやての頼み「ヴィルヘルムの様子を気に掛ける」こともできる。

「じゃあ。フェイトちゃん。ここはお願い」

「うん、任せて」

フェイトはそう言うと、デバイスを待機モードのまま、バリアジャケットにセットアップした。

「では、わたしは船外作業ハッチに向かいます」

続いてなのは達もバリアジャケットにセットアップ。艦橋を後にする。

丁度、前足に脛当てをつけた大柄のオオカミが歩いてきた。オオカミ、ザファイラはなのは達の姿を認めると、無言で頷き。艦橋の扉の前で腰を下した。何者も通さない番犬のような姿になのはは安心して自分の配置場所に向かった。

なのは達が艦橋を出て数分もたたないうちに、各所から配置完了の報告が入ってくる。報告を聞きながらヴィルヘルムがオペレーターに指示を出した。

「人工衛星群と周囲のダークマターを表示してくれ」

「了解です」

シャリオが答えて空間モニターに表示させると、ヴィルヘルムが情報を少しの間眺めてから口を開く。

「早めるか。接触時間を5分程早めることは出来るか？」

ヴィルヘルムが言うと、ルキノが答えた。

「可能です。前進3分の2になります。…」

「構わない。そうしてくれ」

「了解。増速します」

「よろしい。これより本艦は、対艦戦闘に入る」

飛空艇フツケバインにリアクトしていたステラは、電磁センサーに捉えていたヴォルフラムが増速したことに気が付いた。

「あれ、こつちに向かつて来ていた船、増速したみたいだよ」

「お、なんだ、なんだあ。特務の連中やろつてのかい？」

へそ出しショートパンツの赤毛の少女、アルナージが骨付きローストチキンを齧りながら、馬鹿にしたように笑いを上げた。

「あ？今回ヴァンデインの番犬をやっているのは、特務の連中なのか？」

他者を威嚇して回るような目つきをした青年、ヴェイロンも短い髪の毛をかきあげ、イラついた声を上げる。

それに答えるように筋骨隆々の男、ドウビルが口を開いた。

「近くで演習を行っている艦隊が増援に来るのを待つべきだろうか？…どうだろうか？」

ドウビルは他の三人を見ながら続ける。

「今回の情報…、カレンは欺瞞情報だと言っていただろう。特務でこちらの足を止め、艦隊で包囲殲滅を行う可能性が高い。とな。こちらに向かつて来ることだけを取るなら、カレンの予想通りの動きだ。ヴァンデインのプラントに原初の種があると言う情報も信用できない。引くべきだ」

飛空艇フツケバインには、現在この4人しか乗船しておらず、また、観測指定世界ベルテシヤツアルに来たことも、カレンの意思にそぐわない行動だった。彼らが求めている原初の種と呼ばれる何かの情報を聞いた若い3名が、カレンの不在時に暴走した形だ。

ドウビルは彼らの行動を止めていた。が、先日のヴァンデインの工場襲撃で情報を掴めたことや、正面からの襲撃でもフツケバインに被

害が出なかったことで、他の3人は気を大きくして、行動に出てしまった。

そこでドウビルは見えないところで、行動を起こされるぐらいならついていったほうが、まだ、3人を御せるだろうと行動をともした。…のだが、

「それだと、私達が艦隊ごときを怖がっているみたいじゃない」

「…それは、気に入らねえな」

「そうだぜ、ビル兄。ヴァンデインに何もねえとしても、行き掛けの駄賃だ。特務の連中をフアックしてやろうぜ！」

普段、口数の少ないドウビルでは、3人の説得は難しいようだ。ドウビルはため息を飲み込む。

(結合分断(ゼロエフェクト)がある限り単艦でこのフツケバインを落とすのは不可能だろう。タイムリミットは…、近くで演習をしている艦隊が押し寄せてくるまでだな。俺が引き際をわきまえていれば問題ない)

結局、ドウビルは口を閉ざし、3人に好きなようにさせることにした。

9-1 エンゲージ、コンタクト

「レーダーコンタクト、本艦のレーダーで目標を捉えました」

ヴォルフラム自身のレーダーにフツケバインの航跡を捉えると、すかさずアルトが報告した。

「手順の通り投降の勧告を送信」

それにヴィルヘルムが淡々と答える。

艦橋内を一望できる位置に待機していたフェイトは、ヴィルヘルムの冷静な声に安堵した。はやての言葉から、ともすれば、ヴィルヘルムが問答無用で攻撃命令を出すのではないかと懸念していたのだが、杞憂に終わりそうだ。

「フツケバインからの返答なし。減速や機関を停止する気配もありません」

現在の位置取りは、ヴォルフラムの取った進路が功を奏して、フツケバインの背後を取る位置取りになっている。が、フツケバインは気にも留めていないようだ。速度も変えずまっすぐダニエルに向かっている。

「了解。では、射程内に入り次第、攻撃を開始する」

ヴォルフラムが増速。攻撃用レーダーを照射し始める。今頃、フツケバインの艦橋には、ロックオンを知らせる警告音がなっているかもしれない。しかし、フツケバインの進路に変化はない。

これも想定道理。と、フェイトが思った次の瞬間。

「アルカンシエル。発射準備始め」
「えー！」

ヴィルヘルムが選択した武装に思わずフェイトが声を上げた。

「なにを驚く？課長の机上演習においても、初撃は最も効果が見込まれる攻撃方法を取る。と、なっているぞ」

「しかしー！」

「許可は取れている。おい、お前たち、手を止めるなー！」

シヤリオ達オペレーターも、百数十キロの効果範囲を持つ殲滅攻撃を選択されるとは思っていなかったらしく、驚いて手を止めていた。

が、ヴィルヘルムが始動キーを掲げて見せると、はやての作戦の中に組み込まれていたことを理解したようで、艦の操作を始めた。

(アルカンシエルの使用については、殺人への抵抗感が顕著だな)

ヴィルヘルムがフェイトに視線を戻す。

「アウグストは効果なし。船外活動でカノンやハンマーを使うには宇宙は広すぎる」

「消滅反応を起こすアルカンシエルでは、フツケバインを逮捕するとは……」

「あの艦は直撃にも耐えられるとの報告がある。沈みはしない。だが、大量のエネルギーを失うところになる……」

「…エネルギー切れによる行動限界。行動継続能力を奪うことが出来る……！」

ハツと声を上げるフェイト。心なしか声も弾んでいるように聞こえる。話を聞いていたオペレーター達の動きが軽快になったようにも思える。

(会話を通じて行為の意義を伝え、志気を挙げる。はやての代わりにハラOWN執務官を艦橋に残して正解だったな……)

アルカンシエルの照準がフツケバインの予測進路に固定された。シヤリオの報告の音が響く。

「アルカンシエル！バレル展開！」

艦の状況を示す表示に、ヴォルフラム前方に環状魔法陣が展開されたことが示された。

「ファイアリングロックシステム、オープン！」

ヴィルヘルムの言葉で彼の眼前に箱状の火器管制機構が現れた。ヴィルヘルムが始動キーを差し込むと、箱が赤くなり環状魔法陣が周囲に展開される。

「命中確認後、天井方向のWIMP S型ダークマター群にまで後退。安全距離、及び、反撃があった際の遮蔽を確保する」

「了解」

ヴィルヘルムが始動キーを箱状のファイアリングロックシステム(火器管制機構)に差し込むと、箱を包んでいた周囲が赤くなり、環状

魔法陣を不規則に周囲に展開する。

「アルカンシエル、発射！」

キーが捻られると同時に、艦外を写していたカメラの映像が白く染まった。

着弾までの数秒の間の中で、コンソール内でフツケバインを現していたインジケータの数字が激しく変化する。

映像内から閃光が消えフツケバインがいた空間を映し出す。

「アルカンシエル命中！しかし、消滅反応確認できません」

シヤリオの言葉通り消滅反応が見せる光の波紋は見えなかった。代わりに魔力を結合分断され力を失っていく魔力の光が拡散していく。あと数秒でアルカンシエルの効果は完全に失われる。

「アルカンシエル！分解されています！」

「報告には、聞いていたけど……」

「アルカンシエルが効かないなんて……」

先ほどまで使用を躊躇っていたにも拘わらず、管理局の切り札と言わなければならない魔法が無力化され、オペレーター達は少なからずショックを受けたようだ。それはヴィルヘルムも同様だったが、目標の状態を確認した。

「にわかには信じられなかったが……報告の通りか。まあ、いい。フツケバインの推進機能は動いているか？」

「いえ、推進はしていません。現在の移動は、慣性移動のみのようです」

シヤリオがコンソールを確認しながら答えた。

「さすがに足を止めたか。魔力の分離は、このあたりが上限だな。シヤリオ、着弾前後のデータは保存しておけ」

ヴィルヘルムが指示を飛ばしている間に、ヴォルフラムがダークマター群に到達した。フツケバインもアルカンシエルを完全に結合分断させた。

（これがゼロエフェクトか……。なるほど、現在のLS級やXV級単艦では対処は難しいだろう。世界を殺せる毒と、大言壮語を吐きたくなるのもわかる）

ヴイルヘルムが次弾の準備を命じた時だった。

「副長、フツケバインからの通信です」

「…繋げ」

報告に答えたヴイルヘルムの声に、アルトは違和感を覚えた。普段仕事中に出している無感情の声でわなく、若干わずらわしさが乗っているように思えた。

「…?」

疑問に思いながらも、艦橋のスピーカーにフツケバインからの通信を繋ぐ。

「こちら飛翔戦艇フツケバイン操舵手兼管制責任者、ステラ・アーバイン。特務の八神！聞こえているの！」

「ヴォルフラムから、フツケバインへ、こちらヴォルフラム指揮官代理、ケーニツヒ3佐だ。フツケバイン首領、カレン・フツケバインにそちらの意思を確認する。投降の勧告を受け入れる気になったのか？」

スピーカーから聞こえてきた声は、トーマ達の証言によるとステラ・アーバインと言う少女のものと思われたが、ヴイルヘルムは操舵手には用はないと言わんばかりに、首領のカレンに話し掛けた。

しかし、

「カレンはここにいないわよ！そっちこそ、代理つて、なによ！」

と、ヒステリックな声が帰ってきた。

ヴイルヘルムがマイクを切つたため息とともに、ボヤいた。

「フツケバインの下っ端が暴走しているだけか…。どおりで…、安いエサに食いついていると思っただが…」

「…副長？」

「いや、気にするな」

ヴイルヘルムのボヤキに、フェイトが怪訝そうに声を上げると、ヴイルヘルムはすぐに副長としての顔に戻り、

「公務員は何かと忙しいからな。次席の私が権限を代行している。そちらは何人いるのか？責任者は誰だ？」

と、問いただした。

「ここに居るのは、…モガ！」

通信の途中で、声がかみ合う音に代わる。マイクを切ったのだから、一旦、音が途切れたかと思うと、

「いい、言うわけないでしょ！そんな風に、こっちの戦力を測ろうたって、そうはいかないんだから！」

さすがに聞き方が露骨過ぎたようで、周りにいた誰かが止めたようだ。電話に出た子供に、「お父さんかお母さんはいますか？」と聞くような気分になって、単純過ぎる言葉を選んでしまった。と、ヴィルヘルムが反省していると、ステラの声が続く。

「そっちの八神2佐って女の方こそ、カレンに刺された傷が治ってないんじゃないの！」

それを聞いたヴィルヘルムの表情を見て、フェイトはギョツとした。ヴィルヘルムが影のように暗い笑みを浮かべたからだ。

「…ツ！」

しかし、それは瞬きの合い間に消えてしまい。フェイトが何かを言う暇もなかった。

「だいたい、今回も悪人のヴァンデインを退治しに來ただけなのよ。カレンがこの件で追っかけてくるなって伝えているはずでしょ!! さっきの攻撃は、このフツケバインに大した障害はなかったし、大目に見てあげるわ！それなら、攻撃したけどムリでしたって言い訳もできるでしょ！アンタたちには貸しが…」

「あるんだから」と、ステラが続けようとしたことで、ヴィルヘルムが耐えきれなくなったように遮った。

「そんなものは存在していない。確認するが投降の意思はないんだな」

「はあく！見逃してやるって言っているのが分からないの!?!そっちを落して進みましょうか!?!」

「こちらを加害する示唆を確認した。これ以降、投降の意思を示したのならば救難信号を打て。それ以外は欺瞞行為とする。以上、通信終了」

ヴィルヘルムが通信を切ると、レーダーコンソール上のフツケバイ

ンが増速し方向転換し始めた。艦首をこちらに向け、攻撃を行うつもりのようなのだ。

「敵前回頭か、伝説の名将のように上手くいくかな？アルカンシエル、第二射、用意!!」

「緊急通信が入りました。発信者名「フツケバイン一家 アルナージ」」

「うわー!」

艦内の警備任務についていたトーマ達に対して、銀十字の書が報告した。突然の通信にトーマが驚きの声を上げたにも拘わらず、この空気の読めない魔導書型武器管制システムは無遠慮に続けた。

「緊急接続要請が来ています」

空気の読めるリレイが、行動を共にしているトーマとアイシスに視線でどうするか尋ねる。

「まず報告だよ、トーマ」

「報告はする。でも、緊急通信だから、繋ぐだけ繋ごう」

本来なら敵からの通信など、繋ぐ必要すらないのだが、トーマは親戚からの急用の連絡があったときのような対応だった。リレイはリレイでトーマに依存した、何も知らない子供のような判断基準しか持っておらず、素直に通信を繋いでしまった。

「へーい、クソツタレボウズ。聞こえてるかーい。フツケバイン一家、アルナージ様だぜ」

アイシスの眉間にしわが寄った。

フツケバインに監禁されている間、アイシスに一番接触してきたのはアルナージだった。が、アイシスは親近感など抱いていない。むしろ、エクリプス感染者というだけでトーマに執着していることに気味の悪さまで感じていた。

しかし、トーマは違った。友達が久しぶりに連絡をくれたかのような反応をしている。アルナージとトーマの間に殆ど接触はないはずだが…。

「アルナージか、よろしく」

「おおよ、そろそろ、こつちも反撃するんで時間がねえ。手短に言うぜ。いまから、お前たちが乗っている特務艦をファックする」

突然のFワード、トーマの思考が停止する。リリイがキョトンとした顔でトーマに視線で意味を尋ねようとしていたが、それにも気が付いていないようだ。

「ま、止めまでは刺さねえつもりだから安心しろよ。そつちの船が動かなくなったら…。そうだな、生体リアクターと一緒に艦の腹の方に
出て、救難信号を出しな。ビル兄が拾ってくれるってよ」

アルナージはトーマがフツケバインに移ると決め付けて話を勧め
る。そのことに、腹をたてたアイシスが声をあげた。

「ちよつと、トーマに変な勧誘しないでくれる!!ただでさえ騙されやすそうなんだから!」

「ん、ぺったん胸か。しゃーねえな、トーマと一緒にならお前も拾ってやるよ。…一時的にだけどな」

アルナージが笑いながら、上から目線であざけるように言った。

「はー何言ってるの!まだ、アンタ達が勝って決まったわけじゃないじゃない」

「ははははーそつちこそ何言ってるんだ。こつちは凶鳥フツケバインさまだぜ」

アルナージは自分たちフツケバイン一家が破れるとは、一ミリも思っていないようだ。

「ま、わかんねえならしかたねえ。その時になってからでも、泣いて謝ればこつちに乗せてやるぜ」

勝ち誇ったような声でアイシスを煽ったアルナージは、最後にもう一度、トーマに向かっていった。

「いいか、特務艦の腹から出て、救難信号だからな。わすれんじやねえぞ」

その言葉を残し、一方的に通信は切られた。

92 WIMPs、MM、岩の上のコマ

「アルカンシエル、第二射命中。やはり、魔力が結合分解されています」

「シャリオが報告した。」

フツケバインのゼロエフェクトは健在で、アルカンシエルが先ほどこと同じように結合分断していく。分断の速度も変わらず、パウーダウンしている気配もないため、まだまだ、エネルギーには余裕があるようだ。

「この数秒を無駄にするな。進路Bを取れ」

「了解、進路B」

ルキノの操艦でヴォルフラムが、WIMPs型ダークマター群の中に潜り込んでいく。ルキノの操艦は悪いものではなかったが、ダークマターの持つ重力が複雑に絡み合う空間を進むのは難しく、機動力が落ちてしまう。

「ヴィルヘルムの取った進路に疑問を持ったフェイトが聞いた。」

「ダークマターを盾にするつもりですか？」

「ん？その通りだ。弱虫（wimp）とでも、言うつもりか？」

「え、いえー！」

WIMPs (Weakly interacting massive particles) 素粒子論からダークマターを指す言葉を使った冗談のつもりで、ヴィルヘルムは言ったのだが、フェイト

は額面通りに受け取ったらしい。慌てて手を振って否定した。

（ユーモアを出せる程度の余裕はある。と、示すつもりだったんだが、相手が変わると上手くいかんな…）

普段、隣にいる人物を想定して、「確かに、マッチョ（MACHO: Massive Compact Object）の方が好みやわ」と、言い返してくるのを待っていたヴィルヘルムは肩透かしを食らった気分で続けた。

「それで、提案か？」

「進路Dの方が、攻撃をより遮蔽できると思われます」

フエイトの言う通り、攻撃回避だけならその選択が正しい。

「いや、それだと反撃しにくい。連中に魔法による探知をさせたくないからな」

「フツケバインはゼロエフェクトの効果で、自身では魔法は使えませんよ?」

「ああ、魔導武装をほぼ無力化できる代償。彼らは魔法の恩恵を預かることもできん」

艦橋に照準警報がなる。

「アルカンシエル、消滅。フツケバイン、艦首を当艦に指向!」

アルトの報告で、センサー情報を表示している空間モニターを見れば、表示されたフツケバインの表示が赤く明滅していた。

「撃つてくるぞ。ゲルマニクス、最優先誘導対魔導スキャン。正射、始め!」

ヴィルヘルムの指示で多用途魔法誘導弾発射装置「ゲルマニクス」から、誘導弾が射出された。空間モニターないで新たな表示となったそれは弧を描くような軌道でフツケバインに向かっていく。

「フツケバインに高エネルギー反応! 来ます!」

外部カメラの映像を写しているモニターが瞬く。しかし、艦の防御フィールドに攻撃が当たった衝撃も、急激な消費魔力の上昇が起こす証明のチラつきも起こらない。

「外れた? 回避航行もしていないの?」

計器上の数値を確認していたアルトが口にする、ヴィルヘルムが続けた。

「ああ、言っただろ、フツケバインは魔法の恩恵には預れない。魔法なら感知できるダークマターは、連中にとってはどこにあるかも分からない障害物だ。航行や照準するにしてもダークマターからの影響を補正できない」

「長距離での撃ち合いになる宇宙戦闘においては、目隠しして撃っているようなもの……」

「そうだ、普通ならゼロエフェクトを解除して、周囲を魔法探知したくなるだろうが……」

ヴィルヘルムの言葉の途中で、シャリオの報告が入る。

「ゲルマニクス、着弾中、敵の損傷は確認できません」

「構わん、攻撃を続ける。相手に魔導スキャンを使わせるな」

先ほどヴィルヘルムが命じた多用途魔法誘導弾発射装置「ゲルマニクス」は、複数の誘導方式で相手を追尾する機能のある誘導弾である。レーダー波を感知出来なければ赤外線で、赤外線もダメならば魔法スキャンでと言ったように複数のセンサーで敵を追尾することが出来る。その最優先を決めるということは、最もレーダー波が出ているアンテナを狙う。温度が最も高くなり赤外線を放出する機関部を狙うなど、敵艦のどこを狙うかの選択をするという意味でもある。

やられているフツケバイン側からすると、目を開けようとしている時に砂を掛けられ続けるような感覚と言えはいいのだろうか？少なくとも、目を開けて周りを見渡すことが出来ない。軍用語におけるハラズメント（嫌がらせ攻撃）を受けている状態である。

「アウグスト用意、目標フツケバイン」

ヴォルフラムに搭載されている長距離射程魔導砲「アウグスト」は、艦首前面に魔法陣を展開させて攻撃する。魔法陣の角度を調整して10時から2時方向に攻撃が可能だがある程度、相手に対して艦首を向ける必要がある。

素早く命中率を計算したシャリオが報告する。

「今の航路ですとB-2-3まで、移動が必要になります」

「そうしてくれ。アウグストは3正射。撃っている間は、ゲルマニクスはMM (Mobile Mine) に設定して放出しろ」

ヴィルヘルムが指示を出している間にも、フツケバインの攻撃は続いてきたが当たらず、ダークマターの影響で明後日の方向に飛んで行く。

ここまでは想定通り、ヴィルヘルムがそう考えたところ、内線の呼出音がなった。操艦や武器管制の仕事がないフェイトが応じる。

「…うん、分かった。報告、ありがとう。」

トーマ達からの内線を受けたフェイトが、ヴィルヘルムに振り向く。

「副長、フツケバインから、トーマ達に対して通信が入ったと…」
「トーマ達に対する勧誘か？」

「え、あ、はい…」

言い当てられてフェイトが言いよどむ。どうしてわかったのか？と、顔に表示しているフェイトにヴィルヘルムが言った。

「向こうからの通信はいつもそうだからな。それより、戦闘中は無線封鎖だ。双方向通信を繋いでどうする」

「あ！」

「フロント全員、後でペナルティを覚悟しておけ」

落ち着いているが、低い声を出したヴィルヘルムに、フェイトは頬を引きつらせた。

「ヘイヘイ、ステラ。当たってないよ！」

フツケバインの艦橋でエンゲージワイヤーに繋がれたステラに向かって、アルナージが煽るように声を掛けた。

「ロックオンは出来てるわよ！なぜか砲撃が直進しないの！」

「ああん!?管理局の新型フィールドか？」

座席の背もたれを倒し欠伸を噛み殺していたヴェイロンが口を開いた。

基本的に相手の顔が見える距離で銃を使った戦闘を好むヴェイロンに取って艦対艦戦闘は興味なかったのだが、射撃に影響が出る技術と言われて興味が湧いたようだ。

「いや、恐らく付近のダークマターからの重力の影響だろう。補正をかけなければ、直射だろうと誘導弾だろうと、まともに飛ばん」

「げ、それ先に言いなよ、ビル兄」

ドウビルが説明をいれると、アルナージが計算なんて面倒くさいと、言わんばかりに舌を出した。

「カレンからの忠告のメッセージも届いていた。警告もした」

「ああ、言ってたな。フツケバインの新航行システムを試す。って聞かなかつたのは、お前らじゃねえか…」

ドウビルに続いてヴェイロンがイライラした口調で言った。艦内

で昼寝をしている間に強制的に付き合わされる形になっているので
機嫌が悪いようだ。

「…ああ、もう。このタイプのダークマターなら…」

ステラは一度魔法センサーの受信機を伸ばし、ゼロエフェクトの解
除を試みたが…、

「…ッ！もう！！」

殺到してきたゲルマニクスによって受信機を破壊されてしまった。
受信機の破損程度、瞬く間に再生できるフツケバインだったが、静電
気のような破損を知らせるフィードバックが鬱陶しい。魔法による
スキヤンを諦めたステラが不機嫌に言った。

「ようは、ダークマターの影響を気にしなくていいぐらい近づけばい
いんでしょ。新航行システムの力、見せてあげる」

フツケバインは一度魔法によるスキヤンを試みたようだったが、ゲ
ルマニクスによる攻撃が続いているため、ゼロエフェクトを解除す
るわけにも行かない。

業を煮やしたフツケバインの操舵手は距離を詰めて、直接照準で狙
いを定めることにしたらしい。フツケバインの推進機構が火を噴き、
ヴォルフラムを追ってくる。

「副長！フツケバインの機動力が向上しています。このまま距離を詰
められると、直接照準される可能性が！」

以前のフツケバインのデータと比較して、アルトが驚きと焦りを
持った声で報告してきた。フツケバインの航行システムに何かしら
のバージョンアップが施されたらしい。

「落ち着け。敵の足が早くなっただとしても、障害物の位置を把握して
いないフツケバインがこちらに追い付くのは困難だ。それよりも、B
—2—3に到達するぞ」

ヴィルヘルムが空間モニターに表示を確認しながら答えると、アル
トは慌てて武器システムを確認した。

「りよ、了解。アウグスト、照準よし。ゲルマニクス、モード切替MM」
「アウグスト、スタンダード、正射3連！MM放出開始！」

「アウグスト正射後、ゲルマニクスは先ほどの設定へ切り戻せ。航路はDを逆進」

「逆進ですか？」

操艦するルキノが聞き返した。

「そうだ。今しばらく、フツケバインをここに留める」

ヴォルフラムが進路を変えると、それを追い駆けるフツケバインがB―2―3のポイントまで移動し始める。ヴォルフラムと全く同じ航路をたどり、速力に任せて捉えるつもりのようなようだ。

「フツケバイン、増速。こちらと同じ進路を辿って追撃してきます。これではダークマターの影響がありません」

「そのとおりだ、ロウラン操舵長。同じ道を辿っているならば条件は同じ。向こうが速ければいずれ追い付かれるな」

「では、増速を？」

「無用だ。暫く、鈍足のふりをしている」

「それだと光学照準された場合、一方的に攻撃を受けることに……」

こちらの攻撃が有効でない以上シャリオの意見は正しい。が、ヴィルヘルムは堂々と言った。

「無用の心配だ。それまでに段取りは終わらせる……。D―4―1でアウグストの正射は可能か？」

「は、はい」

「では、そこで同じく3正射。今度は魔力収束最大。ゲルマニクスは設定そのまま」

「了解」

「アルト、B―2―3のポイントで放出したMMゲルマニクスの活性化準備をしておけ」

ヴォルフラムの攻撃は無効化され、フツケバインの攻撃は当たらない。そんな不毛とも思える攻防が数分続き。互いにD―4―1とB―2―3付近にたどり着く。

「敵が減速するぞ。そこを狙え」

フツケバインの新航行システムであっても、方向転換中には減速してしまうことには変わらない。ヴィルヘルムの言う通り、B―2―3

のポイントに到達したフツケバインが進路を変更。減速する。

「MMを活性化！同時にアウグスト正射、3連。ゲルマニクス、スタンダードも撃ち続ける」

「MM活性化、フツケバインを捉えました」

MM(Mobile Mine)は、艦から射出され自走した後に、指定された場所で相手を待ち伏せ攻撃を行う魔法弾である。相手はこちらと同じ航路を通るのなら、仕掛けるのはたやすい。

「アウグスト、ゲルマニクスとの同時着弾を狙え」

「アウグスト、正射！」

フツケバインの後方からMM、前方からはスタンダードとアウグストとの同時攻撃。結果から言えば、それはフツケバインに対して有効な攻撃にはならなかった。

シャリオが報告してくる。

「フツケバイン、さらに減速。しかし、攻撃はすべて無力化された模様！」

「航路Dの逆進を継続。ゲルマニクスの攻撃も止めるな」

「了解、逆進を継続」

「ゲルマニクス攻撃継続。しかし、副長、ゲルマニクスが加熱しています。攻撃継続は少数分が限界です」

「それだけ撃つことが出来るなら問題はない。クラエッター士。それよりも、同時攻撃した際、ゲルマニクスの無力化に変化はあったか？」
「いえ、無力化にかかる時間。MMとスタンダードの間に差は見受けられません」

アルトが答えるとヴィルヘルムは、シャリオに聞いた。

「アウグストの方はどうか？」

「一撃目よりも、二撃、三撃目の方が短い時間で無力化されています。これはフツケバインの減速と同じタイミングです」

「わかった」

報告に対して返事をしながらヴィルヘルムはフツケバインのゼロエフェクトの性質を考える。効果の強弱はあるようだが、部分的な集中、例えば艦の前面だけに効果を集めてエネルギーの消耗を抑える。

と、言った運用方法は出来ないようだ。言い方を変えるとゼロエフエクトが効果を及ぼしている間は、低出力の攻撃は不意打ちでも意味をなさないことになる。

しかし、ヴィルヘルムは表情を変えずに言った。

「取るべきデータは取ったな、後は安全地帯まで走るだけだ。よし、航路N。増速して、防衛線まで後退する」

「しかし、フツケバインを防衛目標に近づけることになりましたが……」

ヴィルヘルムの指示に、ルキノが疑問を投げかける。

「構わん、防衛線にたどり着くころには、援軍が来ているはずだ。岩の上のコマと同じだ。安全地帯に駆け込め」

「了解、航路N。防衛線まで後退」

93 サテライト・コリジョン

フツケバインの放った直射ほうが掠め、ヴォルフラムの防御フィールドと干渉して閃光を放った。僅かだがはつきりと認識できる振動を感じながら、アルトが報告した。

「敵弾、至近。徐々に狙いが鋭くなってきました!!」

「だいぶ距離を詰められてきているな。衛星軌道までは、まだかかるか?」

ヴィルヘルムが聞くと、ルキノが返した。

「間もなく惑星ダニエル衛星軌道に到達します。しかし、まだ、援護の艦隊が現着していません」

ルキノに続き、シャリオが報告する。

「ハラオウン艦隊!到着まで、あと5分!」

その報告を受けたヴィルヘルムの表情にフェイトは違和感を覚えた。薄つすらとした笑みを口角だけに浮かばせたように見えたからだ。休日にはやてに見せる笑みとは、全く異なる酷薄な笑みに、底の見えない穴を覗き込んだようなら寒さを感じた。しかし、これもまた一瞬で消え失せ、ヴィルヘルムが仕事中心に見せる厳格な無表情に戻っていた。

(副長…?)

フェイトの疑念が強くなっていくが、ヴィルヘルムが口を開いた。

「では、5分間は我々だけで対処しよう」

「しかし、どうやって?」

「相手の狙いを狂わせるのは、ダークマターだけではない。ゲルマニクス打ち方止め。アルト、全てのセンサーに対してジャミング開始!」

「は、はい。ECM等ジャミング開始」

「次、敵弾至近があったら、光学デコイを放出。シャリオ、お前はトビト人工衛星群を管制しろ」

「はい。トビト人工衛星群をこちらの制御下に置きます。迂回ルートはどうしますか?」

「違う。迂回させるのではない！衛星群の衝突安全機能をカット。密集隊形。誘導目標点はフツケバインだ」

「ぶ、ぶつけるつもりですか！」

乱暴な作戦にフェイトが驚きの声を上げる。

「ぶつけるんじゃない。変更された人工衛星の軌道にフツケバインが入ってくるだけだ」

「…それは詭弁なのでは…？それに、人工衛星を破壊するのはいかなものかと…」

「では、こちらの装備が効かなかつたために行つたやむを得ない行為だ。それと、この人工衛星群はすでに廃棄されているジャンクだ。破壊しても何処も文句は出せない」

ここでヴィルヘルムは一旦言葉を切り、

「それに、トビト人工衛星群は全機合わせても精々十数トン。次元艦よりもでかい氷塊をぶつけようとした魔導騎士にくらべたら常識の範囲内だ」

「あく、えーつと…」

封印指定のスキルを使用し、直径数百mを超える氷塊を作り出した常識外れの友人（フツケバインからも似たような批判を受けていた）を思い出して、フェイトは何も言えなくなった。

「へーちよ、へーちよ、へーちよ。………まものっ！」

特別審査会に参加するため本局の廊下を歩いていたはやては、突然鼻をくすぐられたような感覚を覚えてくしゃみをした。三度続くしつこいくしゃみだったが、自分の副長を困惑させるつもりで、最後にネタをつけるのも忘れない。

だが、しかし、

「八神2佐。風邪ですか？本局は少しクーラーを効かせ過ぎているのかもかもしれませんね」

返ってきたのは、真面目なグリフィスの対応だった。彼には査問会用の資料の整理など諸業務のために残ってもらっている。

皮肉の聞いたツツコミを期待していたはやては、階段が残り一段あ

ると思つて降りたら実はなかつた時のような気分で答えた。

「え、ああ、心配あらへんよ。どうせビルが噂をしているんやろ。3回やったし」

「くしやみ3回に、そんな迷信があるんですか？」

ミットチルダ出身のグリフィスはくしやみにかかわる諺を知らないらしい。グリフィスの純粋な好奇心から来る質問に、はやては物足りなさど、チョットだけ罪悪感を感じながら話を盛った。

「ああ、そうなんや。くしやみを3回もするんは、誰かが悪い噂を流そうとしてる知らせてのがあつてな。最後にまものつて言えば、その噂が広まるのを防いでくれるつて、おまじないや…」

「八神2佐のまじないとなると、効果がありそうですね」

「…はは、そうやろ」

あくまで素直なグリフィスの態度に、

(なんや、一方的やとイジメとるように感じるなあ。ルキノ、旦那を一方的にからかうことになつて、ごめん)

と、はやては部下に謝罪した。

「も~~~~!!!!何なのよ!!」

フツケバインの艦橋では、ステラが更に不機嫌を爆発させていた。

ヴォルフラムとの距離を詰め、主砲の射撃を繰り返すたびに照準補正を行うことで、ようやく砲撃が当たりそうになってきたと思つた矢先、ジャミングを受け照準が再び乱れてしまった。当然ながらジャミングに対しての対抗手段も取っているのだが、飛翔戦艇(エスクアド)の名前が現すように、古代ベルカ語での小型高速戦闘船の系譜に当たるフツケバインは、ハードウエアの点において現行の管理局艦船を上回るものの、センシング技術などのソフトウエアにおいては遅れを取ってしまう。

ダークマターによる照準補正に目処が付き始めたのが、また、一かちやり直しである。元来強気なうえに、気が短いステラに取っては強いストレスがかかる状況に、忍耐力の限界が来たようだ。

「おー、怒ってる。怒ってる」

両腕を振り回して、怒りを発散させているステラを笑いながらアルナージが言うと、ヴェイロンが続く。

「めんどくせえな。もういい、ステラ。とにかく距離を詰める。ドウビルのジャンプが使える距離に入ったら、俺たちが直接乗り込めばいい」

「928」と刻印された上下二連の散弾銃型デイバイダーをなでるヴェイロンは、自分の銃を撃ちたくてたまらないと言った顔をしている。

「現状では難しいぞ。ヴェイ」

「ああん！」

ドウビルは表情を変えず腕を組んで、忠告した。

「特務艦はホログラム型のデコイも展開している。あれではジャンプの座標を絞れない。うかつに跳べば宇宙空間に放り出されるだけだ」
「つたく、めんどくせえな。じゃあ、どうするんだよ」

攻め手を欠いたフツケバインの面々の耳に、警告音が入る。

「お、なんだ、なんだ!？」

アルナージが面白がって、口角を更に釣り上げた。

「接近警報よ。人工衛星が一基、衝突コースに入ったみたい」

センサーからの情報をエンゲージワイヤーから直接受け取っているステラが、眉間に皺を寄せて答えた。ジャミングの影響で酷く検知しづらいため、だいぶ接近を許してしまった上に、酷いノイズが痲に障る。人間の感覚なら音楽の中に、時折、黒板に爪を立てた音が混ざるように感じるのだろう。

「人工衛星?このでかい宇宙で?」

「特務艦から管制信号らしいのも出てる!この船にぶつける気なんですよ!まったく、あの女隊長が隊長なら、部下も部下だわ!!」

特務六課と初めて遭遇した際に、フツケバインを遙かに超える質量の氷塊を叩きつけられそうになったことを思い出し、ステラが憤慨する。

「どうすんだ。俺かアルが船外に出て・・・」

「たかだか、一基の衛星ぐらい、対空兵装で十分よ」

対艦戦闘ではあまり有効ではないため、使用機会は少ないがフツケバインにも小型目標に対しての対空武装がある。ジャミングの中では命中率が下がってしまっているが、一発でも当たれば軌道は逸れる。

「対空迎撃、サルボー！」

ヴェイロン達のためにフツケバインの艦橋に表示された画面上で、対空武装の表示が増える。対空武装の数発は明後日の方向に軌道がそれたが、数発が接近する人工衛星を捉えたかに見えた。

…が、

再び警報、画面の中の人工衛星が突然増えた。

「なっ……！」

ステラが驚きの声を上げる中、

「分解能力の隙をつかれたか……。衝撃に備えろ！」

「ドウビルが声を上げた。」

「トビト人工衛星群、フツケバインに命中!?!いや、この場合衝突ですかね？」

フツケバインが迎撃の構えを見せた途端、人工衛星群の密集隊形を解き、分散させた隊形でぶつけたシャリオが正確な表現を思いつかずに言った。

「敵艦推進停止。アクティブセンサーの反応も消えました。敵艦……沈黙！」

計器の表示を観測していたアルトが報告する。前回、特務六課とフツケバインが戦闘した際、はやてが広域魔法ヘイムダルで見せた圧倒的な物理重量攻撃に対して、ヴェイルヘルムが衝突させた人工衛星の総質量は百分の一にも満たないだろう。しかし、その分速度が違う。人工衛星の速度は地球換算で第一宇宙速度(約 7.9 km/s)。仮にはやてがヘイムダルを亜音速(約 250 m/s)で撃ち出そうとしていたとしても、 $1/2 \times \text{質量} \times \text{速度の2乗}$ に照らし合わせて、10倍近いエネルギーである。さすがのフツケバインも船体を大きく損傷し、機関も止まったようだ。

「副長、今回の警備任務が与えられた時点で、人工衛星を戦術のなかに組み込んでいましたね？」

この結果を受けて、フェイトが口を開いた。

「この世界の人工衛星のセンサーは、送信、受信ともに複数の衛星を利用した分散レーダシステムです。必ず数基セットで運用され人工衛星群と呼称される。その衛星群を密集させセンサーの分解能力を利用した機数判定の欺瞞を行う」

センサーの分解能力とは、レーダーなどで、複数の目標が自船から見て等距離に並んで存在するとき、これらの目標がどのくらい離れていれば、分離した目標として識別できるかという能力である。空軍のアクロバット飛行チームがピタリと並んだ編隊で飛んでいる姿を想像してほしい。ああいった密接した編隊で飛行されると、レーダー上の見かけでは、たった一機の飛行機が飛んでいるよう表示されてしまい、編隊が何機で飛んでいるのか分からない。しかし、編隊の距離が100m、200mと離れていくと個々の機体をより分けることが出来るようになる。この能力のことを分解能力と呼ぶ。

フェイトは続けて、ヴィルヘルムの取った行動の意味を推察する。

「これはフツケバインに敵を一基と思いつまわせることで強力な迎撃方法を選択させず、攻撃の成功率を上げるためです」

「続けてみる」

ヴィルヘルムが空間モニターから目をそらさずに、口を開いた。

「攻撃を管制する前のジャミングは、フツケバインの攻撃を阻害するためのものではなく、接近する人工衛星を隠すため。一度、自分からフツケバインに接近してから、防衛線まで戻ったのも、人工衛星がこの宙域を通過するタイミングにあわせるためだったのではないですか？」

「その地形地物を利用するのは戦術の基本だろう」

ヴィルヘルムはそれだけ答え、心の中だけで続けた。

（最も、戦場をここに設定した査察部の思惑かもしれないが…。EC因子適合者に対する考え方も、はやてとはちがうと言うことだ…。俺自身もな…）

ここからの選択ははやてなら絶対にしないと、自覚しながらヴェイル
ヘルムは指示を出した。

「フツケバインにもう一度、投降勧告を出せ。投降する気になったのなら遭難信号を出せとな…」

ヴィルヘルムの指示に従い、アルトがオープンチャンネルの平文で勧告を行うと、すぐにフツケバインの反応があった。

「副長、フツケバインから通信」

アルトの報告にヴィルヘルムは少し意外そうな顔をした。

「あのステラと言う子供か？」

「いえ、アルナージと名乗っています」

答えながらアルトは顔を歪めた。インカムに相手の怒鳴り声が入ったようだ。

「勧告を飲む気はなさそうだな。では、繋ぐ必要はない」

にべもなくヴィルヘルムは言ったが、フェイトが口を開いた。

「よろしいのでしょうか？」

「構わん。どうせ、回復までの時間稼ぎ、攪乱工作だ」

まるでヴィルヘルムの言葉に答えるかのように、フツケバインの状態を現す数値に変化があった。ルキノも報告する。

「フツケバイン、機関再始動」

表示されている計器の数値も徐々に上昇しつつある。トーマが暴走させたゼロエフェクトを受けて機関を停止させた時よりも立ち上がり早い。

淡々とした声でヴィルヘルムが、アルトに聞いた。

「確認する。救難信号は出ているか？」

「確認できません」

「この期に及んで投降の意思はないようだ」

フェイトはこの時見た、ヴィルヘルムの蠟人形のような表情に、冷水を浴びたように体をすくませた。

「アルカンシエル、発射用意」

「ふ、副長！」

ヴィルヘルムの選択に、シャリオが驚きの声を上げた。

フツケバインはアルカンシエルの直撃にもたえる対魔法防御性能を確かに見せた。しかし、それはフツケバインの機能が万全であった場合である。大きなダメージを受け、エンジンを再起動させたばかりで、まともに出力の上がついていない状態では、ゼロエフェクトで攻撃を防ぐことなど不可能だろう。この攻撃が当たればフツケバインは跡形もなく消滅する。副長の狙いは相手のエネルギー切れではなかったのか？オペレーターたちがヴィルヘルムの命令に躊躇していると、

「なにをしている！援護の艦隊がくるまであと数分かかる。フツケバインの回復を許すと、こちらが危ない」

「しかし！」

あくまで淡々と指示を出すヴィルヘルムに、フェイトも反論を試みたが、

「ハラオウン執務官、指揮権は譲らないと言ったはずだ。フィニーノ1士、私は命令をしている」

「は、はい」

ヴィルヘルムは命令の一言で反論を封じ、アルカンシエルの攻撃態勢に入らせた。

「ア、アルカンシエル、バレル展開！」

艦橋配置の隊員は躊躇しながらも、アルカンシエルの発射シークエンスを勧める。と、その時、内線の呼出音があった。

「ふ、副長！トーマ達から内線です。フツケバインからの接触があったと、報告してきています」

「通信封鎖中だと言ったはずだ。遭難信号以外なら応じる必要はないと伝えておけ……！理由は先ほど言った通り、こちらの行動は変わらん」

アルトが艦内からの呼出を受け報告してくるが、ヴィルヘルムが返したのはそれだけだった。

「ファイアリングロックシステム、オープン！」

「緊急通信が入りました。発信者名「フツケバイン一家 アルナー

ジ」

銀十字の書が再びシステムメッセージを発した。

途端、トーマ達が表情を引きつらせた。先ほど通信を受けたことに對して、艦橋にいるフェイトからお叱りのメッセージを受けたばかりだからだ。艦橋配置の隊員は忙しいのか文面により、戦闘中は通信封鎖。特に双方向の通信は厳禁！と、いった内容の警告文が届いた。

教導官の教育で確かに聞いていた話ではあるのだが、急旋回などにかかるGなど、戦闘の体感がなかったため失念していたのは確かだった。

「緊急接続要請が来ています」

銀十字が機械的に続ける。流石にまずかろうと、トーマが首をふるると、リリースも銀十字にメッセージを受け取らないよう指示した。が、気になったようで、

「どんな用事だったのかな？」

「さつき、艦が少し揺れたでしょ。戦闘が佳境に入っているのかも……」
アイシスは先ほど揺れを被弾によるものと考えていた。もつとも、ダメージコントロールが機能していないことや、警告の放送がながれていないので、小破にも満たないダメージしか負っていないと分かっている。

（ブリーフィングで、近くで演習しているハラオウン艦隊に對しての、通信周波数も教えられた。近くの艦隊が来援したってことかな？）

アイシスは今回の警護任務を実家のセキュリティ・サービスになぞらえて、このヴォルフラムがボディーガードの緊急対応役、ハラオウン艦隊が対襲撃役だと理解していた。

緊急対応役は、ガード対象（敷地も含まれる）に對する不法侵入とその他の攻撃に對する戦術的な対応が仕事。盾の役割である。一般的にイメージされる黒い背広でサンングラスを身に着け、VIPの周りにいるボディーガードがそれである。

一方、対襲撃役は、襲撃者に對して反撃することが仕事である。地球で言えば防弾ヘルメットやプレートキャリアを着用し、アサルトライフルを携行する完全武装をしており、あまりメディアに露出しな

い。剣としての役割がある。

(ハラオウン艦隊って、確かゆりかごを沈めた部隊だったよね)

6年前にJS事件で猛威をふるった大型戦艦を撃沈したハラオウン艦隊。次元航行部隊の求人広告に必ずと言っていいほど出てくる文句であるためアイシスも流石に知っていた。

もつとも、当時まだ9歳だったアイシスが持っているJS事件の印象は、通っていた初等科学校に母親がイーグレットSSの社員(かなりゴツイ)を引き連れて迎えに来たため、普段は厳しい態度の教師陣がかなり低姿勢になっていったことである。出身地のリガータがミッドチルダ中央区から離れていたこともあり、翌日にはいつも通りの日常に戻ったのも大きいかもしれない。閑話休題。

(流石にあの船も、管理局の船に囲まれるのは嫌がったか…)

アイシスの考えを打ち消すように、銀十字がまたもシステムメッセージを読み上げる。

「オーブンチャンネルを感知。発信者名「フツケバイン一家 アルナージ」

通信に応じなかったため、今度はオープンチャンネルを使ったらしい。こちらはラジオのような一方通行の通信で、受け手からの送信はない。

「受信するだけなら、通信封鎖を破ったことにならないよ」

トーマはそう言うと、通信にチャンネルを合わせた。

「クソツタレ、聞こえてるのか！トーマ！あの指揮官代理の野郎。このフツケバインに人工衛星をぶつけやがった！」

アラーム、サイレン、異常を報告するAI。それらに紛れアルナージの怒鳴り声はかなり聞き取り難かった。

「艦の損傷が直り次第反撃されなくなかったら…、って、おい、おいおい、おいおい、ガチかよ!!」

怒りはあっても、強気な姿勢だったアルナージの声が途中から、焦燥に駆られたものになっていった。

「おい、ステラ、起きろ!!アルカンシエルがくる!!クソツタレ!」

その言葉を最後に通信は切れてしまった。

「大変だ。止めないと！」

「つて、何言ってるの？今、艦対艦戦闘中だよ！」

アイシスには宇宙空間の艦対艦戦闘で手加減なんて出来ないことぐらいは理解できた。指揮官が決めたことに反抗するリスクもた。しかし、トーマは止まらない。

「アイシスは覚えていないかもしれないけど、ステラには助けてもらったことがあるんだ」

そう言つてトーマは艦橋へと通信を繋ぎ、アルトにヴィルヘルムへの取次ぎを頼んだが：

「現在は通信封鎖中です…。敵からの通信は、…攪乱工作だと思つて」
青ざめた顔をしたアルトがそう答え、ヴィルヘルムが通信に出ることはなかった。

「そんな…」

鳩が豆鉄砲を喰らったように驚いているトーマ。自分の考えが通らなかったのが信じられないと言つた様子だ。

「トーマ…」

そんなトーマの様子に、ピタリと寄りそうリリイ。一見仲睦まじく見えるのだが、一歩間違えば共依存のような危うさをアイシスは感じた。

「よしー」

そう言つたかと思えば、トーマは速足で歩き始めた。

「ちよつと、トーマ。どこ行くの？」

速足から駆け足になったトーマを、アイシスが慌てて追い駆けるのと、リリイもそれについてきた。

「トーマ、艦内の警備はどうするの？」

「さっきのフツケバインの様子なら、アルナージ達が艦に進入してくることはないよ。通信じゃなくて艦橋で直接説得出来れば…」

言いかけたトーマが、彼に気が付いて足を止めた。

艦橋に向かう通路の先で、大きな青いオオカミが座っていた。さながら、艦橋への扉を守る門番の様に…

「ザフィーラ」

「あ、八神2佐の…」

リリイが近寄りかけてやめる。オオカミがむっくりと起きあがったからだ。四肢をしつかりと踏ん張り姿勢は高く、体の重心は前方、つまりトーマ達に向けられている。イヌ科の動物の威圧姿勢だ。

「何をしている！」

「しや、しやべった！」

「…！」

オオカミ（ザファイラ）が口を開くと、トーマとアイシスが思わず声を上げ、リリイが驚きのあまり目を丸くする。

「お前たちには、艦内の警備の任が与えられていたはずだ」

貫禄と知性を感じられる渋みのある声に、気圧されながらもトーマが言った。

「俺たち、アルカンシエルの発射を止めたいんです」

「…ヴィルヘルムが必要だと判断したのならば、理由があつてのことだろう。止める必要はあるまい」

アルカンシエルという武器の名前にザファイラは眉を顰めたが、それ以上にヴィルヘルムに対する信頼が勝つたらしい。すぐにトーマの行動を否定した。

しかし、それでもトーマは言い募る。

「とにかく、艦橋に入れてください」

言いながらトーマが扉に向かおうとすると、

「ここから先は、艦橋配置員の区画だ。お前たちの戦闘配置はない」

ザファイラがぴしやりと言い放ち、扉の前に立ち塞がった。

95 醜い脚のハンス

「発射後、反応前に安全距離まで退避する。航路は任せる」
「了解」

躊躇のないヴィルヘルムの声にルキノが答える。

「アルカンシエル、発射」

ヴィルヘルムが発射キーを捻る。

外部カメラの映像が光で染まる。――発射されてしまった――、闇の書事件、J S事件と、フェイト自身も世話になったことのある魔法ではあるが、確実に相手を殺傷するであろう状況で使用されるのは初めてだった。

発射に合わせ艦を退避させながらルキノは、ヴィルヘルムの様子を伺ったが、うろたえた様子は全くなかった。残忍な分けでも、情に薄いわけでもない。むしろ逆で、部隊に情があるからこそ、はやてには出来ないことをやる。そうすると覚悟を決めていたのだろう。

普段柔和で幼馴染に振り回されていた自分の旦那も、これと決めた時には、ガンとして譲らない。それと同種の力強さを感じた。

（八神2佐を傷つけられて、相当、立腹だったのね）

空間モニターのなかで、発射されたアルカンシエルがフツケバインに迫っていく。――これは当たる。フツケバインは避けきれない――と、誰もがそう思った。

シャリオのコンソールに表示されたある数字が跳ね上がる。

「フツケバインに転移反応!」

反射的にシャリオが報告した。とたん、

「機関最大!ランダム回避!」

ヴィルヘルムが大声で命じた。そのまま、館内放送のスイッチを入れると、

「全員、何かに掴まれ!」

そう告げると、自身は艦長席のアームレストを掴んだ。

「機関最大、ランダム回避」

ルキノが命令に応じて操艦すると、中和フィールドで受け止めきれ

なかったGが艦を揺さぶった。

運悪くヴィルヘルムに詰め寄りかけていたフェイトにはつり革も手すりもなかった。バランスを崩したところで、太い腕が伸びてフェイトを艦長席に引き据える。腕の主はフェイトに覆いかぶさる姿勢でGに耐えていた。

（ああ、副長がその位置に立っていたのは、何かあったときに、艦長席を守るためだったんだ…）

艦長席からヴィルヘルムを見上げ、そんなことを思ったところで、急制動によるGはおさまった。

「フツケバインの反応。消えました！」

「アルカンシエルを自己崩壊させろ。全周スキャン！回避航行継続！」

ヴィルヘルムがもとの姿勢に戻り命ずる。オペレーターは命令を続行したが、フツケバインの反応を捉えることは出来なかった。

ヴィルヘルムは通常航行に移行させ、言った。

「やはりこうなったか…、ドウビルとかいう、ショートジャンプ使用だな。高速巡航機動隊に搜索を要請しろ。個人の転送能力ではそう遠くまで跳べないはずだ」

「了解。あ、たったいま高速巡航機動隊から連絡が入りました。フツケバインらしき、反応を捉えたと…、撤退しているもよう」

アルトが報告して、ため息を着いた。とりあえずの危機は去ったとみていいだろう。

「フェイニーノ、転送時のデータを最大限保存しておけ。あの状況だ、今のが敵転送能力の限界とみていいだろう」

「あ…、なるほど…、了解」

シャリオが含みのある物言いで返事をした。皆、ヴィルヘルムは相手の転送能力を探るために、アルカンシエルを放ったのだと思った。転送反応があった直後、回避航行を取ったのは、その転送先が本艦の背後だった場合を端から想定していたからだ。とも…、

フェイトも狐につままれたような気分になっていると、空間モニターに新たな艦影が表示された。

「副長、ハラオウン艦隊が来援しました」

シヤリオが報告した。

「ああ、だが、いささか複雑な報告をしなければならぬな…」

ヴイルヘルムはそう言つて、フェイトを見下ろした。

「報告はお任せしてよろしいですか？ テスタロッサ艦長？」

戦闘の終息宣言代わりのジョークのつもりでヴイルヘルムが言うと、フェイトは一瞬キョトンとしてから、

「あ!!す、すみません!!」

座りっぱなしになっていた艦長席から、慌てて立ち上がった。

来援した艦隊に、はやてに、特務本務にと、戦闘が終わつての報告だけでも結構時間が掛かるのが公務員。部下たちには半減休息を言い渡し交代で休ませていたが、ヴイルヘルムが戦闘後のすべての後始末を終えるころには、夕食時間はとうに過ぎていた。もちろん、取り置きをしてくれているはずだが、冷めた食事はあまり食欲を刺激するものでもない。

(強奪した食料の分け前だけ考えていればいいフツケバインが羨ましいことこの上ない)

不謹慎なことを考えながらヴイルヘルムが艦橋を後にすると、オオカミ姿のザファイラが扉の脇に座っていた。

「ご苦労」

ヴイルヘルムが一声かけ通り過ぎようとしたが、ザファイラが起き上がつてついてくる。通路には人影は見えない。艦橋の扉からある程度離れたあたりで、珍しいことにザファイラから問いかけてきた。

「見習い三人の処遇は？」

ザファイラが問うたのは、トーマ達が行つた2度の通信封鎖破りに、無許可で持ち場を離れて立ち入り禁止の艦橋にきたこのに対する処罰のことである。

「軽度の命令不服従につき自室待機。ま、初犯なので、何かしらのペナルティを与えて終りだ」

指示や命令を守るのは、個人のみならず、集団を守るためのルール。

命令不服従。立派な懲戒の対象である。しかし、管理局員としての職務年数、正式な教育機関を出ていないことを留意して、正式な書面には残さないことにしたらしい。その後のペナルティを決めるのははやてだ。場合によっては3人が非常に恥ずかしい思いをするかもしれないが、ヴィルヘルムの知ったことではない。精々酒のつまみになってくれるといい。と、ヴィルヘルムは思っていた。

ザファイーラが続ける。

「なぜ、仕留めそこなった…」

「…」

ヴィルヘルムは足を止めた。それにならない足を止めたザファイーラは相手の背を見ながら言った。

「聞けば、フツケバインとの接触を数分早めたのだろうか？それはハラオウン艦隊の来援時間を伸ばし、この艦のみで仕留めるつもりがあったからだろう。お前が用意した策が衛星だけとは思えん…」

「…打てる手はいくつか残っていた。しかし、一家の能力が想定よりも高く、情報収取に徹した。…だけではないな」

ヴィルヘルムは無言で深く息を吸った。

「カラスの頭がついていなかったからだ。羽を何本か筆ったところで、悪戯カラスが改心するわけではないからな」

「首尾よく、毛糸で首をしめることが出来たとして、法に触れるのではないか？」

「正当防衛だ。それが適用されなかったとして、クオリファイド・イミュニティの適応範囲内だ。はやては不満に思うかもしれないがな」
はやての怒りを買うことも含めて、織り込み済みだったようだ。

ザファイーラは闇の書事件を思い出した。あの時我らは主の意思に反して行動を起こし、結果的に主に負担をかけることになってしまった。が、あの時もし、この男が傍にいたならば、あるいはアインスも…。

「フツ…」

もしもを、想像してしまつた自分に、ザファイーラは思わず失笑してしまう。それをヴィルヘルムは感づき、振り向く。

「ん？何が可笑しい」

「いや、つまらん空想だ。気にするな」

ザファイラはそう言っただけで口を閉ざしたので、ヴィルヘルムはそれ以上追及することはなかった。

ヴィルヘルムの当面の課題は、カラスの羽の枚数やオオカミの毛並みよりも、狸の皮算用である。

（食事を終えたら、もう一度予算案を練り直すか。最低でも2人の予算を捻り出さなければ…）

そんなことを考えながらヴィルヘルムは食堂に向かった。

96 Duの仲

それから数日、衛星軌道警備の任務を終えたヴォルフラムは特務六課本部にもどり、フツケバイン一家の足取りを追う捜査と訓練に戻ることとなった。

ヴィルヘルムも、自分のデスクで無数の書類を睨みつけていた。

「やはり、削ることが出来るとしたら。民間委託している施設の管理費だな…」

管理局にも施設の管理の部門があるとはいえ、全てを局員だけで行っているわけではない。本庁舎などの清掃、警備、ごみ収集、コンピュータ情報処理など、専門性・反復性の高いものは、直接処理せず、民間業者に委託して行っていることもある。特に人の数だけなら地上部隊に劣る次元航行部隊が現地に居を構える際には、民間市場からサービスを購入することが通例になっている。臨時任務の為に編成された特務六課もその方式を取っていたのだが、当然、金が掛かる。特に人件費。何しろ特務六課があるのは、世界別平均年収第一位のミットチルダなのだ。そこに一般的な管理局の装備を使用せず、新規装備が2種類。アイシスのオリジナル武装、トーマ達のエクリプスウエポンの研究費…。

本局の派閥争いを抜きにしても、予算についてケチをつけたくなる者が出てきてもおかしくない。

「これと、これは、勤務の調整で対応できるな。これは、いや、代休を消費出来なくなるか？この間の件を引き合いに出して…。いや、士気に関わる…」

なんとか1週間以内に目処を立てておかないと、2/4半期での民間企業との契約内容の変更が間に合わない。そうなると来年度には、部下を二人ほど退職させなければならぬ可能性が高まる。

ヴィルヘルムが顔をしかめていると、呼出音が鳴る。

「またトラブルか？」

自分の出したトゲの生えた声を聞いて、まずいと思ったヴィルヘルムは6秒間だけ、相手を待たせることにした。

「どうぞ」

先ほどよりは、ましな声が出た。

「高町1尉、入ります」

「…？何か用かね？」

入ってきたのは、なのはだった。装備に不具合でもあったのだろうか？しかし、その場合内線で一報してくるはずだが…。

「はい、予定していた休暇なのですが…」

「ああ、ヴィヴィオの学校の用事があるのだろうか？」

休暇計画はヴィルヘルムも確認する立場にある。休暇理由を思い出しながらヴィルヘルムが返事をする。

「はい。ですが、代休をその日に割り当てますので、代休日はわたしが警備隊長に着きます」

ありがたい話だったが、ヴィヴィオのいきさつを知っているため、ヴィルヘルムの方が気を使って提案した。

「それは助かるが…、いいのか？代休日はヴィヴィオと過ごせば…」

「いえ、最近娘も独り立ちしてきました…、わたし達を置いて友人宅でお泊り会だそうで…」

中等科になったヴィヴィオは徐々に母へ友人になりつつあるようだ。ちよつとだけ、元気がなくなるなのは。

「そ、そうか…、了解した…(ちよつと前まで、ママにべったりだと思っ
ていたんだけどな)」

他人事ながらなのはに同情しながら、ヴィルヘルムは了承した。

それからすぐに、フェイトがやってきて、

「副長、周辺住民との助成金の契約書なんですが、行政書士を入れる必要はありません。私が作成します」

と、なり、

「副長、次の寝具クリーニングですけど、地上部隊に施設を借りることが出来そうなので、業者委託は要りません。地上部隊との交流会をかねてオペレーター班で行ってきます」

と、シャリオ達が来たと思ったら、

「おい、副長さんよ。見習いどもの訓練に、第97管理外世界の修行の

要素を取り込むことにした」

「…修行の要素？」

ヴィータの訓練プランの意図が分からず、ヴィルヘルムが聞き返す。

「掃除だよ。第97管理外世界の修行じや、精神の鍛錬の為に掃除を取り入れているんだ。つーわけで、暫くの間、隊舎の清掃員は雇わなくていい」

更には、

「ケーニツヒ副長、隊員のケアを栄養面でもサポートしたいので、この期間のKP作業員（炊事場勤務者）は私に加わりますね」

「シヤマル先生。では、よろしくお願いします」

ヴィルヘルムは承諾したが、その日のうちにヴィータが飛んできて、トーマと配置が入れ替えになった。

衛星軌道警備の任務前にヴィルヘルムが目星をつけ、稟議の承認を止めていた予算の代替案が概ね出揃ってしまった。皆、休日返上した形になってしまったが、応急措置としては十分。後は補給処とメーカーの契約を結び直せばどうとでもなる。

最後にヴィルヘルムのデスクにやってきたのは、はやてだった。

はやては表面上ニコニコと笑いながら、

「お疲れ様です。ケーニツヒ3佐。先日は、ヴォルフラムの指揮官代理、ありがとうございます」

おかげさまで、私が見落としていたフツケバイン一家の能力についての新しい情報を収集できたと、特務本部より称賛を受けることが出来ました。

特別審査会当日は、まさにフツケバイン一家に対する対応についてご質問をうけましたが、ケーニツヒ3佐の取った私が行った机上演習を基とする作戦のおかげで、回答することができました。これもケーニツヒ3佐のおかげです。お願いして本当に良かったと思います」

警備任務につく直前のやり取りの意趣返しのつもりなのか、慇懃な言葉遣いで話し掛けてきた。

「ごちらこそ、出張の際には、さまざまなお心遣いをいただき、誠にありがとうございます。深くお礼申し上げます。」

「ご多忙中にもかかわらず、補給業務の調整、人員割り当てにご協力くださったことを、心より感謝しております。おかげで、部下が救われました」

同じく慇懃に返してやると、はやての頬が引きつった。が、

「ところで、ケーニツヒ3佐の取った作戦では、最終的に使用された装備が机上演習とは異なっていました。問題がなければどういった意図で使用されたのか、説明していただけると助かります」

まだ続けるつもりらしい。

ヴィルヘルムも面の皮を厚くするのは得意だったが、はやての引きつる頬が気になり音を上げた。

「分かった、分かった。いつまで、Sie（ズイー）を使う気だ。Du（ドゥー）で話せ」

「ふん！で、どういうつもりやったんや？」

鼻を鳴らしたはやてが、いつもの奇妙なイントネーションのある話し方に戻った。

「無論。仕留めるつもりで使った。投降の意思がないことも確認していたしな」

「なんでや！ビルなら、確保する方法も思いついたやろ」

「…まあ、そうなのかもしれないな。しかし、私にはフツケバインをただで返すという考えはなかった。公私を上手いこと噛み合わせた私的制裁だった。と、言ってもいい」

「それ、口にしていいことやないんよ」

はやての目が細まった。上司と部下という関係だけだたのならば、処罰を考えなければならぬレベルの発言だ。

「そうだろうな。審査や査察で口にしたら致命的な失言だ。だが、どうして私が私的制裁なんてことを考えたのかも理解していた方がいいぞ」

「…」

「大切なものを傷つけられて怒りを感じるのは、不思議かね？」

ヴィルヘルムがそう言いはやてを見つめると、はやては視線をそらして口を尖らせた。

「…(そないなこと言われたら、なんも言えへん)」

ボソボソと何かを呟くはやてに、ヴィルヘルムが続ける。

「私にそういう真似をさせたくないのなら、最低でも無事に返つてくることだな。…もし、君が指揮が取れなくなるようなことがあるならば…」

ヴィルヘルムの目に猛毒の殺意が込められていくのを見て、はやてが止めた。

「わかっとする。私かて痛いのはややからな」

はやての言葉を聞いて、ヴィルヘルムが眼がしらを揉んで深呼吸をすると、目から毒が消えていた。

「それと、予算の件は助かった。正直、皆からの同意を求めるのは難航しそうだと思っていた」

命令してしまえばそれまでなのだが、士気を下げることになりかねない。士気の低下はヒューマンエラーの発生に繋がる。事件を追っている今なら尚更だ。

「普通に頼んだらよかったのに。みんな仲間のピンチで、副長が困つると言うたら喜んで協力してくれたで〜」

ヴィルヘルムは部隊の煩型など、嫌われているぐらいが丁度いいと思っているのです、そう言われると悪い気はしない。

「…そうか。なら、協力してくれた者たちに、差し入れの一つも考えるか」

思わず口に載せたのが失敗だった。

「おっ、ラツキー、審査会を乗り切ったらご褒美で行ったろと思つとつた店があるんや」

はやてがニヤリと逆らい難い笑みを浮かべてヴィルヘルムを見た。無駄だと知りつつヴィルヘルムは一応反論した。

「なんで、君が催促するんだ」

「私が一番の功労者やからな」

自慢げに、はやては少々小振り(ヴィルヘルム基準)の胸を張る。

「わかったよ。どこの店なんだ？」

97 新八神さんちの日常風景 下

「・・・などなど、意見が対立することだってあるんだ」

「むう、だが、結局二人で乗り切ったってことではないか」

夫婦で意見が対立した話を聞かせてやると、つむじがあまり面白くないような反応を示した。

「それはそうでしょう。乗り越えることが出来たからこそ、結婚したのでしょ」

「近所のおばちゃん達が。かーさんととーさんはおしどり夫婦って言うってた…。で、オシドリって何?」

つむじに対して妹達が反応するがつむじが求めていた反応ではなかったようだ。マリーネとゾイからプイッと顔をそむけると、ヴィルヘルムに向かって宣言する。

「宰相は我が婿にするのだ」

「あく、はいはい、二十歳になったらもう一回行ってくれ」

ヴィルヘルムがそう受け流すと、はやてはニヤーッと笑って言った。

「まあ、なんて大胆な浮気予告! そうなったら、私はマリーネとゾイと結婚しちゃう!!」

言いながら二人を手招きしたが…。

「えー、僕も結婚するなら。とーさんがいい」

「同じく」

「なっ!! なんでや〜!」

二人同時に袖にされたはやてが半泣きになった。

「私みたいないいお嫁さん、そうはおらんで、そこそこ（給料も）貰えているし、料理かて得意な方やから休暇の日にはお菓子作りもしてる。性格も明るくて、笑いの絶えない家庭を作るのに最適な性格や」
自分を売り込み始めたはやてをみて、なんだか結婚相談所のプロフィールみたいだな。と、ヴィルヘルムは思った。

（後足りないのは、婚活を始めたキツカケだな）

と、くだらないことを考えていると、

「でも、かーさん。ほとんど家にいないじゃん」

「私もパートナーの仕事は在宅勤務派です」

「わっさー!」

二人の言葉に進撃の巨人が殴られたような悲鳴をあげてはやてが崩れ落ちた。

ヴィルヘルムは結婚後、後任のグリフィス達が育ってきたこともあり、管理局を退官し、民間時代につてで在宅勤務ができる職に就いていた。3人娘のおむつをかえた回数もヴィルヘルムの方が多かつたりする。対して、現役の管理局幹部で現場にこだわるはやては当然ながら家に帰るのも遅く、娘達とのコミュニケーションの量も、ヴィルヘルムに比べて少なくなってしまう。

はやて自身もそのことは自覚しており、ヴィルヘルムの内助の功を出されると全く頭が上がらない。世の中のダメな旦那なら、誰が稼いできた金で生活できているんだ。と、でも言うのかもしれないが、残念ながら財産運用についてもヴィルヘルムの方が一日の長があるので、それすら言えない。

(あ、あかん、なんとか反撃を…)

やられっぱなしでは、母親としての尊厳が奪われる。と、危機感を覚え、震える体を鼓舞しながら立ち上がろうとするはやてに、王様が近寄っていく。

つむじは慰めるように、はやての肩に手を置くと、

「気にするでない。うぬが職務に忠実であろうとしていることは、みんなが評価しておるわ」

「つ、つむじ…」

娘が自分の職務の大きさに理解を示している。と、一種の感動すら覚えながらはやてが顔をあげ、つむじを見る。

つむじははやての手を取り…。

「それはそれとして、最近、ヴィヴィオとコロナにおっぱいの大ききで負けたというのは、事実であるのか?」

つむじはニヤーつと笑って言った。

「ふっざけんな!この小娘!!ミウラやジークには負けてへん!」

「はっ！その二人（平均≧ミウラ||ジークリンデ）に勝ったとして何の自慢になるのか！」

激昂するはやてに對して、つむじがあざ笑う。

「それだけやない。アインハルトにリオ、それにフリーカにだって……」

平均を超える人物が出てこない母に對して、つむじが哀れみの視線を向けた。

「母よ、言つててむなしくないか？」

「くっ！つむじは覚えておらんかもしれんけどな、アンタたちがいっぱい吸うたから」

ヴィルヘルムが無言で空間モニターに、子供が生まれる前に海で撮影された写真を表示した。写真の中のはやてはストローハットを指先でつまみながら撮影者に向かつて微笑みかけており、コーデはホットパンツで健康的な素足をさらし、ボタンフロントのノースリーブシャツの裾をへその上で縛り上げることで、黒い水着のトップスを上手く強調している。が、うん、ミットチルダ基準だと平均は超えないかな。

つむじはモニターの中のはやてと、目の前にいる母を見比べると、遠慮なく母の胸を掴んで言った。

「変わらんではないか」

マリーネとゾイも続く。

「……残念ながら、リンネ氏、ヴィヴィオ氏、コロナ氏と比べると……」

「かーさんは、フカツて感じだけど、ヴィヴィ達はフカフカツて感じ？」

これっぽっちも忖度しない娘たちには、はやては同情を誘う作戦を放棄した。

「もう少しこう何というか、手心というか、加減つてもんを覚えへんともてへんよ、娘達。あと、あんま、強く揉んだらアカン。末っ子の夜食が出てきてまう」

なおもまとわりつく娘たちを優しく諫めるはやてを見ながら、ヴィルヘルムが呟く。

「オーバーキルにもほどがあつたな」

はやてが耳ざとく聞きつけると、

「ちよつと、旦那さん。あなた子供たちにいったいどういう教育してん？」

「もちろん、家庭を司るものが一番偉いという教育だ」

ヴィルヘルムが得意顔で言うと、

「それ、問題あると思います。ブー、ブー」

はやてが笑いながらクレームをつけた。

と、玄関のロックが解除される音となる。

「ただいまー」

「今、戻りました」

玄関先からヴィータとシグナムの声が聞こえる。娘たちが廊下に出て二人を迎えると、二人は表情を緩めた。

ヴィルヘルムが立ち上がってハーブティーの用意をし始めると、はやてがカップを用意する。いつもの流れだったが、今日は少し違った。はやてがお湯を入れたばかりのリーフポットを取ると、早々にピングダイニングにむかう。

「二人とも聞いてく。ビルの教育にちよお問題があると思うんよ」

どうやら味方を増やしに行ったらしい。

「お、なんだ、なんだ」

ヴィータは久しぶりに、はやてVSヴィルヘルムの構図になったことを察知して、はやての味方になろうと腕まくりをした。

「…伺いましょう」

シグナムは一度、ヴィルヘルムの方を見てから、はやての話を聞くとしたが、

「お前たち、今週末、私の実家に行こうか？ゴットリープおじさんに、末っ子のお披露目を兼ねて…」

つと、ヴィルヘルムが唐突に娘たちに提案をし始めたのを見て、騎士たちは態度を変えた。

「家のことは、副長に任せておいていいんじゃないかな？」

「そうですね。彼の采配にミスはありません」

ヴィータとシグナム、この二人は今週末、待機も当直もない完全休

養で、丸一日子供たちと過ごせると楽しみにしていたのだ。それを分かっていているヴィルヘルムは、こちらに味方しないと、子供たちを実家に連れて帰り、お前たちは留守番にするぞ。と、暗に脅しているのだ。「ブルータスお前もか…」

「何者だそれは？」

ヴィルヘルムの謀略に屈した騎士たちを見て、思わず漏らしたはやての言葉に、つむじが反応した。はやてが騎士たちにジトつとした視線を送りながら説明する。

「私の故郷の言葉や、裏切りにあつたら言うんや」

ハーブティーを差し出されながらも、気まずそうに明後日の方向に視線を向ける騎士たち。

「ずいぶんな、部下を持っているな、はやて」

「明智光秀が、何か言つとるな」

「大石内蔵助に向かつてなんてこと言うんだ」

はやて達の会話に、日本の教育を受けていない子供たちが顔にクエスチョンマークを並べている。はやての影響で地球かぶれになっているヴィルヘルムがちよつとおかしいのかもしれない。

「ふん、どうだか」

自分自身を忠臣であると主張するヴィルヘルムに、はやてが舌を出したところ、人数が増えた気配を察したのか、赤ん坊のぐずる声がテーブルに置かれたベビーモニターから聞こえてきた。

一拍遅れて、

「あふう…起きちゃいましたか」

「ふああ、今何時だ？」

「ふああい、うーん。おしめじゃないから、お腹がすいたのかも。ザフィーラ、はやてちゃんを呼んできて…」

八神家の末っ子に振り回されて、仮眠を取っていた者たちの声が聞こえてきた。

「出番だそうだ、頼んだぞジュリアス・シーザー」

「まったく、都合のいいことばかり言つて…。しゃあないな」

ヴィルヘルムが促すと、はやては不敵に笑った。

「そんなら、いってみよか」

フェイトの後輩Ⅱ編

98女子会編Cパート（男子〇〇〇の日常）

「ふー」

八神はやたとヴィルヘルム・チエスロック・ケーニツヒの結婚式と披露宴の間の時間、ロッカールームに入ったエリオがため息をつき、ネクタイを少し緩めた。

着慣れている管理局の制服とは違い、今日着ているのはおろしたてのスーツ。着慣れていないせいか窮屈に感じている。

「サイズ、小さかったかな」

自分で用意した服だったが失敗だったかもしれない。もつとも、フェイトが用意していた礼服はキッズフォーマルのようなデザインでとても着れたものではなかったが…。

「さすがに…、サスペンダーはないよな」

いつまでもエリオのことを子供だと思っているフェイトの行動に思わず、愚痴がこぼれると、

「へい、景気悪い声をだして、どうしたんだい。エリオ君」
「うわ」

いきなり、後ろから肩を組まれ声を上げる。

見ると相手はフェイトの同伴者として招かれたファン・ユーゼエアだった。ファンはフェイトの私的なパートナーに最近ようやくなった。フェイトも最近は公言するようになった（以前は中途半端な関係をだらだら続けていた：エイミイ談）。エクリプス関連事件の法律的な後処理でも特務六課に貢献しており、エリオとはJS事件の後に知り会って以来、イイ兄貴…、いや、ワルイ兄貴分になってくれている。

「いえ、ファンさん。ちょっと、服のサイズが合っていないみたいで…」

顔を覗き込んでくるファンに、エリオがたじろきながら答えると、
「…。そうだな、成長期だもんな」

ファンは含み笑いをしながら答えた。

「そうそう、服とさえいえば、今日の女性陣の華やかなこと…。どう思うね、エリオ君」

「え…。まあ、皆さん綺麗だと思いますよ」

エリオが一瞬躊躇しながらも答えると、ファンはだらしなく笑って続けた。

「そうだよな。みんなレベルが高い高い。それにほら、隊長陣は昨晚、バチエロレッツテパーティー、…、ていうかランジェリーパーティーやったんだろ！」

「なんで言い直したんですか!?!」

興奮気味で声が大きくなるファンにエリオも思わず声を上げた。
すると、ファンは今度は声を響め、

「で、どうだった?」

「え、どうつとは?」

ファンの質問の意図が分からずに聞き返すと、ファンは呆れたように言った。

「なんだ、覗きに行っていないのか? エリオ、お前、それでも男か」

「行くのが当然のように言わないでください。ファンさん、あなた、それでも法律家ですか」

エリオが言い返ししながら、まさかと思って続ける。

「…一応確認しますが、行ってないですよね」

「行こうと思ったんだけどな。先輩に…先手をうたれた。くそ、なんで一晩バインドをかけられたまま天井のシミを数えなきやいけないんだ」

どうやらファンの悪事を察知したフェイトは、ファンにバインドを掛け一晩部屋に閉じ込めていたらしい。

「どうして、ファンさんが執務官になれたのか? 管理局の闇を感じます」

「元だ。それに今照らされるべきは、管理局の闇ではなく見目麗しい

女性の夜の宴だ。想像してみる。他の男に持っていかれたのは残念だが、八神部隊長もかなりなもんだろ」

言いながらフアンの顔がだらしなく緩む。想像しているらしい。

「はあ…」

生返事をしながらも、エリオも健全な男の子、釣られてしまう。

（いつだったか、大自然旅行&オフトレニングで水遊びをしたときは…）

気分が乗ってきたのかフアンは話を続ける。

「高町一尉もいいよな。教官だけあって体も絞れているし、攻めているヤツとか似合いそうだよな」

「なのはさんは、そういう趣味ではなさそうですけど」

「それに、管理外世界から来たっていう、先輩たちの幼馴染。これまた、正反対の美人コンビって感じだよなあ」

「アリサさんとすずかさんですね」

「おう、その二人。あの黒髪の…」

「すずかさん？」

「そう、すずかちゃん。清楚そうに見えて、意外と叡智なタイプと見たね」

テレビドラマの探偵が完全犯罪を企んだ犯人のミスに気が付いたかのような顔をして、フアンが語る。

「えー、すずかさんですか？そうぞうできないな」

「いやいや、意外とエッグいのをさらつと着こなせるタイプだって。むしろ金髪の…」

「アリサさん」

「そう、そっちの子の方がそういうのは着ないタイプと見たね。あ、で

もそういう下着をプレゼントして、すっごい目で蔑まされるのもありだな」

「…ファンさん」

Mな発言をするファンにエリオが引いたが、しつかりと肩を組まれているので逃げ出すことが出来ない。

「まあ、アリサさんが不機嫌になるのは想像ができますね」

エリオが答えると、ファンがうん、うん、と、頷きながら続ける。

「先輩はなかなかそう言った反応はしてくれないからな」

「え、（下着を）プレゼントしてるんですか?!」

「ん？別に最近じゃ珍しくないだろ？」

「そ、そうなんですか…」

エリオは驚いたが、大人のお付き合いはそういうものなのかもしれないと、納得することにした。

（ファンさんの出身だと、チャイナドレスとかいうタイプなのかな？）

エリオがそんなことを思っていると、ファンはファンで、

（着てくれたのはいいけど、ちよつと違うんだよね。期待していたりアクションと…）

と、フェイトにプレゼントした時のことを思いだしながら、エリオの顔を見た。

エリオの顔から緊張が抜けていることを確認したファンが言った。

「で、どうして、ロッカールームまで逃げ込んできたんだ。さっきまで六課の同僚たちと楽し気に雑談していただろう？」

「うっ…」

突然、凶星を刺されたエリオが声を詰まらせ、顔を赤らめた。

「ふくむ、…わかった」

ファンがニヤニヤと笑い始める。

「な、何ですか？」

「どうせ、これだろ？」

言いながらフアンは小指を立てた。

「粧し込んだキャロちゃんは可愛いよな。普段と違う感じがまた…」
「ま、まあ、それもありますけど…」

フアンの答えは間違いではないが、それだけではない。

「その、一緒にいたのはキャロだけでわなかったの…、それをスバルさんとティアナさんに、からかわれまして…」

「一緒にいたって子は？」

「ルーテシアです」

3人とも同じ年の青春真っ只中である。

「あー、もしかして、どっちがよりハートキャッチ的な？」

「…そうです」

エリオが観念したように、そう言った。

本人たちを前にして、どっちがよりかわいいか答えろ、エリオぐらいの年頃には答えずらいだろう。

「副長のように上手いこと、回避できればいいのですが…」

「ほう、花婿さんが？なにがあったんだ？」

「何年前か前、元機動六課でオフトレーニングを行っただんですが、その時にヴィータさんが…、副長に向かってフェイトさんとなのはさんが、どっちが美人かという意地の悪い質問をしたんです。しかも、はやてさんが、副長の後ろからこっそりと近づいてきているときに…」

「ほう、で、副長閣下はどんな口車を使ったんだ？」

「フェイトさんが一番美しく、なのはさんが一番かわいい」

「ほう」

「そこできると、はやてさんに振り向いて、一番好みなのははやてさん。と…」

「おお、やるねえ」

「それでも、はやてさんが副長の口から出る賛辞は全てははやてさんに向けられるべきやないの？と、言っていたんですが…」

「で、副長はどう返したんだ？」

「一つや二つ副長から出る賛辞を他人にくれてやっても、さつき言っ

た賛辞が向けられるのは、はやてさんだけだと…」

「惚気だな完全に…」

「そうですね」

当時のエリオでも聞いているだけで体がむず痒い思いをした。そんな言葉を口にするのはとても無理だ。

「じゃあ、いつそのこと二人とも綺麗だ。で、いいんじゃないか？ほれ、あの、高町教導官達の連れ、何でも3人といい仲らしいじゃないか。いっそ開き直って、そのくらいの甲斐性みせるとか…」

「出来ませんよ！何言ってるんですか！」

「そう思うなら答えは一つだな。他の女の子に気を使っている場合じゃないぞ」

そう言いながらファンはエリオに向かって、ウイソクを一つ。それに合わせるかのように、外からざわめきが聞こえてきた。微かに女性たちの声で「お色直し?」「ベルカ式なの?」との声が聞こえてきた。「花嫁たちが再登場したようだな。ほら行くぞ、お互いパートナーをいつまでも一人きりにさせるわけにも行かないだろ」

「は、はい」

二人は会場へと急いだ。

た。太陽は沈みかけていて空を様々な色に染めていたが、未知のウィルスにより殺戮衝動を持った集団が近くにいると思うと、美しさより不気味さの方が勝った。エイブラハムはAEC武装を起動させると、無人機を転送反応のあった地点に向かわせた。

無人機は魔法の電磁メタマテリアル加工で、透明化していたが要人の為に岩場に隠れて接近する。死角の多い場所なので発見は手間取るかと思っていたが、目標はすぐに見つかった。

フツケバインは堂々と姿を晒し、周囲のなかで一際大きな巨石に乗って街道を行くキャラバンの様子を探っていた。

『稜線上に身を晒すとは、戦術を無視している。次元航行技術はなくても、魔法は存在しているんだけどな、この世界…』

『自分たちのゼロエフェクトに自信があるんだろ』

『慢心だな…』

エイブラハムが通信で答えながら武器ラックの中から円柱状のボトルを二つ取り出す。残量計を覗くと、一方には黒い液体が、もう片方には白い液体が満ちていた。イーグレットSSなどの民間軍事会社でも使用されているパフュームと呼ばれる戦闘用の薬品だ。

ボトルについた安全ピンに指をかけ、エイブラハムがフツケバインを改めて観察する。

相手は3名、男が1、女が2、男は青々とした髪をしてローブのような服を纏っている。積極的に先頭に立つタイプには見えない。対して女たちは二人とも活動的な服装をしている。一人は褐色の肌に金髪、一人は黒髪のアジア系、アジア系の女は腰からサーベルを下げていた。

サーベルを見たパーシングが言った。

『あれがデイバイダーか？』

『いや、確認されているものとは違う。あれは…』

『待て、エネルギー反応』

女たち手の平から光が伸び形をなした。褐色の女の手には双剣、アジア系には魔導書。

『仕掛けるつもりだな。そうは行くか』

作戦経過：

ミッドチルダ標準時1304

フツケバインが、小規模なキャラバン隊を襲撃する意図を見せたため。■■■■が、フツケバインに攻撃。キャラバンの防衛を開始しました。

ボトルのピンを抜いて振りかぶる。風速2m/s、距離160m、戦闘用のデバイスが演算したベクトルにボトルを投擲すると狙い通りフツケバイン頭上に届いた。

『白の香No. 15 フォグ・オブ・ダウト』

白のボトルが先に弾け中から無数の白い蝶が飛び出す。蝶たちは大量の鱗粉を撒いてフツケバイン達の視界を覆った。

これでフツケバインの視界はほぼゼロ。煙幕で相手の視界を遮って距離を詰める。古典的だが今も有効な戦法には違いない。

腰のハードポイントで保持していた二本の大型マチェット。その片方を引き抜き、一気に距離を詰める。が、蝶たちの作った煙幕から、本のページのようなものが飛び出し、エイブラハムを確認するかのような動きを見せると、囲うように距離を詰めてきた。アジア系の女が操っているのか、自動なのかは分からないが素早い反撃である。(こちらも備えをしているけどな)

白のボトルから一拍遅れで弾けた黒のボトルから、黒い鳥の群れが飛び出しページと、ページの本に向かって攻撃を始めた。

『黒の香 No. 5 ランブリングスパロー』

鳥たちがページに接触すると小爆発を起こして周囲のページを吹き飛ばす。それは煙幕の中でも同じだったようだ。爆音の合間に女の驚いたような声が聞こえてきた。

(驚き…、余裕がありそうだな。なら…)

エイブラハムはアジア系の女に追撃を掛けるために煙幕に飛び込もうとしたが、すんでのところの後方に跳んだ。

荒々しい風切り音がエイブラハムのいた空間を通り過ぎると、その

ままエイブラハムに跳ねてきた。風切り音、褐色の肌の女は、エイブラハムが双剣の間合いに入っていないのにもかかわらず、腕を交差させ、手にした剣を担ぐような構えを取った。

（間合い外にも関わらず、十文字切り……。って、ことは、だ）

双剣が振られるタイミングでエイブラハムは地に伏せた。背筋をゾクリと冷やす何かが、真上を通り過ぎると後方の岩が縦ずれ断層を起こした。何らかの粒子を噴出させた遠距離攻撃を行ったのだろう。

（常に間合いに入っていると思えば、どうってことはないな。それに…）

エイブラハムはそのまま地を這う爬虫類のような姿勢で間合いを詰め、打ち終わりの姿勢のままの褐色の肌の女の片足を両断した。

「ぬッ！」

褐色の肌の女はバランスを崩して倒れたが、上げた声は苦悶の声ではなく、予想外のことが起こったことに対する疑問の声のようだった。

（四肢を絶たれても動揺一つなしか……。だが、脳を潰せば流石に終わらだろ）

エイブラハムが返す刀で眼窩部を通す突きを放とうとしたが、ローブの男が煙幕の中から飛び出し、エイブラハムに向かって拳を振るってきた。音響センサーで、男の動きを捉えていたエイブラハムは男の拳を掛け受けでいなそうとしたが、予想以上のパワーで受けきれず、頬に拳を貰って吹き飛ばされてしまった。

持てる技術を総動員して衝撃をいなしたがフレームが軋み、右の視覚にも影響が出た。

（戦闘に参加しない援護型のEC因子適合者ですら、ここまでパワーがあるのか）

回転する視界の中なんとか受け身を取る。と、

「灰被り」

煙幕の中から女の声が聞こえたかと思うと、爆発が巻き起こり白の香と黒の香が吹き飛ばされた。爆発を起こした本人は宙に舞っていたページ達を魔導書型デバイスに回収しながら、こちらの姿を見

て、にいつと笑う。

「こんにちは。最高評議会の殺し屋さん」

「評議会の？ああ、魔法に寄らずに陸戦魔導師なみの戦闘能力を見せるエージェントがいると情報がありましたね」

笑うアジア系の女に続いて、男も口を開いた。

「こいつが？案外普通のなりをしているんだな」

続いて褐色の肌の女が尻餅をついたまま、エイブラハムのつま先から頭までを見回す。エイブラハムも釣られて手にしたマチェットに映る自分の姿を確認してしまった。

いつもの覆面は破れ、マチェットになんの特徴もない男の無表情が反射されていた。

アジア系の女が続ける。

「まあ、腕前に関しては情報のとおりって、思っているのかしら？フォルティス」

「ええ、そのようです。油断は禁物ですよ、カレン」

アジア系の女カレンの問いに、ローブの男フォルティスが返事をする。

「相手の受けごと頭を砕く予定でしたが…、腕を落されてしまいました」

言いながらフォルティスは地面に落ちていた自身の手を拾い上げた。今のフォルティスの片腕は肘から先が殆どない。拳の威力を落すためエイブラハムが吹き飛ばされる直前に切り落としていたからだ。

「推定の筋力は常人の数十倍。まあ、大したことではありませんけどね」

フォルティスはゴミでも捨てるかのように、腕を放り投げた。投げられた腕が地面に落ちるまでに、フォルティスの腕が新しく再生する。

「問題はあの剣の方だな…」

褐色の肌の女が言いながら立ち上がる。こちらも足が新たに生えたようだ。立ち上がった女は、再生した足が裸足のためバランスが悪

かったのか、残った靴のヒールを地面に打ち付けて折りながら続けた。

「私たちの手足を両断できる実体剣。あれがAEC装備か」

褐色の肌の女がいうと、カレンが答えた。

「いいえ、違うわ、サイファー。AEC装備は、まだ、一号機が教導に納品されたばかりよ。多分、その前の基礎研究で作られたモノでしょう」

(正解)

エイブラハムは口には出さずにカレンに答えた。手にしているマチェットは。CW—AEC00X フォートレスの内臓武器である「近接近用実体剣」の試作品を、今回の任務用の個人兵装として改造したものである。

(しかし、この情報力。何処のバカだ？真水不足と騒いだヤツは？…仕込みに対する対応もされているのか?)

「武器としての魅力には欠けるといいうわけか…。なら、私の足を落したのはいつ自身の腕前か…」

エイブラハムが答えずにいると、カレンの言葉にサイファーと呼ばれた女はより嬉しそうな顔をした。

(あ、こいつ。シグナムと同じバトルマニアだな)

いつだったかの長期休みで、ある教導官に付き合わされたオフトレーニングで出会ったベルカ騎士を、エイブラハムは思い出した。そして、覆面が裂け顔が露出していることを思い出し、挑発の意味も込めてマチェットに着いた相手の血を舐めて見せた。

それを見たサイファーの両目に、更に妖刀のような輝きが増している。

「カレン、フォルティス、手を出すな。こいつは私が…」

「駄目です」

制止をしたのは、フォルティスだった。

「キャラバンが逃げてしまいました」

フツケバインが先ほどまで狙いをつけていたキャラバン隊がいた方向を指さした。キャラバン隊はエイブラハム達が戦闘を始めた時

点で全ての荷物ごと、運搬の魔法を使って逃げだしていた。エイブラハムの目から見るとえらく燃費の悪い魔法だったが、長い隊列のキラバン隊を逃がす手段としては及第点だろう。

フォルテイスがにこやかに笑いながら続けた。

「物資の類は諦めるしかありませんが、殺戮衝動の方は彼で治めないといけません。八つ裂きにするなら皆です」

フォルテイスが言いながら、エイブラハムに意味深な笑みを浮かべた。EC因子適合者のもつ殺戮衝動をエイブラハムにぶつけ、解消しようという腹らしい。3対1の圧倒的に有利な状況により嗜虐心が煽られているのかもしれない。

…が、エイブラハムに取って、今の状況は無慮に過ごす休日のようなもので、アクション映画でも見ているような気分だった。フォルテイスの脅しもこけ脅しにしか見えない。

思わず笑ってしまう。

「それで脅しているつもりか？絶対に出来ないことを言っても脅しにはならないぞ」

エイブラハムの発言に、フォルテイスが眉をひそめ、明らかな不快感を示した。

（丁寧なのは言葉使いだけだな）

エイブラハムが鼻を鳴らすような仕草をすると、フォルテイスがますます攻撃的な態度を取ったが、

「あら、ようやくしゃべったと思っただら挨拶もなし？この状況で勝てるでも思っているのかしら」

カレンが言いながら浮かべる笑みに制された。

エイブラハムはセンサーで相手を観察しながら返した。

「無論だ。感染者は不死身になるだの言われているが、こんな出来損ないでも十分殺せそうだ」

エイブラハムがマチェットを振って見せると、サイファーが口角を上げた。

ピシッ！

エイブラハムが持つマチェットがひび割れを起こし、それが連鎖的

に広がっていく。エイブラハムも後に名前を知ることになったサイファーの能力「対鋼破蝕」である。

(切りつけた褐色か、男かどちらかの体に、ガリユウムのように金属の結晶構造を破壊する力があるのか…)

エイブラハムは起こった現象をそう分析した。

カレンがニコニコと微笑んだまま告げる。

「さあ、どうするの?」

エイブラハムのセンサーが、サイファーとフォルティスの数値が急上昇しているのを捉える。エイブラハムは慌てずもう一本のマチエツトを引き抜く。

「問題ない。あと一本でアンタを倒せばいいだけの話だろ」

「へえ、私たちは無視ですか」

フォルティスが目を細めて言ってきたので、エイブラハムは返してやることにした。

「ああ、お前たちには投与済みだからな」

エイブラハムの構えたマチエツトには、細い溝が切られており、刀身は僅かに濡れていた。

「ツーン」

それに気が付いたカレンが目を見開いた瞬間。サイファーとフォルティスの再生したばかりの手足が破裂した。血と肉片をまき散らした手足はすぐさま再生、膨張、破裂を繰り返す。それが四肢の先端から徐々に体の中心へと這い上がっていく。

カレンはすぐに動いた。本のページを展開させ警戒態勢を取らせると、カレン自身はフォルティスの腕を肩口から、サイファーの足を鼠径部あたりからサーベルでバツサリと切り落としに掛かる。

《出力リミッター解除》

エイブラハムも同時に動いた。ボディへの負荷を無視して限界出力でカレンに迫る。ページ達はエイブラハムのスピードを読み違えて反応できていない。更にエイブラハムは両腕をサイファーとフォルティスに向けると、手甲に仕込まれた発射器から数本のニードルを放った。

フォルトイスはバランスを崩しながらもニードルを回避できたが、足を失っていたサイファアは防ぎきることが出来なかった。ニードルの一本がサイファアの右目に命中する。

ニードルが着弾するころには、エイブラハムはカレンに肉薄していた。エイブラハムはフェイントもいれずに、最短最速の太刀筋でマチェットをカレンの首筋に叩きこんだ。

カレンは咄嗟にサーベルで受けようとしたが、これは明らかに失敗だった。何しろこのサーベルで、「対鋼破蝕」のあるサイファアの足を切り落とした直後だ。サーベルは簡単に折れた。カレンが咄嗟に首を庇って、両腕をマチェットの刃先に差し入れた。

カレンは引き裂かれる肉を無視して、骨を刃に引っ掛ける形でマチェットを止めようとしたが、超振動を起こすマチェットは、その程度では止まらない。骨から伝わってくる振動が途切れ、腕を絶たれた。と、カレンが確信した瞬間。

「リアクトー！」

100フツケバインとの戦闘報告2/2及び添付資料

フォルティスの叫び声が響くと同時に、エイブラハムの体が痙攣し硬直する。

「くっ！」

その隙に、カレンはエイブラハムの間合いから離れ、ページ達に自分の両腕を落させた。

「うぐー！」

それに習うように、サイファーもニードルを眼球を周りの肉ごと抉り取った。

エイブラハムが体を見下ろすと、背中から鋭い何かが入り胸を破つて貫いていた。フォルティスの何かしらの能力らしい。

貫かれた傷痕から漏れ出す液体。白濁色のオイルを見たカレンが言った。

「なるほど、確かにアナタを殺すことは出来なさそうね」

「ああ、何しろ、俺はここにいないからな」

エイブラハムが遠隔操作しているCW—ADXアーマーダイন試験機を通じて答え、アーマーダインに顔についたカレンの血をなめさせた。

作戦経過：

ミッドチルダ標準時1308

■■■■■は、ESC—αは効果が現れるまで1分前後の時間を有するが、有効性を確認。

フツケバイン側も、対EC薬剤に対して警戒を怠っておらず、特性を把握された可能性が高い。

「切られた場所が自己対滅を起こし掛けた。今のは何だ？毒？」

カレンに切られた足を再生させたサイファーが立ち上がり、右目に

手を当てたまま言った。

「恐らくサイトカインの類でしょう」

背後からフォルティスの声。

「細胞の再生機能に過剰な命令を与えて自己対滅を促したってわけね。出所はエクリプスウイルス被検体の成れの果て……。悪趣味ね、管理局は……」

カレンの指摘するように、マチエツトやニードルに塗られている物質は、肉体修復機能が暴走しての「自己対滅」によって肉塊となったEC因子保有者より抽出されたタンパク質であり、最高評議会調査室では、エクリプスキラーサイトカイン α （仮）と名付けられた。サイトカインとは細胞間の情報伝達を担うタンパク質であり、細胞の増殖、分化、移動、アポトーシスなどを制御している。

（武器に塗布する方法では、効果が出るまで1分近く掛かる。効果が心臓や脳に届く前に監部の周囲の肉ごとえぐり取れば、浸食を止めるのは可能。ESC α の効力は十分確認したな）

エイブラハムは攻撃の効果を確かめながら、操っているアーマードインの顔をカレンに向けて言った。

「カレンと言ったな。管理局が悪趣味だという意見には、俺も賛成だ」
エイブラハムは答え、自爆装置を起動した。途端、アーマードインが爆発し、内部から大小複数の鏃が飛び出した。

作戦経過：

ミッドチルダ標準時1309

■■■■は、CW—ADXでフツケバインを引きつけ、CW—ADXの自爆に巻き込みました。

「つつつつつつあー！」

アーマードインの自爆が巻き起こした煙がおさまり始めたころ、カレンの心肺が機能し始めた。喘ぐように呼吸を整えてから、体の具合を確かめる。

（体は動く。あの人型デバイスの自爆は、爆発自体の威力は大したこ

とはなかった。だけど…)

忌々し気に胸に刺さっていた鏝を引き抜く、本来なら鏝程度の傷など見ている間に直っていくはずなのだが、今は直りが異常に遅い。間違はなくこの鏝の仕業だろう。

他にも体に刺さっていた鏝を引き抜くと、カレンは立ち上がりながら言った。

「二人とも生きてる?」

「ええ、私はリアクトしてましたので…」

答えたフォルティスは既にリアクトを解き、いつもの丁寧口調だったが、少しだけ声が震えているように聞こえた。あのエージェントに相当イライラを募らせているようだ。

「私もだ。右目以外は、な」

サイファーも右目を抑えて立ち上がる。こちらは口元を緩めている。

EC因子適合者になって以来久しく感じていなかった命の危機を楽しんでいるのかもしれない。

サイファーは続けた。

「てつきり、自爆の時飛ばしてきた鏝にも、マチェットと同じ毒が塗られていると思っていたのだが…」

「だとしたら、全員自己対滅を起こしています。しかし、これはEC因子の働きを抑制しているだけ、効果だけなら他の対EC薬剤のようです」

フォルティスが答えると、カレンも頷いた。

抜いたばかりの鏝を遊びながら、カレンは考える。

(EC因子の抑制?それなら、あの短刀に塗って捕獲を狙い。それが不可能なら、自己対滅を促す薬品で始末を狙うのがセオリーでしょうに…。薬品が不完全で、何かが原因で化学反応を起こした?なら、そのエネルギーフィールドを展開して毒の効果を殺せる?)

「カレン、これからどうする?他の獲物を探すか?」

サイファーの言葉にカレンは思考を中断させた。

カレンはつまんだ鏝を振りながら言った。

「こんなものを持ち出している部隊がうろついているってことは、この間、アルカンシエルをフツケバインに防がれたことがショックだったってことよ。しばらくは、離れた管理外世界を楽しみましょう」

フォルティスが自身の頬を叩き、呼吸を整えてから答えた。

「アルカンシエルを防げる程度では、管理局との正面衝突は不可能…。少し、慎重さに欠けました。一度、フツケバインに戻って物資を狙う場所を練り直します」

「それと、こいつのことを調べる必要が出てきたわ。それに…」

カレンはそこまで言っただけで言葉を切った。

（最高評議会は、私達（EC 因子適合者）を殺せるといふ事例を欲しているはず。何処の誰かは分からないけど、「原初の種」を使ってEC 因子適合者を増やしているヤツの手駒が事例になってくれたら、最高評議会も秘密部隊を使った直接的な関与を控えるはず…）

「それに？」

カレンがこれからの算段を立てていると、サイファーが聞いてきた。しかし、まだ推測段階で、「原初の種」の所有者の駒が何処にいるのかも分からない。今はまだ話せる段階ではないと考えたカレンは陽気に切り返した。

「強盗犯や殺人犯で追われるのはいいとしても、露出狂として、管理局に追いまわされるのはいただけないわ」

カレンが言いながら自分たちの姿を見下ろす。カレンだけでなく他の二人も前衛的な…、ほぼ裸に近い服装になっていた。

作戦経過：

ミッドチルダ標準時1316

ESC-αの想定外の問題により、フツケバインのA-1に至らず。

フツケバインの撤退を確認。

フツケバインが去ってから一時間ほど、アーマーダイスが自爆した爆心地の周囲の砂に、獣脚類の足跡が刻まれた。足跡の主の姿は遠目

には見えなかったが、近くで目を凝らせば、電磁メタマテリアルが残す僅かな光の屈折を見ることが出来たかもしれない。

光学迷彩で姿を隠した？3Sは、ごく短い範囲にしか届かない信号を打った。すると近くから返答信号が戻ってくる。

？3Sはマニピュレータを伸ばすと、岩に突き刺さっていた。大振りの鍬を引き抜く。

鍬には、カプセルが三つ収まっていた。カプセルの中身はフツケバイン3名の血液サンプル。エイブラハムが操るアーマードインが体やマチェットに着いた血を舐めて回収したものだ。強硬偵察ように改良されたアーマードインに搭載された機能で、口から飲み込んだモノをカプセルに保管。自爆の際は鍬に偽装して遠くに射出。後に回収する機能だが、サンプルの採取方法が気持ち悪いと不評である。

『フツケバインの血液を回収』

『連中が自切した体はあるか？』

『黒こげでいいなら…。アーマードインの残骸はどうする？』

『鍬だけ回収してくれ、鍬に塗布されていたESC- α の効果が出なかった理由を知りたい。そのほかは無用だ。大切な部分はどうせ復元不可能』

『敵に回収され、分析できるようにじゃ自爆の意味がないからな』

『…が、念の為周囲を焼き払っておこう』

『了解』

？3Sが数度大きく跳躍して距離を取る。十分離れたところで、口についた主砲から数度砲撃を行ってその場を後にした。

『しかし、自爆時のESC- α はなんで効かなかったんだ』

『一人ぐらい急所に当たっていても、おかくないと思うが…』

『自爆時の熱でESC- α が変化したのかもしれない。所詮たんぱく質だからな』

『なるほど、その辺のレポートも必要だな。それ次第では、相手への対応がA-1から、BかCになるかもしれない』

『ああ、面倒だ。雛形を出しておいてくれ…』

り抽出されたサイトカインに分類されるシグナル伝達物質です。ESC- α には、EC因子適合者に対して自己対滅を誘発させる効果があると予想されています。

方法

ESC- α の効果を検証するために、EC因子保有者グループに対し威力偵察を行いました。威力偵察では以下の二つの方法でEC因子保有者グループへのESC- α 投与を試みています。

- ① 魔力駆動の兵器を使用した局所投与。
- ② ESC- α を塗布した鏝を爆薬によって射出した局所投与。

結果

①の魔力駆動の兵器による局所投与では、EC因子保有者の四肢に対する投与に成功。ESC- α の主作用である自己対滅を誘発させることに成功しました。薬効発現時間は個体差はあれど、5分以内に主作用が確認できました。

しかし、EC因子適合者の薬効が現れた部位を切り落とすことで、自己対滅の拡大を防ぐことも可能だということが判明しました。

②の鏝による局所投与では、EC因子適合者の胸部に対して投与が成功。しかし、自己対滅の誘発を確認できず、EC因子適合者の負傷、肉体の欠損に対する修復能力を著しく阻害する効果に留まりました。

考察

ESC- α は、EC因子保有者に対する殺傷に有効な薬です。しかし、熱に弱く特定以上の熱処理を受けると性質に変化が起ることが確認されました。

熱処理後のESC- α （以下、ESC- α HD:ESC- α heat denaturationと仮名）のEC因子適合者の肉体の修復能力を著しく阻害する効果は、抗体生成の妨害にも有効と推定されるため、新たな抗EC薬品として利用可能と判断します。

今後の課題

ESC- α の効果を確実にするため、白の香を利用しESC- α を熱から守り、EC因子適合者に投与する術式の作成を行う必要があります。また、ESC- α への耐性ウイルスの出現を防ぐために、ES

C- α の効果的な使用法を研究する必要があります。

ESC- α HDは、EC因子保有者に対する殺傷を目的としない作戦に有効である可能性が高い。また、抗EC薬品は、友好的なEC因子適合者に対する緩和ケアにも不可欠な要素であり、より大規模な臨床試験を行う必要があります。

101 (個人情報) 私的ジャーナル

新暦83年、エイブラハムは使っている集合住宅の一室で待機勤務を行っていた。何をしていたでもいいわけではないが、何もしてはいけないわけではない時間。

雑誌を読みながら視聴予定のライブ配信を待っている間に、流しっぱなしにしていた番組から、気になる話題が聞こえ、エイブラハムは見ていた紙媒体の雑誌から目を話した。

「クラナガンの午後はここから。最初の話題はこちら」

「今、話題の新薬「ES-δ:エクリプスセルセーバー」について、お話を伺います」

「はい、私も最近、この薬についてニュースでよく見かけます。どんな薬なんですか？」

「ES-δは、エクリプスウイルス感染症の治療薬として開発された新薬です。エクリプスウイルス感染症は、致死的な感染症ですが、ES-δは、この感染症を根治させる可能性がある」と期待されています」

「ES-δは、まだ臨床試験段階ですが、その効果は非常に期待されています。試験では、90%の患者さんが完全に回復したという結果が出ています」

「90%も回復したんですか！それはすごいですね」

「本当に、これは朗報ですね」

「もちろん、まだ臨床試験段階なので、副作用などのリスクは十分に考慮する必要があります。しかし、ES-δがエクリプスウイルス感染症の治療に大きく貢献する可能性は十分にあると思います」

「そうですね。ES-δが承認されれば、エクリプスウイルス感染症患者さんにとって大きな希望となるでしょう」

「次の話題です」

ES-δ、エイブラハムの記憶だと、トーマ・アヴェニールとリイ・シュトロゼツクの血液サンプルから得られたデータを基に、ES-αHDにさらなる改良を加えた薬品である。

しかし、エクリプスウイルス感染症の数自体が少なく、また被害の多くが地方世界だったためクラナガンの放送局が報道するとは思えない。疑問に思ってネット検索をかけてみる。が、何処の主要メディアもトップ記事にはなっておらず、ミッドチルダのローカルメディア「アルトセイム・ヘラルド」が第4見出しで扱っているくらいだった。エイブラハムは記事を読み上げてみた。

「…と、新薬「ESC- δ 」、エクリプスウイルス感染症の根本治療に期待。エクリプスウイルス感染症は、致命的な感染症を引き起こすウイルスです。これまでは、ESC- β HDという薬品で緩和ケアしか行えていませんでした。しかし、新たに開発された新薬「ESC- δ 」は、エクリプスウイルス感染症の根本治療に効果的であるという臨床試験の結果が発表されました…。こんだけか…。エクリプス騒動が治まった証拠なんだろうが、なんで今更…」

画面に目を戻すと答えが映し出されていた、クレジットの中に提供『Altimmune gene』の文字。新薬「ESC- δ 」を製造している会社である。

「どこの企業もCMに余念がないな。なあ、アリサ」
先ほどまで読んでいた雑誌の一面に語り掛ける。

表紙を飾っている女社長は普段見たことのないすまし顔をしていたが、片目だけでこちらを睨みつけてきたように感じた。

そんな妄想に浸っていると、玄関周囲の人感センサーが反応。来客を知らせた。その人物は防犯用のサーチャーに向かって手を振ってから、勝手知ったるアナタの家という様子で、エイブラハムの部屋にやってきた。エイブラハムが迎え入れると、食材の入ったトートバッグを手をキツチンへ直行した。ガチャリと冷蔵庫を開けて一言、

「あー、やっぱり。保存食ばかり！」

「いいじゃないか。安いし、早い」

「ダメ、こういうのは、味付けが濃く作られているんだから」

早速お叱りの声を上げるのは一応反論するが、なのはは聞く耳を持たず買ってきた食材を冷蔵庫の中に放り込み始めた。エイブラ

ハムは殆ど追い出される形でキッチンから出る。手持無沙汰になって時計を見たが視聴予定の番組までまだ時間がある。

読んでいる途中だった雑誌を手に取りソファーに腰を下ろす。雑誌が特集記事として取り扱っているのは活躍する女性で、地球で最近伸びてきているドローンを取り扱っている会社の社長と、その会社を支える女性エンジニアの特集である。雑誌の中ではエンジニアの写真もかなりデカデカと載せられている。

(そう言えば、この写真を載せるために、インタビューの内容が削られたと、アリサが怒っていたな)

見出しに踊っているのは、「最新鋭技術を操る美人過ぎるエンジニア」である。編集の段階で当初予定していなかったこの記事がねじ込まれたのがよくわかる。

当初予定していた技術力をアピールする狙いとは違った方向の記事に、憤慨しているアリサの姿をありありとイメージしたエイブラハムは、アリサが爆発する前に愚痴の一つも聞きに行こうと決意した。そうしていると、なのはがキッチンから出てくる。

いつもよりゆったりとした服装をしているのははエイブラハムに寄つてくると、エイブラハムが手にした雑誌を見て笑った。

「あ、それ今月号のNASYI?」

「ああ、二人が乗っている奴だ」

「なんか、アリサちゃんが見なくていいって言った」

　　言いながらなのははエイブラハムの隣に腰を下した。

「そう、それだ。アリサをからかうネタにしようと思っただけだな。結構、普通だった」

「またそんなこと言つて、アリサちゃんにキックされちゃうよ」

「問題ない。何もなくても最近はキックをしてくるようになった」

喜々としてエイブラハムの尻を蹴とばそうとしてくるアリサを思い出しながら、エイブラハムは続けた。

「尻に赤いリボンでも着けるよう提案しよう」

「お尻にリボン？」

「ああ、蹴り癖のある馬のサインだそうだ」

最近アリサが教えてきた、第97管理外世界でやっているアプリゲームで得た知識を口にする。

「へへ、因みに頭のリボンは？」

なのはが自慢のサイドポニーをまとめているリボンを指さしながら言う。

エイブラハムが反射的に答える。

「それは噛み癖の…」

なのはがニカツと笑いながら、顔の隣まで上げた手をニギニギと動かしながら襲い掛かってくる。

「おっと、やめてくれ。こら、なのは！ホースガールのシニセウインドか！」

エイブラハムは手にした雑誌を盾の様に掲げて見せた。すると表紙の中のアリサとなのはの目が合う。

「…この、アリサちゃん、ちよつと緊張している？」

アリサが営業用の表情をしていることに気が付いたなのはがそれを口にする、エイブラハムはこれ幸いとばかりに話題を変えた。

「おっと、それは表紙モデルの先輩としての意見ですか？高町なのは教導官殿」

言いながらエイブラハムは空間ウインドウに幾つかの画像を映した。

画像にはなのはの写真の他に女神アーカイブ、プリンセス型とのタートルが示されている。雑誌のバックナンバーらしい。発刊日を見るとちようどなのは達がミッドチルダに引越して間もないころの日付が印刷されている。

「え、あ、ははは。懐かしい写真だね」

「バリアジャケットまで専用のを用意して、ずいぶんと気合が入って

いるじゃないか。高町プレゼンツ、教導隊バリアジャケット・コレクションンって感じだな」

エイブラハムがからかいまじりに言う。

空間ウインドウに映っているなのはの姿はそれぞれ違い。そういうコンセプトのファッションショーに見えなくもない。

「いや、これはエクシードモードのプロトタイプというか、色々試している時期で…」

「天下のエースオブエースにもそういう時期がありましたか」

「もちろんです」

「でも、一番楽しんでた時期でもあると…」

「え、えへへ、まあそうかも、でも、それはみんなも同じでしょ。すずかちゃんも今新規のドローンの開発が面白くってたまらないって言っていたし…」

「ああ、会社にいるときはもちろん、家でもしずかの相手しているとき以外は、ずっとPC前らしいな」

「会社の作業服を脱がないでいて、忍さんに怒られたって言ってたな」

「ああ、聞いた聞いた。言い返して口論になったとか…」

「うん、すずかちゃん。忍さんだって油まみれの格好で歩き回ってるって…」

「二人とも、機械にのめり込むところはそっくりだよな」

「そうだね、ふふ」

雑談をしていると、視聴予定に設定していた配信が始まった。DS AAの公式試合の配信である。

エイブラハムが配信画面に目を移すと、注目選手としてナカジマジムのフリーカ・レヴエンソンという選手が紹介されていた。セコンドには、ノーヴェとアインハルトがついていた。

カメラが会場の盛り上がりを映し出すため、パンニングし始めたところで、エイブラハムの眉間にしわが寄った。口元をへの字に結びながら、何とも形容しがたい声を出す。

「ところで、この会場に行かなくて良かったのか？」

「ん、どうして？」

「いや、どうしてって、ヴィヴィオが通ってるナカジマジムが出ているじゃないか…」

「うん、でも、ヴィヴィオは今日は見学だけだし」

「ああ、だが、君の友人は行っているじゃないか！」

会場をぐるりと一周パンニングしたカメラのアングルが戻ってくると、フーカ選手側の応援席が映り、応援席にはナカジマジムの面々と、ページユの長髪を後頭部で束ね、奇麗な顔立ちに眼鏡をかけた細身の男が座っていた。時空管理局無限書庫司書長ユーノ・スクライアである。

ユーノ司書長の隣に座るヒルデ魔法学院中等科の制服を着たヴィヴィオが熱心に話し掛けている。

「ていうか、距離近すぎないかヴィヴィオ？」

選手がリングインしようとしているにも関わらず、画面端の観客席を睨むエイブラハムに、なのはが告げる。

「あの子、多分年上が好みなんだよね。何でも始めてママの実家に遊びに行った時に、年上の男の人に良くしてもらってから、同級生が子供っぽく見えるんだって…」

エイブラハムに近づき頬を寄せてきたなのはがジト目でエイブラハムを見ながら言った。

塩と砂糖を間違えた料理を食べさせられたような顔をしながらエイブラハムが返す。

「しかし、年齢差つてもものがあるだろ」

「それも大丈夫じゃないかな。スクライア部族の人って割とそんな感じらしいし…」

「ヴィヴィオは、まだ中等部だぞ」

「来年卒業。それに、その辺はヴィヴィオにも良く言い聞かせてあるから」

完全に娘を嫁にやる父親ムーブのエイブラハムに対して、なのははニコニコと笑っている。

「君の友人は人格者だと聞いているが…。万が一つてことも…」
「大丈夫だよ」

なおも言い募るエイブラハムに、ニコニコ笑うなのはが…、
「その辺は、ユーノくんにも良く言い聞かせてあるから」

「お、押忍」

突然、ニコニコと笑うのを止め。能面のような無表情で続けるのはに底知れぬ恐怖を覚えたエイブラハムは頷いた。その辺のことはなのはに任せたほうがいいようだ。それでも、一応口にする。

「君の友人が騙馬になりたがっているなら、いつでも協力するぞ」
「うん、お願い」

配信を流している空間モニターの中では、ナカジマジムのフーカが優位に試合を勧めている。これはよほどのことがない限り彼女が勝つだろう。フーツと長めに息を吐く。するとこちらの様子を心配したのかなのはが身を寄せながら聞いてきた。

「どうしたの？」

「少し安心したんだ。ヴィヴィオの周りにも頼りになるヤツが増えてきたようだし…」

「うん、みんないい子だから、これからヴィヴィオに何があっても味方でいてくれると思う」

「…」

エイブラハムが黙ると、なのはが何かを期待するように覗き込んできた。

「それだけ？心配事は、それだけ？」

エイブラハムはなのはを見る。最近なのはは普段よりもゆったりとした服を好むようになっており、体温も上がっている。こうやって世話を焼きに来てくれた時、出してくれる料理の味付けも少し変わった。

「今、俺の一番の心配事は…」

「心配事は？」

「子供に着けるいい名前が思いついていないってことだな」

なのはは満足そうに笑うと、下腹部をなでた。

「にやはは、それは二人で考えよう。アナタ」